日本戲曲全集
第二十一卷

滑稽狂言集

東京
春陽堂版

巻中の「八百屋お七」に因み、古いお七の細漆繪をお目にかけます。これは享保十七年の春市村座で演じた「松竹梅根元曾我」瀬川菊次郎のお七で、筆者は奥村利信であります。

日本戯曲全集　第貳拾壹卷　目次

滑稽狂言集

上の巻は

洛陽の花に寄する

眞葛ヶ原の闇仕合

一刷毛に書き起さばや花の雲

この執筆は狩野の小雪

下の巻は

浪花の雪に寄する

東高津の再環會

乳貰ひに往ては拂ふや袖の雪

この秀吟は狩野の元信

花雪戀手鑑

二幕

嘉永二年正月市村座「青砥調」番附

江戸初演の乳もらひ

花雪戀手鑑——乳もらひ

上の巻

東山狩野別莊の場
眞葛ヶ原畑中の場

役名——狩野四郎次郎元信。若黨、關平。長谷部雲谷。栗村兵内。鎌田權藏　柳ヶ瀬彌藤治。住屋重兵衞。後室、伏屋。四郎次郎女房、小雪。娘、お露。寶來屋お爪。岩木屋お光。

造り物、二重舞臺、上下折り廻りし障子屋體。この眞中廊下、正面紺青にて石燈籠、植込、連翹棚、いつもの所に切り戸、屋體總大和葺き屋根附き、すべて高臺寺門表通り、東山別莊屋敷の體、右二重に雲谷、袴長絹、羽織。兵内、權藏、彌藤治、着附け上下にて坐り居る。後室伏屋、着附け襠補二つ番、後家の拵らへ、下手に女房小雪、娘お露と煎じ茶の拵らへしてゐる。琴唄にて幕開く。

雲谷　さて／＼今日はお招きに隨ひ
兵内　大勢連れにて御遠慮なしに
彌藤　先刻から種々の御馳走にあづかり
權藏　お禮の申し上げやうもござらぬ仕儀。
四人　千萬忝なう存じます。
伏屋　これは／＼、お禮に痛み入りまする。御存じの通り今日は、夫祐勢正信の七々日、御前の騷動ゆゑ御遠慮勝にと存せしに、懇ろに弔らへとあるお上のお慈悲、伜歌之助へ、將軍家より有り難いお詞添へ、さるに依つて、この東山の別莊に、お招き申し上げましてござりまする。歌之助こと未だ御殿より下りませねど、ゆる／＼なされて下さりませ。
雲谷　これは／＼、御老年とは申しながら、祐勢先生は畫道に秀で、武術詩歌にも拔目なき達人。
兵内　それゆゑにこそ、我が君御寵愛斜ならざりしが、壽命は才智にも、力にも、及ばぬものでござりましてな。
權藏　その發明の祐勢大先生のお子に、四郎次郎元信どのといふやうなお人があるとは、イヤハヤ、世の中の事は相解らぬものでござる。

彌藤　惣領と申せど、當時御勘當と承はつたが、只今どちらにござるな。
伏屋　存じませぬ。夫存命の折柄、久吉公へ申し上げ、勘當は仕りましたれど、度々の無心、また親類雪村どのの娘小雪は、四郎次郎と娶合せ、假の跡目を繼がさんと存じましたに、子供のうちから兩人が嫌ひ。年は二十歳になりましたが、小雪はまだ男の肌知らずでござりまする。
雲谷　ハテサテ、元信どのはどういふ心ぢや。
彌藤　イヤ、それではまだ遊所狂ひを、止める氣がないと見えまする。
權藏　拙者が存ずるには、御舍弟歌之助どのに當家の跡目を。
伏屋　イヤ〳〵、なか〳〵左樣にはなりませぬ。勘當しました元信は先妻の胤、また私しは後連れ、只今の歌之助を儲けましたゆゑ、兄弟仲でも義理がござります。その上御存じの通り、ナウ娘。
　トこれまで小雪、お露を相手にそこらを片付けてゐてこの時菓子を持つて出で
小雪　どなたにも、今日はようぞやお越しなされました。

上屋敷と違ひまして、別莊屋敷の不都合さ、マアマアおくつろぎなされませ、ソレ露、お茶上げましや。
つゆ　畏まりました。
　ト茶を出す。
四人　イヤ、お構ひ下さるな。
雲谷　時に小雪どの、賴りなき男、さぞ心勞にござりませうな。
兵內　その上密かに承はりますれば伏屋どの、いつぞや、唐土王羲之より傳はる畫書口傳一卷、祐勢どの我が君よりお預かりなさるゝ事は、よく人の知るところ。
權藏　去る秋の虫干の折柄、當家祐勢どの御病中に、紛失あると聞き及ぶ。
雲谷　もし左樣の事あらば、今のうちに吟味を遂げ、元の通りに秘め置かずば、聚樂の騷動で、何事も御吟味なければこそよけれ、これを詮議さるゝ時は、狩野家滅亡でござりまするぞ。サア、包まずと
權藏　打開けて申されよ。
四人　如何でござるな。
伏家　變らじと祈る命は惜からず、飽かで別れん事ぞ悲しき。過ぎ逝かれました夫、只この事を熱の譫言にも宣ひ

何者の仕業やら、奪ひ取られし傳書の一卷、人に知らせず吟味いたし居りまするが、今に在所の知れざるゆゑ、さながら薄氷を踏む當家の者ども。御推量なされて下さりませ。

トこれにて四人顔見合せ、こなし。小雪、お露に云ひ付けて、盆に茶碗を載せて持つて行かす。

つゆ　お茶を上がりませう。

三人　先づ／＼。

トこなしあつて

雲谷　お腰元か。

伏屋　ハイ、召仕の者でござります。

雲谷　ハア、小雪どのは名うての御器量、それにお使ひなさるゝ程あつて、御器量の好い事ぢやなア。

伏屋　折角お越し下さりましたが、今暫らく手間取りまする間、奥の[illegible]で薄茶なりとも。

權藏　お詞に隨ひ、圍へ參り、御息女か、但しはお腰元のお手前にあづかりたいな。

雲谷　それは一興でござる。何ぞ御馳走と申したところが高が精進料理。イヤ、わざ／＼今日參つたは、これにござる小雪どのに。ハヽヽヽ。

トこなしあつて笑ふ。

伏屋　ナニ雪や、圍の炭も先刻の儘なれば、其方が見てたも。

小雪　左樣なれば何れも樣。

四人　小雪どの。

ト雲谷、小雪の手を取らうとする。その手を叩き、ちよいと引き

小雪　サア、お越し遊ばしませ。

ト皆々奥へ入る。後に伏屋お露殘る。

伏屋　イヤナウお露、悴獄之助は、もう下がりさうなものぢやないかいなう。

つゆ　左樣でござります。今日はお客樣方もお越し、最早お下がりでござりませうぞいなア。

ト奥より岡平出る。

岡平　奥樣、只今歸りました。

伏屋　して、悴獄之助は。

岡平　お下がりなされてお玄關先、お草履をお召しなされしところ、お坊主立ち出で、何かお話しなされまして、奥殿へ引返して、やゝ一時も隙取り、お立ち出でなされ御殿に今暫らく御用があるゆゑ、其方は先へ、この刀箱

を持ち歸れとの、御意でござります。
ト刀箱を伏屋の前へ出す。
伏屋　外に歌之助が口上はなかつたかや。
岡平　ハツ、その劍は倶利伽羅丸と申す名劍、この度室町の御殿に、新に建ちし千疊敷の間の天井に、墨繪の雲龍を描けよと、當狩野家へ仰せ付けられ、その劍を瀧に映して、不淨をあやして見る時は、忽ち龍の形を顯はす希代の名劍、その圖を寫し描くべしと君の御諚。御口上の趣き、斯くの通りでござりまする。
伏屋　そんなら、この名劍は倶利伽羅丸、血をあやせば龍の形を顯はすを、手本にせよと御主人が。
つゆ　兼ねて承はりました墨繪の傳書は。
岡平　サア、その手本が紛失ゆゑに、即答にはならず、四郎次郎さまを尋ね出し、役目を勤め申させるが順當と、歌之助さまの思し召し。
伏屋　ムウ、すりや兄弟の義理を立て抜く、歌之助が一言、この役目は四郎次郎に勤めさせいか。とはいふものゝ、どこに居るとも知れぬ四郎次郎。子は三界の、イヤ、ドリヤ、奥へ行きませうか。岡平、大儀ぢやなう。
岡平　ヘイ。

ト入る。向うより四郎次郎、汚なき羊羹色の黒羽二重素布子にて短かい刀を差し、風呂敷にて顔を包み、藁草履を穿き出て來る。本釣り鐘、雪を降らす。
四郎　あの鐘は高臺寺の八ツの鐘。ア、浮世ぢやなア。狩野祐勢が倅、四郎次郎元信といはれる身が、心柄とはいひながら、畫は否になり、武藝は恐ろし、親仁に叱られ、將軍家の御前を勤めるがうるさゝに身持ち惰弱、勘當を受け、間もなう父上樣の御最期、丁度今日が五十日の忌日、義理ある母や兄弟にも云ひ譯なし。また女房小雪と内祝言は濟んであれど、まだ一度も寢た事のない。あの女房なれば水臭うもあらう、何は格別、ちよつと小雪に逢ひたいものぢやが。
トぶら／＼本舞臺へ來て、まご／＼して
頼みませう、ナウ、案内々々。
トこれにて内より
つゆ　ハイ／＼。
ト云ひ／＼出で
ハイ、どれからお越しなされましたえ。
四郎　アイ、どれからは參らぬ。
つゆ　御家中樣よりかえ。

四郎　サア〳〵家中々々、家中そつちういびきでも借らにや、正面には來られぬものでござい。
つゆ　オヽ幸氣、どれからお出でなされたえ。
四郎　どれからござる内がない、御惣領様の不埓者。
つゆ　さう仰しやるは若旦那、四郎次郎さまぢやござりませぬかえ。
四郎　サア、若旦那々々々、馬鹿旦那ぢや。小雪に逢ひに來たと云うて下され。
つゆ　これは怪しからぬ。むさくろしい形におなり遊ばした上に、顏を包んでお出で遊ばすゆゑ、とんと見違うて居りました。サア〳〵、お入りなされませ。
四郎　なか〳〵この態で入つては、母の手前、弟の思惑その上今日は誰れぞ來て居るであらう。
つゆ　ハイ、先刻、長谷部さまと御門弟衆が二三人。
四郎　どうしてそれが入られるものか、コレ、物貰ひがよつと逢ひに來てゐると云うてたも。
つゆ　エヽ滅相な、物貰ひと申し上げたら、何しにお逢ひなされうぞいなア。
四郎　成る程さうぢや。オヽ、それ〳〵、好い事を思ひ付いた。表へいぢらしい順禮が來てゐますが、今日は親旦那の五十日の忌日、報謝をあなたが直になされたら、功德になりませうと、勸めてたもらぬか。
つゆ　ムウ、そんなら、順禮が來てゐますとて、小雪さまお呼んで來ませう。待つてござりませえ。
ト奥へ入る。
四郎　何と云ひ掛けうぞ。先づ順禮なれば、順禮唄を知らずばなるまい。
トこの時奥にて
小雪　ナニ、表へ順禮が參りしとな。手の内をしませうわいなア。
四郎　サア、來るぞ〳〵。何でも欲しいがこの順禮。
ト節をつけて唄ふ。小雪、一間より出で
小雪　幸ひ只今お客様へ出しました、茶の子の殘りも次手ながら。
トお鳥目と菓子一包みな持ち出で。
順禮衆は、どこに居やつしやるえ。
四郎　オイ〳〵、爰に居やしやるぞ。
ト鼻を撮んで云ふ。
小雪　さうして同行は幾人あるぞ。
四郎　サア、同行は、アノ同行々々、夢の同行。

小雪　エヽ。
四郎　サア、同行か、斯うせうかと、あんまり詰らぬゆゑ現在女房にまでわざ〳〵無心に、こんな態で、しみたれたに御報謝。
小雪　さう仰しやるは、元信さまではござりませぬか。
四郎　四郎次郎々々々、四郎次郎もこの頃はあんまり薄うて、斑次郎。小雪、ちつとばかり貸してたもらぬか。
小雪　さりとては情ない。
　トあたりを見廻し
人に見知られては家の外聞。サア、マア此方へ、ヘテ、入らしやんせといふに。
　ト四郎次郎を無理に連れ入り、戸を立て切つて
コレ申し。
　ト胸倉を取らうとするを、四郎次郎顫うてゐるゆゑ、
　火鉢を突きつけ
狩野の惣領、元信さまとも云はるゝ、これが形かいなう。今日は何日ぢやと思うてござる。父様の五十日の忌日、御家中様方お越しあるその中へ、こりやマア何ぢやえ。お前は恥といふ事を知らしやんせぬか。父様が夫婦ぢやと云はしやんしてからは、殿御といふはこの人ぢや女庭訓にある通り、再び男は持つまいと、此まゝに尼法師ともならうと思うて居ります。それにあんまり心ない父の忌日に又無心とは、恥知らず人でなし、元信さま、お前はなア。
　ト涙を流して云ふ。四郎次郎この間、火鉢にて腹をあぶりゐて
四郎　そないに云ひないなア。わしぢやとて若い者の事ぢやもの、女郎買ひも一度はして見るものぢや。諸事萬事渡る川は渡つて見にや、人間は役に立たぬものぢやげな。また親人も氣が利かぬわい。餘り死にやうが早いぢやあるまいか。一年二年で、滅多に死にはさつしやるまいと、ウカ〳〵廓ばかりで、此やうになつたのぢやないわい。
小雪　廓ばかりでなうて、なんで此やうな形に。
四郎　サア、色から起つて、金が澤山に要るゆゑ、使ひたうても、はや勘當はしられるし、門弟の屋敷へ行つても、親人からこたへさつしやるゆゑ、斷わり云はれて、廓へ行けば馴染の太夫もほうろく頭巾、衣裳羽織の立派な内は信さまぢやの、元さまぢやのとお手車も、貢がないやうになれば知らぬ顔。あんまりけたいが悪いゆゑ、相場

大正二年五月新富座上演　實川延若の四郎次郎

やら富の札、買うて〳〵買ひ盡し、それでも爲足らず、惡者仲間に煽てられ、この中覺えた博奕勝負に大分借りが出來、コレ小雪、今日三十兩の金を返さねば、明日三人して叩き殺される。殺されるはわしは構はねど、母や弟や其方がさぞ悲しからうと、フッと心が付いたゆゑ恥を構はず來りしは、明日殺されうより、なんと來た方がやつとましであらうがの。それぢやに依つて、三四十兩貸してたもや、コレエ、嚊、妻、政所、北の方、東の方西の方南の方、この金ないと、生きて居られぬわいなう。

ト此うち小雪、裲襠を脱ぎ、頭の道具櫛笄を拔き、一つに寄せ

小雪　元信さま、これまで度々の御無心、もう私しは何もござりませぬ。この櫛、笄、裲襠、賣り代なして、用に立てゝ下さりませ。

ト氣の毒さうに。

四郎　アヽ、女房は持つべきものぢや。いつぞやからちよこちよこ其方に難儀を掛けて、夫ぢやと思やこそ、仇には受けぬ。戴きます〳〵。いつぞや貸してたもつた料紙文庫また珊瑚珠の筆立から、何やらかやらを質物に入れ、たうとう加茂川の流れとこそはなりにけり。いま又これを貸してたもる。誠に〳〵廓の太夫に迷うて、數多の寶を費すは日本一の阿房の頭ぢや。いま夢が醒めた。この女房がなんぼ美しいやら知れぬ。アレ、あの太夫を生地の墨繪、燕脂ばかりにして、筆刷毛も用ゐず唐紙に染めて見たがよい。見られもせまいけれど、極彩色にしてゐるゆゑ、ヤレ綺麗な、美しいと人も迷へば、我れものろけるといふものぢや。イヤ又この

ト兩人顏見合せ

アヽ、持つべきものは女房ぢやなア。

ト小雪の手をヂッと持ち。

コレ女房、小雪どの、どうぢやえ、エヽ、コレイナア。

小雪　どうぢやとは、どうでござります。

四郎　さう堅苦しう云はれては、根ツから後より出るものがない。大概知れたものぢや。まんざら劍術の稽古するぢやあるまいし、お醫者ぢやあるまいし、瞽女や法師を手水場へ案內するのぢやあるまいし、エヽコレ、どうぞしんか〳〵。

ト寄り添ふ。

小雪　さても〳〵情ない惡黨な元信さま、じやら〳〵仰し

やるも時に依りまする。父上の御忌日に、家内は憂ひに沈んで、もう打萎れて居りまする。それが御回向なさる御身を以て、濟まぬ事の有り丈を並べたその後で、このじやらくらは何事でござります。

ト机の上の卦算を持つて

男を叩くといふ事は世上にないと、辨まへて居りますれども、以後の懲しめでござりまする。この後は心を改め、紛失の家の秘書、再び手に入れ御歸參あり、狩野の家相續あるべきやう、性根を定める父御の御折檻、カウカウ／＼。

ト卦算にて四郎次郎を散々に打つ。

四郎　あやまつた／＼。

小雪　世間にあるべき女房は、悋氣で夫に手向ひなし、御主人の爲父御の爲には夫を捨て、詰め腹を切らせし女もあれど、それに引替へ現在の夫、女房へ愛着の輪廻を無理に打ち打擲。男も因果、女も因果、お免しなされて下さりませいなア。

四郎　アヽ、女房に持つべき者、女房なりやこそ親身の打ち打擲、仇には受けぬ、嬉しいぞや。しかもこの、

ト額をしかめながら

骨身に堪えて忝ない。これが、三十兩の金を博奕打めらに返さぬ時には、さぞや／＼叩くであらう。それを思へば何でもない事ぢや。もう直つた／＼。誠に身内の叩くのは、柔かなものぢやなア。折檻脊骨へ堪えたり、無心の願ひが狩野之助元信。ドレ、歸りませう。ヤレヤレ。

ト腰を抱へて出ようとする。

小雪　ほんにあられもない、只今の仕儀も、あなたを大切に存じますから、御勘忍下さりませ。

四郎　なんのお前、そりやよく知つてゐるわいなう。オ、これを包むのぢや、風呂敷を貸しておくれんか。

ト小雪、泣く／＼更紗の風呂敷を出し、襠襦を包み渡す。四郎次郎は風呂敷を脊負うて、また筆を一閑張の筆入へ入れ腰にさし、櫛を箱に入れ、懷へ押込み、更紗の小風呂敷にて頬冠りして

小雪や、段々忝なうござります。母様や弟に氣を付けておくれや。今の物を詮議の爲、遠國へ行くゆゑ隨分無事で。

小雪　オヽ、そのお心を、必らず／＼お忘れなされて下さりますな。紛失の傳書の一卷取返し、再び御歸參なされ

て下さりませ。私しはそれまで、惜しからぬこの髪は此まゝで、心は尼、表は男に持ちませう。

トしを〳〵四郎次郎の花道へ行くを見て

殿とも妻ともえゝ云はず、淺ましい、みつともない。

四郎　成る程順禮から、つりが來さうな、しみたれ姿。

小雪　西國九州、津々浦々三十三所も詮議して

四郎　どうぞ京へ再び歸參。女房ども。

小雪　こちの人。

四郎　ア、珍らしい、初めて聞いたわい。

ト向うへ入る。小雪、後を見て

小雪　氣強う御意見申すのも、あなたのお爲を思うての事、とは云ふものゝおいとしい。雲を當なる傳書の詮議、殊更旅は憂いものとやら、隨分ともに身をいとひ。この小雪も神佛に御心願申し、必らず待つて居りますぞえ。

ト、この時、奥より權藏、彌藤治、兵內出で、後より小雪を抱き止める。小雪、恟りして

小雪　アレエ。

兵內　ソレ、聲立てぬやう。

權藏　合點ぢや。

ト兩人して小雪に猿轡を入れ縛り、權藏、呼子を吹くと、下手より駕籠を舁き出る、

駕屋　御兩所、首尾は。

兵內　上首尾〳〵

ト兩人、小雪を無理に駕籠に入れる。

兩人　ちつとも早う。

駕屋　合點ぢや。

ト下手へ舁いて入る。兵內權藏續いて入る。奥より伏屋出て

伏屋　岡平〳〵。

ト岡平出で來り

岡平　後室樣、お召しの樣子は。

伏屋　いま奥にて聞けば、紛失の傳書は、東大谷の山門の額の中に隱しあるとの事。其方は早う大谷へ。

ト奥より雲谷出て

雲谷　大事を聞いたうぬら、覺悟。

ト伏屋へ切つてかゝる。程よく止め

伏屋　爰構はずと、片時も早う。

岡平　心得ました。

ト岡平向うへ入る。

雲谷　うぬをやつては。

ト行かうとする。伏屋、長押の長刀を取り、兩人立廻り、よろしく見得。返し

造り物、通り一面の塀、大谷の體。銅鑼太鼓、鳴り物早めて道具納まる。

ト向うより駕籠を舁き、後より兵内權藏附添ひ、本舞臺へ來る。

兵内　ヤレ、爰までは來たが、いま一息急げ〳〵。

駕屋　合點ぢや。

ト駕籠を舁き上ぐる、向うより岡平走り出で、兵内を突き廻はす。此うち、駕籠は上手へ急ぎ入る。

岡平　合點のゆかぬ今の駕籠。

ト行かうとする、

兵内　ヤア、一文奴め、邪魔をひろぐな。

岡平　そこ退き居らう。

兵内　うぬを。

ト兩人立廻り、よろしく。返し

造り物、向う遠見、東山丸山邊下河原、すべて眞葛ケ原畑の道具、舞臺眞中一間半程ごも〳〵場、稻叢、立木、よしこの唄になる。弓張り提灯、町人集會の戻り、大勢唄をうたひ、流行り唄義太夫を語り、丁稚三人、藝子三四人、花車、但しあんだ駕籠、すべて山戻り、この仕出し綺麗にして出て、向うへ入る。この中へ下手より住屋重兵衞、お爪、供二人提灯を持ち、四郎次郎、以前の風呂敷包を脊負ひながら先へ出る。

四郎　さて〳〵久し振りで堪能する程遊んだ。大勢大座敷に居た奴等は、町の集會の者ども、口やかましい奴らぢやつた。

重兵　時に元信さま、今日は思ひがけなうお目にかゝりました。揚げ代の催促を、ウカ〳〵山までせぶりせぶり參りましたが、寶來屋のお內儀にもお出逢ひなされて、これも又催促々々。

つめ　申し旦那様、捨て置くとてあんまりな。お屋敷へ催促に行きや、疾に勘當、馬鹿旦那ぢやと中間衆が詞。ほんに〳〵履物ぢやとて、たまるものぢやござりませぬ。

重兵　併し只今、山で仰しやつた通り、キッと違ひは

兩人　ござりませぬかえ。

四郎　ハテ、誰れぢやと思ふ。太夫の傘持から、釣の來さうな風體なれど、狩野四郎次郎元信さまぢや。嘘僞はりを云ふものかい。お爪、これ見や。

ト櫛笄を差出す。お爪、重兵衞見て

重兵　ヨウ、こりや見事ぢや。この位の生地は今少ない。コレお內儀、おれはこれが元商賣ぢや。いま住居へ養子に行つて、廓の事は素人なれど、鼈甲見分けるは手の者手の者。なか／＼こりや一廉の代物ぢやわいなう。

つめ　エヽ住居さま、お前がそんなに云はしやんすりや、餘程の金目でござんせうなア。

ト お爪、四郎次郎の側へ來て、

コレサア若旦那、マア、どこで盜んでお出でなされたえ。

四郎　ヤイ不作法千萬、どこで盜んで來るものぞ。コレ、女房は持つべきものぢやわい。今日無心に行つたれば、家內の者に隱して包んでコレ。

ト風呂敷から裲襠を出して見せ

女房が志し、なんときつからうがな。

つめ　流石お武家樣／＼。

重兵　コレ寶來屋、ちよつとお出で。

トこちらへ來て、

コレ、あの櫛と前差し、これまで、あの位の生地を、手に觸れた事はないわい。時に、おれが所は百七十兩程ぢや。そこへ櫛笄は瑇瑁にて極天の上代物、廉う積つても、五百兩が値打はしつかりぢや。

つめ　エヽ、そんなら、一向利のある受取り物ぢやぞえ。

重兵　サア、穩密々々。

ト四郎次郎の側へ來て

時に旦那、住居寶來屋この兩人が櫛笄にて、帳面を消してしまひませうか。

四郎　ヤ、そんなら櫛と笄で、さつぱりと勘忍してくれるか。寶來屋も其うちでか。

つめ　ハイ／＼、殘らず消します／＼。

四郎　そんなら又改めて行けるな。

つめ　オヽ、わつさりとお出でなされませ。

四郎　エヽ、有り難い／＼。又もや仰せの變らぬうち、ソレ、櫛と笄。

ト渡す。

兩人　慥かに受取りました。

ト兩人喜んで

つめ　旦那様、お近いうちに。

四郎　段々不肖、忝ない。

ト兩人、捨ぜりふにて向うへ入る。

ヤレ／＼、今の櫛笄で、さつぱりと勘忍してくれたも、皆女房の庇ぢや。忝ない／＼。また改めて行かう。カウツト、この襠裲や衣裳羽織に直して行かう。うまいうまい。

ト花道へ行きかゝると、向うより

駕屋　エツサツサ／＼。

ト四郎次郎驚ろき思ひ入れにて、ごもく場の後へ忍ぶ此うち駕籠舁き本舞臺へ來る。上手より雲谷出る。

雲谷　オヽ、大儀であつた。

駕屋　まんまと首尾よう。

ト駕籠より小雪を出す。此うち紙入れより金を出して包み渡す。

雲谷　これを取つて、早く／＼。

駕屋　これは有り難い。そんなら此まゝ。

ト駕籠屋、下手へ入る。雲谷、小雪の繩を解き、猿轡を取り

雲谷　小雪どの、斯うしたも、兼てこなたに惚れ込んでゐるこの雲谷。サア、ござれ。

小雪　エヽ、穢らはしいわいなア。

雲谷　ヤレ、其やうにつれなう云はぬものだ。斯うなるからは否でも應でも。サア、立つたり／＼。

ト手を取り、いろ／＼ある。向うより兵内岡平、立廻りながら出て本舞臺に來る。下手よりお露、權藏立廻り出て、皆々よろしく立廻り、上下へ追ひ込む。小雪も雲谷を突き退け、下手へ逃げて入る、雲谷も續いて追うて入る。四郎次郎、前へ出て來る。この時下手より小雪走り來て、四郎次郎に行き當り、脾腹を打ち、ウンと倒れる。四郎次郎、悔りする思ひ入れ。いろいろあつて、小雪の側へ寄る。返し

右の道具、其まゝごもく場の後を三角に見せ、よき程に下手より駕籠舁き二人、お露と立廻りあつて、上手へ入る。下手より兵内權藏、出で來り

權藏　兵内どの、して小雪どのは。

兵内　只今のどさくさにて、どつちへやら、逃げ失せましたと見える。惜しい事を致した。して、岡平めは。

大正二年五月　新富座上演

實川延若の四郎次郎　坂東秀調の小雪

權藏 彼奴めは傳書の一卷を取り得んと、東大谷の方へ參りしゆゑ、貴殿の後を追ひ參りました。

兵内 その儀は苦しうござらぬ。あの傳書といふは、眞赤な似せ物でござる。

權藏 ナニ、似せ物とな。

兵内 左樣でござる。さりながら岡平めが事も、心がゝりにござれば、これより直ぐに大谷へ。

權藏 然らば同道いたさうか。

兵内 早くござれ。

ト兩人、下手へ入る。後バタ〳〵にて四郎次郎、風呂敷包みを抱へ、ごもく場の後から逃げて出る。小雪、四郎次郎を追ひ駈けて出る。

小雪 情ない。氣を失つたばつかりに、あられもない。エエ、、。

ト四郎次郎を捕へようとする。振り切り〳〵花道へ逃げて入る。

元信といふ夫のある身を、むざ〳〵と、どうせう〳〵。云ひ譯はどうせうぞ。こりや生きては居られぬわいなア。

トあたりの水の流れを聞き、思ひ入れあつて

オヽ、さうぢや。

ト身繕ろひして流れへ立ち寄り、死なうとする。この前より、お光、出かけて聞きゐて

みつ コレ、待ゝしやんせ。

小雪 イヽヤ、放して〳〵。

みつ 生きてゐられぬその樣子、早まらずと、とつくり譯を

トよろしく引廻して、下に置くと、木の頭。

聞かしやいなう。

ト双方よろしく見得にて、キザミ。

幕

下の卷

高津社表門の場

野戸町別莊の場

役名‖花屋金五郎實ハ狩野四郎次郎。若徒、岡平。岩木屋藤三郎。番頭、傳兵衞。夜番、九郎次。柳ケ瀨彌藤次。粟村兵内。花屋五助。古手屋喜八。四郎次郎女房、小雪。藤三郎女房、お光。女髮結ひ、お倉。腰元、お市。同、お花。同、おさの。同、お品。

く造り物、上手、石の鳥居。眞中、人相見の暖簾掛けし占者の出店。机の上に筭木、天眼鏡、易の本等よろしく、下の方一間半の茶店、樒、塔婆、花桶、床几を直し、茶釜風呂に釜をかけ、爰に花屋五助、茶店の亭主にて茶を運び居る。お倉、女髮結ひの拵らへにて床几へ腰をかけ、赤子をすかして居る。仕出し大勢居る。すべて高津鳥居前の體、輕業の鳴り物、双盤の音にて幕明く。

五助　皆様、よう御參詣なされましたな。

仕一　今年はよう雪が降れど、今日ばかりは好い天氣ぢやなア。

仕二　サア、その雪の降るは、豐年のしるしぢやといの。それぢやによつて人氣も直つて、この高津さまなどは、えらう賑ひまする。

仕三　賑ふといへば、どこの國へ行つても、道頓堀のやうな芝居が五軒も並んで、一時に始まる所はない。

仕一　まだそれで足らいで、西横堀ぢやの難波新地へ、輕口ぢやの見世物ぢやのと、人は一杯入つて居る。

仕二　時に、もう行きませうか。

仕三　茶の錢、爰へ置きますぞや。

五助　有り難うござりまする。

皆々　サア／＼、皆ござれ。

ト鳴り物になり、兩方へ別れて入る。

くら　申し五助さん、金五郎さんはどこにぢやえ。

五助　イヤ、あの人は滅多に內へ戻つて來ぬが、併し、今頃は戻つてゐるかも知れぬ。

ト赤子泣く。

くら　ヤレ／＼、よう泣く子ぢや。

五助　その子はどこの子ぢやな。

くら　これはアノ福松屋のお妾様の子ぢやが、母家初め野戸町の女子衆までも沙汰なしで、お家がどこぞへやつてくれと、二兩の金を貰つて來たが、譯のある子ぢやによつて、今日中に片を付けてくれと賴みぢやわいなア。

五助　そんなら、わたしが心當りがあるが、男の子かえ。

くら　さうぢや。

五助　連れて行て、見せて來る。

くら　そんならお賴み申します。併し、二兩の金を取り得にして、捨てゝしまふやうな所は、よしにして下さんせ。

五助　なんでそんな所へやるものか。
ト赤子を受取る。
くら　サア、この金を持て行て下さんせ。
五助　イヤ〳〵、そりや後でようござります。
くら　マア〳〵、持て行て下さんせ。
五助　そんなら慥かに預かりました。
ト金を受取る。
くら　店はわたしが氣を附けて上げる。
五助　お頼み申しまする。
ト赤子泣く。
いんの子〳〵。
ト下手へ入る。お倉、釜の下を焚きつけてゐる。向うよりお光、町風内儀の拵らへ。腰元おさの、丁稚、風呂敷包みを脊負ひ出て
みつ　思ひの外、日脚が早かつたなう。
さの　左樣でござりまする。これでも旦那樣が、お内にお出でなされたら、御佛參が隙取れませうが、何を申しても、堺へお泊りがけの御用事に、お出でなされたゆゑ。併し、今日あたりは、お歸りでござりませう。
みつ　サア、それで氣を急いたわいなう。お墓ばかりぢやない、歸りに野戸町の妾宅へ寄つて、いよ〳〵旦那は、明日の朝お歸りぢやといふ事を、知らせてと思うて、ほんに娘持つたやうなものぢやわいの。
さの　イヤモウ、出店の手代衆を始め、誰れでもその事を申し上げまする。結構な奥樣ぢや、悋氣せにやならぬに、旦那樣のお妾へ、これは新物ぢや、珍らしいと、一番にお上げなさるゆゑ、皆が不思議を立てて居りますわいなア。
ト此うちお倉出で
くら　奥樣、ようお參りなされました。マア〳〵、お掛け遊ばしませ。
みつ　オヽ、お倉か、爰はお前の店かえ。
くら　イエ〳〵、只今留守を預かりました。
みつ　さうかいなア。お前がゐてなら、ちと休まうかいなア。
ト床几に掛ける。お倉、茶煙草盆を持ち行く。
くら　これはおさのさん、お前もお掛けなされませ。
さの　お倉さん、この間は。
くら　さうして奥樣は、どちらへ、お越し遊ばしました。
みつ　サア、お墓へお花を立て、歸りには野戸町へ廻らう

と思うて。併し、好い所でお前に逢うた。コレ〳〵、其方衆はお宮へ先へ詣つて居てたも。

兩人　ハイ〳〵。

ト さの丁稚、鳥居の内へ入る。

みつ　時に、こちらの子の事はどうなりました。これが野戸町のが、色男の子とかいふ事なら、また仕樣があれど、何ぢやゝら、知れぬ者の子ぢやと聞いて、阿房らしいぢやないかいなア。

くら　段々あなた樣のお慈悲のお詞で、あのお子樣にも涙を流して、有り難う思うてゞござります。併し京に居てでござりました時は、歴々のお身の上ぢやさうにござりまするが、惡者の爲に苦勞をなさるゝといふ事。旦那樣のお世話になるに、餘り子がうつとしい、早う片付けてくれいと云うてゞござりました。好い口がござりましていま先へ連れさせてやりました。

みつ　それを聞いて安心しました。併し、この事は沙汰なしに頼みますぞや。

くら　それは誰れにも申す事ではござりませぬ。

くつ　ドレ、お宮へ詣つて來う。

くら　わたしがお宮まで送りませう。

みつ　イエ〳〵、あれらが、そこらに待つてゐませう。

くら　それでもお一人では惡うござりまする。

ト 兩人、鳥居の内へ入る。向うより傳兵衞、番頭の形、後より彌藤次、旅侍ひの拵らへにて出で來り

彌藤　好い所で逢うた。先づ行きやれ〳〵。

ト 本舞臺へ來て床几に掛ける。

コレ、茶を一つくれ〳〵。どいつも居らんか、用心の惡い事なア。時に傳兵衞、毎度文通は致せども對面せねば相分らぬ、彼の傳書の一件、先達て長谷部が東大谷の山門に隱しあるとは僞はり、歌之助の下郎岡平めが取返せし傳書は似せ物。

傳兵　その事は去年、權藏どのゝ書狀にて、詳しう承はりましたが、こちの旦那が堺にて、金子の抵當に取らしやつたが、なんでも怪しい品物。現在手代のわたしにさへ云はぬ旦那、どうも合點がゆかぬ。

彌藤　それゆゑわざ〳〵下つて、糺し參れと長谷部どのゝ仰せ。何卒その誠の傳書の一卷、山口どのまで渡せば、我れ〳〵まで出世になる。此方へ取り得るやう計らうてくりやれ。

傳兵　サア、そこに如才はなけれども、何も云うても、此

方の旦那の心が知れぬ。併し、妄狂ひで京都から、素性の知れぬ女子を連れて戻つて、この野戸町の下屋敷に圍うて置くゆゑ、内のお家に悋氣を起させ、その虚に乘じて詮索して見ようと思うて、何ぼうかお家に焚き付けても、貞女張つて悋氣もさらさず。この番頭もとんと狂言が書き惱いによつて、段々延びになつて居ります。

彌藤　それなれば、先づ手懸りのないでもない。まだ外に話もあれば、生玉の桃李庵へ行て、何かの事を談じようか。

傳兵　それはよろしうござりまする。

彌藤　案内しやれ。

傳兵　サア、斯うお越しなされませ。

ト兩人、下手へ入る。向うより岡平、袢纏股引にて出で、直ぐに本舞臺へ來て

岡平　こりや茶店は空家と見える。

ト占ひの店を見て

なんぢや、男女占ひ、墨色、手の筋、失せ物、待ち人、ムウ、幸ひの足休め。頼まう／＼。

ト内より兵内、紙子肩繼ぎ、一本差しにて出で

兵内　ヤレ、一つ飲んでグツタリとやつた。何ぢやな。手筋か占ひかな。

岡平　イヤ、ちと失せ物の事に就いて、この大坂に手懸りがあらうか、それを見て欲しい。

ト云ひながら、顔見合せ

ヤア、其方は。

兵内　うぬは。

岡平　栗村兵内、好いところで逢うたな。

兵内　身共は何にも存ぜぬわい。

岡平　イヤ、覺えないとは云はさぬ。去年の春、東山にて長谷部雲谷と合體なし、倶利伽羅丸を奪ひ取り、どこへはかせた、キリ／＼吐かせ。

兵内　イヤ知らぬ。

岡平　云はぬとあらば、搦め捕つて。

兵内　なにを。

ト立廻る。この時傳兵衛彌藤次出で來り、この中へ入る。

彌藤　ヤア、こなたは栗村兵内どの。

兵内　さう云ふは柳ヶ瀬彌藤次。

傳兵　して、この騷動は。

兵内　おれが身の上、加勢してくれ。

兩人　合點ぢや。

ト これより岡平、三人を相手に立廻りのうち、彌藤次懐より狀を落す。岡平取つて

證據になるべきこの密書。

彌藤　なにを。

ト取りにかゝり、トヾ傳兵衛、右の書狀を持つて下手へ走り入る。岡平、兩人と立廻りながら、下手へ入る、向うより

喜八　うせう／＼。

ト四郎次郎、汚ない形。喜八、風呂敷包みを脊負ひ、古手屋の拵らへにて出て

四郎　サア、よいわいなう。其やうに荒々しう云ふ事はないわいなう。

喜八　何をうぬが。逢うた時に勝負せにや、逆さまにしても鼻血も出ぬ貧乏神、引摺つて行て取らにや置かぬ。うぬは全體、中寺町の花屋の居候ふ。時々見合はす顔で、おれが商賣の古手物、金は二三日のうちに拂ふに依つて賣つてくれいと賴むゆゑ、賣つてしまつた古手代が、丁度百四十匁、約束の日が來ても金拂はず、催促に行ても内には居らず、居候ふの悲しさには缺け土瓶一つ持つて居らす、サア、いま金拂へば料簡する。もし金がなけりや、引摺つて行てうたはすのぢや。うせさらせ。

四郎　サア／＼喜八、よいわいなう／＼。マア、爰へ掛けや。

ト床几へ腰を掛け

貴樣のやうに腹を立てるものぢやない。尤もおれも元は京の生れで、親は畫所の某とも云はるゝ人、なんの取込むといふ事はサラ／＼ない。遲うなつたは、貴樣の所の借りばかりぢやない。身にも命にも代へて、手に入れねばならぬ大切な品物が、この大坂の質屋に入れあるとの事。それを請け出して歸參せねばならぬ。大枚三百兩の事ぢや。その工面さへ出來たれば、十層倍にして拂ふわいなう。

喜八　成る程、さう聞けば尤もらしいやうな所もある。そんなら花屋五助に逢うて工面さらせ。

四郎　そりや合點ぢやが、どうやら五助どのは留守さうな。

喜八　留守といふやつも久しいものぢや。附いて行て取りたくるのぢや。

四郎　サア、おれも一遍逢はねばならぬ用もあり、丁度合

うたり叶うたりぢや。こんな時には催促も、連れになつてよいものぢや。
喜八　エヽ、キリ／＼うせんかい。
四郎　よう、けち／＼云ふ奴ぢや。
ト行きかゝると、下手より五助、赤子を懐へ入れて出て來る。
喜八　コレ／＼、五助どの、今こなたの所へ行くところぢや。
五助　そりや何しに。
喜八　金受取りに。サア／＼、早う金おこせ／＼。
五助　途方もない。なんでわしが金出すのぢや。
喜八　假初めにも、百四十匁といふ金ぢや。いま出してもらはう。それがならずば、この男を代官所へ引摺つて行くのぢや。
五助　なんぢややら、譯が解らぬ。アヽ、今五郎どの、こなた、この人に借りでもあるのか。
四郎　サア、ある事はあるのぢや。
五助　なんぞ、義理、悪い借りかえ。
四郎　サア、悪いと云へば悪い。善いといへば善いわいの。

五助　マア／＼、せう事がない、そんならその金、わしが濟ましませう。
喜八　アノ、百四十匁を今爰で。
五助　金さへやれば云ひ分あるまいなう。
喜八　取りさへすれば云ひ分ない。おこさぬと代官所へ連れて行くのぢや。
五助　サア、よいわいなう。よし無駄遣ひにしたにもせよ元の身になるまでは大切な體、この金拂うてしまはつしやれ。
ト金包みを渡す。
四郎　そんなら貸して下さるか。
五助　イヤ、こりやこなたの金も同然ぢや。
四郎　そりや又どういふ譯で。
五助　サア、この二兩の金の出所は、この稚子ぢや。さる所の妾が生んだところが、また外によい旦那が附いて、關はれるのぢやが、母屋や世間の手前があるゆゑ、先度から日に百宛の小遣を附けて、預けて置いたところが、預かり先の人が病氣ぢやによつて、いつそどこぞへ遣らうと、養育代として、金二兩附けてあるのぢや。この子を貰へば二兩は手に入る。獨身の事なれば、懐へ入れ

貰ひ乳しても養はれる。さうした時には自然と身も堅づまらうと、いま早急のわしが思ひつき。

四郎　成る程こついは好い貰ひ物ぢや。二兩きりで後はくれまいか。

五助　それは其方の育てやう次第で、その妾の所から、少し宛は送つておこすに違ひないが、マア、先の事は後にして、この金で、あの人の方濟ましたがよからう。

四郎　成る程この金で、當分の難儀助かるはよいが、わしは生れついて乳が出ぬゆゑ、困つたものぢや。

五助　エ、、男が乳が出てたまるものか、それぢやによつて、乳のある所へ行て貰へばよいではないか。

四郎　なんにせい難儀なものぢや。

五助　いかぬとあれば返さにやならぬ。

喜八　相談出來ずば、代官所へ引摺つて行かうか。

四郎　氣の短かい。いま相談最中ぢや。

五助　そんならこの子を貰ふ氣か。

四郎　それぢやと云うて。

喜八　矢張り代官所へ引ッ張らうか。

四郎　それは又性急な。

五助　この子を貰ふか。

四郎　サアそれは。

喜八　引摺つて行かうか。

四郎　サア。

三人　サア／＼／＼。

五喜　どうするのぢや。

四郎　まゝよ、貰ひませう。

五喜　ヤア。

四郎　ハテ、貰ふまいと云や代官所、それを助からうと思や、貰はにやならず、せう事ない、貰うて育てませう。

五助　そんなら貰はしやるか。サア、養育代の金、受取つて渡さつしやれ。

ト金を渡す。

四郎　サア喜八どの、約束の金、受取つて下され。

喜八　金二兩は受取つたが、後の不足、と云うた所が何にもあるまい。よいワ、稚子の上着は相應な品物。これを捌いたら代りにもならう。來しなに、てんやで買うて來た子供の着物。これを着せ替へて算用濟ましてやらう。

ト風呂敷包みより、汚ない子供の着物を出して、赤子

の上着と着せかへようとする。
五助　ア、コレ、貰うた子ぢやというて、どくせうな、こ
の着物剝ぐと云ふか。
喜八　なんの構ふものか。着物さへ取つたら、云ひ分ない
のぢや。
四郎　この寒いのに風でも引いて見たがよい。おれが困る
ワ。
喜八　貴樣の困るのを、おれが知らうかい。
　ト無理に赤子の上着を脫がせ
マア、これで助かつた。ドリヤ、行からうか。
　ト着物と金を持つて下手へ入る。
四郎　てもむごたらしい奴もあるものぢや。えらい目に遭
はし居るわい。
五助　イヤモウ、あんな奴にかゝつては、病犬にかぶり付
かれたやうなものぢや。サア、そんならこの子を渡しま
する。
四郎　せう事がない、下されい。
　ト赤子を取る。
五助　大事にかけねばならぬぞや。
四郎　そりや承知して居ります。いま貰はれて直ぐに今
着物まで剝がれて、親を助けた孝行者、大事に掛けいで
なんと致しませう。
　ト雪チラ〳〵降る。
忌々しい。雪がちらついて來た。
五助　さうぢや、風引かしたら惡い。懷へ入れてやるが
よい。
四郎　さうしませう。懷へ入りや、稚子もぬくう、わし
も溫石代りになる。
五助　時に、せう暮れ前ぢや。店をしまうて去なう。
　ト店を片付けながら
最前餘所で乳を貰うて飮まして置いた。横町のおきよさ
んの所に乳がある程に、後で連れて行くがよい。
四郎　そんなら、さうしませう。
　ト五助、店を片付けて、手桶に道具を入れ提げて
五助　わしは先へ行きますぞや。
四郎　大きにお世話樣でござりました。
五助　早う戾らつしやれや。
　ト下手に入る。
四郎　この身の勘當受けた元はと云へば、親人がお預かり
の狩野の傳書、尋ねて見ても行くへは知れず、この大坂

は西國筋の船附ゆゑ、諸人の入込みと、去年の春から來て居れど、その手筋も金づく、たま／＼二兩の金は貰うたれど、このちいさいを貰はにやならず、マア一方は片付いたれど、つゞまる所は育てねばならぬ。乳はなし、こいつも因果、おれも因果。こりやマア困つたものぢやわい。

ト赤子笛。いぶりながら

ア、、夢でも見たのか、直ぐに寢入つた。いんのこいんのこ。

トいぶりながら赤子の守を見て

小さい子に大きな守が掛けてある。しかも襟に縫ひつけて。

トよく／＼見て

ヤア、こりや見覺えある、しかもわしが二つか三つ位の時、足利義晴公の御前に於て、褒美として下し置かれし、異國より渡りし裂れ、狩野家より外にない。畫書の修覆にして、その後の裂れを、魔除けになるとあつて、身の者の守にして持つて居る、この裂れ。稚子の守に縫うてあるからは、何でも樣子ありさうな事。

ト中より臍の緒書を取出し、

なんぢや、仔細あつてこの子を產み落し申し候ふ。狩野の雪女忰信太郎年號月日、こりやコレ云ひ號けある小雪の手蹟、サア／＼、事ぢや／＼／＼、そんなら云ひ號けの小雪が、この子をへり出したのぢやな。腹の立つ／＼。こりや京へ上つて……イヤ待てよ。云ひ號けと云ふは名ばかりのあの小雪、しかも去年の正月、親仁樣の五十日の忌日の日、東山の別莊へ無心に行た時、頭の道具まで惜氣なうくれたゆゑ、あまり心根が可愛いので、ちよつとじなついて見れば、堅くろしい詞遣ひで、腹から意見をした上に、御歸參なさるゝまでは、姿は女子、心は男、尼同然に暮らしますと云うたが、その前からどこぞの奴と、ちよちよくつて居つて、わざとあのやうに吐かして、一杯喰はし居つたのぢやなア。こりや何ぢやい、信太郎も凄まじいわい。この信は元信の信か。但しは、のろまの信か。エ、、腹の立つ／＼。

ト赤子の頭を毆る、赤子笛。

何ぼうなと泣け。おりやモウ可愛い事はない。

ト占ひの机を取つて來て、赤子をその上に置き

コリヤ、ギヤアギヤアと泣くばかりが、赤子ぢやなワ。其方が母はおれが云ひ號けぢやぞよ。それに男を振り捨

てゝ、マア、誰れとの仲にわもや出さつた小悴ぢや。泣く口があるなら、姦夫は何屋何兵衛と吐かせ。この上は間男の成敗、重ねて置いて四つにする。われを入れて六つにする。

ト八卦の卦算を取つて來て

男も女もどこにゐるやら知れぬによつて、手始めに、おのれから先へ突き殺してくれう。

ト卦算にて咽喉を突かうとして

イヤ〳〵、例へ間男の悴にもせよ、今日の難儀を救うてくれたこの稚子、その上、花屋五助どのが段々の深切、殺しては義理も立たず、殊に紛失の書書の一卷、詮議もせず歸參もせぬおれゆゑ、見限つて男でも拵らへ居つたか。なりや、彼方より此方が負けぢや。オヽ、思ひ出した。最前五助どのゝ話には、この稚子を產んだ女子といふは、京から連れて戻つて、この大坂の町人に圍はれて居るとやら。なりや小雪はこの大坂に居るに違ひはない。腹は立つけれど、この悴を大事にかけ、貰ひ乳してなりと育てゝ置いて、小雪めに逢うた時は、コリヤ、側へ間男の子でも、この通り大事にかけて育てたと、一理窟云はにやならぬ。さうぢや〳〵。

トこの時鳥居の内より、傳兵衛、以前の状を持ち、後より岡平、兵内、彌藤次、取合ひながら走り出て、傳兵衛、四郎次郎に行き當る。悔りして子を其まゝに置き、逃げて入る。四人は立廻り、トゞ彌藤次、状を取つて下手へ逃げて入る。あと三人立廻りながら追ひ入る。彌藤次、引返して出で、状の隠し所を尋ねるこなし。

彌藤　オヽ、幸ひ。コリヤ、この状、汝に暫らく預けるぞよ。

ト赤子の懐へ右の状を隠す。岡平、傳兵衛、兵内、立廻りながら出る。彌藤次、鳥居の内へ隠れる。兵内花屋へ逃げて入る。岡平、追ひ駈け入る。傳兵衛、立廻りのうち當てられ、この時氣が付き、ヒヨロ〳〵しながら向うへ入る。四郎次郎、脇腹を抱へながら、人相見の内より出て

四郎　今のは何ぢや、怪しからぬ目に遭はしをつた。ヤレ、稚子をよう殺されなんだ事ぢや。今日ほど酷い目に遭うた事はない。

ト本釣り鐘になる。

オヽ、もう暮れ六つ。雪風で寒い〳〵。この稚子に風引

かしては、まさかの時に物が云はれぬ。ドレ〳〵、懐へ入れて暖めてやらう。とは思ひながら、間男めで產ました餓鬼ぢやと思ふと、どうも懐へも穢ないやうな。いつそ捨てゝしまはうか。イヤ〳〵、捨てゝは物が云はれぬ。ようマアこのやうにぐりはまになるものか。金を貰へば直ぐに取られる。殘つたものがこのちつぺいばかり、おりや鰥夫なりや乳はなし、さればとて捨てられもせず、その子といふは、云ひ號けの小雪めが、悪性狂ひに出來た子を、ほんの男のおれが育てねばならぬとは、よく〳〵因果なつくばい。

ト赤子笛。

その上今のバタ〳〵で踏み倒され、この上長居したら、どのやうな目に遭ふも知れぬ。ドレ〳〵、連れて去んで乳を貰うてやりませう。

ト頰冠りして行きかける。彌藤次、鳥居の內より立戾り、恟りして

彌藤　コリヤ、その小悴を。

ト赤子を取りにかゝる。

四郎　アヽ、コリヤ、うぬは狂人か。こりや大事の〳〵女房が間男して出來た子ながら、餘儀なうおれが子ぢや。虫が出るわい。

ト脾腹を蹴る。タヂ〳〵と後へ寄る。四郎次郎はいぶりながら花道へ行く。赤子笛。

ねんねこ〳〵〳〵や、ねたら間男方へ連れて行て。アヽ南無三、ずつくりやり居つた。

トこの時彌藤次、トンと返る。四郎次郎見て

なんぢやい、恟りするわい。阿房よ。

ト十二月の唄になる。四郎次郎向うへ入る。返し。

造り物、上手、見事なる四辻の門締りある。これより下手は町家の表構へ、夜の體にて締めある書割り、舞臺一面に白木綿を敷き、すべて雪降りの體。右の合ひ方にて道具とまる。

ト向うより兵內傳兵衞走り出る。岡平、後より走り出てキツと止め

岡平　サア、先刻の密書、此方へ渡せ。

傳兵　イヽヤ、覺えはないわい。

岡平　イヽヤ、知らぬとは云さはぬ。うぬも同類。

二人　なにを。

ト振り切り逃げる。岡平引き戾し、立廻り。雪頻りに

降る。傳兵衛逃げて入る。岡平、兵内、立廻りながら、
下手へ入る。向うより四郎次郎出て

四郎　アヽコレヽもうちつと降りやみさうなもの。手足も
覺える事ではない。五助どのが敎へてくれた先へ貰ひに
行けば、折惡い近所の子供に飲んで貰つた後。
ト赤子笛。
サア〳〵、尤もぢや〳〵。泣くな泣くな。おれもなんぼ
う忌々しい。小雪めが產んだ子ぢやとて、滿更われにひ
だるい目さして、嬉しいと思はぬが、これからなんでも
乳のある所で、思ひ入れ飲ましてもらうてやらう。ねん
ころねんころ。
トいぶりながら本舞臺へ來るうち、道具段々と下手へ
引く。
造り物、四ツ辻の門、段々正面へ來る。上手より、
番所に捨ごばんと云ふ提灯ぶらさげ引出す。向う一
面の塀になり、好き所にて道具とまる。
ト矢張り雪降る。右の番所の屋根、塀の屋根、一面の
雪降りの體。四郎次郎、子をいぶりながら、本舞臺へ
來る。赤子笛。

四郎　アヽさりとては忙しない奴ぢや。
ト提灯を見て。
ソレ、ばい〳〵ぢや。ドレ、しゝをやつてやりませう。
ト小便をやる。
サア〳〵、泣かずと小便せいよ。
ト小屋番九郎次、番所より出て來る。

九郎　誰れぢや、何奴ぢや。

四郎　エヽ、悔りするわい。

九郎　この雪降りに人通りもあるまいと油斷して、寢入り
かけたりや、アタやかましい世迷言。この提灯は目にか
からぬかい。

四郎　なんぢや、この提灯。
ト提灯を見て
捨ごばん。捨ごばんとは何事ぢや。

九郎　茲な間拔けめが。しら僞似を吐かすな。おのれ、こ
のあたりへ捨子さらすのであらうがな。其やうな事を
さらさぬやうに、コリヤ、提灯に書いてある、捨子番ぢ
やわい。

四郎　わりや捨子の番人か。書きやうが惡い。捨子の番な
ら、なんで捨子番人と書かぬか。捨ごばんと書いてある

ゆゑ。捨てる程小判があるなら、拾はうと思うて。コリヤ、おりや、やもめの身で困つて居れど、子を捨てゝ堪るものかい。

九郎 また捨てられて堪るものかい。捨てぬのなら早う行きをれ。

四郎 お世話ぢや、すツこんで居れ。こりや大事の〳〵女敵を打つ證據者の稚子。又おれも元を云へば歷々。こんな事云うたとこ、ぼんくらには解るまい。

番人 エ、、御託を吐かさずと、キリ〳〵うせあがれ。あの化物めが。

ト番屋の戸を締める。

四郎 おのれが化物ぢやわい。われは町中ぢやによつて、人間ぢやと思はうが、山の中で見い。牛か熊かといふやうな奴等ぢや。

ト番屋の側へ來て

コリヤ番太郎よ。まだこの上に五人や十人二十人でも拾ふわい。間男の子さへ拾うて居るわい。併し、斯ういふものゝ、此やうな汚い形でゐるによつて、あのやうに吐かすのも彼奴が役目、無理はない。ア、、これにつけても、何やらの芝居で、役者めが云ひ居つた、子は三界の首枷とは、よう云うた事ぢやなア。

トしめやかなる合ひ方、篳篥の入つたる鳴り物になり、四郎次郎、赤子をいぶりながら上手へ行きかけると、この道具程よく廻る。返し。

造り物、右の格子先の續きに忍び返し附の綺麗な塀この道具三角廻りの飾り、上下の切り戸出入りあり、眞中に中二階にて塗り骨障子、下手の方に見越しの松、上手の方に紅梅の實木、いづれも雪持ちにて、舞臺白木綿を敷き、すべて岩木屋別莊裏手の模樣よろしく、雪段々とひどく降り、右の鳴り物にて道具納まる。

ト中二階の障子を明け、腰元おさの、お市、お品、お花、皆々手燭を持ち、お市、椀に乳の搾りしを入れ、持ち出で

しな なんと皆さん、斯う見晴らした雪景色、綺麗な事ぢやないかいなア。

さの 旦那樣がお內にござつたら、雪見酒でさぞ賑やかな事であらう。

皆々 ほんに殘り多い事ぢやなア。

いち　時にお乳を、爰から捨てゝもようござんせうか。
はな　この大雪で人通りはなし、大事ないわいなう。
いち　これでちつと、あなたもお助かりであらう。
皆々　さうぢやわいなう。
ト石の椀の乳を塀の外へ捨てる。この時四郎次郎、下手より出て、乳を浴びる。
四郎　アヽ、こりや何ぢや。往來の者の頭へ、何を浴ぶせるのぢや。冷たいわい、冷たいわい。體やちつぺいも一絞りぢや。聞かぬ〳〵。
ト着物を拭いて怒る。
いち　ヤア、こりや粗相をしましたぞや。
しな　往來の人の頭へかけたと見える。
さの　下へ行て、詫び言せねばなるまい。
皆々　さうぢやわいなア。
ト障子を締める。
四郎　忌々しいぞ、見りや金持らしい門構へ。美しい女子めらが、この寒いのに、人の頭から煮湯ならまだしも、冷たいものを浴せをつて、料簡ならぬぞ〳〵。
ト切り戸より、お市、手燭を持つて出て
いち　これは〳〵、どなたかは存じませぬが、大きな粗相を致しました。お上へ聞えますると、私しどもの粗相と叱られまする。どうぞ御料簡なされませ。
四郎　イヤならぬぞ〳〵。定めておかわの小便をかけたのであらう、元のやうにして返せ〳〵。
いち　サア〳〵、そりや御尤もでござります。畢竟これは怪我でござります。殊に汚い物ではござりませぬ。こりや私しの所のお妾樣のお搾りなされた、乳でござりますわいなア。
四郎　何ぢや、いま浴せたのは乳ぢやとな。
いち　ハイ。
四郎　ムウ。
ト頭にかゝつたのを手拭にて拭き、嘗めて見て。
ほんに甘い。こりや乳ぢや。ムウ、そんなら爰な内に、乳の剩る人があるかな。
いち　ハイ、こちらのお妾樣は。この頃お子をお産みなされて、その子はどうなされたか内にはござらず、お乳が脹つてならぬゆゑ、いま椀に搾り、流したはわたしが粗相。御堪忍なされて下さりませ。
四郎　ムウ、そんなら、爰は妾宅かな。
いち　アイナア。

四郎　申し、ちよつと來ておくれ。
ト花道際へ連れて行て
成る程、料簡はしませうが、お前見ての通り、この稚子を連れて、乳を貰ひに行くところぢやが、どうぞ一杯飮まして下さる事は、出來ますまいかな。
いち　オヽ、そりや何より心安い事、賴んで上げるわいなア。
四郎　エヽ忝ない。さりながら、旦那樣が來てぢやないかえ。
いち　イエ〳〵、旦那樣は、この四五日、堺の方へお泊りがけに。何にも氣兼はござんせぬわいなア。
四郎　エヽ、そんなら、旦那樣は堺へ行つて、お留守かな。
いち　アイナア。
四郎　何でもこの稚子を囮に、おれが一番。その姿の面をとつくり。
いち　エヽ。
四郎　イヤサ、乳をとつくり飮ましてもらうたら、稚子がさぞ嬉しがるでござりませう。
いち　サア、斯うござんせいなア。

ト お市、四郎次郎、切り戸へ入る。下手よりあんだ駕籠に久三、提灯を持ち附いて出て
久三　コレ〳〵駕籠の衆。旦那が案内すると、家内の者が騷ぎ立てる。この切り戸よりソツと入つて、直ぐに離れ座敷へ駕籠を廻してくれいと、仰しやる。靜かに賴みまする。
駕屋　畏まりました。
ト切り戸を明け入ると、この道具靜かに廻る。
造り物、三間の二重、向う利休襖、世話瓦燈口。上手、數寄屋建ての中二階。下手、落ち間庭先の體。雪見燈籠、庭木のあしらひ、紅梅の實木、所々に雪の畝、いつもの所に風雅なる待合やうの好みの入り口、すべて下屋敷の體。中二階常足三間とも殘らず數寄屋建障子を嵌めあり、誂らへの唄にて道具とまる。
ト下手より皆々駒下駄にて手燭を持ち、四郎次郎、揉み手をしながら入り口を入る。
皆々　爰で待つて居やしやんせいなア。
四郎　大きにお世話樣でござりまする。

しな　お市どのは、その子を早う
皆々　連れまして行かしやんせいなア
いち　合點ぢやわいなア
　ト　お市、障子を明けて入る。
四郎　これは〳〵、いろ〳〵とお世話樣になりました。
　ト　云ひながら、ウソ〳〵覗き歩く。腰元、火鉢を持ち
　出て來る。
よい所でお前方のお目にかゝつて、どうやらもの臭いこ
の妾宅、もしそれなら。
　ト　云はうとして氣を替へ
悴めが大きに仕合せでござりまする。
さの　サア、體も着物も、ようあぶらんせいなア。
四郎　もう構はずと置かしやつて下さりませ。
　ト　内にて
みつ　ナニ、乳を貰ひに見えたのか、それは幸ひ、とつく
りと飲んでもらはねばならぬわいなア。
さの　それゆゑ、お側へ連れて、參りましてござります
る。
みつ　オヽ、それはよう氣が附きました。
皆々　コレ、何を其やうにソワ〳〵さんすぞいなア。

四郎　アヽ、これはア〳〵何ぢやわい。斯うやつてゐるは、
寒さを忘れるやうにぢやわいなう。
皆々　それぢやによつて、火鉢へ當らしやんせいなア。
　ト　此うち正面の障子を引拔く。
みつ　オヽ、この寒いのに何をして居やるぞいなう。
しな　この乳貰ひやさんが居られますゆゑ、話をして
皆々　居りましたのでござりまする。
みつ　ホヽ、そりやよう氣が付きました、こりや寒いのに
よう連れて來て下さつたなア。
　ト　四郎次郎、灯影にて、お光を見て、合點のゆかぬ思
　ひ入れ。
四郎　へヽヽヽ、そんなら、あなたが爰なお妾樣でござり
ますかえ。
はな　イエ〳〵、あなたは母屋の
皆々　奥樣ぢやわいなア。
四郎　エヽ、それに又このお座敷に。
みつ　成る程、不思議に思はつしやらうが、爰は旦那樣の
別莊妾宅なり、又わたしは本家の者ぢやわいなう。
四郎　へエヽ、あなたのやうな美しいお家樣の外に
いち　まだきつしりとしたあなた樣が

嘉永二年市村座上演

市村羽左衛門の甚兵衛(藤三郎)
中村歌右衛門の中助(四郎次郎)

皆々　あるのぢやわいなア。
四郎　ムウ、さてこそ物臭いと思ふのぢや。
しな　物臭いとは
皆々　何がえ。
四郎　エヽ、物臭いとは何ぢやわえ。この美しい奥様が居ながら、お妾様が別にあるとは、あんまり榮耀に餅の皮、そこで物臭いと云ふのでござりまする。
しな　そりやさう思はつしやんすも無理はないが
はな　こちらの奥様は捌けたお心。
さの　お二人仲好い、旦那様も氣兼いらず
しな　この間から堺の方へ、お泊りがけのお留守に、妾宅へ奥様が見舞にお出でなさるゝ。
さの　なんと世の中に、捌けた奥様も
皆々　あるものではないかいなう。
ト此うちお光、腰元へ云ひつけ、火鉢を取寄せ、香盒より、梅ケ香を出して焚く。下手より男一人出て
男　ハイ、お頼み申しまする。隣から來ましたが、今晩も又藝者衆が參りまして、騒ぎまするゆゑ、ちよつとお斷わりに參りました。
いち　それはお賑やかでようござりまする。浄瑠璃でござりませうな。
男　サア、よし／＼節とやらを、唄うて聞かせますと、申して居りました。
いち　それは、爰から聞いて樂しみませう。
男　どなたも、ちとお遊びにお出でなされませ。
ト男、下手へ入る。
いち　奥様、お隣で何やら始めるさうにござりまする。
みつ　それは早う唄へばよい。
トこの時下手にて
〽そも／＼これはその昔、くだらぬ戀の大將軍、平の器用か、不器用か、して見りや分る繪草紙、さつても心が浮かれ出したは、たつぷり乳ばみの子供衆が、乳に付き兼ねるもよし／＼、世の中丸うてよし／＼。
ト中二階の障子引拔く。小雪赤子に乳を飲ましてゐる。傍に利休行燈を置き、その側におさの、坐り居る。
みつ　いま唄ふのは、この頃流行るよし／＼節、丸う納まる延喜もよし、こりや流行りませう。
さの　そのお子も、きつい仕合せでござりまする。
小雪　サア、よいまんでござりましたわいなア。
ト四郎次郎、いろ／＼こなしある。

みつ　コレ〱、乳貰ひどの、なんで其やうにさつしやるぞいなう。何にも其やうに案じる事はない。子供が寢入るまで、飲ましてやるがよいわいなう。

ト四郎次郎また行かうとする

いち　サア、お茶一つ飲まんせ。

〽引きぞ煩らふ花あやめ、贔屓を願ふは二葉草、取持しつかり菊桔梗、御代は安全よし〱、世の中丸うてよしよし、生華歌合せ、小町々々と、穴があるやら、內證がどうやら、手習草紙あらひも戀の〱、世の中丸うてよしよし。

みつ　ほんにお雪さん、ちと爰へ。

四郎　申し、お雪と申しまするか。

みつ　アイナウ、お雪さまといふは、旦那のお妾。

四郎　アノ、雪と云ふのが。

みつ　コレおさの、お雪さんに、ちと爰へ來て、話しさつしやんせと云うてたも。

さの　畏りました。申し、奧樣が仰しやる事を、お聞きなされましたか。

小雪　アイ〱、そこへ參じませうわいなア。

〽見つけられたる二人が顏は、赤らむ月には照る兎、雪や霰と隔つた仲も、解けて櫻の花ざかり、世の中丸うてよし〱。

トこれ一杯におさの、手燭を小雪に見せながら降りて來る。四郎次郎、小雪、顏見合せ　）

四郎　ヤア、われは。

小雪　ヤア、お前は。

〽引くか引かぬかは二挺の弓、引かねば分らぬ三十三間堂、したりや〱と四手ふり立てゝ、知らすは矢數の手際ぞや、當りを見に來た人の山〱、世の中丸うてよしよし。

四郎　乳貰ひに來た親も子も、知らぬとは云へまいがの。

小雪　エヽ。ハア、、、。

みつ　コレ〱〱、乳貰ひどの、馴れ〱しい、こりや何事。お雪さんも、その顏付は何事ぞいなう。

トこれにて小雪、四郎次郎こなしある。

今こなさんの子に乳を飲ましたは、此方の旦那が大事のお妾。粗相云やると免しませぬぞ。

皆々　心を沈めさしやんせいなア。

小雪　この子をあの人に渡しやいなう。

さの　ハイ。

大正二年五月新富座上演　市川左團次の九郎助

坂東秀調の小雪　尾上多見藏の藤三郎

實川延若の四郎次郎

ト赤子を四郎次郎に渡す。四郎次郎、赤子を引ッたくる。

ハア、、この人は狂人ぢやさうなわい、

四郎　ハイ、狂人ぢや、狂人でも云ふ事は、眞直な事を申しまする。奥樣、皆樣、このちつぺいは、私しが悴ぢやござりませぬわい。

みつ　この子を自身の子でないとは

皆々　そりや又どうした事でいなう。

四郎　されば、お聞きなされて下さりませ。又そこなお妾樣は、耳の穴を浚へて聞かつしやれ。元私しは相應な所の若旦那、大小の一腰も差した身の上、ところが假の云ひ號けがあつて、私しが若氣の誤まりから、遊所通ひのその果が御勘氣うけ、時々顔見に行くと、例へ勘當の身の上なれど、御歸參なさるゝまでは、形は女、心は男、坊主とも、身を堅う持つて、勘當のゆりるまでは、優しい詞はかけぬと吐かしたわい。ア、、世の中に女房ほど深切な者はない、あのやうに堅くろしうやつてくれるはおれが爲と、喜んだはみな自惚れ、つれなうしをつた筈ぢや。コレ此やうな餓鬼まで、どこの奴ぢや知らぬが、産ましやがつたぢやないかい／＼。おれもこの大坂へ來て、この稚子を貰うたところが、肌の守が證據になつて、讀んで見れば、その云ひ號けの女房。現在男が只の一夜さへも寢た事もないうち、産み居つたこの悴。間男の小悴と思や、腹が立つて／＼、エ、、けたいの悪い。

ト小雪、始終術なきこなし。

みつ　そんならその子は

皆々　小雪さまの。

みつ　イヤコレ、用があらば呼ぶ程、其方衆は次へ行て休息しや。

皆々　畏まりした。

ト奥へ入る。

みつ　ハテ、入組んだ物語りを聞きました。コレ、お雪さん、をかしい話しぢやないかいなア。

小雪　成る程、世にはよう似た事の話もあるもの。わたしの心安うした女中さん、元は歴々のお家に片附き、祝言せねど親々の、云ひ號けの殿御もありながら、放埓ぢやによつて御勘當のお身。そのお家になければならぬ、一品紛失を苦にやんで、舅御樣はお果てなされ、母樣は人手にかゝつて敢へない御最期。また小舅御樣の生死も知れず。この身一つに。イヤサ、その女子獨り、所詮この

世に永らへて、なに樂しみのない體、淵川へ身を投げんとせしを助けられ、まだ〱口へ出されぬ悲しみやら、耻かしい目に遭うた事、云ひ號けの殿御に云ひ譯がならぬと、弱る心を勵まして、せめてなければならぬ一品を詮議して夫に渡し、肌身を穢した云ひ譯には。

ト懷より剃刀をソツと出し、愁ひにて四郞次郞の顏を見る。四郞次郞、ぎしみながら脇見する

サア、さういふ譯を御存じなければ、腹の立つは御尤も永らへる程この身の耻。未來の緣を待ちまする。さうぢや。

ト自害しようとする。お光止めて

みつ　お雪さん。こりや何事。マア〱待たしやんせ。

トよろしく止める。藤三郞、町人の拵らへにて、奧より出掛けて居て

藤三　イヤお光、必らず小雪どのを死なすまいぞ。

小雪　ヤア、あなたは。

みつ　ほんに旦那樣、いつの間に。

四郞　そんなら、これが爰の旦那か。

藤三　アイ、岩木屋の藤三郞といふ町人。堺から戻りがけ切り戸から最前入り、何もかも樣子は聞いたわいなう。

四郞　南無三、こりや堪らぬ。

ト駈け出さうとする。藤三郞止めて

藤三　イヤ、主の知れぬその子、爰に置いて、云ひ號けあるあの小雪を、連れて去んだがよいわいなう。

四郞　そりや又どうして。

藤三　狩野祐勢どのゝ惣領、四郞次郞元信どの。

四郞　イヤ、私しは花屋金五郞といふもの。

藤三　イヤ、隱さつしやるな。京都へ去年の春上つた時にこの小雪を連れて歸つて、この野戸町で圍うて置いた謂れ因緣、四郞次郞どの、疑ひ晴らして聞いて下され。元わしが實母は、宗丹さまといふ畫所へ、腰元奉公に參りしところ、今井市助といふ若侍ひと忍び合ひ、其うちに市助どのは吾妻へ行かれ、後に殘つたおれが母者人、腹にはどつさり七ヶ月、おろし藥を人知れず飮まんとせしを止められし伏屋さまと申すは、宗丹さまの獨り娘、お庇でこの世へ生れて來た藤三郞。その後母者人も相果てられ、わしはこの岩木屋へ丁稚奉公、旦那藤右衛門さまの臨終の際の御遺言、娘お光を妻にして、相續頼むの御一言が直ぐに往生。何が御遺言を忘れず、夫婦仲よう暮らすうち、段々延びるこの身代。仕合せよしの

トお光と顔見合せ、こなしあつて
何が去年の京行きに、伏屋さまには狩野祐勢さまの後添の奥様に、お入りなされしと聞いての嬉しさ。

みつ　そのお禮参りと、祇園さまへ詣つて戻るさ、眞葛ケ原にて女子の泣聲、何事やらんと行つて見れば身投げの有様。助けて三條の宿まで連れて戻つたは、この小雪さん。

藤三　その身の素性を詳しう聞けば、大恩ある伏屋さまの義理あるお娘。即ち元信どのと云ひ號けはありながら、身持ち惰弱に勘當受けられ、家出の折柄、長谷部雲谷とやらの横戀慕、その上まだ〳〵云ひ兼ねた身の誤まり、元信さまへ云ひ譯なし、どうぞ殺して下されと、死神の附いた有様。いま死ぬる命をわしに預けて置くがよいと大坂へ連れ歸り、この野戸町に妾宅といふ表向き。いつの程にか小雪どのが懐胎、誰れが胤と知れぬにつき、いよいよ死ぬる覺悟したと、見た目は何と違ひはせまいがな。サア。そこを思うて腰元を大勢附けて、難なく産まし、世間へパツとならぬうち、なんでも稚子を里に遣り早うこなたを尋ね、首尾よう夫婦にさす心。それも以前の恩返し、廻り廻つて、その子の貰ひ手は、現在の云ひ號けの元信どのとは、釋迦も孔子も御存じない事、意地くね悪う物が入組み、稚子の素性の知れたからは、四郎次郎どの、腹は立たうが料簡して、元の女夫になつて進ぜて下され。

四郎　聞けば聞く程、忝ない藤三郎どのゝ志し。コレ小雪、どういふ仔細で、この子を産んだ。その譯どうぢやいなう、

小雪　こればかりは、あまり恥かしいお話しなれど、この身に積る因果話し、お聞きなされて下さりませ。忘れもせぬ父様の、五十日の忌日に當り、四郎次郎さまのお目にかゝり、お歸し申したその日の騒動、悪事一味の長谷部が門弟、日頃わたしを口説くを聞き入れぬ、その腹立ちを根に持つて釣出し、いろ〳〵と揉み合のうちに、思はず脾腹を打つて、氣を失ひし眞葛ケ原、誰れかは知らねど無體の狼藉。相手は逃げて行くへは知れず、所詮生きては居られぬと、あたりの流れに身を捨てうと、立ち寄る時に、お光さまがお助け下され、段々と情のお詞に、惜しからぬ命を永らへ、其うちに産み落したはその幼な子。この身の因果と云ふものか、恥かしい恐ろしい身の上でござんすわいなア。

四郎　ムウ。すりや小雪が産み落したこの幼な子は、親人の忌日の夜、匠葛ヶ原の畑中で、氣を失うたうちに、思はず出遇うた男の情を孕んだ。アノ匠葛ヶ原で。ヤ、、ヤ、すりや小雪、その夜の男は某ぢやわい。
小雪　エ、。
みつ　そりやマアどうして。
藤三　どいいふ譯じ。
四郎　されば、その夜の騷動は知らず、小雪に貰うた着類をば金にして、それを路金に一軸の、詮議の爲に大坂へと、通りかゝつた畑中、大勢どさくさ眞の闇、手にさはつたは慥かに女、氣を失うて正體なき、女の肌のやはらかに、觸るにつけて心の煩惱。
ト皆々も顏見合せ
そんなら女は其方であつたか。
小雪　しつくり合うた詞の割符。
みつ　男と云ふも元信さま。
藤三　女といふは云ひ號けの
四郎　この小雪が匠葛ヶ原で
小雪　氣を失うて思はずも
四郎　たつた一度のてんがうが
みつ　身持ちになるもこの浪花で
小雪　廻り廻つて
藤三　今日の出會ひ。
四郎　搦んだ緣で
四人　あつたよなア。
藤三　それに付けてもあなたのお身持ち、人に越えて御發明と聞くばかりか、氏も系圖も正しきに
みつ　何ゆゑお身を持ち崩し、外を内なる御放埒は。
四郎　今さら云うては云ひ譯がましう聞ゆれど、弟狩之助は父母の愛子、狩野の名稱を讓らんと、惰弱に身を持ち、下素付合ひ。其うちに傳書の紛失、父の最期。南無三方と思ひしが、直さま諸國を經めぐつて、傳書の行くへを搜し求め、弟に與へんと、さてこそこの地へ迷ひ來て、阿房を盡すも寶の詮議。廻り廻つて今日の始末、面目次第もござりませぬ。
藤三　斯う物が分る上は、いま改めて藤三郎が仲人となり聟引出のこの一品。ソレ、小雪さま。
ト袱紗包みの一卷を出し、小雪に渡す。小雪は四郎次郎に渡す。開き見て
四郎　誠にこれこそ狩野家の重寶。

小雪　日頃尋ぬる家の傳書。
兩人　エヽ、忝ない。
ト戴く。この時兵内傳兵衛出て
傳兵　それを。
トかゝるを立廻つて双方へ投げる。
みつ　それを改めて御一緒に。
四郎　何から何まで
小雪　お心添へ。
藤三　お乳母を添へて嫁御寮。雪の肌や雪あかり、とつくり顔を
ト藤三郎は四郎次郎、お光は小雪、双方より突きやるこの時傳兵衛兵内、「うぬ」とかゝる。四郎次郎立廻り、傳兵衛を下手へ、兵内を上手へ突きやる。四郎次郎に小雪取付く、お光は傳兵衛の目を押へ、藤三郎は兵内を押へるが、双方一時の途端にて、木の頭。
御覧なされませ。
ト三方よろしく引張り。

きざみ幕

花雪戀手鑑（終り）

聞いて鬼門の角やしき瓦町と
や油屋の内の趣向を不束な
がら飾りかへたる評判々々

新板色讀販

二冊

文久二年五月守田座上演番附

新板色讀販　──ちよいのせの善六

瓦町油屋の場
同土藏の場

役人──油屋後家、お峯。同、娘お染。同丁稚、久松。同下女、お鳥。同、おゆう。同、おさん。同手代、米吉。同、千助。同、喜七。判人、松六。油屋多三郎。藝者、お糸。松屋源右衛門。小道具屋利兵衛。山家屋淸兵衛。同丁稚、長吉。油屋番頭、善六。

竹本連中

本舞臺、三間、通し常足の屋體、眞中、暖簾口、上手、押入れ、まいら戸明け立て。諸國狀差し、この前帳場格子、下手、油樽の書割り、軒通し、入り山形に、太の字、油屋と染め出しの紺暖簾をかけ、屋體の下手黑板塀、眞中三尺、山太貫店と染め出しの長暖簾、この向う土藏、よき所へ用水桶、例の所門口、二重に下女おとり、おゆう、おさん、縫ひ物を取散らし、平舞臺へ松六、そぼろなる形の上に單羽織を引ツかけ、理窟ばつて居るを、手代米吉、千助、喜七、若衆の拵らへにて宥めて居る見得。通り神樂唄にて、幕明く。

米吉　さう仰しやれば、一々お前さんの方が御尤もでござります。

千助　どうぞ御料簡なすつて下されませ。

松六　料簡しろとばかりぢやア譯が解らねえ。妾の内へ奉公に寄越した小助を、何が越度で急々に暇を出したか。今年で丁度九年勤め、來年は年が明くから、いゝくを付けて追ひ出したのか。例へどれ程の仕落ちがあらうとも、仕着せばかりくれて追ひ出して濟まうと思ふか。

三人　ヘイ〱、御尤も樣でござりまする。

松六　一年五兩詰めの奉公にしても、五九四十五兩付けて下さるが當り前だ。聞けば妾の店は、女主ださうな……サ、主に逢はせるか。愚圖々々吐かすと、奥へ踏ん込み、引摺り出すぞ。

三人　イエ、左様なすつては。
松六　エヽ、措きやアがれ。
　ト突き放し、二重の方へ行かうとする。
米吉　コレ、おいら達が店に居て、奥へ行くのを見て居る
　ものか。
千助　そんな不法を云ふなら
喜七　構ふ事はねえ、叩き〆めろ。
三人　エヽ、やッ付けろ〳〵。
松六　洒落れやアがるな。
　ト三人を振り拂ひ、二重へ上がる。この時、おとり、
　木綿針にて、松六の足を強かに突く、これにて足を抱
　へ
アイタヽヽ、サア、おれを切りやアがつたな。合點し
ねえ〳〵。
　トこの時、おとり、平舞臺へ下り
とり　この人は恐ろしい、強請りを云ふんだぬ。
松六　ナニ、強請りだと。
とり　サア・わたしが縫ひ物をして居る所へ踏み込んで。
　自身に木綿針へ突き當り、切つた〳〵とは、どこを切つ
　たのだ。大きな聲に恟りするやうな女子ぢやと思ふか。

木綿針で突いたに違ひない。木綿なされとあやまらぬか
いなア。
松六　成る程、こりやア、おれが出損ないだ。料簡してく
れ〳〵。
とり　それ見さんせ。療治の仕方はさま〴〵あるが、針が
いつちきくものぢや。あのやうに逆上せて猛り立つて居
たが「ツイべた〳〵ぢや。サ、ヂッとして居て、其方を
向いて、それ〳〵〳〵。
　ト松六の脊中へ針をチョイ〳〵と立てる。
松六　アヽ、痛え〳〵。
とり　痛くなくては効きやしないよ。
松六　コレ、爰に居る若い者どもは、先刻からおれが譯を
云ふに、御尤もだ〳〵とばかり、目鼻の附いた徳利を見
るやうな奴等だ。
とり　サア、油店に徳利がないと困るよ。
松六　ヤア、お主はどうやら話しの解りさうな女ゆゑ、今
おれが云つた一部始終を、内儀さんに云つて、五兩詰め
の九年、五九四十五兩貰つて來て下され。
とり　どこの女郎衆かえ。
松六　エヽ、この中まで奉公して居た、小助と云ふ若い者

の事よ。
とり　オヤ、年季者に給金があるかえ……イヤサ、その爲に年々お仕着を下され、十年立つと、それからが給金取り、荷物も下げるのではないが、お內儀さんが情深いゆゑ、あの男に付けて渡してやつたぞえ。
松六　コレ、古風な事を云ふな。仕着ばかりで勤めて、ましよくに合ふもんぢやねえ。さうして、あの小助は、なんの科があつて暇を出した。請け人のおれを呼んで、一通り、なぜ譯を云はねえのだ。
とり　サア、それは……と云ふだらうと思ふが、所を云はぬな。一體あの小助どのは、爰の內へ幾つの時奉公に寄越しなさんした。
松六　さうよ、十三。
とり　エ。
松六　七ツ。
とり　お月さんぢやあるまいし。コレ、わしは小助どのより百年も前方に、爰へ奉公に來て、何もかも知つて居るして、あの男の生國は。
松六　エ……あの生國は。
とり　よく存じ申さず候ふかえ。さうして、お寺はえ。

松六　お寺は駒込吉祥寺。
とり　コリヤ、出鱈目を云ふまい。昨日本郷の請け人を呼んで、引取を取つて濟んでしまうたに、わりや騙りぢやな。
松六　ナニ、請け人が來た。
とり　若い衆、この野郎を町內の會所へ引摺つて行て、御宿老に詮議してもらひなさんせ。
松六　なんのおれが。
三人　やかましいわえ。うしやアがれ〱〱。
ト三人、手取りにして擲ちながら松六を橋がゝりへ引立て入る。
とり　エヽコレ、隙な時だと、もつと臺詞を云ふのだが、お染さまの御婚禮で忙がしいゆゑ。
ゆう　御婚禮と云へば、阿母樣の仰しやり付けゆゑ、此やうにいろ〱お支度をして居れど、お染さまは、なんぢやらお氣合ひが悪い御樣子。
さん　オヽ、それ〱、昨日から一間へ入つて、いつそ濟まぬお顏付き。あのやうに御婚禮をお嫌ひなされるは、どう云ふ事でござんせうな。
とり　お前方はなんにも知らぬゆゑ、さう思ふのも、尤も

でござんすが、山家屋の淸兵衞さまと云ふ、歷としたお聟樣を、お嫌ひなされるには、ちつと譯があるわいなア。

ゆう　ナニ、譯があるとわえ。

とり　お染さまには虫が付いて居るぞえ。

さん　成る程、お少さい時から虫氣があると云ふ事は、わたしも聞いて居るわいな。

とり　アレサ、その虫ではない、男と云ふ虫ぢやわいな。

ゆう　そんなら外に云ひ交した

とり　サア、實は久松といふ虫が、お染さまにくッついたゆゑ、餘所外へ嫁入りはせぬお心。こりや姫御前の操ゆゑ、さうなうては叶ふまい。わたしなぞも恥かしながら、あの番頭の善六さんに、ちよつと一膳振舞うて、それから、心で操を立て、今日この頃は男猫でも抱いた事はないわいな。

ゆう　モシ、おとりどん、お前は其やうに心中立てゝも無駄な事。あの善六さんは、お染さまに首ッ丈、どうぞこの文を渡して口說いてくれと、わたしへ賴み……ソレ、この通りぢやわいなア。

ト文を出して見せる。

とり　ナニ、善六さんの文だえ。ドレ〳〵、ちよつと見せなさんせ。

ト手に取り見て

お染さま參る、善六より……エ、モウ、氣の多い男の惡性。わたしや口惜しい〳〵わいなア。

さん　ほんに、男の心と秋の空、腹の立つのは尤もでござんす。

ゆう　併し、どのやうに思うても、お染さまを手に入れようとは及ばぬ事。こりや大丈夫でござんすぞえ。

とり　成る程、こりや雲に梯け橋、及ばぬ鯉の瀧登りぢやわいな。

さん　それはさうと、縫ひ上げた物を藏へ入れて、押し板をかけて置けと、阿母樣が仰しやつたゆゑ、お前方も手傳うて下さんせ。

とり　アイ〳〵、承知ぢやわいな。

ゆう　そんならおとりさん。

三人　ドレ、片付けてしまひませう。

ト稽古唄にて、三人、縫ひ物を纏め、奥へ持つて入る

これより、床の淨瑠璃、

〽折に隔ての質見世より、思案とり〴〵久松は、心にか

かる屋の內、奧口窺ひ。
ト此うち、下手、質店の口より、久松出て、門口を入り、奧を窺ひ思ひ入れあつて

久松　昨日から樣子を聞けば、お染さまは山家屋へ、もう近くに嫁入りと、曠れの小袖の支度とり〱、恨みのたけを云はうもに、元よりこの身は大外れた、お主樣の娘御と、勿體ない不義徒ら。事荒立になば在所にござる、親仁樣にも難儀をかけ、不埒に不埒を重ぬる道理。恩と義理とに何事も、こりやチッと辛抱せにやならぬわいなア。

へその身を悔む喞ち言、下女のおとりは氣も輕く。
ト合ひ方になり、奧より、おとり、押し板の楔を持ち出で來り。

とり　オヽ、久松どん、先刻にから尋ねて居たに、なんぼ油屋の丁稚でも、さう油を賣つてはならぬぞえ。

久松　イエ〱、わしや質店で、張合ひして居たのぢやわいの。

とり　いま阿母樣が、誰れぞ店の者を、廣小路まで使ひにやれと仰しやつたが、もしお前行くなら、その次手に三太郎節を買うて來て下さんせ。よい子ぢやなア…… まだある〱。この楔は、お仕事の押し板に遣ふのぢやが、もう一分通り削つておくれと、賴んで來ておくれよ。
ト楔をそこへ置く。
ソレ、三太郎節のおあしだよ。
ト巾着より錢を出す。この時、おとり、以前の善六の文を落す。久松、錢を受取る。

久松　ハイ〱、承知しました。もしわしが行かずば、外の者に賴んであげるわいの。

とり　どうぞ賴んだぞえ。
トこの時、奧にて

ゆう　おとりどん〱、阿母樣がお呼びなされる。おとりどんおとりどん。

とり　アイ〱〱、アイ〱のアイ〱……エ、モ、忙しない事ぢやわいなア。
トおとり、ソワ〱して、奧へ入る。

久松　ハテ、いつもながら氣の輕いおとりどん、それには引替へ、この身の不埒。恩と義理とに絡まれて、ふさがる胸の晴れやらぬ……ア、どうぞ思案は、ない事かいなう。

へまた繰り返す獨り言、同じ思ひにお染は立出で。

ト奥よりお染、好みの拵らへにて

そめ　オヽ久松、爰に居やつたかいなう。

久松　お染さま、御婚禮の日が近附きまして、さぞお嬉しうござりませう。

そめ　エヽ、又あの人の嫌らしい。なんぼう母さんが云はしやんしても、わしや山家屋へ行きはせぬ。不孝になろと無理云うて、叶はぬ時は其方と二人、ハテ、爰ばかりに日は

〽照るまいし、どんな山家の奥にでも、女夫となつて暮らして見たさ。

飯も炊かうし、水も汲まう。女房と云うて、こちの人。

〽初心さうでも戀のみは、早き習ひと知られける。

ト取りつき、思ひ入れ。

久松　さういふお前の心なら、わしもキツと思案をきめてお光には濟まぬ事ながら、女夫にならいで、なんと致しませう。

そめ　そんなら眞實。

久松　なんの違へてよいものぞ。

そめ　嬉しいわいなう。

〽ほころびそめし梅柳、色香こぼるゝ風情なり、屈托顔に多三郎、立歸る雪駄の音。

ト兩人よろしく思ひ入れ。向うより多三郎、好みの拵らへにて出で來り、入りかけて間の惡き思ひ入れ。トド咳拂ひして入る。二人、恟りして放れる。

そみ　オヽ、兄さん、お歸りなされましたか。

多三　コレ久松、おりや濟まぬ／＼。濟まぬわいの。

ト出しぬけに、久松に獅嚙み付く。

久松　アヽ、モシ／＼、譯も云はずに濟まぬ／＼とは、何が濟まぬのでござります。

そめ　譯をお聞かせなさんせいなア。

多三　サア、二人とも聞いてたも。恐ろしい魂膽をして、お糸を請け出したれど、急に置き所に困つたを、源右衞門が呑み込んで、あの男の近しい所へ、預けてくれたわいの。

久松　それはマア、御安心でござります。

多三　安心ぢやと思うてか。その晩から行て、お糸に逢はうと思へど、內が知れぬわいなう。

久松　そりや、源右衞門どのにお聞きなされたら、ツイ知れさうなものでござりまする。

多三　サイナウ、それから毎晩々々源右衞門の所へ行て聞

くと、品川へ行つたの、ヤレ新宿板橋深川のと、ちりんちりんやにでもなりやしまひし、川放題な店の者の挨拶。わしや口惜しうて／＼、今日で十日餘りも預けた儘逢はぬゆゑ、途方に暮れて居るわいの。

久松　それはマア、御心配でござりませう。なんでも預けてから、あなたに逢はせぬのは、こりや曲事でござりまする。

そめ　さうして兄さん、お前、どこぞで占ひでも見てもらひなさんしたか。

多三　サア、昨日も藏前で見てもらうたら、これはなんでも生物で、逃げ去つたのでござらうと云ふゆゑ、よう當りましたと云うたら、この獸物には角が生えて居やうと云ふ程に、イヤ／＼、さうではないと云ふも氣の毒、よくよく考へて見たら、前差しを兩方へ差し飾つて居るゆゑ、角と判斷をしたと見える。どちらの方へ行きましたと問うたら、この牛はツイ近所で草を喰つて居ますと云うたわいの。

久松　あなた、牛ではない、柳橋の藝者と仰しやればよいに。

多三　イヤ／＼、さうでない。餘所へ預けられて、毎日毎日喰つては寐、寐ては喰ひしたから、もう／＼牛になつたかも知れぬわいの。

久松　マア、お茶をお上がりなされませ。

ト丸盆に茶を汲んで出す。

多三　どの道畜生のやうなあのお糸、例へどこに入つて居らうとも、ちりん／＼屋に屆けても、狀の一本位は寄越されぬ事はあるまい。大方外に云ひ交はした客があつて、毎日々々其奴とふざけ廻つて居ると思へば、おりや口惜しくて／＼、エヽ、口惜しいわいやい。

久松　お道理でござります。私しも折り／＼お供いたして、川長や青柳でお目にかゝりましたが、お糸さんが其やうな不實なお方ではござりませぬが……こりやなんでも、源右衛門の惡企みでござりませう。

多三　サア、わしもさう思ふゆゑ、これから行て源右衛門の内へいしかつて、居所を聞かにやならぬわいの。

ト立ち上がるを

久松　そりや御尤もでござりますが、そのお腹立ちでお出でなされては、どのやうな事にならうも知れませぬ。マア／＼お待ちなされませ。

多三　イヤ／＼、留めてくりやるな。なんでも行て、詮議

をせにやアならぬ〳〵。

そめ　イエ〳〵、お前はやられませぬ。

多三　エヽ、放しや〳〵。

ト三人爭ふ。此うちバタ〳〵になり、向うより、お糸藝者の形、しどけなき體にて、手拭を吹流しにかぶり足早に出て、後先を見廻し、直ぐに舞臺へ來り、門口をソツと覗き見て

〽爭ふ中へ徒歩裸足、お糸はいそ〳〵、慌てふためき門の口。

いと　多三郎さん、そこにでござんしたか。

久松　ソレ、參りました。

多三　來たとは。

久松　サア糸さんが。

多三　ナニ、お糸がどこへ來た……イヤ〳〵、噓々。わしを騙すのであらう。

ト外を見て

薄野良牛め……畜生め。エヽ、口惜しい〳〵。

ト打ち叩く。兩人、よろしく引分ける。

おのれ、なんで今日まで便りせぬ。コレ、わしや知り拔いて居るぞや。大方勝手な男を呼び寄せて、夜も晝もとち狂つて居をつたに違ひはなわい。

久松　ハテマア、お靜かになされませ。爰までお出でなさるゝ程の事、お糸さんの仰しやる事も、お聞きなされませ。餘りお聲が高うござりまする。

多三　サア、高からうが安からうが、相場にかゝつた女子ぢやない。

いと　サア、お前の腹立ちは尤もでござんすが、それよりわたしが悲しさ。中の鄕とやらへ預けると云うたは噓、深川の寺町とやらの裏手二階へ追ひ上げて、怖らしい亭主が張り番。あの源右衛門が夜晝來て、多三郎は心が替つて、どうぞお糸が手を切つてくれと賴まれた、元より心をかけて居るこの源右衛門が、女房にする程に、得心して抱かれて寐いと、付きに付いて口說かるゝその辛さ見す〳〵の噓と知つて居るゆゑ、身も世もあられず、別れてから今日まで、泣き續け、便りせうにも、そこの內の亭主が、ちよつとの間も離れねば、手紙を書く事もならず、昨夜から今日まで、觀音樣へ御願をかけ、爰の二階に居る事なら、命を取つて下さりませと、お願ひ申した利益で、ついにちよつとも離れぬ亭主が、風呂へ行た留守、どこをどう逃げ出したやら、夢中で爰まで來たので

ござんすわいなア。

多三　そんならアノ源右衛門が……憎い奴ぢやなア。

いと　さぞお前が腹立つて居なさんせうと、思ひ暮らして居たわいなア。

久松　それ見なさんせ。私しが云うた通り、人に身請けさせて置いて、われが自由にせうとは、恐ろしい太いお方ぢやなア。

多三　併し、此やうにお糸が云ふけれど、無理往生に何をした事やら。

いと　エ、モ、疑ひ深い。その心なら、この思ひはせぬわいなア。

多三　そんなら、ちよつと吟味するぞよ。

いと　勝手にしなさんせいな。

多三　サア、爰へおぢや。

ト引寄せる。

いと　エ、モ、お二人さんの見る前でなんぢやぞいなア。

多三　イヤ〳〵、見て居ても大事ない。この二人も、今も今とて、引ツ付いたりくツ付いたり、わしや大分貸しがあるわいなう。ナウ、お染。

そめ　知らぬわいなア。

久松　イエ〳〵、御尤も様でござりまする。

多三　ソレ、尤もぢやと云うてぢや程に、遠慮する事はない。

いと　それぢやと云うて。

多三　ヘテ、グツと此方へ。

ト引寄せる。

いと　斯うでござんすか。

ト久松、脇を向き、算盤を取つて。

久松　ドレ、ちよつと帳〆め。

多三　此方は抱きしめ。

ト抱きしめる。

いと　エ、モウ、恥かしいわいなア。

そめ　久松、其方も此方へ寄りやいなう。

ト唄になり、向うより、山家屋清兵衛、羽織、着流し一本差しにて、後より、丁稚長吉、供をして直ぐに舞臺へ來り

清兵　コレ長吉、おれはちつと手間が取れる程に、てまへは奥山の見世物でも見て來い。

長吉　ヘイ、私しは芝居の方がよろしうござります。

清兵　そんならいつもの所へ行て。

長吉　ちよいと一幕でよろしうござります。
清兵　早く行け／＼。
ト長吉、下手へ入る。此うち四人うろたへ、こなしあつて、お糸を二重の押入れの内へ隱し、戸を締める。
ハイ、御免なさい。
ト門口を明ける。三人、ウロ／＼して、多三郎、傍かに坐り
多三　清兵衛さまでござりましたか。ようお出でなされました。
清兵　オヽ、多三郎どの、いつも健かでめでたいね。
ト云ひながら、以前のおとりが落したる文を拾ひ、袂へ入れ、あたりを見廻し
なんだ、久松も、お染もソワ／＼して。
久松　ヘイ、ハイ、只今これへ。
多三　オヽ、牛が參りまして。
清兵　ナニ、牛が。
多三　イエナニ、蟲が出ましたゆゑ、やう／＼の事で捨てましたのでござります。
ト奥より、おゆう出て
ゆう　山家屋の旦那様、ようお出でなされました。

久松　おゆうどん、阿母樣へお知らせ申したがよいわいの。
ゆう　アイ／＼、合點ぢやわいなア。
トおゆう、奥へ入る。久松、莨盆を清兵衛へ出す。
清兵　この節は質店の方も、さぞ忙しからう。それに馴れた店の者に暇が出たとやら。
多三　サア、よう働らくアノ小助と云ふ若者、母が段々と調べましたら、大外れた太い奴ぢやさうにござります。
清兵　イヤモウ、女主ゆゑ、兎角目を拔きたがるもの。多三郎がしつかり店を預かつて、阿母にも樂をさせねばならぬぞえ。
久松　お茶をお上がりなされませ。
清兵　イヤ、構やんな／＼。
トこの時、奥にて
みね　本石町の息子どのがござつたとかや。
ト合ひ方になり、お峯、長煙管煙草盆を持ち出で
清兵　オヽ、伯母御には、この中風を引いたと聞いたが、少しはお心ようござりまするかな。
みね　早速尋ねて下さんして、有り難うござんす。やうやう拔けまして、もうさつぱりと心ようござります。それ

に又お薬とても、ずんと健か。今日この頃は、こなたの所へ縁付ける支度取り／＼。マア、何にせい、奥へござつてちよつと一口。

清兵　イヤ／＼、必らず／＼御心配下さりますな。今日は浅草邊まで、餘儀ない事で參りましたゆゑ、ちよつとお立寄り申しましたのでござります。

みれ　それは、ようお尋ね下さりました。いろ／＼お話し申す事もあり、何にしろ爰は店先。マア／＼奥へ、

清兵　イヤ／＼、決してお構ひ下さりますな。爰が勝手でござりまする。

〽もてなす折から門の口、懐手して源右衛門。

ト唄、通り神樂になり、源右衛門、羽織、着流しにて、足早に出で來り、直ぐに門口へ來り

源右　サ、多三郎の生盗人め。爰へ出ろ。

ト云ひながら、門口を明け。

ヤ、そこに居たな。貸した物は戻さずに、なぜお糸を盗み出しやアがつた。サア出せ、出しやアがらねえか。

〽近所へ響くわなり聲。

みれ　オヽ、誰れかと思へば松屋の源右衛門さん。ホヽヽお前、どうおしだ。酒機嫌であらうし、多三郎と仲好しのお友達ゆゑ、心安立てゞもござんせうが、冗談にも生盗人のなんのと、世間へ聞えても外聞が悪うござんす。なんで又、伜が生盗人でござんすえ。

源右　オヽ、阿母、爰にお出でか。大きな聲をしたのは、あんまり腹が立つから、ツイ怒鳴つたのだ……斯う云ふ譯だ。この多三郎が惚れ込んで居る、柳橋のお糸と云ふ藝者に、田舎の客が付いて、是非請け出して遠い國へ連れて行くと云ふを、それを遣つては多三郎が、首を縊るの尻を〆めるのと、手放しでオイ／＼と泣いて居る所へ行き合せ、友達のよしみ、甲が舍利になつても、此方へ身請けをさすから、案じるなと云つたところが、今が今の手詰め、折よく持ち合せた定家の色紙、捨賣りにしても五百兩が値打の代物、江戸ツ子の氣前を見せて、すつかりと貸してやつた、その色紙を質に置いて、お糸を請け出し、死なうと云ふ命を助けたは、皆、おれがお庇だよ……コレサ、茶碗を割つたやうな顔をして居ちやアいけねえ。おれが深切はどうするのだ。

みれ　なんと云はしやんす。定家の色紙を質に置いたと云はしやんすか。

源右　小母さん、わたしの身にもなつておくれな。

みれ　コレ、善六が臺所に居やつた。早う呼びや。
久松　ハイ〳〵。……善六どの〳〵。
　ト呼ぶ、奥にて
善六　ハア、只今〳〵。
　ト流行り唄の合ひ方になり善六、出て
へイ〳〵、ハイ〳〵……ヨウ、これは、清兵衛さまのお出でを、一向存じませいで、御挨拶も申さず、ちよつと久松でも知らせてくれゝばよいに。今までかゝつて、樽の荷分けをして居りました……ヤア、源右衛門さまもお出でてございりましたか。また此方の旦那を、町へでも連れてお出でなされうと、マア、ちつと溫なしくして居て下さりませ。お前樣のやうな通人だとよけれど、多三郎さまは唐人……イヤサ、まだ一向おぼこでお出でなさるの、そゝのかしては困りますぜ。實に番頭の私しが心配でございりまする。
みれ　コレ善六、わが身後の月の昨日、竹村へ爲替金三百兩、取りに行た戻りがけ、質に取りまして目利きに見せましたら、五百兩にはいつにでもと、見せた色紙の箱の中は、何やら知らねども、店を任したわが身の事、如才な事はあるまいと、其まゝで置いたが、多三郎の阿房遣ひの金と知つて、なんで貸しやつた。悧巧さうにわしを云ひくるめ、わが身も一つ穴の狐ぢやな。
善六　ア、モシ〳〵、今日樣かけて、一分一厘後暗い事を致す善六ではございりませぬが、只今源右衛門さんの仰しやる通り、お若いとは申しながら、登り詰めたる色遣ひの、果は世間に有り觸れた、心中と、お覺悟なされた若旦那、船宿の若い者が、途中で私しへ知らせてくれましたれど、ア、死なば死なしやれ、そんな事に大枚の金を出しては、當年の張尻が合はぬと、おのれが身を庇ひ聞捨てにして歸つた後で、もしもの事があつた時は、お家の疵、御一統の恥、御先妻のお子ゆゑ、金錢を自由にさせぬゆゑ、あのやうな非業な死をなされたと、パツと世間で云はれては、あなたへ濟まずと、そのお叱りを合點で、成る程色紙を質に取つたは、私しが誤まり。申し譯は右の仕合せ。お主の爲ならこの體、ズタ〳〵に裂かれても、いとふやうな善六めではございりませぬ。サア、御存分になされませ。
〽云うた所は實事師、底の企みは敵役
みれ　成る程、さう聞けば、わが身に科はない。兎角憎いは多三郎……マア、それは内輪の事……モシ、源右衛門

さん、貸借りは相對づく。なんで多三郎は生盜人でござんすえ。

源右　なぜ〳〵。コレ、この證文で貸したは後の月の二十四日、三十日の日數のうち、色紙を戻さずば、請け出したお糸を其方へ渡さうと云ふ文言。その女も置き所はなし、これも又おれが厄介。雜用一切おれが送つて居るうち、日限は切れる、色紙は戻さず、それゆゑ約束通り、お糸を此方へ取らうと思へば、今朝どつちへか逃げ出してしまひ、大方こりやア多三郎が、手を廻して連れ出したのであらう。サア、生きたものを盜んだゆゑ、生盜人と云つたが無理か。オヽ、生盜人だ〳〵〳〵。

みれ　これはしたり、聾ではない。もそつと靜かに云うても解るわいな。

源右　イヽヤ、大きな聲は地聲だわえ。

みれ　さうして、その糸とやらが駈落ちしたは、忰が連れ出したと云ふ、證據でもござんすかえ。

源右　その證據は、預けて置いた所に居ぬのが證據だ。

みれ　ホヽヽヽ、そりや證據にはなりますまい。

源右　なぜならねえ。どう云ふ譯でならねえのだ。

みれ　サア、そのお糸とやらも、定めて手足が付いてゞあらうな。

源右　手足がなけりやア、のつぺらぽうだ。

みれ　それなれば、どこへなと、行きたい所へ行くまいものでもない。發明なお前方と違うて、愚かしい此方の忰と云ひ、女主のわたしゆゑ、大きな聲で脅したら、魂ひが引ツくり返り、お前の思ふ壺の中へ、落ち込むであらうと思ひなさんせうが、わたしも後家を立て通し、二軒の店を曲り形、煙を立てゝ行くからは、そんなでゆくのぢやないわいなア。

〽ぐつと詰まつて源右衞門、うぢ〳〵もぢ〳〵目と目を見合せ、番頭善六戸棚を顋で、教へる色目見て取つて。

ト源右衞門、ウロ〳〵して善六の方を見る。善六、押入れの方を目交ぜして教へる。

源右　ハヽヽ、ハヽヽ、ハヽヽヽヽヽ、イヤ、潔白な挨拶。さらば證據をお目にかけよう。

〽戸棚を目がけ立ちかゝれば。

トつか〳〵二重の方へ行かうとする。久松、お染、うろたへ思ひ入れ。

久松　モシ、源右衞門さん、なんとなされます。

源右　何をするのか、證據を出すのぢや。

久松　イエ〳〵、戸棚の中には、何もござりませぬ。
源右　隠す程猶怪しい。そこ退け〳〵。
ト二重へ行きかゝるを、お峯、留める。
此奴等ア顔色替へて、戸棚の内を庇やアがるが、いつそ引摺り出して。
久松　イエ〳〵、締りしてある戸棚を、猥りに明ける事はなりませぬ。
源右　あんな意地の悪い事を吐かしやアがる。
善六　コレ久松……念晴らしぢや。明けさせるがよいわな。
源右　エヽ、どきやアがれ〳〵。
ト振り放し行くを、久松、お染、留める。
みれ　これはしたり、わが身達が留めるゆゑ、そのお糸とやらを隠してゞもあるかとの疑ひ。その代り、明けて見せて居ぬ時は、その分では置かぬぞよ。
源右　サア、その時は、なんとでもしなせえな。
善六　それがよろしうござります。
ト立ちかゝつて戸棚を明ける。以前のお糸、顔見合せ悔りして又シャンと〆める。
源右　そりやこそな〳〵。

みれ　てもマア派手な……派手なお染が嫁入り小袖、聟どのにさへ見せぬ先、外の者に見せともないは娘が道理。エヽ、マ、なんに付け彼に付け、憎い忰め。アヽ、なんとせう是非がない。聟どのゝ手前、面目もなけれども、人様に損かけては、わしが済みませぬ……善六、藏へ行て色紙を取つて來や。
善六　ヘイ〳〵、畏まりました。
ト善六奥へ入る。
みれ　ハテ、借りた物さへ返せば、お糸とやらの身の上にも、云ひ分はあるまい。ナウ、源右衛門どの。
源右　知れた事。貸した物さへ返りやア、云ひ草があるものか……どいつも此奴もいけツ太え奴だ。
ト莨盆を扣へる。善六、色紙の箱を持ち來る、清兵衛長吉を呼び、ちよつと囁き、隣の内へ入る、
善六　ヘイ、持參いたしました。
みれ　それを源右衛門さんに返してたも。
善六　畏まりました……源右衛門さん、ちよつとそこまで。
源右　アノ、おれにか。
善六　如何にも。

ト合ひ方になり、兩人前へ出る。

源右　如何にもが聞いて呆れる。

善六　サア、お前さんが貸して下された、定家の色紙、永永大きに有り難うございます。キリ〳〵持つてお歸りなされませ〳〵。

ト拋り出す。

源右　ヤイ、善六、わりやをかしな事をするな。人が深切で貸した物を、禮を云つて返すが當り前だのに……なぜおれに投打ちをした。

善六　源右衞門さん、をかしな事を仰しやるな。お前さんが御深切で、若旦那にお貸しなすつたこの色紙、有り難うございましたと、一禮述べて爰へ來たのぢや。

源右　ソレ見ろ、投げやアがつた。

善六　いつ投げましたえ。

源右　今爰へぶツ付けたぢやアねえか。

善六　これは又情ない。一禮述べて置いたのぢや。

源右　ソレ、又投げた。

善六　愚圖々々云はず、取る物取つたら、キリ〳〵とお歸りなんし〳〵。

源右　歸らねえでどうするものか。おれが物を、おれが持つて行くに、誰れが何と云ふものか。親子主從馴合ひで此奴等ア太え奴だ。

ト云ひながら門口へ行きかける。多三郎、呼び留め

多三　コレ源右衞門、待ちや。

源右　なんぞ用か。

多三　この色紙を質入れ、借りた金三百兩、貳百兩は身請けの金に遣つたれど、あと百兩は、其方に貸したぞや。それにそつくり色紙を遣つたら、其方はよからうが、此方が濟まぬ。サ、百兩の金、爰へ出しや。

源右　オヤ、妙な事を云ふな。コリヤ、狐までも化かされたか。但し、氣が違うたか……コレ、あんまり人を見縊るな。地面の二ケ所や三ケ所は持つて居る松屋源右衞門、部屋住み同樣のお主に百兩借りた……ハヽヽ、今時唐人でも、そんな寐言は云はねえ。

多三　アレ〳〵、まざ〳〵しい。

源右　イヽヤサ、なんの譯で、いつの何時に、どこの國のどこで。

多三　物覺えの惡い。湯島の天神の松金屋で、善六が出した三百兩は、其方が急に入用があるから、おれに遣はせろと、證文まで書いて今更知らぬとは。

源右　ヤイ〳〵、恐ろしい云ひがけをしやアがるな。こいつは開き流しにはされねえ……サア、多三郎、證文があるなら、なぜ出して置いて吐かさねえ。

善六　モシ、何もあんな事を云はれて、默つて居る事はござりませぬ……サヽ、早く出してお見せなされませ。

多三　オヽ、出して見せるわいの。

ト紙入れを出して證文を探し

ソレ、爰にあるわいの。

ト急いで善六に渡す。

善六　ナニ、金一兩三分……これは大七の付けでござります。

多三　オヽ、それではない、此方にある。

トまた出して善六に渡す。

善六　ナニ、棧敷代敷物代とも……こりや芝居の付けでござりまする。

多三　オヽ、違つた〳〵。

トいろ〳〵探す事あつて、トヾ白紙になつて居る證文を出して善六に渡す。

これだ〳〵。

善六　若旦那、冗談仰しやつてはいけませぬ。こりや白紙でござりまする、

多三　ナニ、白紙と云ふ事があるものか。いつぞや源右衞門から受取つたのぢや。

ト手に取り見て、恟りして

ヤヽ、こりや白紙。オヽ、いつの間にやら白紙になつた。あの時懐から矢立を出して書いた證文、しつかり爪印を捺したのに、ヤヽヽヽ、こりやどうぢや。

源右　どうだ、證文があるか。サア、あるなら見せやれ。早く出せ……出さぬか。エヽ、いけッ太え野郎だな。

ト襟髪を取つて引据ゑる。皆々心遣ひの思ひ入れ。立ちかゝるを善六、留める振りにて、多三郎を叩く。

善六　こりや若旦那を。チエヽ。

源右　なんだ〳〵、此奴等ア内中ぐるになつてする仕事だな。片ッ端から見やアがれ。中にも同類は番頭善六われも只の鼠ぢやあるめえ。

善六　チウ忠義一圖の白鼠。

源右　この鹽梅ぢやア、改めにやア受取れぬ。サ、多三郎われが付けた封印、其方で切つてそこへ出せ。

善六　そシ若旦那、早う明けて、お當しなされませ。早う早う。

多三　ソレ、切つたわいの。
善六　これを返して置いて、私しが仕様がござります。
ト中の袱紗包みを明け
ヤア〳〵、こりやなんだ。色紙が無くて、此やうな本が……ナニ、新板唄祭文……ヨウ〳〵〳〵。
源右　そりやこそ、こんなイカサマと吹替えてあるを改めずに、持つて行つたら色紙なはし……サア、盗人だ、色紙を爰へ出せ。エヽ、出しやアがれ。
トむごく突き放す。
多三　そりやあんまりぢや源右衛門、其方の手から受取つた色紙。善六が指圖で、封を付けるを、其方、見て居やつたではないか。
源右　イヤ、見ねえ〳〵。なんであらうが、われが付けた封印、そゝけもせぬを明けたれば、あの摺り本に替つて居る。それでも盗んだ覺えはねえか。
多三　でも、其方の見る前で。
源右　エヽ、見ねえと云ふに、しつこい。
多三　それぢやと云うて、わしがなんで盗み騙りをしねえ事があるものか。盗んだと云ふは、この中に色紙があるかよ。ねえのが何より證據だワ。それともあるか。
多三　サア、それは。
源右　無ければ矢ッ張り盗んだか。
多三　サア、それは。
源右　サア、
兩人　サア〳〵〳〵。
源右　エヽ、面倒だ。代官所へしよびいて行つて、盗みましたと云はせて見せう。サア、うしやアがれ。
ト多三郎へ立ちかゝる。お米、留めて
みれ　アヽ、コレ〳〵、源右衛門さん、お前の云ふのが尤もでござんす。マア、料簡して下さんせ。その代り色紙の代金三百兩は、わたしが辨まえませう。
源右　金さへ取りやア云ひ分ねえのサ。
みれ　コレ、おとりは居ぬか。おとりや〳〵。
ト奥にて
とり　ハイ〳〵……なんぞ御用でござりまするか。
ト出て來る。
みれ　おとりや、娘を連れて、奥の金藏へ行て、三百兩持つて來やいなう。
とり　畏まりました。サア、お染さま、お出でなされま

せ。

トこれにて、おとり、お染を連れて奥へ入る。直ぐに三百兩持つて出て來り、よき所へ置く。

みれ　申し源右衞門さん、色紙の代金三百兩、爰へ出せば何もかも、それでよいのでござんせうな。

源右　イヽヤならぬ。三百兩は色紙の相場、恩もひらもねえが、金の貸借りで、おれを騙りのやうに吐かしたが、如何にも心外。マア、それも大負けに負けてやらうが……サア、出してもらはう。

みれ　出せとは何を。

源右　外でもねえ、京村屋のお糸を。

みれ　モシ、源右衞門さん、そりやお前、あんまり十分と云ふものでござんすぞえ。

源右　十分とは何が十分……エヽ、さう云はれりやア癪に障る。サア、多三郎、おれと一緒にうしやアがれ。

多三　行くとはどこへ。

源右　ハテ、知れた事、代官所へ。

多三　ぢやと云うて。

源右　うぬ、行かにやア斯うして。

ト多三郎を散々に打つ。善六、留める積りにて打擲する。この時、清兵衞、ツカ／＼と出て突き廻し投げる。善六、支へる算盤にて眉間をしたゝかに打ち、二重へ住ふ。兩人、やう／＼起き上がり

兩人　アイタヽヽヽ、とんだ目に遭はしやアがつたな。

善六　お前は兎もあれ、正直正道忠義一圖の番頭善六……サア、大變だ／＼。頭まで此やうにしては、大變だ大變だ。

源右　オイ、貴樣の顏から流れる／＼。早く利上げをしろしろ。

善六　オヽ、血が出る／＼血が／＼。チヽヽヽ。

源右　ぼん。

ト丸盆を取つて出す。

善六　ヤア、バタリ。

ト善六、睨む。

源右　エヽ、何をしやアがる……ヤ、わりや山家屋の清兵衞だな。

善六　お家譜代白鼠と云はれる、この番頭を、なんで頭を割つたのだ。イヤサ、清兵衞。山家屋の清兵衞さま、山淸、ふこえてあさきゆめ見しゑひもせず、京といお方ぢや。

ト懐中より、四折りの半紙を出し、莨を掴み出し、血留めに付けて手拭にて縛る。

清兵　そんな事ではまだ済まねえ。二人ともに、三寸縄に縛し上げ、代官所へ引立てる。覺悟しろ。

源右　こりやおかしい。物は盗まれ、無實を云ひかけ

善六　お主の難儀を救うた善六、なんで代官所へ引くのだ。

清兵　オヽ、盗人猛々しいとは、うぬらが事。マア、何はさておき、借りた金を借りねえと云ふが大盗人だ。

源右　ナニ、借りた金……へヽヽ、證文があるかえ……べら坊な。

清兵　オヽ、證文はこの白紙。

源右　ハヽヽ、大笑ひだ、神武この方白紙で、金を貸借りをしたと云ふ事は聞かねえ。

清兵　オヽ、聞かずば云つて聞かせる。烏賊の墨を取つて白紙に物を書けば、半月經つか經たぬ間に、元の白紙になると云ふ事、知るめえと思ふか。お主が懐の矢立に入れて、書いて渡した兼ねての目論見……サア、貧乏揺ぎもなるめえがな。その正體を顕はすは、この白紙を火に炙れば、生臭えのが慥かな證據……こりやアする所でして見せる。さて、これからが色紙の行くへ……ソレ長吉、利兵衛を呼べ。

長吉　ヘイ／＼、畏まりました……利兵衛さん／＼

トこれにて兩人、ウロ／＼して居る。利兵衛、下の内より、道具屋の拵らへにて出で、直ぐに入る。兩人、見て驚ろき、行け／＼と突きやる。また入るを、惡いと門口の外へやる。

善六　來ちや惡い／＼。

源右　ヤア、利兵衛、何しに、とんだ所へ。

善六　コレ／＼、お主の出る幕ではない。行けと云ふ事よ。

トこれにて、利兵衛、マゴ／＼して居る。

清兵　アヽ、コレ／＼、二人ともに、下に居やれ

トこれにて兩人、是非なく下に居る。利兵衛も下手へ住ふ。

時に伯母御、昨日道具屋利兵衛とのが、珍らしい物が出たが、買はぬかと持つて來た定家の色紙、後の月松金屋で、源右衛門に借りたは多三郎、善六が引請けで、質に入れたと餘所ながら、聞いて居るに不思議な事と、出所を根を押して尋ねれば、源右衛門に頼まれたとの事。そ

れゆゑ色紙は、おれが預かつて持つて來た。わいらにイザコザ云はせぬ爲、利兵衞を質店に待たして置いた。なんと、多三郎が盜んだと云ふ色紙が、どうして源右衞門どのゝ手から道具屋へ賣りに出した。
源右　サア、それは。
清兵　金の取遣り、箱へ封印を付けるまで、善六、お主は立合つたな。
善六　サア、それは。
清兵　多三郎は盜賊か。
源右　サア。
清兵　善六、われも合指りか。
善六　サア。
三人　サア〳〵〳〵。
清兵　エヽ、イケまぢ〳〵とした大泥坊め。
兩人　もう、無茶ぢや。
ト清兵衞に打つてかゝるを、ちよつと立廻り。二品を引ツたくり、兩人を打ち据ゑ
清兵　身動きすると、首が飛ぶぞよ。
ト棕櫚箒にて、兩人を散々に打ち据ゑる。利兵衞、顫へ居て

利兵　イヤモウ、誠に斯樣に入り組んだ揉め合ひのある代物と存じませず、取扱ひましたが、併し、よい所へ持つて上がりましたので、元の鞘へ納まりさうでございます……エヽ、源右衞門さん、色紙は清兵衞さまにお預け申しました。代物は慥かにお返し申しましたよ。斯樣な所に長居いたして、掛り合ひにでもなると詰まらぬ……左樣なら皆さん、お暇いたしまする。
ト足早に橋がゝりへ入る。此うち、善六、算盤を取り思ひ入れ。
清兵　コリヤ善六、主人を落し穴へ入れるやうな騙り事、事が割れると、この首が胴に付いては居ねえぞよ……源右衞門、われも同じく笠の臺が飛ぶのみか、トヾの詰まりは千住か鈴ケ森。
ト箒の柄にて、兩人の首を並べて上げ
御覽しろ、よい獄門面だ。
善六　似合ひますかな。
源右　男が好過ぎらア。
清兵　エヽ、しやアつくめ。
トまた兩人を打つ。
モシ、伯母者人、源右衞門が百兩、返しに持つて來たな

明治七年五月守田座上演

中村芝翫の源右衛門　五世尾上菊五郎の善六

ら、この色紙をお渡しなされませ。
みれ　そんなら、さうしませう……コレ、おとり、奥藏へ
　これを仕舞うておぢや。
とり　畏まりました。
　ト奥へ入る。善六、源右衞門、擲たれしまゝ寢轉び居
　る。
善六　源右衞門やアい。
源右　善六やアい。
　ト兩人、よろしく呼ぶ事あつて、互ひに顏を見て
　どうだ、心持ちは。
善六　サア、心持ちは、むぐらもちに餡ころ餅に柏餅だ
　ワ。
源右　此方も柏餅を祝つた男の子だが、なぜ酷い目に合つ
　たなう。
　ト兩人、起き上がり
善六　イエ〳〵、同じ男の子でも、淸兵衞さんは豪敵な者
　だ。いま箒を振り上げて、びくしやくすると叩き殺すぞ
　……と云つた鹽梅は、芝居のやうだ。なか〳〵お前なぞ
　は及ばねえ事だ。
源右　馬鹿を云へ。あんな小雀を、相手にするものか。マ
　ア、譬へて云やア、おれは鶴だ。
善六　ハヽ、鶴だ、鶴には違ひねえが、なんぼ鶴でも、鷹
　には叶ふめえ。
源右　なんの鷹の一羽ぐれえ。取ッ付いても、一つ羽根ッ
　叩きをすると、微塵にならア。
善六　一羽ぢやねえ、二番手三番手四番手と追ひかけたら
　四羽の鷹には叶ふめえ。
源右　ナニ四羽。マア、それで鷹四羽屋だな。
善六　マア、無駄は後にして、一服しやせう。
源右　さうよ、凝つては思案に能はずだ。
　ト莨入れを出し、中を見て
　エヽ、皆粉になつた。善六、一服振舞はつせえ。
善六　サア、澤山召上がれ。
　ト以前の莨入れを投げてやる。源右衞門、取つて
源右　なんだ、この中にやア粉もねえ。
善六　ナニ、ねえ事があるものか、いま奧から出して來た
　ばかりだ……オヽ、さうだ〳〵。
源右　なんと、あるめえな。
善六　イヽヤ、ある〳〵、今その盆の時、お藥に付けて天
　上に舞ひ上がり、この所に在します。

ト額を出して見せる。

源右　イヤ、こりや好い所へ店を出したたな。

善六　もちつと天王橋の方へ寄つたら、猶賣れませうな。

ト源右衞門、善六の頭の莨をついでのみながら

源右　なんでも、時候々々の物を賣らにやア損だ。

善六　サア、もちつと先へ寄ると、賣り物が替ります。

源右　何を賣るのだ。

善六　業曝し血頭ア。

源右　エ、、何を吐かしやァがる。

善六　イヤ・業曝しで思ひ出した。淸兵衞さんは素晴らしい男だ。第一男は好し、氣前は好し、娘御のお染さんの聟さんになる。その男前にも似合はねえ、業曝しな事がありやす、と云ふ譯は、云ひ號けしてあつて、もう近日おかみさんにしようと云ふお染さんは、蟲が喰つて居ます。

源右　イヤサ、外に色がありやす〳〵、大色があるね。

源右　ムウ、アノ石町で名に響いて居る山家屋が、間男されちやア大鼻聖らしだな。

善六　イヤモ、大鼻聖らしの一本棒の、三本棒の吝ん坊、五本棒は上野で、六尺棒にとちめん棒大秤棒。

ト お峯皆々これを聞き、淸兵衞心遣ひの思ひ入れ。

みれ　默れ〳〵……これはしたり。

ト善六、無性に間男だと大きな聲にて云ふ。

默れ〳〵……善六、爰に聟どのもござるに、滅多な事を云ひ散らし、その分にしては置かぬぞよ。

善六　イエ〳〵、私しとても富家の支配人、嘘僞はりは申しませぬ。

みれ　これはしたり、證據もない事をツカ〳〵と。

善六　イエ〳〵、なんで證據のない事を申しませう……即ちこれに證據がござります。しかも、板行に捺したる慥かな證據、御覽じませ。いま色紙の箱の中より出たるこの本。當節專ら世上に流行の唄祭文、新板に出來ましたお染久松袂の白絞りと、外題が致してござります。サアサア、どなたも御覽じませ。

ト皆々に見せる、久松、取らうとするを

ドツコイ、その手はなんだ。その手でお釋迦が團子これた。

ト見物の方へ見せ

人は大勢、本は一册、なんと源右衞門さん、一段語りやせう。

源右　差詰め合ひ三味線はおれだ。併し、道具が好くなく

ちやア。
善六　オツト、爰に今ぶたれた箒がある。少し痛んだが、
不承しなせえ。恨みの品だ、
源右　恐ろしい。こちとらがぶたれたので、竹が痛んだ。
善六　それが即ち、しゆろどうにいたんだを。
源右　舌が足りねえぜ。
善六　帑な目に合つた所爲だ。
源右　サア〳〵、調子を合はせるぜ。
善六　一だ〳〵。
源右　トン〳〵〳〵。
善六　どなただえ……戸を叩くやうだ……二だ〳〵。
源右　テン〳〵〳〵。
善六　雪駄直しが來たやうだ。三だ〳〵。
源右　チン〳〵〳〵。
善六　南無奇妙無量
ト合掌する。
源右　なんだな、冗談ばかり。
善六　四だ〳〵。
源右　四はねえわえ〳〵。
善六　エヽ、四はねえから云つて聞かせるのだ……ばつた

り。
ト　おとりが置いたる押の板の楔にてツケを打つ。
源右　ふざけちやアいけねえ。口上を云はにやアならねえ
サア、拍子木を打つてやらう。
ト　よろしく、楔にて拍子木を打つ。
善六　東西々々、いよ〳〵この所お聞きに入れまするは、
お染久松袂の白絞り、相勤めまする太夫、竹本善六太夫、
三味線、鶴藏の源右衞門、其ため口上、左樣、チヤンチ
ヤン〳〵チヤン〳〵〳〵チヤン。
源右　トテ〳〵ツン〳〵チン〳〵
善六　爰に東の町の名も、聞いて鬼門の角屋敷、瓦町とや
油屋の、一人娘にお染とて、二八の春の細眉に、内の子
飼ひの久松と、忍び〳〵の寢油に、親たちや夢にも白絞
り……。
ト　此うち、清兵衞、平舞臺へ下り、善六の持つて居る
本をちよつと取り、源右衞門の箒を取り、打ち据ゑる
善六、眞面目になつて
お茶を下さります。
ト　湯を呑む。源右衞門、眞面目になつて思ひ入れ。清
兵衞、こなしあつて

清兵　ヤイ、善六、お染久松と書いた本があるなら、二人は間男、この清兵衞の男が廢ると云ふのだな。
善六　マア、左樣に存じまする。
清兵　ハ、、、、心の狹え事を云ふものだ。この廣い江戸に、お染と云ふ名も、久松と云ふ名も幾らもある。既に鳥邊山の心中がお染半九郎、眞田山の心中がおすて久松提げを賣つて歩く者は、賣り物がなけりやア、ない事を思ひ付き、板に起して賣るが商賣。こんな本が何百册出やうとも、この清兵衞の男の廢ると云ふ事もねえ。マアこの本は貴樣の頭へちよいとのせた。
ト善六の頭へ右の本を載せ、其まゝ二重へ住ふ。善六こなしあつて
善六　イヤ、えらいものだ……コレ、久松、わりやア仕合せ者だぞよ。この廣い江戸に、久松と云ふ名も、お染と云ふ名も幾らもある。既に鳥邊山の心中がお染半九郎、眞田山の心中がおすて久松、鞍馬山の心中が僧正坊に牛若、大江山が酒呑童子に頼光、百足山が俵藤太秀郷。いま十軒店へ行つて見ろ、幾らもある。どれ程人形が賣れやうとも、好い世話だ。この本は、おのれが頭へちよいとのせた。

ト久松の頭へ載せる。
源右　もう、さう料簡を付けた日には、こちとらには語れねえ。
善六　する事なす事皆ぐれはま。
ト思ひ入れあつて
オヽ、思ひ出した。
ト大きく云ふ。
源右　惚りした。なんぞ證據があるか／＼。
善六　そりやア、大丈夫、證據がある……先刻出さうと思つて居たけれども、あんまり劍呑みが強いので忘れてしまつた。二三日肌に付けて、暖かになつて居らア。
ト懐より、文を出し、
サア、御覽じませ……ヘン、お染さま參る久松より……なんと、これぢやア慥かな證據でござりませうな。
源右　こりや、斯うなくては叶はぬ事だ。
ト善六、皆々へ文を見せる。久松、當惑のこなし。おみれ、清兵衞もこなし。
清兵　ナニ、すりや久松めが、お染へやる文だと云ふか。ドレ……よもや／＼と思つたに、いけッ太え奴等だ、うぬ、どうしてくれう。

善六　モシ、清兵衛さん、今時分ちと遲蒔きでござります併し、私しでさへ腹が立つて／＼なりませぬから、あなたのお腹立ちが、御尤もでござります。

清兵　サア、斯う云ふ證據が出ちやア、捨てゝは置かれぬ事に依つたら二人とも、只は濟ませぬぞ。伯母者人も、その分には置きませぬぞ。

善六　私しの明りに立ちますやう、なんと見せしめの爲、高らかに讀み上げて下さりませ。

清兵　成る程　腹癒せだ、讀み上げませう……これだな……
……これか／＼。

ト見物に見せて、吹替へて、以前門口で拾ひし文の封を切る。

善六　東西々々。

清兵　ナニ／＼、「一筆しめし參らせ候ふ……なんだ、蚯蚓と釘の折れを交ぜたやうな字だ。

善六　幾ら云つても聞きません……それ見ろ、斯う云ふ時に恥をかくから、やかましく云ふのだ。怠け者めが。

源右　マア／＼、靜かにしろ……どなたも、大事のお文さま、御神妙に御聽聞なされませ。

善六　その後を早くお讀みなされませ。

清兵　近々に山家屋へ御婚禮なさるゝと聞き、寢ても覺めても覺めても寢ても。

善六　冷てえ水で顏でも洗へばいゝに。

源右　これからが肝心だ。默つて／＼。

清兵　忘るゝ暇は泣くばかりに候ふ、最早この上は、内の野良松を追ひ出し……内の野良松。ハテナ、善六、此方の内に野良松と云ふがあるか。

善六　ヘイ、野良松……野良松、太郎松、ざんざらいなごにかいつく坊ひつつく坊……エ、解りました。それは蔭で仇名を申すので、若旦那多三郎さまの事でござります……ヤイ、久松、勿體至極もない。三代相恩の御主人の事を、野良松のと、それ見ろ、忽ち罰が當つた……ササ、その後を／＼。

清兵　兩家のお店の締め括りは番頭の役。

善六　ちよつと待つたり。あゝ云ふ奴でござります。忠義一圖の私しを追ひ出し、番頭にならうとは、太い奴でござります……ア、獅子身中の蟲とはおのれが事だ。ササ、その後を。

清兵　さうなる時は、日頃の願ひも叶ひ、心の丈も屆くもと云ふもの。併し、お前樣とは年は半分增して候へど……

善六　アヽモシ〳〵、モウ〳〵後はお讀みなさるには及びませぬ。
ト久松、おみれ、ホッと思ひ入れ。善六、文が違つたと云ふこなし。頻りに文を取らうとする。
清兵　いつそ名宛を讀まうぢやねえか。
善六　アヽモシ、それだけは堪忍しておやんなせえ。年甲斐がねえから、あの通り泣いて居ります。名宛だけは堪忍しておやんなせえ。子供同然、あの通りあやまつて居ります。
源右　コレサ、善六、名宛が肝心だ。マア〳〵、騒がずと下に居て聞きねえ。
善六　エヽ、情ない。
ト思ひ入れ。
清兵　ナニ〳〵、お染さま參る善六より……ハテナ。
善源　ヤア。
清兵　この善六と云ふ名は、どうか聞いたやうな。
ト皆々、安心の思ひ入れ。善六、源右衛門、面目なきこなし。
源右　左様サ、私しも、ちよく〳〵聞きます。
清兵　ハテナ、お六の亭主は貝屋の善吉、善四郎は山谷の料理屋。
源右　善孝は櫻川、善七は田甫の頭。
清兵　善六と……善六々々……善六……オイ善六。
ト大きく云ふ。
善六　ハイ。
清兵　貴様か。
善六　アツ。
清兵　われか。
善六　我れら、私し、拙者、某、自ら、麿、やつがれ。
清兵　コリヤ、善六、清兵衛と云ふ主のあるお染に、不義を仕掛けたのみならず、惡事の段々、只は濟まぬぞよ。
善六　ハイ、一々御尤もでござります……源右衛門、どうせう。
源右　エヽ、倒し者め。
ト側へ寄るを突き飛ばす。善六、こなしあつて
善六　チエヽ、神も佛もない事か。南無天照大權現、達磨大師遍照金剛。いま善六が正直正路を感應まし〳〵、無實の難をさつぱりと晴らさせ給へ……アヽ、けたいの事おんてんぴろかんでんびろとんころとんこん、達磨のだん達磨。チエヽ。

ト善六、あちこちウロ〳〵こなし。

みれ　コリヤ、善六、爰へ出や。

善六　へ、イ。

みれ　コリヤ、おのれは憎い奴ぢやぞよ。爰の内へ奉公に來たは十歳の年。寒のうちに袷一つで、青洟を垂らし、在所から來た事を忘れ、さま〴〵の惡企み。まだその上主の娘に不義仕掛けるとは、云はうやうない人でなしめが。どうしたら腹が癒やう……コレ、誰れぞおとりに聞いて、善六が目見得に來た時、着て來た着物を持つておぢや。

米吉　畏まりました。

みれ　コレ、善六、其方は木の空へ上げる奴なれど、娘が婚禮前と云ひ、聟どのへ免じ、これまで奉公いたせしゆゑ、不便を加へ、其まゝに暇を遣はすぞ。

　トこの時、奥より、米吉、着物の風呂敷包みを持ち來り

米吉　へイ、これでござりまするか。

みれ　オヽ、それぢや……それを善六に着せ替へて追ひ出せ。

米吉　畏まりました……サア〳〵、番頭さん、その着物を脱いだ〳〵。

善六　そんな物が着られるものか。

米吉　文句を云はずと早く脱ぎねえ。今までおれを酷い目に遭はせた代り、こんな時意趣返しをしてやるのだ。

源右　ヤイ〳〵、そんなに手荒くするな。

米吉　お前達の出る幕ぢやアねえ。おかみさんの云ひつけだ。

清兵　愚圖々々云はずと脱ぎやアがれ。

善六　ハイ〳〵……ヤイ、米吉、われまでが同じやうに、貴樣も隨分安物にこだわつて、横根まで踏み出した癖にあんまり思ひやりのねえ男だ。

米吉　イヤ〳〵、斯うなつては、番頭も何もねえ。サア、脱いだり〳〵。

　ト捨ぜりふにて、着物を脱がせ、一つ身の着物と着せ替へる。

みれ　サア、支度がよくば、早く出て行きや。

善六　モシ、出て行けと仰しやるなら、隨分出ても行きますが、男が好くて正直な、この善六を追ひ出すのは、どうやら惜しいものでござりまする。せめて今から、お前樣の、男妾にでもしてお遣ひなさるゝなら、立派に御用

を勸めますが、後家御樣、どうでごせえす〳〵。

清兵　何を馬鹿を吐かしやアがる。わいら達が目論だ仕事丸々勘辨して赦してやるワ。サア、足元の明るいうち、出て行け〳〵……ソレ、早く追ひ出せ。

米吉　ヘイ〳〵……サア、早く出て行きなせえ。

ト兩人、愚圖々々して居るゆゑ、清兵衞、急いで

清兵　エヽ、キリ〳〵と行きやアがれ。

ト兩人を門口の外へ突き出し

一昨日來いよ。

ト門口を締める。兩人、思ひ入れ。

源右　善六。

善六　源右衞門さん。

兩人　たんのこつた。

ト詰まらぬと云ふ思ひ入れ。この時、下手より、おとり出で來り。

とり　アヽモシ。ひよんな身にならしやんしたなア。

善六　お主はおとり、そんならアノ、樣子をば。

とり　アイ、最前おかみさんが呼ばしやんして、番頭さんの着物を持て來いとの云ひつけゆゑ、さてはなんぞしくじつて意見の爲のお仕置かと、案じて胸も暖簾ごし、聞いて憫り情ない、淺ましい身にならしやんしたなア。

源右　これと云ふのも慾の間違ひ。

善六　此まゝ宿へは歸られず。

とり　マア、ちよつと立つて見やしやんせ。

善六　斯うか〳〵。

とり　もう一遍立つて見やしやんせ。

善六　どうするのだ。

とり　立てば立て臼、坐れば挽き臼、歩く姿は鍋盖の三太郎ぢや。三太郎々々々よ。

善六　エヽ、人を馬鹿にしやアがる。

源右　何にしても、その姿では歩かれまい。

善六　歩く事は歩いても、色が出來ねえ。

源右　まだ口の減らねえ事を云ふぜ。

とり　幸ひ、洗ひ張りにやらうと思つた、わたしの着替への一張羅。

源右　さうよ。これを借りて着るがよい。

善六　そりやア何より有り難い。南無おとり大明神、

とり　そんならわたしは、熊手に付いてるお龜だと云ふ事かえ。

源右　違ひねえ。そんなところよ。

善六　ト此うち、善六、女の着物と着替へる。
とり　有り難い〳〵。おとりどん、お前に限るよ。
源右　たつた一度で、こんなに實があるものを。
善六　そんならお主は振舞はれたのか。
源右　二度とはお斷わりだ。
とり　三度、四度と度重なれば
善六　命も上げろよ。
とり　南無妙法蓮陀佛。
善六　さうして、お前の宿は神田かえ。
源右　神田かなんだか、無茶苦茶だ。
とり　お前、ちよこ〳〵尋ねてやりねえな。
善六　そりやモウ、どんな思ひをしてなりと、わたしや尋ねて行きますぞえ。
とり　アヽ、眞平惡女の深情。
源右　なんだ、惡女だえ。
とり　イヤサ、惡性はしねえと云ふ事だわな。
善六　嬉しいねえ。
善六　餘計な事を云ふぢやアねえか。
　　ト此時、奥にて
呼び　おとりどん〳〵。

善六　ソレ、誰れか呼ぶぜ。
とり　アイ〳〵……善さん、今の事はいゝね。
善六　いゝと云ふ事よ。
とり　コレ、忘れなよ、程は雲井に隔つとも。
善六　空行く月の巡り逢ふまで。
とり　善さん、さらばでござんす。
　　トおとり、思ひ入れあつて、ツイと入る。
善六　アヽ、飢じい時の不味い物なし、ちよつとした拾ひ喰ひのお情で、おとりめが貸してくれたこの着物。
源右　それぢやアどこへでも歩けるぜ。
善六　なんぼ洒アつくでも、禿げ頭の左褄ぁをかしいぢやアねえか。
源右　好い思ひ付きがある。これから女の形になつて、詫び言をしたら、風が替つて居るから、詫びの叶ふめえものでもねえぜ。
善六　さうサ。叶はねえまでも、ぺてんにかけて、おれが着替への挾み箱。
源右　それでも取つて來るがいゝ。おれは爰に待つて居てやらう。出來ねえ所が元々だぜ。
善六　なんにしろ、やツ付けて見よう。

ト合ひ方になり、よろしく科をして門口を明け、内へ入り

へイ、御免なされませ。

トよろしく住ひ、手を突き辭儀をして

只今お暇の出ましたのは、善六、また私しは只今お暇になりましては、木から落ちたるお猿同然、私しも十歳の年から子飼ひになり、豆腐取つて來い八百屋へ走れ、駕籠呼んでおぢや。

へエ、〳〵掃き掃除。

戸棚の鍵まで預けられた身が、この始末、さぞ憎からう、お腹も立ちませうが……御堪忍なされて、どうぞもう一年なりとも。

みれ　ならぬわいなう。

善六　そんなら半年。

みれ　ならぬ。

善六　せめて一月。

みれ　ならぬ。

善六　半月。

みれ　ならぬ。

善六　一日。

みれ　ならぬ。

善六　半日。

みれ　ならぬ。

善六　一時。

みれ　エヽ、諄いわいの。

善六　ホイ……どうでも叶はぬ取かいなア。

ト女の振りよろしくあつて氣を替へ

エヽ、おきやアがれ。もう頼まねえ。おれだと云つても、天照らす御神の御末のお人間様だぞよ。さう安くするもんぢやアねえ、暇が出りやア、主でもなけりや番頭でもなし、矢ツ張り元の杢阿彌陀佛……ア、ぶつ〳〵云はずと、もう行くぞ。

ト行きかけるを、手代、呼びかけ。

米吉　オイ〳〵、番頭のおしくぢりさん、お前が昨夜呑んだ、德利の空いたのがある。持つて行きな。

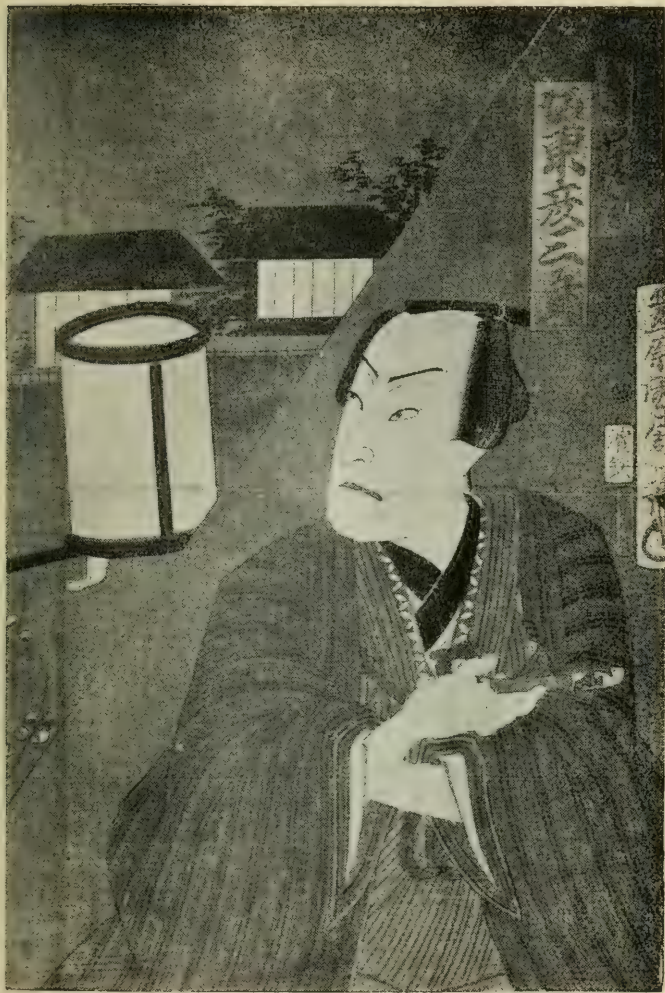
善六　オヽ、みんなおれのだ。持つて行くぞ……この下駄もおれのだ。あんまり形が小せいと思つて、馬鹿にするな。

ト捨ぜりふにて、德利を手拭で包み、下駄を穿き、脊を高くし、白丁の德利を頭のやうにして、大手を振り

振り門口の外へ出る。
源右　コレ、善六、何をして居た。大層手間が取れたな。
善六　手間取り足も出ねえ。
源右　何にしろ、尻でも端折れな。
ト源右衛門、善六の尻を端折らうとする。
善六　アレエ。
源右　嫌らしい男だせ。
善六　なんだか腰が痛くつて歩かれねえ……おんぶをしよう。
ト源右衛門の脊中へ手をかける。
源右　イヤ、とんだ目に遭ふものだ。
善六　ア、、油見世の番頭とも云はれる者が
源右　詰まらぬ事に菜種の油。
善六　荏の油にもかゝれねえ。
源右　どこの調子の安梅花。
善六　まんまと手目を揚げ油。
源右　胡麻の油で今までは
善六　番頭さんとも敬まつたが
源右　椿の油も引ッかけず
善六　世間へ恥をさらし蠟。
源右　暗きこの身を魚油とは
善六　ほんに夢にも
源右　白絞りぢやなア。
源右　思へば／＼。
手代　まだ行かねえのか。
善六　エ、、いま／＼しい。
ト徳利にて思はず源右衛門の頭を喰はす。
源右　アイタ、、、。
ト泣く。善六、徳利を振つてだます。源右衛門、善六におんぶと云ふこなし。
善六　オ、、たがよ／＼。
ト源右衛門を脊負ふ。子守り唄になり、両人、よろしくこなしあつて向うへ入る。手代、後を見送り
米吉　ア、、やう／＼の事で行てしまつた。
みれ　あのやうな悪企みをする奴等には、滅多な事は聞かされぬ。さりながら、人の一寸、我が身の一尺、多三郎を此まゝにして置いては、世間へ済まぬゆゑに、勘當分にしませうわいの。
清兵　成る程、此まゝに内に居たと云つたら、また悪者どもが何か企み居らう。何かなしに多三郎は、わしが預か

り連れて歸り、とつくり意見をしませうわいの。
後家　お染には、云はにやアならぬ事があれど、聟どのへ疵付けまい爲、くいしばつて、其まゝにして置きます。久松は今宵から、大切な色紙も入れてあれば、あの藏番を云ひつけますぞ……サア、藏へなと入つてキッと張り番、錠は外からキッとおろし、鍵はわしが持つて居ますぞよ。
　ト思ひ入れ。
清兵　サア、何事も勘辨すれば、濟まぬ云ふ事もねえもの、それはさうと、いま戸棚の内にあつた、派手な小袖、一緒に持つて行てやらずば、もしも短氣……イヤサ、たんとの物でもねえから、とつぷり暮れたら、駕籠へ乘せて行きませう。
みれ　明れば明日ば元朝ぢや程に、何やかやの支度もあれば多三郎は一緒におぢや。
多三　アイ。
清兵　成る程、今日は大晦日の事なりや、何もかもわしが一人で引ッちよつて、多三郎は預かつて行かうし、また久松は今にわしが連れて行つて、藏へやります。後の事はわしに任せて、お案じなされまするな。

みれ　只何事も清兵衞どの。
清兵　そんなら伯母御。
みれ　また春永に逢ひませう。
　ト唄になり、おみれ、奧へ入る。手代付いて入る。久松、こなしあつて
久松　ア、、勿體ない阿母樣のお心遣ひ。
多三　母人と云ひ、清兵衞さま、この身の體裁、なんと申し譯がござりませう。
清兵　アコレ、若い時は有りうちだ。さうキナ／＼思はねえがいゝ。今にお糸に添はしてやる程に、辛抱しなせえ……何にしろ、お糸にはさぞ窮屈であらう。
　ト戸棚を明け、お糸を出す。
いと　樣子は殘らず聞きました。何から何まで有り難う存じまするわいな。
多三　向後心を改めて、よう辛抱しますわいの。
清兵　どうでも大晦日だけあつて、大方埒が明きさうだ。
　多三郎は一足先へ。
　ト多三郎、先へ出で、お糸の手を引き行かうとする。
ドッコイ、一緒に歩いては、惡い／＼、離れ／＼に歩くがいゝ。

明治七年五月守田座上演　坂東彦三郎の清兵衛

五世尾上菊五郎のお染　中村芝翫の人形使ひ

ト多三郎を先へやり、お糸を後からやる。花道中程まで行き一緒になり、手を引き、一散に向うへ入る。後より長吉も走り入る。

コレ／＼、なんだ……オイ／＼、あれだ……困つたものだ。長吉まで一緒に行き居つた。

ト門口の外へ出て、あたりを見て、こなしあつて

コレ久松、キナ／＼思つて、詰まらねえ心を出すな。年寄つた親達へ、苦勞をかけねえやうにするがいゝ。また春になつたら、好い事もあらう。何事もおれに任せて置け。くれ／＼も短氣な事をするなよ……短氣と云へば、先刻の善六が額の血がこぼれて居る。この紙で拭いて置きやれ。

ト以前の文を投げてやる。久松、取上げ見て、悃り思ひ入れ、有り難いと云ふ思ひ入れ。清兵衞、氣を替へ雪颪しになり、日覆より、雪チラ／＼降る。

オヽ、なんだか寒くなつて來た。

ト空を見て

道理こそ、チラ／＼やつて來た、また大雪に

ト久松と顏見合せ、久松はお辭儀をする。清兵衞は門口を入るを木の頭。

ならにやアよいが。

トこれをキザミにて雪颪し、通り神樂にて、よろしく拍子幕。

ト直ぐに雪颪しのツナギにて、引返す。

本舞臺、三間の間、一面の雪幕。すべて瓦町往來の體。雪颪しにて、幕明く。

ト向うより、夜蕎麥賣り出で來り

そば　そばアア、い。しつぽく、にう麵ア。

ト呼びながら出で、直ぐに本舞臺へ來る。この時、上手より、町人、弓張りを持ち出で來り

町人　ア、、べら坊に寒い／＼……オ、、蕎麥屋が居る……
……オイ、一杯熱くしてくんねえ。

そば　へイ／＼、畏まりました。

ト蕎麥を拵らへて出し

生憎チラついて參りました。大雪にならにやアようございます。

町人　さうサ。併し、雪の朝と云つて、こちとらの日和だアハヽヽヽ。これからお前達は町の方へ行くのか。どうも近年のやうに、不景氣の晦日もねえもんだ。併し、

去年の暮れより、思ひの外かけが集まつた。
そば　ハヽヽ、それぢやアあなたは、金で冷えるからようござりますが、私しどもは僅かな夜商ひ、寒いには困ります。
町人　サア、これがおれの金ならいゝが、みんな主人の物ゆゑ、詰まらねえ譯サ……ドレ、ソロ／＼と出かけよう。
ト錢を拂ひ、提灯の心なぞ切つて行きかける。
そば　ヘイ、有り難うござります。私しもソロ／＼と出かけませう。
町人　アヽ、寒い／＼。併し、屋敷の勘定が取れゝばいゝが。
ト獨り言を云ひながら向うへ入る。
そば　そばアヽ、いゝ。しつぽく、葱南蠻。
ト呼びながら下手へ入る。知らせに付き、雪幕、切つて落す。
本舞臺、通し本手摺り、向う座敷の床の間の書割り、上手、盡心に飾りし土藏、小高き所に窓、下手、向う網戸の出入り、錠前を卸ろし、下の方、建仁寺垣、手水鉢、寒竹、雪持ちの松、石燈籠、冬の下草をあしらひ、二手通り地がすり、上下面取り、黒したみ、日覆より、雪持ちの松の吊り枝。すべて、人形振りの模樣。上下、淨瑠璃出語りの臺。油屋奥庭の體、操り舞臺に仕立て、床の送り返し、時の太鼓にて、道具納まる。
〽夕闇の、夜風烈しく更くる夜に、草木も眠る丑滿時、うさん草木も眠られぬ、久松が身の如何ならん、折戸庭口、掃除口、拗るか切るかぎつし／＼、星の光りに閃めく白刃、奥は知らずか白浪の、慾に心も暗紛れ。
ト此うち、善六、藏の鍵を持ち、足駄を穿き、下手より出る。源右衛門、頰冠り、二の手の柴垣を切り破り出で、兩人、人形の振りよろしく
〽探り行合ふはずみにこつちり〽アイタしこ〽善六か〽源右衛門さん、酷い目に合はすなア〽エヽ、氣を付けろ付けろ〽さいの、氣は付いて居れど、ちつとも見えぬわえ〽エヽ、鈍な奴ぢや、コリヤ、嘗め物と、盗人は、なれた所がえい筈ぢやが、併し最前後家の吐かしたには、色紙は慥か三番藏挟み箱ぢやが合點か〽オヽ、サヽ、貴樣は奥へ行き、聲立てさせず、お娘をかたけて彼のとやへ〽オ

オサ、合點呑み込んだヘ必らず共に手荒うして、大事の所を痛めてくれるなよ、ソレ細引ぢやヘエ、、まだそこまでは行きやアせぬわえヘ具に囁き網戸の前ヘア、、こいつはしまうた、源印々々ヘエ、、なんぢやぞいヘなんぢや所かえ、錠が卸りてけつかるわえヘエ、、不器用な奴、惣別盗みに入るには、合鍵持たいでなるものか、ソウレ合はして見いヘと突錠、門錠海老錠の、繋ぎし鍵を差出せばヘどこぢや／＼ヘエ、、ソリヤ、爰ぢや／＼ヘと差出す拍子に鍵に顎ヘアイタ……どうした／＼ヘア、痛やの／＼、鍵に顎を吊しては、明日からおまゝが食べられぬヘエ、、阿房吐かさず首尾ようせい、コリヤ、ナア、ヘムウヘナヘムウ／＼／＼、オ、合點と頷き囁き、壁を塗る身でやう／＼と、探り行くこそ。

ト此うち、善六、出刃庖丁を懐へ入れ、細引を源右衛門に渡し、源右衛門は善六に大小の鍵を出す。文句通りよろしくあつて、善六は土藏、源右衛門は柴垣へ忍び入る。チョンチョン、知らせに付き、上手へ出語り臺を押出す。爰に竹本連中居並び、操り模様、人形振り送り返しになり、東西をかける。

ヘ遠寺の鐘のかう／＼と、胸は板えんそろ／＼と、忍び出でたる娘氣は、戀路の闇の暗紛れ、心は先へ飛石の、冷たさ怖さ顫はれて、膝もわな／＼やう／＼と、探り寄つたる藏の前。

ト お染、人形振りにて出で、二の手、藏の前へ行く。

ヘ久松そこにか、冷めたかろ、さぞ寒からうと云ふ聲も齒の根も合はぬ慄へ聲、内にもそれと戀しさの、顏差出せど窓の網、文も涙の聲密め、逢ひたかつたお染さま、今生の逢ひ納め、ま一度お顏が見たけれど、心に任せぬ今宵の闇、これまで忍び逢ふ夜さは、月夜を恨み闇の夜を、指を數へて待つた報い、交す詞が暇乞ひ、繰り言ながらお前は存らへ、あと弔らうてと云ふ聲も、咽喉に詰まりてむせ返る、お染は窓に延び上がり、え、又しても胴慾な、高いも低いも姫御前の、肌觸れるは只一人、親兄弟も振り捨てゝ、殿御に付くが世の敎へ、それにまだまだ悲しきは、昨夜の風呂の上がり場で、この腹帶を母樣が、見付けさんしてこりやお染、この腹帶は何事ぞ、疾から樣子知つたゆゑ、度々の強意見、内外の者にも知らすまいと、辛抱したがもう叶はぬ、情ない事してくれたと、泣きしみづいてのお腹立ち、其方に案じさすまいと、今まで斯う／＼岩田帶、隱して居たがこんな身で、

どう嫁入りがなるものぞ、一緒に殺してたもいのと、口説き嘆くぞ道理なり、成る程さうしたお身にしたからは、千萬云うてももう叶はぬ。さりながら、野崎でおみつや兩親に、番ひし詞それに又、二人一緒に死なば心中、恩と情の御主人や、淸兵衛さまに義理立たず、わたし一人はこの藏で、死んでしまふが身の云ひ譯、そんならわしはこの庭の、井戸へ身を投げ死んだなら、おみつさんへの義理も立つ、さりながら、離れ〴〵に死ぬるとも、未來は必らず一つ蓮へ、連れ立つて參りませう、内と外とに關原や、ありとは見えて聲ばかり、今を限りの暇乞ひ、臺所よりお染〳〵と母の聲、それ〳〵呼んでおや〳〵、サア早う、あいと返事はしながらも、心は爰に沖の船。裾もほら〳〵探り行く、その間に網戸さら〳〵〳〵、闇は文なき挾み箱、引ツかたげて出る善六、こなたは素手振る源右衛門、勝手知れねばうつか〳〵。

トこの文句のうち、お染、久松、よろしくあつて、トドお染、奥へ入る。善六、藏を明け、挾み箱を抱へ出で來る。よき程に源右衛門も出で來り、あたりを窺ひ居る。

善六　しめた〳〵。何は兎もあれ、明くか明かぬか、やつて見よう。

〽鍵取出だし錠前かつちり、我れと驚ろき耳に手を、窺ひながら又かつちり、難なく錠前捻ぢ放す、後に久松居るとも知らず、蓋引明けて。

ト此うち、善六、錠前を明ける。源右衛門、透かし見て

源右　善六々々、首尾はどうぢや。

善六　シツ〳〵〳〵。上首尾だ。ソレ、色紙よ。

ト色紙を出す。この以前より、久松、善六が出たる網戸より、一本差しにて出て窺ひ、この時、庭下駄を探り取り、手拭に包み、源右衛門へ渡し、本物を取る。源右衛門、探り見て、こなしあつて

源右　コレ、冗談をせずと、早く色紙を寄越さねえか。

善六　コレサ、大きな聲をするな。いま渡したぢやアねえか。

源右　馬鹿を云へ。てめえの渡したのはこれだ。

ト下駄を渡す。善六、探り見て

善六　ヤ、こりや庭下駄だ……ハテナ、こいつア狸かしらん。

〽思ひがけなき後より、差出す明しに顏見合せ。

トこの時、清兵衞、お染を連れ、雪洞を袖に隱し出て差出す。兩人、顔を見て

善六　ヤア、久松か。

久松　善六。

清兵　源右衞門か。

兩人　ヤア・こいつは堪らぬ。

ト逃げ出すを、清兵衞は善六、久松は源右衞門を押へ

清兵　動きやアがるな……心ならずと思うたゆゑ、取つて返して茶の間へ忍び窺ふに、案に違はずこの始末。うぬ太え奴等だ。

トぐつと引付ける。久松、思ひ入れあつて、本物の色紙を出して

久松　ハア、色紙は慥かにお渡し申す……この上は、お主へ不義の申し譯。さうぢや。

ト脇差へ手をかける。清兵衞、留めて

清兵　ヤレ待て早まるな。死ぬには及ばぬ……ソレ、去り狀。

トお染の前へ投げてる。

そめ　こりや、わたしへの離緣狀。

清兵　サア、おれが仲人、二人を添はせ、多三郎にお糸を女房に、油店の家督人。二人は質店、久松は今日から主兩家ともに、この清兵衞が後見して、人に指でも指さしやアしねえワ。

染久　エヽ、有り難うござります。

清兵　祝儀がてらに、二人の奴等も助けてやらう……とつとゝ爰を、うしやアがれ。

源善　誠におめでたうござりまする。

頭取　先づ今日はこれぎり。

トめでたく打出し。

新板色讀販（終り）

するを約束
心に錠
ぴんとおろした
吾妻の意氣地

油商人廓話

細見
五冊

明治四十五年五月大阪中座上演

實川延若の與兵衛
市川新升のみせこ

油商人廓話――油屋與兵衛

序幕

茨住吉見染めの場

役名――山崎屋與五郎。同云ひ號け、おてる。同丁稚、長吉。同下女、お千代。同、おうの。葉屋彥助。狼の傳助。腕の十。茶店亭主、藤助。お山の九助。藤屋の都。幇間、妙林。同、善吉。同、松兵衛。同、庄吉。林要次郎。藝子、おみつ。仲居、お糸。藤屋の吾妻。油賣り、與兵衛。

造り物、板塀、櫺子窓、橋がゝり、門口。柱に長行燈、御料理所魚源と書きあり、一面に杜若の盛り。臆病口、葭簀圍ひの茶店、床几に仕出し休んで居る。藤助、亭主の形にて、茶を酌んで居る。すべて茨住吉の體、石橋の鳴り物にて幕明く。

仕一　なんと魚源の座敷で、きつう騷ぐぢやないかいの。

仕二　そりやその筈ぢや。新町の吾妻とやら云ふ傾城が、自前の大騷ぎして居るのぢやといなう。

仕一　又こちらでは都と云ふ傾城を、彥助どのが揚げて休んで居らるゝのぢやわいの。

仕二　又この住吉の杜若は、いつも盛りの時分は、賑やかな事ぢや、ナウ亭主。

藤助　イヤモウ。あちらもこちらも、錢儲けの儘でござりまする。

仕一　ソレイナウ。イヤ、こちら尻なしの方へ廻つて去なうか。

仕二　ほんにさうせう。サア、ござれ〳〵。

ト仕出し皆々下手へ入る。狼の傳助、腕の十、葉屋彥助、立派な形にて、連れ立ちて出て來る。

藤助　これは葉屋の彥助さま、竹林寺へでも御參詣でござりまするか。

彥助　何吐かすぞい。今時に佛願うて何にせうぞい。

十　それ〳〵、佛より尊い新町の都太夫へ日參ぢや。

傳助　今日は濱が休みゆゑ、新町と出かけた所へ、彥助さまに誘はれて

十　連れ立つてこの茨住吉へ

兩人　出かけて來たのぢや。
彦助　揚げ詰めの都を連れて、この魚源へ昨日からの約束。都は來て居るか、亭主は知らぬか。
藤助　存じて居りまする。今日は藤屋の吾妻さまが、この魚源の杜若を見にお出で。いま駕籠が入つた後へ、また都さまが駕籠で。いづれ劣らぬ月と花でござりまする。
彦助　吾妻が來て居るとあれば、こりや張り合ひぢや。マア、魚源へ行て都に逢はうかい。
兩人　ヨウ、色事師さま〱。
彦助　また煽てるわい。
兩人　ハ、、、、。
彦助　サア、皆來い〱。
ト皆々魚源へ入る。向うより山崎屋與五郎、丁稚長吉、着替への包みを持ち、付き添ひ出て來て、いづれも流行り唄にて出て
與五　都が爰へ來て居るとの事。客は大方葉屋の彦助であらう。ちよつと呼び出して逢ひたいものぢやが……コリヤ長吉、わりや魚源の臺所へ行て
ト文出して
この文を都に渡してくれと、仲居へ頼んで來い。
長吉　ハイ〱。
與五　コリヤ、おれぢやと云ふな。
長吉　ハイ〱。
ト長吉、魚源へ入る。
與五　御亭主、床几借りますぞや。
藤助　ハイ〱。
ト茶を持つて行て
御ゆるりとなされませ。
ト亭主、茶店の內へ入る。向うより林要次郎、ぶッ裂き羽織、袴にて出て來る。
要次　ハテ、繁華程あつて、賑はしい事であるわい。
ト本舞臺へ來て、與五郎を見て
オ、、それにござるは、山崎屋與五郎ではござらぬか。
與五　オ、、あなたは長岡の御家中、林要次郎さま。先づ先づ、これへ。
ト要次郎、床几に腰をかける。
要次　さて與五郎どの、先達て殿樣より貴殿へ、修覆に參つた吳道の一軸、最早修覆も調うたであらうの。
與五　最早修覆も調ひましたるゆゑに、今明日にはあなたのお屋敷へ、持參いたしませうと存じまして、今日わざ

わざ取りに遣はしました所でござりまする。

要次　オヽ、それは重疊々々。殿樣御祕藏の軸なれば、隨分念を入れられたてあらうの。

與五　イヤモ、隨分急に念を入れさしましてござりまするが、さうしてあなたは、この大坂へ何の御用あつて。

要次　この度大坂へ立越えしは、いつぞや紛失なしたる千兩の金子、その盜賊は平岡丹平と云ふ者。大坂に隱れ居るとの訴へゆゑ、忍び／＼にその盜賊を詮議の爲、先達てより滯留。

與五　ハア、すりやその盜賊は、この大坂に居りますとな。

ト此うち都、出かけ居て、與五郎の方へ紙を丸めて抛る。要次郎の方へ當る。要次郎、不思議な思ひ入れにて、フト都と顏見合はし、與五郎、これを見て

ア、コレ／＼。惡い／＼。

ト手を振る。

要次　ア、與五郎どの、惡い／＼とは、何が惡うござるな。

與五　イヤ、その惡いとは……アモシ、斯うでござりまする。その千兩の盜賊は惡い奴ゆゑ、それで惡い／＼、と申しましたのでござりまする。

要次　何やら若い同士の仕方話し……イヤサ、若い花……與五郎どの、なんと花の盛りは、見事な事でござるな。

トあたりの花を見て云ふ。

イヤ與五郎どの、今申した彼の一軸、隨分念を入れて、早く屋敷へ持參召され。

ト云うても兩人手招き、いろ／＼あるを

これはしたり、與五郎どの。

與五　へイ。

要次　只今申した一軸の事は、よくござるな。しかと頼み置くぞよ。

ト唄になり、要次郎、下手へ入る。後より都、與五郎の側へ行き

都　與五郎さん、よう來て下さりましたなア。

與五　今ちよつと聞いたらば、よいお樂しみがあるとの事……マア、出直して來うわい。

ト行かうとするを

都　コレ、お前、どこへ行かしやんす。

與五　ハテ、知れた事、其方が樂しみして居るを、まんざら指を啣へて見ても居れず、それぢやに依つて。

トまた行かうとするを、都、留めて

都　イヽエ、どこへもやりはせぬ……今日のお客は、お前も知つて居やしやんす、彦助づらぢやわいなア。わざと付き合うて居るも、今日はお前が爰へござんすであらうと、待ちに待つて居たものを、サア、一緒に行かう。ござんせ、

ト無理に手を取る。與五郎、こなしあつて

與五　サア、行くは行くけれど、今日は藏屋敷の御用で、ちつと爰に待ち合はさねばならぬ用事があれば、マア、其方は先へ行きや。

都　そんなら、わたしは先へ行く程に、違はぬやうに來て下さんせ。待つて居るぞえ。

與五　なんの違ひはない。待つて居や。

ト此の時、內より仲居の聲にて

仲居　都さん〱、お客が呼んで居やしやんすぞえ。

都　アイ〱、今そこへ行くわいなア。

トこれにて都、與五郎へ心意氣あつて、內に入る。與五郎、床几にかけ、煙草のんで居る。庭神樂になり、向うよりおてる、娘の拵らへ。お千代、おうの、付き添ひ出る。お千代は御所箱を持ち、おうのは日傘さしかけ出る。後より「オ、イ〱」と九助、仲仕の拵らへにて呼びながら出て來り

九助　御寮人樣、さう步いては、追ひ付かれるものぢやない。

うの　オヽ、九助どの、お前は道通りの人と、喧嘩をして居やしやんしたゆゑ、捨て置いたのぢやわいなア。

てる　よしない事から諍ひにならうかと、怖うてならなんだわいなア。

九助　エヽ、氣の弱い。いま摺れ違うた奴が、お前さんを見て、えらい衒妻ぢや、首ぢやと吐かしたゆゑ、こちの御寮人樣が、おのれの構ひになるかいと喰はした。何も案じる事ではない、お山の九助ぢや。案じる事はない。騷がんす事はない、サア、ござんせ〱。

ト矢張り神樂にて、皆々本舞臺へ來て、與五郎を見て

うの　アレ、與五郎さんがござるわいなア。

九助　オヽ、若旦那樣、これにござりましたか。

與五　オヽ、九助か。おてるを連れて、どこへ行きやつたてる　ハイ、あなたは中の島のお屋敷から、天神のお旅へお參りなさるゝとの事。もう御用はおしまひなされましたかえ。

九助　これはしたり、話しが遠うなる。側へ掛けたり〱。

ト無理に與五郎の側へ腰かけさして
おれも一服と出かけようわい。
　トこちらの床几にかける。
てる　それでわたしも、阿彌陀寺へ參ると申して、お跡を慕うて參じましてござりまする。
與五　おてる、こりや何か、わしが養子聟の事ゆゑ、出歩いては家の破滅と思うて、行く先の吟味しやるのか。
てる　なんのマア。
與五　イヤ〳〵、さうぢや〳〵。おりや慰みには出ぬ。其方までが出ては、また番頭の權九郎が、何の彼のと云ふであらう。日のたけぬうちに、早う去にや〳〵。
てる　サア、それでも。
　ト愚圖々々云うて居るうち、魚源の入り口より、仲居お糸出て、與五郎を招いてゐる。
與五　サア、そこへ行く。
九助　どこへでござりまする。
與五　イヤサ、今日は藏屋敷のお留守居樣が、この料理屋へ來てござるゆゑ、お見舞ひに行かねばならぬ。
九助　それは御苦勞樣でござりまする。
　トこの間お糸、都か角が生える、早う來いと云ふ仕方する。與五郎、今は惡いと仕方する事いろ〳〵あろ、九助もいろ〳〵して、フト顏見合はして
なんの事ぢやい。壬生狂言が呆れるわい。
　トこの間におてる、與五郎の煙草入れを取つてお千代に見せる。
てる　こりや、お傾城樣にお貰ひなされたのかえ。
與五　なんのいなう。こりや袋物屋で買つたのぢや。
　ト引ツたくり袂へ入れる。おてる、また煙管筒を持つて見て居るを
　エヽ、搜して居るに
　トまた引ツたくり、袂へ入れる。
　ドレ、お留守居を見舞うて來うか。
　ト魚源へ入る。おてる、本意なさうに見て
てる　エヽ、辛氣な事ぢやなア。
九助　エヽ、お前さんもかいしよのない。取ツ捕まへて、めつきしやつきしたがよいわいの。
てる　サア、わたしもさう思ふけれど、内にと云うてはちつともの間もござらぬゆゑ、逢うてわたしのこの袖も、いつ詰まるのでござりますると、云ひたいけれど、よう云はなんだわいなア。

千代　お前が代りに云つて上げなさんせいなア・

九助　こいつ、女郎どもが味をやりやがつた。よし／＼、おれが代つて云うてやらう。

てる　又つからうどに云うて、お氣に障らぬやうにしや。

九助　そこらはぬからぬお山の九助ぢや。云うて見て行きそむなきや、ちやらでしまふて。お前は顏を出さずに、小座敷に隱れて居やしやれ。

てる　そりや合點ぢやわいなう。

九助　そんなら案内するワ。誰れか、頼まうぞよ／＼。

いと　アイ／＼。

　ト内よりお糸、仲居にて出て

オヽ、九助さん、ようござんしたなア。

九助　コリヤ、親方の所の御寮人樣を、お供して來た。現銀ぢや。右から左ぢや程に、酒肴ふんだんに出してくれ。よいか。

いと　合點でござんすわいなア。

てる　左樣なら、女中さん。

いと　斯うお出でなされませ。

九助　サア、遠慮なしに、行かんせ／＼。

　ト踊り三味線になり、皆々内へ入る。チョン／＼、返し

　造り物、二重舞臺、葭簾、上手折り廻り、下手落ち間、魚源座敷の體。都、緋扱帶の形にて、最前の文を讀んで居る。後に禿吉彌、坐り居る。文讀んでしまうて、吉彌を呼び囁く。

吉彌　與州さんにさう云はうかえ。

都　誰れにも聞えぬやうに、ソッと云や。

吉彌　アイ／＼。

　ト狀を煙草盆へ入れる。煙草のんで居る。奧にて

與五　オイ／＼、そこへ行く。よう知らしてたもつた。

　ト云ひ／＼。出る。合ひ方になる。

オヽ、都、爰に居やつたか。最前の文、讀んで見やつたであらうなう。

　トあちら向く。

オヽ、こりや思案の最中、物云ひかけて雲行きが惡い。ドリヤ、出直して來ようか。

　ト行かうとするを留めて

都　與州さん、此まゝ去んで濟むかえ。

與五　濟むか濟まぬか、底の知れぬ傾城に乘せらるゝ事は

否ぢやわい。

都　イエ〳〵、放さぬ〳〵。底の知れぬとは、わたしが心に曇りがあるか、サア〳〵云はんせ〳〵。

與五　聞きたくば云うて聞かさう。今日の他所行きは藥屋の彦助さまと云ふ大金持ち。追ッつけ請け出されて、彦助さんの奥樣、めでたい事ぢや。ちつと耳引いてやらう。

ト突き飛ばし、煙草のみ居る。上手障子屋體より、おてる、出ようとするを、九助、留めながら聞いて居る。

都　變つた事を云はしやんす。他所行きするは、どう云うてなりと、お前に逢はうと思うてゞござんす。アヽ、こりや、何なりと云うて、わたしを退けてしまうて、おてるさんと末長う、添ふ心でござんせうがなア。

ト取りつき泣く。

與五　オツと、もう疑ひ晴れた。最前の文の通りぢやわいの。

都　なんのマア、おてるさまは器量よし、眞實底は可愛からうがな。

與五　まだ云ふわいなう。なんぼ器量がようても、家の娘な身にかけて、悋氣さすが、世間へ聞かされた事かいな。

トおてる、腹立つ。九助、いろ〳〵留める。

都　其やうに云はしやんしても、おてるさまの悋氣は、お前が大切からぢやわいなア。

與五　イヤ〳〵、彼奴のは男可愛いのぢやない、身代が可愛いのぢや。折々遊んで見ると、煙管を持つてながら、やつと舐めた形と云ふものは、いけたものぢやない。モウモウ、顏見るも否ぢや。揚貴妃小町が出ても、其方に見返る心はない。機嫌直しやいやい。

トいろ〳〵あるうち、九助、おてるを宥め、奥へ連れて行つて、ソツと後へ出て、聞いて居る。

都　それでわたしは落ちついたわいなア。違ひないかえ。

與五　この身一生、女に飢える法もあれぢや。

都　エヽ、嬉しうござんす。

ト抱きつかうとする。九助、地團太踏んで

九助　エヽ、いま〳〵しいわい〳〵。

ト都を突き退けて

抱きついたり吸いついたり、こりや一體何をするのぢ

や。
與五　九助、いつの間に來たのぢや。
九助　いつの間に來うぞい。悋氣の名代に來たのぢやわい。
ちよつと出てもらはうかい〳〵。
ト早めの唄になり、與五郎を前へ連れて出る。都も附
き添ひ出て
コレ、下に居やんせ。如何に御寮人樣を誹るとて、アノ
おてるさまが、いつ舐めた顏した。町娘の風があるかな
いか、風味合ひは、マア一膳喰うて見たがよいわいの。
與五　そんなら、おてるが、名代に悋氣せいと云うたか。
九助　イヤ、そりや云うたでもなし、今ががにふぢや。
トこの間に狼の傳助、ソツと出て、茛盆の文を取つて
入る。
都　九助さん、ちよつと來て下さんせ……お前もおてる
さまに成り代つて、わたしを退かす氣かえ。
九助　オヽ、退かす。まつこと退かす、山伏頼んでも退かす
のぢや。
都　なんと云はしやんす。そりや狐つきぢやわいなア。
與五　コリヤ、ちよつと九助來い。
ト手取つて、こちらへ連れて來て

なんと、まだ突き出しの日から、若い者が馴染んだ太夫、
退くまいと云うたらどうするぞ。
九助　オヽ、こりや退かれまい。退いては濟まん。
都　この後お前が二人の仲、取持つて下さんすか。
九助　オヽ、持つ、グツと持つ。
與五　おてるが何と云はうが、悋氣さす事はならぬぞよ。
トこれより兩方へ引ツ張り合ひ、いろ〳〵詰める。九
助、困つたこなし。
九助　オヽ、さうせぐりかけてはどうもならぬ。これから
都さま、新町へ行かんせ。おれも行て、鰻玉子の暴れ食
ひするのぢや。
ト奧より彥助、十、傳助、お糸、おなつ、皆々仲居に
付いて出て
彥助　イヤ、おれが揚げ詰めの都、さう自由にはさゝんわ
い。
與五　ヤア、彥助か。
ト行かうとする。九助、留めて
九助　コレ、障らぬ神に祟りなしと云うて、よくばおれが
云ふ。マア、默つて居たがよい。
トぢつと鎭める。この間に都、二重舞臺へ上がる。

彥助　都、かいしよのない客を捨て、向後はこの彥助に乘り返るがよからうぞや……忝なくもこの彥助は、天滿老松町で、五間間口の彥助さまが、御簾中と云はせて見せうわい。
傳助　山崎屋與五郎は、大金持ちと聞いたが、見ると聞くとは大きな違ひ。養子息子の分際で、太夫買ひは出來過ぎる。
十　それ〳〵、阿波座の杓子か、横堀の鼻の落ちた和郎が似合ひ相應ぢや。
傳助　あの生白けた面わい。まるで蟇蛙が夕立に會うたやうな。
皆々　アハヽヽヽ。
　ト與五郎、ムツとして立ちかゝる。
九助　コレ、待たつしやれ。
　ト留める。
與五　今の惡口聞き捨てゝは、男が立たぬ。存分云ふのぢや。放せ〳〵。
　ト振り切つて行くを留める。
九助　あつちは大勢、多勢に無勢、云はぬは云ふにいや增る。爰が男の辛抱ぢやがや。

與五　九助、口惜しいわい〳〵。
　ト泣く。
彥助　可哀さうに泣くか。追ツつけ内を追ひ出され、紙子着るやうになつたら、此方へ來い。酒肴の剩つたの遣るわい。
　ト云ひ〳〵、杯取り飲んで
サア都、彼方へ行て飲まうぢやないか。都、酌さう。
都　イヤ、酒機嫌ぢやござんせぬ。
彥助　イカサマ、只は飲めまい。
　ト金を出して
駿河小判の新吹き五十兩、ちよつと出る小遣ひがこれぢや。櫛なりと笄なりと、欲しい物買や。
　ト五十兩の金包み、都の側へ置く。
傳助　したり、何の苦もなう五十兩投げ出した所は、天晴れ判官、そこでおいらが。
十　辨慶船子に力を添へて
傳助　判官ばらの花の降るのも
二人　待つて居りまするわいなう。
彥助　やかましいわい。どうぢや都、その金、氣に入らぬか。

都　問はぬ語りの空僭上、聞きたうはござんせぬ。どなたがどう仰しやらうが儘よ、與州さまの身は落ちぶれ、二人が一緒に袖乞ひするとも、添ひ遂げるが勤めの誠。皆ありや法界恪氣、構ふ事はござんせぬ。こんなさもしい物は、否ぢやわいなア。

　ト財布に入りし金包みを、庭の植込みへ抛る。

皆々　ヤ、、あの金を。

彦助　ハテ、よいわい。高の知れた目くされ金、板場なりと拾はうぞい。

九助　都さま、よう云はんした。おれがさう云はうと思うて居たのぢや。

與五　おれも、あれでちつと腹が癒た。

九助　空腹へ茶漬喰うたやうぢや。

　トこの時、丁稚長吉出て

長吉　若旦那樣、もうお歸りなされませぬか。

與五　そこ所ぢやないわい。

九助　イヤ〳〵、爰に居ては喧嘩の花が咲く。今のを汐に、勝鬨上げて、去なんせ〳〵。

都　お內方への首尾も如何。マア、お歸りなされませ。

與五　それもさうぢや。彦助、都は與五郎が身請けする。後日にもつれを付けな。詞を番うて置くぞよ。

彦助　身請けは金づく。こりや一番楯突いて見ようわい。

與五　九助、其方は後から。

九助　御寮人樣のお供して、何かは晩に。

與五　內で話さう…　長吉、來い。

　ト唄になり、長吉、連れて入る。

九助　マア、これで足手纏ひは拂うた。これからは達引ちや。

　ト尻引ッからげ、身拵らへする。皆々こなしあつて

彦助　そんなら與五郎の腰になつて、楯突くのか。

九助　オヽ、楯突くのぢや。

　ト鉢卷をグッと締めて、居合ひ腰になる。

皆々　ヤア。

九助　待てよ。

　ト指を繰つて見て

今日は日が惡い。重ねて逢はう。

　ト奥へ逃げて入る。皆々顏見合せて笑ふ。

彦助　ハヽヽ。イカサマ、お山の九助とはよう付けた。都、いよ〳〵おれを振りつけるのか。

　ト默つて行かうとするを留め

都　待つた、彦助も男ぢや。此まゝでは濟まさぬぞよ。
　濟むも濟まぬも廓の意氣地、無い縁ぢやと思うて下さんせ。

彦助　すりや、どうでも。
　ト取りつくを振り拂ひ

都　オヽしつこ。
　ト彦助、呆れて、都の顏を見る。
サア仲居衆、酒でも飲まう。ござんせ。
ト唄になり、お糸、おなつを連れ、奥へ入る。彦助、こなしあつて

十傳　親方、この納まりはどうさんす。

彦助　氣遣ひするな。浪花男の彦助が、都は花の奥樣ぢや。

傳助　さうなりや、めでたう一つ。

彦助　コリヤ、古いワ。これから座敷で飲み直さう。

十　そんなら親方。

彦助　サア來い。　返し
ト入る。

造り物、元の舞臺に戻る。誂らへの唄にて、油屋與兵衞、着附け、織色の胸前垂れ、草鞋、脚絆、帳面、矢立など腰に差し、油賣りの拵らへにて、向う片家にて

與兵　油よろしう。
　ト油荷を擔ひ、花道よき所まで出て來て
ヤレ／＼、日盛りは大分暑うなつた。
ト云ひながら、本舞臺へ來て、茶店の亭主藤助を見て
オヽ藤助さん、お忙しうござりませう。

藤助　オヽ、與兵衞どのか。早う廻らんすなう。

與兵　ハイ、昨日遠廻りを致しまして、今日は西邊を、今朝から富島瑞見山の方を廻つて來ました。時に內方も、もう切れてある時分。量つて置きませう。

藤助　イヤ／＼、こちは今度の廻りに量つて下され　マア、茶を一つ飲まつしやれ。
　ト茶を汲んでやる。

與兵　ハイ、これはお慮外でござりまする。
　トこれよりだんじり太皷になり、向うより太皷持ち大勢、繪馬と幟を持ち出て

大勢　ちようさや、ようさや。
　ト踊りながら、油荷へ轉げかゝる。

善吉　コレ〳〵妙林、曲ざしをやめにせぬか。もう爰は吾妻さまの來てござる魚源ぢや。
妙林　そんなら、これなりに練り込まうか。
皆々　千歳樂ぢや、萬歳樂ぢや〳〵〳〵。
ト騷ぎながら、皆々魚源へ入る。與兵衛、後を見送り
與兵　ヤレ〳〵、既の事に油荷を引ツくり返されうとしたあの衆は、どこの和郎達でござりまする。
藤助　あれは新町の太皷持ちでござるわいの。
與兵　なんの事はない、まるで狂人ぢや。ハヽヽヽ。時に藤助さん、わしはどの邊に、後の晦日の殘りを催促するのがござりますが、ちよつと行て參りまする間、この荷を預かつて置いて下さりませぬか。
藤助　オヽ、易い事ぢや。行てごんせ。
與兵　左樣なら置いて參りまする。どうぞちつとなりとおこせばよいが。
ト矢張り以前の唄にて、與兵衛、橋がゝりへ入る。
藤助　時に、預かり物取られてはなるまい。ドレ、入れて置かうか。
ト油荷を擔げて、茶店の内へ入る。この時魚源の内にて

與五　よし〳〵、ちよつと行て來るわいなう。
ト合ひ方になり、與五郎、出て來り、長吉も付き添ひ出る。
ア、お屋敷と云ふものは、堅苦しうてなるものぢやない。
ト床几に腰をかける。長吉も下手の床几へかける。
それはさうと、氣にかゝるは都の事。彦助にはあのやうに、口立派に云うたものゝ、何を云うても身請けは金づく。その金の出來ぬ時には、都は彼方へ身請けの相談。さうなつたらこの與五郎の男が立たず、身請けせうにも大枚金づく。何を云うても養子の身の上。こりや思案せにやならぬわいなう。
ト此うち丁稚長吉、眠つて居る。
その上、最前要次郎さまの仰せられたは、吳道の一軸修覆出來次第、お屋敷へ持參せよとの事。その場の間に合ひ云うたものゝ……これから幸ひ、それへ廻つて、一度催促せにやならぬわい……コリヤ長吉々々、コリヤ長吉。
ト脊を叩く。長吉、恟りして
長吉　ア、餅を一つ欲しい。
與五　エヽ、何を吐かす。サア、去なうぢやないか。

長吉　ヘイ、歸りますのか。
與五　知れた事ぢや。去ないでどうするものか。
長吉　今晩爰でお泊りなされませ。
與五　エヽ、阿房、何を吐かすのぢや。サア、行かう。
長吉　ヘイ。
ト唄になり、與五郎、丁稚連れて向うへ入る。また魚源の内より
傳助　サア、親方、行かんせ〳〵。
ト合ひ方になり、先に彥助、十、傳助、付き添ひ出て來り
十　あの與五郎め、口で立派に、身請け〳〵と吐かしても、都の身請けは大枚の金。
傳助　それがどうして養子の身で、自由に才覺がなるものか。
彥助　今に吠え面かはかして、この腹癒せをせにやならぬ。とは云ふものゝ、都めが體の身請けはするにもせよ、心ばかりは金づくで。
傳助　親方、何も案じさんすな。及ばずながら、おいらが寄つて。
彥助　そんなら、これから中へ廻つて飮み直さうか。
傳助　それがようござりまする。
十　そんならおい等も。
彥助　サア、一緒に來い〳〵。
ト唄になり、三人向うへ入る。魚源の内より、おてる先にお千代、おうの、九助、付き添ひ出て來り
てる　與五郎さんは、もう歸らしやんしたかえ。
九助　若旦那樣は、もう最前お歸りなされました。
てる　わしの手前は去んだにして、云はずと知れた新町へ。
九助　イエ、そりやお案じなされますな。わたしがしつかり請合ひまする。
てる　九助どのゝ請合ひなら大丈夫。それに違ひはないかえ。
九助　なんのお前樣、わたしが一言云うたれば、ちり〳〵として去なれましたわいの。
千代　御寮人樣、九助さんがあのやうに云はれますれば、大方違ひはござりますまい。
うの　ちつとも早う、お歸りなされませ。
てる　只氣にかゝるは都どのゝ事、どうぞ仕樣は。
九助　ハテマア、お案じなさりますな。又この九助が、文

珠の智惠を振ひ出し、あなたのお顏の立つやうに。わたしに任してお置きなされませ。

トえらさうに云ふ。おてる、こなしあつて

てる　あのやうに云はしやんすりや。九助どのに任して

九助　ちつとも早う

千代　お歸りなされませ。

てる　そんならさうしませう。皆もおぢや。

皆々　サア、お歸りなされませ。

ト唄になり、おてる、先にお千代、おうの、付き添ひ入る。九助、一人後に殘つて、えらさうに一人捨ぜりふを云うて、側を見て、誰れも居ぬゆゑ、悔りして向うを見て「オヽイ／＼」と、流行り唄にて向うへ足早に入る。あと誂らへの唄になり、下手より與兵衞、出て來て

與兵　只今歸りました。

ト茶屋の内より藤助、出て來て

藤助　オヽ、早かつた。どうぢや。掛けは取れましたかの。

與兵　きつい奴、三文もくれませぬ。えらい聲でしやつきつたら、げつそり腹がへつた。辨當殘り喰うてしまはう。お店を借りまするでござりまする。

藤助　オヽ、掛けて休んだがよいわい。おりやちよつと魚源の料理場まで行て來ますぞや。

與兵　行てお出でなされませ。

ト藤助、上手魚源の内へ入る。與兵衞、行李飯を喰ひかゝると内にて

吾妻　なんと皆さん、所を替へて、飲み直さうではないかいなア。

太鼓　如何やうとも御意次第。

仲居　サア皆さん、ござんせ／＼。

ト魚源の内より吾妻、他所行きの形にて、藝子小みつの肩にかゝり出る。妙林、善吉、松兵衞、庄吉、岩八、いづれも太鼓持ちにて、以前の繪馬を抱へ、妙林は幟を持つて出る。佐助、酒肴を持つて出る。岩八、平舞臺へ毛氈を敷く。皆々その上へ坐り、吾妻は床几へ毛氈を敷き、腰をかける、善吉、繪馬を出して

善吉　時に太夫樣、帶に錠卸ろした、お前樣の姿繪のこの繪馬。

岩八　この魚源へ持つて來いと仰しやつたゆゑ。

吾妻　サア、爰まで持つてもらうたは、天神樣のお旅へ、

上げようと思うて。

庄吉　そんなら佐助、これを上げて來い。

佐助　オイ〳〵、合點ぢや。

ト佐助、下手へ繪馬を持つて入る。妙林、こなしあつて

妙林　サア、太夫樣、杜若を肴に、一つ差上げませう。

吾妻　イヤ、その杯、素手では受けられぬわいなア。兼ねて心掛けのある岩八さま、斯うした景色、一入所望せうかいなア。

松兵　こりや、よからう。サア岩八、面白い趣向が聞きたいなア。

岩八　斯うもあらうか……色達を奪ふばかりや杜若。

庄吉　えらいワ。所で太夫樣の腕がありさうなものぢやがなア。

吾妻　腕をせいかえ。

皆々　どうぢやな〳〵。

吾妻　斯うかいなア。酒のゆかりにゆなす戯むれ。

皆々　恐れ入りました、感心々々。

吾妻　また煽てかいなア。

皆々　怪しからぬ出來でござりました。

いと　サア、岩八さま、太夫樣に胸發句、おれが〳〵の藝者さん方、こりや負けては居られそむないものぢやぞえ。

妙林　ぢやと云うて、俳諧は不得手なり、斯う云ふ所で謠でもなし。

岩八　聲色も氣障で惡し、淨瑠璃は聲が惡し、

庄吉　角力取らうに力はなし。

妙林　いつそこの妙林が、念佛講でも始めようか。

岩八　そんな坊主臭い事は惡い。斯うせうか。この頃南で流行りの江戸拳を、この人數で始めようかい。

皆々　それ〳〵、座敷になつた。サア、始めた〳〵。

妙林　合點ぢや〳〵、皆並んだ〳〵。

ト誂らへの合ひ方、鳴り物になり、この人數、二人づつ差向ひに並び、皆々下座に合して

皆々　夏の夜に難波新地の野州にて、さつと聞えし瀧の音、チンチリカン〳〵のオイ、あんまり涼しい、もう去なう、お客さん待ちな、後の仕掛けは馬が居るやう引いた、ちらと見つけし乘りかけお馬は、チンチリガンチンチリガンのオイ、櫻田目がける政右衞門、股五郎志津馬、試合の達者、評判で大入りぢや、ヨイ、チヨン〳〵ノチ

ヨン。

皆々　ハヽヽヽ。

ト皆々鳴り物に合せ、よろしくある。この間に與兵衞、吾妻をフト見て、惚れるこなし、ウットリとして見惚れて居る。

いと　それはさうと、もう暮れさうなぞえ。

吾妻　いつそ松ケ端へ出て、船で去なうではないかいなア。

庄吉　松ケ端へ出るの道筋は。

岩八　江戸拳の替へ唄はどうであらう。

吾妻　これはよからうわいなア。

妙林　サア、皆急がんせ〳〵。

ト鳴り物になり、皆々内の鳴り物に合はせ、江戸拳の替へ唄云ひ〳〵、向うへ入る。最前より與兵衞、吾妻に見惚れて居て、この時花道際まで、ウカ〳〵行て、小首を傾むけ、ウットリして後を眺め居ると、内より藤助、出て

藤助　オイ〳〵、おれが跡を片附けるぞ。

ト云ひ〳〵出て來て

こりや何ぢや、えらう取散らし居つた。

トそこらの道具片附けながら、與兵衞を見て

オヽ、與兵衞、貴樣まだ居るか。もう暮れるが、去なんかいの。

ト云うても與兵衞、向うを見て居るゆゑ

與兵衞々々々、コレ與兵衞。

ト脊中を叩く、與兵衞、フッと心附く。本釣り鐘、ゴンと突き出す。兩人顏見合せ、こなし、この模樣よろしく拍子、

幕

二幕目

老松町山崎屋の場
藏屋敷裏通の場

役名――山崎屋與五郎。同番頭、權九郎。同後家、おちゑ。同娘、おてる。野手の三。下駄の市。お山の九助。幇間、佐渡七。手代、庄八。同、喜助。林十平次　幇間、妙林。藥屋彥助。藤屋の都。橋本宗右衞門　實ハ幻竹六。

造り物、二重舞臺、納戸口より上に重れ戸棚。臆病

口、障子屋體、橋がゝり、格子。門口に御神燈の提灯吊りあり、番頭權九郎、帳面扣へ算用して居る。表に、お山の九助、浴衣前垂れ、横鉢卷きにて、下駄の市、獅子舞ひの形にて、掴みかゝる。九助、割り木を振り上げ居る。野手の三、留めて居る。

三　待たんせ〱。

九助　聞かんのぢや〱。

トやかましきだんじり太鼓にて、幕明く。

市　割り木で毆るか。面白い。毆られうわえ。

九助　どたまの血を、ぶちみしやいでこますのぢや。

三　これはマア、聞かんせいなう。われも默れやい。

九助　まだ六月にもならんのに、獅子舞が呆れるわい。

三　天神樣のお旅の御遷宮ぢやワ。

九助　御遷宮なら獅子が失せる筈かい。

市れ　失せたらどうぞするかい。

九助　いま〱しい毛才六ぢや。

ト割り木にて叩きかゝる。野手の三、留める。下駄の市、捨ぜりふにて、やかましう云ふ。此うち、番頭權九郎、算用して居る。

權九　病なしめらが、やがましうてなる事ぢやない。

ト表へ出て、門口で

何を云ふのぢやい。九助、われもえい加減にあかけやい。

九助　番頭さん、慮外ながら九助が暴れ出したら、天地でも鳴動さすのぢや。うぬら、こづき殺してしまふのぢや。どう乞食め。

市　乞食とはどうぢやい。

權九　サア〱、えいてや。御遷宮に獅子を舞ふが、天々舞をせうが、何ずるも身過ぎぢや。喧嘩をして居ては口が乾上がる。サア〱行け〱。

三　番頭さんの挨拶ぢや。マア〱、行け〱。

市　ぢやてゝ彼奴を。

三　ハテサテ、行けやい〱。

ト引ッ張つて入る。

權九　いろ〱の世話をやかしやアがる。やかましい奴等ぢや。

ト内へ入り、また帳合ひする。後家おちゑ、姥の形にて、おてるを連れ、下女二人付き添ひ、納戸より出て來り

ちゑ　九助、下から木を持つて來たさうなが、受取つてた

もつたかや。
九助　ハイ、二杯參りました。二かけは臺所へやつて、木山へ上げました。
ちゑ　それは大儀であつたの。權九郎、店の勘定は合ひましたかや。
權九　どう算用しても、貳貫目餘りの不足。モシ、旦那が茶屋入りのおどもり、こんな事であらうと思うた。御寮人樣、あの與五郎さまは養子聟、お前樣は爰の血脈、大事の身代を大方にしられて居て、後悔するものぢや。常々から御思案なされと申しまするは、爰の事でございますわいな。
てる　又あんな事を云やるぞいなア。なんぼ入り聟でも、殿御と定むるからは、この身代はどうならうとも、與五郎さまの心任せ。そんなわんざんは云はぬものぢやわいなア。
權九　ハテ、結構なお裁きぢやなア。
ちゑ　おてるの云やる通り、與次兵衞どのが先の內室はお過ぎなされ、このちゑは後連れ。所に與次兵衞どのにも去年過ぎられて、今では後家の身の上。與五郎どのは養子といへど、家の後繼ぎ、時に觸れての里通ひ。尤も若い間は一盛り、やむ時分にはやむであらう。悋氣嫉みは女の戒め、心得たがよいぞや。
てる　アイ〳〵、そりやよう合點して居りますわいなア。
權九　よもや〳〵と思うて油斷するうちに、山崎屋の身代は沒落、家藏に草の生えるを見るやうな。おちゑさま、お前樣も後家立て暮らさうより、頃合ひな男を持つて、山崎屋の家の立つやうにしたがようございまする……それも嫌かな。お爲を存じて申す事が、お氣に染まねば、せう事もないのぢや。
九助　ちよつと云ふ程の事が可愛らしい。
權九　可愛らしいとは、意地の惡いと云ふ事か。
九助　マア、そんなものぢや。
權九　なんでおいらが意地が惡い。
九助　それはなア。
權九　わりや爰の內へ出入りする仲仕ぢやないか。番頭のおれを、意地惡にしても大事ないか。
九助　サア、それは。
權九　意地惡の番頭が出入りを留めようか。
九助　ムウ。
權九　白痴者めが。

九助　番頭さん、假初めにも白痴々々と云はんすが、白痴と云ふは、田地を分けて貰ふ事ぢや。慮外ながらこのお山の九助、ついしか人に物を貰はぬ男ぢや。それとも氣に障つたら堪忍して下んせ。
權九　阿房めに相手になると、こちまで阿房になる。ハ、ハ、。
　ト下座より庄八出て
庄八　いま歸りました。
權九　庄八、爲替の金、受取つて戻つたか。
庄八　親旦那が死なしやつたゆゑ、七むづかしう申しましたけれど、辯舌を以て手帳の表、金子百兩、受取つて歸りました。直ぐに掛け屋へ寄つて改めて歸りました。
　ト財布をおちゑに持つて行く。
ちゑ　大儀であつた。おてる、この金を帳簞笥へ入れて置きや。
てる　アイ〳〵。
　ト財布を受取り、奧へ行く。琴唄になり、向うより、幻竹六、袴羽織、國侍ひの拵らへ、平岡丹平、家來の拵らへにて、箱提灯の畳みしを持ち、付添ひ出て來り
丹平　卽ちあれが山崎屋と見えまする。
竹六　案內いたせ。
丹平　ハア〳〵。
　ト兩人、舞臺へ來り
　どなたぞお頼み申しまする。
九助　通らつしやれ。
丹平　イヤサ、お頼み申しませう。
庄八　手の隙がないわいの。
丹平　卒爾ながら、山崎屋與次兵衞どのゝ宅にこれか。
權九　成る程、山崎屋與次兵衞は手前でござりまするが、なんぞ御用でござりまするか。
丹平　如何にも御用事だ。
九助　左樣なら、あれへお通りなされませ。
竹六　推參いたす。許しやれ。
　ト九助が前を通り二重へ行く。九助、大小差して居るを見て、恟りして居住ひ直して畏まる。丹平、片脇へ扣へる。おてる、出る。
ちゑ　ソレ、お莨盆お茶でも上げましや。
下女　畏まりました。
　ト一人は莨盆、一人は茶を持ち出る。
ちゑ　ついにお見受け申しませぬが、與次兵衞は去年過ぎ

られまして、只今の主と申しまするは、與五郎と申しまする。私しはこのてるが母、ちゑと申す者でござりまする。

竹六　與次兵衞どのには死去の事も、承り及んでござる。それに居めさるゝが、與次兵衞どのゝ形見の御息女でござるかな。

てる　ハイ、てると申します。

竹六　なか〳〵はすはさうに見ゆる。お聞き及びもござらう、拙者事は八幡の家中、橋本宗右衞門と申す者でござる。

ちゑ　橋本宗右衞門さまとあれば、アノ與五郎どのゝ

竹六　實の兄でござる。親ども治部右衞門存生中の折から、拙者へのお話しに、與五郎が儀は、劍難の相あるゆゑ、武家にあつてはその身全たからずとて、當家へ不通の養子。それゆゑ親治部右衞門過ぎられし後も、堅く義を守り音信不通。

ちゑ　成る程、あなたの事は與次兵衞どのも、兼ね〳〵の噂。與五郎どのも、その事を申し出して居られます。

てる　折の悪い與五郎どのゝ御他行中。母さん、呼びますに、どうかいなア。

竹六　イヤ〳〵、第一對面は内證。今日參りしは、殿よりの御用。即ち八幡家の御秘藏たる、吳道の墨蹟、修覆の御用蒙むりし與五郎、最早出來の日限。殿の上意に依つて、受取りに罷り越したのでござる。

ちゑ　そのお掛け物は、昨日修覆が出來ましたとござります。與五郎の歸りし上。マア、それまでは奧へござつて。

竹六　ナニサマ、弟他行とあれば、休息いたして相待ち申さう。御家内はどれ〳〵も初めての見參。其許は御番頭と見受けましたが。

權九　御意の通り、お家譜代の白鼠でござりまする。

九助　そこで御寮人樣を、駕ろう〳〵と致します。

權九　差出やアがんな。

九助　オットショ。

ちゑ　庄八、お杯の用意しや。

庄八　畏まりました。

竹六　イヤ〳〵、お心遣ひは却つて迷惑。

丹平　下郎めも、暫らくお勝手に扣へまする。

下女　私しが御案内いたしませう。

ちゑ　サア、おてるも來て、お取持ち申しや。

竹六　まだ折入つてお話しもござれば。
ちゑ　マア、御案内いたしませう。
竹六　それは御苦勞。丹平、次へ。
丹平　ネイ。
ト唄になり、おちゑ、竹六を案内して、庄八付き添ひ、障子屋體へ入る。丹平は中戸へ入る。おてるも付き添ひ入る。權九郎、算盤取つて
權九　いま〳〵しい、この算用がどうして合はぬ。
九助　餓るうなつた。一杯茶啜つて來うわい。
ト納戸へ入る。渡り拍子になり、向うより、與五郎、醉ひたる體にて、垂れ駕籠に乘り出る。花道にて、杖をして
駕一　えらう騷ぎ居るわい。
駕二　あれは御遷宮へ寄進を持つて行く、だんじりの囃子ぢやわい。
駕一　さうかい。とんと六月のやうなぞよ。
ト また駕籠を舁き、門口へ來て
駕二　時に、この旦那の内はどこぢやろうな。
駕一　マア、下ろして問うて見い。
駕二　モシ、旦那々々、起きさんせ〳〵。
與五　オツト、ちよつと押へるてや。
駕一　これは益體ぢや。コレ、内方は、どこでございます。
駕二　行く先が知れぬわいなう。
與五　ハテ、もう杯は、われが所へ置くのぢや。一つ呑め呑め。
駕一　これは他愛がない。權よ、どうせうぞい。
駕二　どうと云うて、どうも仕樣がないわい。
ト此うち、權九郎、帳合して居て
權九　コレ〳〵、貴樣達は、何を云うて居るのぢや。
駕一　イヤ、小野からこの旦那を乘せて來た辻駕籠、酒に醉うて他愛がござりませぬ。
駕二　何を問うても夢中ぢやに依つて、行く先が知れませぬ。
權九　それは氣の毒ぢや。とつくりと氣を付けさしたがよいわい。
ト云ひ〳〵表へ出て、顏見て
ヤア、こりや此方の野良どのぢや。
駕一　内方の旦那でござるか。
權九　こりや、なんの眞似ぢや。マア、入らつしやれま

せ。

ト引ッ張ろ。

與五　どこへ連れて行く。爰で寢さしてくれいやい。

權九　ハテサテ、入らうてや。

ト引ッ張ッて入る。

駕一　されども、駕籠賃は貰うて置いた。

駕二　旦那を渡しましたぞえ。サア、來い〳〵。

ト入ろ。

與五　コリヤ〳〵、逃げるとは手が惡い。おのれ、引ッ捕へて呑まさねば置かんのぢや。

トまた横になり寢る。

權九　好い加減に巫山戯さつしやれ。コレ〳〵。

ト搖り起し

熟柿臭うなつて、寄りつかるゝものぢやない。

トあちらへ行く。幇間佐渡七、出て來り

佐渡　與五郎、内に居るか。與五郎に逢はう。

權九　ツイに見知らぬ和郎ぢやが、與五郎々々々と、なんで呼捨てにするのぢや。

佐渡　貴樣は誰れぢや。

權九　おりや番頭の權九郎と云ふ者ぢや。

佐渡　番頭か。よいワ。高でこの家の與五郎に。オヽ、與五郎、そこに居るかい。コリヤ、寢て居て濟むかい。起きぬか〳〵。

權九　親方は酒に醉つて他愛がない。なんの用ぢや。おれが聞かうかい。

佐渡　云はうと思うて來たのぢや。おりや鐵火の胴八と云ふ堀江の粹方ぢや。與五郎に盞の上で百兩のいきさつ。長袖ぢやと思うて油斷したが、大きに誤まり。生馬の目を拔く胴八を、ようもやか事にかけやアがつたなア。

權九　これは、近所の手前がある。靜かに云はつしやれ。そんなら何か、此方の若旦那に不實の事のいきさつで、貴樣に金を借つて濟まさぬと云ふか。

佐渡　オヽ、金貸した證據と云ふは、コレ、この一腰。

權九　ナニ、證據。ドレ。

ト一腰取つて見て

こりや若旦那の差し料。

佐渡　それを抵當に取つて、呑み込んだ百兩。なんぼ程の値打ちかは知らねども、おいらが手にあつては猫に小判、正眞の小判に取替へてもらはうかい。

權九　さう云へば、萬ざら嘘もあるまい。コレ、若旦那。

性根を付けさつしやれ。博奕の抵當に腰の物をやつた覺えがござりますか。

與五　あるとも〳〵。それで足らずば羽織小袖、印籠も紙入れも、盆の上なら、持つて行け〳〵。

佐渡　千も萬もいらぬ。盆の上へ引ッ張つて行て、ぶちのめしてなと腹を癒るのぢや。ならずめ、うせう。

ト與五郎を引立てろ、權九郎は無體なと留める振りにて、共に引出さうとする。この時、九助、ツカ〳〵と出てもぎ放す。

九助　コリヤ、さうはさゝぬ。此方の若旦那を、どうするぢや。

佐渡　知れた事。博奕場へ引摺つて行くのぢや。

九助　それはさすまい。

佐渡　さすまいとは。

九助　盆の上の達引百兩の金、濟ましさへしたら、云ひ分はあるまいがな。

佐渡　サア、その金が濟まぬに依つて。

九助　イヤ、その金濟まさう。

權九　アヽ、百兩のせりふを。

九助　おれが濟ます。恐らくお山の九助が濟ますと云うたら、閻魔大王が請け判も同然ぢや。

權九　コリヤ〳〵、九助、われが挨拶で濟ますと云ふが、その百兩の金は、どこから出る。

九助　ハテ、爰の內から。

權九　そりやならぬ。

九助　なんでならぬ。

權九　下地に貳貫目と云ふ勘定の立たぬ、それさへこの番頭が引負ひにしたかと、疑ぐられて居るその上に、百兩とは、さうはならぬ。

九助　そんなら何か、親方の難儀になる事を、構はぬ氣かい。

權九　難儀にならうが、首が落ちやうが、家の破滅には替へられぬわい。

九助　こりやモウ、そろ〳〵堪忍の緒が切れたわい。

ト鉢卷をする。

權九　何ひろぐのぢや。おのれは仲仕の分際で、番頭に楯突くのか〳〵。

ト胸倉を締める。

九助　コレ、咽喉が締まるわい。

權九　オヽ、締め上げて殺すのぢや。

九助　なにを。
　トいろ〳〵藻掻き、腕へ喰ひ付いて、立廻りにて、横
　腹へ當てる。權九郎、ウンとへたる。
見たか。手並の程は、ざつと斯んなものぢや。
　トこの前より障子明け、おてろ、見て居る。
佐渡　したり、今の鹽梅、えらいもんぢや。驚ろき入つ
た。時に、百兩の金受取らうかい。
九助　サア金は。
佐渡　サア、受取らうかい。
九助　それはなア。
佐渡　但し、盆の上へ引立てうか。
九助　サア。
佐渡　金を戻すか。
兩人　サア〳〵〳〵。
佐渡　九助、返事はどうぢやぞい。
　ト障子の内より、金財布を抛る。
九助　この財布は。
てる　與五郎さまの御難儀、百兩で濟む事なら。
九助　すりや、この金を。
てる　九助、好いやうに頼むぞや。

　ト障子をさす。
九助　出來た。御寮人様の志し。ソレ、引負ひの百兩、持
　つてうせう。うせ居れ。
佐渡　慥かに受取つた。
　ト合ひ方になり、皆あたりを見て
權九　シイ。
佐渡　ソレ百兩。
　ト權九郎へ渡す。財布より出し、五十兩包み分けて
權九　若旦那、無うて叶はぬと仰しやつた五十兩。ソレ。
與五　其方の云やる通りにしたが、可哀さうに、おてるを
　騙して。
權九　ハテサテ、氣の弱い事仰しやりまするな。掛け屋の
　彦助と意氣づくになつて、都が身請け、當分の手付け金
　の五十兩を、才覺をしてくれいとのお頼み。そこで思ひ
　付きました今の狂言。
九助　手附けの方は、それでよいが、殘つた五十兩は。
權九　こりや、店の勘定。おれが取つて置いて、帳面を埋
　めにやならぬ。
九助　ハテ、よくした細工ぢやなア。
權九　時に、幇間の佐渡七が、敵役の思ひ入れ。どうも云

へなんだ。

佐渡　私しは九助が今の身鹽梅、えらいものでござりました。

九助　どこぞの芝居から、立役に抱へさうなもの。

與五　どうやら氣の濟まぬこの金、と云うて都が手付け金もやらねばならず。

權九　ハテ、案じずと、マア、手付けの方を片付けたがようござります。

與五　佐渡七、扇屋才兵衞へこの金を持つて行て、受取を取つて來てたも。

佐渡　心得たりと云ふ儘に、ドリヤ、一走り行て來うか。

ト聲色にて云うて、走り入る。

與五　マア、あれで落ちついた。

九助　時に、とんと忘れて居た。

與五　何がいなう。

九助　常々お話しのなされた、八幡の兄御が來てござります。

與五　ムウ。兄弟なれど幼少で別れ、音信不通の兄者人が。

九助　ドレ、おれは臺所へ行て、一杯祝ひに引ッかけようか、

ト入る、權九郎。思案して居て、硯箱を持ち來り

權九　若旦那、一筆書いて下さりませ。

與五　なんと書くのぢや。

權九　今の百兩、この番頭が料簡で、御客人樣を騙つたと思はれては、これまで立て通した潔白が、砂になりますと云ふばかりの心得に、私しに百兩の金、お前が借り受けたと云ふ一札を、書いて欲しうござりまする。

與五　尤もぢや。サア、何とか文言を望んだがよい。

權九　一札の事、色里諸拂ひに差支へ、店の帳面を明け候ふに付き、勘定立ち申さず、女房てるを僞はりて、金百兩騙り候ふところ、其方に見咎められ、料簡の上沙汰なしに致しくれ候ふ段、忝なく存じ候ふ、然る上は何時にても金子を調へ、其方へ難儀をかけ申すまじく存じ候ふ、念のため後日一札件の如し、權九郎どのへ、與五郎より。

ト口移しに認める。

與五　サア、これでよいか。

ト渡して入る。それと引違へて、橋がゝりより、男、風呂敷包みを持ち出て來り

男　モシ、内方でござりますか。權九郎どのに逢ひたうござりまする。
權九　權九郎はおれぢやが、なんの用ぢや。
男　茶屋の彥助が、この古手を賣りたいとあつて、持つて參りました。
ト權九郎、風呂敷包みを明けて見て
權九　こりや小紋の羽織、これを賣りたいと云はるゝか。
男　委細は、この狀に書いてござりまする、
權九　ドレ〳〵。
ト披きて讀む。
兼ね〳〵申し合せ候ふ通り、厄病神にて敵と存じ候ふ羽織の外に、卷添へ御座候ふ間、とくと御覽なさるべく候ふ以上、山崎屋權九郎どの、彥助より。
ト讀み、羽織をいろ〳〵見て、面妖なと、また狀を見て
外に卷添へ御座候ふ間、とくと御覽なさるべく候ふ。
ト羽織を振つたり、そこらを尋ねたりする。この時、おてる、出て來り
てる　コレ權九郎、奧へ御酒を出せと、母樣が仰しやつておぢやわいなう。

權九　ヘイ〳〵。イヤコレ、お使ひ、羽織の外に卷添へは見えぬ。忘れたぢやないか。去んで問うて來て下んせ。
男　ヘイ〳〵。
ト下手へ入る。
てる　羽織の小紋、可愛らしい小紋ぢや。母樣に見せて來う。ちよつと借るぞや。
ト羽織を持ち入る。
權九　これは〳〵、買うたやら貰はんやら知れもせぬ物を破るまいぞえ。
トまた狀を見て
とんと合點がゆかぬ。
九助　番頭さん〳〵。
ト呼び〳〵出て
コレ、木戶まで急用ぢや。ごんせ〳〵。
權九　仰山な。なんぢやぞい。
九助　お汁が出來ました。
權九　とんと合點がゆかぬ。
ト九助、權九郎を納戶へ引ッ張り入る。奧より、與五郎、出て
與五　佐渡七が便りも聞きたし、マア、墨蹟をお渡し申し

て。
ト行かうとする。奥より、バタ〳〵にて
ちゑ　どこへ逃げる。宗右衛門さま、お留めなされませい
な。
竹六　ハテサテ、待たつしやれと云ふに。
トおてる、逃げて出る。おちゑ、杖を持ち折檻するを、
竹六、右の羽織を持つたながら出る。納戸口より、手
代喜助、庄八、丁稚出る。與五郎はおてるを圍ふ。
與五　おちゑさま、こりや何事でござりまする。
ちゑ　いま隠した文を、爰へ出して、宗右衛門さまにも讀
んで聞かせませぬか。
てる　イヽエ、こりや讀むには及ばぬものぢやわいなア。
ちゑ　讀まねばいつまでも折檻する。有やうに云はぬか、
不孝者め。
與五　おてるが隠す文とあれば、如何にしても怪しい。サ
ア、爰へ出して、お見せ申したがよいわいの。
てる　見せいでも大事ない。羽織の注文でござんすわいな
ア。
ちゑ　アレ、まだ白々しい僞はり、思ひ參らせ候の存じ參
らせ候のと云ふ、羽織注文があるものか。母の育てやう
が悪さゆゑと、宗右衛門さまの思し召し。養子と云へば
猶更に、義理も深い與五郎どのゝ手前が、わしや面目な
うてならぬわいやい。
與五　左樣仰しやれば、どうやらおてるが、不義して居る
やうで。
ちゑ　イヤ、不義をして居ます。
てる　コレ、母様、姫御前の行儀作法は、なんぼう拙ない
わたしでも、よう辨まへて居りまする。大事の殿御を袖
にして、道ならぬ事をするやうな、このてるではござり
ませぬわいなア。
與五　但し、潔白なら隠した文を見ようか。
てる　サア、この文ばかりは。
ちゑ　見せられねば、いつまでも折檻。
ト立ちかゝるを。
竹六　これは短氣な。マア〳〵、待たしやれ。
與五　あなたが見ぬと仰しやつても、おれが見ねば置か
ぬ。サア出せ。出さぬとて、出さずに置かうか。
ト懐中より、文引出す。
てる　ア、申し、それは。
與五　それはとは徒ら者、どう畜生め。

ちゑ　兄御樣のお側で、ちやつと讀まつしやれいなう。

與五　讀み上げた上では、おれも思案がある。兄者人もお聞き下されませ。コリヤ庄八、この文を爰へ出て、讀め讀め。

庄八　ヘエヽ、私しは、

與五　おれが云ひ付けるのに、なんで讀まぬ。

庄八、ヘイ、左樣ならば讀みまする。

ト庄八、向うへ出て

與五　讀め〳〵。

庄八　この程は打絶え候ふゆゑ、只懷かしくのみに暮らし參らせ候ふ、眞底々々替る心はなく候へども、月に叢雲、花に風とやら、任せざる浮世、兎角うるさきは云ひ號けのてる。

ト與五郎、悔りする。おてる、俯向く。

與五　そりや、もう、讀むな〳〵。

ト文を引取る。

竹六　イヤ、與五郎、其まゝ讀ませい。

與五　ハイ。

トうぢ〳〵する。

竹六　どうぢや、讀まさぬか。

トこなしあつて云ふ。

與五　ハイ。

トこなしあつて

おのれが讀みやうが悪いのぢや。片寄つて居れ。

庄八　ヘイ〳〵。

ト元の所へ來る。

喜助　私しが讀みませう。これへ遣はしやれませ。

ト眞中へ出て、文を取り讀む。

あるは嫌なり、思ふはならず、深切に申す程猶々嫌らしく。

ト九助、あらはに讀むなと仕方する。喜助、呑み込みオヽ、嫌らしくではない。……なんぢや。この節天神のお旅遷宮の賑はしく候ふまゝ、ちと〳〵お參りあるべく候ふ。

ト與五郎、さうぢや〳〵と頷づく。

また難波新地に野側の涼みの瀧、きつう〳〵評判に候ふ。

竹六　コリヤ〳〵、讀み替へずと有體に讀め。

喜助　ヘイ。

竹六　但し、身共が讀まうか。

喜助　イヤ、それでは。
　トうぢ／＼する。
竹六　コリヤ、そちらに居る者、そこへ出て、有やうに讀め。
丁稚　ヘイ／＼。
　ト眞中へ出て讀む。
深切に申す程、猶々嫌らしく、慕ふ程側に居る事は嫌にて候ふ／＼、おてる事は嫌々にて大禁物にて候ふ。
與五　もうよいわいやい。
竹六　イヤサ、讀ませ。
丁稚　ヘイ。
　トうぢ／＼とする。
竹六　早く讀め。
丁稚　又そもじとは二世三世、嫌ひなおてるは去り狀を遣はし、追ツつけそもじを身請け致し、据ゑ替へて替らぬ夫婦、盡させぬえにし待つに候ふ、めでたくかしく。
　ト讀み、下に置く。與五郎、術なきこなし。おちゑ、おてるを賞める心、また竹六の方を見てこなしある。
竹六　與五郎、奥の宛名を讀め。讀まぬか。不屆き者めが、コリヤ、その文をこれへ持て。

丁稚　ヘイ／＼。
　ト持ち行く。竹六、取上げ
竹六　ナニ、扇屋都どのへ。下の名は。
與五　ハイ、私しでござります。
竹六　不埒者めが。
　ト文を打ちつける。おてる、泣いてゐて、この時與五郎が一腰を取つて死なうとするを
ちゑ　コレ待ちや、まだこの上に面目を失なふか。疑ひさへ晴らしたら、死ぬるに及ばぬわいなう。
　ト刃物を引取ると、合ひ方になり
てる　兄御樣や母樣に、疑がはれて、譬へ死んでも、あなたを惡しくは思はせとむないばかり、與五郎どのゝ思し召しも、手を廻してこの文を取寄せ、斯樣にしたのか憎い奴ぢやと、お疑ひもかゝる筈。なんの／＼誓文、さうした事ではござんせぬ。先刻に餘所から持つて來て、渡して居たあの羽織、好いた小紋の染め地をば、與五郎どのにも染め上げて、着せましたいと母樣へ、見せに行た羽織の縫ひ目に、絎け込んだあの文から、露顯にかゝつたは、皆わたしが取廻しが鈍なから。あなたの御難儀を顯はして死ぬるのが、わたしや悲しうござりまするわい

なア、
ちゑ　おてる、出かしやつた。それ程までに思やるものを、由ない母が廻り氣で、今更の後悔。
　ト竹六が方を見て
斯うなつては、どうも云ひやうがないわいなう。
　ト與五郎、こなしあつて
與五　これまで不通の兄者人、今日初めての對面に、與五郎が不行跡の段々。何は格別、今日は殿樣の御意とあつて、墨蹟を受取りのお役目。卽ち修覆も調ひましてござれば……。
　ト一軸を出して、竹六へ持ち行き
改めてお受取り下されませう。
　ト渡す。竹六、受取り一軸を出して見て
竹六　墨蹟筆勢、紛ひもなき吳道の一軸。慥かに落手いたした。
　ト箱へ納める。
與五　おちゑさま、さぞお腹が立ちませう。さうぢや。
　ト一腰を出して死なうとする。
てる　アヽイヤ。
　ト留める。

與五　イヤ、放してたも。
　ト死なうとする。丹平、前より窺うて居て出て留める、
丹平　コレ待つた。早まるまい。
與五　ヤア、こなたは。
丹平　宗右衞門さまの家來丹平と云ふ者。留めに出たのも御主人筋、今あなたが爰でお果てなされて、兄御樣が出かしたと、お褒めなさりませうか。また爰な後家御も娘も嫌はれ、それで腹癒せと喜ばれませうか。
與五　ヤア。
丹平　いま死なしやつては面當て同然。義理の濟まぬ上には、死に慌てる所でござるまい。マア、とつくりと。
　ト無理に留めて
思案して見さつしやりませ。
　ト與五郎、こなしあつて
與五　すりや、死ぬるにも死なれぬか。ホイ。
　ト當惑のこなし。權九郎、出かけて居てこの時、ズッと前へ出て
權九　宗右衞門さま、若旦那を連れて歸らつしやりませ。
竹六　なんと。

権九　所詮この家の身代を、持ち遂げぬ他愛なし。去り状取つて、ほいまくつたがようござりまする。

ト竹六、こなしあつて、煙草をのむ。

ちゑ　権九郎、そりや何を云やるぞいなう。

てる　假初めにもそんな事は、云うてたもんないなう。

権九　御寮人様、その眞實を見拔いて、阿房にしたい程しられて居りますわいの。何は兎もあれ、番頭役を勤めるからは、家の立つやうにせねばならぬ。店の勘定、二貫目の餘も足らぬ上、先刻に戻つて、百兩の金くすね出した事、黒い眼で、よう睨んで置いたのぢや。

與五　権九郎、あの金に斯う／＼せよと、其方の思ひ付き。殊に五十兩は、わが身が取つたぢやないか。

権九　これは情ない。人に科をかぶせるのか。さうは乘られぬわい。コレ、慥かな證據はこの一札。

與五　ヤア、それは。

権九　なんと、この権九郎に見付けられ、必らず云うてくれな。難儀はかけぬと、誰れが書けとも云はぬに、この一札。どなたも只今お耳へ入れまする。

ト最前の證文を出して、竹六、おちゑ、おてるの側へ持ち行き、何遍も文言を讀む事あつて

首拔きならぬこの證文。盜人騙りと云ふが、誤まりではあるまいがな。

ト證文を振り廻す。おてる、権九郎が側へ行て

てる　ヤイ権九郎め、日頃からなんの彼のと云ふを、聞入れぬ戀の意趣、與五郎さまに御難儀をかける、おのれが企みかいやい。

與五　おてる、もう云やんな。彼奴が企みは知れてある。サア、百兩の金を爰へ出せ。

権九　妙な事を云ふわいの。こなたがくすねたればこそ、證文を書いたぢやないか。

與五　細言云はずと金を出せ。

権九　イヽヤ知らぬ知らぬ。

與五　とは云はさぬこの懷中。

ト懷中へかゝる。

権九　猪口才な。何するのぢや。

ト振り放す。掴み合ふを九助出て

九助　コリヤ、さゝぬわい。

ト権九郎が後を取つて引きこかす。

権九　この中へしや／＼り出ては、うぬも騙りの同類ぢやな。

九助　若旦那がひよんな事に、一札書かしやつたがお前の誤まり。云ひたうて〳〵、腹がクラ〳〵沸え返るわい。
　ト權九郎を見て、口惜しきこなしあつて
おちゑさま、騙つた百兩は、この九助が借りましたのでござりまする。
權九　口先で文なしても、コリヤ、書き物がものを云ふわい。
　ト丹平、前へ出て
丹平　その證文これへ。
權九　ソレ、とつくりと見やんせ。
　ト證文を丹平へ渡す。
丹平　ア丶、これが與五郎どのゝ手蹟か。ハテ、胡亂がましい。
　ト證文を破る。
權九　ヤア、大事の證文を。
丹平　與五郎どのはこの家の主、我が金を我が自由にするを、騙りとは云はれまい。
權九　サア、それは。
丹平　但し、この證文のいきさつ、詮議をせうか。
權九　サア。
丹平　サア。
兩人　サア〳〵〳〵。
丹平　番頭、どうぢや。
權九　ムウ。尤も。理の當然ぢや。
　ト最前の男、走り出て來り
男　申し、權九郎さま、先刻の卷き狀は、袖に縫ひ込んでござりまする。
權九　サア〳〵、よいてや。
男　よくば代金拾兩、貰うて歸りませう。
權九　サア、よい。遣るわいやい。
　ト懷中を探し、ウヂ〳〵して
九助、いよ〳〵百兩は、われが引負ひぢやな。
九助　妙な事に念を押す。われには借らん。金を借つたと云ふ譯があるわい。
權九　借つたに違ひなくば今戻せ。
九助　今は無い。あつてからが若旦那へ戻すわい。
權九　さうはならぬ。取引勘定は番頭の役。サア、百兩の金を出しやアがれ。
九助　でも、今と云うはて。
權九　金が無いか。

九助　金か。オヽ、無い。
權九　番頭の目を暗ましたがよいか。これがよいか〳〵。
　ト拳を上げて打ち据ゑ、また篩を持つて叩く。
大盗人め。大騙りめ。
ト散々に打据ゑる。權九郎、狀を落す。丹平、後より
ソツと狀を拾ひ、返して見て居る。九助、腕捲りして
九助　番頭、こりや又あんまり。
權九　何があんまりぢや。金を濟ましやがらにやア、ぶち
殺すのぢや。
九助　エヽ、口惜しいわい〳〵。
　ト泣く。竹六、こなしあつて
竹六　九助が引負ひの金子、取替へてくれう。
九助　アノ、百兩の金を。
竹六　如何にも。弟が放埓に依つて、取替へくれしとあつ
ては、主へ對して申し譯がない。其方は他人、義に依つ
て取替へるは、宗右衛門がこの場の寸志。當所の掛け屋、
松屋傳右衛門が封印の儘、心措かずと返濟しやれ。
　ト金を抛る。
九助　エヽ、忝ない。丸う納まる小判百兩、受取つて下さ
りませ。

　ト與五郎へ渡す。
與五　これでさつぱり、この場の云ひ譯に。
　トおちゑ、取戻す。
九助　番頭、金は戻つたぞよ。これからが婆羅門韋駄天ぢ
や。
ト尻引ッ絡げ、篩を取つて、打ち倒さうと權九郎へ立
ちかゝる。丹平、立つて、抱へ留め
丹平　待て〳〵。もうよいわサ。
九助　でも、仕返しを。
丹平　ハテ、人がする。人にさせて見たがよいわい。
九助　エヽ、腕がモヂ〳〵するわい。
男　番頭さん、金を貰うて去にたうございまする。
權九　サア、やるわい。頼母子の空かけるやうなものぢ
や。
ト懐を探し、こなしあつて
イヤ、晩方に直に持つて行くと云うてもらはうかい。
男　左樣なら、後から。モシ、拾兩でございまするぜ。
權九　サア、えいてや。
男　早うござりませえ。
ト走り入る。權九郎、思案して居る。

ちゑ　權九郎々々々、コレ、權九郎。
權九　ヘイ〳〵、なんでござりまする。
ちゑ　いま應對しやつた、金拾兩の價とは、なんぢや。
權九　買ひましてござりまする。
ちゑ　そりや何をや。
權九　そこにござる羽織。
ちゑ　この羽織を拾兩にか。
權九　エヽ。
　ト詰まつた顏をする。
ちゑ　好い値打のするものぢやなう。
權九　また外に卷添へがござりまする。
　ト出して渡す。
ちゑ　その卷添へは、この一通か……權九郎どのへ彥助より。
權九　ヤア、それは。
　ト行かうとする。丹平、ズツと行て引摺り廻し
丹平　ぶちのめして白狀さゝうか。
權九　サアそれは。
丹平　どうだ。
權九　こりやモウ爰には。

　ト逃げうとするを丹平、箒にて投げ倒し
丹平　與五郎どのに成り替つて、カウ〳〵〳〵、打ち据ゑるが主の罰。
九助　アヽ、嬉しや、初產をしたやうな。
　ト皆々喜ぶ。竹六、權九郎を引立て
竹六　この家の後式を押領せんず、非道の段々、詮議の種は金子の行き端。慥かにこの
　ト懷中より金包みを引出し
　改め見やれ。
　ト與五郎の方へ抛る。
權九　南無三。
九助　これで後產が、マア下りたわい。
　ト取りに行くを取つて投げ、背打ちにする。
ちゑ　九助が引負ひのその百兩、宗右衞門さまへ。
與五　サア、お納め下さりませう。
竹六　この後とても、萬事に油斷のなきやうに。
丹平　番頭の白鼠、忠の聲も上がるまい。
權九　相手はざぶなり、云はぬは云ふにいや勝る、とは云ふものゝ。
竹六　繩打つて獄屋へ引かうか。

権九　イヤモウ、出直して來ませうわい。
ト納戸へ逃げて入る。暮れ六ツ鳴るうち、丁稚、行燈持ち出る。
竹六　最早暮れ六ツ。
丹平　一軸を受取る上は、直さまお歸りなされませう。
ト提灯をとぼす。
ちゑ　なんの風情もない仕合せ。
與五　初めての對面に、好い事はお聞かせ申さずてるお恥かしい今日の體裁。
九助　先程の御深切、なんと申してよからうやら。
竹六　御息女と云ひ、九助とやらの心底の程感じ入る。これにつけても憎いは弟。
丹平　ハテ。それもお若いうちの事。マア、夜の更けぬうち。
竹六　與五郎、養子の恩の與次兵衛どのゝ位牌、所を絶やさぬやうに、ナ、心得たか。
ト與五郎へこなしあつて
提灯やれ。
ト唄になり、竹六、丹平付き添ひ入る。橋がゝりより、十平次、袴羽織にて、家來連れ、出て來る。

十平　與五郎どのは在宿でござるかな。
與五　與五郎は私し。あなた樣は。
十平　拙者は八幡の家中、林十平次と申す者。呉道の墨蹟、受取り歸れよと、主人の命に依りて、わざ〳〵伺候いたした。
與五　一軸は只今私し兄、橋本宗右衛門どのがお越しなされて、お渡し申しましてござりまするが。
十平　イヤ〳〵、與五郎どの、宗右衛門どのには鶴ヶ岡へ、御代參の役目仰せ付けられ、日數立たねば歸國召されう筈もなし。ハテ、その意を得ず。
ちゑ　あのやうに仰しやれば、もしや。
ト金包みの封を切つて見て
ヤア、こりや似せ金ぢやわいなう。
九助　ヤア〳〵、そんなら今のは、騙りであつたか。
與五　幼少にて別れ、顏も知らぬを幸ひに、騙りにうせた盜賊であつたか。ホイ。
ト愕りする。
十平　御用金の盜賊、平岡丹平、橋本の素性をよツく存じ居れば、その丹平に相違あるまい。程は行くまい。家來、續け。

ト向うへ走り入る。橋がゝりより、妙林、走り出て來り
妙林　葉屋彥助が、都さんを駕籠に乘せて、新町を逃けりましたぞや。
與五　ヤア〳〵、すりや、彥助が。
妙林　所は天滿老松町、さうぢや。
　ト向うへ走り入る。
九助　コレ、うろたへずと、ぼツかけてセリフさんせ。
與五　合點ぢや。
　ト行かうとするを、權九郎出て
權九　さうはさゝぬ。
　ト與五郎へかゝるを、九助引き廻し、與五郎は向うへ入る。
ちゑ　一人やつては心元ない。九助、其方も。
てる　附きまして行て、お怪我のないやうに。
九助　おれが行たら、鐵の楯ぢや。
　ト駈け出すを
權九　うぬ。
　ト權九郎、九助を引き戾す。立廻りのうち、おちゑ、細引を罠にして權九郎が體に引ツかけ、九助、權九郎を取つて投げ
九助　ヤツとまかせとな。
　ト尻引ツ絡げ、向うへ走り入る。おちゑ、細引を持ち、おてるを連れ、納戶へ急ぎ入る。權九郎、起きて
權九　コリヤ、待ちやアがれ。
　ト表へ出る。納戶より、細引を引くゆゑ、引ツ張られて
何をひろぐのぢや。
　ト云ふうち又引く。二重へ引上げられ
惡洒落ひろぐない。
　ト外さんと踠くを、納戶より内へ引ツ張り込む。よろしくあつて、　　　返し
　造り物、お藏屋敷表、通りの體にて、御遷宮の提灯所々に立てあり、始終だんじり太鼓、囃子にて、道具納まる。
　ト橋がゝりより、仲仕の俄の練り物、田樂提灯を持ち、下駄の市、ちよろけん踊の形にて、すつぼりの大頭を

被り、野手の三、幕明きの形にて、後より薬屋の彦助、一腰差し、綱絡みの駕籠を仲仕舁き、佐渡七、羽織賣りの男、付き添ひ出て來る。

彦助　待て〳〵。一息ついて入れう。皆休め〳〵。

三　下駄の市も。ちよろけんも、えらい出來ぢや。

市　獅子もせんまも、えらう當つた。

彦助　御遷宮の寄合ひで、思ひ付いた俄練り物。その利生で手に入つた都の君。なんでも巧い手番ひぢや。

佐渡　權九郎とこの佐渡七が手工合で、與五郎めをしくじらす魂膽もして置いた。

男　あの羽織の代の拾兩は、晩に持つて行くと云はれました。

彦助　何もかも巧い手番ひ。

佐渡　一つ打ちませう。

皆々　しやん〳〵。も一ツせい、しやん〳〵、祝うて三度、おしやしやんのしやん。

ト手を打つと、バタ〳〵にて、向うより、與五郎、出て來り

與五　彦助、好い所で逢うたなア。

彦助　都が意趣で、楯突からうと思うて來たか。そりや叶はぬ事、行かぬ事ぢや。

皆々　腕立ひろぐと骨を拔くぞ。

與五　呉道の墨蹟を騙りにうせたも、相摺りに極まつた。都も取返す。墨蹟の在所も云はさにや置かぬ。

彦助　あんだら盡すな。何が怖うて隱さうぞい。墨蹟とやらはおりや知らぬ。都は盜み出して、アレ見い、駕籠の鳥ぢや。恨めしいぢやわい。

與五　さてこそ、その駕籠に。

ト駕籠を目がけて行く。皆々立ち塞がり

皆々　何ひろぐのぢや。

彦助　皆行け〳〵。

ト仲仕、駕籠を舁いて、皆々行かうとする。與五郎、棒鼻を取つて突き戻す。彦助、與五郎を引きつけ

彦助　腕立てしやアがるな。洒落くさい。おんでこませいやい。

皆々　合點ぢや。

ト蹴つたり踏んだり、いろ〳〵打擲する所へ、九助、走り出て來り、皆々を殴り倒し、與五郎を圍うて

九助　親方を、どうひろぐのぢや。

與五　墨蹟は騙られ、都は奪はれ、モウ〳〵、生きても死

んでもぢや。

九助　大事ごんせぬ。墨蹟も都さんも、この九助が取返して進ぜます。コレ、大船に乘つたよりは慥かぢや。

彥助　大船なら斯うするわい。

トかゝるを、九助、取つて投げる。彥助、いろ〳〵、與五郎へかゝる。九助、コリヤさせんと云うて支へる。皆々寄つて、與五郎、九助ともに、いろ〳〵苛なむ。與五郎、こなしあつて

與五　もう絕體絕命ぢや。

ト拔打ちに彥助を一刀切る。彥助、ウンと反る。

皆々　ソリヤ、切り居つたぞ。

ト與五郎、切り捲る。皆々、組み寄せんとするを、九助支へる。內にて大勢、喧嘩ぢや〳〵と云ふ。早太鼓になり、九助、駕籠を切る、內より、都、出る。

九助　都さんか

ト云うて連れながら逃げ廻る。彥助は刀を拔いて、與五郎目がけて行くを、九助、いろ〳〵して拔身を取る。與五郎、また切りつける。彥助、のたうち苦しむ。佐渡七、皆々、彥助の手負ひを引ッ張つて逃げて入る。九助、都、慄ふ。與五郎、息を吐く。早太鼓靜まる。與五郎、こなしあつて、刀を取り直して死なうとする。

九助　コレ待つた。墨蹟の詮議も遂げず、爰で死ぬるは犬死同然、命が物種。コレ、死んで花實は咲きませぬわいの。

都　さうでござんす。死なば一緖と云ひ交したではないかいなア。

九助　これはしたり、そんなら心中かい。細言を云はずとも、マア、福島のおれか內へ。

都　アイ〳〵。サア、申し、與五郎さん。

ト與五郎、こなしあつて、刀を納め

與五　都、おぢや。

ト都を連れて向うへ入る。九助、後見送る所へ、佐渡七、向うへ行かうとするを、九助引き戾し、所へ惡者出て、銘々向うへ行かうとするを、いろ〳〵なかし味にて引き戾し、輪になつてクル〳〵廻る。よき所にて、九助、拔ける。皆々いろ〳〵舞うて、眼の廻るこなしにて、ベッタリ下に居る。この間に以前のちよろけんの鬘をかぶせる。佐渡七、立たうとするを

九助　ちよろけんひろぐない。

ト ぐつと押へる。
ト木の頭よろしくあつて、　　　　返し
造り物、見付け黒幕。所々に臺實木の松の吊り枝、玉垣、石燈籠に火を灯しある。右の玉垣の際に、乞食一人、菰を着て、寢て居る。時の鐘、合ひ方にて、道具納まる。
ト花道より、丹平、提灯を提げ、後より、竹六、出て來り
竹六　最早初夜さうなわい。
丹平　左樣でござりまする。
ト云ひ〳〵本舞臺へ來て、兩人、あたりを見て
幻竹六、太儀ぢやあつた。
竹六　親方、もうようごんすか。
丹平　まんまと一杯、われの立役、巧いものぢやあつた。
竹六　イヤ又、こんな事にかゝつては、さすものぢやない。シタガ、それもこなさんが家來になつて、付いて居やしやるゆゑ、腕が据つてあつたと云ふものぢや。
丹平　もう脱げ〳〵。

竹六　オツトセウ。
ト着付けを脱ぐ。丹平も脱ぐ。兩人、切繼ぎやうになる。竹六、大小着物グル〳〵巻きにする。丹平、箱より、一軸を出し、披き見て
丹平　この墨蹟を、頼まれた和郎へ持つて行けば、忽ち大金。
ト云ひ〳〵、巻き納め、懷中へ入れる。箱を蹴やり
まだその上にこの百兩、濡れ手に粟の攫み取り。
竹六　巧い仕事でごんしたなう。
丹平　かんづかれぬうち、いつもの宿へ。
竹六　合點だ。そんならこの、ひらも、どすも、返してもらはう。
ト振りかたげ
そんなら親分、行きやんせう。
ト行きかゝる。
丹平　竹よ、待てよ。
竹六　オイ。
ト立ちどまる。丹平、小判五兩分けて
丹平　コリヤ、今夜の符牒ぢや。
竹六　有り難うござります。

ト金を受取る。この前より寢て居た乞食、起き上がり、
窺ひ居て、此うち

乞食　その金を。

ト竹六の持つて居る金を引ツたくり、逃げうとするを、竹六、乞食の胸倉を取つて引き廻す。乞食、胸倉を取られながら、竹六の胸倉を取る。丹平、透し見て、後より、手拭にて咽喉を締める。乞食はア、と苦しむ。

竹六　親分。

ト大きな聲にて云ふ。

丹平　コリヤ。

ト押へる、本釣り鳴る。兩人、よろしき見得。竹六、小聲になり

竹六　息はとまりやんしたか。

丹平　とんだ所へ飛び出して

竹六　慾の間違ひ。直ぐに往生。

丹平　南無阿彌陀佛。

ト死骸の頭を叩く。兩人、顏を見合せ、ムツと笑ふ思ひ入れあつて

竹六　そんなら親分。

丹平　オヽ。

ト手拭を取り、蹴る。死骸見事に返る。丹平、手拭を肩にかけようとして、汚ないと云ふ思ひ入れにて、手拭を捨てるが木の頭。

サア、行かう。

ト兩人、行きかゝる。佃節になり、よろしくあつて、

ひやうし幕

三　幕　目　　辻道伯内の場

役名——醫者、辻道伯。油賣り與兵衞。

造り物、眞中、一間半づゝの世話屋體。納戸なしに隅に藥簞笥、本箱を並べ、脇に二つ竈、鍋、釜、戸には、辻道伯と表札、藪醫者住居の體。外よりかきがね掛け、留守の體。奥は合ひ長屋の門口。東手に井戸、唄にて幕明く。

ト西隣りの内より、女房、手桶を提げ、水汲みに出る。

ト向うより男一人、肴籠、藥代、文箱、持つて出て

男　こりや、留守ぢやさうな。また閉つてある。

女房　道伯さまは病家と云うて來て、もつと先出てござん

した。
男　それは困つた事ぢや。わしは島の内の者ぢやが、藥代と肴を持つて來たが、去んでは二度手間なり、どうしたものであらう。
女房　そんなら、此方に置かんせ。戻つてゞあつたら、屆けて上げやんせう。
ト云ひ／＼我が家へ入る。
男　そんなら、此方に置きますに依つて、戎橋の大黒屋吉兵衞からぢやと云うて、屆けて下さりませ。次手に、中の芝居へ廻つて、看板なと見て去んでこまさう。
ト入る。在郷唄になる。道伯、醫者の拵らへ。與兵衞油賣りにて附いて出る。
道伯　與兵衞どの、好い所で逢ひました。
與兵　今日は川口から幸町を廻りまして、只今歸りがけでござりまする。
道伯　精を出す男ぢや。此方も切れてある。五合賣つてもらひませう。サア／＼、ござれ／＼、
ト兩人本舞臺へ來て
ドレ／＼、先づ庵の扉をあけの玉垣と仕らう。
ト鍵出して明けて
サア、入つて茶を參れ。
與兵　ハイ／＼。
ト門口に荷を置いて入る。道伯、釜の下探して
道伯　南無三、すつぽり消えた。ドレ／＼、火を打つて來て進ぜう。
ト隣りへ行く。
與兵　お構ひ下さりますな。イカサマ、鰥といふものは、氣散じなものぢや。
道伯　それはいかいお世話でござつたなう。
ト云ひ／＼、火入れ、肴籠、文箱持つて戻る。
サア、煙草のまつしやれ。某、釜の下焚きつけるぢや。
ト焚きつける。
與兵　斯うしてござるのも、氣樂でようござりませう。ぢやが、當時、はつこうのお醫者樣が、鰥暮らしでござるは、どういふ譯でござりまする。
道伯　愚痴な事云ふわいの。斯うして暮らさねば、金が延びませぬわいの。イヤ又、乘り物などに乘つて、ゆするばかりが醫者でもないて。兎角數にも功の者ぢや……九郎右衞門町の端くねに行ても、折々大きな手柄するぢや。又すぎはひの隙には、客衆の座持ち、新町などへは

年が年中入り込んで、茶屋からも道伯さま、揚屋からも道伯さまと、引き摺り引ッ張るので、一向隙がござらぬ。

與兵　それは御繁昌でござりまする。イヤ、油を計つて置きませう。

道伯　そこらに徳利があらう。五合計つて置いて下され。

與兵　ハイ〳〵、五合でようござりまするな。

ト合ひ方になり、徳利持つて入ろ。道伯は文箱の金をひねつて見て、傍らに置き、肴籠を見て

道伯　なんぢや、はまちに赤貝、こいつを煮て寐酒の肴に仕らう。

ト料理する。與兵衞、油計つて

與兵　これに置きまする。

道伯　代物進ぜう。

與兵　大事ござりませぬ。今度に致しませう。

道伯　そんなら、さうして下され。

與兵　道伯さま、ちとお前に、お尋ね申したい事がござりまする。

道伯　おれに尋ねたいとは。

與兵　別の事ぢやござりませぬが、お前、新町へ入り込んでござれば、廓の勝手は、よう御存じでござりまするな。

道伯　知つて居るとも〳〵、揚屋々々へ入り込み、金は遣はずとも、いつまでも辨慶。

與兵　辨慶とは、なんの事でござりまする。

道伯　ハテ、金遣ふ客を判官と云ふ。その側に居るに依つて辨慶ぢや。

與兵　成る程。

道伯　イヤ又、金を遣ふ大臣が、美なる者を數多並べ、酒宴催ふしたところは、堪つたものではない。ア、揚屋の様子が見せたいわい。

與兵　私しは山本村の邊土に、その日過しの商ひをして居りまするゆゑ、どこに茶屋町があるやら、とんと存じませぬが、その揚屋とやらへ行て、求めまする太夫衆の値段は、なんぼ程かゝりまする。

道伯　サア、段々あるぢや。先づ太夫が一夜の揚げが六十九匁。

與兵　それは高直なものでござりまするな。

道伯　その次が天神と云うて、三十三匁。それから圍ひに至るまで、段々値段があるのぢや。

與兵　成る程、太夫殿はさうでもござりませう。それについて、ちとお願ひがござりまするが。

道伯　なんぢや。願ひとは。

與兵　されば、男に生れた思ひ出に、その揚屋へ行て、たつた一夜さでも遊んで見たいと存じまする。

道伯　エヽ、與兵衛、貴樣達の風體で、太夫買ひが出來るものか。埒もない事云ふわい。ハヽヽヽヽ。

與兵　サア、そこでござりまする。マア、ちよつとお聞きなされませ。斯う云へば、お笑ひなされませうが、何を隠しませう、この五月の差入れに、商ひに廻つて、茨住吉の茶店に休んで居た時、その傾城とやらを見ましたがイヤモウ美しいとこそ云へ〳〵、世間にはあんな美い女を、抱いて寐る男もあるかと、フツと思ひ込んだが因果の始まり、ウカ〳〵附いて行たれば、松ケ端から船に乘つて、ツイと行くへを見失なうた。在所へ戻つて飯を喰うても、咽喉へは通らず、寐所へ入つても寐所へは一向で。一生にたつた一夜、あんな女を抱いて寐たらと、思うて見たり、イヤ〳〵一日すた〳〵云うて、百や二百の利はしで通る油賣り、所詮及ばぬ事と思ひ切つても、氣を取り直して見ても、どうも忘れられぬ。なんでも一精出して稼いだら、一夜さは買はれるものと、商ひの外には、人に雇はれ、飛脚に行たり、能勢へ代參、その外は云ひ憎い無心云うたり、僅か三十日かそこらに、どうやら斯うやら金を拵らへ、勿體ない一人の母者人を、養ふ事はどこへやら、たつた一夜さ太夫買ひがして見たいと、思ひ込んだ念願、道伯さま、どうぞお前の手筋で、揚屋へは參られますまいかの。

道伯　きつい思ひ込みやうぢやなう。そりや連れ立つて行きもせうが、太夫を一夜さ揚げても、雜用が餘程要るぞや。

與兵　ハテ、積つて見て下さりませ。

道伯　算盤があるか。

與兵　ハイ、持つて居りまする。

道伯　そこへ置いて見やれ。先づ太夫の揚げが六十九匁、

與兵　六十九匁。

道伯　これが引いて出る新造、太夫が三人と見て六十九匁、これに三を掛ける。

與兵　三九二十七、三六十八。

道伯　二百七匁になり、藝子五人、この揚げが二十七匁づつ。

百三十五匁、
道伯　大鼓持ちが隨分少なうて八人、これが十六匁づゝ。
與兵　六八四十八、一八ケ八。
道伯　百二十八匁。亭主心附けの印が金二百疋、花車へ百疋、この節の相場で。
與兵　四十八匁二分四厘。
道伯　さて、引舟から遣り手、禿への祝儀が二朱づゝとして。
與兵　凡そ、三十二匁五分。
道伯　それから、家内の下女、追ひ廻し、出入り、入れ方、駕丁、門番に至るまで、彼れこれ廿人ばかり三匁づゝにして。
與兵　二三ケ六十匁。
道伯　その夜の酒代雜用、これが一人が八匁づゝ、凡そ人數を二十八人と積つて。
與兵　八八、六十四、二八十六。
道伯　二百二十四匁。さて燭代、蠟燭、凡そ五十丁、一丁一匁六分替へにして。
與兵　五六、三十、一五ケ五。
道伯　八十匁。マア、あらましさうぢや。惣締め。

與兵　九百八十三匁七分五厘になりまする。
道伯　その外、座敷の場合に依つて、或ひは一角又は花と云うて、その用意が十兩ばかり。これを銀目にして、その上へ入れると。
與兵　これが六百五十匁……一貫六百三十三匁七分五厘。
道伯　さうであらう。その位の用意が無うては、太夫買ひはならぬ。よしにしや〳〵。
ト與兵衞、首に掛けた財布、前に置いて
與兵　いま申す通り身の油を絞りまして、貯めた金やら銀やら、かいつまんで一夜の入用。マア、御覽じて下さりませ。
道伯　ドレ〳〵。
ト見て。
小判が三兩。板が六丁、一分から二朱から、こま金を入れて、凡そ二十五六兩もあらう。
與兵　それで揚屋へは行かれますまいかな。
道伯　成る程、これなれば一夜さ位は慥かぢや。それ程に思ひ込ましやる事、連れ立つて行て、望みの太夫買はしてやりませう。
與兵　それは忝なう存じまする。とてもの事に、今から直

ぐに連れて行て下さりませ。

道伯　そりや、どうなりとしませう。

與兵　この金で、諸拂ひ、何かよろしくお願ひ申しまする。

道伯　よし〳〵。シタガ、五兩と三兩位は懷中して居て、折々に花に撒かねばならぬ。後はおれがよいやうにしませう。

ト懷中して

時に、その見さつしやつたといふは、どこの太夫で、名は何と云ひます。

與兵　されば、名は存じませぬが、なんでも美しい者でござりました。

道伯　それでは根ッから解らぬ。よし〳〵、なんぢやあらうと、名ある太夫を買つて見たら、知れるであらう。

與兵　そこはよろしうお願ひ申しまする。

道伯　名ある太夫は、初會では手に入るまいが、マア、行た上の事。我れらも着る物を替へねばならぬ。

ト着替へ

揚屋へはどこにせうぞ。吉田屋にせうか、住半にせうか。いつそ九軒の井筒にせうかい。

與兵　井筒でも用水でも、そこらに望みはござりませぬ。直ぐに參りませう。

ト行かうとする。

道伯　ア、コレ〳〵、マア、待たつしやれ。貴樣、その形で揚屋へ行くか。

與兵　これでは行かれませぬかな。

道伯　ハヽヽヽヽ、傾城買ひは大概知れたものぢや。これも昔は、紫の羽織、小袖、ほうろく頭巾。今はグッと洒落て、羽二重の袷に斜子の羽織、帶はこつぽ織、花色柄の脇差、紙入れ煙草入れ、襦袢下帶まで、すつぽりと改めねばなりませぬ。

與兵　それは難儀ぢや。その金で身の廻り拵らへたら、今夜の入用が足るまいし。

道伯　山田屋へ行たら、頃合ひの流れはあらうが、……よいよい、思案があるぞ。

與兵　御思案がござりますか。

道伯　こなたの小袖羽織は、おれが懇意にする向ひ川の橋の、璃寛の地衣裳を借つてやりませう。

與兵　璃寛とは、お醫者樣でござりますか。

道伯　何を云ふぞい。嵐吉三郎といふ役者の、樂屋通ひの

の衣裳を、借つて遣はさうと思ふのぢや。
與兵　そこをよろしうお願ひ申します。
道伯　時に、油荷は、東口の打明へ預けて置かう。
與兵　それはお世話樣でござりまする。
道伯　與兵衞、揚屋へ行たら、儘に場うてせぬがよいぞや。隨分勿體を附けたがよいぞや。
與兵　隨分勿體を附けませうかな。
道伯　太鼓持ちは悪い口合ひを云ひ居る。その時此方も負けず、秀句、口合ひ、惡口が第一ぢや。
與兵　それはむづかしいものでござりますな。
ト道伯、扇子を出して來て
道伯　この扇子に書いてやる。折々引き合して云うたがよい……時に、仲居、太鼓持ち、その外禿に至るまで、花を遣らねばならぬ。其うちにも見計らひがあるゆゑ、貴樣の心覺えに、扇子へ書いて置かんせ〳〵。
ト與兵衞へ扇子を渡す。
これは、とつときぢやが、與兵衞。貴樣へ進上するワ。
與兵　有り難う存じまする。
道伯　サア〳〵、扣へたり〳〵。
ト與兵衞、矢立を出して構へる。

先づ太鼓持ちが一分づゝ。
ト書く。
禿の人形代二歩づゝ。
ト書く。
仲居の細代二歩づゝ。
ト書く。
さて、引船、遣り手、禿への祝儀が二朱づゝ。
ト書く。
それから家内の下女、追ひ廻し、出入り入れ方、駕丁、門番に至るまで、彼れこれ二十人ばかり三匁づゝ。
ト書く。
その後は、見計らひに仕らう。
ト書く。
サア〳〵、マア、ざつと、それでよいわいなう。
與兵　よろしうお願ひ申しまする。
トこれにて油荷をかたげ、花道へ行きかゝると、道伯呼びとめ、また本舞臺へ戻る。
道伯　コレ〳〵、與兵衞、貴樣ばかり先へ行き、肝心の先生がまだぢや。向うへ行たとて、先づ仲居、太鼓持ちが、いろ〳〵と粹な事を云ふ。その受け返答は承知か。

與兵　ヘイ、粹な事とは、どんな事申します。
道伯　どんな事と云うて、向うで口合ひは申すに及ばず、いろ〳〵と此方から云ふ事をば受け返答、それは〳〵程のよい、誠に井戸の神さんぢや。
ト與兵衛悄りして
與兵　申し〳〵、井戸の神さんが、矢ツ張り新町の座敷に皆寄つて居られまするか。
道伯　エヽ、何を云ふのぢや。なんの新町に、井戸の神さんがござらう。その井戸の神さんと云ふは、粹な事を云ふ粹人ぢやに依つて、井戸の神樣ぢや。粹人ぢやわいなう。
與兵　ヘイ、左やうでござりまするか。その粹人は、なんぼ位で買はれます。
道伯　これは又、情ない。それは賣る物ぢやない。うだうだ云うて座を浮かすのぢや。
與兵　エヽ、座敷へ水でも出て座敷が浮きますか。
道伯　情ない。マア〳〵、行たら解るわいなう。
與兵　でも、むづかしいお人が、たんと居ますなア。
道伯　イヤモウ、大抵氣をつけねばならぬ事ぢやない。
與兵　左やうならば參じませう。サア〳〵、申し、道伯さま、サア、行かう〳〵。
ト門口へ出る。
道伯　サア〳〵、行かう〳〵、さいから秀吉公と來てゐるわい。
與兵　なんと仰つしやりまする。
道伯　これは口合ひと云ふものぢや。
與兵　なんで口合ひと云ふものでござりまする。
道伯　解らぬのは尤もぢや。貴樣、サア行かう〳〵と云ふゆゑ、さいこう秀吉公と云ふは、太閤と、サア行かうとの口合ひぢや。
與兵　ハアヽ、解りました。そんなら物の云ひやうを、なんでももじるは口合ひ、粹の始まりでござりまするか。
道伯　アヽ、情ない。さう何から何まで尋ねられると、此方も困る〳〵、困るに數の子。
與兵　そりや、なんでござりまする。
道伯　エヽ、情ない。困るに數の子と云ふのは、ごまめに數の子の口合ひもじりぢや。
與兵　エヽ、こんな事なら、なんでもない。私しも一つもじりませうか。
ト何なりと口合ひ一つ云ふ。

道伯　ハヽヽヽ、こりやをかしいわい。もじつたり〳〵。
　ハヽヽヽ、イヤハヤ。
　ト呆れるこなしにて頭を掻き、苦笑ひして
えらい〳〵。時に貴樣、その太夫の顏を見たら、覺えて
居るか。
與兵　覺えてゐいでどうしませう。忘れたうても忘れられ
ませぬ。
道伯　そんなら、それを今夜おれが探して寐さすが、ほん
まにこの間茨住吉で、とつくりと見たか。
與兵　とつくり見染めたその君を
道伯　夜とゝも、側へ引き寄せて
與兵　積る話しの山々を
道伯　蒲團の上でしつぽりと
與兵　日頃の願ひを今夜こそ
道伯　思ひのまゝに、肌と肌。
與兵　身の油屋が絞つた金。
道伯　抛り出して
與兵　現金商ひ。
道伯　おまけに澤山。
　ト豆の形を道伯して見せる。

與兵　油よろしう。
　ト兩人よろしく思ひ入れあつて、チョン〳〵、キザミ、　幕

四幕目

新町井筒屋の場
東口夜明けの場

役名　―長岡千太郎。葛原左忠太。里見丈助。駕
籠舁き、甚兵衞。仲居、お梅。同、お糸。同、お
冬。同、おさつ。幇間、妙林。同、杢兵衞。同、
岩八。同、庄六。藤屋の吾妻。藤屋の都。醫者、
辻道伯。油賣り、與兵衞。

造り物、九軒茶屋、表通りの書割り。眞中に大きな
ろ門口、井筒と書いたる暖簾を掛け、騒ぎ唄にて、
幕明く。
　ト仕出し、出て
仕一　源よ、なんと砂場の吹寄せは、美味いぢやないかい
の。
仕二　イヤモウ、おりやそれより、鳥源の芋蛸で一杯やり

たいわい。
仕三　おりや酒呑まぬに依つて、おばごぜんか、道者横町と出かけたいわい。
仕四　わいらも嗜なめ。ぼやき物の事ばつかり吐かして居るわい。おいらは又色ぢや。松德の岩野を蹴倒したいわい。
仕一　そんな性にも合はぬ事云はずに、がんぎでも、ぞめかうかい。
仕二　それがよいわい。サア、來い／＼。
ト行きかゝるを、按摩、笛を吹いて出て來るに行き當る。
四人　何をさらすのぢや。
按摩　盲目に行き當るのは、其方の誤まりぢや。
四人　なにを。
ト皆々せり合ひ、上手下手へ別れ入る。
ト騒ぎ唄になり、駕籠舁き甚兵衞、息杖持ち出て來り
甚兵　エヽ、いま／＼。藤屋へ行たれば、吾妻はこの井筒へ送り込んだとの事。彼奴をせぶつて、二三十匁せしめて件の元手に。時に、こんな形では入られもせず、どうしたものぢや知らぬ。

トこなしあつて、所知入りめいた誂らへの合ひ方になり、おんだ乘り物行列の心にて、しと／＼と舁き出る。乘り物の側に左忠太、丈助、近習の拵らへにて、付いて居る。これに甚兵衞扣へる。
左忠　丈助どの、最早井筒へ參つてござる。
丈助　拙者始めてゞござれば、貴殿御案内いたされい。
トこの時、甚兵衞、前へ出て
甚兵　左忠太どの。
ト云ふを、左忠太、顔にて押へ
左忠　悪い／＼。
丈助　案内召さるが悪いとは。
左忠　イヤサ、それはソレ。
ト甚兵衞へこなしあつて
殿の心に隨はぬ吾妻、それゆゑ拙者が案内いたしては、その心構へを致せば悪いと、サア、悪いに依つて。
ト甚兵衞にかけ
拙者は後より
丈助　イカサマ、尤も。ソレ、お乘り物。
家來　ハアヽ。
ト右の鳴り物にて、丈助付添ひ、乘り物井筒の内へ入

る。後に左忠太、こなしあつて、甚兵衞、前へ出て

甚兵　もうよいかの。

左忠　大きなる心配させたわい。

甚兵　時に、私しに逢ひたいと仰しやつたは。

左忠　されば、元同家中平岡丹平を語らひ、山崎屋にて騙り取りしこの吳道の墨蹟。

ト箱入りの墨蹟を出し

某預かり居れども、殿の側に居れば氣忙しく、それゆゑ暫時、其方へ預かり置きくりやれ。

ト渡す

甚兵　オツと、おれが預かつたら大丈夫ぢや。

左忠　委細は後刻。

甚兵　逢ひませう。

ト唄になり、左忠太、井筒の内へ入る。後に甚兵衞殘り

先づこれを預かつたら、預かり手は半分の主。この上は吾妻めをぐづる算段。これも金、此方も金。

ト暮れ六ツ、ゴンと打つ。

あれも金、入相とは起緣もよし。ドリヤ、金の蔓に取付かうか。

ト騷ぎになる。甚兵衞、入る。あと踊り三味線にて、向うより、與兵衞、立派な形にて、道伯付いて出て

道伯　なんと旦那、廓は賑やかしいぢやござりませぬか。

與兵　それ／＼、在所の祭りなぞとは違うたものでござりまする。

道伯　そのござりまするが惡い。隨分に鷹揚に、口合ひ忘れまいぞえ。

與兵　それは呑み込んで居りまする。扇に書いて置いた通り。

道伯　それもその場の機轉が第一。

與兵　呑み込んだ／＼。

ト兩人、いろ／＼云ひ合せ入る。

返し

造り物、平舞臺、茶屋場、上手障子屋體。奧深に間每々々ある體に段々襖の遠見にて、庭は植込みの書割り。好き所に大衝立、好みあり、一面の燭臺、數多灯しあり。すべて、井筒屋大座敷の體、ちらしにて、道具納まる。

ト與兵衞、道伯、いろ／＼こなしあつて出る。

道伯　案内いたしませう。
　ト本舞臺へ來て
　誰れも居ぬか。來たぞよ／＼。
　ト内へ入る。
むめ　ソレ、お客があるさうな。お糸どん、お冬どん。
皆々　アイ／＼。
　ト奥より、お梅、お糸、お冬、おさつ、皆々出て來る
道伯　どうぢや、その後に打絶えた。
むめ　オヽ、道伯さん、どつち風が吹きましたえ。
道伯　どつち風は愚か、持丸長者をお供した。打揃うて出迎ふべし。
むめ　さうして、そのお大盡樣は、どこにござるぞいなう。
道伯　卽ち、あれにござる旦那。これへお越しあられませう。
與兵　オヽ、參つても苦しうないか。
道伯　イザ、これへ。
與兵　アハン／＼。
　ト與兵衞、仔細らしう通る。道伯の後にまいつく。道伯、向うへ突き出す。

むめ　これはお大盡樣、ようこそお越し遊ばされました。
　ト辭儀する。與兵衞も辭儀する。皆々も辭儀する。與兵衞、一人々々に辭儀するを、道伯紛らして留める。
與兵衞、咳拂ひ、扇遣ひする。
あれへお越し遊ばせいなア。
　ト口々に云ふ。與兵衞、うろたへ、まい／＼として道伯に行き當る。道伯、拍子取つて
道伯　獅子はどこぢや。
　ト與兵衞、ウロ／＼上の方へ行く。
オツとそこぢや。
　ト顏にて敎へる。與兵衞、坐ろ、
そこぢや／＼。ハヽヽヽ。
むめ　大座敷、藝子さんや、幇間さんをかけまして下さんせ。
さつ　アイ／＼。
　ト入る。
むめ　マア、お銚子を遣はさんせいなア。
いと　アイ／＼。
　ト酒肴を持ち／＼出る。奥より、妙林、杢兵衞、岩八庄六、皆々出る。

皆々　これは旦那、有難の影向。
道伯　皆々お近付きになれ。あなたは與助さまと云うて、船場では一と云うて二のない大金持ち樣ぢや。イヤ、旦那、引合せまする。これに居られまするは、當井筒屋の仲居お糸、幇間が稻荷店岩八、喜作、荒木店庄吉、松兵衞、善吉、御出家が妙林坊、仲居がおさつにお冬に粹株お梅なり。
皆々　いよ〳〵御贔屓を願ひまする。
むめ　見受けますれば、田舍とも見えませぬが、今までどこへお越しでござりましたえ。
與兵　イヤ〳〵、この邊に得意はない。近年種が高うて、請油屋は合ふものぢやござりませぬ。
ト道伯、扇で疊を叩き、咳拂ひをする。與兵衞、ちややつと扇遣ひする。
むめ　初對面から、もう惡口仰しやるわいなア。
道伯　時に初對面なれば、お花が無うては叶ひますまい。
與兵　さうぢや〳〵。その花を待つて居たのぢや。遠慮なく撒いた〳〵。
道伯　エヽ、何をお前撒くのぢや。
與兵　オヽ、さうぢや。
ト扇を見て
皆不承ながら、貰うて下さりませ。
道伯　皆それへ、並んだ〳〵。
トこれより、ぎつてうになる。
アレ〳〵、奧の遊びの鳴り物、拍子にかゝつて、撒いたり撒いたり撒き給へ。
與兵　合點ぢや。
ト扇を廣げて前に置き、紙入れを出す。
道伯　さらばお花が、降らしとて〳〵。
皆々　どうやいな〳〵。
道伯　お花が降らんとて〳〵。
松兵　先づ始まりが元日ぢや。しかも今夜は大紋日、茶代は多し豆男。
與兵　男幇間へ一歩づゝ。
松兵　お花頂き笠の劍。
岩八　火箸も默つて居られまい。箸とも恥とも思はねば、恥をかいたる例なし。
與兵　此方は恥をえらかきぢや。
岩八　これは頂戴鏡立。
庄六　てふ〳〵あばゝ、つむりてん〳〵。

與兵　てんでに持ち込め有り難い。
庄六　有り難いとや笙の笛。
妙林　恩に着せるぢやなけねども、莨盆々口きくな。
與兵　口にきかねど金が要る。
妙林　大入り帳も人の山。
喜作　胸どびんつく茶碗酒。
善吉　さけ揃うたる花の影。
吉彌　そんならわたしは禿かえ。
與兵　なんぢや、禿の人形代が二歩づゝか。高いものなア。
松兵　こいつはえらう味をやる。
與兵　なんぢや。二歩づゝか。まからぬか。
松兵　まからぬ筆の後や先。
いと　若い女子のくだ／＼と。
さつ　仲居は好いが人がない。
與兵　仲居前垂れ、紐が二歩づゝか。
　ト金を遣る。
道伯　次は即ちこのお醫者。
與兵　お前は内輪ぢやがな。
道伯　イヤ／＼、例へ内輪でも馴染みでも、熊谷敦盛組打ち組打ち。
　トこれにて、與兵衛、金入れを振ひ／＼、道伯に遣る
　皆々も拾ふ事あつて
サア、これからは肝心の所ぢや。顔は御存じぢやが、名を御存じない。ちよつとかれまいか。
むめ　左様なれば、爰にてかりませうか。
道伯　さうぢや／＼。コレ旦那、爰にてかりまする間、お前様の見覺えの太夫を、御承知でござりまするか。
與兵　どうぞよろしう。
道伯　サア、かつたり／＼。早う／＼。
　トこれにて、かりの鳴り物にて、都始め太夫五六人出で、かぶりいろ／＼あつて、段々と杯仕舞ひ入る。與兵衛、皆々見ても、これではないと云ふ思ひ入れ。道伯もいろ／＼思ひ入れある。仲居、幇間、皆々
皆々　旦那、これから座敷を替へて呑み直しませうか。
道伯　それもよからう。旦那。
　ト云うても與兵衛、浮き／＼して居るゆゑ、道伯、いろいろと紛らかし心にて
道伯　シイ／＼、獅子はどこぢや。
　ト踊りになる。

皆々　獅子はどこぢや〳〵。

ト皆々踊りながら入る。與兵衛・道伯、この一件、賑やかに奥へ入る。甚兵衛、下手より出て

甚兵　いま〳〵しいぞ……形が穢いで相手になりさらさぬ

ト云ひ、酒肴を見て

天道人を殺さずぢや。ドレ〳〵、なんぢや、生貝に蒲鉾、濱燒に作り身、誰方もあがりませぬか。先づ亭主役に私しが始めませう。好い酒ぢや。これで髪長が座敷に一枚居をつたら、どうも云へぬ。イヤ〳〵、榮耀云ふまい。

ト内にて

筆野　吾妻どの、花ぢや、皆拾はんせ〳〵。

皆々　合點ぢや〳〵。

ト揩り鉦入りの三味線になり、吾妻、傾城の形にて出て、手箱に小判を入れ、醉うたる體にて、幇間萬八、關八、國吉、仲居、料理人、下女、皆々出る。

吾妻　この花誰れに。

皆々　この花おれに。

吾妻　おれたもんにはやらぬ。

皆々　それならわしに。

吾妻　わしややらぬ。

ト皆云ひ〳〵小判を撒く。皆々拾ふ。

大事ない。サ、皆、拾はんせ〳〵。

ト皆々小判を拾ふ。

サア、これから酒にせうぞえ。

ト坐る。

甚兵　よい酒機嫌ではあるわい。

ト向うへ出る。合ひ方になり、吾妻、見て

吾妻　甚兵衛さん、又ござんしたかいなア。

甚兵　また來たと云ふからは、此方も皆聞いて居る所で、わが身の因縁云うて聞かさう。われが親は、もと京家の侍ひなれど、浪人して貧苦に迫つて、娘のわれをこの廓へ勤め奉公。その時藤屋へ肝入りしたはこの甚兵衛。其うち兩親は死んで、今では足なし奉公人。請け判をついたおれが兄分、われは段々全盛になる。おれは段々薄うなり、駕籠舁き、義理のあるこの兄さんには貢がうとはさらさいで、小判を土砂のやうに、この花誰れにも凄まじい。おりやあすこから見て居て、體中が汗になつた。昨日洗うた單物の四文の糊が、グニヤとなつた。おのれは榮耀に滿ち、現在兄を駕籠舁きさせ、おのれ、それで濟むか。アノ玆な恩知らずめが。

トあけ股打つて云ふ。
吾妻　甚兵衛さん。
甚兵　なんぢや。
吾妻　苦界する身は世間が第一、曉れがましい座敷で、吾妻が身にんげ、よう云うて下さんした。居續けの長岡さまが、手に入れんと賴みに下さんした金、襟に付くかと思はるゝが嫌さに、皆さんに上げてしまうたのぢやわいなア。
甚兵　それが冥加知らずぢや。撒き散らす金があるなら、なぜおれにくれぬ。よい〳〵、これから親方に逢うて、吾妻が年を、もう五六年切り增して、金下されとゐたけて來る。後でなんのかのと云ふな。ドリヤ、行て來うか。
　ト行かうとする。奥より、千太郎、殿の拵らへにて、左忠太、小姓、近習、松の島臺に杜若の作り物を持つて出る。
千太　サア、來い〳〵。
　ト出て來て
　ヤレ待て。
左忠　甚兵衛、早まるな。

甚兵　あなたは。
左忠　八幡の御領主、長岡千太郎さまがお留めなさるゝ。
近習　先づ〳〵待て。
甚兵　ハッ。
　ト皆々坐る。近習、右の臺を吾妻の前へ直す。
千太　なんと太夫、予が趣向せし作り花、氣に叶ひしか、どうぢや〳〵。
左忠　いま皐月の半、吾妻が艶色に花紫、色好きに實でゝ心を籠めし造り物。彼の八ツ橋の古歌の心、から衣着つつ馴れにしつまあれば、はる〳〵來ぬる旅をしぞ思ふ……來つゝ馴れにし廓通ひも、實に戀は曲者。斯くまで慕ふ我が君を、つれなく致すと云ふは、太夫、そりや餘り胴慾と云ふものぢやぞや。
吾妻　お志しは嬉しいけれど、この身には深い願ひがある事は、云ばずと知れた帶の錠前。初めから無い緣ぢやと、思し召して下さんせいなア。
左忠　イヤ、色を元とする川竹の身の上。一國のお大名のお心に隨ふは、その身の出世と云ふもの。
吾妻　寄る邊定めぬ浮ふしの、苦界は誰れしも同じ事、姿は金に任しても、心は任さぬ勤めの意氣地。杜若の贈り

物、ゆかりの色に染め兼ねて、例へこの身は枯れ葉となるとても、大名の襟に付いて、末の榮華を樂しむやうな、吾妻ではござんせぬわいなア。

千太　身請け致さう。

吾妻　エヽ。

千太　黄金に任した苦界の身、身請けして國元へ連れ歸らう。

ト吾妻、杯取つて

吾妻　文字野、つぎや。

ト酒をつがして呑む。

左忠　直さまお國屋敷へ召連れて、千太郎さまの御簾中。この上もなき身の納まり。甚兵衞は殿樣の小舅、お取立てであらう。喜べ〳〵。

甚兵　うまいワ。雲助からお大名の一家とは、一飛びの立身。大閤樣この方ぢや。吾妻、われも得心であらうもの、吐かさぬは不得心か。斯うなつたら嫌と云はうが、應と云はうが、あなたの方へやらにや置かぬ。われの爲ぢや。どう腰をぶち据ゑてくれう。

ト息杖を振り上げる。皆々留めて

太鼓　それで叩いて堪るものか。

ト皆々留める。

甚兵　エヽ、退かつしやれ。

ト又かゝる。

左忠　待て。打擲は後しての事。御前が騒がしい。鎭まれ鎭まれ。

甚兵　どうばり女郎め。

ト息杖を打ちつけ坐る。奥より、與兵衞、出て

與兵　イヤ〳〵、どうあつても歸ります。

皆々　マア、ようござりまする。

ト云ひ〳〵、松兵衞、岩八、庄六、喜作、妙林、仲居お冬、お糸、おさつ、與兵衞を見て

皆々　これは旦那、もうお歸りでござりまするか。

與兵　金を遣うて尋ねる人に逢はず、とんと壺算用ぢや。お醫者どのも恨めしい。金遣うて、なんの事ぢや。譯が知れぬ。

ト吾妻、こちら向く。與兵衞、惘りして

オヽ、さうぢや。おれが尋ぬる太夫どのは、あの人ぢや。ヤレ。

ト側へ寄らうとする。

左忠　ヤイ〳〵、御前間近く尾籠な奴の。

ト與兵衞、ウロ〳〵する。
いと　そんならあなたの思惑と云ふは、吾妻さんであつたかいなア。
吾妻　皆さん、あなたはえ。
いと　お前に焦れてお出でなされた、今宵初めてのお客さんぢやわいなア。
吾妻　それはマア。
　ト會釋してあちら向く。與兵衞、懷へ出し、無性に扇遣ひして居る。
千太　太夫、コレ、云ひ出した其方に、傾城の意氣地があれば、此方も武士の魂ひいつかな變ぜぬ。思ひ直して、色よい返事を致せ。どうぢや。
吾妻　色もつらふ淺紫のこの島臺、まだ謎が解けませぬかいなア。
左忠　イヤ、島臺の謎が解けうが解けまいが、此方は身請けする。
與兵　なんぢや。太夫どのを身請けする。さうはなりますまい。このお傾城を、たつた一夜さ抱いて寐ようと思うて、揚げ代から雜用、身の廻りの揃へ、質八置いて大抵や大方の事。イヤサ、錢や金を湯水のやうに撒き散らす大盡、しかも現金客でごんすわいなう。
甚兵　コレ〳〵若いの、吾妻はこの里の全盛、貴樣達のはぶしにはあかぬわいの。
與兵　エ、喰ひ合ふとは云やせんがの。
甚兵　あかん事ぢや。退いて居やつしやれ。
　トこちらへ突き退け
　サア女郎、好い加減に、どう張り居らいでな。
左忠　殿の御意を、今さら反古にはならぬ。吾妻、返事はどうぢや。
　トこの時、都、禿連れて出て來り
都　その返事は、私しが致しませう。
甚兵　お傾城、こなた樣がお返事を。
都　アイ、吾妻さんの心を思ひ計つて、私しがこの場のお返事。何を隱しませう。吾妻さんには、可愛いと思はんす間夫があるわいなア。
千太　云ひ交した間夫があるとは。
左忠　その間夫を、これへ出せ。
都　その間夫と云ふは
　ト與兵衞を連れて出て
　吾妻さんの間夫さんと云ふは、このお方ぢやわいなア。

吾妻　都さんそれでは。

都　ハテ、このお方を間夫にせぬと、納まらぬこの場の仕儀。なんと、好い間夫さんであらうがな。

吾妻　成る程、さうでござんす。外へ身請けをしられては。

與兵　なんとなりと見立て、揚げ代が棒に振りとむない。

甚兵　ハ、、、その手ぢやゆかぬ。生馬の眼を抜く甚兵衞ぢや。そんな白化け喰ふのぢやないぞ。

千太　例へ間夫でも、予が揚げ詰めに致し置かば、一夜妻でも奥同然。間夫なる奴は即ち間男、成敗に二つはない。二言と云はゞ討ち放すぞよ。

吾妻　大事ござんせぬ。

與兵　大事ないとはえ。

吾妻　貸しました。

左忠　ヤア。

吾妻　ハテ、貸借りは廓の習はし。主の方から借らうとは云はんせぬ。わたしが貸しました。それを憎いと思し召すなら、この吾妻を切るなりと突くなりと、お心任せに遊ばせいなア。

ト千太郎、小姓の持つたる刀を取つて立たうとする。

左忠太近習皆々留める

左忠　御前、先づ〳〵。

千太　無禮な女、望みの如くぶち放すわサ。

左忠　御立腹は御尤もには候へども、貸借りは廓の習ひとあれば、傾城をお手討などあつては、鎌倉への聞え。先づ〳〵お靜まりあられませう。

千太　貸借りを法とあれば、暫時差許す。左忠太、好きに計らへ。

ト千太郎、奥へ入る、小姓、近習、皆々入る。

左忠　鄕に入つては鄕に隨ふ廓の作法、貸借りは夜半を合圖。

甚兵　夜半の太鼓がドンと鳴つたら、吾妻、否とは云はさぬぞよ。

都　與助さん、お前の志しは今奥て……日頃の願ひが叶うて、さぞ嬉しうござんせうな。

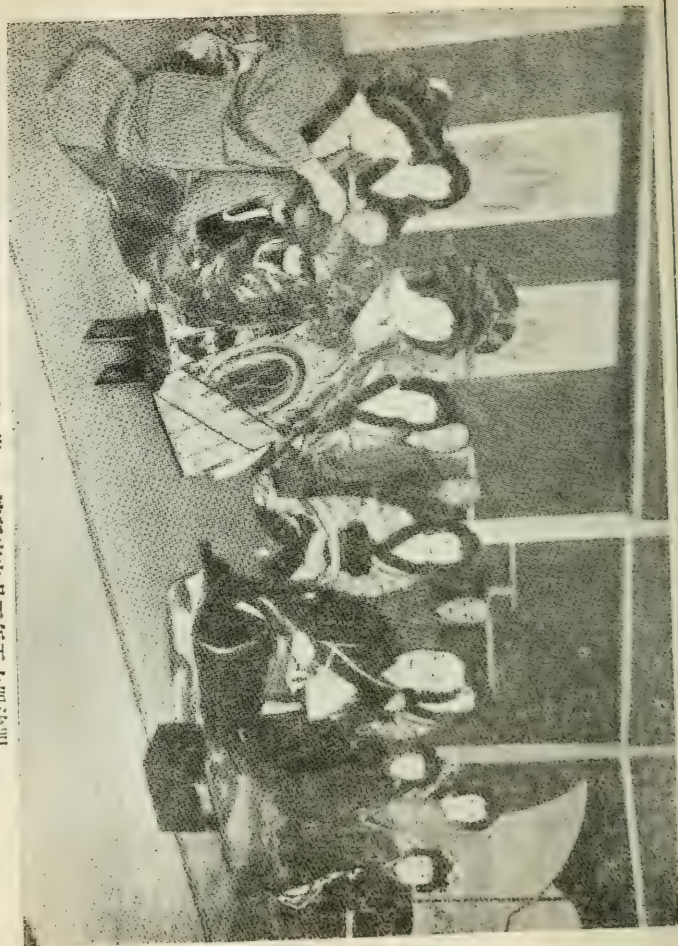
與兵　イヤモウ、冥加に叶ひましたと云はうか、此やうな嬉しい事はござりませぬ。

左忠　刻限までは甚兵衞、其方も奥へ參つて、一獻酌めサ。

甚兵　あつたら出世の邪魔ひろぐ、あの二才め、うぬをな

ア。
ト與兵衛を睨む。
左忠　ハテ、打ッちやつて奥へ。
茜兵　サア、行きなんせ。
ト唄になり、こなしあつて、兩人、入る。吾妻、禿に
囁く。
ト與兵衛の側へ行て
筆野　サア、お客、ござんせ。
與兵　どこへ參りますのぢや。
都　奥座敷へ床を取らして、吾妻主と寐さすのぢやわい
なア。
與兵　エヽ。
ト懐へ出す。吾妻、都の袖を引いて、それではと云ふ
こなしあつて、都、マア寢所へやれと呑み込ます。
都　サア、ちやつと行かんせいなア。
與兵　あなた樣の、いかいお世話でござりまするなア。左
樣なら、辭儀なしに參りませうかな。
都　サア、ござんせ。
筆野　サア、ござんせいなア。
ト唄にて、與兵衛、先に仲居、幇間、禿、皆々入る。

後に都、吾妻、殘り思ひ入れあつて、お梅、ツッと出
て
むめ　都主、首尾はえ。
都　アイ、マア、寐間へやりましたわいなア。
吾妻　お梅どん、都主、こりやどうぢやぞいなア。
都　斯う云ふ譯ぢやわいなア。吾妻主、お前も知つての
通り、山崎屋の與五郎さんに、深う馴染んだこの都、後
の月の騷動より、お内方を出てござると聞き、便りがな
ければ、猶更戀しい床しいと思ふに付け、今の客も同じ
與の字の與助さん、この身につまされて、おいとしう思
ふわいなア。
吾妻　そんならお前が、この縁取持つ氣かえ。
むめ　そりやわたしが、賴みましたのぢやわいなア。
都　吾妻主の身願ひ、知つて居るわたしなれば、是非に
と云ふも味なもの、この後の首尾は、お前に任せました
ぞえ。
むめ　及ばずながら、取持つて見ようわいなア。
都　わたしは奥へ。吾妻主、後にえ。
ト唄になり、都、入る。お梅、側へ寄つて。
むめ　吾妻主、仲居のわたしが全盛の太夫主に、押付け業

な事ながら、どうぞこのお梅が顏を。
吾妻　今のお客に、抱かれて寐いかえ。
むめ　マア、聞かしやんせ。あのやうに立派に大盡仕立でござんすけれど、よう聞けば、その日暮らし、油を商ふ人ぢやといなア。いつぞやお前が茨住吉へ、杜若見にござんした時、フトお前を見染めたのが病。樣子を打明けて、わたしへのお賴み、僅かの利端を取つて暮らす商人も、思ひ込んではいつかな事、たつた一夜の揚げ代を、今日に積り明日と貯へ、つばめ合した今宵の首尾。聞けば聞く程、あんまり可愛いに依つて、意氣地を磨く吾妻主、打割つて云うたら、萬更つれなう返事もさしやんすまいと、都主と云ひ合せての狂言、その日に咲いて、その日に萎む朝顏より、まだ〳〵儚ない願ひ事。なんとマア、しをらしい心ではないかいなア。
吾妻　不束なわたしを、さほどまでに御深切、嬉しうござんすと、吾妻が禮を云うたと傳へて下さんせ。突出しの初めから、我が身の揚げ詰めに、帶に卸ろした錠前は、樣子があらうと推量して下さんせ。
ト立つを留めて
むめ　待たしやんせ。これ程までに賴んでも。
吾妻　きつい者ぢやと、蔑すんで下さんすなえ。
むめ　イヤ、そりや一概の料簡。お前には似合ぬ。人の情を、さうしたものではござんせぬ。京の島原の昔は、芳野さんは鍛冶屋仁藏に意氣地を立て、この新町の扇屋、先代の夕霧さんは、眼界の見えぬ法師樣に、一夜の情をかけさんしたとある。それでこそ勤の身の誠。お前ならでと思ひ込んだ男の心。情は人の爲ではないぞえ。
ト吾妻、俯向いて返事せぬゆゑ
コレイナア、身を穢してと云ふではないぞえ。帶紐を解かぬはお前の願ひ。一つ枕に添ひ寐して、底意はお前の上手と手管。堪能さへしたならば、彼方も本望、勤の誠も屆きさうなものぢやぞえ。マア、とつくりと思案して見やしやんせいなア。
吾妻　成る程、聞分けました。お前の理りを、直ぐに逢うて云はうわいなア。
むめ　エヽ、そんなら聞入れて、ちよつと行つて上げて下さんすか。そんなら直ぐに……流石は全盛の太夫主程あつて、また違うたものぢやわいなア。エヽ、嬉しうござんす。それで請合うたこのお梅が、顏も立つと云ふものぢや。吾妻主、こりやモウきつと恩に着ます。エヽ、嬉

明治四十五年五月中座所演　嵐璃珏の道助

實川延若の與兵衞　嵐吉三郎の吾妻　片岡愛之助のお梅

しうござんす。イヤサ、お客様に世話やくも詞の義理。
吾妻　添寐をするはお前への義理。
むめ　義理の手管は、面白いものぢやわいなア。
ト筆野、出て
筆野　申し、太夫主はなぜ遅いと、待ち兼ねてゞござんすわいなア。
むめ　よし／＼。もうそこへお越しと、機嫌を取つて居さんせ。
筆野　アイ／＼。
ト筆野、入る。
むめ　あのやうに仰しやるも無理でもなし。そんなら、嫌であらうが、ちよつと行て上げておくれ。ホヽヽヽ、まだ宵ながら明け安い、夏の月見もよからうぞえ。
吾妻　月は冴えても心の月、曇りは晴れぬわいな。
むめ　オヽ辛氣。お前も新造さんかなんぞのやうに。サア、ござんせいなア。
吾妻　それぢやと云うて。
むめ　ハテマア。ドレ、床を敷かして。
吾妻　エヽ。
むめ　禿衆々々。

ト吾妻の手を取り、獨吟になり、東の障子屋體へ入る。唄のうち、チヨン／＼、道具、返し
造り物、三間の間、二重の舞臺・見付け金襖、前側・高欄付き。すべて、二階の體。橋がゝり、臆病口とも後に、障子屋體。前側は塀の屋根上にて、植込みの梢を見せる。一面の半簾、風鈴、綺麗なる手桶吊りあり、右二重の上、好き所に、結構なる蒲團夜着この上に與兵衛、坐り居る。側に筆野、莨吸ひ付け居る。行燈灯しある・筆野、煙管を出して
筆野　モシ、お上がり。
文字　お茶お上がり。
ト文字野、腰高の茶臺へ錦の湯呑載せ出る。
與兵　これは度々憚り、御苦勞ぢやなア。
文字　申し、あなたは何商賣ぢやえ。
與兵　おれは油屋。
文字　エヽ。
與兵　イヤサ、油鬢つけを商ふ大坂の問屋ぢや。今度來る時は、緋鹿の子髷くゝり持つて來てやるワ。その代りに

どうぞ早う太夫どのを。

兩人　エイ、もうござんすわいなア。

與兵　揚げ代が無駄になつては一生懸命ぢや。こちらとは違うて、傾城は商ひにおよそなものぢやなア。

ト獨吟になり、吾妻は後の襖明け、寢卷、扱帶にて出て、蒲團の上に坐る。與兵衞、上氣のこなし。筆野、莨盆持つて行き、吸ひつけてやり、また香を出して伽羅を火入れに移す。

吾妻　次へ行きや。

二人　アイ〳〵。

ト入る。與兵衞、香の匂ひにキョロ〳〵する。吾妻、莨のみ居る。與兵衞、初々しいこなしあつて

與兵　さて、お前樣が藤屋の吾妻さまでござりまするか。斯うなりますれば恥はいとひませぬ。私しははるか北在所の山本村と申す所で、僅か請賣りの油屋。ハイ、名は難波屋與兵衞、それで人さんが、難與兵衞と仰しやります。この月の初め、茨住吉で、お前の姿を見染めまして、それから戀ひ病。どうぞ一度のお情にあづかりたい事ぢやと、モウ〳〵、云ふに云はれぬ辛勞して、どうやら斯うやら、今夜たつた一夜さ。イヤ一夜ぢやない、一年も二年も一生も一斗も、揚げとやらを買はれて下さりませ。その代りに、油が要りますなら、いつでも云うて遣はされ。お前の事なら元値で上げますでござりまする。梅花油もござりまする。

トいろ〳〵こなしあつて云ふ。この時、窓へ月出る。

吾妻　成る程、あなたの淺からぬお心は、お梅どんより聞きまして、誓文嬉しう存じまする。そのお禮も申し上げたし、又お話しも申したし、一つ蒲團で今宵の月を、眺めうと存じまする。

與兵　成る程、よう冴えてござりまする。

吾妻　郭公、啼くや五月のあやめ草、あやめも分かぬ物思ふかな。

ト思ひ入れ。

與兵　もう何時でござりまするぞ。

ト獨吟になり、與兵衞、寢たいこなし、いろ〳〵と心意氣あつて

吾妻さん、いから更けましてござりますが、もうお休みなされませぬか。

吾妻　サア、お休み遊ばせいなア。

與兵　左樣なら、お先へ臥ります。御免下さりませ。帶も

解きまする。

ト是非なく寢ると、獨吟よろしく

吾妻　お果てなされた父樣や母樣の、年は違へど同じ十五日、今宵に當る御命日。

ト守り袋を出して

父樣より賜はりし、お形見のこの守。心ばかりの香花さへ、思ふに任せぬ勤めの身の上。過ぎ越し方を思ひ廻せば、味氣ない身の上ぢやなア。

ト泣く。與兵衞、頭を上げて

與兵　申し、段々更けまするが、お休みなされませぬか。

ト吾妻、守を頂き、懷へ入れて

吾妻　與兵衞さん、あなたと枕を並べる事は、堪忍して下さんせいなア。

與兵　エヽ。

吾妻　どうも下紐は解かれぬわいなア。

與兵　モシ〳〵、今さら左樣に仰しやつて下さりましては、私しは一向につまりませぬ。揚げ代から雜用、何やかや現金の算用詰め、つゞまる所はお前を抱いて寐たいばつかり。勿體ない譬へぢやが、七夕樣は一年に、たつた一度づゝ。それよりはまだ〳〵儚ない、一生にたつた一度、お情にあづかりましたら、御一分がすたりますか。吾妻さん、全盛にはお似合ひなされぬ。お胴慾でございまする。

ト泣いて云ふ。吾妻、こなし。

吾妻　廓で粹がる殿達は、此方が振ると彼方にも、張りを持つて立つの立たぬのと仰しやれど、それに引替へ初めから、我が身のしがを打明けて、拙ない吾妻をそれ程までにのお志し、誓文仇には思ひませぬが。何を隱しませう、わたしの身にも、深い願ひがござんす。

ト與兵衞へこなしあつて

一河の流れも他生の緣と思し召し、恥かしい身のお話しを、お聞き下さりませ。

ト合ひ方になる。

わたしが父樣は、由緒ある京都家の武士、三年以前、鶴ケ岡御造營の折柄に役目を受け、鎌倉へ御發足の折、多くの金を盗み取られし越度にて、その場より御改易。親子諸ともこの大坂へ立越えて、何を斯うとの活計もなく、貧しい暮らしの御不自由、させまするが悲しさ、この身を廓に沈めんと、父樣へお願ひ申せど、イヤ〳〵、其方には幼ない時、親々の云ひ號けせし男があれば、勤

めさしては義が立たぬと堅いお詞。是非なら母様と相談して、父様へはそれとも云はずに廓の勤め。例へ苦界に沈めども、肌身さへ穢さねばと、神に誓ひの帶の錠、その甲斐もなう、父様も母様も、同じ月日にお果てなされて、涙に積る苦界の中も、もし云ひ號けの殿御にも、巡り逢ひし時節もあらばと、心一つに誓ひを立て、突出しの初めより、三年と積る今日までも、只の一夜も肌身を穢さず、呑まれぬ酒を無益に呑み、帶紐を解く勤めより、解かぬ勤めの辛抱は、どのやうにござんせう。それも何ゆゑ父様の御遺言、お顔も知らぬ云ひ號けの、殿御へ操が立てたいばつかり。今日と暮れ、明日と暮れ行く其うちに、姿の色香もどこへやら、百歳積る九十九髮、廓で果てるこの吾妻。不便と思うて下さりませ。

ト泣く。與兵衛、宵からの算用思ひ出すいろ／＼こなし。

與兵　それはマア、哀れな話し、氣の毒な事でござりますが、エヽモウ、とんと來なんだらよかつたものを。

ト恨めしさうに吾妻を見て

私しもエイヤツトウを習うて置きましたら、お力になつて、その盜賊めを詮議して上げたいが、何を云うても武藝は知らず、マア、お話しを聞いただけを、今晩の徳に仕りませう。

トこの間、吾妻、泣いて胸の差込むこなし。

何となされましたか。

吾妻　何やかやを思ひ出しまして、持病の癪が。

與兵　御持病の癪でござりまするか。それはマア困つた事ちや。

ト脊中を擦り介抱する。

なんぞお藥を上げませうか。オヽ、あるぞ／＼。

ト印籠より、丸藥を出し、手水鉢の水を掬うて來て、茶碗に移し

モシ、熊の膽でござりますが、毒見を仕ります。

ト呑んで

サア、これをあがりませ。

ト呑ませ、脊中を擦り介抱する。

吾妻　あう／＼、ようござんす。暫し休ませて下さんせ。

ト横になる。

與兵　氣が休まつたらようござりまする。暫らくお休みなされませ。

ト枕させ、我が羽織を着せて、いろ／＼ある。しつぼ

りとする虫の聲聞える。また胸算用する心にて
カウト、揚げ代は知れた事。藝子が二人、幇間三人、酒
が五銚子、肴が五つ、吸ひ物が三つ、蠟燭が十二丁
なんぼ高値に積つても、壹貫五百匁は要らぬ筈ぢや。但
し、醫者どのにすあいがあるか知らねども、マア、それ
は頭から覺悟の前ぢや。肝心要はこの
ト吾妻を見て
とんと壺かぶつたやうな。
ト云ひながら吾妻を煽いで居る。吾妻、羽織を退ける
ゆゑ、氣を付ける。寢返りする。また羽織取つてソツ
と裾に置くこなしあつて
なんの事はない。病人の夜伽ぢや。エ、いま〳〵しい。
ト内にて、時の太皷打つ。
ヤア、太皷打つて來た。何時ぢや。
ト指を折り見て
一イ二ウ三イ四オ。ハア、四ツ前か知らぬ。
トこなしあると、内にて
たま　吾妻主、サア、禿衆、文字野、小仙、文字野。
ト呼び立てる。與兵衛、キョロつく。文字野、出て來
て

文字　申し太夫さん、限りが明きましたわいなア。起きな
されいなア。
ト起す。吾妻、起き、鏡にて髱を直す。
與兵　お氣分はどうでござりまするか。
吾妻　御深切な御介抱、忝なう存じまする。
與兵　これはお禮に痛み入りまする。
ト　お玉出て
たま　コレ吾妻主、限りの太皷を打つたぞえ。約束の刻限
ぢやと、長岡さまが苛立ぢや。サア、座敷へ行かしやん
せいなア。
吾妻　オ、玉の忙しない……與兵衛さん、わたしが身の
上、他言はして下さんすなえ。
與兵　なんのお前さん。
吾妻　御縁もあらば、また御見を。
ト立ち上がる。裾を取つて
與兵　そんならモウ。
吾妻　夜の明けぬうち、お戻り遊ばせい。
ト唄になり、奥へ入る。與兵衛、うつとりとなつて居
る。お玉見て
たま　なんぢややら、大盡らしいお客と見せても、よう聞

けば油賣りぢやさうな。太夫買ひは過ぎる。阿波座のけころか、また西横堀が身分相應ぢや。油屋ではなうて油虫、キリ／＼去にや。去んでもらはうぞ。

トいなば橋邊の唄になり、お玉、入る。

與兵　さうぢや。知らぬ傾城を買ふより、仕馴れた小糠商ひが肝心ぢや。ドレ、歸りませう。

ト帶をして、印籠、紙入れ、空になつたを投げ首して懐へ入れ

ちよつと寐所へ入つたばかり、件へは手もさへず、夜がな夜つぴて介抱したところが一貫五百目、高いものぢや。

ト懐へ入れる紙入れをぶつける。チョン／＼にて、

返し

造り物、見附け淺黄幕、上手寄りに東口の門。この續き臆病口、饂飩屋の表、一間の格子に門口立て行燈。橋がゝりの方、店の締りし家の書割り。踊り三味線にて、道具とまると、右のうちより緋扱帶にて括りし駕籠に左忠太付き出て

左忠　急げ／＼。

ト駕籠向うへ入る。橋がゝりより、甚兵衞、駕籠舁き大勢連れ、皆々杖持ち出て

甚兵　左忠太さま、吾妻はどう致しました。

左忠　無理やりに駕籠へぶち込み、駕籠は八幡の館へ、御主人には大川を船に召されて、これも御歸國。

甚兵　なんでも巧い手番ひに、私しは殿樣の戀の仇する先刻の二才め、待伏せして片付けてしまふ積り。

左忠　イヤ、高が町人殺すにも及ばぬ。苛なんだ上、お身も後から。

甚兵　お國元へ參りませう。

左忠　甚兵衞、さらば。

ト走り入る。

甚兵　皆ぬかるな。

皆々　合點ぢや。

ト左右へ別れ入る。道伯、與兵衞、連れ立つて出て來る。

道伯　與兵衞、首尾したか。どうぢや／＼。

與兵　イヤモウ、益體でござりまする。寐所へ入りましたが、肝心の段になつて。

道伯　わしや月の障りがあるわいなア、なぞと見知らした

か。
與兵　なんぢや知らぬが、帶を解かずと七里けつぱい。
道伯　ホイ、緣なき衆生は度し難しぢや……時に與兵衞、今夜の入用六兩貳朱、殘つたこの金で、梶原景季、二度の駈けとしやれ。
與兵　このマア儲からぬ世界に、たつた一夜さに。
　ト身慄ひして金を懷へ入れる。
思うて見る程阿房らしい。
道伯　そんならモウ、どうでも歸るのか。
與兵　早う去にたうござりまする。
道伯　それでは、預けて置いた油荷を持つて行かずばなるまい。ドレ、取つて來う。
　ト内へ入り、道伯、油荷を擔いで出て
大きにお邪魔でござりました。
　ト捨ぜりふ云ひ／＼出て來て
エヽ、モウ、とんだ厄介物ぢや。
與兵　大きに憚りさまでござります。
　トこの時、駕籠舁き大勢出て來て
皆々　そりやこそ二才めぢや。
皆々　合點ぢや。

　ト與兵衞にかゝるを、道伯留めて
道伯　コレ／＼、お前方、この男をどうさつしやる。
駕一　どうせうぞい。おれが仲間の甚兵衞を
駕二　よう酷い目に合はしやアがつたなア。
駕三　その仕返しぢや。殺せ／＼。
皆々　オヽ、合點ぢや／＼。
　ト皆々息杖にて打つてかゝる、與兵衞、道伯入り亂れて、トヾ兩人をいろ／＼打擲して
皆々　サア、行け／＼。
　ト皆々、喚ぎ／＼入る。與兵衞、道伯、倒れ居る。甚兵衞、ウロ／＼しながら出て來り
甚兵　おれがこんな風をして、此奴を持つて居ると、人が目を付けてならぬ。ちよつと行て來る間、どこぞへどめて置きたいものぢやが。
　トあたりを見て、油荷を見付け
オヽ、好い物がある。油荷がある。誰れか爰へ預けて置いたのと見える。夜の明けるまでは取りに來る事もないて。來る間、この中へどめて置かう。
　ト油荷の中へ墨蹟を隱し
これでよし／＼。

トそこらを見て、道伯を見付け

なんぢや。爰に何奴か倒れてけつかる。生酔ひと見える。

ト側へ行て、道伯の懐を探し、最前の金を取り

こいつは巧い。一番元手にあり付いた。夜の明けぬうちに、ドレ、行て來うか。

ト捨ぜりふにて、思ひ入れあつて入る。與兵衛、道伯、腰の痛むこなし、いろ／＼あつて

道伯　與兵衛はどうした。與兵衛やい。

與兵　道伯さんいなう。

ト呼ぶ事いづれもあつて、やう／＼起き上がり

道伯　オヽ、與兵衛、そこにか。

與兵　道伯さん、心持ちは。

道伯　おころもちぢやが、なんと、えらい目に會うたぢやないか。

與兵　此やうな目に會うた上、今のまでも。

道伯　これも因縁と諦めて、命のあるがまだしも仕合せ。

與兵　早う在所へ歸りたうございます。

道伯　去なう／＼。我が金を我れが遣うて

與兵　買うた女郎は口へは入らず

道伯　おれまでが殴られて

與兵　盗人に追ひと云はうか。

道伯　矢尻切りに切られたと云はうか。

與兵　これに懲りよおやま買ひ。夢のやうな心持ちぢや。ア、夢なればよいがなア。

道伯　さうして、何事も夢の浮世ぢやと諦めるがよい。サア、去なう／＼。ドレ、この荷はおれが擔いでやらう。

ト道伯、油荷を擔ぎ上げる。この時、甚兵衛出て來て

甚兵　この油荷を。

ト道伯が擔いで居る油荷にかゝる。

與兵　こりや、おれが荷ぢや。

ト甚兵衛を引き廻さうとする。道伯、油荷を取られ、荷を下に下ろす。甚兵衛、おふこを取らうとする。與兵衛、道伯、おふこを押へて放さず、三人、おふこを引き合ふ。甚兵衛、強く引くゆゑ、與兵衛、道伯、一度に放すゆゑ、はずみを打つて甚兵衛、我が手に眉間を打つてへたる。兩人、恟りして、ホヽと見るを知らせにて、この道具胴折れになる。

造り物、櫻の花盛りの遠見、雪洞數多灯しあり、後

の土手の上に、仲居、幇間、提灯を持ち並び居て

皆々　お客さん、お近いうちに。

ト與兵衞、これを聞いて、ゾッとせしこなし。

道伯　コレ、お近いうちにと。

ト道伯、與兵衞の袖を扣へる。與兵衞、その袖を振り拂ふが木の頭。

與兵　ア丶、夢になれ〳〵。

トこなしあつて、道伯は呆れし思ひ入れ。よろしく、

ひやうし幕

五幕目

長岡別業の場

役名――長岡千太郎。葛原左忠太。長井團作。關兵助。安達瀬左衞門。藤屋の吾妻。南方十次兵衞。

造り物、六間の間物がゝり造り、高屋體。見附け一面の金襖、西折り廻りの心、後にさす。本塗り障子別座敷の心まへ、一面に浪手摺り、すべて八幡別業の體。幕の内より、團作、兵助、網打ちの形にて漁船に乗り、團作、網を持ち、兵助、櫓を押す。この見得、一セイ浪の音にて幕明く。

兵助　團作どの、怪しからぬ大漁ではござらぬか。

團作　左やうでござる。何が平常、漁をせぬ所なれば、その筈でござるて。

兵助　この上は、御前へ披露いたさうではござらぬか。

團作　左やう仕らう……左忠太どの、それにござるか。

兵助　得物の品々、御前へ御披露。

二人　頼み存ずる。

トこの時、障子の内にて

千太　欝としい。明けさせい。

左忠　ハツ。ソレ何れも。

近習　ハア丶。

ト前側兩方へ明ける。

ト千太郎、着附け羽織にて居る。この下に左忠太、着附け上下にて居る。袴の近習二人、長柄の銚子を持ち酌して扣へ居る。コイアイの合ひ方になり

左忠　御兩所とも、御苦勞に存ずる。して、漁はきゝましたか。

團作　お聞きなされ、一網に鯉が三尾、鯔が八本、心ようかゝりました。

兵助　イヤ、網を入れると五年物、七年物、餘り漁がきく
のて張合ひがござらぬ。

左忠　イカサマ、殺生禁斷の放生川へ網を入れたら、漁が
きかいでなんと致さう。

兵助　淀川の流れを、せき入れしこの放生川、斯く漁船を
しつらひ、家中は元より、貴賤をいとはぬ船の往來。

團作　町人百姓にもせよ、心のまゝに出入りさせ、浮世話
しをお聞きなさるゝも時の一興。

左忠　竈をしつらひし融大臣が古き例し、御前にはいま一
獻召し上がられませう。

千太　予が在國の暇、當別莊を營みしは、吾妻太夫を慰め
ん爲。左忠太、戀といふものは味なものぢやの。

ト瀬左衛門、着附け上下にて、下手より出て

瀬左　御前、御母公壽光院さまより、お使者の趣き、

左忠　これサ〳〵、瀬左衛門どの。御酒宴の妨げ、扣へさ
つしやれ。

瀬左　イヤ、扣へますまい。この度、武將より御懇望に依
つて、差上ぐべきお家の重器、具道の墨蹟、出入りの町
人山崎屋與次兵衛方にて、紛失との儀。それに又殺生禁
斷たる放生川へ、網を入るゝ御遊興、御母公より仰せを
受け、罷り越したる安達瀬左衛門、お聞き入れあるまで
は、爰、一寸も動きや致さぬ。

千太　團作、兵助、得物の褒美に杯くれう。これへ參れ。

兵助　ハツ、衣服を改め、御前へ相詰めませう。

團作　左やう仕らう。

ト兩人下手へ入る、奥より小姓、小鳥籠に袱紗包みの
色紙を載せ、持ち出て

小姓　この小鳥籠、吾妻どのより御前へ差上げいとの儀で
ござりまする。

千太　太夫より送りしとな。

小姓　左やうでござります。

左忠　見れば山雀と見えまする。さては御前の御意に隨ひ
一つ臥床に羽根を並べ、比翼連理の語らひを致さうとい
ふ、吾妻が判じ物でござりませう。

千太　イヤ、さうではあるまい。相添へしこの色紙は。

ト取り上げ見て

籠の内に聲をも云はぬ山雀の、雲井の如何に戀しかるら
ん。山雀の籠に捕はれ、雲井を慕ふはさこそあらん。こ
れを止むるは非道なりと、予をさみせしこの品は、不敵
の女め。ムウ。

左忠　斯くまで思し召しを、無足に致すは恩を知らざる鬼畜同然。この上の腹癒せは、胴切りか提げ切りか。ぶち放しておしまひなされ。

千太　ソレ。

ト千太郎、刀を取り、ズッと立つ。この時十次兵衞、着附け上下にて、ツカ〳〵と出て

十次　イヤ〳〵、御前、暫らく〳〵。

千太　十次兵衞。

十次　ハッ〳〵。

ト好き所へ坐る。この時、團作、兵助、上下改め出る

左忠　十次兵衞どの、吾妻が身の上、何かの儀は。

十次　お次に相詰め、仔細具さに見聞いたした。

千太　無禮な女、手討ちにするを何ゆゑ止むる。

十次　一人端麗なれば一國亂の理り、鷄を裂くに牛刀を用ひざるの道理、何事も十次兵衞にお任せあつて、先づはお扣へ下さりませう。

ト側にある鳥籠を見て

詩歌の心、判斷いたした。小姓衆、二品とも床縁へ持參しやれ。

小姓　ハア。

瀬左　十次兵衞どの、御邊ことは、先殿樣のお目鏡を以て千太郎さまを輔佐の家老職、餘人は格別、なぜ御諫言召されぬ。それとてもお用ひなくば、非義の段、鎌倉へ言上し、下知を待つより外はない。殿、御母公への御返答たゞこの一言にて當家の安否。瀬左衞門、承つて立歸らう。

千太　オヽ、母人御意とあれば。其まゝにもなるまい。返答いたしてくれう。

瀬左　すりや、御返答を。

千太　瀬左衞門、近う參れ。

瀬左　ハツ。

ト側へ行き、平伏する。千太郎、拔打ちに、瀬左衞門をポンと切る。

左忠　ヤア、御母公のお使者を。

ト驚ろく。千太郎、拔き身を十次兵衞の目先へ差しつける。十次兵衞こなし。

千太　諫言いたさば、瀬左衞門が好い手本。十次兵衞。女の贈りし歌と、小鳥の判斷は、サヽ、なんと。

十次　ハア、。川竹の定めなき身をかこちし心。

千太　山雀の雲井戀しきとは。

十次　ヽこれ即ち御前を戀ひ慕ふ、思ひを述べし女が愛情。
千太　すりや、それと判斷いたしたか。
十次　十次兵衞が判斷、よもや相違は致すまい。
千太　いよ〳〵女が本心に。
十次　人の心は飛鳥川、淵瀨とも變らんかと、疑ひ思ふは女の常。かばかりのお情を、仇にはなさじ。何卒添臥しの儀を願ひくれよと、取次の儀を願ひ居ります。
左忠　すりや、吾妻どのが手の裏を返すやうに。
千太　イヤ、心元ない。
　ト十次兵衞、思ひ入れあつて
十次　誰ぞ、吾妻どのをこれへ。
丈助　ハア。
　ト合ひ方になり、丈助、上下にて、廣蓋に襠補載せしを持ち出て、千太郎が前に置く。
お指圖に任せ、藤屋の吾妻どのを、召連れましてござりまする。
千太　オヽ、見覺えある太夫が襠補
　ト取上げ見て
血汐に染みしは、
左忠　仔細ぞあらん、十次兵衞どの。
兵助　吾妻どのは、如何召された。
十次　助け置いてはお國の仇、不便ながらも、たつた今、討ち放した。
二人　なんと。
十次　息あるうちは、殿の御意に隨はず、死しての後は無心の魂ひ、添臥しはお心任せ。ソレ、その襠補の血汐に染みしは、紅ゐの色直し。殿、御心に入りましたるか。
　ト千太郎をキッと見上げる。千太郎、十次兵衞が見て、直ぐに刀へ手をかけようとする。十次兵衞、摺り寄つて
サア、お手討ちは元より覺悟の十次兵衞。御譜代にはあらねども、先殿、冬門之頭さまのお見出だしにあづかり、いま輔佐の臣下に連なり、晝夜枕席を安んぜず、お家長久の儀を願ふところ、大殿御逝去以來、御前にはお身持ち放埒、遊里の滯留、吾妻が色香に魂ひを奪はれ給ふは何事ぞや、これを諫むべき橋本治部右衞門は、閉塞、紛失の越度に依つて浪人となり、佞人どもは日夜に滿つる。色を以て國滅亡はまゝあるためし。所詮彼れだにこの世になくば、自然と納まる殿の本心、傾城吾妻を討つて捨てしは拙者が寸志。お心に違ひたば、南方十次兵衞、

殿のお手討ち、刃の下に命を果たし、屍はお家の守りとならん。覺悟の一命、サア、すつぱりと遊ばせ〳〵。イザ、遊ばされい。

トどつと居直りて首を差延べる。千太郎、柄に手をかけながら、十次兵衛を見詰め居て、この時ヂッと、思案のこなし、氣を替へ、右の襠裲取り上げ

千太　十次兵衛、この死骸、よきに葬むり取らせい。

ト襠裲を十次兵衛が側へ拋る。

十次　すりや、此まゝに。

千太　承知いたした。

十次　ハッ。

ト平伏す。内にて「三輪」の謠。

〽賓にや老少不定とて、世の中々に身は殘り行く、春秋をば送りけん。

ト千太郎、少し氣將のこなし。

千太　座を替へて一獻酌まう。左忠太、皆の者、參れ。

皆々　ハッ。

ト千太郎、屋體へ入る。十次兵衛こなし。

左忠　十次兵衞どの、吾妻どのを手討ちとは、家老職の分別通りでござる。併しながら御前には、滿足に思し召しますまい。ナウ、何れも。

團作　さうなくては、なんと致さう。隨分と輕うて切腹、腹へ墨附けして待つて居さつしやれ。

兵助　併し、不便なは吾妻どの、科もない身を手討ちとは、潔白な捌きぢやゝ何れも、御前へ相詰めませう。

皆々　左やう仕らう。

左忠　十次兵衞どの、後刻。

ト唄になり、左忠太、兵助、團作、奥へ入る。

丈助　先頃、津の國の遊里に於て出ツくはせし墨蹟の盜賊、風を喰うて取逃がせしが、日當といふはあの左忠太。

十次　元の根ざしは伯父御の企み。いま荒立てゝは騷動の端ともならん。それは格別、彼の御用金千兩の盜賊、今に於て、在所知れず。大坂の目附け役より、申し送りしこの一書

丈助　その盜賊が相知れなば、墨蹟とても一つ穴。

十次　大切な詮議、ぬかりなきやう。

丈助　即ち拙者儀は表門より、通路いたさば家中の聞え。この小船にて堤へ廻り、彼の地へ。

十次　密かに。

丈助　畏まつてござりまする。

十次　ト小船に乘り入る。暮れ六ッの鐘なる。
最早黄昏。灯を持て。

小姓　ハッ。

ト内にて「三輪」の謡になり、吾妻、着流しにて出る。

十次　吾妻、其方が心を察し、助命なせしはこの場の寸志、人の見ぬ間に、早う歸りやれ。

ト吾妻こなし。

吾妻　殿樣のお心に、逆らひしこの吾妻、憎い女とお叱りも遊ばさず、身に餘りしお情のお計らひ。シタガ、例へこの場は助かりましても、浮世の望み絶え果てしこの身、生なか助けるお情より、矢ッ張り誠のお手討ちで、わたしや死にたうござりまするわいなア。

十次　イヤ、いま相果てゝは、亡き父母へ不孝となり、云ひ號けせし夫へ、操が立つまい。

吾妻　エヽ。なんと仰せられます。

十次　女の子とて、母眞弓どのに、ハテ、よくも似たよなア。

吾妻　母樣のお名までも、どうして御存じ遊ばしたえ。

十次　それと知りしはこの守。

ト守り袋を出す。

吾妻　ほんにそれは。

ト謡になる。吾妻、十次兵衛あたりを見廻して

十次　コリヤ。

吾妻　ほんに、この館へ參りしより、不思議に見えぬこの守。どうしてあなたが。

ト合ひ方になり

十次　拾ひしも宿世の縁。

トあたりを見て、下に居る。

コレ、この守に一寸八分の觀音。御身が實父、野々宮左内、信仰厚く、所持の尊像。まつた、この十次兵衛が父といふは、もと大内の仕官にて、南方十太夫と名乘りし者。その頃左内どのも京家の武士、互ひに昵懇の因み、一家の交りを結ばんと、身共が弟十吉はまだ八歳、お身は三歳、振分け髪の昔より、云ひ號けの縁を結び、過る月日を相待たば、互ひに變らぬ親の愛情、父十太夫聊かの越度あつて、仕官を退き、津の國に、蟄居の身の上。兄弟の倅のうち、弟は町家へ養子、間もなく、父も相果て、何卒武士の名跡を取立てんと、九ヶ年以前當家へありつき、いま立身の時至りて、南方十次兵衛と相名乘る我が身の仕合せ。思ひ寄らざる不思議の對面。父母に別

れし孤兒とは聞きしが、左内どの〻息女でありしとは、ハテ、親は無くても子は育つおやよなア。
吾妻　成る程、父樣の御遺言と、母樣のお噂で、よう聞いて居りまする。お話しを聞くにつけ、悲しいはお果てなされた兩親達。また床しいは云ひ號けの殿御の事。あなたの爲には弟御。して、御養子にお出でなされた、町家といふは何れの所、お名はなんと申しますえ。
十次　されば、その頃大坂で、難波屋與左衞門と名乘り、歴々の町家なりしが、身上縺れ、今は津の國山本村に引込み、その日を送る油の請賣り。弟十吉は、いま與兵衞と名乘り、父與左衞門も歿かりしと、風の便りに聞きたるまゝ、身も懷かしく存じ居るて。
吾妻　エ、アノ、津の國山本村へ。ムウ。そんなら廓でお出合ひ申した與兵衞さまが、云ひ號けの十吉さまであつたか。
十次　ナニ、弟に巡り合ひしとな。
吾妻　アイ、折角巡り逢ひながら、神ならぬ身は、それとも知らず、父樣の御遺言を守り、云ひ號けの殿御へ操が立てたいばかり、つれなう云うたが、矢ッ張りあなたへ立てぬく貞節。それ知らぬ身は是非もなう、本意ない別れを致しましてござりますわいなア。
十次　ムウ。すりや、その折からに不思議にも
吾妻　出合ひしお方を夫とも
十次　知らず歸せし其方が貞節。
吾妻　それよりは
十次　仇に過ぎ行く今日只今。
吾妻　小舅の十次兵衞さま。
十次　弟嫁の藤屋の吾妻。
吾妻　思ひも依らぬ
十次　寄合ひ一家の
吾妻　盡きぬ御縁で
兩人　あつたよなア。
ト「三輪」の神樂になり、この時西の屋體の障子を明け、千太郎、以前の小鳥の籠を片脇に置き、酒宴の體。
千太　十次兵衞々々々々。
ト十次兵衞、吾妻を隱し、思ひ入れあつて
十次　ハツ〳〵。
千太　汝が實義、吾妻が操、聞き屆けたぞ。
十次　先刻お手討に遊ばせし安達瀨左衞門は。
千太　忠義と見する邪惡の荷擔人、討つて捨てしは曇りな

き政道の手始め。亂酒を止まる卽ち誓ひ。
十次　すりや、殿には御本心に。
吾妻　わたしが身の上。
千太　色よき小鳥も、眺めに飽けば。
ト小鳥籠を明ける。小雀、仕掛けにて空へ飛ぶ。
斯くの通り。
ト十次兵衛、吾妻顏見合せ、こなしあつて「エ、」と拜む。
千太　十次兵衛。
ト十次兵衛の顏見て、其方が計らひ、心底感心といふこなし。
十次　ハツ。
ト十次兵衛畏れながらと、辭儀すると、この前より下手より箱船出て、この時、丈助、スッと出る。吾妻顏見合せ
吾妻　ヤア、あなたは。
丈助　殿樣の仰せつけ。幸ひ有り合ふこの小船で、山本村へ。
吾妻　エ、。
ト千太郎を拜む。この時、後より兵助出て

兵助　千太郎、うぬ。
ト切つてかゝる。
ト十次兵衛、兵助を引き廻し、吾妻を船へ乘せる。兵助、擬勢するを、取つて押へ、千太郎が顏見る。
千太　切つてしまへ。
十次　ハツ。
ト兵助を突き廻し川へ切り込む。吾妻「アレイ」と袖を覆ふ。丈助、船さす。千太郎、感心の思ひ入れ。
千太　見事。
ト十次兵衛、刀を納める。チョンと頭入れる。この途端、よろしく

幕

大詰　山本村與兵衞内の場

役名——南方十次兵衞。平岡丹平。葛原左忠太。里見丈助。山崎屋娘、おてる。お山の九助。齋坊主、西念。尼、貞壽。駕籠舁き。甚兵衞。醫者、辻道伯。廣屋の吾妻。油賣り、難波屋與兵衞。

西念　造り物、三間の二重舞臺、見付け赤壁、納戸口。上手佛壇、押入れ。臆病口、中二階、この前に柵の池、橋がゝりあり、下手鼠壁、塀。いつもの所に門口。幕の内より西念、坊主の拵らへ、貞壽、尼の拵らへ。おべく、婆の拵らへ、同行新六、太郎次、皆々佛壇の前にて、西念和尚導師にて百萬遍を繰つて居る。この見得、責め念佛にて幕明く。

西念　願似濟切德平等利益往生安樂國、なまいだ〳〵。

同行　南無阿彌陀々々々々。

ト念佛申しになり、西念

西念　御亭主、與兵衞どの〳〵。

與兵　ハイ〳〵。

ト與兵衞、内より丸盆に精進の肴をいろ〳〵載せ、ちろりに酒の入りたるを提げ、出て來り

與兵　これはどなたも御苦勞でござります。サア〳〵、どなたもお一つ上がらつしやつて下さりませ。

西念　お勤めの非時は下さる。後はよしにしませう、

貞壽　無人の事なり、何も構はしやんなや。

與兵　その代りに何にもござりませぬ。有合ひの煮染一種でござりまする。

西念　七々七日の弔ひ、殊に鰥住ひの事、甚だ念が入つて御馳走でござる。時に、爰の家の息子の與三松どのは、親を捨てゝ幼少より家出をしたが、今に知れぬかの。

與兵　さればでござります。實の子の與三松どのは、十二の年家出をして、皆くれ知れぬとの事。その後程を經まして養子に參りましたこの與兵衞、大坂では人も知つた難波屋與左衞門、金相場の手もつれから、遂には身代を疊み、この山本村へ引ッ込みまして、その日を送る請賣りの油屋。養父與左衞門どのも過ぎられ、義理ある母を大切にする甲斐もなう、また後の月の大病。只黄泉の障りは實の子の與三松、守に入つた臍の緒に、年月も記しあれば、どうぞ尋ねて巡り逢ひ、親の跡も弔ふやうにさせてくれいと、遺言と共にその場の往生。弔ひをする今日の日に、あなた方へお話しも、因縁でがなござりませう。

西念　こなたは養父へ義理を立て、與三松を尋ね出して

太郎　とも〴〵稼ぎ、元の身代に仕出さうと思ふ志し。

新六　十二の年、惡黨で家出した與三松、死んでがなあらうぞいの。

西念　何分こなたの孝行を、死なれた母が未來から喜ばし

やるであらうぞい。ナウ、同行衆。
皆々　左樣でござりまする。
貞壽　そんなら勤めませうか。
與兵　よろしう召上がられませ。
ト酒を飮むうち、向うよりおてるにお山の九助附き添ひ出て來り
九助　あれが與兵衞どのゝ住家でござりまする。
てる　大儀ながら案內しや。
九助　難波屋與兵衞とはこれかな。
與兵　ハイ、與兵衞は手前でござりまする。御用ならばお入りなされませ。
九助　さうぢや〳〵。入らんせ〳〵。
トおてるを連れて入る。おてる、こなしあつて
てる　イヤ、始めて參りまして、お目にかゝりまする。わたしは山崎屋のてると申す者でござりまする。
與兵　おてるさまとは、そりや大坂の山崎屋の與五郞さまの
九助　云ひ號けのお娘御。
與兵　これはしたり。マア〳〵、あれへござりませ。養父與左衞門は、その以前山崎屋へのお出入り。だん〳〵御恩のお家。お前樣の姉御お菊さまは、死なれた母が養育、その妹御樣なれば、私しが爲には親方筋なり、お主樣も同然、只今では貧しい暮し、この身を耻ぢて、わざとお訪ねも申しませなんだ。この在所へわざ〳〵お越しなされしは、何ぞ御用でもあつてゞござりまするかな。
てる　九助、委細の樣子を話してたもいなう。
九助　與兵衞どの、高が斯うぢや。此方の與五郞さま、お屋敷へ差上げる寶物を騙られさんしたその上、女郞買ひの論で、上町の葉屋の彥助と云ふ奴を、與五郞さまが何や彼や揉め事で、山崎屋は町預けでごんすわいの。
てる　その上、與五郞さまは、この九助が內にござるゆゑ、逢ひに行たれど側に居られず、それゆゑわしが爲には乳母の在所、それで爰の內へ匿まうてもらひたさ。
與兵　何がさて、斯う云ふ在所に居ますれば、山崎屋の揉めは、とんと存じませなんだ。マア〳〵、何か落ちつきするまでは、見苦しけれど手前にござりませ。隨うてもお世話せねばなりませぬ。
九助　兎角よろしう賴みます。
てる　見ますれば、お客樣もござります樣子。
與兵　今日は母の逮夜。あなた方は同行衆でござります。

同行　與兵衞どのと、一家同然の者でござります。
與兵　イヤ、どなたもお構ひ申しませぬ。お銚子を替へませうかな。
西念　お客が見えたので、酒宴が若やぎました。ハヽヽ。
ト在郷唄になり、道伯、旅形、駕籠を吊らせて出て
道伯　オヽ爰ぢや〳〵。與兵衞は內に居られまするかな。
與兵　オヽ道伯さまぢやござりませぬか。
道伯　その後は久しうござるの。
與兵　マア〳〵、あれへお通りなされませ。
道伯　然らば許さつしやれ。
ト上手へ通り、與兵衞、茶を酌んで持つて行き
與兵　マア、お茶一つ上げませう。
道伯　イヤ〳〵、構うて下さるな。時に與兵衞、この間新町での事。
與兵　今さら面目ない仕合せ。
道伯　そこが若いうちの花ぢやて。
兩人　ハヽヽ。
道伯　時に、尋ねて來たは、ちと談合があつて。
與兵　私しに談合とは。
道伯　仲人せうと思うて。
與兵　エヽ。
道伯　幸ひ貴公に似合ひ相應なお嫁があつて、わざ〳〵來ました。
與兵　モシ〳〵、道伯さま、さう云ふお世話なら、よしになされて下さりませ。御存じの通り、フトした無分別から、値の高い傾城、イヤ、あの晩の體裁。モウ〳〵、とんと懲り果てました。女子の側へというては、一生寄るまいと存じまして居ります。
道伯　コレ〳〵與兵衞、さうぢやないぞや。いつまでも獨り身では居られまい。今日は日柄もよし、嫁御を同道して參つた。待たつしやれ〳〵。
ト表へ出て、駕籠の側へ行て、垂れを上げる。吾妻、帽子を着た儘、駕籠より出る。
駕籠の衆、大儀でござつた。
駕籠　ハイ〳〵、左樣ならお別れ申しませう。
ト入る。
道伯　サア〳〵、首尾はよい。入つた〳〵。
與兵　ヤア、こなたは。
吾妻　與兵衞さま。

ト側へ寄らうとする。
與兵　寄るまいぞ〳〵。こなた樣には懲りたものぢや〳〵。
マア〳〵、外へ出やしやれ〳〵。
道伯　嫁入りを嫁出しとはどうぢや。
與兵　道伯さま、お前樣が仲人せうと仰しやるのは、あの
人でございまするか。
道伯　さうぢや。氣に入つた女房であらうがの。
吾妻　あなたを賴んで、どうやら斯うやら。
ト内へ入る。
與兵　これはしたり、また入つたのかいの。マア〳〵、出
やつしやれ〳〵。
ト突き出す。
道伯　コレ與兵衞、どうしたものぢや。貴樣吾妻に
與兵　サア、惚れた時には美人とも見え、思ひ切つては惡
人魔王、顏見るのさへ腹が立ちます。
ト此うち吾妻、また入る。
また入るかいなう。出やしやれいの。
ト突き出すと、吾妻、また入らうとする、
エヽ、アタしつこい。道伯さま、キリ〳〵連れて去んで
下さりませ。

道伯　マア、コレ〳〵、折角ござつた嫁御、其やうにせず
と
同行　マア、内へ入れたがよいわいなう。
與兵　西念さまもお同行も、樣子を御存じないに依つてぢ
やが、あの女子については、大抵や大方。
トこなしあつて
エヽモ、とつと口へ出しても云はれた事ぢやございませ
ぬ。
九助　サア、そこはマア、この九助が挨拶。
皆々　早う祝言さつしやれいなう。
與兵　滅相な。なんのこれが祝言どころか、否でございま
するわい。
新六　同行中が世話するのに
貞壽　氣に入らぬか、與兵衞どの。
西念　但し、賴み寺の西念を潰すのか。
與兵　なんのマアお前樣を。
西念　そんなら得心ぢや。道伯さまとやら、善は急げぢや
早う〳〵。
道伯　オッと心得た。幸ひ爰に島臺代りのこの鉢肴、嫁御
の名も其まゝに吾妻菊とはどうぢや。どうぞ與兵衞も合

點して。
九助　やう／＼と値がなつた。サア／＼、嫁御も入らつしやれ。
吾妻　ハイ、左樣なら、どなたも御免遊ばせえ。
ト内へ入り、よき所へ坐る。
九助　サア、嫁御の方から、始めたり／＼。
トおてろ、杯を吾妻へ持つて行く。吾妻、會釋して與兵衞へ持ち行く。
常とは違ふ。サア、一つ飲んだり／＼。
トおてろ、杯を吾妻へさす。
吾妻　兎角よろしう賴みます。
ト杯うける。道伯、酌する。吾妻、飲んで下に置く。その杯取つて、與兵衞へ渡し
道伯　サア／＼聟君。
與兵　なんの事はない、嫁入りのお取込みに會うたのぢや。
ト飲んで下に置く。道伯、扇を構へて
道伯　相に相生の松こそめでたかりけれ。
西念　サア、こちらは去にませう。
同行　與兵衞どの、去ぬぞや。
西念　いかい御馳走。
道伯　仲人は宵のうち
てろ　何かは後に。
道伯　ドリヤ、休息と出かけよう。
ト唄になり、皆々入る。道伯、九助、おてろ、納戸へ入る。あと合ひ方になり、吾妻、與兵衞の側へ行て
吾妻　與兵衞さま、お懷かしうござりましたわいなア……
……
ト取りつくを、振り拂ふ。
モシ、今更わたしを、お嫌ひなさるのかえ。
與兵　イヤ、嫌ひはしませぬ。ぞつこん惚れた時には、恥も恥辱も構はなんだが、その夜の體裁、よく／＼思案すれば、油屋風情が身に叶はぬ女郎買ひ。第一は母へ不孝ぢやと、心で心を意見して、身過ぎを大事に稼ぐうちにその母も死なしやる。戀を無常に引きかへて、忘れ切つて居る所へ、思ひがけなう持ち込んだ嫁入り、杯をしたは、賴み寺や同行衆の心休め。サア／＼、ちやつと去んでもらひませう。
吾妻　そんならその夜仰しやつたお詞は。
與兵　サア、そりやほんまぢやけれど、たつた一夜さで大

枚の金、さう／＼は續きませぬ。モウ／＼／＼、思ひ切つたとこそ云へ、女郎といふものは、一生繪に畫いたのも見まいと、妙見様へ願立てを致しました。否でござりまするわいなう。

吾妻　イ、ヤ、そりや一途の御料簡、折角慕うて來たものを、此まゝ去ねとは、胴慾でござりますわいなア。

與兵　コレ、胴慾とはこなさんの事ぢや。マア、何は格別おりや高で素性の卑しい油賣り、お前のやうな御全盛のお傾城様と、女夫の縁は釣合ひませぬ。

吾妻　イ、エ、素性卑しいとは申されませぬ。南方十太夫さまの御二男十吉さま。

ト與兵衛、ギックリとこなしあつて

與兵　合點がゆきませぬ。おれが親仁の名苗字、殊に幼名までも、どう云ふ事で。

吾妻　知らいでなりませうか。モシ、あなたとわたしは、云ひ號けの夫婦でござりますわいなア。

與兵　とんと、どき／＼として合點がゆきませぬ。マ、、とつくりと様子を話して聞かさつしやれ。

吾妻　サア、その譯と申しまするは、過ぎにし時お話しを申せし通り、野々宮左内が娘小牧がこの身の上、その後八幡のお屋敷へ捕はれし折も折、御家老南方十次兵衛さまが、フトした事から廿年以前のお物語り、あなたは七つ、わたしは五つ、幼ない時親々の許した云ひ號けと、聞けば聞く程心の割符、殿様がお聞きなされ、さてはさうかと情のお暇。あなたの所は津の國山本村と、聞いたばかりで知る邊もなう、マア、道伯さまをお頼み申して、今日の仕儀。モシ、縁を結んで行く末の、力となつて下さりませ。

與兵　實の親達や兄貴に別れたは、幼ない時で覺えねど、この頃死なれた母の話し、親々も世を過ぎられ、兄貴があると聞いたばかりで、往來もせねば今の今まで知らなんだが、そんなら八幡の御家老が、實の兄者人で、云ひ號けの小牧どのとは、こなたであつたか。ハテナア。

ト悧りのこなしある。

吾妻　サア、それぢやに依つて、二世の固めを。

與兵　イヤ、夫婦にやなれぬ。

吾妻　なぜにぢやぞいなア。

與兵　ハテ、後の親にせよぢや、尤も實父の家は兄十次兵衛どので立つてはあれど、こなたと夫婦になれば、親々の契約、武士となつて、野々宮の家を立て、造營金の盗

賊を、おれが詮議をせねばならぬ。その心勞はいとはねど、武士を立てゝは義理ある養父、この難波屋の位牌所へ立ちませぬ。吾妻どの、なんと、そんなものではござんせぬか。

吾妻　さう仰しやれば、皆あなたのが御尤もぢやに依つて返す詞はござんせぬわいなア。

與兵　すりや、得心して歸らしやるか。

吾妻　イヽエ、どうも歸られませぬわいなア。

與兵　それでは、どうも今云うた事が。

吾妻　サア、あなたの仰しやるは御尤もぢやわいな。云ひ號けの殿御に添はれずば、生きて居る氣はござりませぬ。どうぞお聞き分け遊ばして、夫婦になつて下さりませいなア。

ト抱きつく。

與兵　これは困つた事ぢやなア。

ト頭を掻く。道伯、出て

道伯　さて／＼與兵衛、其やうにくど／＼せずと、この人の望みも叶へ、また爰の内の納まるやうに、思案をさつしやれいの。

吾妻　道伯さま、どうぞあなたがよいやうに。

道伯　サア、よし／＼。何事もあの一間で、夫婦妹脊の新枕。……イヤサ、夫婦になられぬ譯を、納得するやうに斷わりを云うて聞かしたがよいわいなう。

ト吾妻、いそ／＼として

吾妻　サア、ござんせ。

ト手を取る。與兵衛、モヂ／＼しながら

與兵　左樣ならばあれへ行て、納得さつしやるやうに。

吾妻　斷わりを聞かうわいなア。

道伯　互ひに聞いたり聞かれたり。善は急げぢや、サアサア早う。

ト障子の内へ連れて行く。與兵衛、逃げうとするを

ハテ、行きやいなう。

ト唄になり、無理に障子屋體へ入る。吾妻、内より障子をさす。道伯、こなしあつて

オツと、まだ肝心の物ぢや。

ト紙入より錠を二つ出して

これはおれが内のぢや。こちらは吾妻の。

ト障子の内より覗き

ソレ、これで明けたり

ト抛り込み、こちらへ來て

マア〳〵、あれでよいワ。アヽ、どうやらおれも味な氣
になつた。
トこなしある。奥よりおてる、出る。
てる　モシ、道伯さま。
道伯　お娘、こりや堪らぬ。
ト抱きつく。
てる　何をなされまするぞいなア。モシ、あなたは大坂に
ござれば、今度の山崎屋の揉め事、お聞きなされたであ
らうなア。
道伯　ムウ、聞いた〳〵。息子の與五郎どのが、上町船越
町の葉屋彥助を切らつしやつたゆゑ、山崎屋は町預け。
ト九助、出て
九助　さうして町内の樣子はどうぢや。お聞きなされまし
たか。
道伯　彥助が手疵、だん〳〵重つて、與五郎どのお下手人
に取るとの願ひぢやさうな。
てる　さうして、彥助は死にさうにござりますかえ。
道伯　イヤ〳〵、僅かな疵を仰山に願ふは、根が彥助めは
惡者ゆゑ、金にせうと强請り居るのぢやわいの。
てる　どうぞお前、御苦勞樣ながら、大坂へ行て、聞き合
せて下さんせいなア。
道伯　成る程、彥助がかゝつて居る外科正庵は、我れ等が
ずんど懇意にするのぢや。一通り去んで、とくと聞き合
して知らせて進ぜう。
てる　そんなら、どうぞ吉左右を。
道伯　心得た〳〵。
ト門口へ出て
ゆかり懸りはなけれども、與兵衛が頼んだ深切と云ひ、
大坂から三里餘り、この在所へ駈け廻つて、いかい世話
やき。ハヽヽヽ。
ト唄になり、向うへ入る。兩人殘り
てる　ア、辛氣な事ではあるぞ。
ト案じながら、奥へ入る。九助、こなしあつて
九助　辛氣な事ぢやなア。
ト同じく入る。入相の鐘鳴る。向うより平岡丹平、出
る。見え隱れに目付け、窺ひ出る。丹平、見返る。目
付け、ツッと入る。
丹平　この邊も配符が廻つたと見えるなア。
ト思ひ入れあつて、門口へ來て佇む。この時吾妻、障
子の内より出て

吾妻　あのやうに仰しやれば、お道理でもあり、と云うて長の年月心の誓ひ、この錠も明けて甲斐なきこの樣子。折角巡り逢ひながら、日頃の願ひも得叶へず、逢はぬ昔は戀ひ焦れ、逢へば添はれぬ世の義理詰め、よく〳〵結ぶの神樣に、見放されたこの吾妻は、なんとなる身の果てぢやぞいなア。

ト泣き居る。丹平、ソロ〳〵入り、吾妻の後より抱きつく。

吾妻　エヽ、誰れぢやぞいなア。

丹平　誰れでもない、道通りぢや。

吾妻　道通りのお方なれば、なんでてんがうなされまする。アタ無作法な。

丹平　こりや手前が無作法、然らば名乘りかけて申さう。お身はこの家の娘か、但しは女房か。

吾妻　ハイ、女房のやうな者ぢやわいなア。

丹平　マア、女房とあれば耳寄りぢや。手前は獨り身ゆゑ、仲人なしのどれ合ひ女夫。サア、女房ども、もう寢ようおぢや。

吾妻　アタなめ過ぎた、なんぢやぞいなア。我れ一人合點して、イヤ女房ぢやの、もう寢ようなんぞと、そんな押しつけがましい事が、よう云はれた事だやなア。

丹平　それ〳〵、拗ねた所がどうも云へぬ。

ト無理に抱きつく。

吾妻　アレ、またしつこい。

ト逃げるを、丹平、吾妻の帶を解き、帶の端を引ッ張る所へ、與兵衞、出て、兩人が眞中へ入り、帶を持つ。

ヤア、よい所へ與兵衞さま、とつと最前から。

與兵　サアよい。この與兵衞、眼もあれば耳もあるが、畢竟これが醉ひ狂ひ。お酒に醉うて戲むれであらうかい。

丹平　して其方は。

與兵　この家の主、こりやわたしが女房どもでござります。

吾妻　慮外ながら、與兵衞さまが女房どもぢや。しかも、たつた今嫁入りした、女房も念の入つた女房どもぢやわいなア。

丹平　ハテナア。

與兵　其方は奧へ行て、茶など沸かすがよいわいの。

吾妻　アイ〳〵。こちの人、奧へ行くぞえ。

與兵　ハテ、行きやと云ふに。

吾妻　ドレ、茶々の下を焚きつけて來うか。
ト吾妻、こなしあつて入る。丹平、奥へ行かうとする。
與兵　待つた。理不盡に踏み込んでは、盜賊か押し入り同然。
丹平　イヤ〳〵盜賊でない、この家へわざ〳〵參つた者。
與兵　なんと。
丹平　無體の戀慕も、一夜の宿が求めたさに。
與兵　ハテナア。味な持ち込み宿の無心。そりや品に依つたら、お宿申すまいものでもない。
丹平　今宵の芳志、一宿の價。
ト守り袋を抛る。
與兵　價とは。
ト守り袋を取り、開き見て
寛保二年九月二十日の誕生、難波屋與左衞門悴與三松。この臍の緒は。
丹平　十二年跡家出をした、この家の惣領。いま成人してこの身の上。かゝる有樣。
與兵　すりや、親達の遺言。
ト顏を見て
左の眼尻に黑子と云ひ、そんならこなたが。
丹平　噂に聞いた弟與兵衞。
與兵　尋ね〳〵た兄者人。
丹平　盡きせぬ緣とて
與兵　兄弟の
丹平　名乘り合ひで
兩人　あつたよなア。
與兵　母者人を弔らうた今日の日に、廻り逢うたは。
ト佛間を拜む。
丹平　すりや、母者人も死なれたか。
與兵　戒名は妙吟信女、四十九日の今夜が逮夜。
丹平　知らぬ事とて、不孝の悴。
ト佛間に向ひ
南無阿彌陀佛々々々々々……ちと仔細あつて世を忍ぶ身の上。今の苗字は明けて云はれぬこの與三松。親は泣き寄り。與兵衞、よもや見捨てはしやるまい。
與兵　何がさて、巡り逢うた兄弟が共稼ぎ。惣領のこなたをば、昔の難波屋與左衞門と人にも云はせ、位牌所が立てたい念願。これからは、必らずどこへも行つて下さるなや。

丹平　ムウ、噂の通り實義の與兵衞。
與兵　世を憚ると云はつしやれば、爰は端近。人目に立たぬあの二階で。
丹平　深切の段、先づは過分。
與兵　積る話しはゆる〳〵と。
丹平　然らば奥で。
與兵　御遠慮なら。
丹平　ドリヤ、休息いたさうか。
　ト唄になり、奥へこなしあつて、丹平、入る。
與兵　蒲團も枕も押入れにござります。ゆるりと休まつしやれえ。
　ト云ひ〳〵こちらへ來て
長の年月便りもせぬ與三松どのが、今度戻つて見えたと云ひ、世を忍ぶ身の上、今の苗字名、明けて云はれぬとは、どうやら氣がゝりな。
　トちよつとこなしあつて
マア〳〵、何は格別久し振り。ドレ、精進鱠でも拵へて置かうか。
　ト田植ゑ唄になり、奥へ入る。向うより南方十次兵衞野袴、馬提灯を持ち、後より捕り手、里見丈助、附き添ひ出る。左忠太、同じ形にて、これも組子四人連れて出て來り
左忠　十次兵衞どのではござらぬか。
十次　左忠太どの、其許にも。
左忠　お互ひに
十次　御苦勞に存じまする。
左忠　造營金千兩の盜賊、詮議の役目を蒙りし貴殿拙者。刻限を相分ち、代り〳〵に吟味の役目。
十次　その盜賊平岡丹平、村々へ配符を廻し、急ぎ召捕らんと、それゆゑ繪姿を以て吟味のところ、今に手がゝりもなく、心勞仕る。
丈助　先達て大坂山崎屋にて、墨蹟を騙りしもその丹平なりと、十平次どのより内意。殊更この所へ入り込みしと日付けが注進。
左忠　宵のうちは拙者が役目。出口を固め、詮議仕るでござらう。
十次　夜半を相圖に、役目相替るでござらう。
左忠　然らば後刻。
十次　御苦勞に存じまする。
左忠　家來續け。

丈助　ト捕り手、付き添ひ入る。
丈助　何卒彼の丹平が行くへ知れなば、私しに捕り手の儀を。
十次　如何にも。地頭へ參り、何かの指圖を相待ち居れ。
丈助　畏まつてござりまする。
ト唄になり、丈助、入る。十次兵衛、門口へ來て、内を窺ひ、藪垣へ忍ぶと、駕籠屋甚兵衛、提灯を持ち出て、スツと内へ走り入る。内より
與兵　イヤ／＼、給仕はおれがしませうぞ。
ト云ひ／＼、膳を持ち出て來る。甚兵衛、うろたへ恟りして、與兵衛に行き當る。與兵衛、恟りして、甚兵衛を見て
コレ／＼、貴樣は誰れぢや。
甚兵　誰れでもない。ツイ外から來た者。
與兵　外から來いで、どこから來るもので。
ト障子の側へ行て覗き
兄者人、目が覺めたら、茶漬を參りませぬか。音がせぬ、目が覺めずば、マア後の事に。
ト膳をよき所へ直す。甚兵衛、こなしあつて
甚兵　與兵衛、それから逢ひませぬ。變りし事はないか。

先づは提灯も消して。
ト提灯を消して
爰らあたりへ安座をせうわえ。
トよき所へ胡坐かく。與兵衛、見て
與兵　馴れ／＼しい貴樣は。
トよく／＼甚兵衛の顔を見て
オヽ、さうぢや。先度新町で出會うた、駕籠舁きぢやないか。
甚兵　如何にもさうぢや。それから此方は、貴樣に逢はう逢はうと思うても、所は知らず、今まで逢はなんだが、さる人に聞いて、この山本村へわざ／＼來たのぢや。與兵衛、返してもらひたい。
與兵　返してもらひたいとは、そりや何を。
甚兵　油荷の桶へ入れて置いた一品、あれは吳道の墨蹟と云うて、この甚兵衛が親の代から、持ち傳へた寶物。ちつとした事があつて、荷桶の中へ隱したを、持つて歸りやつた與兵衛、覺えがあらう程に、その墨蹟を取返しに來た。サア／＼、早う此方へ戻してもらはうかい。
與兵　戻つて見れば荷の中へ、入れてあつたその掛け物。持ち主とあれば戻さうが、樣子あつて餘所へ預けてある。

取寄するその間、二三日待つてもらひたい。
甚兵　われが横に出ても、その强請り喰ふ甚兵衞ぢやないワ。二三日は愚か、半時も待てぬ。サア、いま戻せ〳〵。
トやかましう云ふ。與兵衞、構はず煙草のんで居る。この時橋がゝりより大屋五郎左衞門、庄屋の形にて、墨蹟を風呂敷に包み、持ち出て來り
五郎　與兵衞どの、內にござりまするかな。
與兵　これは〳〵、大屋五郎左衞門さま、マア〳〵、お通りなされませ。
五郎　イヤ〳〵、爰から云ひます。さて與兵衞どの、後の月の十日の晩に、金十兩取替へて、その代りに預つかたこの掛け物、こりや吳道の墨蹟と云うて、結構な物ぢやげな。よく〳〵聞けば、何やら野暮な物さうな。懸り合ひになつては迷惑、掛け物は戻しまする。取替へた金十兩いま受取つて去にませう。
甚兵　そりやこそ與兵衞、人の物を屆けもなしに、賣り拂うて濟むかいやい。
與兵　濟むも濟まぬもあるかい。主のないうちは、おれが物も同然。質に置かうが賣り拂はうが、おれが勝手ぢや。
甚兵　ても、途方もない事云ふな。イヤ、そこな和郎、與兵衞が賣つても、持ち主はこの甚兵衞。その墨蹟は、おれが受取らう、さう思へ。
五郎　持ち主はどなたであらうが、十兩の金受取らにや、滅多に渡す事はなりませぬわいなう。
與兵　オヽさうぢや。金渡すまでは、こなたに預ける。
甚兵　千も萬もない、その墨蹟を。
ト取りにかゝるを
五郎　これは無體千萬な。
甚兵　なにを。
ト無理に取らうとする。與兵衞、留める。
與兵　滅多にさうはさゝぬわい。
ト三人揉み合ふ。その中へ九助、おてる、吾妻、出て九助、眞中より墨蹟を持つて
九助　ドッコイ、見附けたぞ。
てる　この墨蹟ゆゑに。與五郎さまの御難儀。
九助　これかいな、尋ねて居たは。
吾妻　それを持ち主とは、あんまりな僞はり。
甚兵　ヤア、わりや吾妻、妙な所へ來て居るなア。
九助　よい所で見附けたわい。
與兵　なんと云はつしやる。そんならその墨蹟は。

九助　先刻に話した親方の難儀、
てる　元はと云へば、その墨蹟を騙られしゆゑ。
與兵　すりや山崎屋の重寶、それと知つたらその時に、與
五郎さまへ返さうもの。
五郎　コレ與兵衞、金が濟まねばこの墨蹟、持つて去なう
かい。
與兵　イヤ、さう聞いたら、持たしては去なされぬ。
五郎　そんなら金をせうかい。
與兵　サア、その金は今は無い。
九助　ムウ、墨蹟を金の抵當に入れたからは
てる　與兵衞も矢ツ張り騙りのうちか。
與兵　なんのマア、滅相な、
吾妻　矢ツ張り甚兵衞どのゝ仕業か。
甚兵　エヽ、すツ込んで居れ。與兵衞、墨蹟を戻さぬか。
與兵　イヤ、墨蹟はおれが手に入れる。
五郎　サア、そんなら金をせうか。
與兵　サア、その金は。
五郎　サア。
與兵　サア。
三人　サテ〳〵〳〵。

五人　どうぢやぞいなう。
ト與兵衞、こなしあつて
與兵　サア、詳しい譯を申せば面目ない事。やつと樣子あ
つて、拵らへねばならぬ二十兩の金。只一夜さに十六七
兩は水の泡と消え、殘つた金は僅かになり、御無心申し
た旦那樣へ、お返し申さねば出入りもならず、足らぬ所
へあの掛け物、油荷の中にあつたを價として、お借り申
した十兩の、この一軸が與五郎さまの、御難儀の元とあ
るからは、いよ〳〵金拵らへ、お渡し申さにやなりませ
ぬ。油荷へ入れて置いたは、この駕籠の甚兵衞、譯こそ
あれ戻しはせぬ。大家樣には少しの御容赦、盗みもせず、
騙りもせず、この與兵衞が手に入つた、譯と云ふは、こ
の通りでござるわいなう。
九助　ムウ、すりや、騙りの筋から
五郎　廻り〳〵て此方へ買ひ物。
與兵　何を云うても十兩の
五郎　金が濟まねば戻さぬ墨蹟。
與兵　エヽ、金なら僅か十兩で、お主筋の難儀を見捨てる
とは、その日過ごしの小商人程、腑甲斐ない者はないわ
い。

ト次　ト口惜しきこなし。この前より十次兵衞、出かけ居て
　その品、求めてくれう。
　ト合ひ方になり
皆々　あなた様は。
十次　八幡の家老、南方十次兵衞と申す者。
與兵　十次兵衞さまとあれば、この與兵衞が爲には。
吾妻　眞實の兄御様、
十次　八幡の屋敷で
吾妻　聞きました。
與兵　すりや兄者人、別れた時はまだ七歳。
十次　東西辨まへぬ弟十吉。
與兵　八幡の屋敷にお勤めと、聞いたも最前、その日も替らず
十次　兄弟の名乘り合ひ、
　トこなしあつて
　弟十吉。
與兵　兄者人。
十次　先づは堅固で
與兵　懐かしうござりましたわいなう。
五郎　して、この墨蹟は。

十次　價の十兩。
　ト金包みを抛る。
五郎　慥かに受取りました。
　ト金を懐中して
　さらば代物差上げませう。
　ト風呂敷ともに持ち行く。
十次　相違なき吳道の墨蹟。
五郎　雲行きの變らぬうちに。
　トこなしあつて
　どなたもこれにござりませ。
　ト下手へ入る。
與兵　兄者人。
吾妻　十次兵衞さま。
九助　その墨蹟を
與兵　お買ひなされた
皆々　御所存はな。
十次　修覆の爲に與五郎へ、預け置きしところ、騙られしは不覺の第一。さるに依つて與五郎が兄、宗左衞門どのには、紛失の罪に落ちるところ、いま十次兵衞が買ひ取りしは、朋友の情と云ふものサ。

ト皆々に顔見合せ、こなしあつて、甚兵衛に向ひ
御身が持ち主とあるが、いよ〳〵左様か。
甚兵　イヤ、こりや私しが心得違ひでござりまする。
ト頭へ〳〵云ふ。
十次　すりや、求めても申し分はないか。
甚兵　なんのござりませう。
十次　其方に無うても、此方に詮議のある奴、覺悟いたして待つて居れ。
甚兵　何もおりや詮議を受ける覺えはない……ヤイ、與兵衛め、吾妻を引込んで置くからは、養ひの應對せにやならぬが、今はちと心が急くに依つて、さう思うて待つて居よ。
與兵　オヽ、此方も貴樣に、ズッと尋ねにやならぬ事がある。
甚兵　そんならマア、出直して來ようわい。
十次　イヤ、滅多に歸さぬ。墨蹟を手に入れんとせしは、頼み手があらう。サア、その頼み手を白狀いたせ。
九助　吐かさにや締め上げて、三角の鼻垂れさすぞよ。
甚兵　イヤ、頼み手はない。ツイおれが出來心ぢや。
十次　ヤア、死太い奴の。

與兵　どうで一應では申しますまい。この與兵衛が詮議いたしませう。
甚兵　アノ、舅御の甚兵衛さんを、われが。
與兵　オヽ、内緣があるに依つて、詮議して墨蹟の出所、白狀さして與五郎さまの、身の明りを立てるのぢや。
甚兵　何を猪口才な。
トかゝるを、ちよつと立廻つて、甚兵衛をポンと當てる。
皆々　これは。
十次　詮議は其まゝ、暫時の猶豫。
トこの時九ツの鐘鳴る。左忠太、出かけて門口を明けて、ズッと入る。
左忠　十次兵衛どの、これより貴殿のお役目。
十次　ナニサマ、相替るでござらう。
吾妻　あなたは。
與兵　ほんに廓で。
左忠　與兵衛、吾妻、ハテ異な所で……詮議の手配り、十次兵衛どの、早くお越しなされい。
十次　イヤ、目當は慥かにこの家の内。
與兵　ナニ、この家の内とは。

十次　造營金紛失せしゆゑ、吾妻が父左內どのが越度となりて、遂には御改易。緣に繋がる弟、とも〲詮議せずば相成るまい。

與兵　サア、共に詮議と思へども、何を申してもその盜賊の行くへも、また名も面體も存じませねば。

十次　ト懷中より繪姿を出して、與兵衞に渡す。
實名は平岡丹平。
即ち繪姿。

ト與兵衞、繪姿をよく〲見て

與兵　すりや千兩の盜賊と云ふは。

ト二人こなしあつて

ホイ。

ト大きに當惑のこなし、この時二階の障子を明け、丹平、覗き居る。この顏、前なる池に寫る。十次兵衞、

これに目を附け

十次　水の面にあり〱と。

左忠　誠に。

ト十次兵衞、左忠太、寄らうとするを、與兵衞、煙管を礫に池へ抛る。姿隱れるこなし

十次　弟、こりや何とする。

與兵　イヤサ、こりやアノ、池へ蛙めが。あなた方がござる前とも憚らず、飛んで出ようとするゆゑ、蛇に取られては、あんまりいぢらしう存じまして、池にかゞんで居よと。

ト二階へかけて

それで抛つた、今の礫でござりまする。

ト左忠太、こなしあつて

左忠　イヤモウ、さうとも〲、爰へ出て行く蛙の行列。向う見ずと云ふもの。蛙踏んだが大事となつても、爰へ出ては惡い、惡いゆゑに、必らず出まい〱と、此やうに申し聞かしても、高が虫けら。これが即ち蛙の面に水と申すものでござる。

ト二階へかけて云ふ。丹平、こなしあつて、障子をソツと締める。

十次　ハテ、虫けらにいかいお世話。イデその蛙めを、某が。

ト二階へ行かうとするを、與兵衞、留めて

與兵　待つた。さうはなりますまい。

十次　弟、なぜならぬ。

與兵　サア、例へ蛙一疋にもせよ、この內に居りや私しの

物。なんぼうお侍ひ様の威光でも、滅多にお手にはかけ
られますまい。
十次　サア、そこを取るのが役目の表。
左忠　役目ならば身共が。
　ト行かうとする、十次兵衞、留め
十次　宵の間は貴殿任せ、夜半よりは拙者が役目。刻限が
相違いたした。お構ひ無用。
左忠　イヤサ。
十次　詮議に事寄せ、盗賊を庇ひ召さるか。
左忠　イヤ全く。
十次　左様でなくば、扣へてござれ。
左忠　ムウ。
　トこなし。吾妻、心遣ひある。九助も固唾を呑んで居
る。十次兵衞、キッとなつて
十次　時刻過ぐれば役目の越度。
　ト捕り繩出して行く。與兵衞、留めて
與兵　マア〳〵、待つて下さりませ。
十次　弟、なぜ留める。
與兵　これが留めずに居られませうか。いま繪姿を一目見
ると、恟りせまいものか、現在義理ある、イヤサ、義理
ある養父與左衞門どの、御夫婦へ志しを立てうと思へば
實の親達、南方の家の瑕瑾となり、この與兵衞が苦しみ。
アレ、あの佛壇から見てござる、位牌の前で、もしもの
事がある時には、物仰しやらぬ佛だけ、どうも云ひ譯が
ござりませぬ。兄者人のお役目も立ち、又あちらも助か
るやう、思案工夫は膝とも談合。この場はどうぞ何事な
し、お開きなされて下さりませ。
吾妻　わたしが爲には父様の仇なれど、云ふに云はれぬ義
理の切端。
與兵　こりやどうぞ。
十次　かばかりの實義、左忠太どの、如何ござらう。
左忠　窮鳥懷に入る時は、獵師もこれを取らず、兎角穩
便に如くはござらぬ。
十次　相役の詞、反古にもなるまい。
左忠　侍ひの情は爰でござらう。
十次　この場の容赦いたしくれう。
　トこの時おてる、出て
てる　さうぢや。
　ト懷劍にて死なうとする。與兵衞、留めて
與兵　待つた、おてるさま。こりや、何となされまする。

てる　墨蹟は十次兵衞さまのお手に入り、彦助が手跡と云ひ、とても危ふい殿御のお命。それぢやに依つて。
　トおてる、また死なうとするを留めて
與兵　ハテ、マア／＼待たつしやれませと云ふに。
　ト懷劍を取る。
十次　この墨蹟は今少し、修覆が行き屆かぬ。こりや矢張り山崎屋へ申しつけう。
九助　すりや、與五郎さまに。
十次　オヽ、幸ひ使ひはこれなる九助。
九助　すりや、その使ひを私しに。
十次　其方に賴まう。
九助　忝ない。
　ト一軸を受取り
御寮人樣、しめたものぢや。
　トこの時甚兵衞、氣か附きて
甚兵　その墨蹟を。
　トこの時取りにかゝるを、十次兵衞、その手を捻ぢ上げて、キッとなる。左忠太、甚兵衞と顏見合せて
左忠　ヤア、われは。
十次　騙りの同類、お近付でござるか。
左忠　ムウ……イヤ、存しませぬ。
十次　然らば召捕つて連れ歸る。
甚兵　こりや爰には。
　ト逃げうとするを
家來　捕つた。
　ト打ち据ゑ、繩をかける。
與兵　殘る方なき情の計らひ。
吾妻　心柄とて淺ましいこの繩目。
　ト甚兵衞を見る。
甚兵　昨夜の夢見が惡かつたと思うた。
與兵　九助どのには一時も早う。
九助　心得ました……サア、御寮人樣。
てる　そんなら一緒に與五郎さまへ。
十次　然らば與兵衞。
與兵　お役目御苦勞。
十次　科人を引ッ立てい。
家來　ハア……サア、歩め。
　ト唄になり、おてる、九助は向うへ入る。十次兵衞、左忠太、橋がゝりへ入る。あと合ひ方になり、與兵衞吾妻、殘り、思案して居る。丹平、二階よりソロ／＼

下りて來て

丹平　寢るとも思はなんだに草臥れて、ついトロ〳〵とやつてのけたわい。

與兵　兄者人。

吾妻　そんなら最前から。

丹平　與兵衞、今夜はいかい馳走であつた。禮は重ねて。草臥れを休めたれば、ソロ〳〵行かうわい。

ト門口へ行かうとする。與兵衞、こなしあつて

與兵　盜賊待て。

ト丹平、キッとなり、門口ピッシャリさす。左忠太、出て門口に窺ひ居る。

それ〳〵、それ程の科を持ちながら、四方八方捕り手の繩、爰をウロ〳〵出て行かうとは、大膽不敵。

丹平　ヤア。

與兵　造營金墨蹟の盜賊。

丹平　なんと。

與兵　平岡丹平、匿まはう。

丹平　イヤ、匿まはれまい。

與兵　ナニ、匿まはれまいとは。

丹平　長岡の伯父郡領さまに賴まれて、造營金千兩盜み取つたこの丹平、役目の越度で改易になつた、野々宮左内の娘はその吾妻。また墨蹟を騙られて、難儀して居る與五郎の家はお主筋。その內に居るのは、毒蛇の穴に住むより危ふき身の上。それぢやに依つて、爰を高ふけりするのぢやわい。

トまた行かうとする。

與兵　イヤ、そりや僞はりぢや。

丹平　ヤ。

與五　さう云うて、この場を立退き、實の兄十次兵衞どのに、召捕らるゝ心であらうがな。

丹平　なんと。

與兵　この與兵衞に難儀をかけまいと、其方に義理を立てる程、立て拔かにやならぬ義理ある兄、殊に大恩の養ひ親の今際の遺言。例へこの身は一分だめしにあはうとても、匿まひ負ふせにや立たぬ。

ト丹平、どつかりと下に居て

丹平　サア、繩かけい。

與兵　これはしたり、こなたはこの與兵衞を、義理知らずにする心か。

丹平　吾妻、身共を助けては、野々宮の家が立つまいが

な。

吾妻　サア、それは。

丹平　悪黨な身共を兄と思うて、與兵衛が深切。今と云ふ今悪念發起、伯父御へ一味の者ともを、訴人するが、せめての罪亡ぼし。繩かけて十次兵衛に渡してたも。

ト この時左忠太、思案してツイと入る。

與兵　是非に及ばぬ。千兩の盗賊は、この與兵衛と名乘つて出て、仕置にあへば事は濟む……さうぢや。

ト 行かうとする、丹平、留めて

丹平　この身の科を人に負はせ、見て居るやうな丹平ぢやと思うてくれるか。

吾妻　さうぢや。

ト 落したる懐劍にて、死なうとする。

丹平　なぜ死ぬるのぢや。

吾妻　孝と操を立てうと思うて。

丹平　それでは丹平が、いよ〳〵重罪。

與兵　そんなら聞け分けて、匿まはれて下さるか。

丹平　それでは身共が。

吾妻　矢ッ張りわたしが。

丹平　コレ、早まるまいぞ。

與兵　但し名乘つて出ませうか。

丹平　サア。

吾妻　死にませうか。

與兵　匿まはれて下さるか。

丹平　サア。

三人　サア〳〵〳〵。

與兵　コレどうぞ。

吾妻　匿まはれて下さりませ。

兩人　ト 泣く。丹平、兩人が手を持つて

丹平　それ程までに。

與兵　血を分けぬ程、義理もあるぞい。

吾妻　夫の心を思ひ計つて

丹平　忝ない。其方衆の心休めに。

與兵　そんなら得心か。

兩人　エヽ、忝ない。

ト 早太鼓、バタ〳〵足音する。

あの同勢は。

ト 丹平、氣色して表へ出るな

吾妻　これは又、短氣な。

與兵　マア／＼、あの押入れの内へ。
丹平　イヤサ、それでは。
與兵　ハテマア、何ぢやあらうと。
ト無理に押入れに入れる。バタ／＼にて左忠太、組子大勢連れ出て
左忠　者ども、ソリヤ。
大勢　ヤア、動くな。
與兵　こりや、兄者人を出しぬいて。
左忠　裏返つた丹平、生けて置いては我れ／＼が身の上。どれへ隱れた。あの押入れが怪しい。ソレ、明けて見せよ。
ト與兵衛、支へる。左忠太、押入れ明け
こりや、壁を切り拔き落ち失せた。ソレ、ぼッ駈けい。
ト向うへ走り入る。左忠太も行かうとする。十次兵衛出て、左忠太を支へて
十次　弟、盗賊討手の役目。
與兵　すりや私しに。
十次　早う／＼。
與兵　忝ない。
ト向うへ入る。左忠太、支へながら十次兵衛吾妻、向うを見る。よろしく仕組み、チョン／＼。

返し

一面の藪疊。丹平、大童、拔刀、捕り手大勢、長柄にて取卷き、立て提灯、篝を焚き、早太鼓騒しく打ち、皆々逃げ込む。丈助、捕り手の形にて出て
丈助　捕つた。
ト十手にてかゝり、立廻りあつてキッとなる。この時與兵衛、走り出て來て
與兵　お待ち下され。兄十次兵衛どのゝ指圖に依つて、召捕りの役目を、承つてござりまする。
丈助　お下知とござらば、お讓り申さう。
丹平　刃向ふ奴ばら切つて切り死。
與兵　所を押へて三寸繩。
丹平　捕つて見るか。
與兵　云ふにや及ぶ。
兩人　サア／＼／＼。
ト立廻りあり、丹平、刀を捨て、後手になり、與兵衛、その手を拂ひて花道へ突きやり、落ちよと顔にて知らせる。この心立廻りあり
丈助　猶豫の體は。

捕手　容赦いたすか。
丈助　我れ〳〵が召捕らうか。
與兵　コレ待つた。
捕手　ソレ。
ト皆々捕りにかゝる。十次兵衞、ツカ〳〵と出て
十次　聊爾いたすな。方々待て。
丹平　十次兵衞どの。
十次　誤まつて改むれば、死罪にも及ぶまい。
與兵　エヽ、忝ない。
トばた〳〵にて、道伯、九助、仲居大勢、金箱たかげて出て來り
皆々　千歳樂ぢや萬歳樂ぢや、てうさや〳〵。
道伯　彥助は鬼か熊のやうになつて居れば、與五郎どのを下手人には、及ばぬ〳〵。
九助　墨蹟が手に入つた喜びに、山崎屋の後家御から六十貫目、おてるさまから二十貫目、與兵衞どのへ進上々々。
與兵　忝ない。うち六箱は千兩の償ひ。
十次　吾妻の身請けゝ相濟めば、殘る金子は養ひ親の石碑料
與兵　養父實父の孝も立ち
丈助　黃金花咲く家の納まり。
皆々　めでたい〳〵。
左忠　丹平、うぬ。
ト切つてかゝるを、丹平、押へて
丹平　非道の根ざしはこの左忠太。
十次　此まゝ御前へ。この場はめでたう出立々々。
トこの仕組みよろしく打出し。

幕

油商人廓話（終り）

さて怪談の二番目に一つ目近き裏借家以前は由ある梅柳が化けて世渡る賣卜者隣づからに裏口の塀を見越しの入道は宗庵といふ按摩醫者七より廻る惡事ゆゑぞつと身の毛も忽ちに色氣の覺めし孫太郎その婚禮の斷りを今さらなんと幽靈より消えも入りたき茂兵衞が難儀猫又ならぬ稽古所の小梅は直ぐな柳島狸ばやしのどろ〳〵に風ものすごき雨夜の鐘孝女おさんが十人斬り

傘轆轤浮名濡衣

合巻　三冊

文久三年六月市村座上演番附

傘轆轤浮名濡衣――てれめん

序幕

兩國廣小路の場

役名――易者、赤松梅柳。永樂屋孫太郎。間垣半十郎。釘屋助四郎。按摩、横田宗庵。蛇使ひ、おとら。木戸番、六藏。同、三助。茶屋娘、おるい。歌澤師匠、小梅。浪人、澁川段助。梅柳娘、おさん、永樂屋番頭、茂兵衛。

本舞臺、一面の平舞臺。正面、見世物小屋、これに蛇使ひの店看板かけある。前に木戸番、上手に床店、下手に葭簀圍ひの茶店。暖簾をかけ手桶など並べある。下手大盡際に床店あり、易見の道具並べ、これに赤松梅柳、深編笠かぶり居る。前に仕出し大勢集り居る。茶店に、おるい、茶屋女の拵らへ、三助。六藏、木戸番の拵らへにて居る。上手の方に一間の床店、按摩導引と書いてある行燈出し、宗庵、醫者の拵らへにて坐り居る。すべて、兩國廣小路の體、辻打ちにて、幕明く。

ト木戸番三助、蛇使ひおとらと爭ひ居る。六藏、留めて居る見得にて

六藏　マア〳〵、靜かにしろ〳〵。

三助　なんぼ太夫だと云つて、無理も大概に云ひなさい。

とら　なんでわたしが無理だえ。朝から藝をして、札の通りを見て居るよ。それに二百や三百で、誰れが承知するものか。わたしを只の女だと思ふと、當が違ふ。蝦夷長崎の果まで、どこの小家でも見物を呼んで、この蛇のやうに長い錢を取らして居る、この蛇使ひのおとらだ。お前方にこめられるほど耄碌はしないよ。

仕出　ソリヤ、蛇娘が怒つた〳〵。

とら　エヽ、やかましく吐かすと、蛇と一緒に頭から呑んでしまふぞよ。

六藏　これサ、もういゝから靜かにしなさい。お前もお前だ。肝心の太夫に腹を立てさしては、商賣の妨げだ。足りない所は出してやるがいゝ。

とら　六藏さんの挨拶、萬更潰されもしめえ。そんならこ

れで堪忍してあげよう。
ろい　挨拶が出來たら、お茶でも上げよう。
とら　ほんに、あんまりしやべつて咽喉が引ツつく。どうぞお茶一つおくんなさい。
ろい　サア〳〵、お上がりな。
　トおろい、これにてお茶を汲み、出す。
三助　ヤレ〳〵、やう〳〵靜かになつた。
仕出　今日は回向院の大施餓鬼、この兩國は賑やかだ。
同　それ〳〵、おれも早く詣つて來よう。
皆々　サア〳〵、ござれ〳〵。
　トこれにて、皆々捨ぜりふにて、下手へ入る。
六藏　申し先生、マア、爰へ來て、一服おあがりなされませ。
梅柳　それは忝ない。どうか一つお貸し下されませい。
　ト笠を脱ぎ、煙管の火を借りる。
とら　ほんに、おさんさんの所の小父さん、今日は爰へ店を出して、氣が晴れてよからうねえ。
梅柳　成る程、お前と云ひ、おるいさん、お二人とも、一つ長家のお方々。わしも娘が賃仕事の手助けに、内でぼつ〳〵ト筮をやつて居ましたが、今日は回向院の大施餓鬼ゆゑ、爰へ出るのも、お前方の勸めに付き出ましたがお庇で朝から、餘ツぽど見ましたて。マア、一服やりまする。
ろい　それはようござんした。どうしても爰は場所で、これから毎日爰へ出張りにござんせ。
　トこれより辻打ちになる。善二、荷物を脊負ひ、上手より出ろ。權兵衛、小さき風呂敷包み持ち、按摩の小家より出ろ。後より、宗庵、付いて出ろ。
權兵　ヤレ〳〵、御苦勞、これで大きに肩がよくなりました。
善二　道具屋の權兵衛さん、お早いお出でだね。
宗庵　それはその筈、今日はこの回向院大施餓鬼ゆゑ、是非釘旦が來るであらうと、網を張つて居る所だが、あんまり出やうが早過ぎて、そこでわしが三十二銅儲かつたと云ふものだ。
ろい　そんなら釘旦が、今日見えますか。それではわたしも、どこぞへお供をせねばならぬわいな。
六藏　さう云ふ旦那なら、おいらも附け込みたいものだ。
三助　おるいさん、わつちにもその旦那を、近付きにしておくんな。

せえ。

宗庵　ムウ、そんならお前も、釘旦を知つて居るか。

ろい　この間、わたしが店へもお寄りなされた。

宗庵　イヤ、女さへ見れは誰れ彼れなしだ。

權兵　その代り、金を繰出すには骨が折れる。併し、煽ては利くよ。

善二　この間もちよつと聞いたが、どこやらお前の近付きか、思惑があるとの事。本當かね。

宗庵　オヽ、そりやア、あのおさんさんの事ぢやないか。

ろい　さうして、ありやアどう云ふ話しになつたのでござんすえ。

宗庵　イヤ、まだしつかりといふでもないが、大概わしが辯を以て、物にはする積りぢや。

善二　ハテマア、そりやどう云ふ代物だ。

ト宗庵、下手に居る梅柳に指差し

宗庵　あそこに居る占ひ者の娘だが、親仁はあの通り役にも立たず、その娘がたつた一人で、洗濯したり賃仕事をして、身形は構はず、薄穢れた形をして、一日働らき通し、その又器量は、恐らく續く者はあるまい。そこでわしが釘屋の旦那に見せたれば、例の好きゆゑ大嵌り、直ぐに取持つてくれと、この間から金を……イヤ、サア、近所づくの事、うまく話しが附けたいものだ。

權兵　さては又、貴樣の儲け口が出來たなア……コレ、あのおさんさんなら、旦那よりおれに取持つてくれ。

宗庵　コレ、あんまり大きな聲せまい。聞えては悪い。

とら　ア、申し、なんとわたしを旦那へ、世話して下さんせいな。

宗庵　それぢやと云つて、貴樣のやうなその御面相では。

とら　エヽ。

ト宗庵、おとらを見て、困る思ひ入れあり

宗庵　イヤ、貴樣にも隨分、氣が無いでもないて。

とら　そりや、本統かえ。オヽ、嬉しや。

善二　時に、斯うして旦那の來るのを待つても居られまい。宗庵さん、ちよつとやつてもらひませうか。

宗庵　オツトせウ、待つて居るうち、此方は儲け。有り難い有り難い。

權兵　そのうちわしも、お詣りして來ませうか。

ろい　ドレ、わたしも水を一杯、汲んで來ませうか。

六藏　おいらも一杯、立ち呑みと出かけようか。

宗庵　ドレ、商賣にかゝりませう。

ト辻打ちになり、權兵衛、六藏、三助、上手へ入る。おろい、手桶を持ち下手へ入る。宗庵、連れて店へ入る。梅柳、一人殘り居て

梅柳　今日は朝から大層な見物で、こなさんもさぞお草臥れであらう。

とら　イヽエ、馴れた事ゆゑ苦にもならぬが、さうしてお前も、お飯をあがつたかえ。

梅柳　イヤ、辨當は娘が持つて來る筈、程なう持つて參るであらうわい。

とら　わたしや大層お腹が空いたから、人絶えのうち、お飯にしよう。小父さん、もつと爰へ出て、お茶でもおあがりよ。

トおとら、小家の内へ入る。橋がゝりより、藤助、出て、梅柳を見て

藤助　梅柳どの、好い所でお目にかゝりました。この間の話しの口の。

梅柳　ア、コレ……墨附は何分、手前の方へ請けたうござるから、相談なされて下さりませ。

藤助　そりやこの間から仰せの事ゆゑ、どこへやるのも同じ事。併し、大枚七十兩と云ふ金、どうもこなたが。

梅柳　イヤ、その儀はお氣遣ひなされまするな。ちと此方に心當りもござりますれば、是非とも此方へ。外から請け手があつても、必らずお渡しなされまするな。

藤助　イヤモウ、金さへ出來る事なら、決して外へはやりませぬ。さう云ふ事なら、なるたけ早う。

梅柳　此方に如才がござりませうか。

藤助　エヽ、さては授けて。

ト娘の事を云はうとする。

梅柳　エヽ。

藤助　早くお頼み申します。

ト辻打ちになる。藤助、下手へ入る。半十郎、ぶッ裂き羽織にて、家來大勢、上手より出て來り

半十　者ども、ソレ。

家來　ハア……動くな。

ト梅柳を取卷く。

梅柳　お役人樣、こりや何ゆゑのこの狼藉。

半十　何ゆゑとは知れた事、先達て泉州濱田家の重寶、寶藏へ忍び、盗み取りし盗賊の詮議。

ト云ひながら梅柳の顔を見て

貴殿は濱田家の家中、浦邊十内どのではござらぬか。

梅柳　如何にも左樣、貴殿は御家門たる小泉の御家來、間垣半十郎どのよな。絶えて久しき。
兩人　御無事の對面。
半十　これはしたり……者ども引け。
家來　ハア。
ト皆々扣へ、梅柳、こなしあつて、
梅柳　御存知の通り、濱田家を去りしより、所々方々と流浪なし、只今にては當所に住居なし、赤松梅柳と改名いたし、賣卜渡世のこの有さま。面目次第もござりませぬ。
半十　なんの〳〵。こりや皆時の廻り合せ。世の盛衰は是非もござらぬ。
梅柳　して、思ひ寄らざる濱田家の、盗賊の詮議とは。
半十　さればでござる。主人小泉どのには、御内縁ある濱田家の沒落、元はと云へば二千丁の御朱印紛失ゆゑ。その盗賊を搦め捕らんと、草を分つて尋ぬるところ。然るにその盗賊、この江戸表へ徘徊なし、その朱印を懐中なし居るとの事。それゆゑ浪人體の者見付け次第、懐中を詮議の爲、只今の仕儀でござる。無禮の段、御免下され。
梅柳　なんの〳〵、拙者の爲にも御主君の事。半十郎どのには御案内の事ながら、七ヶ年以前百姓一揆、科を引受け、一旦國を立退き、浪人は致せども、せめて三ヶ年も月日を送りなば、再び歸國を致せよと、殿の御仁心。そのうち殿には歿り給ひ、二千丁の御朱印も、何者の仕業にや、數代續きし主君のお家も沒落、歸參を願ひしこの身も、主君に別れし我が不運、晝夜分たず齒噛みをなし仇に月日を送つてござる。
半十　成る程、御尤もの儀。彼の二千丁の御朱印、貴殿のお手に入るなれば、早速主君へ御持參あれ。當所小泉家へお預かりの濱田家なれば、右の朱印を差上げなば、その節要次郎さまに跡目相續。これ主君の推擧。さすれば貴殿の忠義も、顯はるゝと申すもの。
梅柳　殘る方なき小泉家の御仁心、有り難う存じます。拙者墨附の儀は、ちと手がゝりの筋も……イヤサ、手がゝりさへ相知れなば、早速當所のお屋敷へ。
半十　またお話しもござれども、爰は群集の中。
梅柳　イカサマ。
半十　幸ひ當所の茶店に於て。
梅柳　左樣なれば、半十郎どの。
半十　イザ、御内談仕らう。

ト唄になり、兩人入ろ。花道より、段助、浪人の拵らへにて、ウソ〳〵と來ろ。六藏出て行き逢ひ

六藏　申し、そこへお出でなされまするは、段助さまぢやござりませぬか。

段助　誰れかと思へば、木戸番の六藏ではないか。

六藏　お前樣にお目にかゝりたいと、一遍と尋ねて居りました。

段助　オヽ、さうか〳〵。何は兎もあれ、爰は往來。

六藏　そんなら向うで何かの話し。

段助　サア、來やれ〳〵。

トこれにて、本舞臺へ來て、床へかける。

六藏　サア、早速ながら申します、この間お前樣が、怨靈に捉まつて、困つてござるゆゑ、わつちが、中へ入つて云ひ延ばしたが、その月も切れ、無理な催促、居所知れねえお前樣、ありや早く返しておやりなさい。

段助　サア、その困るのも尤もだが、ちと金儲けの口があるゆゑ、一兩日待つてくれ。

六藏　金儲け〳〵と仰しやるが、どう云ふ儲けでござります。

段助　その金儲けと云ふは、實は斯うだ。聞いてくれ。あの濱田の家來、斧田伴五郎に云ひ付け、盗み出した二千丁の墨附、褒美の金と云ふうち、その伴五郎めは悪事露顯、逐電いたし行くへ知れず。ところでこの頃闇雲に、浪人者さへ見ると、懷中を改め詮議するは、屋敷の分家の家來ども。こいつは持つては居られぬと、おとらに預けて置いたが、近々に大金に賣るから、それまで先へ取延ばしてくれいサ。

六藏　成る程、さう云ふ事なら、云ひ延ばして置きますが間違つてはいけませぬぜ。

段助　ハテ、武士の詞に二言はないわい。

六藏　左樣なれば段助さま。

段助　そんなら六藏。

六藏　キッと詞を番ひました。

ト芝居のやうに云ふ。

段助　エヽ、何を吐かすのだ。

兩人　ハヽヽヽ。

トこれにて、六藏、入り、段助、思ひ入れ。

段助　この頃は小泉の家來めが、滅多無性に浪人者と見ると、懷中へ手を入れ探すは、てつきり二千丁の墨附を詮議。濱田家の家來、斧田伴五郎を寶藏へ忍び込ませてやつ

た代物、褒美の金と思ふうち、伴五郎はくたばつてしまふ、これがほんの寶の持ち腐り。似せ物を拵らへ、質屋の藤助めに摑ませ、誠の墨附は手放さず、餘り詮議が嚴しいゆゑ、蛇使ひのおとらめに預けて置いたが、どうぞ大金にしたいものだなア。

ト段助、思ひ入れ。おとら、小家より出て、段助を見るより

とら　段助さん〳〵、コレ、段助さん。

段助　オヽ、おとらぢやないか。

とら　アイナ、コレ段助さん、お前に手渡ししようと思つて、わたしや待つて居たわいなア。

段助　オヽ、預けて置いた品物、恙はないか。

とら　あれはどう云ふ結構な代物か知らぬが、わたしが持つて居ると、蛇が怖がつてならぬが、ありやア池鯉鮒様の守ぢやないかえ。

段助　馬鹿を云へ、あれば二千丁のお墨附と云つて、天下樣の御判が据つてあるゆゑ、それで怖がるのであらうわい。

とら　モシ、そのお墨附は、お前、質に置いたではないか。

段助　ありやア眞赤な似せ物だ。さうとは知らず質屋めが、一杯喰つて居るその品を、又どこやらから請け出すと云ふ奴があるさうだ。なんとマア、馬鹿な奴もあるものではないか。

とら　惡い事には拔け目のないお人。それはさうと、わたしやモウこれを、お前に返すぞえ。

ト懐中より御朱印を出す。

結構な物でも、わたしが持つて居ては、寶の持ち腐れ。サア、返しましたぞえ。

段助　コリヤ〳〵、ちつとの間ぢや。預かつて置いてくれ。おれが持つて居ては惡い。もうちつとの間預かつてくれ。

とら　イエ〳〵、それでも蛇が怖がる。

段助　ハテ、聞分けのない。もう四五日の事だ。

とら　イエ〳〵、どのやうに云はしやんしても、こちの太夫には替へられぬわいなア。

段助　然らば、せめて今日中なりとも。

とら　エヽ、しつこい。返したぞえ。

ト無理に戻し、おとら、小家へ入る。

段助　エヽ、いま〳〵しい。

ト此の時、上手にて、人聲する。

南無三、あれは最前の役人。エヽ、これを持つて居ては一大事。ちつとの間だ。おとらが持つて居てくれゝばいいに……エヽ、爰らに忍ばせ所がありさうなものだ。

ト八卦見の店にある手箱を見て、

ちつとのうちだ。あの中へ。さうだ〳〵。

ト箱の中へ入れ元の通り直し置く。

これでよし〳〵。後でどうでも。

ト此うち、半十郎、上手より出て

半十　ソレ。

家來　ハア、……動くな。

ト段助を取卷く。

段助　コリヤお役人、何ゆゑの狼藉。

半十　ヤア、何とも怪しき其方、詮議いたす仔細がある。

段助　默り召され。覺えなき身に詮議とは、なんぞ慥かな證據がござるか。

半十　證據なけれど怪しき其方。して、其方が住居は。

段助　サア、その儀は。

半十　引立て行かうか。

段助　サア、それは。

半十　屋敷を申すか。

段助　サア。

半十　サア〳〵……屋敷申さぬ怪しき者。代官所へ引立てい。

家來　ハア……うせう。

ト段助を引立て下手へ入る。辻打ちになる。向うより、助四郎、着附け着流し、羽織にて出る。後より、小梅、師匠の拵らへにて出る。

小梅　アレ、助四郎さん、見ぬ顏して、ようマア先へ行かしやんすなア。

助四　イヤ、さうでもなけれど、今日は回向院で、わしを待つて居る人があるゆゑに、つい心急き。それで先へ行つたのぢや。

小梅　それはマア、面白い事が出來たと見えまする。わたしも、向うの按摩さんの所へ來がけ。なんぼ稽古を止めたとて、ちよつと寄つてもよいぢやござんせぬか。

助四　サア、お前が此方へ引ッ越して來た事を、とんと知らなかつた。其うち尋ねやうが、何にしろマア、あれへ行て、一服やらうぢやないか。

小梅　それがようござんせう。サア、お出でなされませ。

ト これにて、二人、本舞臺へ來る。上手より、おるい出て

るい　オヽ、あなたは釘屋の旦那様、只今お出でござりましたか。皆様がお待ち兼ねでござりました。

助四　オヽ、そんなら皆が來て居ましたかいの。

るい　ハイ、皆様は隣に待つてゞござります……オヽ、小梅さん、お詣りでござんすかえ。

ト 權兵衛、上手より出て來り、助四郎を見て

權兵　申し旦那、大層待ち兼ねて居りました。

ト 床店より宗庵立ち出で、助四郎を見て

宗庵　ヤ、これは旦那、お出が遲いゆゑ、マア、お二人はわたしがお客に致しました。旦那、ちよつとやりませうか。

助四　サア、揉んでもらひたいが……彼の話しはどうなつた。それが肝心ぢや。

宗庵　サア、それはいろ〳〵の話しがあるぢやて。マア、爰で療治やり〳〵お話し致します。

助四　成る程、障子の內でも窮屈な。なんと、爰を借りてもよからうか。

るい　よい所ぢやござりませぬ。御ゆるりとなされませ。

ト 皆々茶店を明けて出る。宗庵、助四郎の肩を揉む事あり

助四　早速ながら、こちらの話しはどうなつた。それが聞きたい〳〵。

宗庵　ハテ、忙しない。大層こりや凝つて居ります。

ト 云ひながら揉む。助四郎、忙しく、いろ〳〵こなしあり。

助四　どうぢや〳〵、出來さうかいの。

宗庵　そりやモウ、釘旦の事ぢやもの、釘が利かいでどうしませう。先づそれよりは、その品物が見たいものぢや。

助四　イヤ、滅多には見せられぬ。併し、この間から餘ツぽどおれもあの事で、無駄金を遣うた。コレ、しつかりとやつてもらひませう。

ト これにて、宗庵、力を入れ揉む、助四郎、思ひ入れにて。

アイタ……。エヽ、おれのしつかりは、こちらの事ぢやわい。

宗庵　ハテ、それはようござりますわい。

助四　よいとばかりでは落ち着かぬ。マアなんであらうと、ちよつと近付きにしてくれぬか。

宗庵　そりや、先からも逢ひたがつて居りまする。何を云つても身形が惡いゆゑ、ちつとはどうかせずばなりますまいわい。
助四　ア丶また寄越せか。おりや、遣る事はいとはねど、その穢ない所が好いのぢやわいの。
宗庵　ハテ、物好きなお人だなア。
小梅　何やら面白さうなお話し。これはわたしが側に居ては、どうかお邪魔。ドレ、粹を通して行きませうか。
助四　ハテ、マアよいぢやないか。これから青柳へでも行くから、なんと一緒に行かうぢやないか。
小梅　そちらの御用が濟むまでに、わたしや後から押しかけて參りますぞえ。
助四　エ丶又、そんな嫌味を云ふか。
小梅　ドレ、お詣りをして來ませうか。
　ト小梅、上手へ入る。宗庵、思ひ入れあつて
宗庵　彼奴めも同じ長家の事ゆゑ
助四　マア、出來るまでは、なるたけ防がねばならぬわいなう。
　ト云ひ〳〵療治して居て、おろい、向うを見て思ひ入れ。
ろい　噂をすれば影とやら、向うからおさんさんが。
宗庵　ナニ、あの娘が
助四　來るか〳〵。
　ト現になつて行かうとする。宗庵、留めて
宗庵　ドッコイ〳〵。
　ト頭を揉みにかゝる。助四郎思ひ入れあつて
助四　もう療治はよしにしてくれい。
宗庵　よせならよしますが、上下にして置きますぞえ。
助四　誠に貴樣は、慾人たつぷりと云ふ男ぢや。
宗庵　さうとも〳〵、旦那は色氣たつぷり……コレ〳〵旦那、誠に好い事がござります。いつその事、あそこへ行て、あの親仁が置いて行た笠をかぶつて居ると、親仁と取違へて、娘が側へ來る所を、當りを付けるとはどうでござりまする。
助四　成る程、こいつはうまい〳〵。
　ト助四郎、易見の床へ上がり、笠をかぶる。辻打ちになり、向うよりおさん、辨當箱を持つて出て來り
さん　もう日足も四ツ過ぎであらう。早うお辨當を持つて行かうわいなア……、父樣、只今參りましたわいなア。
助四　オヽ、待ち兼ねたとも〳〵。

・ト手を取りにかゝる。おさん、形を見て思ひ入れ。
さん　エヽ、父様と思うたに、誰れぢやぞいなア。てんご
うさしやんすな。
助四　イヤ、てんごうぢやない、大眞實ぢや。
さん　オヽ、あなたは折々宗庵さんの所へござんす
助四　釘屋の旦那様ぢやわいなう。
さん　エヽ、知らぬわいなア。
助四　アヽ、コレ〳〵、其やうに素氣なうするものぢやな
いわいなう。
トしなだれかゝるを、おさん、振り放す途端に守り袋
を落す。
ア、コレ、宗庵、これではちつと話しが違うたぢやない
か。
宗庵　ハテ、お前様もまだ若い。今ちよつと手を握つただ
けでも、二百位の値打はありますぞえ。
助四　エヽ、馬鹿らしい。この間も貴様に二兩
ト云ふを宗庵、打消し、思ひ入れ澤山。
宗庵　エヽ、コレ〳〵。サア、何を云つても、まだ手入ら
ずのあのお娘。
トおさん、腹立てる思ひ入れ。下手へ寄る。助四郎、
いろ〳〵とする。宗庵、云ひ消す思ひ入れ。梅柳、出
て
梅柳　おさんぢやないか。今おぢやつたか。
さん　アイ、わたしやお辨當が遲なつたゆゑ、大抵案じた
事ぢやござんせぬか。お前は又、どこへ行かしやんした
事かと、案じて居りました。
助四　ハヽア、彼奴が娘の親仁と見える。悪い所へ來をつ
たなア。
宗庵　彼の娘が歸る所を、靑柳に行て呼び込んで。
ト兩人、ちよつと囁き、思ひ入れあつて。
助四　オツトよし〳〵。そんなら直ぐに靑柳で。
皆々　こちらも共々引きつけて。
助四　諸事は貴公に任すてや。
宗庵　ハテ、呑み込んで居りまする。
トこれにて、皆々入る。おろい、殘り思ひ入れあつて
ろい　おさんさん、お辨當あがるなら、お茶あげよかえ。
ト兩人、捨ぜりふにて、茶を呑む。向うより、永樂屋
孫太郎、羽織着付け、丁稚連れて出る。花道好き所に
て留まる。
孫太　回向院の大施餓鬼、大層賑やかな事だなう。

丁稚　左樣でござりまする。
孫太　ドレ、參詣いたしませう。サア〳〵、おぢや〳〵。
ト本舞臺へ來る。井戸の側にて、守を拾ふ。この時、上手より、茂兵衛、行き違ひ、後を見送り、呼びかける。
茂兵　申し若旦那樣、もうお歸りでござりまするか。
孫太　オヽ茂兵衛か。わしは今日萬八に會があつて行たところが、いつもの連中が、また深川の假宅へ附合へと云ふゆゑに、やう〳〵外して別れた所ぢや。さうして其方は、どこへ行くのぢやな。
茂兵　私しは丹波屋から注文でござりまして、麝香を持つて參りまして歸りがけ、ちよつと回向院へ參詣を致しませうと、參つた所でござります。
孫太　それは丁度好い所で逢ひました。わしも話し相手はなし、淋しう思うて居た所ぢや。一緒に歸りますわいなう。
茂兵　左樣なれば、お供して歸ります。ヤレ〳〵、好い所でお目にかゝりました。
孫太　マア〳〵、爰で茶を一つ呑みませう。
ト兩人へおゐい、茶を汲んで出す。床几へかけ思ひ入れあつて
茂兵衛や、丹波屋の注文は、皆納めたかや。
茂兵　左樣でござります。麝香は納めたが、沈香の方がもそつと要りますゆゑ、後から一緒に上げませうと存じまして……時に、賑やかな參詣人ぢやござりませぬか。嫁御樣になるやうなお方もござりませぬか。
孫太　さればいなう。わしも今までは家の名前人、いつまでも獨り身でも居られず、併し兎角書物を見て、聖人の心になつて居ると、どのやうな女中を見ても、人相骨柄揃うて好い女はないものぢやわいなう。
茂兵　また左樣な堅い事仰しやります。ちと世間の御子息樣方を御覽じませ。どの藝者を引かしたの、イヤ妾のと、若いうちは騷いでも、いつの間にやら頭は禿げ、眞面目になつて居る者も……とサア、斯樣な惡い譬へを、番頭の私しが申しまするも、手放した御意見でござります。マア、御新造樣だけはお入れなされずばなりませぬ。第一は表向きが濟みませぬ。
孫太　又しても〳〵、久しい嫁詮索。許由が耳を洗はにやならぬわい。
茂兵　云ひ出すとちんぷんかんぽん。これはマア、困つた

事ぢや。

トこの時、おさん、茶を梅柳へ持つて行き。

さん　父様、おあがりなされませぬか。

梅柳　オヽ、忝ない〳〵。

さん　父様、わたしは鈍な事をしましたわいなア。

梅柳　鈍た事とは、どのやうな事しやつた。

さん　常々大事にかけて居る、守を落したわいなア。

梅柳　ナニ、守を落したとは。

さん　アイ、笹鶴の裂れで、母様が縫うて下さんしたあの守。わたしが生れた時の書付けまで、母様の筐ぢやと思ふゆゑ、一遍と尋ねたれど、皆暮れ見えぬが、大抵惜しい事ぢやござんせぬわいなア。

梅柳　それは惜しい事しやつた……さうして其方は、晝食をしておぢやつたか。

さん　イヽエ、わたしはお前と一緒に、爰でお給仕しながら、食べようと思うて、食べずに來たわいなア。

トこれにて、孫太郎、おさんを見て、いろ〳〵惚れたる思ひ入れある。

梅柳　オヽ、それは〳〵。わしも連れがあつて丁度好い。ドレ、爰で始めませう。

ト風呂敷の中より小さき重箱を出し、辨當を開き

こりや飯が軟かでよい。斯うしてわが身と二人で飯を喰ふのは、樂しみな事ぢやわい。

さん　サイナア、樂しみは夕顔棚の下涼みとやら、遠慮なしに繰出して食べて下さんせいなア。

梅柳　オヽ、香の物まで口に合ふやうに、よう刻んである。其方の孝行と、この香の物、戴いて喰はねばならぬわい。

トいろ〳〵こなしある。ト孫太郎、手を叩く。茂兵衞、恟りして煙管落し

茂兵　申し、旦那、なんでござります。

孫太　コレ、なんぢやどころか、あの娘を見や。最前から見て居れば、あの易者が親と見えて、飯を喰はせたり、介抱をして居るその孝行さ。反哺の孝なぞと云ふはこれであらう。彼の唐土にて、孔孟と云ふ人、八歳にして母親が、夏に至れば蚊帳もなし、蚊にせゝられて寐ぬを案じて、おのれが肌に酒を吹き、自身は夜中蚊に喰はれ、母を安々寐させし例。それは唐土二十四孝。これは目前あの孝女、自然と備はる三枝の禮。

茂兵　また例の青表紙が始まつた。

孫太　その上、容形は汚ないに似合はぬ、器量と云ひ、褄

はづれの美しさ。モウ〳〵、わしが女房に持つは、あの娘より外にない。あの篤實な事を見やいなう。

茂兵　なんでござります。

孫太　アレ、あそこに居る易者の娘を見やいなう。

茂兵　ドレ……申し、あの御膳を食べて居る娘でござりますか。

孫太　オイナウ。

茂兵　何仰しやりますぞえ。なんのあれが美しい事があつて。汚ない形をして、この往來で飯を食べるやうな娘をお前樣も物好きな。あんな者貰うて、どうせうと思し召す。ちとお嗜なみなされませ。

孫太　これはしたり、娘ぢやとて飯を喰はいで。そんな事云はずと、ちよつと行て見やいなう。

茂兵　ヘイ、左樣なれば參ります。

孫太　マア〳〵、見ておぢやいなう。

茂兵　ハイ〳〵、そんならちよつと見て參ります。

トこれにて、覗きに行く。傘を持ち、輕業の鳴り物になる。綱渡りの振りをする事。

さて〳〵〳〵、さて又次の輕業は、あれなる娘を見るやうで、見ぬやうで、覗きに行くのでござります。

トいろ〳〵ある。茂兵衞、覗き側へ行き、おさんの顏を見て

さん　ホ、、、。

茂兵　ハ、、、。

さん　ホ、、、。

茂兵　ハ、、、……申し……申し……申しかねましたが、火を一つお貸しなされて下さりませ。

さん　サア、お易い事、おつけなされませい。

ト火を出す。茂兵衞、いろ〳〵をかしみの思ひ入れあつて

茂兵　これは有り難う存じます……結構なお天氣でござります……ようお出でなされました。

さん　ハイ〳〵。

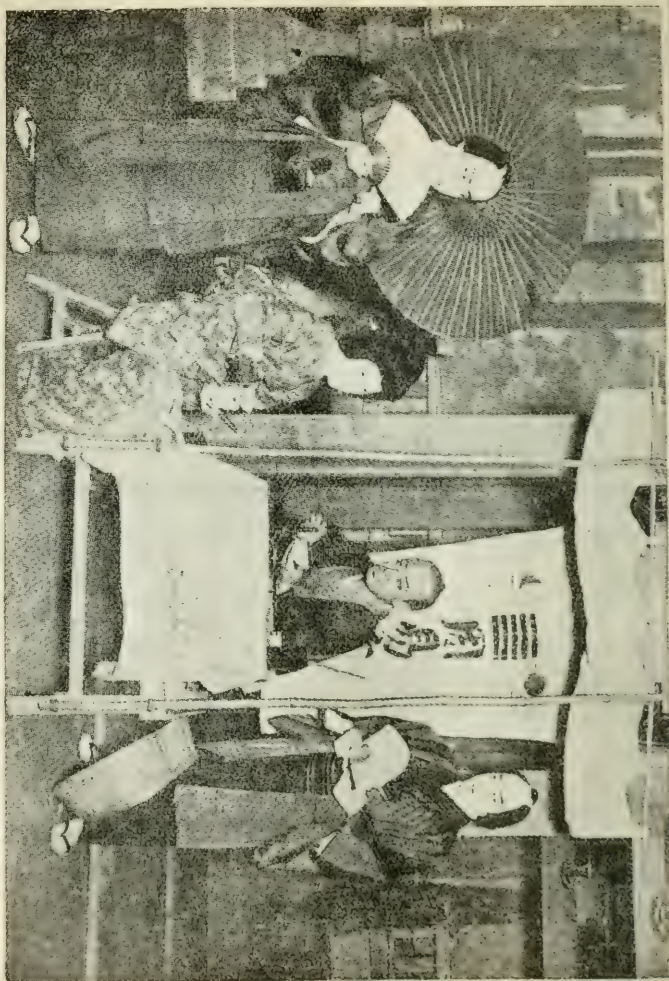
茂兵　有り難う存じます。

トこなしあつて。こちらへ歸る思ひ入れ。

申し若旦那、えらい〳〵。コレ、娘がつけてくれました。

孫太　茂兵衞、えらからうがな。ナニ、娘の火ぢや。のましてくれい……時に、どうぢや、氣に入つたか。

茂兵　氣に入りました。いつそあれを……貰はうぢやござ

大正七年七月浪花座上演　坂東壽三郎の孫太郎
尾上多見藏の海柳　中村雀右衛門のおさん　實川延若の茂兵衛

りませぬか。
孫太　貰ふどころか、親仁まで相談して、あれが出來ねば、わしや一生女房は持たぬ氣ぢやわいなう。
ト兩人、いろ〳〵思ひ入れある。おさん、辨當しまふ思ひ入れ。
梅柳　ヤレ〳〵、御膳を旨う下された。今日は思はず錢も儲かり、もう見世を仕舞はうぢやないか。
さん　アイ〳〵、そんなら店を仕舞うて歸りませう。また歸りしなに用もあれば、わたしやお詣りをして來たうござんす。
梅柳　イヤ、わしも朝からお詣りしませぬ。連れ立つて參ります。
さん　ドレ〳〵、そんなら店を仕舞ひませう。
ト手早く店を仕舞ひ、おろいに預け、御朱印の入りし箱を持ち、辨當を片手に提げ
梅柳　左樣なればおろいどの、大きにお世話になりました。
さん　早く仕舞つて歸りなさんせ。
ろい　オヽ、わたしも一緒に參ります。申し、ちよつと店をお賴み申しまする。
茂兵　オヽ、合點だ〳〵。

さん　左樣なればあなた方、これにゆるりとお出でなされませ……サア、行きませうか。
ト三人、上手へ入る。二人、思ひ入れ、いろ〳〵ある。小梅、上手より出で、二人を見て思ひ入れ。
小梅　オヽ、永樂屋の若旦那樣、番頭さんにも一緒かえ。どちらへお出でござります。
ト二人は氣が付かぬこなし。思ひ入れ。
茂兵　オヽ、イヤサ、あそこへ。
小梅　ありや占ひ者でござります。
茂兵　イヤ、さうでござらぬ。あの娘。
小梅　エヽ、あの娘でござりますか。あれはわたしと一つ長家でござります。大抵好、娘ではござりませぬ。
茂兵　それについて、いま若旦那が、なんでもかでも、あれを貰うてくれいと、アレあの通りぢや。あれはマア、どう云ふ筋目の娘ぢやな。
孫太　ア、コレ、茂兵衞、筋も骨もいつた事か。
小梅　ハテ、きつい乘りやうでござりますなア。あのお子の親御と云ふは、アヽ、どこやらのお侍ひであつたが、浪人をなされて、今あの通り、易者を商賣、その上、親御が病身ゆゑ、何事もあのお子が働らき、縫ひ物したり

濯ぎ洗濯、身形構はず朝から晩まで、それは〳〵精を出して、又お侍ひの娘御だけ、劍術でも柔術でも、知らぬ物はござんせぬ。近所の人の噂でも、あんな子が出世せねば、出世する者はないと、長家中の褒め物でござります。

茂兵　サア、それ聞いては猶の事。いよ〳〵あれに、極まつた〳〵。

トこの時、段助、バタ〳〵にて出る。

段助　イヤ、酷い奴に出合せた。すんでの事にこの身の大事。併し、えて物は隱して置いたので、檢められたその時に、なんともなかつたが。

ト占ひ店を見て、悧りし

ヤア〳〵、無いワ〳〵……さては店を仕舞つたと見える、彼奴の內はどこぢや知らん。かん付かぬうちに取返さにやならぬ。サア〳〵、ちよつと來てくれい〳〵〳〵。

ト小家よりおとらを引摺り出す。

とら　なんぢや。どこへ行くのぢやぞいな。

段助　どこも彼所もない。早く來てくれい〳〵。

ト二人、下手へ入る。三人、思ひ入れあつて

小梅　エヽ、なんぢややら、きつい慌てやうぢやなア。

茂兵　ハテナア、易者の店を見て、騷ぎ立てゝ行つたのは

孫太　彼奴もあの娘に、氣があるか知らん。

トこの時、上手より、梅柳、おさん、出て來る。

さん　あなた方、まだ爰においでゞござりますか。

梅柳　何れも……これにゆるりと。

小梅　おさんさん、もうお歸りかえ。

さん　ハイ、お先へ參ります。サア父さん、行きませう。

ト二人、花道へ行く。茂兵衞、孫太郎、見惚れて居る。梅柳、花道にて、思ひ入れあり

梅柳　多くの人はそれ〳〵に、着飾つて物詣り、それには引替へ其方の身は。

さん　わたしが事は何事も、昔と諦めて下さんせ。

梅柳　それでも女の身嗜なみ。

ト躓く。草履の鼻緒切れる仕掛け。

さん　ア、申し、お危なうござります。

トおさん、履物を取り、思ひ入れある。

鼻緒の切れたのは、どうやら心に

梅柳　かゝる夕立、降らぬ其うち。

さん　お邪魔になるなら、わたしが笠を。

梅柳　ア、持つべきものは、娘ぢやなア。

トこの途端、唄になる。親子、花道へ入る。後に三人

孫太　向うを見て思ひ入れ。

茂兵　見れば見る程孝行な。

小梅　褄はづれと云ひ、器量と云ひ

孫太　どこに一つ云ひ分のない

茂兵　上々吉の飛切り娘。

小梅　エヽ、何を云ひなさんすぞいなア。

トこれにて、茂兵衛、床几より落ちる。木の頭にて、皆々向うを見送る。三人、よろしく見合せ、思ひ入れにて。

ひやうし幕

二幕目

横綱梅柳内の場
長家宗庵内の場

役名——赤松梅柳實ハ浦邊十内。同娘、おさん。横田宗庵。見世物師、三助。同、六藏。蛇使ひ、おとら。茶屋娘、おるい。稽古所、小梅。釘屋、助四郎。瀬川段助。判人、佐助。質屋、藤助。永樂屋番頭、茂兵衛。

本舞臺、平舞臺、上手折り廻りの障子屋體。納戸口。上手、押入れ。下手、鼠壁、竈、勝手道具いろ／＼、例の所に門口。これに人相墨色赤松梅柳と記したる札。この外は路地口、裏屋根横を見せかけ、この前に井戸あり、すべて、横綱町の體。梅柳、俎板にて大根を切つて居る。井戸際におさん、娘の形にて、襷をかけ洗濯して居る。おとら、蛇使ひの形にて、米かして居る。おるい、水を汲んで居る。吉原雀の唄にて、幕明く。

梅柳　コリヤおさん、この大根は、この位に切つて置いたらよいかの。

さん　アイ、それでようござんす、わたしがこれを洗うてしまうたら、直ぐにそこへ參ります程に、さうして置いて下されませ。

とら　ほんにおさんさんは感心な者。毎日々々そのやうに洗濯したり、いろ／＼手仕事。その上、小父さんを孝行にして。わしらはとんと及ばない事だ。

るい　さうでござんす。わたしも昨日は忙がしかつたゆ

ゑ、今日は思ひ入れ寐ようと思うたけれど、矢ッ張りお飯の拵らへせねばならぬわいなア。おさんさんは、よう出來たお人ぢやなア。

とら　わたしも明日から、外を稼がにやならぬゆゑ、今日はゆつくり休まうと思うたけれど、内裏女郎も喰はにや立たぬ譬への通り、據なうお飯の拵らへ。

ろい　それはさうとおさんさん、ちつと休ましやんせいなア。

さん　アイ、こりや急ぎの頼まれものゆゑ、斯うして洗濯。お前方の話しを聞いて居ると、面白うてよう洗濯が出來るわいなア。

とら　さうでござんす。この長家は賑かな裏で、淨瑠璃の稽古やら、この間引ッ越して來た小梅さん、淸元でも常磐津でも、ほんにえらいものでござんすわいなア。

ろい　オヽ、その淸元と云へば、今夜小梅さんの所へ、どこやらの旦那が、延壽太夫を連れて來て、淨瑠璃があるではござんせぬかえ。

とら　さうでござんす。延壽太夫が淨瑠璃をやると云ふから、よく癖を呑み込んで、一番淸元で男を迷はしてやらねばならぬわいなア。

ろい　ほんに、お前は稽古を始めたが、とんだ器用人ぢやと、小梅さんが褒めて居やしやんしたぞえ。

さん　そりや好いお樂みでござんすわいなア。わたしにもちつと聽かして下さんせ。

とら　そりやお易い事でござんすわいなア。わたしも段々と年を取るゆゑ、いつまでも蛇使ひでも、あんまり色氣がないゆゑに、新内でも覺えて、女太夫に出る積りぢやわいなア。ちよつと聽かさうかえ。

さん　そんなら、ちよつと聽かして下さんせいなア。

とら　エヘン〳〵、かたる親仁が手代の目を、忍んで通ふ夜廻りが、寐れても宿へも歸らずに。

ろい　ヨウ〳〵、うまい〳〵。

　トこの時、手代藤助、向うより出て

藤助　どうぞ梅柳どのが、内に居て下さればよいがなア……ホヽウ、ヤ、これは井戸際に、美しい者がお揃ひだねえ。

さん　オヽ、藤助さん、ようお出でなされましたな。

藤助　時に、梅柳どのは……お内でござりますか。昨日雨國で逢ひました。その事でちよつと參りました。

梅柳　これは御苦勞。定めし彼の用でござりませうが、な

んぞ火急に。
藤助　一體あの代物は、慾の間違ひで、二千丁の墨付と云ふを付け目に、金七拾兩の質に取つたところが、フツと請けたいと云はるゝゆゑ、丁度願うたり叶うたりと思うて居るうち、直ぐにお客が付いて、今日中に質請けせうと云はるゝけれど、こなたが先約の事ゆゑ、ちよつと屆けに參りました。
梅柳　それは御尤もの儀でござるが、あの品は、是非とも此方へ請けねばならぬ事ゆゑ。
藤助　さればサ、同じ事なら爰へ相談がしたいけれど、今日中に埒が明きますかな。
梅柳　サア、心當はして居れど、今日中にと云うては。
藤助　申し、梅柳さん、失禮な事を云ふやうなものながら、この住居では大枚七十兩と云ふお金は。
梅柳　イヤ、才覺して今日中に埒明けます。
藤助　そりやモウ、今日中にさへ埒が明きます事なら……そんなら間違はぬやうに賴みます。
　ト門口へ出て
そんなら梅柳どの。オヽ、皆さん、まだそこにか。何を話して居なさるのぢや。ハヽア、色男の事だらう。

とら　ナニ、お前の噂をして居たのだよ。
藤助　よく云つたのか。惡く云つたのか。
とら　どちらだ。當てゝ御覽な。
藤助　おさんさん、どう云ふ相場でござりましたな。
さん　わたしは一向存じませぬわいなア。
藤助　先づよく云つた方であらう。斯う云つてはをかしいが、この節、方々の女に口說かれるので、實に立ちませぬよ。
るい　オヤ、大層自惚れだねえ。
とら　誰れがそんな野郎を口說く女があるものか。
藤助　さう云ふお前が、口說いた癖に。
とら　冗談にも人聞きの惡い事、云つておくれでないよ。わつちがお前を、いつ口說いたえ。
藤助　この間、百の値打も無い物持つて來て、二百貸してくれいと云つて、口說いたぢやねえか。
とら　この野郎、人中で恥をかゝせに來やがつた。どうするか見やアがれ。
　ト側の米かし桶の水を手で掬つてかける。
藤助　こいつは堪らねえ。
　ト向うへ逃げて入る。おさんにかける。

さん　アレ、おとらさん、冷たいわいな。
とら　オヤ、御免よ……ほんに、腹の立つ。いま〳〵しい
噓つき野郎めだ。
ろい　もうよいわいなア。あの人の法螺は、冗談でござん
すわいなア。
とら　あんまり腹が立つから、内へ行て斷わつてやらうか
知らん。
ろい　お前、米がふやけてしまふぞえ。
とら　ほんにさうだねえ。
さん　申し、おとらさん、その水を、ちつと下さんせぬか
え。
とら　お易い事ぢやが、この白水は内の太夫が大懲り物。
毎日米を洗ふのでは堪らぬゆゑ、ソレ、ちよつと見やし
やんせ。
ト懐中より蛇を見せる。皆々惘りして、逃げる思ひ入
れ。
兩人　アレ、氣味の惡い。
とら　イヤ、どうもするのぢやないわいなア。ドレ、飯を
やらうか。
兩人　後にえ。

トおとら、桶を持ち、おろい、手桶を提げ、路地へ入
る。
さん　ほんに氣さくなお二人さん。あのやうな氣に、ちつ
との間なとなつて見たいものぢやなア……サア〳〵、こ
れで洗濯も片付いた。
ト盥の水を明け、いろ〳〵あつて内へ入り
オ、、父樣、よう切つて置いて下さんしたなア。さぞお
飢じからう。この大根で、御膳を上げませう。
梅柳　イヤ、まだ食べたうはない。靜かにしやれ。
ト向うより、段助、出て門口へ來て
段助　なんでも爰の筈ぢやが……人相墨色赤松梅柳。オ、、
爰ぢや〳〵。
ト門口明けて、あたりをキョロ〳〵見廻す。おさん、
思ひ入れあつて
さん　ても、惘りしたわいなア。人の内をキョロ〳〵と、
なんでござんす。
段助　おれは爰の内へ、ちよつと尋ね物がある。
ト又あたりをキョロ〳〵眺める。梅柳、思ひ入れ。
梅柳　ナニ、尋ねる物とは。
段助　イヤ、尋ねる物とは、誰か爰に。

さん　ナニ、爰にとはえ。
段助　イヤ、爰の……サア、爰の易が上手と聞いて、ちよつと見てもらひたい物があつて來ました。
梅柳　それなれば、早うさう云はしやればよい。して、見てくれいとは、なんでござる。
段助　その、見てもらひたいと云ふは、爰の內のどこぞ隅に。
梅柳　なんと云はつしやる。
段助　イヤ、墨色で失せ物が見てもらひたい。
梅柳　オヽ、承知いたした。
ト合ひ方になる。紙を出す。いろ／＼あつて
成る程、こりや餘程結構な品が失くなりましたと見えまする。
段助　とんと違ひなし。
梅柳　これはツイ知れてあれども、墨色の表には、物に覆はれて顯はさぬ象、現在そこにあつても、滅多に出ぬと云ふ失せ物でござりまする。
段助　イヤ、誠によく合ひました。とんとその通り。爰の內に置いてもらうて、ちと稽古がしたいものぢや。
梅柳　當りましたかな。マア、この紛失物は、お前の手には戻り憎い。
段助　それは大變だ。エヽ、探して來れば直ぐに分る。
梅柳　イヤ／＼、探す時には知れぬものぢや。
トこの時、段助キヨロ／＼になり、いろ／＼ある。
さん　エヽ、この人わいなう。內を覗き廻つて、アタ氣味の惡いお人ぢやなア。
段助　イヤ、わしは、その失せ物を尋ねる稽古をするのぢや。
さん　ナニ、阿房らしい。見てもらうたら、早く去んで下さんせえ。
段助　サア、去ぬる事は去ぬけれど。
トもぢ／＼しながら、懷中より、錢百文出す。
そんなら今は間が惡い。後に一度探しに來ます。
ト云ひながら門口へ出る。梅柳、心付き居る思ひ入れ。
梅柳　早く尋ねてござりませ。
段助　これか尋ねずに居られるものか……見す／＼爰に。
ト內を覗くをおさん、門口締める。この途端よろしく
さん　ようお出でなされました。
段助　エヽ、いま／＼しい。どうぞ尋ねやうが、ありさうなものぢやなア。

ト思ひ入れあり、下手の路地口へ入る。梅柳、見料を取り見て

梅柳　マア、これで今日のお菜だけはあるわい。

さん　なんぢややら、今の人は氣味の悪い。内をキヨロキヨロ探して。あのやうな人は、得て晩には盗人に入るものぢやぞえ。

梅柳　病氣上がりのわしと、其方と二人と侮つて來たのであらう。併し、入つたところが何も取らるゝ物は無し、ア、氣散じなものぢや。ハヽヽヽ。

さん　何もないと云へば、藤助さんに請合ひなさんした、墨附の質請け、心當りがござんすかえ。

梅柳　それで身共も當惑いたし居るわい。

さん　申し父さん、どうぞわたしを吉原へ賣つてなりとも、金調へて下さんせ。それより外に才覺の仕様はござんすまい。

梅柳　オヽよう云うてくれた。昨日雨國で、朋輩の半十郎どのにお目にかゝり、無くて叶はぬお墨附。其方が餘所の娘なら、物見遊山に形かたちも作らうもの。身形も構はぬ賃仕事、か弱い女の手一つで、親子二人が僅かの煙り。

さん　以前は泉州濱田の御家中、浦邊十内とも云はるゝ献身が、お家の騒動より、浪人となつて、今の身の上。

梅柳　墨色易のはした錢で、大枚七十兩、これが世に云ふ賣卜者の

さん　身の上知らぬ今日の切端。

梅柳　事に依つたら。

さん　わたしを廓へ。

梅柳　沈み果てたる身の成行き。

さん　父さん。

梅柳　娘。

さん　思へば果敢ない

梅柳　有様ぢやなア。

ト兩人、愁ひのこなし。おさん、氣を替へて

さん　父さんとした事が、又しても〳〵、其やうに心遣ひ。わたしもちつと、頼んで見るお方がござんす程に、まだ晩までに間もある事。キナ〳〵思うて、病氣の障りにでもなると悪うござります。ちつとのうち、奥でお休みなされませいな。飯が出來たら知らせます。

梅柳　成る程、そんならさうしませう。金は湧き物、出來れば直ぐに件の質請け。それを功に濱田の家を……果報

は寐て待て。ちつとのうち休みませう。
さん　晝寐も養生、そんなら父さん。
梅柳　ドリヤ、一寐入り致さうか。
　ト途端に唄になる。梅柳、奥へ入る。あと合ひ方。
さん　御病氣とは云ひながら、お年の上のあの心遣ひ。たつた一人の父さん、その日〳〵の事ならば、どうぞ不自由させまいと、方々の賃仕事、その手助けと父さんが、人の爲の占ひも、矢ツ張り心の保養にならうかと思ふうち、手がゝり知れた貮千丁のお墨付。その質請けは大枚の七拾兩。どうぞこの身をその當にと、あのおるいさんを頼んで置いたが、晩まで父さんに苦勞にさせぬやう、仕様がありさうなものぢやなア。
　ト案じる。この時、路地の口より、廣蓋へ三ツ物を並べ、德利持つて出る。後より、おるい、おとら、助四郎、宗庵、六藏、三助、ドヤ〳〵と云うて出る。
助四　娘の内は、爰か〳〵。
皆々　娘の内は爰でござります。
六藏　わしや恥かしい。
　トちよつと身振りする思ひ入れ。
助四　ナニ、馬鹿な事をするな。

宗庵　入つてもよいか〳〵。おるいさん。マア〳〵、先へ御案内。
るい　そんなら案内を致します……おさんさん、何をしておいでだえ。小父さんはお留主かえ。
さん　イヽエ、奥で寐て居やしやんすわないア。
るい　そんなら丁度ようござんす。今日はあの宗庵さんと、旦那様を連れて、お前の顔が見たいと云うてぢやゆゑ、それで連れて來たけれど、わたしの内は知つての通り、子は澤山あるし、なんとお前の内を、ちつとの間貸して下さんせぬかえ。
さん　そりやモウ、お前の云はしやんす事なら、わたしもお前を頼んだ事もあるし、こちらは構やせぬわいなア。
るい　そんなら貸して下さんすかえ。さうしてお前の云はしやんす通り、昨夜佐助には約束して置いたけれど、それはそれにして置いて、宗庵さんにも話しのしてある事もある。マア〳〵、わたし次第にして置いたがよいわないア。
さん　どうぞ、よいやうに頼みますわいなア。
るい　そんなら内を借たりぞえ。
宗庵　サア〳〵、皆さん、入るぢや〳〵。

ト これにて、皆々捨ぜりふにて内へ入る。

コレ娘、どうぢや、昨日話した通り、どうぞお連れ申してくれと云つたゆゑ、あの釘屋の旦那を同道した。嬉しいか、嬉しいか。

さん　なんのマア、わたしがいつそんな事を。

宗庵　ハテサテ、ソレ、この中婚の内の用をナ。それ〳〵、ナ、云つたであらうがナア。

ト呑み込ます。おさん思ひ入れあつて

さん　ハテ、何やら存じませぬが、後で兎や角うさへなければ。

宗庵　ハテ、何もかも呑み込んで居る。あの旦那がござつたとて、何もモヂ〳〵。イヤサ、初心な娘は困つたものだ。

とら　でも、金の性がよいかして、あの釘が好く利くと見えるわいな。

助四　そりや知れた事、誰れだと思ふ。山形屋の助四郎と云はれて、當時息子では、恐らくこの兩國は云ふに及ばず、色里へ行つた時は、あちらからもこちらからも、助六ではないが吸ひつけ煙草。この粹の骨頂。商賣は堅い釘問屋なれど、錆の取れた並六寸。男の中の男一疋。阿波座烏はおはぐろ壺、藪鶯は京やすり、土手の蛙は直しの相槌、いつでも尋ねてござりませ。潜り戸の錠明けて、掛金取つて待つて居りやす。時に、ゑて物に、相をしてもらへないか。

宗庵　もらへないどころか、最前からお前様の杯を待つて居ります。おさんぼう、コレ、旦那のお杯だ。

トこの時、おさん、片脇にて足袋をさして居る。

さん　イヽエ、わたしは、お酒は不調法でござります。

宗庵　生娘はこれで困らせ居るて。

助四　この杯はどうしたものだな。

とら　アイ、わたしが戴きますわいなア。

宗庵　折角お娘にささうと思つてござる杯を。

三助　蛇使ひのおとらでは納まらぬ。

とら　エヽ、モウ、大きにお世話だよ。

ト杯取つて、手酌で呑むと、助四郎、思ひ入れあつて

助四　コレ宗庵どの、ちよつと〳〵。

ト宗庵、助四郎の側へ行くと

ありや一體どうしたものだ。この間も貴樣が云ふには、内の親類へ預けたら、どうでも仕樣がある。殊に娘は早くおれに逢ひたいと云ふと、度々の金の無心、そりやア

おれも、吉原か柳橋で遣ふ心で居るから、ソレ二兩ソレ三兩ぢやと貴樣に渡したも、あのお娘に氣があるゆゑ。その上昨日も柳橋で二兩。今日逢はうと云ふ約束で、押しかけて來た所が、娘は一向知らぬ顏。

ト いろ〳〵文句を云ふを、宗庵、浴せかけて

宗庵 サア〳〵、何も云はまい。昨夜からの事も何も云ふまい。この宗庵が好いと云つたら、好いにしなさい。先づ〳〵納まつて下さい。

ト 助四郎を宥め、おさんの側へ行き

コレ、どう云ふものだ。この間からも云ふ通り、借家地主なり大金持ち、釘問屋の旦那、應とさへ云へば、浮かみ上がるは今この時。娘はちよぼくた色事をするより、斯う云ふ口を探すが、兎角當世といふものだ。どうだうだ……コレ、おさんぼう、默つて居ては譯が解らぬ。斯う云ふせりふがあるゆゑ、昨日貴樣が米を買ふので、貸してくれと云ふから金を壹兩。

ト 助四郎に聞かして、小聲にて

貳朱貸してやつたも、おれが深切ぢやないか。

さん そりやよう覺えて居ります。今晩早速お返し申しまする。

宗庵 ハテ、さう云はずとも。

ト この時、おさんが側へおろい行き

ろい コレ、おさんさん、お前、ちよつと云はしやんした廓の事。ひよつとそれがさうなると、嫌な人でも抱かれて寐ねばならぬぞえ。

さん そりやよう承知で居りますけれど。

ろい けれどなりや、田から行くも畦から行くも同じ事。あの旦那にウンと云つて。

さん それでもあのお方ばかりは

宗庵 虫が好かぬか。

さん アイナア。

宗庵 よく嫌はれたものだなア。

ト 思ひ切つて云ふ。宗庵、呆れ顏にて

助四 何がどうした。

宗庵 イヤサ、その虫々と云つたは、このおとらぼうが商賣の長い奴。

助四 オヽ、そんならその蛇の事か。

とら イエ〳〵、わたしは今は持つて來ぬけれど、最前白水を吞まして、內に寐さしてあるわいなア。ほんにわたしは、なんとも思はぬけれど、蛇といふ物は、よく人に。

皆々　よく嫌はれる物だなア。
助四　サア、斯うして呑んで居ても、肝心の目當が其方に居てはどうもならぬ。サア〳〵、どうするのだ〳〵。
　ト宗庵、おさんの側へ行き、小聲になり
宗庵　サア〳〵、マア、ようござります。今そこへ行きかかつて居る所だ。そんなら、どうあつても嫌か。それではおれが取つた金は。
さん　エヽ。
宗庵　イヤサ、中へ入る志しが水の泡。ハテ、困つたものだなア。
助四　イヤ、こりや斯うせうわい。蔭で此やうな事を、あつちこつちと云つて居るは、樂しみうちぢやと思つて居たが、根が物堅いお娘の氣性。いつその事表向きに、親仁に逢つて、お娘を貰ひ切る方が
六蔵　いつそ手短かで早うござります。
とら　さうだ〳〵。それなればおさんさんも、誰れに氣兼をする事もなし。併し、わたしならコツソリと、内證にして置いて、また外でもするものを、表向きになつては勝手が悪いものだよ。
助四　ほんに、お主と魂ひが替へて欲しい。そんなら爰の親仁に逢はう。
さん　例へ父さんがなんと云はしやんしても、この事ばかりは嫌でござんす。
宗庵　なんぼ嫌と云つても、親仁さへ得心なれば。
助四　オヽ、さうぢや〳〵。親仁に逢はう〳〵。
　トこの時、奥より、梅柳、出て來り
梅柳　コレ娘、わしに逢はうと仰しやるは……オヽ、これは〳〵お長家のお衆。して、あなた様は。
宗庵　この旦那は、この長家の地主、釘問屋の若旦那、山形屋助四郎さまと申す御仁サ。
梅柳　それはマア、見苦しい所へ、ようこそお出。私しはこの家の主、赤松梅柳と申す者。お心安く思し召し。して、何御用あつてお越し。
助四　イヤ、その用と云ふは、ア、外でもない、フッとした事で、アノ〳〵。
　ト云ひ憎さうになるを、宗庵引取り、前へ出て
宗庵　アイヤ、斯うでござります。この旦那が、いつぞやフッと、爰のお娘を見た所が、形に似合はぬ器量好し。どうぞあれをコツソリと、世話がしたい。マア、手附けにどこぞへちよつと賴んで、長家の事なり、いろ〳〵金

まで、イヤ、傘ねく頼まれては居たれど、物堅い娘御、どうもそこまで云はれもせず、こなたに直々逢つて、この事をお話し申すも、先づ當分は妾にでもしたいと旦那の望み。話しと云ふは、斯う云ふ譯でござるわい。
梅柳　それは御深切に、見る影もないあの娘、旦那様のお妾とは、身に取りましては有り難い仕合せ。
　トおさん、ちよつと嫌々と思ひ入れあるを見て
併し、娘ともとくと相談の致した上の事。
助四　ア、イヤく、その事はお娘も承知の筈。宗庵袖を引き
　トおさん、さうでないと云ふ思ひ入れ。宗庵袖を引き
默つて居よと思ひ入れ。
イヤ、斯う申せば、無禮な申し分なれど、マア當分、娘をわしが妾にして置けば、此やうな形はさして置きはせぬ。ナウ皆の衆。
ゐい　さうでござんす。お世話になる方が
とら　お前の仕合せと云ふもの。
宗庵　世話したわしも仕合せと云ふもの。
三助　合して四四の十六合せ。併し子で喰ふ親は間々ある事。
宗庵　ウンと云つて承知をするが。

皆々　よささうなものぢやぞえ。
梅柳　成る程、段々の御深切、畏まつたと申したいが
宗庵　申したいが
梅柳　マア、嫌でござる。
皆々　エ、。
梅柳　浪人しても以前は武士、慰み物にはえゝ致さぬ。
　トきつと云ふ。助四郎、宗庵の袖を引ッ張り
助四　コレ宗庵、あれを聞いたか。あの通りぢや。今日となつて四の五の云ふゆゑ、親仁に逢つてと云へば、慰み物にはせぬ、以前は武士のと悪口たらく。この上は貴様に云ひ分がある。これまで貴様に遣つた
　ト云はうとするを宗庵、云ふなと云ふ思ひ入れ。いろいろある。
貴様の心に覺えがあらう。これから貴様が相手だ。一番おれが顔を立てゝもらはにや、濟まぬわいく。
宗庵　ようござりますく。何事も愚老が胸にある。お前様のお顔の立たぬやうには致しませぬ。默つてお出でなされませ。コレ、梅柳どの、よく立派に云はしやつた。オ、えらいものだ。併し、此方も歴々の旦那、なんのこの娘に限つて……サア、外にいゝ娘がいくらもある。

旦那によく恥をかゝせたな。後日にキツとこの禮は云ふぞよ。
とら　ほんに、どうならうと、宗庵さんも梅柳さんも、一つ長家の事。
ろい　なんと云つてよからうやら、ほんにお氣の毒でござんすわいなア。
宗庵　サア、この上は、こんな所にござらずども、丁へでもお出でなされませ。
六藏　緣起直しに、大騒ぎとはどうでござります。爰のもいゝが、又あつちにもござりまする。
宗庵　ハテ、何事も愚老に任せ、マア、わしの內へ。お前樣の顏の立たぬやうには致しませぬ。斯う云ふ內に長居すると、ナア、男が惡く見えまする。
助四　そんなら貴樣、これぎりになると、今までの金を取返すぞよ。
宗庵　ハテ、それを砂には致しませぬ。今はあゝ云ふものの、あの女は、矢ツ張りお前樣に氣がありますぞえ。
助四　どうしたと。
宗庵　サア、氣のある證據は、最前虫が好かぬと、おとらの蛇にかけたせりふ。あの時お前の顏を、斯う云ふ目で見て、好かぬわいなアと云つて、愚老の太股を强かに抓つたが、ソレ、惚れて居る證據。どうだ／＼。
助四　そんなら最前、わしを流し目に見た時に、貴樣の膝を斯う抓つたか。
ト思はずおとらの尻を抓る。おとら、悧りする思ひ入れ。
とら　アイタヽヽ、とんだ門違ひだよ。
宗庵　それぢやに依つて、わしの內でもう一杯。
三助　わたしらも一緒に、御酒のお相手に。
宗庵　ひよつと出來たら、又これこを。
ト小判の眞似をして見せる。
助四　慾張つた奴だなア。
皆々　サア／＼、行きませう／＼。
トこれにて、皆々路地へ入る。後に二人、思ひ入れあつて
梅柳　兎角貧すれば鈍な奴等が。其方もさぞ困つたであらう。
さん　わたしは構ひはせぬけれど、お前はさぞお腹が立つてでござんせう。あの人の事は、この間からあの宗庵さんが、いろ／＼と嫌らしい事。先のお方は兎も角も、宗

庵さんも、よい氣なお方でござんすわいなア。
梅柳　それも似合ひさうな緣談なれば兎も角も、話しをせまいものでもないが、見るから氣に入らぬ助四郎どの。話しするも穢らはしい。
さん　あのやうな人の相手にならうよりは、彼の品の質請けに……この身はお前の心任せ。必らずわたしに氣兼して下さんすなえ。
梅柳　イヤモウ、杖とも柱とも頼りにするは其方一人、兎角其方が頼りぢやわい。
　ト兩人、思ひ入れある。好みの唄になり、小梅、師匠の拵らへにて出る。茂兵衞、着附け羽織、番頭の拵らへ。丁稚、木綿の形、後より出て
茂兵　小梅さん、誠にいゝ所でお目にかゝりました。
小梅　ハイ、わたしも子供衆の稽古をしまつて、柳島の妙見樣へ參りました戻りがけ、好い所でお目にかゝりました。そんなら、いよ／＼仰しやつた通りでござりますかえ。
茂兵　さればでござります。緣と云ふものは變つたもので、お前さんもわたしの所の地面にお出の時から、あの通りの若旦那のお氣質ゆゑ、いつがいつまでお內儀なしでは置かれぬと、御親類より緣をお極めでも、いろ／＼云つてござるところ、昨日思はず兩國で、あの娘御を見て亂騷ぎ。いま道々も申す通りでござりまする。
小梅　そりやお前さんの大切の若旦那の事。殊にはあのお子も仕合せ。ほんに仲人口ではござりませぬが、器量と云ひ、氣前と云ひ、よく出來た娘御でござんすわいなア。
茂兵　イヤモウ、ちよつと見ても知れまする。此方の若旦那は餘ツぽど好い目でござります。そんなら參りませうか。
小梅　サア／＼、參りませう……平吉どの、御苦勞でござんすの。
丁稚　ハイ／＼、番頭さん、あそこに看板が見えまする。
小梅　そんならわたしが參りますわいなア。
　トいろ／＼捨ぜりふにて、本舞臺へ來て、內へ入ろ。
　オヽ、おさんさん、お父さんも爰でござんしたかえ。丁度好いわいなア。
さん　小梅さん、只今お歸りでござんしたかえ。
梅柳　今日も、何れへかお出であつたかな。
小梅　ハイ、柳島の妙見樣から、只今歸りでござんすが、

おさんさんの事について、ちとお話しがあつて來たわいなア。惡い事なら來ませぬが、よささうな事ぢやに依つて、わたしが案内して來たお方がござんすが、逢つて上げて下さんすかえ。

梅柳　好い事とは耳寄りな。どうぞ聞かして下さりませ。

小梅　外の事でもござんせぬが、あのお子の緣談の事で。

さん　また緣談の事かいなア。今日は又、そんな事の流行る日かいなア。

梅柳　して、そのお方は。

小梅　申し、お使ひの番頭さん、マア〳〵、こちらへお入りなされませ。

茂兵　左樣なれば、御免なされませ。

ト内へ入り、丁稚、下手に居る。おさん見て

さん　ほんにあなたは昨日の

小梅　申し、この方は、横山町で藥の問屋、わたしが居ました近所で、永樂屋孫太郎さまと云ふお内の、番頭さんでござんすが、その若旦那の孫太郎さまが、爰のおさんさんを、昨日一度兩國で見初め、嫁に貰ひたいとの事。それゆゑこのお方が、わざ〳〵來てゞござりました、と云ふだけはわたしが口開き。後はお前さんの好いやうに、御口上を、申し番頭さん……オ、切ない。お茶一つ下さんせいなア。

ト立つて酌んで呑む。おさん、茂兵衞に茶を出す。

茂兵　イヤモウ、お構ひ下されますな……成る程、褄はづれと云ひ、ても好いお娘御ぢや。

ト茂兵衞云ひながら、思はず茶を呑み火傷する。

アツ……お茶下さりまする……わたしは、今お師匠さんが申しました通り、永樂屋孫太郎方の番頭、茂兵衞と申しまして、不束な者でござりまする。

ト丁稚の持參物を前に出し

これはほんの、初めて上がりました印でござりまする。

梅柳　これは御心配な。止しになされればよいに。

茂兵　さて、手前主人孫太郎事、未だ部屋住みではござりますゆゑ、親類どもゝ、又お得意先やお出入りのお屋敷方からも、處々方々と嫁御の事を申して參りますれど、兎角物堅い氣性にて、只明暮れ書物ばかり讀んで居りまする若旦那。二言目には子曰くで、ホッと致しまする。兎角緣組を選り嫌ひ、召使ひの我れ〳〵も、困り入りまする所に、昨日兩國にて、あのお娘御が飯を食べてござつたを見られまして、形も構はず親御と一緒に、御膳を

上がつてござる親御への氣休め。あゝ云ふ實體な氣性・殊に器量は好し、どうでも書物のうちに、さう云ふ事がござりますかして、無性に褒められまして、あれならば貰ひたいと申されまして、それは〳〵えらい惚れやう。そこでお宅を伺ひましたところが、お武家樣のお果の御樣子。そんなら筋目に異議はなし。併し、表向きからは如何と存じ、無禮ながらこの小梅さんを頼んで、橋渡しなり仲人なり、押付けがましい儀ではござりまするが、お聞入れ下されませうなれば、ヘイ〳〵、有り難う存じまする。

梅柳　見る影もない素浪人、御大身の永樂屋どの、釣合はぬ御縁談は、ナウ娘。

さん　父さんのお心さへ濟めば、わたしはどうでも構はぬけれど、なんと云つても腑甲斐ない。

茂兵　ア、申し、その事は又、親御樣が御窮屈に思し召さば、假親と申すも世間には間々ある事でござりますれば、お氣遣ひなされますな。お氣の濟むやうに致しますナア、小梅さん。

小梅　さうでござんすとも。親御は外々へ御隱居樣。なんと御相談をなされませいなア……コレ、おさんさん、お前も昨日一度見やしやんしたであらうがな。

さん　アイ。

ト恥かしき思ひ入れ。

小梅　ほん、にキツパリとした嫌味のない、大抵好い男の彦樣、お前さへ得心なれば、直ぐに出來るこの話し。よく考へて見やしやんせいなア。

さん　そりや、わたしのやうな不束な者でも、ほんまに云うて下さんすなら嬉しいけれど。

ト袖を引き、頭の物着物がないと云ふ思ひ入れある。

小梅　なんのマア、其やうな事は氣遣ひはござんせぬわいなア……茂兵衞さん、

ト金の事、仕方して見せる。

茂兵　それ〳〵、それが肝心。斯樣な事を申せば、どうか失禮な儀ではござりますが、御得心さへして下さりますなれば、おいりでもござりますまいが支度金として、侮りがましい事ではござりますが、賴みやら何やかで、今晩にも百兩ばかりは。

ト云ひ憎さうに云ふ。

小梅　何かに付けてお支度も要る事。御得心なら早いがよいわいなア。

梅柳　すりや、娘を差上げなば、アノ貳百兩……さすれば寶の。

さん　さうなる時にはわたしの體。どちらへするのも金の事。

ト梅柳、おさん、兩人顏見合せ思入れあろ。

梅柳　武士たる者が一人の娘を、金に替へるも。

さん　エヽ。

梅柳　ハテ、なんとしたものであらうなア。

ト思ひ入れあると、向うより、手代藤助、出て來て、內へ入り

藤助　梅柳どの、最前、約束した質請けの事。金の出來るまでと約束して置いたが、此方の方にしつかりとした客があるゆゑ、直ぐに請けるならよけれど、間違つてはならぬゆゑ、念の爲に屆けましたぞや。

梅柳　それは先方も急な事。いづれにしても、是非々々此方へ請けねば。

茂兵　なんの御樣子かは存じませぬが、つゞまる所は金の入用。只今申しまする通り、手前方へ嫁入りの、御得心さへ下さらば、暮れまでに百金は、直ぐに持參仕りますが、どうかお聞濟みなされて下さりませぬか。

さん　アノ暮れまでに七十兩の。エヽ、困つたものぢやなア。

ト兩人思ひ入れ。この時、路地口より、佐助出て

佐助　ヘイ、御免なされて下さりませ……オヽ、おさんさん、昨夜約束したお前の金の

さん　アヽ申し。

ト側に行き、小聲にて云つてくれいと云ふ思ひ入れ。

佐助　ナア、急に金の入用との事。お前の器量、入用の金子だけは出來るに相違はないけれど、親方に見せねばならぬ。駕籠を持たせて迎ひに來た。わしと一緒に來て下さりませ。

梅柳　コリヤ、娘、あの御仁は。

さん　サア、斯うなつては、どうもお前に話さねばならぬ仕儀。このお方は、おるいさんを頼んで來てもらつた廓のお方。それぢやに依つて、わたしはちよつと。

梅柳　ムウ。すりや金が入用ゆゑ、それで其方が。

藤助　エヽ、解りました。その質請けは、子を遣つて金に替へるか。

梅柳　イヤ、娘はその氣でも、武士の娘を金に替へ、君傾城の勤めはさせぬ。

佐助　そんなら此方の約束も、今となつて變替へするのか。
さん　サア、それは。
佐助　此方へ來る氣か。
さん　サア。
藤助　外へ遣らうか。
梅柳　サア、その儀は。
二人　サア〱〱。
佐助　どうする積りだ。
ト梅柳、おさん、ヂツとなる。茂兵衞、思ひ入れあつて
茂兵　何か樣子は存じませねど、急に迫つた金子のお入用。今あなたが仰しやつたは、君傾城に身を賣つて質請けとは、御尤もな思し召し。爰が彼のお話しでござりまする。今の事さへ調ふなれば、勤め奉公さゝうより、わたしが内へ只の嫁入り。御得心なされたら、ナア、小梅さん。
トおさん、ちよつと思ひ入れあつて
さん　申し父さん、わたしやお前に、お頼みがござんすわいなア。
梅柳　改めてこの親に。
さん　わたしやあなたにお頼みは、嫁入りがしたうござんす。
小梅　そんなら行く氣にならしやんしたかえ。
ト小梅、茂兵衞、嬉しきこなし。
さん　わたしが行くは、その支度金とやらで。サア、それおやに依つて、どうぞわたしを、遣つて下さんせいなア。
梅柳　成る程、負うた子に敎へられ、淺瀨の譬へ。如何にも承知いたした。コレ、若いの。得心してござるぞ。
茂兵　そんならアノ御得心で。
さん　わたしを遣つて下さんすかいなア。
小梅　それでこそ親御へ孝行。おさんさんの仕合せ。ようマア得心して下さんしたなア。
茂兵　有り難うござります。早速の御得心、この番頭も參つた甲斐がござります。
小梅　第一はお内の納り。此やうな嬉しい事は
二人　ござりませぬわいなア。
トこの前より門の外に助四郎、立聞きして居て、口惜しき思ひ入れあつて路地口へ入る。
藤助　そんなら金が出來ます樣子。それでは先づ、此方の方は安心だ。併し金を暮れまでに
茂兵　それは私しが請合ひました。

藤助　逢はぬやうに頼みます。
小梅　そりや、御承知でござんすわいなア。
藤助　ドレ〳〵、それで安心だ。ドリヤ、お暇いたしませう。
佐助　それぢやおさんさん、わたしの方は。
さん　それも後よつわたしがとつくり。
佐助　オヽ、よし〳〵。そんなら一緒に參りませう。
藤助　サア、お出でなされませ。
ト唄になり、下手へ入る。
茂兵　先づこれで埒が明いたと云ふもの。善は急げぢや、暮れたればコッソリと、金持つて參ります。小梅さん、お前もいろ〳〵お骨折でござりました。差詰めこれから毎日嫁御のお相手に、遊びに來てもらはにやなりませぬぞえ。
小梅　そりや知れた事でござんすわいなア。仰しやらいでも押かけて參ります。
茂兵　そんなら私しはお暇申します。どうぞ暮れに金持つて來るその時には、お前の所へちよつと寄ります。ドレ、早うこの事を若旦那へお聞かせ申し、喜ばさねばなりませぬ。左樣なれば、もうお暇申しまする。

小梅　私しもお暇、おさんさん、後にお目にかゝりませう。
梅柳　それでは、もうお歸りでござりまするか。何かお世話でござりました。
さん　どなたもなんのお愛想も。
茂兵　イヤモウ、御得心が何より愛想。そんならお娘御、ではない、こちの花嫁樣。
ト此の時、丁稚、居眠りして居る。
コリヤ〳〵、起きぬか〳〵……此やうに調ふのが、御緣のあると云ふもの。
小梅　若旦那と云ひ、嫁御と云ひ
茂兵　揃ひも揃つた好い御夫婦。
ト思はず丁稚の頭を叩く。丁稚寢惚けて
丁稚　うまいぞ〳〵。
茂兵　アコレ、悔りするわい……併し、うまいとは好い辻占。ドレ、お暇申しませう。
ト丁稚を連れて花道へ入る。小梅、路地口へ入る。
梅柳　捨てる神あれば助ける神と、差詰まりたる金の才覺、思はず出來ると云ひ、殊に其方が身の片付き、これで安心と云ふものぢや。

さん　サア、嬉しい中にも又一つ、案じられるはお前の事。わたしが行つたらお一人で、さぞ不自由にあらうと思へば、それが氣にかゝります。
梅柳　まさかわし一人ぢやとて、鉢で飯も炊くまい。其やうな事案じずと、其方こそ晩の支度、早く湯へなりと入つて來やれ。
さん　ほんに、どなたやらお出も知れませぬゆゑ、行つて參りませう。
梅柳　それに髮も亂れてある。結んで置くがよい。
さん　つい撫でつけて置かうわいなア。
梅柳　兎角女子は形かたち。
さん　悪いながらも着替への浴衣。
梅柳　オヽ、それと着替へて化粧もしやれ。
さん　モウ、しつけぬ事を、今日に限つて此やうに。
梅柳　常と違つて今宵は格別。
さん　それぢやと云うて、どうやらわたしは。
梅柳　人の見る目が恥かしいか。
さん　アイ。
ト俯向き、思ひ入れ。
梅柳　ハテ、賣り物には

さん　エヽ。
梅柳　花嫁ぢやわえ。
ト梅柳、笑つてこなし。おさん、恥かしきこなしいろいろあつて、兩人よろしく、合ひ方にて道具廻る。
本舞臺、三間の二重、上手障子屋體、赤壁、上手に戸棚、佛壇、この上に藥箪笥、すべて、裏借家、宗庵内の體。爰に助四郎、立ち上がり居る。宗庵、おろい、おとら、六藏、三助、これを留めて居る。この見得よろしく、唄にて道具とまる。
皆々　マア／＼、靜かになされませ。
助四　イヤ、聞かぬ／＼。嫌だ／＼。
宗庵　サア、さう云はずと、わしが云ふ事も、とつくりとお聞きなされませ。
助四　エヽ、聞くも聞かぬもない。いつぞやから貴樣を賴んで、あの娘を手に入れる事は出來まいかと云へば、直ぐに出來るやうに云つて、今日まで取られた金は、どれ程だと思ふ。わしも一軒の主とは云ひながら、まだ阿母があるゆゑ、みな内證でくすねた金。あつちへ遣つたか、貴樣が取つたか知らぬが、あんまり人を白痴にするとい

ふものだ、今も聞いて居りやア、横山町の永樂屋へ相談
が出來て、晩に金を持つて來るとの事。おれも山形屋助
四郎、あつちへやつては男が立たぬ。それと云ふのも皆、
貴様が頓痴氣から起る事だ。おれが腹を立てるが無理か。
よもや無理ぢやアあるまいがな。
ろい　そりやモウ、尤もでござんすわいなア。
とら　さうぢや／＼。こんな事は側でも聞いても、腹が立
つわいなア。
宗庵　エヽ、貴様までが同じやうに……モシ、わしが思ひ
付きがござります。マア／＼、わたしに任してお置きな
されませ。
助四　イヤ／＼、モウ、これからおれも自棄ぢや。否と云
はうが應と云はうが、あの娘を引ツかたげ、後のせりふ
は貴様にさすのぢや。
宗庵　ハテ、荒々しい。其やうな事せずとも、高でこの嫁
入りを變替へさせたれば、その後はどうなとなるではご
ざりませぬか。
助四　オヽ、そんなら今宵の嫁入りを
皆々　變替へさすか。
宗庵　コレ、大きな聲を出すまい。その上、おとらを種に

とら　わたしをなんぞに。
助四　して、その工風は。
宗庵　委細の樣子は。
　ト宗庵、助四郎に囁く。
助四　そんなら直ぐに。
宗庵　ア、コレ。
　ト皆々よろしくあつて口へ手をあてる。この模樣よろ
しく、稽古唄にて道具廻る。
本舞臺、元の梅柳の内へ戻る。おさん、鏡臺に向ひ
髪を撫でつけて居る。この見得よろしく、誂らへの
鳴り物にて、道具とまる。
さん　思ひがけないこの身の片付き、これで父さんも安堵
支度金とやらで、お墨付の質請けも出來ると云ふもの。
ほんに味氣ない中にも、神さんの見捨てゝ下さんせぬこ
の身の仕合せ。昨日思はずお目にかゝつた、永樂屋の若
旦那樣、人柄と云ひ、殿御振りと云ひ、あゝ云ふお方に
添うたれば、女の身の果報ぢやと、フツと思うたる心が
通じ、急に先から云ひ入れて……とは云ふものゝ今まで
とは違うて、大身代の親類衆へ、どう云うてよからうや

ら、父さんも今にお藥が出來るであらうが……ほんに、父さんが風呂へ行けと云はしやんしたが、この着物では裏が切れてある。ドレ、洗濯物の一張羅を、着替へて行からわいなア。

ト押入れより着替へを出して着替へる。この時、おとら、蛇を追ひかけ出て、内へ入る。おさん、恟りして飛んで退く。おとら、納戸へ蛇を追ひかけ入る。おさん、思ひ入れあつて

さん　アレ、おとらさん、恟りするわいなア。

トこれにて、おとら、納戸より出て來り、思ひ入れあり。

とら　ア、、たうとう逃げてしまつた。見習ひのあの太夫、折角仕込んだものを、エ、、いま／＼しい。

さん　そんなら今のは蛇かいなア。どこぞに居やアせぬかいなア。

とら　イエ／＼、奥の石垣の間へ入つたに依つて、モウモウ來る氣遣ひはござんせぬ。見ればお前は糠袋を持つてお湯へでも行くのがえ。

さん　ハイ、ちよつと行て來るわいなア。

とら　丁度よい。わたしも今行からうと思つて居る所。そんなら一緒に行きませうわいなア。

さん　そんならさうしませう。

ト納戸暖簾の口を覗き思ひ入れ。

父さん、ちよつと湯へ行て來るぞえ。

とら　見ればお前、着物を着替へて。ついに晝のうちに湯へは行かぬに、こりやなんぞ嬉しい事が出來たのぢやなア。

さん　なんのわたしに、其やうな事を

とら　それでも最前藥屋の

さん　なんと云はしやんすえ。

とら　イヤ、藥湯より、只の湯へ入つて來うわいなア。

さん　何を云はしやんすぞいなア。

トこれにて、おさん鏡臺を片付ける。下手の勝手より糠を袋へ出さうとして、無いと云ふ思ひ入れ。おとら、見て、

とら　おさんさん、糠がないかえ。

さん　アイ。

とら　そんならわたしのを、ちよつと分けて上げようわいなア。

さん　そんなら半分下さんすかえ。

とら　糠はよく落ちるぞえ。
ト云ひながら糠袋を抛つてやる。おさん、取つて移す思ひ入れ。そのうち、おとら、手前の簪を拔いて、おさんの袂へソッと入れる。おさん、知らぬこなしにて
さん　これで澤山ぢやわいなア。
とら　お前の髮は今お結ひかえ。
さん　撫でつけたのぢやわいなア。
トいろ〳〵云ひながら思ひ入れある。
とら　さうかいなア。わたしや又、結つたのかと思うた。
さん　今日はお前のも、大層よう出來ましたが、どなたに結つておもらひだえ。
とら　わたしやいつでも一人サ。
さん　オヤマア、本當によく出來たわいなア。
とら　出來なくつてサ。
さん　吉原女郎衆の間に合ひではないかえ。
とら　なんだとえ。
さん　譯はねえ。
ト不器用に云ふ。二人、顏見合せて
兩人　ホヽヽヽ。
ト兩人笑つて、思ひ入れ。
さん　どうしたらよからう。
ト恥かしさうに顏を隱し、手拭にて、おとらを打つ眞似をする。これにて木の頭。
讀賣のやうぢやわいなア。
トこれにて、捨ぜりふにて、一緒に外へ出る。よろしく拍子。

幕

大詰

横山町永樂屋の場
横網梅柳内の場
柳島釘屋別莊の場

淨瑠璃「身辻占菊株」淸元連中

役名――赤松梅柳。同娘、おさん。永樂屋孫太郎。同母、おあき。横田宗庵。蛇使ひ、おとら。茶屋娘、おるい。見世物師、三助。同、六藏。釘屋助四郎。瀨川段助。稽古所、小梅。永樂屋番頭、茂兵衞。

本舞臺、正面、二重、納戸口に暖簾がけあり。欄間

に藥問屋永樂屋と書きある。正面、蘭方テレメンテヽンと二行に書きし板看板、藥袋澤山吊りある。藥種簞笥、狀差し、うしろ襖、藥種の書割り。上手に狀箱扣へ、孫太郎、帳合ひして居る。手代大勢、藥研にて藥おろして居る、また刻んで居る者もあり、この所へ仕出し大勢出て、藥買つて居る。すべて、横山町永樂屋表かゝりの體。角兵衞獅子の鳴り物にて、幕明く。

仕出　申し、わたしに熊の膽をおくんなさい。

手代　ハイ〳〵、只今お上げ申します。

孫太　ソレ、早うお上げ申せ。

手代　ヘイ〳〵、熊の膽目方一匁でござります。

仕出　代金は爰に置きまする。

同　お邪魔ながら風藥一服下され。

手代　畏まりました。一服でようござりますか。

仕出　申し、齒の痛むには、何がようござります。

手代　それは、辰砂がよろしうござりませう。お上げ申しませうか。

仕出　そんならそれを下さりませ。

ト皆々いろ〳〵藥賣つて入る。おろい、腰かけ居て、孫太郎、おろいを見て

孫太　ほんに、お前は見たやうなと思つたら、兩國の茶店の娘御ぢやの。

ろい　左樣でござります。わたしは梅香を貰ひに參りましたが、お内のがいつちよいゆゑ、いつも買ひに參ります。

孫太　それは有り難うござりまする……ソレ、好いのをお上げ申しや。

手代　ヘイ、畏まりました……これで一朱でござります。

ろい　左樣なら、これに一朱置きまする。

ト云ひ〳〵立ちかゝりしが、思ひ入れあつて、おろいこなし。

ほんに、御商賣柄ゆゑ、あなたでお尋ね申したら知れませうが、この頃鎌倉方の御殿醫で、この江戸へお出でなされ、御逗留との事でござりまするが、御存じはござりませぬか。

孫太　ハテナ、鎌倉方の御殿醫が、この江戸へ御逗留と。して、お名は何と云ひましたな。

ろい　お名は慥かに、栗林玄膳さまとか申しました。

孫太　成る程、お名は聞き及びましたが、ついにお目にかかりました事はござりませぬが、そのお方が、この江戸へお出でなされましたかな。

ろい　左様でござりまする。あなたは御存じはござりませぬか。

孫太　一向に存じませぬ。

ろい　これはおやかましうござりました。ちと又、兩國へお出の節は、私しの店へお出で下さりませ。

トこれにて、おろい、思ひ入れあつて、鳴り物にて下手へ入る。

孫太　又お寄り申しまする。ようお出でなされました……オヽ、兩國と聞いて懷かしい。どうぞ茂兵衛が、首尾ようしてくれればよいかなア。

手代　それは直ぐに出來まする。高であつちは貧乏人の娘でござりまする。

同　昨日ちよつと樣子を聞いたが、あつちら娘も若旦那に、ちと氣があるやうな。

同　向うも惚れて居るに違ひはない。

同　若旦那、何んぞ奢つてもようござりませう。

孫太　また其やうにじやら〳〵と云ふわい。併し、マア、どう云ふ緣やら、フッと見た所から、急にわしが女房に欲しうなつたが、どうも我が身ながら合點がゆかぬ。その上、昨日から好きな書物も打ちやつて、此やうに帳合ひして居るうちも、紙袋が娘の顏に見えてならぬ……アア、南無三、帳面を灰墨にした。

手代　これは怪しからぬ事だ。どのやうな娘御が知らぬが、今の今まで嫁は持たぬと仰しやつた若旦那が、打つて替つて急に嫁の相談。

同　どのやうな娘か

皆々　早く見たいものだなア。

ト奧より、おあき後家の拵らへにて、下女二人付き添ひ出る。

孫太　これはしたり、母樣には端近う、なんぞ御用でござりまするか。

あき　イヤ〳〵、何も用はないけれども、いつぞやからのこの眼病、奧に居ても氣詰りゆゑ、それゆゑに。

下女　ちと又、店先で皆さんの聲でもお聞きなされたら

同　又お氣が晴れてようござりませう。

孫太　成る程、いろ〳〵とこの店へ、買ひ物にござる衆の聲でもお聞きなされたら、お氣が晴れてよろしうござり

ませう。何を云つても、いつぞやからその病氣。藥は家の商賣柄、效きの好い物は……イヤ、好い藥がござりましたら、ツイようなりませう。マア／＼、お靜かに御養生が肝心でござりまする。

あき　イヤモウ、一旦このやうに盲目になつたれば、これで果てるも構はぬが、兎角其方の獨り身が苦になつて居ましたに、昨夜茂兵衞が云やつた嫁の事、相談は出來さうなかいなう。

孫太　私しもこれまでは、兎や角と申して居りましたが、どうした事やら、急に貰ふ氣になりましたが、これからわたしの身の納まり、付いてはあの娘なら、あなた樣の側に置きましても、キツとお氣に入りませうと存じまして。

下女　それはよろしうござります。兎角御新造樣がござりませぬと

同　私しらまでが、大抵惡い事ぢやござりませぬ。

あき　善に急げとやら、一日も早う日を選み、どうぞ婚禮させたいもの。

孫太　そりや、あなたが仰しやるまでもござりませぬ。私しが急いで……茂兵衞が參りましたが、大方首尾して歸りますでござりませう。

ト この時、向うより、若黨二人先に立ち、挾み箱・草履取り、供廻り、大勢付き添ひ、長棒の乘り物、陸尺が舁き出て、直ぐに門口へ下ろす事。

若黨　お頼み申しませう／＼。

手代　ヘイ／＼どなたでござりまする。

若黨　藥種問屋、永樂屋孫太郎とはこれかな、

手代　左樣でござりまする。

あき　お客樣があるさうな。ドレ、奥へ參りませうか。

孫太　お危なうござりまする。

ト 下女に手を引かれ、おあき、奥へ入る。若黨、乘り物の側へ行て

若黨　永樂屋孫太郎が宅は、即ちこれでござりまする。

ト 乘り物の戸を開く。内より宗庵、上下大小にて、御殿醫の拵らへにて、悠々として出て來る。

宗庵　皆の者、暫らく休息しやれ。

供人　ハツ。

ト 皆々下手へ扣へる。宗庵、澄して

宗庵　許しやれ。

ト 二重へ上がる。孫太郎、手をつかへ

孫太　お見受け申しますれば御大身様、見苦しいこの店先へ、なんぞ御用でござりますか。
宗庵　其方は當家の御主人か。
孫太　ヘイ、左樣にござりまする。永樂屋孫太郎にござりまする。して、御用の趣きは。
宗庵　イヤ、別儀でもないが、拙者鎌倉の殿醫、栗林玄瞻と申す者でござる。
孫太　御高名は兼ねて承りましたが、大身の御用は、定めてお藥の儀でござりませう。藥種屋の面目、有り難い仕合せにござりまする。
宗庵　イヤ／＼、さのみなる用向きでもござらぬが、どうも外々の藥種店には、ちと調へ兼ねる品ゆゑ、それで尋ねに參つた。
孫太　有り難う存じまする。ソレ、お茶を差上げぬか。
手代　畏まりました。
ト茶臺にて茶を持つて行く。宗庵、取つて
宗庵　イヤ／＼、構やるな／＼。
孫太　して、御用の品は、どのやうな物でござりまする。
宗庵　外の儀でもござらぬが、ちと懇意にいたす浪人がござつて、これに至つて難病がござる。これは拙者でなければ出來ぬ療治、國元にてはその藥調へあれど、道中の事ゆゑ、それが當家へ調へに參つた。別の品でもござらぬ、鐵酒藥にもある物ぢやが、冬蟲夏草と申す物はあるかな。
孫太　隨分調へ居りまする。兼ねて左樣な品は手前の店に
宗庵　サア、さうあらうと思うて、わざ／＼參つた。見せてくりやれサ。
孫太　畏まりました。ソレ、藏へ行つて取つておぢや。
手代　ハイ、畏まりました。
ト奥へ入り、直ぐ持つて出る。孫太郎、受取つて
孫太　即ちこれでござりまする。
宗庵　紛れ物ではあるまいなア。
孫太　極正銘でござりまする。
宗庵　ドレ／＼、身共が拜見すれば相分る。
ト箱を開け見て
よし／＼。こりや正銘に相違はない。して、代金は。
孫太　これで金三十兩で、誠におまけでござりまする。
宗庵　三十金、承知いたした。今日はちと外へ出て歸りゆゑ、金子も持參いたさねば、夕方近習の者を取りに遣はすでらう。それまでは納めて置きやれ。

孫太　有り難うござります。何卒お願ひ申しまする。
ト宗庵、懐中より金包み取出し
宗庵　これは手附け金、些少なれど納めて置きやれ。
孫太　それには及びませぬ。ヘイ〳〵、有り難うござりまする。これはお受取でござりまする。
宗庵　それには及ばぬ事を。
ト云ひ〳〵受取を懐中する。
孫太　晩方御旅宿まで、此方より差上げませうか。
宗庵　イヤ〳〵、この儀はちと内々ゆゑ、別段に此方より人を遣はすであらう。
孫太　左様ならば、その節差上げませう。併し、この冬蟲夏草は、いろ〳〵お遣ひ道がある物さうにござりまするが、此やうに澤山お遣ひなさるゝは、どのやうな御病氣でござりまするな。
宗庵　イヤ、この病は、ちと仁術家にては他言いたし憎い病でござる。
孫太　ヘイ、それは餘程御難病と見えまする。併し、私し方も商賣向きゆゑ、心得にも相成りまする。どうぞお聞かせ下されませう。
宗庵　成る程、心得の爲とあれば、話して聞かさう。拙者若年の砌り、醫道修行に諸國遍歴いたして居つた際の朋友が、當所に居るゆゑ、久々にて對面いたしたるところ、彼の者が申すには、少し遁がれぬ仲合ひの者が娘が、むづかしき病氣ゆゑ、段々右の朋輩より頼みにて。某に見分けくれよとあるゆゑ、餘儀なく見ましたるところ、聞きやれ、その娘は貧しい浪人の娘、至つて容顔美麗、最早嫁入り最中の時分、平生は何事もないが、爰がむづかしい病でござる。
孫太　ヘイ、どのやうな病でござりまするか。
宗庵　その病は、世に云ふ轆轤首と云ふ病でござる。
孫太　エ、〳〵。
ト悄りして、皆々思ひ入れ。
變つた病氣でござりまする。申し、其やうな病氣が、本當にあるものでござりまするか。
宗庵　あるとも〳〵、さる書き物にもござる。拙者も餘りの事に呆れましたが、その親が涙を流して取付きまして段々との我れへの頼み。何かこの節、金の入用向きにて右の娘御を、急々嫁に遣はすさうな。それゆゑ右の病が癒るまいかと、段々との頼み、尤も當所に數多き醫者はあれども、むづかしき病氣ゆゑ、我れへの頼み、爰が世

に云ふ醫は仁術なりとでござる。それゆゑ拙者、家にも傳へし、右轆轤首を癒す、至つて妙法がござるゆゑ、この多蟲夏草が、その藥法の土臺でござる。まだ〳〵その上に、もそつと入用がござる。併し、この儀は當所は廣うござれば、パッとなつては、彼の者の一大事、必らず他言は御無用でござるぞや。

孫太　ハテ、世には似た事もあれば……イエ、世にはいろいろの病がござりまするなア。

宗庵　イヤモウ、痛々しい儀でござる。

孫太　して、その御浪人は、矢張り當所でござりまするか。

宗庵　左樣でござる。只今にては横網邊に住居いたして居りまする。

孫太　アノ横網邊に……ハテナア。

宗庵　不思議な病もあればあるものでござる。

孫太　それは變つたお話しでござりまする。して、その御浪人のお娘御と云ふは、横網邊で、お名は何と申しまする。

宗庵　それはどうも、しかと申しては、先方の身柄に拘はる儀。この儀ばかりはどうも。

孫太　成る程、左樣でもござりませうが、私し店に於きまして商賣柄、なか〳〵他言は仕りませぬ。仲間一同の固めでござりまする事ゆゑ、なんと仰しやりましても、その事に付きましては、決して他言は致しませぬ。その譯は斯樣でござりまする。私し店は先祖より、高金の藥を賣りまするが、藥の御用に付きまして、段々子孫に傳へまするが家風、なか〳〵他言は仕りませぬゆゑ、とてもの事にその名所を。

宗庵　成る程、左樣な事もあらう。然らば申さうが、その浪人は、當時横網に住居なす、名は赤松梅柳と申す者。

孫太　エ、、、。

ト恟りする。宗庵、思ひ入れあつて

宗庵　渡世は……娘の名は、慥かにおさんと申した。

孫太　そんなら、そのおさんと云ふは轆轤首で。

宗庵　ア、、不便な儀ではござらぬか。兎角他言は御無用でござるぞや。

孫太　他言どころか、事に依つたら……イエ、決して他言は仕りませぬ。

宗庵　然らば最早お暇申さう。

孫太　左樣ならば、お藥は後程……有り難う存じまする。

ト宗庵、乘り物に乘る。孫太郎、見送り出る。

宗庵　お世話でござつた。
ト宗庵、思ひ入れ、乗り物の戸を締める。供廻り付添うて入る。
孫太　思ひがけない娘の難病。これでは思案を……ハテナア。
手代　どうやら今の話しの様子では、もしや此方の轆轤首より、犀角を取つて來ようか。
同　わしも一緒に藏の出し物。
同　ソリヤ、轆轤首ぢや。
皆々
ト皆々納戸へ入る。あと合ひ方になり、孫太郎、始終思案のこなし、この時、茂兵衛、前幕の拵らへにて、出て、花道好き所にて、立ちどまり
茂兵　さてマア、どうやら斯うやら約束は出來た。これから又御親類方へも、ちよつとお話しをせねばならぬ。忙しい中で、それもわしが行かずばなるまい。併し、それも日頃から、旦那大切と奉公をするお陀には、お得意先は勿論、御親類方へ行ても、一通りの奉公人あしらひにはして下さらぬ。有り難い事ぢや……イヤノ\、こんな事を云つて居る所でない。早く若旦那樣や御隱居樣を、お喜ばし申さねばならぬ。
ト本舞臺へ來て門口より
若旦那樣、爰においでなされまするか。早速ながら、彼の方へ參りまして。
孫太　茂兵衛、いま歸りやつたか。大儀々々。
茂兵　ヘイ\/、彼の方へ參りましたところが、大上々の首尾でござりまする。ほんに、あなたが仰しやつた金の事も、話しを仕りましたところが、物堅い先の親子。やうやう納得させて、晩には直ぐに金を持つて、參る筈にして置きました。
トこの時、奥よりお秋、探り出て
あき　オヽ、茂兵衛、戻りやつたか。早速調うた樣子。大儀々々。わしも嬉しうござるわいの。
茂兵　イヤモウ、御隱居樣、此やうな嬉しい事はござりませぬ。
あき　コレ、孫太郎、其方は望みの嫁が出來て、さぞ嬉しからうなう。
茂兵　申し旦那、私しを褒めて下さりませ。
孫太　なんのこれが嬉しからう。
あき　なんと云やる。
孫太　イエ、成る程嬉しうござります。早速茂兵衛が行て

くれたところが、たつた今聞きました噂のなア。
あき　ヤア。
孫太　イヤサ、その好い噂さを聞きまして、此やうな嬉しい事はござりませぬ。
あき　さうとも〳〵。此やうな事は、直ぐに物事をサッサと片付けるがよい。悴、早うその支度金を、持たせてやりやいなう。
孫太　ハイ、よろしうござりまする。それは茂兵衞が、キツと請合つた事でござりますれば、晩に遣はすでござりますが、マア、あなたは店先で、風が當つてはお目の毒マア、奥へお出でなされませ。これから茂兵衞と、相談を致しまして遣はしまする。
あき　そんならさうしてたも。兎角年が寄ると、心が急いてならぬわいなう。
孫太　ハテ、何にしても、貰ひまする嫁。今にあなたに御安心いたさせまする。
あき　嬉しうござる。そんなら茂兵衞、大きに御苦勞であつたなう。
　ト云ひ〳〵、お秋は納戸の暖簾口へ入る。あと兩人殘り

茂兵　時に、さうなりますと、今晩私しが支度金を持つて參りませう。先でも何か急に、金の入用があるとの事。支度金を持參いたすと、直ぐにどこぞへ假親を致す積りに、話して參りましたが、あなたはどう云ふ思し召しでござりまする。
孫太　そりやモウ、其方に諸事任せて置いた事ぢやに依つて、どうでもよいが。
　ト云ひ〳〵ちよつと思案して
矢張りさうせねばならぬかや。
茂兵　あなた、何を仰しやりまする。
孫太　それは、なんぢや。ソレ、わが身、よいやうにしやと云ふ事いなう。
茂兵　左樣なら、百兩の支度金、どの金を遣りませう。
孫太　それも其方に任せてある事。どうなとしたがよいわいなう。
　ト始終思案しながら返事して居る思ひ入れあり。
急ぢや〳〵。
茂兵　どうでござりますな。
孫太　コレ茂兵衞、其方、大儀ながら、もう一度先へ行てもらはにやならぬ。

茂兵　そりや仰しやるまでもござりませぬ。晩には是非とも參りまする。
孫太　イヤ〳〵、たつた今ぢやわいなう。
茂兵　そりやマア、何しにでござりまする。
孫太　その用と云ふは、この相談を變替へして來てもらひたい。
茂兵　エヽ……そりや又なぜでござりまする。
孫太　その譯は、あの娘はろ
茂兵　ナニ、ろとは、そりや何事でござりまする。
孫太　エヽ、解らぬか、轆轤首ぢやといなう。
茂兵　エヽ、ハヽヽヽ、譯もない。そりやあなた、何を仰しやりまするぞいの。
孫太　サア、確かな證據は今の先、鎌倉の御殿役、栗林玄膳さまと云ふが、冬蟲夏草を買ひにお越しで、この藥を用ふるは、轆轤首の娘があると、餘所事の噂。どうも不思議な病と思ひ、段々名所を尋ねたところが、他言はするな、ぢやが斯う〳〵と、話しを聞けばあの娘ぢやわいなう。
ト向うへ指をさして
ト茂兵衞、身慄ひして、悄りする思ひ入れ。

茂兵　エヽ……そりやマア、本當の事でござりまするか。
孫太　なんの嘘を云はうぞ。それぢやに依つて……生きても死んでも、其やうな女房は持てまいではないか。
茂兵　成る程、さう仰しやれば、そんなものなれど、折角約束したものを、先樣も堅い侍ひの果……そんならよく首の周圍を、見て來たらよかつたもの。
孫太　イヤモウ、斯う云ふうちも、どうやら氣味が惡い。どうぞ早う變替へして來てたもいなう。
茂兵　そりやモウ、行きます事は行きますが、どうも今さら。
孫太　そんなら嫌ぢやと云ふのか。
茂兵　イ、エヽ、さうではござりませぬが。
孫太　さうでなくば、早う行てたも。
茂兵　エ、儘よ。これがほんの主と病。
孫太　病と云ふも事に依る。其やうな者を糺さずに、約束したはわが身の不念と云ふのも。ちつとも早う行つて來てたも。
茂兵　なんだかちつとも譯が解らぬ。
トこの時、丁稚、花道より走り出て
丁稚　サア〳〵、大事だ〳〵。最前約束した娘は、變替へ

だ變替へだ。
茂兵　エヽ、やかましい。今その事で相談して居る所ぢやわい。
丁稚　そんならもう内に知れてあるか。惡事千里ぢやなア。
茂兵　われはマア、その事をどうして知つた。
丁稚　サア、最前お前に別れてから、使ひに行つた戻りがけ、横網の湯屋の前に、大勢人がたかつて居るゆゑ、覗いて見たら、女の盜人。どんな奴かと思つたら、最前貰ひに行た占ひ者の娘が湯屋泥坊、それを知らせに戻つたのサ。
孫太　ナニ、あの娘が湯屋で盜みを……イヤ、それ聞いては猶々嫌ぢや。
茂兵　轆轤首の上に盜人と云ふ、二つ商賣があつては、こりやいよ〳〵變替へに行かねばならぬ。折角約束したものを。
孫太　變替へするも、これも浮世の
茂兵　不思議の難病。その上、湯屋泥坊では世間の手前。
孫太　それで此方の注文通り……サア〳〵、變替へしてたも〳〵。
茂兵　こりやモウ、困つた事ぢやなア。

トこれにて、丁稚、奥へ入る。茂兵衛、羽織着て、花道へ行きながら
なんの事ぢや。昨日兩國の廣小路で、女嫌ひの若旦那、あの娘を一目見ると、急に貰ひに行てくれと、ヤレ行けソレ行けとせり立てられ、折角貰つて來たものを、また變替へに行けとは、なんぼお主の云ひつけでも、先も武士の果なれば、どのやうに逆捲ぢを云はうも知れぬ。なんと云つて變替へしたらよからうなア。
ト手を組み思案して、ソロ〳〵行くを、孫太郎呼びかけ
孫太　エヽ、まだ行かぬのかいなう。
茂兵　いま行きかゝつて居りまする。
ト唄になり、向うへ入る。孫太郎、一人殘つて
孫太　世の中には、いろ〳〵の事もあるもの。昨日、兩國の廣小路で、計らずも、見染めた娘、病氣があるとは不思議事……直ぐに變替へしたならば、先に支度の金の入用、何かに詰つて
ト思案しながら、二重へ腰かけるが木の頭にて
どうぞ首尾よう、變替へして來ればよいがなア。
トこの模様よろしく、稽古唄にて道具廻る。

本舞臺、前幕の赤松梅柳の内、世話場になり、茂兵衞、向うより出て、花道よき所にて立ちどまり

茂兵　思案しながら、ウカ／＼と歩いて來たが、ツイ爰の表まで來た。こりやマア困つた事ぢや。若旦那もいつその事、貰はつしやればよいに。折々首が屛風の上へ出て煙草の火でも消えた時、吸ひつけさせるのに勝手がよささうなものだがなア。併し、女房に持てば、餘り氣味のよくないものであらう。矢ッ張りこりや變替へがよからう。併し、なんと云つて斷わり云つたものであらうなア。

ト門口へ來て、内を覗き、誰れも居ぬゆゑ、出たり入つたり。いろ／＼あつて

てんぼの皮、やつて見よう……お頼み申しまする。

梅柳　どなたでござるな。

ト梅柳、納戸暖簾より出て、茂兵衞を見て

ヤ、これは／＼、永樂屋の番頭どの、ようこそ／＼。

茂兵　あんまりよくも參りませぬ。

トもじ／＼して居る。

梅柳　先刻は有り難うござつた。イヤ、其やうな御遠慮に及ばぬ事。そこは端近、其許達の家も同然。サア／＼、爰へ／＼。

茂兵　ヘイ／＼、これが勝手でござります。

梅柳　イヤモウ、先刻お歸りありし後にて、娘とも申し合せ、大きに喜び居りました。さて／＼有り難き儀に存ずる。

ト無性に梅柳喜ぶ。茂兵衞、氣の毒なるこなしあつて

茂兵　ヘイ／＼、左樣仰せられますと、とんと私しが申しまする事が出來ませぬ。先刻歸りがけに、親類の中に、至つてむづかしい人がござりまして、親類衆へ立寄りましたところが、段々と話し致しましたところが、相性を見分けられまして、したところが相性が……へ、、、それで御挨拶に參りました。

梅柳　イヤ／＼、その相性なぞは、ほんの下世話の口と申するものでござる。必らず彼の相性なぞは、取上ぐべきものでござらぬ。

茂兵　サア、そこでござりまする。私しなぞは、とんと頓着は致しませぬが、むづかしい御親類ゆゑ、どうもこの度の事は申さぬ昔と、一先づこの儀は。

梅柳　ア、コレ／＼、番頭どの、なんと云はつしやる。

然らばこの縁談は、破談に及ぶと云はつしやるか。

茂兵　ヘイ、御意にござりまする。只今申しまする通り、親類どもがいろ〳〵申し……そこが云ふに云はれぬ

梅柳　エヽ、默らつしやれ。それぢやに依つて初めから、そぐはぬ縁談と此方より、辭退いたしたではないか。それを達てと所望ゆゑ、おてまへと拙者、詞を番ひ申したでないか。浪人こそすれ以前は武士、相應の知行も取つて居つた身共、殊には近邊の橋渡しに參つた女中の手前、一人の娘に疵を付け、お身達それで濟むと思ふか。この趣き、早く立歸つて其方の主人に、とくと申し聞かしやれ。異議に及ばゞ、拙者推參いたさうか。

茂兵　マア〳〵、お待ちなされて下さりませ。なか〳〵お娘御に疵を付けると云ふやうな儀はござりませぬ。その疵と云ふは首の……イヤ申し、なんにも疵があると申すのではござりませぬ。いま申しまする通り、相性が惡いと申すまで。左樣な時は、ひよつと娘御樣にさゝわりにでもなりましては如何と存じまして、先づ一旦變替へ申して來いと、主人が斯樣に申しましたゆゑ。

ト段々尻込みして云ふ。梅柳腹立て

梅柳　エヽ、くど〳〵と、何も譯を云ふにも及ばぬわえ。

茂兵　ヘイ〳〵、これはきついお腹立ち、左樣ならば斯う仕りませう。私しも近々別宅を仕りまする。なんと物は相談でござりますが、いつその事私しへ、お娘御を女房に、申し請けては如何でござりまする。

梅柳　ナニ、其方の妻に。ハヽヽヽ、成る程なア。町人と云ふ者は、金銀才覺の外は思案も分別もない者。殊にてまへのやうな者が支配人番頭のと、店を預くる主人の器量、奧間かうより口開けと、何を云ふやら他愛のない町人の魂ひ、その一言で腹立てるにも及ばぬ。其方より此方が不承知だ。さう云ふ事とは存ぜずして、娘が出世ニつには、無くて叶はぬ金子の事……イヤ、云ひ譯くど〳〵云ふに及ばぬ。キリ〳〵早く歸らつしやれ。

ト顏を背向け、煙草のみ居る。茂兵衞、頭を掻き、手持ちなきこなし。この時、花道より

大勢　泥坊だ〳〵。叩き攫れ。

トわや〳〵云ふ。角兵衞獅子の鳴り物になり、向うより、おさん、着付け破られ、少し髮を亂し、後より、おとら、湯あがりにて、手に釼を持ち出る。後より、湯屋の若い者大勢、薪雜把を持ち、下駄など持ち出るもあり、花道よき所にて、立ちとまり

若者　女の癖に酷い奴だ。
同　この間着物を取つたも、此奴に違ひない。
同　顔に似合はぬ、えらい事をする女だ。
同　以後の見せしめに、兩國橋の上から抛り込まうか。
大勢　よからう〳〵。それがいゝ〳〵。
ト立ちかゝるを所へ、小梅、出て、いろ〳〵思ひ入れあつて
小梅　マア〳〵、待たしやんせ。この女子に限つて、なんの其やうな事があつてよいものか。ひよつと人違ひぢやと、物堅いこのお子の父御さん、お前方、後で云ひ譯があるまいぞえ。
とら　なんのマア、人違ひしてよいものか。お前はこの子と心安いゆゑ、贔屓をさんすけれど、證據のない事云ふものかいなア。
若者　爰でそんな事云はずと、親御の內へ連れて行き、この由を斷わつて
皆々　代官所へ連れて行け〳〵。
とら　さうだ〳〵。わたしが云ひかけしたやうで、後で濟まない。內へお出でよ。
ト皆々ワヤ〳〵云ひながら門口へ來て

サア〳〵、內へお入り〳〵。
トおさん、泣き居るを、無理に內へ突き入れる。おさん、俯向いて居る。小梅、おとら、內へ入る。大勢、門口にて捨ぜりふあり
梅柳　こりやお長家の衆、何事でござりまする。
小梅　サア、今の先湯屋で、このお子がおとらさんと、何やら諍ひをさんしたゆゑ、ひよつとお前さんのお耳へ入れると惡いと思つて、取りさへて居る所でござんすが、なんにもこのお子が、知つての事ぢやござんせぬわいなア。
ト云ふを打ち消し、小梅を突き退け、おとら、出て
とら　エヽ、コレ、さうぢやない。高が斯うでござんす。最前このお子とわたしと、二人で湯へ行つたところが、湯の中で若い衆が、じやら〳〵云つて居るうち、フッとわたしの簪が、湯の中で無くなつたと思はしやんせ。それからいろ〳〵尋ねてもらつても知れず、今日は又わたしも、ちよつとめかさにやならぬ譯があつて、捜して居たこの前差し、毎日〳〵姫御前のあられもない、蛇を口に入れたり、頭へ載せたりするも、此やうな物を頭へ載せたいばかり、其やうな思ひをして、やう〳〵後の月、横山

町の上傳の若い衆を騙くらかして、後は暫らく待つてもらふ積り。まだ半金も濟まぬうち、この前差しが無くなつたので、氣狂ひのやうになつて探したら、この子が取つてこの袂に

　トおさんの袂を荒く引ッ張り

入つてあつたわいなア。道理でこの間から長家中で、前掛や銀の簪が、大分見えぬと云ふ噂。大方みんな、おさんさんの仕業であらうわいなア。

梅柳　ナニ、娘が簪を。

皆々　なんと野太い奴ぢやないかい。

とら　取返したからこれでよいけれど、後でわたしが云ひ掛けしたと云はぬやうに、斷わつて置きますぞえ。

若者　もう堪忍してやらうかい。

さん　皆さん、どのやうに云はしやんしても、此やうな物取つた覺えはござりませぬ。皆さんの手前、わしや面目ない〳〵。

とら　いくらお前が庇つても、論より證據はこの簪。それになんだ。面目ないも凄まじい。面目なけりや人の物を盗まないがいゝ。まだしも取返しただけがわたしの仕合せ。ドレ、お燈明でも上げようか。

　トおとら、長家へ入る。皆々捨ぜりふにて向うへ入る。茂兵衛、此うち、氣の毒なこなし、後に扣へ居る。梅柳、おさんを引寄せて

梅柳　ヤイ娘、コリヤ、大それた事しをつたなア。さう云ふわれが心ゆゑ、天道樣がお憎しみ、縁談も今この仁が變替へにござつたわやい。

さん　エヽ。

小梅　そんならお前は、變替へにござんしたかえ。

茂兵　只今の仕儀は何も存じませぬが、相性が惡いとあるゆゑ、それでこなたへ縁談の儀は變替へに。

小梅　そりやマア、どう云ふ譯か知りませぬが、折角出來たあの話しを、今さら變替へさしやんしたは。

茂兵　それには段々樣子のある事。イヤサ、云ふに云はれぬ親類衆の不得心。

　ト小梅に後で云ふと云ふ思ひ入れ、小梅、呑み込み、思ひ入れ。此うち、茂兵衛、門へ出る。

小梅　折角マアお二人ども、好い縁談で嬉しいと、わたしらまでも共々に、喜んで居たものを、こりや困つた事ぢやなア。

　ト茂兵衛、外より小梅を手招きする。小梅、捨ぜりふ

にて、門口へ出る。

茂兵　ちよつとお前の内へ寄つてもいゝかえ。

小梅　そりやようござんすが、爰の事が。

茂兵　ハテ、その事は、あの娘が

ト首へ思ひ入れ、小梅、解らぬ思ひ入れ。茂兵衛、氣を揉み云ふ。

なんであらうと、お前の内まで。

小梅　そんならわたしや、いま直ぐに來る程に、必らず叱つて上げて下さんすなえ。おさんさんも、堪忍しなさんせえ。

ト門口へ出る。茂兵衛、小梅の側へ行く。

首とは一體、なんの事でござんすえ。

茂兵　なア、ソレ。

ト茂兵衛、囁き、小梅、身慄ひする思ひ入れ。

解つたかえ。

ト兩人、こなしあつて長家へ入る。梅柳、立つて奥へ行かうとする。おさん留めて

さん　申し父さん、マア待つて下さんせいなア。

トおさん引留める。これにて合ひ方になり

いま聞けば永樂屋から、わたしの緣談變替へとは、どう云ふ譯やら知りませぬが、いま風呂屋でのねだり事。わたしやフッツリ知らぬ事でござんすけれど、あのおとらさんが疑つて、わたしが着物を無理無體に、尋ねて居やしやんしたその時に、どう云ふ事やらわたしの袂に、簪があつた時のわたしが術なさ。それから後は寄つて集つて打ち叩き。それは元よりいとはねど、これでも元は武士の胤、小太刀持つ手も折々は、敎へてもらうた今日までも、腹立つ事も堪忍して、身を守るのが武士の作法と、よう得心して居るゆゑに、天道樣が御存じならば、取らぬわたしが心は潔白、この身は恥とは思はねども、お前の顏の汚れるのが、わたしや悲しうござんす。どうぞ堪忍して下さんせいなア。

トおさん、泣き落す。梅柳、涙を拂ひ、こなしあつて

梅柳　どのやうに悔んだとて、返らぬ繰り言。身共は知らぬ。其うちに、向うに知つて變替へにござつたは、彼方の道理。おのれは母の遺言ゆゑ、繼母にかけまいと、我が手で育てたこの年月。また親育ちと甘やかし、我が仕付が惡るいゆゑ、其やうな性根になつたかと、さぞ冥途から女房が、恨んで居らう。先づそれよりは差當る、墨附の質請け。出さねば最早この身の破滅。

ト梅柳、死なうと云ふ思ひ入れにて立ちあがる。

さん　ア、モシ。

ト袂を捉へる。その手を振り切り

梅柳　不孝者めが。

ト唄になり、梅柳、愁ひの思ひ入れ、奥へ入る。あとにおさん見送り

さん　ワアヽ。

ト泣き落す。この時、暮れ六ツになり、鐘打つ。

尤もでござんす。今は兎もあれ以前は武士、彼の質請けの事。わたしも生先のある身でありながら、恥の上の恥をかき、所詮世間へ出られぬ體。せめては今宵の質請けを、延してもらうて外へ渡さぬのが、父様へ一つの申し譯。エヽ、どうぞ仕様はないかいなア。

ト俯向く拍子に頭の簪落ちる。これを取り見て泣き落す。時の鐘、早き合ひ方になり、よろしく、道具廻る。

本舞臺。長家奥の體。上手、二階造り、これに障子立てある。前側黒塀。これに椿の枝、前へ出てある。この前に芥捨て場、後にこれを臺にして首をつる思ひ入れある。眞中に長家出入り口にあり、下手に長家の雪隠二つある。この後、矢張り黒塀。時の鐘にて道具とまる。

ト仕出し出て、淨瑠璃の有る筋を云うて出て通り、上手へ入る。おとら出て

とら　今夜は暗い晩だ。鼻を撮まれるかも知れないよ。

ト縄に躓き、こけようとして

オヽ危ない。悪い所に縄を引ッ張つて置くかは、さてし奥の隠居が何と乾かはたと見える。斯う云ふ所に置くと、誰れでも怪我をするよ。

ト縄を好き所へ拋り、雪隠へ入る。上手の切り戸より、おろい、手燭持ち出る。後より、助四郎、羽織着流し庭下駄を穿き、酔つたる體にて、出て來る。口に楊枝を啣へ出る思ひ入れ。

ろい　お危なうございますぞえ。

助四　裏長家と云ふものは、勝手知れぬと歩かれるものではない。どこぢや〳〵。

ろい　雪隠は爰ぢや〳〵。

ト獅子はどこぢやのやうに數へる。

助四　爰か〳〵。

とら　エヘン〳〵。
　ト内にて、おとら、咳拂ひをする。
助四　ホイ、お客があるさうな。
　ト下手の雪隠へ入り、戸を締める。この時、上手二階にて
小梅　太夫さん、お暑うござりませう。簾を上げようわいなア。
　ト知らせに付き、簾巻き上げる。淸元連中並び居て、これより、淨瑠璃になる。
〽飛鳥川、昨日の淵は今日の瀨と、淺い契りもいつしかに、深うなつては行き迷ふ、道は幾筋一筋の、思ひは磯に啼く千鳥。
ろい　今夜は裏の小梅さんの所に、淨瑠璃があると云つたが、佐久間町の家元と、横山町の兩師匠だ。ほんに女殺しと云ふ聲だねえ。
　トおとら、雪隠より出る。
とら　おるいさん、明りを、お相伴するぞえ。
ろい　おとらさん、入つて居たのはお前かえ。
　ト下手の雪隠より、助四郎、出て來り
助四　道理でえらい響きであつた。
　ト云ひながら水で手を洗ひ居る。
とら　オヤ好かないよ。わたしぢやありませんよ。
　ト捨ぜりふにて、上手の切り戸へ入る。あと淨瑠璃になる。
〽兼ねて覺悟はしながらも、思ひ切なれぬ愚痴と愚痴、これが名殘と今更に、逢へば別れの鳥が啼く。
　トこの文句、好き程におさん、愁ひのこなしにて、花道より出る。花道にて
さん　あの三味線は、鶴屋禮三の淸元節、常々深切にして下さんした、小梅さんの聲も、もう今宵が聞き納めか。ほんに思へばこの身程、世に味氣ない者があらうか。小さい時に母さんに死別れ、それよりお國の騷動にて、父さんとたつた二人で、辛い暮らしの其うちに、どうぞ父さんに樂させやうと、思ふ心が通じたやら、永樂屋から嫁入りの相談。ヤレ嬉しやと思ふ間もなう、直ぐに變替へ、まだその上に盜人の騙りのと、恥かゝされたはなんの罰、せめてこの身の命を捨て、お墨附の質請けを、延ばしてもらふやう委細の書置。わたしが死んだら父さんが、恥も自然と雪げる道理。
〽せめて未來でその事を、聞いているさの月の影、

ト此うち、本舞臺へ來る。淨瑠璃の切れに
人目にかゝらぬ其うちに、さうぢや〳〵。
〽身すがら忍ぶ春の夜の、更けるを待つた町外れ、女子心のやる方も、添ふに添はれぬ身の因果。影身を放れ死神の、後に立ち木この葉蔭。
ト此うち始終愁ひのこなし。上手の方におとらが棄てし繩に躓き、幸ひと云ふ思ひ入れ。椿の枝にかける。
〽この桃は、三千歳までの古事と、聞き及ぶとも味氣ない、今ぞ一期の我が命。如何なる宿世の因縁ぢやと、禮三が聲に。
小梅　そりや惡からう。
〽思ひがけない一聲に、後見らるゝ影法師、
さん　誰れぞ留めたと思うたが、ありや矢ツ張り淨瑠璃の文句であつたか。心の迷ひ、果敢ないこの身の終りぢやなア。
ト此の時、上手木戸より小梅、顏を出し
小梅　そこにござんすは、おさんさんぢやないかえ。
〽空も朧に薄墨の、薄き縁に見え分かぬ、目にも涙の雨となり。
トおさん、ウロ〳〵して、雪隱へ隱れる。小梅、あたりを見て
小梅　おさんさんの聲ぢやと思うたら、さうではなかつたさうな。
〽いとゞ思ひのいや增して、離れ難なき折柄に。
ト小梅合點のゆかぬ思ひ入れあつて、切り戸の內へ入る。淨瑠璃のうちに、浮いた合ひ方になる。六藏、ぶら提灯持ち、助四郎先に宗庵、おとら、おるい、三助、六藏、ワヤ〳〵云つて出て來る。
宗庵　物の見事に變替へをさしたは、この宗庵と云ふ軍師があつたゆゑぢやてな。
とら　續いて女ではわたしだよ。
助四　謀計は皆えらいものぢや。あの位に約束の出來た嫁入りを、變替へさすと云ふは、一體どのやうな事を云うたのぢや。これから道々
三助　テア〳〵、樣子が、聞きたい〳〵。
宗庵　イヤ、滅多には云はれぬ事だが、先づ概略は斯うだ。最前の通り、旦那にいろ〳〵手當させ、先づ着物から大小供廻り、すつぱりと拵らへ、鎌倉の御殿醫と出かけ、彼の永樂屋へ行つて、多蟲夏草を出せと云つて、これにて彼の轆轤首を癒すと云つたれば、先の聟めがどこのど

このと根問ひをしをる。そこでこの長家の浪人、赤松梅柳と云つたは、おさんと云ふ娘があつて、その娘が轆轤首だと、遠廻しに嘘を云つて、あつちの心を悪くしたのサ。

とら　それで行かねばわたしが計略。先刻にあの子が湯へ行つた、後からソッとつけて行き、簪を拔いて袂へ入れ、板の間稼ぎにした思ひ付き。

宗庵　皆コレ愚老が藥の盛り方。なんとえらいものであろうがなア。

ろい　そんならあの娘は、轆轤首でも盗人でもないかいなア。

助四　知れた事サ。斯うした後で、おれが情をかけてせしめる積りぢや。首尾ようゆけば、仲人なり親分なり

ろい　その後は又れこかえ。

ト　おろい、手にて丸を拵らへる。

宗庵　當り前よ。

三助　前祝ひに、直ぐにこれから。

六藏　旦那の内で、呑み明しとは有り難いねえ。

宗庵　併し旦那、愚老へのお手當はようござりまするかえ。

助四　それは歸りがけに川長で、一歩が肴と、鰻を三歩ばかり誂らへてくれ。

とら　どうして、この頭へそればかりの肴では足りませぬわいなア。

ろい　それに、大分に腹は北山ぢや。お酒の前に、ちよつと底が入れたいねえ。

助四　なんと、壽しの立喰ひとはどうぢや。

宗庵　こいつは洒落てをかしからう。

三助　洒落た上に又

六藏　大しやれとは、素敵でござりまする。

助四　サア／＼、行かう／＼。

〽奥の騒ぎも小夜更けて、今はひつそとなる鐘に。

トこの淨瑠璃のうちに、皆々向うへ入る。時の鐘打込む。

〽やがてこの身も捨て鐘と、數ふる數も七ツ八ツ、九ツこの世の別れ路も。

ト好き程におさん、雪隠より出て、手水鉢にて、手を洗ひ、向うをキッと見る。誂らへの合ひ方になり

さん　オヽ、そんなら嫁入り變替へも、風呂屋の事も、みな宗庵が助四郎と、云ひ合せし企みであつたか。エヽ

エ。小梅さんの一聲で、爰な思はず隱れて居たも、まだ神佛の見捨てはないか、我が身の上をちつとも早う、父さんにお知らせ申さん。オヽさうぢや〳〵。

〽今宵ぞ里の名殘にて、田の面の雁とをちこちの、廓を脫けて。

トきつとなる。おさん、よろしく花道へ走り入る。よろしく、道具廻る。

本舞臺、元の梅柳、世話場へ戻る。爰に梅柳、行燈の側に書置して居る。合ひ方にて、道具とまる。

ト梅柳、書置書きしまひ、愁ひの思ひ入れあつて、

梅柳　如何に浮世と云ひながら、泉州濱田家に仕へて、一旦百性一揆の科を請け、直さま歸參もあるべきところ、主家の沒落。それより所々を徘徊なし、今日につゞまる老の生恥……手がゝりの知れし墨附、金子に替ふべき娘の身は、破談に及ぶ緣定め。身貧の限り存らへて、恥かかんより潔よく、切腹なして死ぬるのが、せめて武士の潔白、この書置は後々で、狂氣して死んだなぞと、世の人口を防がんばかり。さりながらおさんめが、盜みをするのも皆貧ゆゑ。よく〳〵武運に盡き果てた、果敢なきこの身の成行きぢやなアア。

ト愁ひの思ひ入れ。門口を締め置き、掛金をかけ、行燈の側へ寄つて、切腹の用意にかゝる。この時、おさん、長家より走り出て、門口を明けようとして、明かぬゆゑ

さん　アヽ申し、父さん、もう寐やしやんしたか。モシ、爰明けて下さんせ〳〵。

トいろ〳〵捨ぜりふある。此うち、梅柳、刀を腹へ突ツ込み、引廻す事。

斯う云ふうちも心が急く。父さん、爰明けて下さんせ。最前の事は何もかも、明りは立つたわいなア。

トけはしく叩く。梅柳、段々苦しき思ひ入れ。

此やうに叩いても、明けて下さんせぬは、皆わたしの事を惡う思うて居やしやんすゆゑ。尤もでござんすが、わたしの明りは立つたわいなア。此やうに云うても肯のせぬは、どこぞへ行かしやんしたか。何にもせよ心ならぬ。申し〳〵、父さん〳〵。

ト焦り叩く拍子に掛金外れる。おさん、こけ込み、行燈に突き當り、灯を消す。梅柳、苦しきうちにて

梅柳　オヽ、娘か。

ト云ひながら苦しき思ひ入れ。

さん　オヽ父さん、さう云ふお前は。

ト探り〳〵、火打箱を取出し、行燈へ火を灯し見て

ヤア、こりやマア何ゆゑの、御切腹でござりますぞいなア。

梅柳　娘、其方が恥はこの身の恥辱。老の生恥掻かんより潔よう切腹するが、この身の本望。

さん　マア〳〵待つて下さんせ。わたしが嫁入り變替へも盜人の惡名も、皆宗庵が惡企み。わたしが側で聞くとも知らず、我れを忘れて話しの高聲。わたしが科は晴れてござんす。父さん、早まつた事して下さんしたなア。

梅柳　ナニ、すりや宗庵が惡企みにて。さては助四郎とやらへ取持たうと……永樂屋を變替へさせんと、彼奴めが企み。エヽ、それと聞いて心は晴れたれど、墨附も手に入らず、所詮長らへて詮ないこの身。娘さらば。

ト云ひ、刀抜かうとする。おさんその手に縋り付き

さん　この上は、わたしも共々。

ト差添に手をかける。梅柳、苦しみながら押しとめ

梅柳　コリヤ待て娘。何ゆゑ其方は

さん　わたしが事よりあなたの切腹。大事の〳〵親を殺し、どうしてわたしが。それぢやに依つて。

梅柳　コリヤ待て。死ぬる氣なれば惡者どもを、一々手にかけ、恨みを晴らしたその上で、死ぬるとも遲かるまじ爰で死ぬるは犬死なるぞ。

さん　それぢやというて、これがマア。

梅柳　我が切腹と聞くなれば、底氣味惡き惡者めら、影を隱すはこれ必定、高飛びなさぬ其うちに、片ッ端から打つて捨てよ。

ト梅柳、刀を抜き、おさんに渡す。おさん、受取り

親の恨みを晴らしくれるが、これ肝要。

さん　成る程、聞分けました。わたしもお前の娘ぢやもの、この上は後追ひかけて恨みの刃、その上一旦契約した永樂屋へ行て、この身の明り恥辱を雪ぎ、死んだなら縁を組んだる、そのお方への操も立つ。

梅柳　オヽ、出かした娘。

ト喜びながら、手箱を取つて

この箱は我れ日頃、心を盡せし周易の祕筆、家の系圖諸とも聟の內へ其方が手土產。

ト刀と共に手渡す。おさん、受取り、系圖を風呂敷に包み、思ひ入れ、箱の蓋取る。

さん　嬉しうござんす。常々お前の話しに聞いた、唐土の何某、女ながらも父の易を請けて、兄の敵を討つたる例。

ト云ひながら箱の中の御朱印を取出し

ヤ、こりや二千丁のお墨附。

梅柳　ナニ、二千丁のお墨附とな。ドレ、

トおさん、梅柳に見せる思ひ入れ。

詳に、疑ひもなき二千丁のお墨附。この品手に入る上からは、某が今際の安堵。これにて思ひ置く事なけれど、心がゝりは其方が惡名。永樂屋への聞えもあれば、宗庵めが首討つて、御朱印諸とも持參なし、請けし惡名雪ぎし上、永樂屋こそ濱田の分地、小泉家のお出入りなればその手より御朱印差上げ、濱田の再興願ふが肝要。

さん　すりや宗庵が首諸ともに、御朱印持つて。

梅柳　オヽ、逃げ延びぬうち、ちつとも早う。

さん　合點でござんす。

トつか〳〵と門口へ出る。この時、段助、出て

段助　その御朱印を。

トおさんにかゝる。ちよつと立廻つて引付ける。この時梅柳、苦しむ。おさん見て

さん　これがこの世の。

梅柳　未練な事を。

さん　さらばでござんす。

ト段助を其まゝ直ぐに内へ突きやる。段助、梅柳にかかる。よろしくあつて、おさん、門口を締める。木の頭にて、早き合ひ方、時の鐘にて、おさん向うへ走り入る。梅柳、段助を踏へ、よろしく落入る。ツナギ幕。

本舞臺、三間の間、二重。上手、障子屋體。下手、押入れ戸棚、納戸口暖簾かけある。二階造り、例もの所に門口あり、下手、黑塀、見越しの松。すべて、柳島、山形屋別莊の體。爰に、前幕の助四郎、宗庵、おるい、おとら、六藏、三助、皆々車座になり、酒肴を並べ、酒盛りをして居る。この見得よろしく、合ひ方、浪の音にて、幕明く。

るい　もうわたしは、少し酩酊でござんす。

とら　お酒の方では、引けを取つた事のないわたしも、三助さんや六藏さんには、太刀打は出來ぬわいなア。

宗庵　カウ、おとら坊、さう色氣つくつても、中々さうは拔けさせぬぞ。

とら　オヤ、そんな手管は食ひませぬよ。

助四　そりやア、先刻も云ふ通り、狂言の六法と云ふ間は當時新狂言の親玉だわい。
三助　宗庵さん、手前味噌は鹽が辛いよ、併し、今日の仕事ばかりは、なんと云はれても、操りの鬘位は引ッ張つて居るわい。
助四　カウ〱、威勢爭ひは後の事。マア、今夜は夜明しの大吞みとやらかさう。
皆々　そいつは譯なしでござりまする。
ト皆々酒盛りして居る。向うより、若い衆、袢纒三尺帶にて、ぶら提灯を提げ、手に鰻の岡持ちを持ち、男の拵らへにて出る。後より、おさん、手拭にて、顏を隱し、これに付いて來る。若い者、門口を明けて入る。
若者　ヘイ、鮒治でござりまする。大きに遲くなりました。
トこれにて、おさん、内に入り、後へ扣へ居る。皆々これに氣も付かぬ思ひ入れ。
六藏　オヽ、鰻屋か、べら坊に待たせたせ。
若者　ヘイ、つい取込んで居ましたで、遲くなりました。後の餡は直ぐに持つて參りまする。
三助　なるたけ早くしてくんなさいよ。
若者　ヘイ、畏まりました。
ト鰻屋の若い者、向うへ入ると、おさんを皆々見て
助四　そこに居るのは
皆々　誰れだえ。
さん　ハイ、わたしでござんす。
トおさん、手拭を取り、前へ出る。皆々顏を見て
宗庵　ヤア、其方は。
ろい　お前は長家の
さん　アイ、さんでござんす。
宗庵　物をも云はず人の内へ、なんぞ用でもあつて來たのか。
さん　アイ、惡名を雪ぎに來たわいなア。
助四　なんで惡名雪ぎに來たのだ。
さん　なんでとは助四郎さん、お前の胸に聞かしやんせ。
助四　胸に聞けとは、そりや何を。
さん　お前方の企みの次第を。
助四　ヤア。
さん　サア、一分立てゝ下さんせいなア。
ト眞中へドッカリ坐る。この時、宗庵、前へ出て

宗庵　何か様子は知らないが、不足らしい今のせりふ。此方こそこれまでに、酢だ蒟蒻だと幾度か。揚句の果には、恥をかゝし、引込みの惡いは釘屋の旦那だ。不足は此方に澤山あるのだ。

助四　さうとも〳〵、無駄骨折つて高見で見物。詰らないのはおれ一人よ。

ろい　ようマア爰へ厚皮な。

とら　來られた義理でも

兩人　ござんすまい。

さん　包む事は隱すとすれど顯はるゝと、根强う企んだ御殿醫で、橫山町の永樂屋へ、冬蟲夏草と云ふ藥を、求めに行つた話しの手續き。問はず語りの難病と、惡名付けて嫁入りの、變替へさせた一部仔什は、わたしが側で聞くとも知らず、お前の口から自身の白狀。それゆゑ爰へやう〳〵と、汚名を雪ぎに來たのぢやわいなア。

宗庵　一伍一什の魂膽を

とら　立聞きして、そんなら爰へ

皆々　來たと云ふのか。

さん　お前方の命を一々、わたしが貰はにやアならぬわいなア。

皆々　エ、。

宗庵　そんならわれがその事を

助四　殘らず聞いたか。

さん　なんと違ひはあるまひがな。

宗庵　それ知られたら破れがぶれ……ソレ。

トこれより、宗庵、おさんに切てかゝる。ちよつと立廻つて宗庵、肩先切られる。これにて、奥へ逃げて入る。これを追ひかけようとする。皆々よろしく留め、十人切りのやうの立廻り。いろ〳〵あつて五人まで殺し、宗庵、一人知れぬゆゑ、いろ〳〵探す事あり、この時、向うより、鮒治の男、岡持ち持ち、提灯を下げ出て來り、戸を叩き、明けぬゆゑ

若者　ちよつと開けて下さりませ、鮒治でござります。

トこれを聞いておさん、提灯持つて居るゆゑ、門口をソツと開ける。男知らずに入る。提灯取り、ポンと切る。その提灯持つて、いろ〳〵探し、押入れに音するゆゑ、押入れを開け、宗庵を引出し、逃げんとするを

さん　企みに企みしおのれが惡事。今こそ思ひ知つたるか

ト宗庵が首打ち落し、袖を裂き、首を包み、腰に卷き、これより直ぐにこの首を、永樂屋へ持つて行き、この

身の無實を雪ぎし上、番頭どのや孫太郎さまに、一部什什を物語り、また御朱印も手に入る上は、再び興す浦邊の家名。御最期ありし父さんも、草葉の蔭でお喜び。今ぞ晴れ行くこの身の上。エヽ、有り難やなア。

トおさん、空を拜む。この時、おろい、窺ひ居て

ろい　人殺し。

ト云ふを突き廻し、ポンと切る。おさん、好き見得にて、よろしく拍子、幕。ツナギ。

本舞臺、元の永樂屋になる。門口を締めし模樣、花道より、おさん、以前の形にて、走り出て、門口を頻りと叩く。この時、内より番頭茂兵衞、襦袢一枚にて、首筋に枕紙を付け、手燭を持ち出て、思ひ入れ

茂兵　なんぢや／＼。いま時分になんの用事ぢや。

ト云ひ／＼捨ぜりふにて出る。

さん　ハイ、急病でござりますゆゑ、どうぞ藥を下さりませ。

茂兵　なんぢや、急病ぢや。そんなら明けねばならぬわい。

ト云ふうち、おさん、忙しく叩く。茂兵衞、捨ぜりふにて、明けに出る拍子に、おさん内へ入る。茂兵衞、いろ／＼見て、おさんに行き當り、顏を見合せ、悄りして

ヤア、お前は今日の轆轤首ぢやないか。

ト思ひ入れにて、慄うて云ふ、

さん　ハイ、さんでござんす。

茂兵　ムウ、して藥と云ふは。

さん　ハイ、その藥の欲しいのは、これでござります。

ト宗庵の首を出す。茂兵衞、悄りして

茂兵　こりや、首ぢやないか。

ト茂兵衞、慄へて居る。

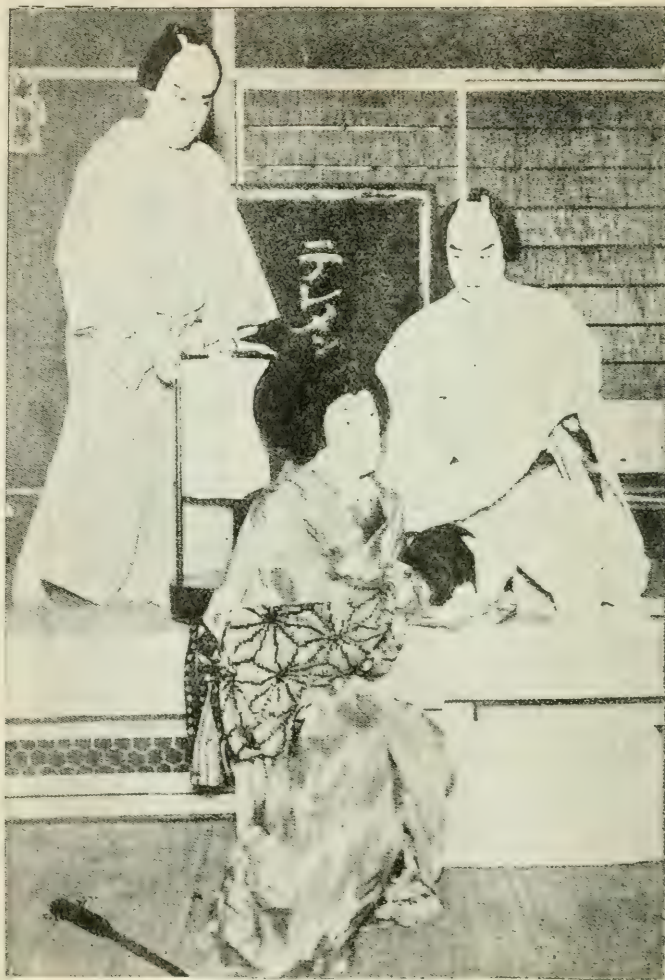
さん　これでわたしの惡名を、どうぞ雪いで下さんせ。

茂兵　ヤア、轆轤首が又首を持つて來た。

ト云ひつゝ悄りして奥へ逃げ入る。ト奥より、孫太郎出る。

孫太　イヤ、そのあかりは、わしが立てよう……女の切なる心から、只一筋に思ひ詰め、早まつたその有樣。この首こそは今日我が家へ來た、粟林玄膳さまの首。これにて明りを立ていとは。

さん　サア、その首に付き、わたしの身の上一通り、聞い

大正七年七月浪花座上演　　坂東壽三郎の孫太郎
中村雀右衛門のおさん　　實川延若の茂兵衛

て下さりませ……もと私しは、筋目正しき者の娘、フトした事にて父さんは御浪人。御主人のお家は沒落。心を碎くその折柄紛失の寶はあれど、大枚の金の要る事、兎やせん角やと思ふ折、フトこの家より私しを、嫁にとお望み、支度金で寶も戻り、父さんはお國へ歸參と、喜びし甲斐もなう、思ひがけないわたしが惡名、栗林玄膳とは僞わり、わたしが長家の按摩どの、助四郎が戀の叶はぬ意趣晴らしに、おとらおるいが云ひ合せ、わたしが難病あるやうに、噂をなして變替へさせ、又は盜人の惡名つけしも、みな惡人の企み事。わたしが居るとも露知らず、口走つたがこの身の幸ひ、明りを立てんと思ふうち、父さんはそれを悔み、わたしの留守に御切腹、口惜しいと思ふ女の一念、私しも武士の娘、父の敵は殺したなれど、とても死ぬ身の思ひ出に、一時たりとも嫁入りして、この身を捨てんと極めし覺悟。あの世にござる父さんに、それを土產にいたします。轆轤首の身の明り、これで立てゝ下さんせ、樣子と云ふは、この通りでござんすわいなア。

ト此うち、孫太郎、序幕に拾ひし守を見て、いろ〳〵思ひ入れあつて

孫太　そんならこなたは濱田家の、浦邊十内どのゝ御息女でござつたか。

さん　ても、よう御存じ。

孫太　そんならこの守は、こなたのであつたか。

ト　これにて守を出す。おさん見て

さん　こりやコレわたしが守り袋。これがどうして。

孫太　サア、その守は兩國にて、こなたを見染めたその時に、わしが計らず拾うたが、今の話しで何もかも、樣子は知れた。して、紛失のお墨附は。

さん　ふとした事にてわたしが手に入り、爰に持つて居りまする。

孫太　それさへあれば濱田家も立つ……元我れらは濱田家代々のお出入り、餘所ながら墨附を詮議の折柄、その御朱印ある上は、お家は再興。忠義を守り、操を立つる孝行娘。如何にも望みの通り、夫婦にならう。

さん　エヽ、そんならわたしが云ひ條立て、女夫になつて。エヽ、忝ない。

ト　これにて、茂兵衛、奥にて

茂兵　相に相生の松こそめでたかりける。

ト　奥より三方持つて出る。

委細の樣子は聞きました。どこ〳〵までも主親の、事を案じる孝行娘、仲人役はこの番頭、爰でめでたく祝言の學び。

さん　それでわたしが望みも叶ひ、何より喜び……これが即ち二千丁のお墨附。御覽なされて下さりませ。

ト墨附を出す。

孫太　すりや、これが二千丁の御朱印なりしか。エ、忝ない。

さん　これをお渡し申すからは、最早この世に用なき私し早おさらば。

ト脇差を咽喉へ突き立てる。皆々惘りして

孫太　ヤヽ、こりや何ゆゑの

兩人　この生害。

さん　惡人ながら六人まで、人を殺めたこのおさん。孫太郎さまと女夫になり、この身の望みも叶ふ上は、父さんに追ひついて、親子二人で冥土の旅。

孫太　流石は忠臣十內どのゝ胤ほどあつて、潔よきその最期。今は何をか包みませう、この孫太郎は、もと泉州濱田家の御分家、小泉どのゝ家來、仔細あつて町家の住居、また母親と申せしは、誠は濱田の後室樣。

さん　エヽ、すりや、あなたは小泉家の御家來にて、阿母樣と仰しやつたは、後室樣でござりましたか。

孫太　先年濱田家の滅亡より、後室樣を小泉家にて引取れば、上へ對して濟まざるゆゑ、幸ひの町家住居、私し方へ引取つて、母と披露し御介抱、長い間の御眼病、醫藥を盡せど御平癒なく、然るに辰の年月揃ひたる、生れの女子の生血に、藥を混じ服する時は、忽ち癒ゆると聞きたるが、この守り袋の臍の緒では、慥かお前は辰の年。

さん　それぞ幸ひ此さんは、辰の年度の揃ひし生れ。いま自害して、後室樣の、お役に立てば犬死ならず、少しも早うこの血汐、お役に立てゝ下さりませ。

孫太　オヽ、心得た……御朱印手に入る上からは

茂兵　これで濱田のお家とやらも、御再興が出來ませう。

孫太　これといふのも、十內どの親子の忠義。

皆々　エヽ、忝ない。

ト墨附を戴き、喜ぶ。爰へ段助窺ひ出て

段助　その墨附を。

トかゝるを茂兵衛押へる。おさん見て

さん　其奴は正しく、御朱印の盜賊。

茂兵　若旦那、やッつけておしまひなされませ。

ト段助を突きやる。

孫太　オヽ、

ト見事に段助を切り下げる。

さん　これがこの世の

孫太　オヽ、未來は夫婦。

茂兵　これにてお家も

孫太　萬代不易。

茂兵　おめでたうござります。

ト皆々引ッ張りの見得、孫太郎は刀を拭ふ。おさんは合掌する。賑やかな鳴り物にて、めでたく打出し。

傘轆轤浮名濡衣（終り）

けいせいと新玉の春書初に好文木の菅の筆
比翼枕の傳授の床手習ひかゞみは戀の手管

櫻時廓美談

うそも誠も白紙に寄せて北野の菜種の御供
さつても早い咲やうは凡人ならぬ大自在

二幕

「堤畑の十作」初演絵番附

櫻時廓美談——堤畑の十作

序　幕　　九條の里の場

役名——雷の金兵衞實ハ伴義雄。唐土屋天平實ハ天蘭敬。倉橋丈右衞門。幇間、仁作實ハ佐竹舍人之助。宅助實ハ奴宅内。傾城、青柳太夫實ハ紅梅姫。澤瀉屋おかね。同娘、おきく。曳舟、おかつ實ハ腰元勝野。花升屋おりつ。百姓、左四郎。同、彥兵衞。同、櫂兵衞。堤畑の十作。

造り物、通り二重舞臺、向う一面の塗り骨障子、一面の二階格子。橋がゝり、塀造り、大木の柳の木、雪降りの體。すべて、九條出口、料理屋の行燈かけあり、幕の内より、仲居四人、羽子突いて居る。騷ぎ唄にて、幕明く。

仲一　コレお鹿どん、最前から大分隙がいるが、奥はどうおやぞいなう。

仲二　大事ないわいの。奥はおとらどんや、おさはどんが居るわいなア。

仲三　アヽ、これはしたり、又おかねさんに聞えたら、やかましからうぞえ。

仲二　ほんに、それ〳〵、これから奥へ行かうかいなア。

仲四　サア〳〵、ござんせいなア。

ト仲居四人、奥へ入る。合ひ方にて、向うより、天平下人の形にて出で

天平　アヽ、降つたる雪かな。我れも世にありし時、唐土の寶殿にて、簾をかゝげて見たる身が、いま日本の雪を觀ずるとは……アヽ、誠や、雪は鵞毛に似て飛んで散亂す。我れは三韓より飛んで艱難する。アヽ、有爲轉變の世の中ぢやなア……オヽ、爰は幸ひおりつの店ぢや。どうぞゐてくれゝばよいが。

トまた鳴り物にて、本舞臺へ來て

オツと、おりつさん〳〵。

ト呼びかける。おりつ出で

りつ　オヽ、あなたは澤瀉屋へお出でなさるゝ旦那様。わたしが名を、よう知つてござるな。

ト此うち、天平、上へ通り、床几に腰をかける。

天平　知つてござるなとは、どうぢやいな。お前の名を知らん者があらうかいなア。アノ九條の料理屋の內儀知つて居るが、大抵評判がある事ぢやないぞえ。……ハ、、マア、火一ッ貸しんか。

りつ　ハイ〳〵……あなたとした事が、きついお上手でござりまするなア。

　ト煙草盆、持つて來る。その手をちよつと握つて、顏見合せ

天平　ハ、、、何も上手も下手もないけれど、わしや生れ付いて嘘つく事が嫌ひぢや。わしや、大方每日澤瀉屋へ遊びに行くが、門は通るけれど、ついぞ內方へ遊びには來ぬが、通る每にお前を見るが、えらい好い女房ぢやなアと、お前を尻目で見い〳〵、通つて居るわい。ハ、、

りつ　何をマア、譯もない事仰しやるやら。わたしらがやうな女子は、降る程世界にあるわいなア。

天平　ちと降つて欲しいなア。

りつ　ハテ、どうなりとするわいなア。

天平　アヽ、嬉しいなア。

　ト餘念なうなる。

向う　喧嘩ぢや〳〵〳〵。

　ト花道より若い者二人、金兵衞を捻ぢ上げ出る、

金兵　コリヤ、うぬら、何をさらすのぢや。

若一　イヤ、なんともせぬ。貴樣、この間から、この里へ入込む、雷の金兵衞とやら。

若二　この里で幅しられては、所の者が立たぬゆゑ、おいらがちよつと。

　ト兩方から、かゝる。

金兵　エヽ、猪口才な我樂苦多めら。他所であらうが、所であらうが、鳴り歩く、雷金兵衞。わいらがほでに合ふものかい。

　ト振り解いて投げる。また來る所を兩人が手首片手に捻ぢ上げながら、本舞臺へ來て、兩人を投げる。これにて、兩人、橋がゝりへ逃げて入る。天平、上手へ飛び退き、金兵衞を見て居る。金兵衞、これを見て誰れぢやと思うたらおりつどん、惡い所に居やんしたなう。

りつ　金兵衞さん、ござんしたかえ。

金兵　なんぢややら、面白さうな事でごんすの。

りつ　金兵衞さんとした事が、わしぢやとて女子の端、ま

して廓に育つ者、派手な事もあらうかいなア。
ト天平を引寄せる。天平、こなしある。
金兵　ハテナア。蓼喰ふ蟲も好き〴〵とやら。あの奴の顏わい。
ト天平、顏撫でゝ氣味惡がる。
りつ　ハテ、男が喰へるものではなし、兎角氣づくでなければゆかぬ。ナア、申し。
天平　ウ、〳〵。
ト頷づく。金兵衞、見て
金兵　ハヽヽ、おれも色女に逢うて來うか。
りつ　お前が見えたら渡してくれと、禿が持つて來たこの狀、讀んで上げさしやんせいなア。
ト下手へ狀を抛る。金兵衞、取上げ
金兵　こりや、世話でごんした。また例の嫌味であらう。
ト狀をひろげて
ヤ、こりや、三郎どのか。
りつ　コレ、寒空に、お前もマア根の強い。
ト紛らす。金兵衞、呑み込み
金兵　成る程〳〵……こりや根づくめにせりふせにやアなるまい。情の剛い女郎めぢや。

ト狀を卷き〳〵紛らす。
りつ　マア、奧へ行て、七浦さんに逢はしやんせ。
金兵　そんなら太夫が
りつ　來てぢやわいなア。
金兵　オツとよし。この狀の返報に、どいつもこいつも廻り廻してやらうわい。
ト天平を見て
いま〳〵しいぞ〳〵。怪體が惡いぞ。なんぢややら、好い男の面さらして、おきやアがれ、猿松めが、怪體ぢやぞ怪體ぢやぞ、いま〳〵しいぞ〳〵。
ト尻捲り、下駄穿きにて、天平の前を上手へ通り、二重へ其まゝ上がり、せりふ云ひ〳〵、足にて、障子を明け、奧へ入る。天平、始終怖がり、おりつの後へ隱れるこなし、いろ〳〵あつて、金兵衞の後見送り
天平　なんぢやい〳〵。何を頤叩くのぢや。コリヤ、わいらのやうな荒くれない者とは違ふわい。下作な物の云ひやうするワ。誰れも怖がりやせぬぞよ。何を猪口才な……併しながら、好い男前ぢや。彼奴が親はどんな奴ぢや知らん。ハヽヽ、イヤ、ほんに思ひ出した。いま七浦が來て居ると云うたな。

りつ　サイナア、今日は雪見に、青柳さんや七浦さんが、
奧へ來てぢやわいなア。
天平　エヽ、アノ、青柳が來て居るかい。
りつ　オヽ、その顏はなんぢやいなア。アヽ、さては青柳
さんの
天平　深い色ぢやと云ひたいがな、ハテ、お前ゆゑなら
りつ　見替へる氣かえ。
天平　勿論〳〵。
りつ　ほんまかいなア。
天平　おりつさん。
トおりつ、天平の名を知らぬゆゑ
りつ　お前の名はえ。
天平　天平〳〵。
りつ　をかしい名ぢやな。
天平　エヽ、なんの事ぢやいな。折角せりふが並んだもの
を……もう一遍行かう。おれから先へ。勿論〳〵。
りつ　ほんまかいなア。
天平　おりつさん。
りつ　天平さん。
天平　嬉しいわいな。

りつ　ト抱き付くを刎れ退け
エヽ、まだ早いわいなア。
トしか〳〵。仲居一人出で
仲居　モシ、おりつさん、離れのお客がお立ちでござりま
す。ちよつと御挨拶をなされませ。
りつ　よし〳〵。そこへ行く程に、先へ行つてたもいな
う。
仲居　ちやつとお出でなされませ。
天平　そんなら後に。
りつ　違ひないかえ。
天平　オヽ〳〵。
りつ　ドレ、座敷を見て來うか。
ト唄になり、天平、おりつを見て、手を合す。おりつ
をかしさ隠して奧へ入る。後に天平、殘り
天平　うまい〳〵物な。女子を口說き落すは、なんでもな
い事ぢや。あつちからズル〳〵と來てけつかるわい。
トをかしき身振りして喜ぶこなし。
時に、解らんのは青柳ぢや。身請けに事寄せ、いろ〳〵
と探つても、とんと解らん。どうぞ素性を糺したいもの
ぢやが。

丈右　ト奥バタ〳〵。天平、片脇へ抑へる。と奥より、丈右衛門、侍ひにて、後より、おかれ、花車の拵らへ。幇間仁作、仲居、皆々丈右衛門を留めながら出で
丈右　イヤ〳〵、留めな。放せ〳〵。
皆々　マア〳〵、ようござりますわいなア。
天平　ヤア〳〵、丈右衛門さまぢやござりませぬか。
丈右　オヽ天平か。聞きやれ、今に於て青柳太夫が
天平　まだ返事を致しませぬか。
かれ　サア、それゆゑお腹立ちは御尤もぢやが、情の剛い青柳さん。いま呼び出して、應と云はしてお目にかけませう。
皆々　それで機嫌を直さしやんせいなア。
かれ　オヽ、さうとも〳〵。ソレ、青柳を、早う〳〵。
皆々　アイ〳〵。申し〳〵、青柳さん〳〵。
ト口々に呼ぶ。ト何なりと派手口なる唄になり、奥より、青柳、太夫の他所行きの形にて出る。
青柳　アタ忙しない、なんぢやぞいなア。
かれ　エヽ、その落ちつき顔が氣に喰はぬ。丈右衛門さまのお心に從はぬゆゑ、大抵のお腹立ち。
しか　青柳さん、ちやつと返事を
皆々　さしやんせいなア。
青柳　嫌でござんす。おきくさんが揚詰めにして、可愛がつて下さんす。わたしは外へ行く事、嫌ぢやわいなア。加茂川の水、双六の賽、儘にならぬは傾城の意氣地。嫌と云うたらいつまでも、嫌でござんすわいなア。
かれ　エヽ、あの通りの片意地者。もう料簡がならぬがな。
天平　待て〳〵おかね。否應ないやうに、身請けにかゝるがよいぞよ。
かれ　エヽ、なんと仰しやる。身請けなされまするか。
しか　ソリヤ、又おかねさんの爪が始まつたぞえ。
仲居　さりながら、青柳さんは、おきくさんの揚詰めゆゑなんと云はしやんすやら。ナア、皆さん。
かれ　なんぢや、娘のおきくが揚詰めぢや。こりやをかしい。なんぼ娘が揚詰めでも、お金のある方が肝心ぢや。ナニわいらが。默つて居らう。
天平　それ〳〵、おきくが身請けの邪魔になるなら、おきくぐるめに身請けするワ。
仲居　皆さん、聞かしやんせ、面々ばつかり合點してぢやが、一體天さんは、どこのお生れぢやぞいなア。

天平　おれか。おりや唐人。
丈右　アヽこれサ天平、そりや何申す。
天平　イヤサ、唐人の物を買つて、日本へ賣り、日本の物を唐へ賣るゆゑ、唐土屋天平ぢや。その證據はこれぢやこれぢや。
ト懐中より、竹を出す。帮間仁作、見て
仁作　そりやなんでござりますえ。
天平　こりや、陰吸竹と云ふ物ぢや。
仁作　そりや、阿蘭陀人の持ち物ぢやござりませぬか。
天平　サア、惚れた女子を口説いても得心せぬと、この竹でその女の精氣を吸ひ出すと、忽ち鼬が鼠を吸つたる如く、骨と皮とになつて命がないわいやい。
かれ　オヽ、怖やの／＼。
天平　コリヤ、女子ども、陰吸竹の驗目を見せうか。
皆々　サア、それはな。
丈右　二人ながら取持つか。
皆々　サア。
丈右　サア／＼／＼、返事はどうぢや。
トきつと云ふ。この時向う戸屋の内より
きく　待つた。待たしやんせ。

皆々　ヤ、なんと。
きく　青柳さんを自由には、わたしがさしませんわいなア。
ト花やかなる唄になり、おきく、派手なる娘の形にて面を持ち出る。後より、帮間。奴宅助、黒面奴にて草紙の鳥毛を持ち、首に、この奴賣り物と書いた札を掛け出で、花道中程にて立ちどまる。
かれ　娘おきく、爰へはどうして。
きく　アイ、いま去なうと思うて、通りかゝつて様子を聞いた縺れ事。それでちよつと寄つたのぢやわいなア。
宅助　イヤ／＼、申し女中さん、只今振つて參つた奴めでござります。御合力をお頼み申しまする。
きく　マア、あれへござんせいなア。
ト三人、舞臺へ來る。よろしくあつて、この時、帮間仁作、宅助を見て
仁作　ヤア、こなたは。
宅助　アイヤ／＼、お若いの、奴めは物貰ひのナ、物貰ひの奴めぢやから、合力をお頼み申しまする。
仁作　ハテ、思ひがけない……物貰ひぢやな。
仲居　ほんにおきくさん、今日は好い慰みであつたなア。

皆々　して、その面はえ。
きく　サイナア、聞いておくれ。雪降りを見かけ、鳥邊山から清水祇園様へ詣つた戻り、祇園町の面屋の選り取り、内への土産に買うて戻つたこの面。なんと好い面でござんせうがな。
かれ　コレ、おきく、なんでわが身は金儲けの邪魔するのぢや。
きく　母さん、青柳さんはわたしが揚詰めでござんすぞえ
　それに又お前が。
かれ　娘、金たもるか。
きく　今と云うてはござんせぬ。内へでも去んで、金の才覺せうわいなア。
かれ　自體又あの青柳を、揚詰めぢやのなんのと、庇ひ立てするわが身が心底、とうやら合點のゆかぬ。もしや噂の……イヤサ、金をたもるか。
宅助　イヤ、その揚げ代の金、おらが渡さう。
　ト前へ出る。青柳見て
青柳　ヤア、其方は。
宅助　アイヤ、知らん、覺えはない。高で物貰ひの一文奴太夫どのに近付きのあらう筈がない。知らんと云うたら知りませぬぞ。
　ト青柳、不審の思ひ入れ。おきく、宅助をヂッと見て居る。皆々合點のゆかぬこなし、天平、見て
天平　ヤイ〳〵、一文奴め、おのれマア、途方もない事云うたぞよ。なんぢや、青柳が揚げ代渡さうとは、コリヤ眠つて居やせぬか。但し夢でも見て居やせぬか。さうしてマアなんぢや、首に札かけて……なんぢや、この奴賣り物。ハヽ、こりや面白い。この奴賣り物ぢやとは、われがやうな、うそ汚ない物貰ひを誰れが買ふもので。いろいろな化け物が出てうせるな。
　ト宅助、ムッとして
宅助　おらが化け物か、其方が化け物か。イザござれ、化け物比べだ。例へ物貰ひの奴でも、金があるまいとは云はれぬワ。太夫どのゝ揚げ代、渡さうと云つたら渡してお目にかけるワ。何も外から化け物の知つた事ぢやたいすッ込んでござれ。
かれ　これはしたり、なんぢやぞいの。此方の大事のお客を捕へ、化け物ぢやの掛け物ぢやのと、あんまりであらうぞえ。お客の側で汚ない。退いておくれ〳〵。
　ト箒で宅助を掃き出す。宅助、箒を持つて

宅助　コリヤ、おらをなんとするのぢや。
かれ　なんとせう。掃き出すのぢや。
　ト又かゝるを宅助、おかれを投げる。
アイタ……。おのれマア。
　トまた振り上げるを
きく　母さん、待たしやんせ。
かれ　娘、なんで留める。
きく　サイナア、今あの奴さんが、青柳さんの揚げ代を渡さうと云はしやんしたぢやないかいなア。それぢやに依つて、お前を留めてあげたは、お前の爲ぢやわいなア。
かれ　そりやマア、よう留めてたもつたなう。そんなら何かいの、奴さん、お前が太夫の揚げ代を。
宅助　オヽサ、おらが揚げ代の金出すが、それでも掃き出すか。
　ト宅助、懐より、財布入りの金を出して、おきくの側へ行て
ナニ、おきくさんとやら、あれなる太夫青柳さんとやらの揚げ代は、いくらか知らねども、この金お遣ひなされて下されい。
きく　ムウ、そんならお前がこの金を。
宅助　高の知れた一文奴。朝の六ッから暮れるまで、振り歩いたところが、僅かの貰ひ。誠に喰呑みさへも碌たまにせず、やう〳〵貯めた二十兩の金は、もしも巡り逢うたならば、その時の入用と、思ひ詰めた今日の幸ひ……イヤサ、今日のおらが災難だ。人の難儀を見兼ねるは、奴が性分。サア、氣兼ねなしに遣うて下されい。
　ト天平、丈右衞門、悧りする。おきくも、いろ〳〵思ひ入れあつて
きく　成る程、斯う見たところが、形姿は賤しいが、どうやら様子のありさうな事。手詰めになつた揚げ代の金。お前の志し、無下にもなるまい。こりや暫らくわたしが借りました。その代り、お前が首にかけてある書付の通り、奴さんの體は、わたしに賣つては下さんせぬか。
宅助　すりや、下郎めを。エヽ、忝ならうござります。
かれ　コレ〳〵、娘、其方は氣でも狂ひはせぬか。この辛い時節に、あんな奴を買うて、なんにしやる。どうやら一かたぎに、米の二三升も喰ひさうな奴。一體和御寮はなんぼ位に賣る氣ぢや。
宅助　イヤモウ、なんぼと申したら、今から若衆にもなる

まいし、高で今の二十兩を敷金にして、奴めが體を喰はしてもらへば、ようござります。

きく　サア、母さん、青柳さんの揚げ代、取つて置かしやんせ。

トおかれが前へ金を置く。

かれ　ホヽヽ、わが身とした事が、親子の仲で、さう慇懃にせいでもよい事を。ホヽヽ。そんならこの金取つて置くぞや。ヤレ／＼嬉しや、とてもの事に身請けの埒も明けてたもいなう。

青柳　嫌でござんすわいなア。

かれ　また氣儘を吐かすかな。

ト簪を持つて立ちかゝる。

きく　揚げ代はたつた今、渡したぢやござんせぬか。ぢやに依つて、

かれ　ほんに、こりやわしが惡かつたわいの。

トぢつと扣へる。仁作、前へ出て

仁作　サア、これで何もかも納まつた。仕合せなは奴さん持つてる金は貸しつけるし、體は賣りつけるし、青柳さんの揚げ代は濟み、お家は儲ける。お客樣は鼻明く。こんなめでたい事はござりますまいなア。

天平　ヤイ／＼、仁作め、何もめでたい事はないぞ。餘り阿房にしてくれない。

丈右　この兩腰が目にかゝらぬか。馬鹿にひろぐと、ぶち放すぞ。

ト丈右衞門、腹立つを、おきく、留めて

きく　ハテ、よいわいな。口さがないは藝者さんの常。それを買つて腹立てなさるのは、廓で野暮と云ふぞえ。また仁作さんも惡うござんす。ちやつと詫び言しなされいなア。

トおきく、目顔で教へる。仁作、呑み込み

仁作　ハイ／＼、私しが不調法。眞平御免なされて下さりませ。

天平　面白い。それで此方も顏が立つたワ。なんと仲直りにせうぢやあるまいか。ナア、丈右衞門さま。

丈右　よからう／＼。これサ天平、あの幇間に酒を吞ませやれ／＼。

ト丼鉢の肴を打明け、差出す。仁作、見て

仁作　モシ、どなたも御免なされませ。私しは幇間でも、一切不調法にござります。また第一、酒はとんと下さりませぬ。どうぞ皆さまの御料簡を得まして、只今の事は

眞平御免なされて下さりませ〳〵。
天平　コリヤ〳〵二才め、何か幇間は不調法な、惡對は器用ぢやと吐かすのか。
仁作　滅相な。左様ぢやござりませぬけれど。
天平　けれどなら呑め、われ又呑まぬと、料簡ならぬぞよ。
仁作　アヽ、申し〳〵、下さりませ〳〵。左様ならばどうぞ、半分になされて下さりませ。
天平　サア〳〵、半分でも呑みさへすりやよいワ。おれが酌ぢや。呑め〳〵。
ト仁作、鉢を請ける。天平、酌ぐを、おきく、天平の手を持つて留める。
仁作　オツとござります〳〵。
ト半分請けて
これは又、術ない事でござりますわい。
ト無理にグッと呑み、術ないこなし。おきく、紙を二三枚仁作に遣り、脊中を擦る思ひ入れ。
天平　これでちつと胸が晴れたが、おかね、青柳が身請けの事は、どうするのぢや。
かね　どうと云うて、見なさる通り、娘から揚げ代の金取つたれば
天平　埒が明かぬと云ふのか。
トおかね、こなし。
ハテ、借り貸しは廓の習ひ。殊にわりや揚屋の娘ぢやないか。客の戀を取持つが役ぢや。すりや、否でも應でも借りるのぢや。おきく、否か應か返事せい。どうぢや。
きく　アイ、ちよつとも貸す事はなりませぬ。その代り、取持つてあげるわいな。
青柳　イヤ申し、おきくさん、それではどうやら。
宅助　下郎が出した金は無駄骨。
青柳　わたしはどうも。
きく　ハテ、大事ござんせぬ。諸事はわたしが胸に。兎角お客の機嫌と、戀を取持つが揚屋の娘の役ぢやとな。
丈右　さうして、身共が七浦の事。
きく　天平さんの心次第、任してさへ置かしやんしたら、めでたう叶ふ時節もござんせう。
天平　せう事がない。待つてやらう。
きく　わたしが揚詰めの青柳さん、奥へ連れまして下さんせ。
仲居　サア〳〵、太夫さん、奥へお出でなされいなア。

青柳　そんならおきくさん、仁作さん、モシ、そこな奴さん。
宅助　ヘイ〳〵。
青柳　何かのお話しは、内でゆつくり。
皆々　マア、それまでは奥座敷で
丈右　さつぱりと呑み直さう。
きく　母さん、去ならうぢやないかいなア。サア、奴さん、仁作さんもござんせ。
宅仁　歸りませうか。
青柳　皆さん、後から。
丈右　そんならおきく。
きく　おさらばでござんす。
ト騷ぎ唄になり、おきく、おかれ、仁作、宅助、橋がかりへ入る。青柳、丈右衛門、皆々捨ぜりふにて、奥へ入る。あと合ひ方になり、天平、殘り、こなしあつて
天平　とんと解らん青柳が素性。おきくが身に引請けて世話と云ひ、とんと解らん。
ト思案する。この時、奥より、おりつ、出て、天平を見てこなしあり、それより莨盆を取つて、素知らぬ顔にて莨のんで居る。天平これを知らず
マア、それよりは爰のおりつぢやわい。あつちから氣のあるこそ幸ひ、押立はよし、器量はよし、誠に女房にせうならおりつぢや。あんな女房を臺所に据ゑて置いて、茶屋がして見たいな。もし客めがらせて、いちやつきさらしたら客にせんワ。おれとおりつは、寐間入りと出かけ、取つてしめるワ。こりやモウいつそ堪らんわい、
ト無性に喜び、おりつと顔見合せ
オヽ、おりつさん、いつの間に。
ト合ひ方。
りつ　わたしや最前から爰へ來て、聞いて居ればなんぢややら、わたしが事を惡しなに云うてからに、それ程氣に入らぬ事なら、相手にならしやんすないなア。
ト態とピンとする。天平、こなしあつて
天平　えらい間違ひな。こちやそんな氣ぢやないが、なんと聞いたな。
りつ　措いておくれ。精出して青柳さんの事を褒めなされいな。
天平　いつ いな。
りつ　今いな。

天平　ありやお前の事云うたのぢやわいな。
りつ　そりや、ほんまかいなア。
天平　青柳の事は皆嘘ぢや。
りつ　嘘なら、わたしや嬉しいけれど。
天平　けれどなら聞いておくれか。
りつ　聞く氣ならこそ、悋氣もするぢや。
天平　有り難い。ついに女子に悋氣しられた事がないわい。
　ト顏を隱して喜ぶ。
　サア〳〵。値が成つた。善は急げぢや、おりつさん、爰で〳〵。
りつ　これはしたり、人が來るわいな。
天平　來ても大事ない。ちよつと〳〵。
りつ　これマア、窮屈な帶して、なんぢやぞいなア。
　ト天平の帶を解く。首に金財布かけて居る。おりつ見て
　こりや何ぢや。
天平　これか。金ぢや〳〵、
りつ　たんとあるなア。
天平　なんの、たつた百兩ぢや……マア、お前も帶を解きんかいなア。
　トおりつの帶を解きかける。
りつ　マア〳〵、待たしやんせ。人が見るわいなア。
　トおりつ、帶を留めて宥める。天平、無性に現になるこなし、兩人とも捨ぜりふにて云うて居る。奧より、金兵衞、出で、天平を突き廻し、おりつの帶の端を取つて
金兵　間男見付けた。動きさらすな。
　トきつと云ふ。天平、悔りする。おりつ、わざと
りつ　こちの人か……ハア。
　ト泣く眞似する。天平、見て
天平　コレ〳〵、おりつさん、そんならこの男は。
りつ　わたしが夫ぢやわいなア。
天平　エヽ。
　ト仰向けに倒れる。
　イヤ〳〵、そりや嘘ぢや〳〵。
金兵　何が嘘ぢや、僞はりぢや。このおりつは、おれが女房。間男さらした成敗は、重ねて置いて四つにする。覺悟さらせ。
　トきつぱ廻す。

天平　待て〳〵、そんならいよ〳〵おつりが男か。
りつ　申し〳〵、天平さん、こちの人に見付けられたら、とても命はござんせぬ。わたしや覺悟を極めた程に、お前も死んで下さんせいなア……ハア。
ト態と泣く
天平　ハアが嫌ぢやなア。まだマア指もやらぬうちに、間男とは、おりや、覺えないぞ〳〵。
金兵　その覺えない貴樣が、帶解き裸體で、その態なんぢや。なんで女房が帶解いた。
天平　サア、それはな。
金兵　これでもわれ、間男ぢやないか。
天平　サア。
金兵　重ねて置いて四つにせうか。
天平　サア。
金兵　サア〳〵〳〵。どうぢや。
トきつと云ふ。天平、息詰まつて
天平　ムウ……體買はう。
金兵　なんと。
天平　サア、いま四つになる體を、金で買へはよいぢやないか。

金兵　ムウ、面白い。して金の贖ひは。
天平　知れた事、三百目かい。
金兵　あんだら盡せ。人の命が三百目や五百目で買へるものか。白痴めが。矢ッ張り四つにするが増しぢや。
ト又きつぱ廻す。
天平　イヤ、待て〳〵。よう切りたがる男ぢや。そんなら一體なんぼ出したらよいのぢや。
金兵　なんぼと云うたら。
トおりつと顏見合す。おりつ、百兩と云ふ仕方する、金兵衞、呑み込んで
オヽ、さうぢや、小判で百兩出せ。
天平　エヽ、なんぢや。百兩ぢや。
りつ　コレ〳〵、天平さん、百兩出して、命を助かつて下さんせ。お前にもしもの事があつたら、わたしはなんとしませうぞいなア……ハア。
天平　エヽ、措いてくれ。面白うもない。百兩出して堪るものかい。
金兵　嫌なら爰で成敗せうか。
天平　それぢやと云うて。
金兵　エヽ、面倒な。

ト反り打つ。

天平　待て〳〵。出す〳〵。出すと云ふのに。

金兵　サア、早う渡せ。

天平　なんの事ぢや。こりやマア、えらい目に遭ふ事ぢや

ト首の財布を取つて

ソレ百兩。

金兵　慥かに受取つた。

りつ　天平さん、ようマア出して下さんした。堪忍して下さんせいなア。ハア。

ト泣く。

天平　えらい目に遭はしたな。覺えて居いよ。

金兵　まだなんぞ云ひ分があるのか。

天平　なんのあらうぞい。其方もあるまい。いま〳〵しい。奥へ行て酒なと……イヤ〳〵、この拍子で奥へ行たら、どんな目に遭はうも知れぬ。去んでこまさう〳〵。

ト下手へ來て、下駄を穿き、花道へぼやき〳〵行く。

なんの事はない、月夜に釜拔かれたやうな心持ちぢや。

エヽ、思へば〳〵。

金兵　どうぞするか。

天平　したけりや二人せい。

ト唄になり、思ひ入れあつて、天平は傘をかたげ向うへ入る。おりつ、金兵衞、後を見て

金兵　おりつどん。

りつ　伴の義雄さん。

金兵　無益の金もまさかの軍用。

ト金を渡す。

りつ　お世話でごんした。女子の身で大膽も、夫の大望。

金兵　ても、お内儀は貞女ぢやなう。

りつ　知れた事いなア。

金兵　ハヽヽヽ。

りつ　さうしてお前、七浦さんに。

金兵　まだ逢ひやせん。

りつ　エヽ、氣の弱い。わたしが場合をせざアなるまい。

金兵　そんなら、おりつさん。

りつ　サア、ござんせ。

ト唄になり、おりつ、金兵衞、こなしあつて、奥へ入る。ト在郷唄になり、橋がゝりより、十作、百姓の形、小さき風呂敷包みをかたげ出る。後より、左四郎、彥兵衞、權兵衞、百姓京參りの體にて、連れ立ち出でる。

十作　イヤナニ權兵衛どの、こなたは直ぐに、在所へ去なしやるかいなう。
權兵　イヤ〳〵、おりやこれから伏見へ出て、一家内へ寄つて去にたい。十作、貴様はどうするぞ。
十作　わしも一緒に行きたいけれど、なんぢややら最前から、腹が痛うて、とんと歩かれぬが、どうしたらよからうしらん。
ト腹の痛むこなし。三人見て
左四　それは難儀な事ぢやなア。
權兵　そんなら斯うせうかい。これから別れて、彦兵衛どのと一緒に、伏見へ廻らうかい。
彦兵　おれも東寺へ參つて、一緒に連れ立たうか。
左四　そんなら十作は、爰から別れるか。
十作　お前方三人、伏見へ廻るなら、爰で駕籠かつて先へ去にませうわい。アイタ、、、。
ト居坐る。
彦兵　これは拋つても置けまい。駕籠云うてやらう〳〵。
ト奥を見て
申し〳〵、どなたぞちよつとお賴み申します。
男　ハイ〳〵、なんでござりますな。
ト出る。
權兵　イヤ、斯うでござります。この人が腹痛んで、きつう難儀して居られまする。爰らに駕籠があるなら、かつてもらひたうござりますが。
男　ハイ〳〵、それは易い事でござります。ハイ、そこにござります。云うて參じませうか。
左四　それはお世話でござります。
男　ハイ〳〵。
ト男、橋がゝりへ入る。
左四　サア〳〵、十作、いま駕籠が來る程に、乘つたがよいぞや。
十作　それはお前方、お世話でござりました。そんなら先へ去にますぞや。
權兵　サア、こちらも早う行かうぢやないか。
彦兵　十作、去んだら、此方の内へ言傳してたもや。
左四　コレ、養生したがよいぞや。
ト在鄕唄になり、三人、捨ぜりふ云ひ〳〵向うへ入る
十作、殘り
十作　そしたら靜かにござりませや。お世話でござりました。

ト云ひ〳〵、腹を押へて痛むこなし。
ア、、この冷える加減が、一向どうもならん。マア、暫らく駕籠の來るまで……オ、幸ひ爰に床几がある。ちよつと借らう。イヤ申し、御無心ながら、ちよつと爰貸しておくれなされませ。
ト床几に腰かけ。
アイタ、、、。こりや堪らん。アイタ、、、。
ト苦しむ。橋がゝりより、駕籠屋、駕籠舁き出て
駕籠　ハイ、申し、駕籠はあなたかな。
十作　オ、、これは大儀でござりますな。
駕籠　サア、お乘りなされませ。
十作　ちよつと待つておくれ。腹が痛うてな。
ト腹を押へる。
駕籠　それは御難儀ぢやな。
ト十作の腰腹を押へてやるこなし。十作、痛む思ひ入れ。奥より、丈右衞門、青柳、女形皆々出る。
丈右　サア〳〵、來やれ〳〵。天平はどうした。ハア、こりや先へ歸つたな。氣の惡い。時に青柳、天平が居らいで、淋しかろ〳〵。
青柳　措いて下さんせ。なんぼうどれ程金があつても、わたしや虫が好かんわいなア。
仲居　申し〳〵、其やうに誹つたら、どこぞに告げ手がござりますぞえ。
同　それでも青柳さんの云はしやんすが、尤も。わたしらでも嫌ぢやわいなア。
丈右　さう又云うたものぢやない。よし〳〵、天平の代りに、身共を送つてはくれまいか。
皆々　藪際まで送らうわいなア。
青柳　わたしやツイ、野口までぢやぞえ。
丈右　サア〳〵、送れ〳〵。
皆々　マア、行かしやんせいなア。
ト賑やかなる鳴り物入りにて、丈右衞門、先に青柳皆々下手へ來る。此せりふのうち、十作、床几に腹を押へて居る。十作、青柳を見る事あつて、それより、十作、思ひ入れにて腹の痛みを忘れて見て居る。
駕舁　ちと痛みはようござりますかな。
同　モシ、お所はどこでござりますぞ。
ト云うても耳へ入らぬこなし。皆々花道へかゝると、十作は一心不亂に見詰めて居て、青柳と入れ替り、上手へ見い〳〵廻り、後から付いて行く。駕籠舁きは始終、

一申し〳〵」と云うて十作の後から駕籠をかたげ附いて行く。ト皆々向うへ入り切る。十作もウカ〳〵向うへ入る。道具、臆病口引き、下手よりだん〳〵出口の門、柳は上手へなる。好き程に胴折れになる。遠見に出口の門ある。また向うより青柳、禿、男さしかけ傘にて出る。この後より十作、青柳を見い〳〵付いて出る。同じく駕籠舁きも「モシ〳〵」と云ひ〳〵付いて出る。青柳はこれに構はず橋がゝりへ入る。十作、花道中程にて、立ちどまり、向うの遠見に、青柳と禿男出る。十作これを見送るこなし。禿、遠見の門の内へ入る。と十作、ア、もう見えぬと云ふこなし。駕籠舁き、後から

二人　モシ〳〵〳〵、コレ申し。

ト大きな聲する。十作、思はず駕籠の中へ尻餅をつくチョンと頭を入れる。十作、其まゝ見送る。キザミの幕。

駕籠舁き二人、よろしく舁き上げ、向うへ入る。

二幕目　島原澤瀉屋の場

役名——雷の金兵衛實ハ伴義雄。傾城、青柳太夫實ハ紅梅姫。傾城、七浦。倉橋丈右衛門。唐士屋天平實ハ天閑敬。坊主の岩松。宅助實ハ奴宅内。幇間仁作實ハ佐竹舍人之助。澤瀉屋おかね。同娘、おきく。同妹、おみち。曳舟、おかつ實ハ腰元勝野。道具屋儀助。貸物屋利兵衛。百姓娘、おとき。堤畑の十作。

造り物、平舞臺、客路地附きの格子、それより上へ通りの欄間、三間の間長暖簾。上手黒塗り障子屋體すべて島原揚屋の體。幕の内より丈右衛門、大盡の形にて反り打つて居る、下手に七浦、傾城にて、煙草のんで居る。仲居大勢、丈右衛門を宥めて居る見得。騒ぎ唄にて幕明く。

仲居　マア〳〵、よッござんすわいなア。

丈右　イヤ、聞かん〳〵、ならんのだ。

七浦　皆さん、抛つて置いて下さんせ。なんぼう丈右衛門

さまが口說かしやんしても、否と云うたら、どこまでも否でござんす。

仲居　こりや、太夫主が尤もぢやわいなア。

丈右　默り居らう。此奴等まで同じやうに、どうして七浦が尤もだ。否な客にもせよ、身請けしたら何とする。自體、七浦めが金兵衞とやらにうッ惚れて居るゆゑ、身が心には從はぬ。よし／＼、此まゝでは武士が立たぬ。これより金兵衞に直に相談して、七浦を貰うて見せにやならぬのだ。さう思へ。

七浦　そりやモウ、どうなりと勝手にしたがよいが、お前もマア、わたし一人が傾城ぢやあるまいし、アタ不自由たらしい。ちつと嗜なんだがよいわいなア。併し、お前見事貰うて見やしやんすかえ。

仲居　こりや、覺束ないものぢやわいなア。

丈右　エヽ、まだ／＼うぬ等、身を蔑み居る。サア、七浦立て。

七浦　わたしをどうするのぢやえ。

丈右　ハテ、知れた事、金兵衞に貰ふのサ。

七浦　オヽ好かん、お前一人行かしやんせいなア。

仲居　さうぢやわいなア。一人行かしやんせいなア。

丈右　エヽ、面倒な、退さ居らう。サア、細言云はずと、七浦來い。

七浦　否ぢやわいなア。

丈右　サア、うせいと云ふに。

ト無理に手を取つて引立てる。仲居、取り支へる。これにて祇園囃子になり、向うより金兵衞、男達の拵へにて、岩松の手を捻ち上げ出る。花道にてちよつと立廻つて

岩松　コリヤ／＼二才め、どうするのぢや。痛いがな痛いがな。

金兵　ヤア、七浦ぢやないか。

ト云ひ／＼中程まで來る。岩松が腕もぎ放し、直ぐにかゝるを蹴り倒し、金兵衞、舞臺を見て

見りや、ざぶが手籠めだて。どこへ行くのぢや。

七浦　金兵衞さま、よい所へ來て下さんした。この丈右衞門さまが。

金兵　オツとよし／＼、おれに貰ふと云ふのか。

丈右　如何にも。雷の金兵衞とやら、この七浦を身共に。

金兵　イヤならん。金輪際やるまい。サア、乞食坊主、ざ

ぶと一緒に相手になれ。

丈右　さう云や、いつそ。

　トつか／＼と行て、切りかけるを留めて

金兵　コリヤ、何さらす、田樂め。

丈右　オヽ、眞ッ二つに致す。

金兵　おきやがれ。わい等の手に合ふ金兵衞ぢやないわいやい。

岩松　さう云や、おれも加勢ぢや。

　トかゝるをよろしく立廻つて、兩人を見事に投げて

金兵　どうで此まゝでは濟ますまい。何を云うても爰は門中。

仲居　マア、入らしやんせいなア。

金兵　ドリヤ、せりふの仕舞ひを附けてやらうか。

　ト兩人かゝるを、よろしく蹴飛ばし、キッと見得。これにて本舞臺へ來る。金兵衞、眞中へ坐る。七浦、笄で髮を直す事ある。仲居、莨盆を持つて來て、金兵衞の前へ直す。岩松、丈右衞門、腕の痛むこなし。

岩松　サア、痛いワ／＼。金兵衞、覺えて居れよ。イヤア丈右衞門さま、斯うなるからは、お前の加勢はこの岩松ぢや。さう思うてござりませ。

丈右　それは忝ない。兎角賴むは岩松々々。

岩松　サア、痛いワ／＼。

　ト奧よりおかれ、出る。

かれ　ヤレ／＼、やかましい事ぢやわいなア。一體何事ぢや……オヽ、お前は丈右衞門さま……なんぢや、こちらに穢ない坊主の乞食め、内へ入つて何の態ぢや。サアサア、キリ／＼出居らぬかいやい。

岩松　母樣、わたしぢやわいなう。

かれ　ヤア／＼、わりや岩松ぢやないか。

岩松　アイ、お前に勘當受けてから、方々流浪して、今では思ひ知つて居れど、勘當が赦りねば内へは戻られず、野に寢たり山に寢たり、人の軒の下に寢ては叩かれたり、わしや怖い事でござりましたわいなア。

かれ　そんなら何か、わしが勘當したゆゑ、今では思ひ知つたか。

岩松　アイ／＼。

かれ　イヤ／＼、まだそんな事吐かして、おれを騙すでな。アノ爰な横道者めが。サア、とッとゝ出てうせう／＼。

丈右　アヽ、コリヤ／＼、おかね／＼、岩松とやらの勘當の詫びは、身共が致す。もう料簡してやれ／＼。

かれ、そんならなんと仰しやる。この詫び事は。
丈右　オヽサ、身共が挨拶だ。料簡せい〳〵。
かれ　オヽ、よう詫び事してやつて下さりました。コリヤコリヤ岩松、勘當赦す程に、さう思へよ。
岩松　エヽ、そんなら母様、ほんまかえ。
かれ　知れた事、なんの勘當したからう。可哀や〳〵、よう戻つてくれたなう。
岩松　母様。
かれ　岩よ。
岩松　逢ひたかつた〳〵わいなう。
かれ　道理ぢや〳〵。サア〳〵、これと云ふも、丈右衛門さまのお庇ぢや。お禮申しや〳〵……さうしてマア、この形わいなう。これから風呂に入つて、妹のおきくやおみちに逢はす。さうして明日から名前も切り替へて、わが身は爰な旦那ぢや。嬉しいか〳〵。
岩松　エヽ、そんならおれは、この内の旦那が。
かれ　オヽ、さうぢや。これからわしは奥へ行て、風呂も云ひつけ、肴へも出して置くぞや。丈右衛門さま、だんだん忝なうござります。ヤレ〳〵、嬉しや〳〵。ドリヤ、風呂を焚かさうか。

ト喜び〳〵、おかれ、奥へ入る。
岩松　サア〳〵、えらいワ〳〵。丈右衛門さま、お前のお庇で明日から爰の旦那ぢや。この上は、いよ〳〵わしが腰押しぢや。落ちついてござりませ。
丈右　オヽ、頼むは岩松。これぢや〳〵。
岩松　お氣遣ひなされますな。サア、七浦、返事せい。
丈右　返事のないは不得心か。
兩人　どうぢや。
金兵　イヤ、返事はおれがさゝぬワ。
岩松　ヤイ金兵衛、このせりふの邪魔すると云ひ
丈右　身請けの相談まで致し居る身共を容赦もなく、なんで投げた。
岩松　なんで抛つたのぢや。
金兵　おきやアがれ、猿松めら。わい等の一人や二人抛つたらなんぢや。投げたらどうする。女一人を侍ひが、きつぱ廻してなんとする。留めてやつたは、わい等が爲ぢや。
岩松　イヤ、措いてくれ。なんぼう貴様が裁人でも、奉公人はおれが者ぢや。オヽ、この御亭主岩松さまの者ぢや。自由にするがなんとした。金兵衛、どうぢや。

金兵　吐かした〳〵。やう〳〵今戻つてうせた乞食坊主の息子どの、亭主呼はり、しやら臭い。この七浦は、おれが色ぢや。
兩人　ヤア。
金兵　例へ貴様の奉公人でも、色事したらどうする。勤めは勤め、色は色、七浦はおれが物ぢや。
丈右　イヤならぬ。
金兵　なぜならぬ。
丈右　この七浦は身共が揚げだ。それでならん。
金兵　そんなら借りぢや。
丈右　なんと。
金兵　借り貸しは廓の慣ひ。借つたらどうする。おれが借りぢや。
丈右　ヤア、慮外な一言。町人風情に法外千萬。武士が立たぬ。いつそ、うぬ、覺悟ひろげ。
金兵　コリヤ、何さらす。
丈右　知れた事、眞ツ二つに。
　ト又おこつくを見事に投げる。岩松、箒にて打つてかかるを引ツたくり、打ち据ゑる。岩松、かゝるを丈右衛門、留めて
待て〳〵岩松、尤もぢや〳〵が、身共が心になつて見よ侍ひが町人に打ち据ゑられても辛抱する。待ちやれ待ちやれ。
岩松　退いた〳〵。お前樣はそれで済まうが、おりや料簡がならぬわい。
金兵　七浦、見や。あの腹立ちさらす面を見やいの。
七浦　ほんに阿房らしい顔わいなア。
岩松　ヤイ〳〵、七浦め、おのれマア、現在の親方が、手ひどい目に遭うて居るを見ながら、あんまりぢやがな、あんまりぢやがな。
七浦　なんぼう親方様でも、お前の慰みにならうと云うて、この勤めはせぬわいなア。
岩松　エヽ、その頬桁を。
金兵　七浦、あんなべら坊に構はずと、おれに抱きつけ。
七浦　それでも二人が見て居るわいなア。
金兵　ハテ、見て居たら大事か。但し、侍ひに心があるのか。
七浦　なんのマア。
金兵　そんなら抱きつけ。
七浦　斯うかいなア。

ト七浦、金兵衛に抱きつく。兩人これを見て

丈右　エヽ、いま／＼しい。岩松よ、あれを見やれ／＼。
あんまりぢや／＼。

岩松　こりやモウ、料簡がならんわい。

ト箒にて叩きかゝる。金兵衛、引ッたくり、見事に投げる。直ぐに起き上がつて

なんぢや／＼、何おごつきさらすのぢや。コリヤ、おれを誰れだと思ひさらすぞ。岩松さまだ。コリヤ、三ケ津を股にかけ、富士の山を振りつけにして來た男だ。あまり意氣過ぎあがるな。べら坊め、あまり高くとまりあがると、息の根留めて水道へ蹴込むぞよ。はツつけめが。

トむさんこうに江戸詞で惡口つく。丈右衛門支へ「待て／＼」と云ひながら、奥へ無理やりに突きやり入る
皆々こなしあつて

仲居　なんとマア、やかましいお方ぢやないかいなア。

きと　モシ、金兵衛さま、太夫主と一緒に奥へ

皆々　ござんせいなア。

金兵　イヤ、おりやちつと七浦に用事もあれば。

七浦　こなさん達はマア、先へ。

皆々　そんなら金兵衛さん、太夫主、後にえ。

ト仲居皆々奥へ入る。

七浦　義雄さま。

金兵　コリヤ。

ト合ひ方。

雷金兵衛と名乘り、この廓へ入込みしも、味方を集むるも、三郎どのゝ指圖。其方に馴染を重ねしを幸ひに、入込む客に心を附け、敵か味方か合圖の知らせ。

七浦　氣遣ひさしやんすな。實否を糺すは里の手管。

金兵　もしもこの身に變ある時は。

七浦　夫に附くが女子の操。

金兵　出かした七浦。

七浦　さうしてお前は。

金兵　我れはこれより朱雀野に埋伏する、武士に對面。

七浦　そんなら暮れ方。

金兵　必らず共に。

七浦　コレ、待つて居るぞえ。

金兵　ドリヤ、一遍廻つて來うか。

ト唄になり、金兵衛、橋がゝりへ入る。七浦、奥へ入る。あと合ひ方。奥より仁作實は舍人之助、着流しにて出て

仁作　イエ〳〵、ちよつとでござりまする。仲居様方、そこへよいやうに頼みまする。ア、ヤレ〳〵、きつう醉うた事……何は兎もあれ、青柳さまのお身の上、この舍人之助始め、妹の勝野諸とも、この家へ入込みしは、何かに御不自由にないやうと、また其うちには、思ひがけない覺壽さまの御家來、宅內さままで入込まれし上からは、姫君のお身に氣遣ひなけねど、一時も早う廓の苦患が、お助け申したい事ぢやなア。

ト手を組み思案する。と酒宴事やうの合ひ方になる。奥よりおみち、振り袖娘の拵らへにて、本を抱へ、酒に醉うたるこなしにて出て

みち　仁作さま、爰にかいなア。

仁作　オヽ、誰れぢやと思うたら、おみちさまかいなア。

みち　ハイ、わたしや、きつう醉うて居るわえ。

仁作　ほんに、其やうに酒あがつたら、毒でござりまするぞえ。

みち　ハイ〳〵、畏まりました。堪忍しておくれなされえ。

仁作　これは又、おみちさまの酒機嫌で、わたしを術ながらさうと思うて。なんのお前が酒飲んだとて、わたしがなんと思ひませう。

みち　左樣なら、また誤まりましたわいなア。

仁作　其やうに云うてぢやと、わたしが方からあやまらねばなりませぬ……モシ、おみちさま、何から禮を云はうやら。だん〳〵とお前のお情、忘れは置きなせぬ。キツと恩に着まするわいなう。

トおみちの脊中へ手をかけて云ふ。おみち、こなしあつて

みち　そりや何がえ。

仁作　ハテ、知れた事、青柳さまのお身の上を。

みち　それは姉樣が吞み込んでの世話。わたしが禮を受けうかいなア。

仁作　それでもお前が世話をして。

みち　嬉しう思うて居るかえ。アイ、こちや餘所々々のお方に頼まれてな。

仁作　ムウ、外の者に頼まれたとは、そりや、誰れに誰れに。

みち　それをお前に云はうかいなア。

仁作　ムウ、馴染みを重ねしとは云ひながら、便りに思へど里の女中、もしや又、敵方へ漏れ聞えては一大事。

みち　何がいなア。
仁作　イヤサ、青柳さまのお身の上を。
みち　その頼み手はな。
仁作　その頼み手は。
みち　舍人之助さまに。
仁作　ア、コレ……そんなら外には。
みさ　なんのあらう。わたしやお前に……頼まれたぢやないかいな。
仁作　それでちつと落ちついた。
みち　やんがてお主の明りも立ち、元の通りの御代になつたら。
仁作　云ふにや及ぶ。その時こそは二人一緒に。
みち　夫婦仲よう
仁作　お宮仕へ。
みち　仁作さん。
仁作　おみちさん。
　ト仁作、おみち抱きつく。
天平　エヽ、なんの事ぢや〳〵。
　トこの前より天平、町人の形にて出かけて居て、この時割つて入り

仁作　途方もない事したなア。仁作、濟まんぞ〳〵。
仁作　モシ、天平さま、わたしがなんと致しましたえ。
天平　なんとした。コリヤ、あのおみちには、常からおれが惚れて居るけれど、靑柳が事があるに依つて、わざと色事せずと居るが、今のを見ては堪えられぬ。おみちをおれにおこせ。
仁作　アノ、おみちさまは爰なお娘御、わたしが自由にはなりませぬ。直相對になされませ。
　トおみちへ顏で呑み込ます。
みち　アイ〳〵、こちや常から天平さまが、わたしに氣のある事知つて居るに依つて、こちやどうでもぢやわいなア。
　ト仁作に呑み込ます。
天平　ヤア〳〵、そりや、ほんまか〳〵。
みち　お前の心任せになるわいなア。
　トわざと側へ寄る。仁作、見て
仁作　サア〳〵、腹が立つぞ〳〵。
天平　コリヤ太鼓持ち、わりやなんで腹が立つぞい。
仁作　ハイ、腹も立たうかいな。あんな娘御と、ひッついたり抱きついたり、アタ〳〵〳〵腹の立つ。

天平　ホウ。おみち、見や、わが身とおれが斯うして居るを、えらう怒つてけつかる。えらい法界悋氣な。ハ、ハ。
仁作　何がをかしい。アタ阿房らしい。
ト煙管打ちつける。
天平　コリヤ、おのれ太鼓持ちの分際で、投げ打ちさらすな。われに負けて居やうかい。べら坊め。
仁作　なんぢや、べら坊ぢや。オヽ、お前がべら坊ぢや。いま／＼しい。
トまた銚子、鍋打ちつける。天平もとさん打ちつける。
天平　何さらす。太鼓持ちめの猪口才な。
トあたりの物を抛る。トこの前より岩松、出かけ見て居る。兩人互ひに酒呑み道具抛る。天平、仁作をば引き据ゑる。とおみち、これを見て恟りして
みち　ア、コレ、舍人之助さまを。
天岩　ナニ、舍人之助とな。
天平　岩松、ぬかるな。
岩松　オヽ、合點ぢや。
ト岩松、天平は仁作にかゝろ、おみち、支へる。皆々よろしく立廻りある見得にて、誂らへの鳴り物になる岩松は仁作といろ／＼立廻りある。天平、おみちを捉へ、嫌らしき立廻り。おみち、跳れ退けて、岩松の足を持つて引きこかす。此うちに仁作、天平といろ／＼ある。天平、おみちを引きこかす。仁作、引き退け、抱きついたり、いろ／＼とかしみの立廻りになる。おみち金盥を打ちつける。この音にて恟りする。岩松、おみちを引き退け、金盥を天平の頭へかぶせる。皆々をかしみ模様よろしく見得にて返し。

造り物、通りの二重大襖。上手、一面の大床、掛け地、花活などよろしくあるべし。すべて奥座敷の體、右二重の眞中に、置き炬燵に細夜具かけ、十作、大盡の形にて、腰かけ、扇を開き、青柳を見て居る。上手に青柳、傾城の形にて、香を聞いてゐる。下手におかつ、花盆の花生へ花活けて居る。眞中の欄間に焙烙にお福の面附いてある額かけ、下手に岩永火鉢に茶瓶かけ、茶碗、茶臺、取り散らしあるべし。床の間に三味線箱など直し、すべて九條揚屋の大座敷、琴入り獨吟やうの唄にて道具とまる。

十作　アヽ、面白い〳〵、誠に色好まざるはなしと、誰れらが、云うたげな。斯うした所は又格別、どうも云へぬ〳〵。コレ太夫、其方はなんで其やうに、じめ〳〵として居るぞいなう。

かつ　ほんに太夫主、わたしに花を活けさして置いて、何をマア其やうに、物思はしい顔ぢやいなア。

青柳　琴の音に、峰の松風通ふらし、何れの緒より調べ染めけん。奥の調べに思はずも、過ぎ越し方を思ひ出し、心のやる瀬がないねいなう。

かつ　それはひよんな事でござんすなア。

十作　越し方を思ひ出すとは、さては昔の其方の身の上を。

青柳　琴の調べもいつしかに、忘るゝとなく打過ぎしに、奥の一手に思はずも。とんと辛氣な身の上ぢやなア。

十作　おれもとんと辛氣なぢや。コレ太夫、なぜ其やうに濟まぬ顔。但しは腹でも痛むのか。其やうにして居てはとんと接ぎ穗のないものぢや。コレ女中、一體太夫と寢るのはいつぢや。

かつ　ホヽヽ、あなたとした事が、そりや何を仰しやるぞいなア。

十作　何を云ふとは、おりや、太夫を買ひに來たのぢやもの。

かつ　でも、其やうな早急な。鋤鍬持つて耕しても、あなたのやうには。

十作　なんぢや、鋤鍬ぢや。

かつ　そりや農作の百姓手業。

十作　そんなら百姓と云ふ事を。

かつ　知らいでかいなア。

十作　エヽヽ。それが知れたか。ホイ。

かつ　オヽ、あなた、なんと遊ばしたえ。

十作　なんとはお前、おれを百姓と云うたぢやないか。

かつ　滅相な。なんのあなたを。

十作　イエ〳〵、云うた〳〵。

かつ　モシ、ありやあなたの事ぢやござりませぬ。ありや物の譬へを申したのぢやわいなア。

十作　ムウ、そんなら物の譬へか。譬へにしては惡い譬へぢや。わしや又、百姓と云うたものぢやに依つて、恟りして。ハヽヽヽ。

かつ　ホヽヽ。

十作　そんならよし〳〵。料簡せう〳〵……コレ〳〵、太

夫、なせ物を云はんぞ。但しはわしが、そもじのお氣に入らぬか。
青柳　なんのマア、あなたをどうして否であらう。斯う見たところが、女子をなづます殿御振りと云ひ、風俗なら定めしこの廓に、深いお馴染みがあるであらう。さうしてマア、全體あなたのお所はえ。
十作　ナニ、所か。それ〳〵、オヽソレ、長崎、オヽ、長崎々々。長崎の唐人町十丁目、唐物屋の甚助と云ふ問屋ぢやゆゑ、唐物は何でもあるぢや。コレ〳〵、これ見やいま流行る珊瑚珠の玉ぢや。この提げ物は、こなたに進上進上。なんとこれで解らうがの。
ト提げ物を無理に青柳に持たす。
かつ　ても、きつい粹樣ぢやなア。
十作　さては女中も梅がお好きか。
かつ　さうして、あなたの廓のお名はえ。
十作　ナニ、車の名か。先づ第一は御所車に水車、牛に引かるゝ大八車、材木を積む地車か。
かつ　それはあなた、何を仰しやるぞいなア。わたしが問ふは廓のお名が。
十作　ナニ、廓とは。

かつ　九條の里の揚屋町。
十作　出口に待合、辻から見ゆる揚屋入り。
かつ　遣り手が叩く、禿が招く。後へしやんとさしかけ傘。
ト花生の梅の花にて傘の仕方。十作、後へさゝせるこなし。十作、居ながら褄取つて
十作　死なざやむまい我が心……とサ云つたればさぞ面白からう。なんと太夫、厭く氣はないか。どうぢや〳〵。
青柳　否でござんす。
トづんと立つを、十作、袖を扣へて
十作　コレ、待ちや。
青柳　オヽ、好かん。
ト振り切り行かうとする。また留めて
十作　そんならいくら口說いても。
青柳　オヽくど。
十作　そりや又あんまり。
かつ　てもマア、厚かましい。
十作　それではあんまり酷らしい。
青柳　知らんわいなア。
十作　ホイ……、果報を知らぬ女子ぢやなア。

ト唄になり、十作、こなしあつて心を殘し、下手へ入る。あと踊り三味線になり。奥よりおきく、揚屋の娘にて出る。

きく　青柳さん、爰にかえ。

青柳　おきくさま。

かつ　お出でたかえ。

きく　ほんに、世の盛衰とは云ひながら、お痛はしいお身の上。御推もじ致して居りまするわいなア。

青柳　おきくさま、そりや何を云ひなさるぞいなア。

きく　ハテ、何もお包みなされますな。詳しい事は何もかも、舍人之助さまに承りましたわいなア。

青柳　そんなら様子を。

きく　サア、斯やうに申しまするは、元わたしの親達は、河内土師村の郡領さまに、使はれて居りまして中間奉公いつぞやお供先で、酒亂の上に喧嘩口論。その相手を仕留め、お仕置にもなるべき所を、旦那郡領さまのお情にて、やう／＼命は助かり、長のお暇を賜はり、その砌りに親どもは、病氣ゆゑにたうとう死去いたしましてござりまする。重ね／＼申して居りましたは、どうぞしてマア一度、御歸參遊ばしたら、御恩報じが致したいと申して居りました。わたしもどうせうか斯うせうかと、いろいろと迷ふうち、フトこの內へ養子娘に參りました所、承れば今度の菅家の騷動、どうなる事と案じましたが、緣でがなあなたが、これへお出で遊ばす様子を詳しう聞けば、あなたのお身の上、蔭ながらお世話申しまするも、皆々親への御恩報じでござりまする程に、何もキナ／＼思はずと、おきくどうせい斯うせいと、御遠慮なう仰しやつて下さりませ。

かつ　わたしは又、土師村の覺壽さまに、使はれましたる腰元。また兄舍人之助どのは、宮様へ舍人奉公。然るところ、この度の紅梅姫さま、宮様の御難儀と承りまして、この家へ曳船となつて入込みしも、姫君様を守護の役。

青柳　ムウ、さてはさう云ふ事でござんしたか。自らとても徒らゆゑに、父上まで御難儀遊ばし、その上宮様に引き離れ、どこにどうしてござるやら、案じ暮らす折柄、悪者どもに拐かされ、身は浮き川竹の流れ水、この家へ來ての勤め奉公。皆の衆、推量して下されいなう。

かつ　オヽ、お道理様でござりまする。それも浮世の廻り合せ。月にかゝつた叢雲も、やがて晴れ行く時節もござ

りませう。ナア、おきくさま。
きく　左樣でござりまする。何も其やうに、キナ〳〵思し召す事はござりませぬ。心置きなうお使ひなされて下さりませ……これはしたり、又何ぢややら物思はしい顏つき。コレ、おかつどの、なんぞ氣を慰めるものはないか…オヽ、それ〳〵、この間祇園參りの戻りに、買うて來たお福の面、全體あれは、どう云ふ謂れぢやなア。
ト額にしてある焙烙の面を下ろして來て
サア、太夫樣え。これ〳〵ちよつと御覽じませ。なんと、好い顏でござりませうがな、餘ッぽどよい面ぢやぞえ。
ト青柳へ見せる。青柳、辛氣なこなし。
サア、これはまた難儀な事ぢや。これも氣に入らぬか。
トよろしくある。あと踊り三味線になる。と十作、二重の上手より、十德、手に日傘と珠數を持ち、隱居の拵らへにて出る。皆々不思議のこなしあるべし。
十作　ノヤ〳〵、モウ〳〵、去にませうぞ。構はつしやるな、構はつしやるな……ヤレ〳〵、爰の婆樣の長話し、氣長い人には困り果てるぢや。それに又、内も繁昌する事である。ドレ〳〵、去なう〳〵……オヽ、これは〳〵、誰れも居ぬかと思うたら、太夫ぢやないか。御免々々……オヽ、誰れぢやと思へば、この里一番の青柳太夫、どうぢやな〳〵。なんと、よう知つて居やうがの。
青柳　あなたは、どなたぢやえ。
十作　どなたとは餘所々々しい。爰な婆樣とは講中内ゆゑ、常住爰な内へ來て、遊びまするぢや。こなさんを見る度毎に、オヽ、美しいよい器量、太夫の名は何と云ひませうと、婆樣に問へば、あれは青柳太夫と聞いた。でもマア美しい太夫ぢや。常からおれが、コレ、思うて居るぞ居るぞ。
かつ　なんの、お年寄りのあなたがかいなア。
十作　これはしたり、年寄りはどうしたものぢや。年は寄つても、變らぬものは人の氣ぢや。今時の若い者には、滅多に負けぬぢやて〳〵。コレ太夫、こなたさへ得心なら、引き拔いて、これから身請けして、わしが隱居所へ圍うて置けばよいぢやないか。
ト青柳に無理やりに抱きついて云ふ。青柳、嫌がる。
おきく、見兼ねて
きく　これはしたり、隱居樣、なんぼう其やうに仰しやつても、得心はござんせぬわいなア。
十作　そりや又、なぜ〳〵。

きく　されば、なんばう身請けして、隱居所へ圍はうと仰しやつても、肝心の金と云ふ病があるでないかいなア。
十作　オツと、氣遣ひせまい。さう云ふ事もあらうとは思ひ、ちよつと出るにもこの通りぢや。コレ、見や〳〵……
……。
ト懐より金出し
コレ、この通りぢや。隱居金の小遣ひ料。これをこなたに遣らうと思うて持つて來た。サア〳〵、進上々々。
かつ　ほんに、こりや金。
十作　丁度小判で百兩。
内方　御用金の盜賊待て。
ト奥にて云ふ。
十作　エ、。
ト十作、大愕り。
内方　イヤサ、御用金の盜賊、詮議が殘つた。待てと云はば、マア〳〵待て。
大勢　ヨウ〳〵。
ト内にて大勢の聲にて響める。此うち十作、愕りして居る。三人これを見て笑ふ。これより壬生の鳴り物になる。

十作　今のは、なんぢや。
きく　ハヽヽヽ、ありや奥の物眞似でござりまする。きつい愕りの仕様わいなア。
トこれにて十作、顫へをやめて
十作　ナニ、物眞似とは。
きく　サア、ありや藝者衆が芝居事して、役者の物眞似をするのぢやわいなア。
十作　ア、、嬉しや〳〵。そんなら今のは、役者の物眞似か。おりや又ほんまかと思うて、ヤレ〳〵、肝を冷し居つた。ア、、嬉しや〳〵……サア太夫、返事はどうぢや聞かう〳〵……これはしたり、どうしたものぢや。なぜ其やうに濟まぬ顏ぢや。ア、、搗てゝ加へて騷々しい壬生の鳴り物。あれを思へば、丁度おれが身の上。
かつ　大盡ならぬ
青柳　御隱居さん。
きく　嫌がる者を無理やりに
かつ　責め念佛の早鉦を
十作　ほつかり出して身請けして、朝夕樂しむ手活けの花。
きく　サア、その花盜人の不用心。

十作　イヤ、盲目の川渉り。
青柳　百萬夕顔叶はぬ事。
十作　それは地獄のお詞ぞや。
青柳　イヽヤ、譯なき內は極樂の
十作　さりとは往生安樂させてたべ。
きく　ハテ、殺生石のなまなりで、面を直す
四人　大念佛。
トおかつ、三味線彈き出す。三人いろ〳〵入れ替りあり、おきく、隔てる。十作、邪魔になると云ふ仕方。青柳、始終背ける。十作、口說くこなし。おきく、ならんと云ふ仕方。十作、引き退け、青柳に抱きつく。青柳、振り拂ふ。おきく、始終邪魔する。十作、引き退け、青柳に抱きつく。おきく、見兼ねて側にある日傘を廣げ、青柳を見せぬやうの仕方。三人補取りの身振りよろしくあるべし。これよりおかつは三國一を唄ふ。おきく、三味線箱の風呂敷をかぶり、焙烙のお福の面を着て邪魔する。この工風よろしく
〽三國一のサッサ、富士山、玉椿の八千代までもと契りしに。
〽去らるゝ意地の去つた男め、騙されて負ふ子が、よう去なん。
〽さりとは辛やサッサ、さながらたらちねの、恨みも深きふくれ顏。
かつ　これはしたり隱居樣、馴染みもない太夫主に、あんまりな。サア〳〵、早う去なしやんせいな。
十作　そんなら出來ぬか。コレ、年寄りは可愛がるぞや。
かつ　エヽ、しつこい。ならんわいなア。
十作　そりや又、あんまり酷い。
二人　オヽしつこ。
十作　ア、緣なき衆生は度し難しぢやなア。
ト唄になり、十作、こなしあつて下手へ入る。三人始終合點のゆかぬ思ひ入れ。あと踊り三味線になる。
きく　ほんにマア、世界廣い事でないか。年は寄つても色の道は忘れられぬものぢや。一體マア、どこの隱居樣ぢやえ。太夫主、知つてかえ。
青柳　なんのマア、近付きでもなし。わたしや知らんわえ。
きく　それに又、今のやうに懇ろに。
青柳　サア、合點のゆかぬお方ぢやわいなア。
かつ　年に似合はぬ色好みと云ひ

青柳　ほんに、あんまりの事で、をかしいわいなア。
三人　ホヽヽヽ。
　ト三人笑ふ。あと踊り三味線になる、この時橋がゝりより、十作、木綿やつし、羽織にて、茶道具屋の拵へにて、手に風呂敷包みを持ち出で
十作　ハイ〳〵、左様なら御免下されませ。直ぐにお目にかゝりましてござりまする。
　ト十作、出て、皆々を見て
オヽ、これは〳〵太夫様、この間は暫らくお目にかゝりませぬ。御機嫌にござりまするか。
青柳　お前はどなたぢやえ。
十作　ハイ、わたしは茶道具屋でござりまする。この間お話しの、香箱を持つて參りました。
青柳　何もわたしや誂らへた物は。
十作　へヽ、左様ならあなたぢやござりませぬか。又わたしが聞き違ひましたのでござりませう……ナニ太夫様これはマア、大方外々の太夫様でござりませうが、これ御覽じて下さりませ。餘ッぽど好い蒔繪でござりまする。また細工も隨分よう出來てござりまする、モシ〳〵、お入用なら差上げたう存じまする。どうでござりまする、どうでござりまする。
　ト香箱を青柳に無理に渡す。
青柳　イエ〳〵、滅相な。こんな物貰うて、なんに致しますぞいな。
十作　モシ、其やうに云はずと、マア、取つて置いておくれなされませ……オヽ、さうぢや。まだお目にかける物がござりまする……モシ、これを御覽じて下さりませ。この置き物、よい獅子でござりまする。ちよつとマア、手に取つて御覽じませ。太夫様〳〵々々……この香箱も一式揃うてござりまする。このまた置き物、鏡臺の向うへ直してお置きなされませ……モシ〳〵、代金は大事ござりませぬ。同じ事なら進上いたしたうござりまする。マアマア、お持ちなされて下さりませ〳〵。
　ト無理に勸めて、青柳に渡す。青柳、嫌なこなし。おきく、おかつ、顏見合せて
きく　モシ〳〵、太夫主様は、何もかも持つてぢや依つてマア〳〵、いりませぬ程に、また外へお見せなされませ。
十作　イエ〳〵、外へも皆上げて參りました。コレ、三つ殘つてござりますゆゑ。差上げまする。とつとわたしは

残つた物を持つて去ぬる事が否でござりまする。そこで誰れなりとも、貰うてやらうと云ふ人があるなら、遣つて歸りまする。こりやわたしが性分でござりまする……モシ〳〵、太夫樣、よい器量でござりまするな。どうぞお世話にはなりませぬか……モシ、なんと忘れて居りました。この水指を御覽じませ。モシ、なんと好いのでござりませう。こりやコレ、鏡臺の前に置いて、含嗽水を取るにようござりまする。これを進上いたしまする。代金はどうでもようござりまする……モシ〳〵、女中樣どんなものでござりまする。

かつ　それはマア、太夫主も忝ないと云うてゞあらうけれど、今日はマア、持つて去んで、また今度の折、どうなりと致しませうに依つて、マア〳〵今日は。

十作　イヤ〳〵、モシ、今度は今度、また外の代物を持つて參りまする程に、どうぞ太夫樣を、わたしに賴むわいなア〳〵。

きく　イエ〳〵、こりや堪忍しておくれなされ。マア〳〵今日は持つて去んで、また明日でもお出でなされ。早う去んでもらひませう。

十作　さう云はずと、貰うておくれなされ。

きく　マア、ようござんすもの。

十作　どうぞマア貰うて。

きく　これは又しつこい。太夫主はたんとあると云ふのに。

十作　其やうに云はずとも。

ト無理に突き出していろ〳〵云ふ。おきく、おかつ、難儀なこなし。この前より奥より天平、岩松、儀助、利兵衞、出かけ居て、互ひに愕りして、顏見合せて

天平　コリヤ、盜人め、見つけたぞ。

岩松　動きさらすな。二才め。

ト矢庭に皆々寄つて、十作を打つたり踏んだりする。十作、愕りして俯向いて居る。天平、岩松、無性に叩く。おきく、中へ分けて入り、支へて

きく　マア〳〵、待つて下さんせ〳〵。こりやマア、どう云ふ譯でござりまする。

天平　譯と云うたら、爰にある百兩の金、また珊瑚珠の提げ物、奥の袋棚へ入れて置いて、酒飲んで居るうち紛失したのぢや。

儀助　イヤ又、この道具は、わたしが賣りに參りました。話しして居るうちに、いつの間にやら取られました。

利兵　コレ〳〵十作、おれが呑み込んで借りてやつたこの大盡の形、又よい衆の隱居の形、われが着て居る着物まで借りてやつた。サア、もうならん。いま脱いで戻せ。
岩松　おれが内で物が見えいでは、お客へ對して濟まん。それぢやに依つて、二才めをぶちのめすのぢや。
天平　オヽ、さうぢや、腰骨拔いてやれ。
ト兩人して十作を毆る。利兵衛、隔てゝ
利兵　モシ〳〵、其やうになさるゝな。着物が穢體になりまする。とても事に、着物を脱がしておくれなされませ。
儀助　オヽ、さうぢや〳〵。着物が破れたら、貸物屋が迷惑ぢや。
ト皆々寄つて脱がす。儀助は道具を箱へ精出して入れる。此うち着物を脱がし、寄つてかゝつて、十作を毆る。おきく、見兼ね留めて
きく　マア〳〵〳〵、待つて下さんせ。さう云ふ事ならお前樣方、隨分尤もぢや〳〵が、兄樣、お前までが同じやうにせいでもよいぢやないか。お客樣はともあれ、もしもの事があつたら、なんとせうと思はしやんす。
岩松　イヤ、聞かん〳〵。われは又、女子の分際で、横合ひからあの二才めを、なんで庇ふ。われはやう〳〵この頃、爰な内へ養子にうせた娘ぢやないか。おりや又、全體爰の旦那ぢや。血脈ぢや。それぢやに依つて、自由にするが何とした。われはすッ込んで居い。
きく　サア、すッ込んで居るけれど、何も又、血脈、爰へ出さいでもよいぢやないか。取られた物はないと云ふぢやなし、元のやうに戻つたら、もう料簡したがよいぢやござんせんか。挨拶は時の氏神と云ふ事があるマア……お客樣方、モウ〳〵、料簡しておやりなされませ。兄樣、もうお前も、よい加減に料簡なされ。また達てと云はしやんすと、わたしも女子でこそあれ、サア、云ふと物に角が立つぢやないか……とは云ふものゝ、怖いお方ぢやなア。
天平　よいワ、おきくが挨拶なら料簡せう。その代り、おれが顔を立て、青柳が身請けさせい。
青柳　イヽエ、わたしはおきくさまの。
天平　揚げは揚げで、身請けは身請け。なんと、無理ぢやあるまいがの。
きく　そりやモウ、太夫主の心次第。
岩松　面白い。これから奥へ行て、母者に云ひつけ、身請

けの手付けを取らす程に、さう思へ。
天平　盗まれた代物は戻る。祝ひ事に奥で一杯やらう。道具屋も奥へ來い。
儀助　それは有り難うござりまする。
利兵　コリヤ十作、代物は戻つたら、云ひ分はないワ。貸し賃だけ此方の損ぢや。貴樣の體は勝手にさらせ。
岩松　天平さま、なんとマア、盗まれた物は戻る、太夫の身請けの手付けを入れて、祝ひ事に一杯やりませう。併し、あの二才の阿房らしい顔、御覽じませ。
天平　思へば／＼、命冥加なこの態は……サア、皆も奥へ來い。
岩松　サア、マア、お先へござりませ。
ト唄になり、岩松、先に皆々附いて入る。おきく、青柳と顔見合す。暮れ六ツの鐘鳴る。しんめりとした合ひ方になる。十作、チッと顔を上げて見て、皆と顔見合せ、恥かしき思ひ入れ。青柳、鏡袋より薬を出しおかつに渡す。おかつ、心附き、火鉢にかけてある茶瓶の湯を汲んで、十作に持つて行く。十作、チッと戴く。おきくはこの間側にある太夫の着替へを十作に着せる。皆々氣の毒な思ひ入れ、おきく、青柳と囁き、

青柳、十作の側へ行て
青柳　ほんにマア、いづくの殿方かは知らねども、わたしがやうな不束な者を、よく／＼に思へばこそ、盗みしてまで思うて下さんす。嬉しうござんすが、儘ならぬわたしが身の上。これぎりに思ひ切つて下さんせ……その譯と云ふは、サア、どうも話しはならず、この事ばかりは堪忍して、去んで下さんせえ。お前の恩はキッと着ます程に、わたしはどうもならぬに依つて、今日はマア去んで下されませ。モシ、頼みまする。
十作　モシ、太夫樣、恩に着るとの一言は、この上もなきわたしの本望。なんのお前、これぎりで思ひ切る程なら、なんの始めから恐ろしい盗みや騙りまで致しませう、それに今のやうに大勢に顔恥かゝされ、その上ぶつ打擲にしられても、お前ゆゑぢやと思へば、大事ござりませぬ。わたしがやうな在所者は否であらう。そりや尤もぢや尤もぢやけれど、お前が得心して下されぬと、わたしは此まゝ思ひ死いたしまする程に、お慈悲ぢや、お情ぢや、どうぞわたしが頼みでござりまする　枕こそ交さずとも、せめて一夜の添臥しになりと、寝ておくれなされませ。モシ、拜みまする／＼。

青柳　マア〳〵、待つておくれなされませ。それ程にまでサア、よく〳〵の縁でがなござんせう。情を常とするわたしが、聞き分けんではなけねども、云ふに云はれぬわたしが身の上、とあつて此まゝで別るれば、死ぬると云はしやんすとの事。ほんに義理に迫つたこの場の難儀。どうしたらよからうなア。

きく　こりや聞かしやんせずばなるまいわえ。

青柳　なんと云はしやんす。

きく　アイナ、あれ程までに身を凝らし、人様の物を盗ましやんすも身慾でない、皆お前に下さんす心。さほどの心底を無下にするは、そりや傾城の張りぢやないぞえ。どんな云ひ約束があらうとも。こりや抱かれて寝やしやんせずばなるまいぞえ。

青柳　コレ、おきくさま。お前までが其やうに、何もかも知つて居ながら。

きく　サア、ようござんす。何もかも知つて居る〳〵程にマア、わたしに任して置かしやんせな。サア、譯と云ふは、爰ではちつと云はれぬさかいに、何事も得心さしやんせいなア。

ト青柳に承知して居ると云ふこなし。

青柳　そんならよいかえ……お前よいなら、マア、得心ぢやわいなア。

きく　オヽ、よう得心さしやんした。それでこそ全盛の太夫主……モシ〳〵、サア、太夫主は得心ぢやと云うてでござんすぞえ。この戀、わたしが取持つぞえ。

十作　エヽ、そんならお前樣のお世話で、アノ太夫樣を。

きく　アイ、抱かして寝さしますが、お前嬉しいかえ。

十作　モシ、これが嬉しうなうて何と致しませう。エヽ、忝なうござります。

きく　サア〳〵、善は急げぢや。コレ、おかつどの。お前はちつとも早う、ナア。

ト おきく、おかつと囁く。おかつ呑み込んで

かつ　そんならお前が……よし〳〵。ドリヤ、お寝間を取らうか。

ト 唄になり、おかつ、奥へ入る。十作、いろ〳〵喜び髪を手で撫でつけたりして居る。青柳は濟まぬ顔して居る。

きく　サア、首尾はようござんす。嬉しいかえ。

十作　嬉しうなうで何と致しませう。

きく　そんなら初夜を合圖に。

瀬川路之助の青柳　市川米藏の十作

十作　どれへ参じませう。
きく　庭から廻つて、奥の小座敷で。
十作　とんとお勝手が知れませぬが。
きく　そりや、わたしが居るわいなア。
十作　そんならコツソリ参じませう。
きく　コレ、待たして置くぞえ。
十作　おきくさま、よいかえ。
きく　ハテ、細工は流々、お前の心も。
青柳　わたしが心も。
きく　解けてしつぼり芽を出して、色様さまにするわいな
　ア。
十作　そりや豊年でござりまする。
青柳　どうもわたしは。
十作　ハテ、水にも入らねば、日焼けにも合はさぬ。手入
　れはこの百姓。
きく　モシ、もう差合ひは御無用。
青柳　ほんに堪忍。
きく　わたしも堪忍。
青柳　アレ、堪忍ぢやと。
きく　ハテ、堪忍かなめの床入りは、後方忍んでお出でい
なア。
十作　モシ、有り難うござりまする。
きく　ア、コレ、密かに〳〵。
　トあたりを見て
必らず待つて居るぞえ。
ト道具廻る。十作は下手に入る。おきく、青柳は道具
に附いて廻る。返し。
・造り物、正面、二重の二間の數寄屋、前側障子嵌め
あり、上手に同じく一間半の障子屋體、この間廊下
に橋かけ、前に柴垣、手水鉢、植込み、取り合せよ
ろしく、見越しの松、いつもの所に切り戸口、雪積
りある。下手二階出しかけ、この前に一面の柴垣取
り合せよろしく、合ひ方にて道具とまる。
ト下手の二階の障子の内にて、天平、丈右衛門、おか
れ、酒盛の體にて、この障子開く。
かれ　イヤモシ、天平さま、雪降りの夜の景色、斯う飲ん
だ所は、なんとどうも云へませぬ、
天平　成る程〳〵、奇麗々々。斯うした所を見ては、なか
なか異國へ歸る氣はないてや。

丈右　時に天蘭敬、御自分と云ひ、拙者とても、時平公の仰せを蒙むり、菅原の餘類の奴輩を、詮議の爲にこの遊興。
天平　この天蘭敬も、時平公より過分の金を戴き、今この日本に足を留めるも、時平公の御恩。それゆゑ心をかけてござる紅梅姫を、詮議する役目を請合うたが、ナニおかね、其方に頼み置いたる青柳が素性。
かね　されば、それゆゑ隨分心かけて居りますが、とんと解りませぬぢや。
丈右　隨分ともに、ぬからぬやうに、合點か。
かね　ようござります。わたしに任してござりませ。時に大分理に入りました。酒に致しませう。
天平　サア〳〵飲め〳〵。
〽夜をこめて、鳥の空寢を忍び出て、心の末は深草や、深くも契る草枕、立ち並びつゝもすそ踏む、忍ぶ思ひや稻荷山、いづれ浮世とこす紅葉。
ト雪チラ〳〵降る。唄のうち下手より十作、頰冠り、跣足にて、しを〳〵と出て、切り戸を開け入る。障子の内を見て喜ぶ思ひ入れある。と上手の障子屋體よりおきく、手燭を持ち、青柳の手を引き連れて出て、眞中の屋體の蒲團の上へ坐らす。青柳、始終、氣の濟まぬこなし、おきく、青柳に囁く。十作、この體を見て恥かしきこなし、外へ出たり胸撫でおろし、また内へ入る、とおきく、十作を待つ心にて下へ下り、切り戸明けて
きく　もうお出でさうなものぢやが。
十作　モシ、參じましたが、まだ早うござりますかえ。
きく　オヽ、ござんしたかえ。最前から太夫主も、爰に待つてぢや。サア〳〵、爰へござんせ。
ト十作の手を取る。十作、顫うて
十作　モシ、わたしや一向恥かしうて……ちよつと出直して參じませう。
きく　なんのお前、恥かしい事があるもので。わたしが附いて居るわいなア……折角お出でたもの、去なないでも大事ない。サア、ござんせ〳〵。
ト無理に手を取つて引き上げる。十作、顫うてゐる。
オ、嫌や、このお方わいなア。顫うてぢやわいなア。サア、太夫樣、爰にかえ……コレ、モシ、見なさつたかえ太夫主は爰にぢやぞえ。それ〳〵、よう御覽じませ。
ト十作、見て俯向く。青柳を見物へとつくり見せて、

おきく、行燈の灯を消す。十作、合點のゆかぬこなし。

十作　モシ、なぜに暗がりになされました。

きく　イヤサ、暗がりにしたは、オヽさうぢや。モシ、太夫樣が云はしやんす事には、火が灯してあると恥かしいといなア。

十作　そんなら、なんでござりまするかえ。太夫樣も恥かしいと云うてゞござりますかえ。

きく　アイナア。

十作　そんならわたしが恥かしいは、尤もでござりまする。

きく　サア、斯うして寢かすからは、この子を見捨てる事はならんぞえ。

十作　なんのお前さん、そんな事して、わたしに罰が當りまする。

きく　そんならよし／＼。サア、ゆつくりと寢やさんせえ。

十作　ハイ、お有り難う存じまする、

きく　積る話しは屏風の內で、オヽ嬉し、

トおきく、屏風引き廻して

オヽ辛度。仲人役は、なか／＼しんどいものぢや。ドリヤ、奧へ行かうか……これであの子の思ひも晴れる。これも何ぞの因緣であらう。

ト云ひさし口を押へ、上手の屋體へ入る　後をかしみの合ひ方になる。天平、この前より出かけ居て、この樣子を見て、そろ／＼出てあたりを窺ひ、屏風の側へ行て、をかしみの身振りよろしくあると屏風より人が出る音がするゆゑ、下手の柴垣へ忍ぶ。十作、屏風の中から出て、思ひ入れ、そろ／＼緣先へ出て手水鉢にて手を洗ふ。此うち上手の屋體に、青柳、傾城にて立つて居る。おかつ、手燭を持ち見せて居る。十作、手を拭き／＼、何ぢや明りがするゆゑ、合點のゆかぬこなしにて上手を見ると、青柳、十作と顏見合せて

十作　ヤア、お前は。

青柳　十作どの、堪忍して下さんせえ。

ト忙しく障子をさす。十作、悄りして

十作　エヽ／＼、今のは慥かに靑柳太夫。そんなら今わ、が抱いて寢たは。

ト忙しなう屏風を明ける。內におとき、袖にて顏を隱し顚うて居る。十作、暗がりゆゑ顏の見えぬ思ひ入れ

にて、下へ連れて下りて撫で〻見て
ヤア〳〵、これは違うてある。暗がりゆゑ黒白は分らず、とつくりと顔は知らねど、いま見たのは青柳であつたに、外の女子を突きつけて、一番おれに吹替へ喰したのぢやな。如何におれが百姓ぢやて、あんまりぢや〳〵〳〵わいなア。エヽ、腹が立つ〳〵。よし〳〵、騙したがよいか。どうする青柳め、待つて居い。

ト上手の屋體へ駆け込まうとするを、おとき、後より抱き留めて

とき　コレ〳〵十作さま、マア〳〵、待つて下さんせ下さんせ。

十作　誰れぢや〳〵、爰放した〳〵

ト振り切り行かうとするを、いろ〳〵入れ替つて抱き留めて

とき　コレ〳〵、マア待つて下さんせ。お前の腹の立つは尤もぢや〳〵〳〵。これには深い樣子のある事。マアマア、待つておくれいなア。

十作　コレ女中、一體お前は誰れぢや。お前からして解らん。人に頼まれるかて、大概知れたものぢや。大事の大事の……阿房らしい、ゑらいお前好きぢやなア。

とき　アイ、サア〳〵〳〵、腹か立たうけれど、氣を靜めて下されませ。十作さま、わたしぢやが忘れてかいなア。わたしぢや〳〵〳〵、わたしぢやわいなア。

十作　なんぢや、わたしぢや〳〵、どこのわたしぢや。

とき　アイ、わたしぢやが忘れてかいなア。

十作　なんぢや、忘れて居るか。さう云ふ聲は聞いたやうな聲ぢや……慥かにお前は、アノ隣の村の甚三が妹の。

とき　アイ、ときでござんす。

十作　エヽ、ヽ、ヽ。そんなら今わしが屏風の内で寢たのはおときさん、お前か。

とき　アイナア。

十作　おときさんかいなア。

トおときを突き飛ばし

ムウコレ、さうしてマアお前は、どうして爰な内へ。

とき　サア、その譯は、恥かしい事ながら、一通り聞いて下さんせえ。これまで兄樣の目顔を忍んで、常住お前の内へ行て、わたしが方から頼んでも、そんな事はおりや嫌ひぢや否ぢやと、聞き入れて下さんせぬ、胴慾な十作さま、女子と云ふ者は、嫌がられる程猶思ひが増して、どうか斯うかと思ふうち、人の話しを聞けば、傾城に心

をかけ、今日爰の內へござんした事、聞くと直ぐに其まま、兄樣にも隱して、駈落ち同然にして、先へ廻つて今宵の仕儀。爰なお茶屋を頼んで、靑柳さまと入れ替つてもらうたのぢやわいなア。これと云ふもお茶屋のお情。これ程思うて居る程に、わたしが心のうち、推量して下さんせえ。定めしお前は腹が立つであらう。堪忍して下さんせ。わたしやモウ死んでも本望ぢやわいなア。

十作　成る程、常からお前の云ふ事を聞かぬゆゑ、その恨みは尤もなれど、どう思ひ廻しても、あの靑柳め、騙されたと思へば、腹が立つ〱。どうも料簡がならぬ。おときさま、堪忍さんせや。おりや、堪へ袋が切れたさうぢや。

ト駈け込まうとする。おとき留めて

とき　コレ、マア、待つて下さんせ。何もかもわしから起る事。

十作　イヤ〱、放しておくれ〱。

トおとき、取りつくを振り切り行かうとする。この時上手の屋體よりおきく、手燭を持ち走り出て、十作を留めて

きく　コレ、待たしやんせ〱。

ト後からひん抱へて留めるを、突き放し行くを留め

ア、コレ、誰れぞ來て下さんせなア〱。

トこの聲にて宅助、仁作、手燭を持ち、走り出で

宅助　こりや何事ぢや。マア〱、待たつしやれ〱。

ト留めて兩人顏見合せ、十作、恟りして

十作　ヤア、其方は。

宅助　兄分の十作どのか。

十作　宅內か……ハア、面目ない〱。

仁作　そんならこの人は。

きく　お前の兄分かいなう。

宅助　左樣でござりまする。コレ兄貴、一體どう云ふ譯ぢや。樣子を云はつしやれ。コレ、十作どの。

十作　宅內、樣子と云ふは、あの太夫に騙されたのが腹が立つ。退いてくれ〱。

宅助　コレ十作どの、あのお傾城を誰れぢやと思はつしやる。あの靑柳太夫と云ふのは、以前おらやこなたが勤めて居た、お主樣だぞや。

仁作　コレ、こなたが以前勤めてござつた、河內の國士師の古主のお娘御の顏。見忘れてござるか、十作どの。

きく　わたしは、何も知らねども、菅家へ御養子にお出で

なされた
四人　紅梅姫さまぢやわいなア。
十作　エ、、、、。……そんなら青柳太夫と云ふは、おれが前方勤めて居た、覺寿さまの
四人　お娘御の、紅梅姫さまでござるわいなう。
十作　ハア、。
宅助　コレ十作どの、こなたはなう……コレ十作どの、今さら云ふには及ばねども、親の代から御恩になり、奉公勤めて居るうちに、こなたは常から病身ゆゑ、奉公引いて土百姓　兄弟分のおらが代つて勤めるうち、菅原の今度の騒動。よもや知つての事ぢやあるまい。
仁作　知つてとあれば、我れ〳〵が
宅助　兄分とて容赦はござらぬ。
きく　十作どの。
三人　返事はどうぢや。
ト四人キッと云ふ。十作、悔む思ひ入れ、顔上げて
十作　ハア、知らなんだ〳〵。こりやマアなんと云ひ譯いたしませう。コレ宅内、何ぢや知つてか知らぬかとは、そりや何を云ふのぢや。知つてどうしてこんな無法な事が出來やう。胴慾ぢや〳〵。知つて出來る事なら、おりやモウ疾に死んでしまふ。又お姫様もお姫様、さう云ふあなたの身の上なら、なんで相手から斯う〳〵云ふ事ぢやと、仰しやつて下さりませぬ。お胴慾でござりまする〳〵……モシお二人様、いま宅内が云ふ通り、わたしが懺悔、お聞きなされて下さりませ。元わたしが親どもは、堤畑の十左衛門と申しまして、河内の百姓、だん〳〵しもつれまして、一歳年貢を計り兼ね、難澁の折柄、土師村の先旦那郡領さまのお情にて、事なう相濟み、その御恩報じ、わたしを御奉公に差上げました時は、まだお姫様はお三つばかりの時。常住わたしが背に負ひまして、お守り致しました孃様が、此やうに御成人遊ばしました事、とんと存じませなんだ。お免されて下さりませ〳〵……それから程なう菅家へ御養子にお越し。わしは又病氣にてお暇貰ひ、弟分の宅内を差上げ、勤めまするうち、彼れめは奉公大事に致します、わたしは仕馴れた百姓業、大事にするうちに、去年の冬京參りの戻り、この里を通りかゝり、出口で出會うたあなたのお姿。美しいお傾城ぢやと思ひ、あんな女子があるものかと、思や思ふ程、惚れたとこそ云へ〳〵、姿の見えるだけは見て居りましたが……と申しまするも知らぬゆゑ、知らぬが佛

と云へど、今で思へば知らぬが鬼でござりますわい。それから在所へ歸りましても、夜が晝やら、晝が夜やら、忘れた事はござりませぬ。惡い事にはなり易く、人樣を騙したり、物を借つたり、僅かな金を拵らへ、人を雇うて大盡風、いろ〳〵の樣を替へ、なんの詮ない拵らへ事揚句の果には打擲に合ひ、耻面かくもお主の罰。それでもまだ〳〵氣もつかず、ウカ〳〵と忍び來て、一度ならず二度三度、これに懲りぬ者がござりませうか。今朝からの一部仔什。モシ、お姫樣、これでござりまするこれでござりまする〳〵……まだもわしが仕合せは、宅内と云ひお前樣方、今の時よう留めて下さりました。もしもの事があつた時は、お主叩いたその科で、大方重いお仕置にあひ、一家一門に嘆きをかけ、まだその上の恥さらし、今の時にわたしがこの手足が、マアよう折れぬ事でござりました。モシ、お二人樣、よろしくお詫びなされて下さりませ。宅内、料簡せい、お姫樣、お免されて下さりませお免されて下さりませ〳〵いなア。

仁作　誠に懺悔に重罪も滅すと云へば、ようマア心を直された。斯く名乘り合せし上からは

きく　心さへ改むる事なら、姫君樣へお詫び申して、元の主從。

宅助　コレ十作どの、サア、爰が心の入れ替へ所ぢや。思案して返事さつしやれ。

三人　サア、返事はどうぢや。

十作　イヤモウ、改めいでなんと致しませう。お二人ともよいやうに。

きく　サア〳〵、これでお前樣の心も安堵。コレおときさま、お前も定めし嬉しからう。ねきへ行てしつぽりと。

とき　ハイ〳〵、モシ、おきくさまとやら、今日始めて參じまして、無理な頼みも無にもせず、聞き入れて下さんして、十作さまに逢ひました。此やうな嬉しい事はござんせぬ。ハイ〳〵、有り難う存じまするわいなア。

きく　あれを聞いたか、十作さま、あれ程可愛らしい志し、それを無足にさしやんすと、却つて殺生。隨分可愛がつて上げさんせえ。

十作　それはマア、大きにお世話樣でござります。左樣ならこれから在所へ歸りまして、この子の云ふ事も聞きます。隨分仲よう致しますでござりませう。ナア、おときさん。

とき　アイ〳〵、必らず忘れて下さんすなえ。これと云ふ

も皆おきくさまのお庇。ハイ、有り難うござりまする。
きく　それで兩方納つて、こんなめでたい事はないぞえ。
仁作　この上ともにお主の御恩。
きく　紅梅姫さまの事、又この子の今夜の事も、必らず忘れる事はならんぞえ。
十作　なんの忘れう、たつた今の事。もう斯うなつたら仕方がござりませぬ、
宅助　これでこなたも安堵。コレ、十作どの、この家に姫君樣がござる樣子を、河内の土師村へ、おときも一緒に爰から、ちつとも早う知らしたがよい。
十作　成る程、さうぢや。そんなら皆樣、おときさん、お出で。
きく　ちつとも早う〳〵。
十作　合點ぢや。
ト踊り三味線になり、十作、おとき、連れ立ち、走り入る。
きく　なんと、これで無難に納まつたぢやないか。
ト奥より岩松、天平、出で
天平　樣子は聞いた。靑柳と云ふは菅原の紅梅姫。わい等も殘らず餘類の奴等。時平公へ連れて行く。覺悟さらせ。

きく　そんなら兄さん、お前。
岩松　オヽ、この天蘭敬に賴まれた。
宅助　菅原に仇せし大惡人。
天平　それ知られたら、斯うして居られぬ。
ト天平、逃げかけるを、宅助、留める。岩松、おきくと立廻りになる。仁作、支へる、双方一時の見得にてバタ〳〵にておかつ、走り出る。
かつ　コレ〳〵皆さん、靑柳さまを侍ひ衆、裏道から連れて行きましたわいなア。
ト云ひ捨て、走り入る。
宅仁　それをやつては。
ト宅助、天平と立廻りあり、おきくと岩松、立廻る。仁作、支へ、キツと留めて
仁作　我れはこれより姫君の、後を慕うて。
きく　爰構はずと、ちつとも早う。
仁作　合點ぢや。
ト凛々しく向うへ入る。天平、逃げうとする。宅助、いろ〳〵立廻り、天平は逃げて入る。宅助は後を追うて入る。後におきく、岩松、殘つて
岩松　ヤイ、女郎め、邪魔ひろぐな。そこ退きさらせ。

きく イヽヤ、滅多にやつて堪るものか。

岩松 エヽ面倒な。

トこれより鳴り物入りの合ひ方になる。岩松、後を追ひかけ行かうとするを、おきく、隔てヽやらぬとする岩松、簪にて打つてかヽる。おきく、引き合せたり、面白い立廻りよろしくあり、御工風の立廻りにて、双方引ッ張りの見得にて、よろしく幕。

櫻時廓美談（終り）

豐後がくだく
邯鄲の枕
式部があやつる
莊子の蝶

三世相錦繡文章

五幕

初演繪番附の大詰

三世相錦繡文章――おその六三

序幕

仲町福島屋の場

常磐津連中

役名――小柴六三郎。福清の抱へ、おその。醫者、梶野長庵。請負人、七郎助。廻し、太助。同、喜助。下女、おはな。娘、おまつ。女房、おかぢ。福島屋清兵衞。

本舞臺、平舞臺。正面、三尺の暖簾口、この脇、三尺、瓦燈口の延喜棚、鈴を下げ、この下、用簞笥の書割り、これに續いて、上の方、三尺の開き襖、下の方、茶壁、三味線掛けの書割り、ズッと上手、折り廻りの障子屋體、この内に二枚折りの屛風、夜具蒲團、爰におその、病氣の體にて寢て居る。いつもの所に門口、庇に御神燈の提灯を下げ、下手、一間庇付きの勝手口、これに福島屋と記せし腰障子を建て、すべて深川仲町、福島屋のかゝり。門口に若い者二人、羽織、着流しにて、小風呂敷包みを提げ、立ちかゝり、内に下女おはな、挨拶して居る。流行り唄にて幕明く。

若一　私しどもは、相川町の若い者でござりますが、今度、町内の濱川屋で賣出しを致しますが、どうか御町内のお世話役衆のお名前で、びらを一つお貰ひ申したら存じますが、親分からよろしく御披露をお頼み申します、

若二　わつち等も據ねえ譯合ひで、頼まれました事でござりますが……これは、御披露の印までに、御覽に入れます。

ト包みの中より猪口の箱と口上書きを出す。

はな　親方が戻りましたら、左やう申しまするでござりませう。

兩人　何分お頼み申します。

ト橋がゝりへ入る。これより常磐津の淨瑠璃になり

〽云ひ捨てゝこそ立歸る。世を夢と、莊子が蝶を住み替へて、譯深川のおなじ名に、そのと替へても呼び馴れた、仇名かしくと夕まぐれ、廻しが下駄の音高く。

ト向うより廻し太助、會所の提灯を提げ出て、直ぐに
　門口へ來て
太助　御免なさい。山本でござりますが、かしくのおその
さん、お名指しでござります。どうか、お早く。
はな　アノモシ、おそのさんは、病氣で引いて居てゝござ
んすが。
太助　サア、その病氣は、寄り場へもお斷わりはござりま
したが、山本のお客は、かしくさんが吉原にお出での時
分、お馴染みの舟越屋ゆゑ、お顏さへお出しなされればよ
いとの事。
はな　ちよつと、聞き合はして見ませうわいなア。
　ト奥へ入る。奥より女房おかぢ、出て來り
かぢ　てもマア、生憎な。昨夜から御膳も食べぬ程の事。
よいやうにお斷わりを申して下さんせ。
太助　イヤ、それ程の事とは知らず、受けましたが、大事
にして下さりませ。
〽と人を思ふも身を思ふ・身勝手云うて走り行く。おか
ぢは屏風をそつと明け。
　ト太助、下手へ入る。おかぢ、上手の障子を明け
かぢ　コレ、おその、藥なと吞みやらぬか……オヽ、お湯漬
を少し、たべて見やらぬか。
　トおその、煩らひ居るこなしにて
その　まだ欲しうはござりませぬ。
かぢ　少し摩つてやりませう。
その　有り難う存じます。何から何まで、お氣を付けての
御介抱。
かぢ　アヽ、大事にかけるは、どこの親方も同じ事。一日
も早う座敷へ出てもらはねば、わしが肩身が狹い。この
春、本家へ年始に行つた戻りがけ、判人の善六が所へ寄
つたれば、あの梶野の長庵どのが、兄の威光を笠に着て
住替へに下がつた其方を捕へ、無理の有り條、殊には、
禿にして使うて居た。今年六つになる子まで、引き放す
との無得心、見兼ねてわしが手付けを渡し、其方親子を
抱へたが、一旦其方を世話にして、子まで生したる六三
さんとやらのお身の御難儀、搗てゝ加へて兄御の無慈悲、
それやこれやが病の種。この上にどのやうな事が出來や
うとも、惡いやうにはせぬ程に、恥かしい事、悲しい事、
必らず聞かせてたもんなや。
〽意見まじりの介抱に、如才内儀の氣を兼ねる、おその
は始終目に涙、夫の事に取りまぜて、兄の企みのいとゞ

猶、明けて云はれぬ胸の中。
かぢ　どうぢや、少しは開きが付いたかや。
その　ハイ、お庇さまで、落ちつきました。おまつは、どれに居りますか。
かぢ　主の晝寐をして居る側に、草双紙を見て居るわいなう……何にせい、落ちついた間に、お米からの粥を拵らへさせませう。其うちにも、風に當つては悪い。サア、横になつて居や。
ト掻巻を掛けてやる。
〽氣轉に屏風引きそばめ、勝手へこそは立つて行く。
トおかぢ、障子を引きたて、奥へ入る。
〽跡は病苦に夢現。
ト薄ドロ〳〵になり、屋體の内より、心と云ふ字を引いて上げる。向う揚げ幕の内にて
七郎　サア、一緒に歩め〳〵。
ト七郎助、羽織、着流し、生酔ひのこなし。長庵、醫者の拵らへ、紋附きの羽織、ぱつち、尻からげにて、七郎助を肩に掛け、出て來たり
長庵　コレサ、危ねえ。しつかりしにやいけねえわな。
七郎　エ、イ、生酔ひ本性違はずだ……コレ、かしくの事はいゝかよ。
長庵　ハテ、ようござります。
ト門口へ來て、兩人、内の様子を窺ひ
長庵　清兵衛どのは、お宅かな。清兵衛どの、おかぢどの……ア、、空店ださうだ。
〽ちよつと云ふにも惡を持つ、詞に心奥よりも。
かぢ　アイ〳〵、いま參ります。コレ〳〵、わが身達、程よう焚いてたもいなう。
トおかぢ出て來る、
七郎　オイ〳〵お内儀、大事のお客様が御來臨なされたに。
かぢ　オヽ七郎助さん、長庵さん、ようござんした。きつい御機嫌な事でござんすなア。
七郎　なぜえ。お前に振舞つてもらひはせぬ。我れ等が好きで我れ等が呑んだ。それが悪いか。
かぢ　ホヽヽ、其やうに云はしやんすと、挨拶に困りますわいなア。
長庵　イヤ、困ると云ふはこの長庵、この中の挨拶は。
かぢ　サア、かしくと同胞の縁切つてさへ下さんすりや、後金はお前の云はしやんした通り。併しあの子は、昨日から寐てぢやわいなア。

長庵　それは知らなんだ。ハア、この屛風の內にか。ドレ、ちよつと容態を。

〽障子明くれば、內にはおその。

その　おかみさんの御介抱で、やう〳〵快う寐たと思うたら、兄さんの高聲で、また氣合が惡うなつた。今日は何も云はず、直ぐに戾つて下さんせいなア。

長庵　そりや、病氣の障りになるとあれば、歸りもしようが、先づ脈體を。

〽と揉み手して、うはの空目に首傾げ。

ト長庵、おそのゝ脈を見て

イヤ、これは時候當りぢや、幸ひ丸藥がある。お內儀、お世話ながら、白湯を一つ。

〽云ひざま出だす懷の、鼻紙挾みの間より、胡散らしくも藥袋紙、心ならねば顏背け。

その　なんぢややら知れもせぬ丸藥。わたしや否でござんすわいなア。

かぢ　ほんに、折角の思し召しながら、良玄さまがお藥を下されて、必らず外の藥は服ませなと仰しやつたゆゑ、

長庵　そりやモウ醫者はさうしたもの。なんの大事の妹に、麁相な物を服ませてよいものか。ソレ、よう嚙み碎いて、オヽ、白湯ぢや〳〵。

ト件の藥を、おそのに服ませる。

長庵　七郎助どの、おそのは藥を服みましたぞや。

七郎　オヽ、この上は、爰の內儀から受取つた二十兩の手付け金、それ返してしまやれ。

〽投げ出す財布取上げて、紐を解く間もあら不思議や、俄かにおそのが顏色變り、悶へ苦しむ體に恟り。

ト七郎助、財布を投げ出し、長庵、財布を取上げ、金を出さんとする。おその、俄かに腹の痛む思ひ入れ

その　アイタヽヽ。

かぢ　コレおその、どうぞしやつたか。コレ、どうぢや、物を云やいの〳〵。

ト介抱する。

その　サア、今の藥を服むと、其まゝお腹の中が。

長庵　苦しいか。ありや月よどみの流し藥だ。

その　エヽ。

長庵　併し、命に障りはねえ。これも又、六三めが胤、產み落しては足手がらみゆゑ、服ませた藥。

かぢ　大それた藥を服ませしとは、コレ長庵、手附けを渡せば抱への奉公人。

初演の錦繪　福島屋の場

長庵　イヤ、後金済まねば、おれが妹。
七郎　金さへ渡せば、おれが妾、大事ないわえ。
その　エ、、お前の妾になる程なら、只一思ひに死ぬ覺悟。
〽とは云ふもの、腹な子に、月日の光りも見せずして、水に流すがいぢらしい、人を助くる藥こそ、藥とは云ふべけれ。生ある者を闇から闇、なんの藥であらうぞいなア。
〽聲を限りに身を悚はし、悶え嘆くぞいぢらしゝ、共に涙の女房は、おそのを引寄せ、氣を勵まし。
かぢ　オ、道理ぢや、この上は、長庵どのが逆さまな事云はうとも、其方の望みは、此方の夫婦が請合うて、叶へてやる程に、奥の圍ひへ床を敷き、早う良玄さまをお呼び申して、養生してたも。おはなや、おはな。
トおはな出て、おかぢ共々介抱して、上手の屋體へおそのを入れ、障子をたて切り
サア長庵どの、後金はこなさんの望み通り渡す程に。
長庵　面白い。金がさの方へ落すが當世。
七郎　コレ長庵、百兩と相場を極めて、持つて來た内金二十兩は、手附けを返し、殘り八十兩、貴樣へ渡しさへすりや、おそのは餓鬼ぐるみ、おれが代物。
長庵　ハテ、おかぢどのゝ方で、いくらに買ふか知れませぬうち。
七郎　イヤ、百兩と極めた上は、この金はお主の懐へ。
ト以前の財布を出す。
長庵　ハテ、マアそれは。
〽爭ひ戻せば押し返し、遣つつ返しつ揉み合ふ途端、茶の間の障子打ち抜けて。
障子が破れて一間の内。
七郎　慥かにあそこへ。
兩人　オ、さうだ。
〽まつかせ合點と有頂天、臑を踏ん込む一間より、ずんでんころりと投げ足に、側杖ぐつと長庵は。
ト此うち、兩人、奥へ踏ん込まんとする。奥より清兵衛、廣袖、平括けの帶の拵らへにて、煙草盆を提げ出て、兩人を投げ返す。
長庵　アイタヽヽ。
清兵　長庵どの、七郎助どのもお出でか。樂寐してお構ひ申しもしなんだ。女房ども、御馳走でもしやれ。
長庵　イヤ、構はつしやるな。いま七郎助どのゝ投げ足の相伴で、腹中充滿、食べたも同樣。

七郎　コレ／＼長庵、なぜそんな弱い音を出す。福島屋清兵衛、なぜこの七郎助を投げたのだ。

清兵　サア、寐入つて居たれば顏も知らず、面白い夢のどうぶくらへ、物をも云はず飛び込んで來た狼藉者。

七郎　イヽヤ、狼藉ぢやアねえ。おれが財布を投げ込んだゆゑ。

清兵　この事か。

ト以前の財布を出して見せる。

長庵　如何にも、小判で百兩入つて居る財布、手附けさへ返しや、妹は七郎助どのへ渡す約束。

〽と云ふを納戸で聞くおその、病苦を忘れてまろび出で。

その　申し旦那さん、わたしや、あの方へ行く事は否でござんす。よい思案をして下さりませ。

清兵　ハテ、おれも爰へ出るからは、指を啣へて引ッ込まれもしねえ。

〽云ひさま財布の金改め。

ムウ、これが貴樣の金ならば、面白い話しもあるのサ……ナニ、長庵どの、この中女房が手渡しにした二十兩は櫻銀。その一步銀で返すと云はつしやるのかな。

長庵　その一步銀を、いつまで持つてゐるものか。妹に懸望の七郎助どの、その二十兩も返してくれて、六十兩渡さうといふ利分の相談。

清兵　そんなら、この小判で手附け金を、戻すと云ふのか。これは受取れぬぜ。

長庵　小判は通用せぬといふお觸れでも

清兵　ありはせぬが、昨日の今時分、さるお屋敷で紛失した小判、裏に三ッ星のこの極印。

七郎　ヤア。

かぢ　そんなら七郎助どのは同類で

清兵　長庵どのは、上前取りか。

長庵　イヽヤ、愚老は。

清兵　二人ながら、引ッ縛つて代官所へ。

兩人　サアそれは。

清兵　と云ふやうな清兵衛でもない。この金持つて、足元の明るいうち、歸らつしやい。

〽投げ出す財布を七郎助、怖々取つて内懷。

長庵　そんなら、今のあの金は。

七郎　なんの、そんな怪しい金を、取扱ふおれぢやねえ。

長庵　そんなら、早う手附けを返して

七郎　サア、返す事は返すが、オ、さうだ。とても返すなら、一歩銀の耳を揃へて返す。また爰の抱へになるにもしろ、惡足のある女を合點で、證文したと云はれたら、人先へ出て口をきく、福清とも云はれまいかえ。
清兵　コレ女房ども、この奉公人の洗ひ方は、お主がしたと云やつたか。
かぢ　サイナア、この子の身分に限つては。
長庵　イ、ヤ、六三めが屋敷を出てから、手を切つたと思うたら、まだ骨がらみになつてゐる、證據といふのは、妹が腕に。
〽と逃げる手先を引ツ捕へ、隱す腕の入れ黑子。
六三命と彫つたるは、なんと證據でござらうがな。
〽目先へ突き出す理の當然、きつちり詰まる煙管の火皿、おそのが腕に押しあてれば。
ト清兵衞、煙管の火皿を、おそのゝ腕の入れ墨へ當てる。
その　アツ、、、。
かぢ　マア、可哀さうに、どうしやつたぞいなう。
ト介抱する。
清兵　コリヤ、昨夜の持ち越しで、氣合の惡いこのおその。醫者より、藥より、福清が情の灸……サ、どうせ、持病は上なほし、表面の緣を切り艾、それより早い荒療治は、餘ツぼど熱くと、堪えて居やれサ。
〽熱い切ない辛抱を、させも露の命まで、消ゆると知らで外面には。
トこれを相の山のかゝりになり
〽諸行無常の鐘の聲、寂滅爲樂と響くなり、聞いて驚ろく人心。
ト向うより、六三、編笠を冠り、胡弓を彈きながら出て、直ぐに門口へ來て彈いて居る。
清兵　折も折とて、表へ立ちし相の山。
かぢ　ほんにマア、人の心も知らないで、早う去んで下さんせ。
〽やら腹立ちの捻り錢、門口明けて。
トおかぢ、立つて延喜棚の前より、お捻りを持ち來て、門口を明け、六三と顔見合せ
ヤア、お前は六
ト云ひかけ、戸を締める。
長庵　なんと。
かぢ　イ、エイナア、この中彈かせた六段戀慕、今度來た

なら、この子に逢はして。イヤサ、このおそのに胡弓を搯らせ、合せものして聽きませうと、約束はしたれども、時も時とてこの……サア、この子の病氣。

長庵　へ、、その合せ者は離れ者、胡弓の合はぬ浪人の、手事に乘らずと、見切りが肝心。清兵衞どの、そんなものぢやアござんせぬか。

清兵　そりやハヤ、義理も情も水調子の、仇彈きならば、こけやうが、外れやうがいとはねど、互ひの心も合の手に、二世と音締を定めたら、引かぬが江戸の女郎の意氣地。ハテ、人の落目をすくひ撥は、うるさく思へど、捨てぬが人情。

七郎　イヤモウ、三味線の受け答へ。七郎助、感心、さりながら、六三はオテチンチヤンココなし、どうでしまひはどう乞食だ。

　トおそのゝ顏を見て

サ、、腹を立てずに、とつくり思案を。

その　エ、、知らぬわいなア。

〽思や二人が生き長らへて、居るも不思議のうちなるか、久し振りにて相の山。

　ト此うち、おその立つて來て、門口を明け

ヤ、お前は

清兵　ア、コレ。

　ト唄の節、兩人、思ひ入れ。

エ、、搗てゝ加へて間の惡い時、イヤサ、間拍子の惡い一向な、でも三味線、いらざる調子の狂はぬうち、手の内遣つて去なしてしまやれ。

かち　アイ、合點でござんす。

〽逢瀬せわしき三日の月。

七郎　どうやら怪しい。

清兵　ハテ、かけ構ひのねえ物貰ひ。それよりは、おそのがおりのり。

長庵　そんなら奧で、清兵衞さん。

七郎　とは云へ、小胸の。

　ト門口へ思ひ入れ

かち　ハテ、惡いやうにはせぬ程に。

清兵　マア、ござらつしやりませ。

〽詞は輕く聞ゆれど、どこやら氣味の惡者ども、主夫婦に誘はれ、心殘して入りにける、奧口見廻し相の山、編笠取つて內へ入り。

六三　コレかしく、逢ひたかつたわいなう。

その　オヽ六三さん、よう顔見せて下さんした。
〽互ひに手に手を取りかはし、兎角いらへも、泣くばかり。
六三　サヽ、娘が事もあらまし聞いた。いよ〳〵爰の内へ證文してか。但し七郎助の方へ行く氣か。
その　サア、その事でござんす。
〽云はんとせしが疾よりも、添はれぬ縁と諦めて、死ぬるが今際の思ひ出と、胸を定めて氣を勵まし。
諦らめて下さんせ。わたしや七郎助さんの所へ、行かねばならぬわいなア。
六三　エヽ、そりや、兄の長庵が得心せぬゆゑか。
その　兄さんには構はねど、大切な色紙とやらの紛失も、お前の知つた事ではなけれど、わたしといふ者あつたゆゑ、放埒に質入れしたかと、お疑ひにて其お姿。わたしと縁が切れたなら、御歸參の取持ちを、さしやんすお方も、あるまいでもござんせぬ。わたしとても苦勞せうより、おまつは元より、兄さんまでも樂々と、過ごしてやらうと云はしやんす七郎助さん、まんざら憎うもない程に、わたしや行く氣でござんすわいなア。
六三　コレ〳〵かしく、イヽヤイノ、おその、わが身は本氣で云やるのか。おまつといふ子のある上に、お腹にもわしが胤を宿したを、苦にして煩らうてゐやるとの噂。どうぞ逢ひたい、逢ひたいと。
〽思ひ付いたる門付けの、袖乞ひするとは情ない、世が世の時なら鎗一筋、馬も引かせる家柄の。
小柴の嫡子六三郎が、身の成り果か口惜しい。まだこの上に、どのやうな、辛い苦勞も堪えやうと、思ひ詰めたるわしを捨て、
その　サイナア、脊に腹は替へられぬとやら。わたしの體一つなら、仕やう模樣もあらうけれど、可哀さうに生ひ先のあるおまつまで、苦界の淵に沈めるが口惜しさ。
六三　サヽ、さう思ふのは尤もながら、この身が本地へ歸參すれば。
その　措かしやんせ、お前の歸參も聞き飽きた。飽きたによつて、美しう別れて退いて下さんせ。ハテ、いとし可愛も昔の事、浮氣な戀に昇り詰め、手鍋下げよと口には云へど、實は乘りたい玉の輿……越し方思ひ合せて見れば、辛い苦勞もお前ゆゑと、今日この頃は、心の底からお前の顏を見るのが、否になつたわいなア……サヽ、斯う云はれるが口惜しくば、切らしやんせ突かしやんせ。

どうしてお前に殺されう。浪人すれば心まで、さうも未練になるものか。…　エヽ、腑甲斐ない、愛想の盡きたお人ぢやなア。

〽びつしやりうつゝ胸の闇、あやも知らねば六三郎、せぎり苦しき心を鎭め。

六三　六年この方云ひ交し、ついに一度わしが云ふ事、背いた事もない者が、打つて變つた愛想盡しは……オヽ、こりや誰れぞに水をさゝれたのぢやな……なんのマアわしに限つて、其方をのけて、浮氣心があつてよいものか。例へこの上、一年二年離れて居ても、互ひに彫つた入れ黒子、おその命のこの腕を、抱いて寐れば其方と添臥し、わしに變りはないわいなう。

その　ホヽヽヽ、お前はともあれ、わたしはお前に別れた證據。

〽右の腕を押しまくれば、

六三　ヤ、こりや燒き消して……フム、そんならもしや。

〽と懷へ、手を差入れて、二度恟り。

ヤヽヽヽ。

その　サ、これぢやに依つて。

〽もうこれまでと脇差を、探れど丸腰、重なる無念。

六三　おのれ畜生、待つて居よ。

その　立ち端がなさに血相して、行かしやんすが、內へ去んでも脇差は。

ト六三を引き留める。

六三　ヤア、浪人しても六三郎、重代の刀は放さぬ。

その　そんなら、見事、アノわたしを。

六三　云ふにや及ぶ。

その　それで望みも

六三　待つてうせう。

〽無念の淚に心も空、小宿をさして走り行く、跡見送つて張り詰めし、おそのは正體泣き倒れ、淚淵なすばかりなり、やゝあつて顏を上げ。

その　モシ、六三さん、さぞ腹が立つたでござんせう。

〽命をかけて誓文の、腕の墨は義理に消え、左孕みは男の子、歸參をなさば跡目ぞと、喜ばしやんした甲斐もなう、おなかの嬰兒は、

兄さんの、邪慳な仕方に跡もなく、云ひ譯なさに死ぬ覺悟。

〽せめてこの世の思ひ出に。

お前のお手にかゝりたく、心にもない愛想づかし。この

云ひ譯は、長い未來で致しまする。
〽娘のおまつは頼もしい、親方さんに餘所ながら。
お頼み申せば、何一つ、心にかける事もなく。
〽迷はず臨終しまするると、手を合してぞ伏し沈む。餘所
の嘆きは白紙の、障子引き明け長庵が。
ト奥より長庵、少し醉ひたるこなしにて、出て來り
長庵　コレおその、てまへは鹽梅が惡いと云ひながら、そ
こに何をしてゐるのだ……アヽ、また愚痴を並べてゐる
のか。六三の事は思ひ切り、七郎助の方へ行けば、今日
は芝居、明日は花見、御新造々々と持てはやされ、な
んでも云ふ目が出た上に、このお兄いさんも左團扇。七
郎助の金を絞り取り、いゝ時分に見切つて來い。その上
ぢやア又われが好いた所へ遣つてやるワ。ウンと云ゝウ
ンと云へ……頭を振るは、否と吐かすか。
その　サア、今にも主が歸參をしたら、お前を樂に。
長庵　おきやアがれ。お臍が茶を涌かすワ。一生經つても
歸參の出來ねえといふ譯は、六三が科になつてゐる、小
倉の色紙の行くへが知れたか。
　ト　おその、頭を振る。
ソレ見ろ、知れめえがな。

その　サテ、それゆゑに、草を分つて詮議最中。
長庵　べら坊め、ばつたか赤蛙を搜しやアしめえし、草を
分けて搜したとて、なんでそれが知れるものか、例へ知
れてもその色紙は、大枚の質に入つてゐるワ。それもお
れか七郎助の心に隨へば、たつた今でも、手渡しすワ。
その　エヽ、又しても兄さんの、嘘ばつかり。
長庵　嘘か誠か、ソレ、拜ませてやらう。
〽と懷より、兼ねて企みし上包み、袱紗ほどけば飛び立
つおその、ちやつと持ち替へ。
どつこいしよ、得心もせず引上げて、六三に遣る氣か。
イヤ、おつかねえ晝鳶。これもおれが百兩で、質請けし
たゆゑ折を見合せ、金儲けをしにやアならねえ。
その　サア、その金も、御歸參の上にては。
長庵　イヽヤ、七郎助と寐ぬうちは、金山築いても、賣る
事ならねえ。
その　さう云はしやんすりや、斯うして。
〽透を窺ひ引き取るを、放しはせじと爭ふ色紙、中より
引き裂け、二人は轉倒。
長庵　ヤヽ、小倉の色紙を
その　例へ裂けても夫の云ひ譯。

長庵　さう云や、いつそ、破れかぶれ。
〽兩方取つて寸々に、引き裂き捨てる傍若無人、折柄奥より駈け出るおまつ。
ト長庵、おそのゝ持ちたる、半分の色紙も引取り、二つながら引き裂き捨てる。奥より娘おまつ、走り出て
まつ　ヤア、母さんを。
長庵　エヽ、邪魔な餓鬼めだ。
〽蹴飛ばすはずみ、わつと一聲、息絶ゆれば。
その　ヤヽヽ、娘は死んだか……もうこれまで。
〽と長庵が、差添抜き取り、切りつけるを、さしつたりと身を交し、手早く柄元しつかと押へ。
長庵　ヤイ〱、わりや、兄に刃物三昧するな。
その　例へ兄でも無理非道に、夫の望み絶ちたれば、死物狂ひ覺悟さしやんせ。
〽また切りかくる修羅道の、隣り二階は連れ彈に。
〽人の心と花の露、濡れにぞ濡れし鬢水の。
ト兩人よろしく立廻り。
長庵　コレサ、危ねえ、放せと云ふに。
その　イヽや、放さぬ。
長庵　放しやアがらにやア、うぬ、斯うして。

その　アイタヽヽ。
〽油斷見すまし後袈裟。
ト兩人、刃物を爭ふ。この途端、長庵、後より一かせ切られる。
〽道理流れの身ぢやものと。
長庵　ヤ、わりや切つたな。兄殺しだぞ〱。
〽人に謳はれ結ひたての、櫛の齒にまじかけられて、つくづくどうか笄の。
ト立廻つて、また長庵を切つて
その　竹鋸も男の爲。
長庵　ヤア、人殺し。
トおその、その口を押へる。
ク、ヽ、口を押へやがるな。ク、ヽ。
〽格子揚屋の別れ坂。
その　敵同士の兄弟親子。
〽今日ぞこの世の別れ坂、のた打つ兄を又一かせ、切つて互ひに倒るゝ目先。
ト長庵、ガツクリして倒れる。おその、おまつの側へ這ひ寄り
コレ、おまつやアい……こりやモウ、絆は切れたか。可

哀やなア。
ト泣き落し
モシ兄さん、お前を殺したは、わたしが死んだその跡で、六三さんへどのやうな、難儀かけやうかと案じられ、惡いながらも勿體ない、お前ばかりを殺しはせぬ。おまつを連れて、後より追ひ付き、死出三途。
〽他人交ぜずに越えまする、免して下され兄さんと、止め刺す間に主の聲。
ト奧にて
清兵　おそのや〳〵。
その　ヤ、、あの呼び聲は旦那樣。
〽なんと詮方かたへなる、蒲團を二人に打ちかくる、途端に見交す顏と顏。
ト清兵衞出て
清兵　おその。
その　エ、。
清兵　これは又、きつい悔りのしやう。兄貴は、もう歸つたか。
その　ハイ、兄さんは今し方……オ、、爰によく寐てゞござんす。
清兵　おまつも、伯父御の側で寐て居るか……それはさうと、先刻から、餘ッぽど間があるが、藥を服みやつたか。
その　ハイ……イ、エ。
清兵　コレ、誰れぞ、おそのが藥を、溫めて來てやらねえか。
ト奧にて
かぢ　アイ〳〵。
〽アイと答へて女房が、手づから茶碗藥鍋。
トおかぢ、盆に藥茶碗を乘せ、持ち出て
今日は、いろ〳〵な人が來て、とんと氣が付かなんだ。堪忍してたも。
清兵　おれが內にゐる時は、何も人愛想するにやア及ばねえ。まだ碌々馴染みのねえうちは、此方から氣を附けてやらにやアいけめえぢやアねえか。
その　イエ、モウ、何から何まで、おかみさんの御介抱。其やうに仰しやつて下さりますと、却つて罰が當りますわいなア。
かぢ　其やうに、遠慮しやるが病の種ぢやと、良玄さまが仰しやつた。一體、其方の病の元は。
清兵　これはしたり、役にも立たぬ事を云ふな、おそのだ

といつて、年はいかねえが苦勞人だ。併し、十九や二十は、箸の轉んだ事も氣に病むものだが、誰れやらの發句に、今日は今日の風に任せる柳かなと、兎角浮世は風次第。めでたくかしくの几帳面を取りかへて、おそのその可く候で、やつて置きやれな。

〽口合ひ交り、何氣なく、云はるほど、猶玉の汗、かかる折から門口に。

ト向うより、廻しの喜助、足早に出て、直ぐに門口へ來て

喜助　モシ、尾花屋でございまする。おそのさんに、御病氣ならば、ちよつとお座敷へお顏ばかりでよいとの事。お賴み申します。

ト引返し、入る。

かぢ　なんの事ぢやぞいの。自分の云ふ事ばかり云つて、廻しにしては聞き馴れぬ。

〽立ち上がるを押とゞめ。

清兵　エヽ、麁相な奴だ。この頃來た下廻しの喜助だ。

その　モシ旦那さん、わたしや座敷へ行きたうござんすわいなア。

清兵　よしにしや。丑の時參りが、夕立にあつたやうな形をして、どう座敷が勤まるものか。

その　さうではござんすが、お馴染みのお座敷なれば。

清兵　ハテ、又ぶり返すと、取つて返しがならねえ。さうして今にも降つて來さうだ。

〽覗けば暗き誰哉の蔭、さてはさらかと推量の、胸に主は。

ト清兵衛、立つて門口を明ける。この以前、六三郎、頰冠り、一本差しにて出て來り、小蔭に彳み窺ふ。清兵衛。それと見て、何氣なくこちらへ來り

ムウ、それも却つて、氣が晴れてよからう。

かぢ　お前もマア、わつけもない。昨夜から、飯さへたべぬ病人を。

清兵　ハテ、座敷は又、さう案じたものぢやねえ。

かぢ　そんなら、身仕舞ひせずとも、ちよつと行て、直ぐに戻つておぢやや。

清兵　コレ〳〵、その代り、襠裲は立派にしてやりや。慥か、尾花屋の客衆は、御大身の大一座、是非下着は白無垢、上着はなんぞ派手な物を着せて、帶はこの中拵らへた、蝦夷錦の方が派手でよからう。

かぢ　わたしもさう思うて居ますわいなア。

〽わたしもさうと小袖櫃、あくる手ぐりも手ばしかく、木地にきばえの檜の木枉、板頭とぞ見えにける。
清兵　オヽ、奧へ行つたら、酒の燗が出來過ぎやしねえか。膳立てをして、寄越してくんな。
かぢ　アイ〳〵……サアおその、奧へ來や。
その　アイ〳〵。
トおかぢ先に、おその付いて奧へ入る。引き違へて、おはな、木地の膳へ酒肴の道具を並べ、持ち出て
はな　旦那さん、奧へお膳を直して置いてござりましたわいなア。
清兵　そりや、とんだ事だつた。
ト膳を引寄せ、猪口を取り上げ
カウ、一つついでくんな。
ト酒盛りよろしく、奧にて
かぢ　サア〳〵、よう出來ましたわいの。
トおその、座敷出の拵らへ、おかぢ付いて出て來り
なんとこちの人、病中ながら、立派な押立てゝはござんせぬかいなア。
清兵　そりやその筈の事。この仲町での一枚看板、早く病氣が癒してやりたい。

ト此うち、おそのは神棚を拜み、こちらへ來り
その　左やうなれば、行て參じまする。
トこなしにて云ふ。
清兵　ア、コレ、其方も病中の門出。ちよつとなりと口を祝つて。
ト持ちし杯を出す。
かぢ　ほんに、延喜に杯を取りや。ドレ、酌をしてやりませう。
〽銚子取る手も氣も輕く、主は膝を立て直し。
トおかぢ、酌をする。
清兵　イヤ、おその、野暮らしいが聞いてくんな……おれも以前は中裏で、子供も大勢抱へ込み、店頭もした身の上であつたが、近年の不仕合せから、この横町に逼塞し一人か二人の子供を抱へ、とり續いてゐる渡世、大黒柱とも思ふ其方が、もし病氣で死ぬか、色事で駈落ちでもすると、迷惑なのはおればかり、と云つて、金儲けをしやうのなんのと云ふ料簡でもないが、どういふ事か、おれは一番お主が不便だ。聞けば、六三郎どのとやらも、きつう難儀をしてぢやさうな……おれも若い時に覺えのある事よ。互ひに思ひ思はれた身の詰まり、死なうか、

死にやんせうと、剃刀を咽喉へ當てたが、イヤ／＼と辛抱したればこそ、暑くなく寒くなく、斯うして暮らしてゐるといふもの、なんでも人は辛抱が大事だ。必らず無分別な事は、よしやれ。相談づくなら其お人の、顔の立てやうもありさうなもの。

かぢ　ハテ、爰ばかり日は照らぬわいなう。

清兵　お主が云ふ通り違ひない。コレおその、貧乏しても藺島屋清兵衞、ひよんな事などして、おれの顔の穢れるやうな事をしてくりやるなよ。これを話さうばかりだ。サア、客人が待つてござらう。早く行きな。

その　なんのマア、左やうな事を。

かぢ　必らず悪う聞きやんなや。オヽ、あの寄せ場の者は云ひ捨てゝ。サア、わしが送つて。

清兵　なんの、それにやア及ばねえ。ツイ角を曲るばかりだ。

その　ハイ、わたしや一人でよろしうござりまする。左やうならおかみさん、旦那さん、隨分ともに御機嫌よろしう。

かぢ　アレ、この子とした事が、遠い所へでも行くやうに、

清兵　べら坊め、御機嫌よろしくとは、不斷の挨拶だ。併し、病上がりのお主こそ、隨分達者で……サア、機嫌よく勤めて來やれ。

その　ハイ。

〽ハイとばかりに主の顔見上げ、見下ろす心の暇乞ひ、涙隠して潜り戸を、出づる外面に彳む六三。

ト此うち、おその、門口へ出る。六三、忍び居て

六三　おのれ、先刻の

トおその、手早く認め置きし書置を出し

その　モシ、これ見て下さんせ、

〽差出す書置、心ならずも常燈の、暗き灯影に讀み下す、内には清兵衞、腕を組み。

ト此うち、六三は文を取つて讀む。内には清兵衞、表の様子に聞き耳立つて思ひ入れ。

かぢ　モシ、こちの人、最前から、どうやら濟まぬお前の顔つき。

清兵　ハテ、我が抱への奉公人を、駈落ちさせにやるのだものを。

かぢ　エヽ、そりや又どうして。

清兵　サア、これゆゑに。

かぢ　オヽ、こりや長庵と、可哀やおまつも。

清兵　サ、この病ばつかりは、耆婆扁鵲の良劑でも癒らねえ。これぢやによつて、今のやうに云ひつけてやつたは。一日なりと女夫にしてやつたなら、彼奴が望みも遂ぐる道理と、衣裳も着せ替へ、立派にして出してやつたは、賣り代なし、その日〳〵を送らせやう爲……ア、追手の者はやらねえが、痛い足を引摺つて駈けるであらう。馴染みの淺い者なれど、心素直な生れつき、可愛い事をさせたなア。

かぢ　ほんに思へばいぢらしい。わたしも素振りを見てゐるゆゑ、先刻のやうに意見すりや、泣いてばつかりゐたわいなア。

〽夫婦諦らめ泣く聲を、立ち聞く二人は手を合せ、渡る方なき情の程、伏し拜み〳〵、思はずわつと聲を上げ泣くを聞きつけ。

かぢ　アレ、誰れやら表に。

〽立ち寄るおかぢを押し退けて、包み引ツ提げ門の戸明け。

ト清兵衛、おかぢを隔て、おそのゝ着替へ包みを投げ出し

清兵　二人の死骸は引請けた……ソレ、これも筐だ。持つて行け。

六そ　何から何まで。

ト七郎助、暖簾口に窺ひ居て

七郎　どうやら怪しい。

ト門口へ行かうとするを、清兵衛は、七郎助を突き廻し

清兵　まだ引け前だ。

ト押へるを木の頭。あれ又憎やの唄になり

ゆつくりとさつしやりませ。

ト双方よろしく。

ひやうし幕

二　幕　目

洲崎の場

十萬億土の場

淨瑠璃「道行蝶吹雪」常磐津連中

役名——小柴六三郎。藝者、おその。三途の川の婆。靑鬼。赤鬼。

本舞臺、通し常足の二重。土手の蹴込み、正面、深

川洲崎の土手より、高輪八山品川のあたりを見たる遠見、灯入りにして浪手摺り、二重の飾り。上下、蘆の茂みにて見切り。二重上手、玉椿の生垣、この側に、柳の立ち樹、同じく吊り枝。下の方、植込みの張り物、此うち、常磐津連中の浄瑠璃臺、淺黄幕を掛け、本釣り鐘、浪の音にて幕明く。

ト頭取出て、浄瑠璃名題、太夫連名役人觸れあつて入る。風の音のやうに、薄くドロ〳〵を打ち、差し金の蝶二羽、下手より上手へ引いて取り、鳴り物打ち上げ知らせにつき、下手の張り物を打ち返すと、爰に常磐津連中、居並び、浄瑠璃になる。

〽春更けて、江戸の淡路の上總山、洲崎に通ふ濱千鳥、幾夜寢覺めの關もなく、今は身で身をうら紫の、褄にかしくを反古染めに、覺悟も對の曠小袖。

ト淺黄幕知らせにつき、切つて落すと、爰におその、六三、對の形、腰に橘の花を差し、手拭にて面を隱し、雨を凌ぎ心にて、菅蓙を引き合ひ、この内に居る。

〽蝶花の、外を吹雪の二人連れ、狂ふともなくほら〳〵と、風に押されて蹈み途なき、足弱車引き悩む、おそのを抱きいたはりて、脊撫でさすり、躄乗り。

六三　世の成行きとは云ひながら、長の病氣のその上に、苦勞のありたけ仕盡して、情と義理に身を捨つる。

〽不便の者やと抱きしむれば、顏つれ〴〵と打ちまもり。

その　アレ、又そんな勿體ない事云はしやんす。實を失ひ、御浪人にした、元はと云へばわたしゆゑ。

〽今更云ふも愚痴なれど、誓ひは二世と三世相、明けて數へて相性に、金と水とは上もない、よい子儲けていつまでも、仲睦まじう榮えると、書いてあるのは眞實の、本に思うた甲斐もなう。

あの兄さんの胴慾な。おまつまでも非業に先立て、お前になんと云ひ譯なく。

〽口惜しと思ふ一心に、兄を殺した身の罪科、親子兄弟夫婦まで、一夜のうちに死ぬるといふ、因果がどこにある者ぞと、男の膝に縋りつき、前後正體泣き沈む。六三は心勵まして。

六三　これはしたり、二人長らへゐるなれば、その嘆きもさる事ながら、娘にも長庵にも、死ねばあの世で又逢はれる。今際の際に其やうな、愚痴を云ふものではない。人は最期の一念に依つて生を引くと云へば、心を清う死ぬるものぢやわいなう。

その　ほんにさうでござんす。おまつを先立て、心殘りはなけれども、旦那さん御夫婦へ、御恩も送らず

六三　ハテ、それが矢ッ張り迷ひの種。モウ〳〵、思ひ切りやいなう。あれ見や、このマア土手から袖ケ浦、見晴らす夜半の春景色。

その　月は冴ゆれど晴れ間なく、涙の雨にかき曇り

六三　袖の雫を後の世の、手向けの水と花見月。

その　十八日を命日に、なるとも知らず、せかれて後

六三　逢うたも丁度後の月。

その　算へて見れば

兩人　同じ日に

〽送りの船の三味線も、どこへ佃のうはの空、心矢走のそれから先は、文で知らせて松本へ、互ひに焦れ夜となく、晝も洲崎で青嵐、ちよつとひぞりて三井ならぬ。八幡鐘の別れ路に、まめでと云ふを汐濱の、涙と共に落つる雁、富士の暮雪に夕照らす、野木場の月の影淸く、今ぞ後生の雲晴れて、即身成佛と立ちどまり。

六三　病あがりの其方を歩ませ、どこまで行たとて、爰こそ人の死所と、定まつた場所もなし。

その　その上わたしは、兄さんを殺した科、細目にかゝらぬその先に、早う死にたうござんすが、このマア、自墮落な形わいなア……ちよつと帶を締め直すまで、待つて下さんせ。

〽死ぬる今際に前後、正體繕ろふ心根は、夫に見する女氣の、哀れさいとゞ柾木垣、洩れて念佛の聲幽か。

ト此うち、おその、帶を締めるこなし。一つ鉦になり

〽南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト兩人、腰の褄を上手の小流れへ流し

六三　ありや、靈岸の定念佛。聲を知るべに

その　死出の山路へ

六三　手に手を取つて

その　嬉しうござんす。

六三　覺悟はよいか。

ト刀を拔く。

その　南無阿彌陀佛。

〽この世の念も明け近き、女夫が命短夜や、今ぞ最期と引寄せて、笑顏つくれど手も慄ひ、刃の立てども泣く涙、一聲死出の田長鳥、あの世の空へと。

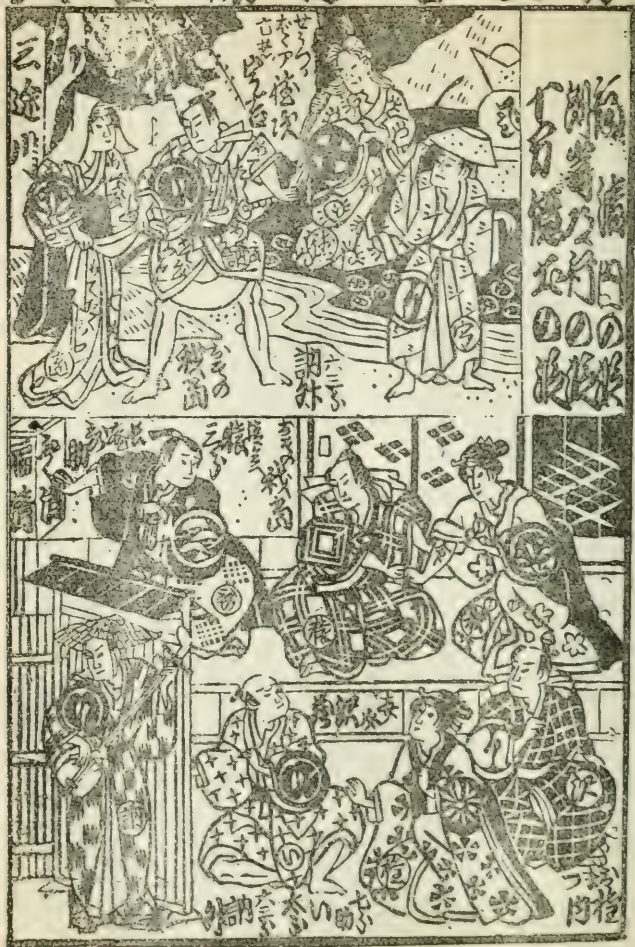
ト此うち、六三郎、おそのゝ胸元を貫き、その刃を我が腹へ突き立て、おそのゝ上へ跨り、合掌するを木の

頭。浄瑠璃の三重へ双盤を冠せ、六三郎、おその丶上へ
へ落ち入る。知らせに付き、黒幕振り落し、浄瑠璃臺
を消す。

本舞臺、一面の黒幕。

ト静かなる譯のツトメになり、向うより、赤鬼、縫ひ
ぐるみ虎の皮の褌、鐵棒を横たへ出て來る。上手より
青鬼、虎の皮の褌、膈當にて、鐵棒を横たへ出て來り

赤鬼　それへお越しなさるは、青鬼どのではござらぬか。
青鬼　貴殿は赤鬼どの。見廻りの役、御苦勞千萬。
赤鬼　其許にも、御苦勞に存ずる。併し、この冥の國の世
界一般、暗闇には困り切ります。
青鬼　左やう〱。併し、この冥の國の往來も、殊の外、
穩かでござるて。
赤鬼　それにて當年は、我れ〱も安泰でござる。
青鬼　これが世に云ふ、亡者の來ぬ間に、命の洗濯。なん
と爰で、一服いたさうではござらぬか。
赤鬼　それがようござる。サア、これへござれ〱。
ト岩臺へ腰をかけ、兩人、烟草をのむ。向うにて
亡一　サア〱皆の衆、一緒にござれ〱。
ト亡者の拵らへにて、三人出て來る。
青鬼　どうやら、人臭いやうではござらぬか。
赤鬼　左やう〱。
青鬼　なんに致せ、眞暗なので、事が分らぬ。
赤鬼　なんとしたものであらう。
ト此うち、亡者、花道にて
亡一　コレ〱、同者の衆や、この行く先は段々に爪先上
がり、氣を付けて行かつしやい。
亡二　ほんに、段々に登るやうだ。
亡三　イヤモウ、四方一面、眞暗なのには、誠に困るぢや
ないかいなう。
亡一　ほんに、沖の暗いのは唄にも諷ふが、道の暗いは、
實に難澁。
亡二　これがお先眞暗と云ふのであらう。用心して歩まつ
しやい〱。
ト皆々、本舞臺へ來る。青鬼透かし見て
青鬼　ヤイ〱、それへ參つたは何者だ。
ト三人悚りして
亡三　ハア、イ。
ト下手へ扣へ

亡一　私しどもは新入りの
三人　亡者どもでござりまする。
赤鬼　手形を所持して參つたか。
三人　ナニ、手形とは。
赤鬼　娑婆に於て善を施せし、手形があらば、これへ出せ。
亡一　イヤモウ、手形などゝ云ふものは、一向に所持して
　は居りませぬ。
亡二　わしは頓死の事なれば、六道錢も無い始末。
亡三　何分お慈悲を
三人　願ひまする。
赤鬼　さうして、娑婆に於て、なに稼業だ。
亡一　ヘイ、私しは、芝居の役者でござります。
青鬼　して、名はなんと申した。
亡一　ヘイ、お恥かしい事でござりますが、馬の足でござ
　りまする。
青鬼　その次は、なに稼業だ。
亡一　ヘイ、私しは噺し家でござりまする。
赤鬼　名はなんと申した。
亡二　エイ、燕枝の弟子で、とんしと申しまする。
青鬼　して、その次は。
亡三　私しは、講談師でござりまする。
青鬼　いづれも娑婆に於て、辯ちやらを申し、多くの人を
　惑はせし不埒の者ども。
赤鬼　一通りの罪人ではござらぬ。
青鬼　手形所持せぬ上からは、所詮、八正道へは向かぬ。
　と云つて此まゝにも置かれず。
赤鬼　なんと、亡者踊りを踊らせ、それを證據に通してや
　らうではござらぬか。
青鬼　イヤ、それも一興……イヤナニ、新入りの亡者ども、
　銘々持ち前の踊りを踊れ。
亡一　サア、踊れなら、踊りたくも存じまするが、何を申
　すも難病ゆゑ。
赤鬼　ナニ、難病とは。
亡一　私しは癲病。
赤鬼　して、その次は。
亡二　私しはよい〳〵。
青鬼　また次は。
亡三　私しは卒中。
赤鬼　それなれば、一同一緒に踊れ。
亡一　それでは、どうでも踊らねば、

初演の繪番附

三人　なりませぬか。
赤鬼　ソレ、亡者踊りが
赤青　所望ぢや〳〵。
ト下座へ取り、雀踊りの文句になり
〽死出の山路の一踊り、雀踊りが所望ぢやが、合點か。
ト亡者三人立つて
亡一　亡者で、オヽ、サテ癩病ぢや。
ト雀踊りの太鼓、拍子に合はせ
亡二　ヨイ〳〵。
ト振りになり
亡三　卒中ぢや。
三人　アリヤリヤン〳〵、ヤアトヤヤトコセ、ヨイセ。
赤青　もうよい、通れ〳〵。
ト三人、踊りながら、上手へ入る。鬼兩人、續いて入る。鳴り物打ち上げる。知らせにつき、下手の張り物打ち返す。爰に、常磐津連中居並び、直ぐに淨瑠璃になる。
〽行き迷ふ、馴れぬ冥土の旅の空、これや戀慕の闇の夜に、啼かぬ烏の聲聞けば、生れる先を問ふ事も、奈落の底か情ない、死んでも苦患は去らぬかと、暫し途方に暮れにけり。
トおその、白無垢、扱帶にて出て來り
その　こりやマア、どうして此やうに暗い所へ來た事ぢややら……それにつけても六三さん、ひよつと死遁れて追手に捕へられ、憂き目に逢うては居やしやんせぬか。先へ行た娘も氣がかり、後も氣遣ひ……モシ、こちの人、六三さんイなう。
ト向う揚げ幕の内にて
木靈　ホオイ。
〽聲を限りに呼び立てる、女の念の屆いてや、谷の嵐に木靈して。
その　六三さんイなう。
木靈　ホオイ。
その　アレ、後の方で返事したやうな……六三さんイなう。
木靈　ホオイ。
トおその、よく〳〵聞いて
その　ありや、わたしの聲が木靈して、響いたのぢや。アア、こりやマア、どうしたらよからうなア。
ト向うにて

六三　おそのやアい。
その　オヽ、ありやこちの人の聲……早う來てイなう。
〽嬉しさ限り泣く聲と、袖の追ひ風鬢の香を、知る邊に辿り探り寄る。
　ト向うより六三、白無垢の拵らへ、探り足にて出て來り
六三　おその〳〵。
その　こちの人、よう來て下さんした。逢ひたかつたわいなア。
〽待つた甲斐ある蔦蔓、根からむ草に躓いて。
　ト兩人、探り寄り、フト、おその躓き
オヽ怖。
　ト六三に思はず、縋り付く。
〽縋りつき、嬉し涙ぞ誠なる。
六三　オヽ、さぞ待遠に思やらうと、心は急けどわしも侍ひ、後で人に笑はれるやうな事はならぬゆゑ、見事に腹を切つて、わが身の上へ俯向きに、
その　そんならアノ、わたしが上へ。
六三　オイナウ。
その　嬉しうござんす。シタガ、このマア暗い事、早う夜が明ければよいに。
六三　エヽ、心中で死んだ者は、四十九日が間、暗闇を行くのぢやわいなう。
その　フム、そんならお前は、どこやらの女と、心中した事がござんすな。
六三　なんのマア、わしは初めて死んだゆゑ。さつぱり勝手が知れぬ。と云つて斯うしてもゐられぬ。マア、そろそろあつちの方へ、行かうではあるまいか。
その　今度は、しつかり手を引いて下さんせや。足がちつとも先へ出ぬ……さうして、氣味の惡い風が……アレ、なにやら顏へ。
六三　マア、心をしつかり持つたがよい。此やうな所で、はぐれては、取つて返しがならぬ。ソレ、木の根が出てゐるぢや。
その　ほんに、少しは見えて來たやうでござんすなア。
〽流れに沿うて行くにつれ、虚空明るく煌々と、名に往還の三途川、渡し場にこそ着きにける。
　ト此うち、水音をあしらひ、兩人、舞臺へ來る。知らせなしに黒幕を切つて落す。

木舞臺、正面、通し異形の山々、凄味のうんげん雲、針の山、血の池地獄などの書き記し、三途川へ落す流れの水上、所々に門松、注連飾りの書割り、山影に堂寺などの景色よろしく、上手、葭簀張りの出茶屋、この茶見世の門口に、芝居番付、劍の刃渡り、落し噺、その外、寄席のびらなど掛け、下手、蘆原の見切り、爰に三途川渡し場、賽の川原と記したる榜示杭、蘆間より渡し船を出しかけあり、この側に柳の立ち樹、同じく吊り枝、すべて三途川、渡し場のかゝり、馬士唄めきたる合ひ方にて道具納まる。

その　コレ、見やしやんせ、婆婆を立つた當座とは、打つて替つて、このマア明るくなつた事わいなア。

六三　所々に松飾りが見ゆるが、あれは大方、冥土の旅の一里塚といふのであらうわいの。

その　ほんに、餘所事に聞いてゐたが、見るは初めて。なんにせい、こゝな茶店で、足を休めて行かうではござんせぬか。

六三　成る程、急く事もない、一服のんで行かうかいの。

〽傍の床机に腰打ちかけ、女夫の仲も愛想に、吸ひつけて出す忘れ草、煙草に愛を張出しの、びらは端唄の天狗連、こなたは昔の朝寐坊、奈落の落し噺しから、劍の刃渡り、いろ／＼の、中に、歌舞伎の櫓下、お國は目早く。

その　モシ、こちの人、ありや芝居の番付ぢやござんせぬかえ。

六三　オヽ、さうぢや。

ト側へ來て

その　ムオ、「假名手本忠臣藏」役人替名、大星由良之助が助高屋高助、早野勘平市村竹之丞、高野師直中村歌右衞門。オウ、本藏は誰れぢや……成る程、故人の團藏、平右衞門が、先の團三、定九郎が松本幸四郎。てもマア、よい番組の芝居ぢやなう。

その　さうして、判官と顏世は、誰れでござんすえ。

六三　ほんに、それが見えぬわえ……モシ、茶店の阿母、判官と顏世は誰れがしますな。

ト葭簀の蔭より、三途川の婆、安下駄を履き出て

婆　オヽ、それは新入りの役者ぢやゆゑ、番付の肩の所へ、出て居りますわい。

六三　オヽ、成る程……エヽ、顏世御前が阪東しうか、鹽谷判官が市川團十郎。

その　そりや、アノ八代目の事でござんすかえ。
婆　イヤモウ、その八代目の判官で、地獄も極樂も、たいら一面、腹切りの評判ばかりでござるわいなう。
六三　して、この芝居のある所は。
婆　爰からはまだ餘程の道。地獄と極樂の堺町でござるわいなう。
その　モシ、こちの人、どうかその芝居を見たいもの……シタガ、娘を連れて行きたいが。
六三　イヤ、ナニ、阿母、昨夜、六つばかりの女の子は、迷うては來ませなんだかな。
婆　オ、、來たとも／＼……慥かに名は、おまつとやら。
その　オヽ、さうぢや。娘ぢや／＼。
六三　その娘は、どつちへ行きましたえ。
婆　オ、、親に先立つて死ぬ不孝の罪で、直ぐに賽の川原へ行きましたわいの。
〽と聞く母親は、氣もそゞろ。
その　その賽の川原とやらは、ツイ御近所でござりまするか。こちの人、サア、ござんせ。
六三　ア、、コレ／＼、後先も聞かずに。
婆　ハア、、さてはあの子の母御で。フム、それにしても、年若な夫婦の衆、マ、、氣を靜めさつしやれ。娑婆でし置いた行跡次第で、逢はれぬ事もなけれど、ハ、アお前方は心中してござつたな。
兩人　エ、。
婆　ア、コレ、何も驚ろく事はない。衿に掛けたる長房は、夫婦和合の日蓮宗……、エ、何より罪障。
〽消滅と、持つて廻つた愛想に、お心よしと。
ホ、、。
〽ホ、、、見えにけり。
六三　ホ、ウ、さては、お前が噂に聞く、三途川の老婆よな。
婆　わしが事でござるわいなう。
六三　エ、。
婆　ア、イヤ、人は見目より只心、昔はいろ／＼な罪人が群集したゆゑ、有福に暮らしたが、世が太平になつてこの方は、罪ある者は、千人に一人、商賣はあがつたりせう事なしの
〽立場茶屋、今日この頃は、その日／＼を送り兼ね、この上なんとしやうつかの、婆は名ばかり、内證は、後生菩提で心は佛。

なんまみだ。
〽なんまみだ。
その　ほんに、さう仰しやれば、どうか見申したやうな。
婆　オヽ、お前も島田の頃は、新宿へ月參り。
六三　これが誠に、地獄で佛。
婆　變つた所で逢ひましたなア。
〽と見交す顔は娑婆以來、盡きぬ緣とぞ喜びぬ、折しも向うへ三度荷を、付けて越し來る地獄馬、顔は人間馬士入らず。
ト揚げ幕の内にて
地獄　無間なア、血の池、我慢もなろが、ナアヨ、越すに越されぬナア、劍の山よナアエ。
ト地獄馬の形、顔は人間、さんばら髮、額に三角の胡麻鹽を當て、出て來り
ソレ、熱鐵地獄は暑いが性根だ。色事は奈落の底だぞ底だぞ。
ト舞臺へ來り
婆さん、娑婆へ行くが、出見世へ手紙でもやらうぢやねえか。
婆　オヽ、忝ないが、もう來月が緣日ぢや。

地獄　成る程、一年に二度の緣日なれど、月日の立つは早いものだ。おらもこの頃は、足ないらが起つて困るから、娑婆へ行つた次手に、四谷の馬醫者が、一廻りも鍼をしてもらふべいと思ふから、戻りにはこなさんを乘せて來べい。
婆　それは、丁度よい。シタガ、療治してもらふなら、鍼より灸の方がきくではないか。
地獄　ハヽヽヽ、馬に灸がいけるもので。譬へにせよ、馬ハア鍼の療治と云ひますわい。
婆　エヽ、また年寄りをなぶり居るか。
地獄　そんなら、あつちで
〽逢ひませうと、驛鈴忙しく急ぎ行く
ト馬は上手へ入る。
その　ても珍らしい。首が人間で、體が馬ぢやわいなア。
六三　小母御、あれは、どこへ行くのでござりまするな。
婆　ありや地獄の株の三度飛脚、娑婆ならば室町の京屋ぢやの、瀬戸物町に島屋、或ひは天滿屋なんぞと皆同店で、驚風屋、癲癇屋などいうて、年中あつちへ行つたり、又こつちへ來たり、イヤモ、大抵の事ぢやござらぬわいなう。

六三　ハテナウ、して、極樂は、もうこの近邊でござるの
の。
婆　その極樂は、この川を渡つて、六道ヶ辻を迷はぬやうに、行けば、一筋道ぢやが、今夜は六道の辻の宿屋で泊るがよいわいなう。
その　オ、、嬉しや。早う宿屋へ行つて、わたしや、落ちつきたうござんす。
婆　サア、旅籠屋へ着くにも、閻魔の御前で一旦お調べを受けた上でなければ。
その　エ、、そんならアノ、閻魔さまのお調べを。
婆　ハテ、嘘さへ吐かねば。
その　ぢやというて、現在の兄さんを殺し……サア、苦勞した甲斐もなう、別れ／＼になるやうな、事でもしやあるならば、
〽わたしやどうせう／＼と、嘆けば夫も疵持つ足、暫し當惑なしければ、婆は見て取り。
婆　ハテ、若い身空で、一緒に死んで來る程の事、罪は有り內、この婆がよいやうに云ひくろめ、極樂往生させますわいなう。
その　そりやマア、ほんまの事でござんすか。

六三　何分其許の御吹擧を。
〽と切ない時の婆頼み、追從するこそ道理なり。
婆　なんのマア、こなた衆ばかりか、大勢の願がけを聞くこの婆、コレ、氣遣ひせまい
〽横町を、角力太鼓の音高く。
ト角力太鼓になる。
その　あれは、角力の太鼓ではござんせぬかいなア。
婆　サア、餓鬼角力には、太鼓は廻さねど、勸進角力は、娑婆も同じ事ぢやわいなう。
六三　どのやうな取組みぢややら、マ、、靜かにして聞きやいなう。
ト向うより白の着附け、亡者の拵らへ、額に紙を當てし兩人にて、太鼓を叩きながら出て、直ぐに本舞臺へ來り
亡一　婆さん、今日は。
婆　オ、、皆の衆、御苦勞でござりまする。
ト亡者一、角力太鼓を打ち下ろし
亡一　明日の角力は、七日目ぢやぞい……怨靈には六ヶ辻ぢやぞい。死出の山には三途川ぢやぞい。修羅の火には劍の山ぢやぞい……お茶湯は早うござい。

ト兩人、上手へ入る。
〽觸れ行く、こなたの川端より。
ト下手の奥にて
船頭　船が出ますぞえ。
〽と呼ぶ聲に、我れ後れじと道者ども、弘誓の船に法の道、岸邊にこそは。
ト此うち、婆は眞中の床几の上に立て膝、木像の見得、おその、六三は上下に別れ、婆を拜む見得よろしく、三重に双盤を冠せ、賑やかに

幕

三幕目　墮地獄の場

役名――小柴六三郎。藝者、おその。醫者、梶野長庵。噺し家、とんし。巫子、さがみ。金貸し、權兵衞。五官王。冥官王。靑鬼、赤鬼。閻魔大王。

常磐津連中

本舞臺、三間常足の二重、本緣付き、正面、高足、觀音開き、朱塗り金鍍金の金物、欄間蹴込み、扉とも殘らず唐草彫りの極彩色、この前、錦の緞帳を下ろし、この前、左右とも、板羽目、上手、血の池、針の山の書割り、この前へ業の秤、この上手、岩の張り物にて見切り、下手、熱鐵地獄などの書割り、斜に奥深に飾り、この前、淨玻璃の鏡を立て、二重へ御簾を下ろし、すべて墮地獄閻魔王宮の體。爰に赤鬼、靑鬼、左右へ別れ、鐵の棒を持ち、扣へ居る。地獄八宗の鳴り物にて幕明く。
トこの前へ淺黃幕を吊り、淨瑠璃觸れあつて、知らせに付き、淺黃幕を切つて落すと、下手淨瑠璃座に常磐津連中居並び、直ぐに淨瑠璃になり
〽それ人間の地を離るゝ事五百劫にして、無仙世界須彌國の中央に當り、閻魔王宮の一構へ、金寶の瓊門、四畔に開き、庭上離中輝きて、まばくゆも又物凄し、程なく獄司の聲として。
ト御簾の内にて
五官　ヤア〱、冥官、倶生の面々、今參りの奴ばらを、亡者溜りへ繰込み召され。
冥倶　ハ、ア。

ト御簾卷き上げる。内に、五道五官、裝束、萠黄、無地にて冠りを附け、前へ白木の調べ紐を扣へ、左右へ別れ住ひ、三股へ首三つ附けし梟木臺を据ゑある。下手より冥官、倶生、縫ひぐるみ、異形の拵らへにて、長庵、晰家、金貸の權兵衞、この後より巫子、孕み女の拵らへにて出て來る。續いておその、六三郎、薄淺黄無地の經帷子にて、いづれも亡者の拵らへにて出て下手へ住ふ。

ト心得ぞふと立ち出で〻衆生を警固し、黑鐵の、廻廊、土邊へ突き据ゑられ、怖さ見たさに伸び上がり、遙かの廳を差覗けば、業の秤や淨玻璃の、鏡を左右に立て並べ、白杵黑繩持ち運ぶ、牛頭馬頭異形の眷屬が、姿見るさへ齒の根も合はず、身の毛も豎つばかりなり、

冥倶　下に居らう。

長庵　コレ〳〵、押すな〳〵。經帷子が皺になるわえ。

晰家　込み合ひますから、御勘辨なされませ。

長庵　オイ〳〵、前の禿げ頭、後の者に見えぬ。低う居おれ。

權兵　ヤア、おのれは足力按摩の長庵だな。

長庵　オ、、お前は金貸しの權兵衞さん、いつもお達者でおめでたう。

權兵　エ、、やかましいわえ……貴樣のやうな太い者を見た事がないわえ。

長庵　シッ〳〵コレサ、場所が惡うござります。太いなんのと、爰で云つては……惡いといふ事よ。

ト指を鏡へ差して云ふ。

權兵　エ、、金を貸して催促するに、地獄でも極樂でも、遠慮があらうか、サア、元利揃へて返してもらひたい。

長庵　ア、モシ、御尤もだが御覽の通り、經帷子一點、それに引きかへ、お前は死ぬ時、有り金は爲替に振つて來たであらう。

權兵　なんの、六道錢の外は持つて來ない。

長庵　それで思ひ當つた。人の噂に、お前の貯めた金を殘らず集めて、かみさんは、こなさんが病氣のうちから、手代の貸八と懇ろして、今では夫婦になり、その賑まじさと云ふものは、こなさんに見せてやりたいものぢやなア。

權兵　エ、、そりやマア、ほんまの事かいやい〳〵。

長庵　オ、、嘘と思ふなら、來年の盆に行つたら、精靈棚の施餓鬼の間から見なせえ。

權兵　エ、、それまで待つて居られるものか……ヤイ女

房、おれは吝いから、喰はせる物や着る物は、不自由させたが、すべき事はしてやつたに、よくも不義を働らいたな。チヽヽ、おのれはな〳〵。

ト權兵衞、我れ知らず、長庵の胸倉を取る。

長庵　アイタヽヽ。おれが胸倉を捕へて、咽喉が潰れる。

權兵　こりや、モウ、ちよつと娑婆へ立歸りに行つて來ねばならぬ。サア、長庵、急に路銀がいる。半金で負けてやるから、直ぐに寄越せ。

長庵　わしこそ、唐突に殺されたから、六道錢も持たせぬと云ふ事よ。

權兵　イヤ〳〵なんでも。

ト摑み附く、月のない天狗の强慾に、流石の長庵もてあぐむを、見兼ねて、おそのは割つて入り。

その　マア〳〵、お待ちなされませ。

長庵　ヤア、わりや妹、おのれは兄を

その　マア待たしやんせ、その云ひ譯も

六三　ハテ、何事も斯うならぬ先の事。

長庵　さては六三も一緒にうせたか。

ト喧嘩に枝葉、聲高に、我れを忘れて立ちかゝれば、

ト長庵は六三を目掛け行かうとするを、權兵衞は立たせまいとする。

冥官　ヤア、默り居らう。爰ぞ三千世界の其うちにて、ひツこぬきの怖い所で、喧嘩を致すは、王法佛法を輕しめる大罪、疾く〳〵御前へ罷り出おらう。殊に醫者を始め、夫婦の奴ばら、並々の罪人ならず、それより先に蹲まつて居る亡者それへ出をらう。

噺家　へイ〳〵。

冥官　汝、娑婆にての渡世は。

噺家　へイ、噺し家でござりまする。

ト冥官、不思議の思ひ入れにて

冥官　フム、はな鹿と申すは、角のない鹿の事かな。

噺家　イエ、噺し家は、先づ役者の物眞似、落し話、端唄、新内、何に依らず、やらかしまする者でござりまする。

赤鬼　ハテ、奇體な獸物もあるものだ。なんなりと

鬼二　やらかせ〳〵。

噺家　畏まりましてござりまする。

ト正面に居直り、鼻をかみ、湯を呑み、蠟燭を切る事、仕方よろしくあつて

私しも、御當所へは初めて死んで參じましたが、當時は落し話も古めかしい事のみで、お慰みに相なりませぬゆ

初演の繪番附

ゑ、先づ新らしい事なら、いま極樂の芝居で勤めて居ります八代目、大和屋の太夫の、浦里時次郎のお物語りでござりまする。

青鬼　ナニ、新内節か。

噺家　エヽ、御案内の通り、時次郎もいろ〳〵な事が重なりましたゆゑ、もうこれまでと、駈け出しました。すると浦里が抱き留めて……モシ時さんえ、お前に逢うた坂東より、末の事まで約束したは、世間へぱつと音羽屋に、共白髮まで添ひ遂げて、孫彦三の顔さへ見ず、わたしに半四郎岩井もせず、大和巡りにでも行く事か、一人で先へ死ぬるといふがあるものかと、袖にしがみ付きましたゆゑ、時次郎も、やう〳〵涙を拂ひまして

〽其方も共にと云ひたいが、いとし其方を手にかけて、どうなるものぞ、長らへて、我が亡き跡で一遍の、回向を頼むさらばやと、云ひ捨て立つを取り付いて、あんまりむごい情なや。

これでござりまする。

赤鬼　ヤイ〳〵、これからが明烏の肝心だ。後をやれ〳〵。

噺家　イエ、私しのは、明烏ではござりませぬ。

冥官　さうして今のは。

噺家　新内の後やらずでござりまする。

　ト元の所へ住ふ。

青鬼　エヽ、何を馬鹿な。

五官　マヽ、吟味は濟んだ。サア、藪醫者、おのれは見る見るから、太々しい奴だ。身が手を下ろして詮議する。ヤア〳〵獄卒、責め道具の用意々々。

〽呼はる折柄、玉簾間近く大王の、微妙の御聲高らかに。

　ト緞帳の内にて

閻魔　アヽラ輕々し、五官五道、手づから呵責は麁忽の至り。

　ト緞帳を卷き上げる。内に閻魔王、飾り裝束、冠りにて、笏を持ち、前へ經臺やうの臺を置き住ふ。

〽御聲と、共に聞ゆる音樂の、心耳を澄まし卷き上ぐる、錦の戸帳警蹕は、出御とこそは知られけり、罪人に御目も掛けず、大王四方を打眺め。

霞に籠る殘雪の山、梅花の匂ふ泥梨の底、ハテ、風情ある景色ぢやよなア。

〽御機嫌斜めならざれば、五官は御前に進み出で。

五官　ハツ、某が手づから罪人を呵責するを、御止めあり

つれど、娑婆の罪人、佛法に歸依なし、近年地獄衰微に及び、儉約のお觸れ出しあるに依つて、獄卒の人夫も減少なれば、據なく手を下ろす儀でござりまする。

閻魔　ホヽウ、貴卿の心底神妙ながら、諸卒の減少は佛意に叶はず、只慎しむは十惡の內、口より作る四つの罪、それゆゑ、地獄の口は兎角兩義に通じ、儉約が第一、娑婆にても、地獄の詞を地口と稱へ、專ら流行と聞き及ぶ一言云つて兩方へ聞ゆるやう、方々その旨心得てよからう。

五官　その儀は承知仕つてござりまする。ソレ、御前の御退屈。お茶ばこ盆でも差上げい。

鬼兩　パツパア。

〽御略地口牛頭馬頭の、返事も無駄はなかりける、長庵始終を聞きすまし。

長庵　ヘエ、さては御當所も、御儉約でござりまするか。それなれば、私しをお抱へ下さりませ。儉約は元より、針も按摩も大名人。ちよつと揉ませて御覽じれば、明白に分ります……明白と儉約と。

〽鍼と按摩でやう／＼と、命繫いで給はれと、地口でかかれば。

閻魔　ヤア、その地口、古い／＼。おのれ、餘ツぽど惡黨と見ゆる。陳じ立てせず、白狀いたせ。

〽くわつと御口明き給へど、長庵ひるむ氣色もなく、

長庵　サヽ、その土茯苓は御木香なれど、大黃さまの前で桂枝て陳皮は致しませぬ。

五官　ヤイ……、藥盡しのその云ひ譯、我が大王に解らうと思ふかえ。

長庵　サヽ、地獄御尤もでござりまする。斯う見えましても私しは、さる諸侯方のお匕でござりすま。

閻魔　ヤア、此奴、兩舌を遣ふ奴。按摩にお匕があるものか。

長庵　ヘエヽ、達磨にお足といふ地口かな。

五官　ヤア、默れ按摩、イヤ、鍼とは療治なピイ／＼亡者、ソレ青鬼、秤にかけい。

〽ハツと眷屬長庵が、襟髮取つて秤の皿、冥官は天秤を、ためつすがめつ打眺め。

冥官　ハテ、面に似合はぬ輕い罪。何とも以て、合點ゆかぬ。

〽訝かることなたに赤鬼が。

赤鬼　アヽ、輕い筈、あちらの片足を、土べたへ踏ん張つ

て居ります。
冥官　イヤ、秤目盗む横着者。俗名名乘れ、ナ、なんと。
長庵　ヘイ、私しの名は長庵。
五道　さてこそ熊坂
長庵　ア、モシ、それは長範、私しは長庵。
五道　ヤア、範でも庵でも容赦すな。
ト長庵を秤の皿へ乘せようとする。扣へ居し巫子、さら毛にておばこに結びし年增、白無垢の着附け、紙を當て、前へ出て、長庵を庇ひ、鬼に詫びなどする。
〽下知の内より駈け出づる、年增亡者の梓巫子、逢ひたかつたと取り縋れば、情容赦もあらけなく、女を引き退け。
倶生　長庵が罪を糺すに、邪魔ひろぐ汝は何者。
巫子　ハイ、わたしは市子でござりまする。
五官　その又市子が、何ゆゑ調べの妨げ致す。
巫子　サア、この醫者どのが、前方わたしの在所へ參りました時、嫌がるわしを身持ちにして、果は藥類を持ち逃げなさいました。
長庵　ヤイ／＼、夢にも知らぬ事。おのれのやうな市子の亭主に誰れがなるものか。知らぬ／＼。

巫子　イエ、お前だ／＼。
長庵　イヤ知らぬ。
五官　コリヤ、兩人とも扣へ居らう。して、證據があるか。
巫子　ハイ、しかもその頃、唄にまで謳はれた仲だ。
五官　して、その唄は。
巫子　アイ。
〽長庵の目論見で、市子の亭主になるべいと、それから神樂の笛吹いた。
巫子　アリヤトコセエ。
五官　もうよいわサ。それ程の證據があつても。
長庵　イエ、こんな奴を、孕ませた覺えはござりませぬ。
巫子　コレイナア、長庵さん。
〽年はゆかいで恥かしい、齒唄如來のお十夜に、おどけ云うたる深草の、少將ばかり九十九里、上總木綿の丈のない、お前と知らず打込んで、白立つ浪の底までも、なんのいとひは荒磯の、夜の目鮑の片思ひ、離れぬ仲と思うたに、ようも／＼騙さんしたが、えゝ憎らしい、捨てて行くとはあんまりな、わしや口惜しいと取りつけば、取つて突き退け。

初演の錦繪　三途川と陥地獄

ト巫子は十分に振りあつて、長庵に縋り付くを、長庵キッとなつて

長庵　大王さまの前ではござりますれど、彼れを騙した覺えはござりませぬ。

五官　ヤア、飽くまで陳する横着者。うぬ、骨をひしいで

五道　ア、イヤ、待たれよ五官王、彼れに白狀させる術、思ひ付いた。ナニ、おそのとやら、其方、長庵が妹とあれば、これなる市子に水向け致せ。

その　アノ、私しが。

五道　兩親を心に念じ、はや疾く〳〵。

〽鋭き詞に是非なくも、樒爪切り唱名なし、梓の弓に手向くれば、忽ち巫子は面色變り、五體を慄はし茫然と聲も殊勝に。

トおそのは、茶碗と樒の葉を持ち、前へ出る。巫子は梓箱の風呂敷に包みしを前へ置き、箱の上に頰杖を突く。おそのは樒の葉にて水の中を廻し、拜む。巫子は現のこなしにて

巫子　ハ、ア、寄り來るワ〳〵、ばんかはれ品かはれ、銚子の水も變りくる、我れこそ唐の鏡、へらとりは微塵もなくて、烏帽子寶はお身一人、あいの枕に別れて末は、別ちの人に預けるうち、御身の臍の緒たくり上げ、われを非業に果てさせて、へらとりと僞はりしぞ、名殘りは盡きじこれまでよ、彌陀の淨土へ、さアさらばえ。

トこれにて段々、巫子は目の覺めしこなし。

六三　ア、コレおその、今この巫子の梓にかゝり、寄りに立ちしは、其方の母親。

その　そんなら、唐の鏡と云ふは。

六三　オイナウ、その母御前の云はるゝには、へらとりの男の子は、一人もなく、烏帽子寶の子と云ふは、其方一人、あいの枕の父親が過ぎ行かれた後、里に預けて育てるうち、この長庵が母を殺し、所持せし其方の臍の緒書を奪ひ、それを證據に兄と僞はり、年月せたげて金を貪ぼる大罪人。

その　すりや眞實の兄さんと云うたは、僞はりでござんしたか。

長庵　ア、コレ、市子の云ふ事が當になるものかえ。

五官　達て爭ふ上からは、ソレ、鏡に寫して白狀させよ。

鬼兩　ハツ。

〽心得、丹色皮色の、鬼は手取りに引ッ摑み、片意地張るを淨玻璃の、鏡の表に。

ト青鬼、赤鬼は、長庵を鏡の前へ連れ行き、突きつける。これにて、鏡へ仕掛けにて寫る。

〽突き据ゆれば、不思議や光明輝き渡り、前世の罪障悪業の、微塵も違はず顯はれたり。

六三　オ、、寫るワ〳〵、所は正しく淺草の、しかも三社の宵祭り、この悪者の長庵と、七郎助が頷き合ひ

その　ほんにお前の越度となりし、小倉の色紙を取り出し

六三　オ、、石橋の曳き物に、飾る牡丹の英へ、押込み隱す悪事の段々。

〽あり〳〵と寫る鏡の照り、長庵は心も空。

長庵　七郎助の大べら坊め、そこへ隱すといふ事があるものか。爰へ寄越せ。

〽と手を伸ばせば。

鬼雨　たはけ者めが。

〽と殴り退くる。

ト長庵心附き、元の所へ住ふ。

六三　すりや、色紙の盗賊も、おのれが企みであつたよな。

閻魔　ホ、ウ、凡俗なんぞ悟らんや。六三郎が主人より、預かりの寶失ひし、元はおそのが手に入れんと、七郎助が企みに乗り、僞はり計る長庵が、無量の悪逆。まつたおそのが母親の敵を、計らず討たしも信心の徳。ホ、ウ、感心々々。

〽嘆息ましまし、大王賞美のお詞に、長庵猶も首振り立て。

長庵　イヤ、閻魔さま、例へ兄でないにもしろ、人を殺せし者を赦すは依怙贔屓、それで閻魔の政道が立ちますかえ。

閻魔　ソレ、鐵札を持たせ、詮議中、熱鐵地獄へ打込み置け

權兵　コレ長庵、その熱鐵地獄とやらへ行つたら、お主の體が焦げてしまふだらう。して見ると、おれの貸しが無茶になる。せめて利分ばかりでも寄越せ。

五官　ヤア、大罪は長庵ばかりか、おのれもこれまで高利を取り、人を苦しませし科輕からず、等活地獄へ打込むのだ。

權兵　エ、、左やうなら、私しは、アノ等活地獄で

長庵　熱鐵あつ馬

權兵　三月雛樣。

長庵　四月がお釋迦で

權兵　五月がお幟。
　ト云ひながら踊る。
閻魔　ヤア、默り居らう。地獄閻闢この方の重罪人。それに引きかへ、おその六三が善根功德、人殺しの罪を赦し、金札與へて速やかに、寂光淨土へ引率いたせ。
六三　すりや、我れ〳〵を。
その六　エヽ、忝ない、
權兵　ア、、モシ、この權兵衞もお次手に
冥官　ヤア、蟲のよい奴。ソレ、兩人をどやし付けい。
鬼兩　ハア、。
長庵　コレ〳〵、閻魔さまが、どやせとも云はつしやらぬに。
　ト鬼、五道、冥官の四人
青鬼　大王さまは、どやすがお好きだ。
四人　ぐい〳〵とどやせ。
　ト鐵の棒にて、赤鬼、青鬼して叩く。
　ソレ、泣く〳〵よ。
　〽拍子にかゝつてやたら打ち。
長權　アイタヽ、。
　〽追ひ立てゝこそ。

　オイタヽ、ツタヽ。
　〽オヽ〳〵。
　ト閻魔、五道、冥官、皆々
皆々　さらば。
六三　おさらば。
　〽善惡邪正の二道へ、別れ〳〵て。
　トおその、六三は嬉しきこなしにて立ち上がる。閻魔は、長庵と權兵衞を睨みつける。兩人は恨めしさうに閻魔の方を振り向くを、鬼兩人、鐵棒にて支へる。双方見合し、よろしく三重にて
　　　　　　　　　　　　　　　　幕

四幕目

極樂淨土の場
福島屋內の場

竹本連中

役名━━小柴六三郎。藝者、おその。三十番神の使童。娘、おまつ。靑鬼。赤鬼。女房、おかぢ。福島屋淸兵衞。

本舞臺、正面中足の手摺り、岩組みの張り物、向う紅白蓮の花盛り、八功德水の池、これより向うに、七寶の樹林、うんげん雲の間に、結構なる堂塔、伽藍などの遠見、舞臺上手へ寄せて、中足の二重蹴込み、うんげん雲の書割り、朱塗りの彫り物形高欄、朱塗りの柱、欄間極彩色、屋根付き。この軒づらに錦の緞帳をかけ、この上手に沙羅双樹の立ち木、これに童子の顯はれる誂らへあり、いつもの所、瑠璃色の柱の唐門、枝折り戸、この下手、沙羅双樹の林、異形の綱代塀にて見切り、日覆より切出しのうんげん雲を繰り下ろし、極樂の體。音樂にて幕明く。

ト直ぐに床の淨瑠璃になり

〽聞きまさる、極樂淨土は山賤の、庵も七寶ちりばめて、四方に蘭麝の風薫り、玉の林に鶯の、聲ほがらかに法華經の、さながら讀誦に異ならず。

ト緞帳を卷き上げる。爰に六三、後茶筌の髷、白無垢の形にて、袈裟を掛け、水晶の珠數を持ち、經卷を並べ、脇息にかゝり居る。

〽見聞くにつけて珍らしく、六三郎は經卷の、机に身を寄せ打ちまもり。

六三　軒端の梅の咲く匂ひ、櫻の雲の遠山より、落ちる雪解の瀧の音も、れい／＼として心耳を澄まし、麗金の友呼び交し睦む有さま、池の蓮の花に障らず、斯く四季の景色をば、一目に集め見渡すは、實に極樂の境涯ぢやなア。

〽飽かぬ詠めに餘念なく、座に折りしも花振り來たり、傍の南陀朱蓮樹の、梢に天童天降り、輝やき渡る光明に、あたりを照らし赫灼たり。

ト上手の梢へ振り出しにて、子役の童子、蓮の花を持ち現はれる。

〽六三は驚ろき身を清め、唱名念誦し奉れば、童子御聲爽やかに。

童子　善哉、汝たま／＼受け難き、人身に生れながら、刃に身を果たせし罪輕からず。さりながら、前世に信心の功を積み、天上の善果を受け、修羅の街にさまよひし、父母までも佛果を分つ。然りと雖も、愛執の根を斷たずんば、父母は忽ち奈落へ墮罪。

六三　エ、、すりやこの身に迷ひの心を起さば、兩親は奈落に沈むとの御告げなるか。

童子　まつたその身、佛體を得ば、妻子の罪も消滅せん。

〽示し賜へば、六三郎も、心に浮む妻子の恩愛、情なき
には似たれども、勿體なや、父母の奈落に墮ちるを、子
の身として、なんと見捨てる法やある。

六三　我れ一人、寂光淨土に入る時は、妻子の罪も消ゆ
るとあれば……如何で佛命背むべき。

〽あら有り難の御告げやと、禮拜するこそ道理なれ。

童子　ホヽウ、速やかに解脫なし、我れも滿足、この上は、
ゆめ〳〵相違あるべからず。

〽これまでなりやと夕日影、忽ち紫雲に法の道、西の方
へと行くへなき、御跡見送り、伏し拜み〳〵。

ト童子、消える。

六三　ハヽア、有り難や。さりながら、娘おまつを賽の河
原へ、尋ね行きし女房、今にも歸り緣を切らんと

〽申し聞かさば、さぞやさぞ。

娑婆でも操を立て通し、思ひ幾瀨の浮き沈み、その善根
の廻り來て、一つ蓮と喜びしを。

〽未來永々逢ふ事の、ならぬと聞かば恨み嘆かん不便や
なア。

イヤ〳〵、諸天善神に、誓ひを立てし我れは、佛身八萬
四千の妄想を絕つて、實相無漏に入るの門出。さうぢや
さうぢや。

〽と座に直り、經卷と、共に開くや悟りの道。

ト經卷を開き、念誦の思ひ入れ。これにて緞帳を下
ろす。

〽先の世、如何なる報いにや、親に先立つ罪科は、賽の
河原に立ち迷ひ、一重積んでは父の爲、二重積んでは母
の爲、小石々々に泣き腫らし、不便やおまつは盲目の、
風の便りに聞き傳へ、杖に縋りてやう〳〵と、庵の外面
に辿り付き、嬉しや爰ぞと立ち休らひ、折り戶探りて。

ト向うより、娘おまつ、白の單衣物、盲目のこなし。
杖を突き出して、本舞臺へ來り

まつ　申し、物をお尋ね申しまする。

〽と云へど庵主は一心不亂、鈴打ち鳴らせば。

オヽ、鈴の音するは、誰れやらござるに違ひはない。申
し、近い頃、この極樂へお出でなされた、御夫婦の御庵
室は、こなたでござりまするか。

〽と云ふ聲も流石の血脈、引かるゝ緣を下り立ちて、垣
の隙より見て恟り、さては娘か、何ゆゑと云はんとせしが
待て暫し、なま中名乘り改めて、親子の緣を切ると云は
ば、その悲しみは幾千倍、さはさりながら、なんとして、

初演の繪番付

目盲となりしか、餘所ながら、聞かまほしと聲音をかすめ。

六三　イヤ／＼淨土へ往生なす佛は、日夜その數限りなし見れば盲目となりし體。その兩親が聞かれなば、飛び立つやうにも思はれんが、爰をよう合點しや。妻子の因みを斷ち切らねば、佛體を得る事叶はぬ掟。例へ廻り逢ふとても、よもや名乘りはえゝすまい。益なき事に暇取らば、河原へ戻つて憂目や見ん。サア、早う云んだかよいわいの。

まつ　其やうに云うて下さると、父さんのやうに思はれてわしや爰が去にともない。お顏が見たい、目が明きたいわいなア。

六三　オヽ、尤もぢや。さぞ、その親の身も。

〽誠明石の浦ならば、我れにも見せよ人丸の、古歌にも増るいとしさ辛さ、苦しき胸を押し鎭め。

オヽ、道理々々、して、いつの頃より、目盲とはなりたるぞ。

〽と問へばおまつは眞實の、父とも知らでやうやうと、涙を袖に押包み。

まつ　よう問うて下さりました。父さんは小柴六三郎と云ふお方、惡人の爲に御流浪なされ、間違ひにてわたしが殺され、逢ひたい見たいに目を泣き潰し、悲しい中に兩親も、この冥土へござんして、爰らあたりと聞いたゆゑ逢ひに來たれど、情なや。

〽假盲目のその上に、勝手知れねばなんとして、もう逢ふ事はならぬかと、身を搔きむしり、聲を上げ、嘆けば親も堪り兼ね、おゝ可愛の者やと、抱きしめ、我れこそ父よ六三よと、名乘つて譯を云ひ聞かさうか、いや／＼爰ぞ悟道の綻び口と、歯を食ひしばり堪へしが、胸にせきくる血の涙、娘の顏にはら／＼／＼。

お前のお聲は、父さんに其まゝ、そのお嘆きは合點ゆかず。

〽ひしと抱き付き、撫で廻せば、悟られてはと聲音をつくろひ。

六三　アヽイヤ、我れは元より妻なければ、子供持つべき謂れなし。そりや盲目の心の迷ひ、我れも讀誦の暇なし、早々爰を戻られよ。

〽枝折りの外へ連れ出づる、その手に縋り取り付いて、走り躓き付け入るを、宥めすかして押し返す、風情はさながら胡蝶の吹雪、あざる千鳥の浪頭、追ひつ追はれつ

猫の子の、狂ひまつはる裾袂、離れ難なき時しもあれ、妻のおそのは駈け戻り。

ト向うより、おその走り出て、直ぐに舞臺へ來て

その　モシ、こちの人、わたしやどうせう、どうせうぞいなう。

〽縫れど夫は折り悪しと、ためらふ暇に追ひ來る眷屬。

ト向うより、赤鬼、青鬼、鐵棒を持ち、追ひかけ來り

赤鬼　ヤア、夫の善根につき、閻王の廳を僞はりし罪人、

青鬼　邪淫妄語を犯せしおその、一旦地獄へ引き戻さねば

赤鬼　掟が立たぬ

兩人　サア、キリ〳〵うせう。

〽おそのと云ふ名に、おまつはあわて探り寄り。

まつ　マア〳〵待つて下さりませ。今のはもしや。

その　ヤア、わが身は娘か。懐しや。

まつ　オヽ、さういふお聲は母さんか。フム、そんなら爰に居なさんすは、父さんでござんすかえ。

その　エヽ、モ、知れた事いなう。わしは其方に逢ひさに、賽の河原へ行く道で、このお方々に捕へられ、地獄へ行けとの無體の有り條。モシ、こちの人、事譯云うて下さんせいなア。

まつ　コレ、母さま、お前や父さまが戀しさに、泣き焦れて目盲とはなりたれど、父さまのお聲、知らいでなんとしませうぞ。先刻にから尋ぬれど、親でない子でないと

その　去なさうとさしやんしたか……モシ、こちの人、今朝までも、娘の事を、賽の河原へ行て、尋ねてくれと云はしやんした詞に變り、佛になれば、それ程に、邪慳な心になるものか。

〽そりや胴慾と胸づくし、取らるゝ夫も黒繩に、身をひしがるゝ憂き思ひ、空嘯いて泣き顔を、見せぬ辛さは猶百倍、おまつは母に探り寄り。

まつ　母さん、もう云うて下さんすな。わたしはどうせお側に居らるゝ身ではなし、それにお前が父さんと、いさかひなどして、別れ〳〵にでもなつたなら、わしやなんとせうぞいの。仲ようして下さんせ。

その　邪慳な親を恨みもせず、結句こちらを案じるが、お前の目には見えぬかいなア。

六三　その恨みはさる事ながら、仔細を申さば猶更に、後の嘆きは如何ばかりと、わざとつれなく云ひしぞや。善果を得たる我れ一人、佛體に具はらねば、父母は奈落に

沈み、其方やおまつも浮かむ瀬なしと、佛の御告げ。必らず恨みと思はれな。

〽夫の詞の理に服し、なんと答へも泣き沈む、娘は涙押し拭ひ。

まつ　なんのマア、わたしは浮かまいでも大事ない。早う父さま佛になつて、祖父さまや祖母さまを、助けて上げて下さりませ。

その　オヽ、可愛い事を云やつたなう。

〽我が子を膝に引き寄せて、聲を惜しまず泣き沈む、見る父親は堪り兼ね、こりや、もうどうも心の空に、童子が怒りの聲強く。

　ト以前の童子、上手の梢へ顯はれて

童子　ヤア、貪着愛執に誓ひを破り、父母を奈落へ落すは如何に。

〽勵ます詞にハアハッと、袖打ち振つて掻き合せ、折しも遠音に梵鐘の響き、眷屬どもは立ち上がり。

赤鬼　アレ〱、修羅の太鼓の音やする。

青鬼　キリ〱うせう。

〽と引き立てる、おそのは何卒今しばしと、詫びれど容赦あらばこそ、骨もひしげと打ち叩かれ。

　ト青鬼、おそのを引き抱へ、上手へ入る。

〽嘆くおそのを引提げ行く、跡におまつは身を惜しまず。

まつ　どうぞわたしを母さんの、代りにやつて下さりませ。

赤鬼　エヽ、面倒な、うるさい餓鬼めが。

〽縋るその手を打ち拂ひ、打ち倒す、極樂却つて地獄の苦しみ、無量の業夢に身を責められ、追ひ立てられて行く空の。

　ト三重になり、六三郎、おまつは、赤鬼に追ひ立てられ、上手へ入る。知らせに付き、この道具一面に居所替りになる。

　本舞臺、正面の遠見の張り物をあふり返すと、暖簾口、延喜棚のかゝり、上手の屋體。世話屋體の前側障子を押し出す。門口は、世話木戸になる。下手の所、福島屋の勝手口になる。すべて、序幕、仲町の飾り付けになる。薄ドロ〱にて、心といふ字を上手の障子の内へ引いて取り、ドロ〱を打ち上げる。

ト奥よりおかぢ、走り出で來り
かぢ　てもマア、きつい魘はれやう。夢でも見てゞあつたのか。
ト障子を明けて
コレ、おその、目を覺ましや〳〵。
ト障子の内より、おその、序幕の拵らへにて走り出る。
これはしたり、そこは緣端、落ちるわいなう。
その　オヽ、あかみさん、爰は矢ッ張り内方。そんなら、兄さんを殺して、云ひ譯なさに、主と洲崎で心中したは。
かぢ　ヤア。
その　サア、それから遠い十萬億土へ。
かぢ　エヽモ、氣味の惡い。
その　モウ〳〵、怖い地獄へ落ちて、やうやうと云ひ譯立つて、極樂へ成佛したと思うたら、又もや地獄へ取戻され、親子三人別れ〳〵、可哀やおまつも今頃は、呵責の笞に打ち叩かれ。
〽さぞ母戀し、父戀しと、泣き呼び立てるを、見るやうなと、我れを忘れて嘆くにぞ、寢耳に主の清兵衞も、一間の内を立ち出でて。
ト奥より清兵衞、煙草入れを提げ出て
清兵　そんならお主も、地獄の夢を。
その　ハイ、閻魔さまの前へ引き出され
清兵　あの長庵が企みの根ざし、あり〳〵寫つた淨玻璃の
その　鏡の表で云ひ譯立つた、始終の樣子を、どうしてあなたが。
清兵　サア、讀みさしの小夜嵐を見ながら、トロ〳〵寢るともなく、日頃信心する日朝さまに連れられて、とんでもねえ佛を賴んで、お衣の袖の間から覗いて見たら、おその兄弟、六三どのも、込み入つた詮議最中。
その　假初めならぬ十萬億土、云ひ譯立つて極樂までの、月日も算へ盡されぬ。
清兵　唐土の盧生といふ人は、粟の飯の炊ける間に、五十年の榮花の夢を見たとの事。
その　それに引きかへ、わたしがお粥を炊く暇に、娑婆と地獄と極樂を、この身ばかりか旦那さんまで。
清兵　あり〳〵見たる夢合せ。
その　斯うした事もあるものかいなア。

〽三人顔を見合せて、只不思議ぞと夕まぐれ、おまつは六三を押し止め、行くをやらじと爭ふ外面。

ト向う揚げ幕にて

まつ　なんであらうと、ちよつと來て下さんせいなア。

ト おまつ、六三郎の手を引ッ張り出て來る。

六三　さりとては聞分けのない。一大事を聞いたゆゑ、慥かな事を見屆けて來るのぢやわいの。

まつ　それでも母さんが、この間から逢ひたいと云うてなれば。

六三　ハテマア、困つた事を云ふ奴ぢや。

ト云ひながら、門口へ引かれて來る。

〽内には主が聞き耳立て。

清兵　あれは慥かに六三郎どのの聲ぢやが。

〽云ひつゝ立つて、門の口。何を表で親子の爭ひ。マア、入らつしやりませ。

六三　これは〱、清兵衞さま御夫婦。心急きゆゑ、御挨拶もいたさず、眞平御免……コレおその、閻魔堂橋の煮賣り屋で、隣座敷のひそ〱話しに、小倉の色紙を質請けして、國屋敷へ差出せば、小柴の家は一生埋れ木。さすれば、おそのは心の儘と、耳に入るより差覗けば、其方の兄の長庵が、七郎助との物語り。

その　すりや、斯うしたおまつといふ子のあるお前と、わたしの手を切つて、七郎助へ兄さんが。

六三　イヤ、兄と云ふは皆僞はり、其方の母が持つてゐた臍の緒書を奪ひ取り、兄弟と云つたは拵らへ事と、長庵が問はず語り。

清兵　エヽ、そりや、そんならおれや、このおそのが、アリアリ見たる地獄の夢に

まつ　しつくり合つたも佛の加護か。

その　もしや鏡に寫りし通り、淺草祭りの曳き物の

清兵　オヽ、それ〱、牡丹の花へ隱したまで、細々見たるも御利益ならん。

六三　如何にも、二人が話しを聞けば、三社參りへ連れ立つて、惡者を語らひ、清兵衞に喧嘩を仕掛け、その間におそのを連れ出すとの云ひ合せ。跡追ひ駈けて詮議せんと、出かける折柄。

まつ　母さんが、是非逢ひたいと、云はしやんしたゆゑ。

かぢ　オヽ、賢い〱。其方が、六三さんを連れ申したばつかりに、サラリと事が分つたわいなア。

その　すりや、旦那さんにはお祭りの

清兵　オヽ、石橋の仕手方が、間違つたゆゑ、據なく頼まれて。
六三　それぞ倔強。この六三が、その今様の役の替り。寶詮議は心の儘。
かぢ　ほんに、それ〳〵、こちの人に、喧嘩を仕掛け、その間に、おそのを手籠めにしようと
その　でもマア、憎い惡企み。
清兵　成る程、内も氣遣ひ、其うちに、おそのをしがくした上で、わしも後から。ソレ女房、あの衣裳をば。
かぢ　アイ〳〵、合點でござんす。
ト手早く奥より、石橋の鬘、衣裳の包みを持ち來る。
清兵　ア、コレ、町人ながらも多勢の惡者。
かぢ　必らずともに、怪我せぬやうに。
六三　氣遣ひあるな、一期の大事。
その　丁度宵闇
六三　月の出ぬ間を幸ひに
清兵　ちつとも早く
六三　合點だ。
ト件の衣裳の包み、石橋の鬘を一つにして、抱へ、向うへ逸散に走り入る。舞臺は皆々、見送る見得よろしく。

ひやうし幕

大切　三社祭の場

常磐津連中

役名――小柴六三郎。醫者、梶野長庵。請負人、七郎助、練り子、おつる。同、おつち。福島屋清兵衛。

本舞臺、平舞臺、正面、石の鳥居、この奥へ三社の宮を書割り、下手に、右大臣、左大臣の門を横に見せ、所々に石の燈籠、提灯を建て、すべて馬道より、淺草三社の境内を見たる體。下手へ淨瑠璃臺を飾り、爰に袢纏、股引、腹掛け、草履形、若い衆の拵らへの四人、立ちかゝり居る。屋臺囃子にて幕明く。

若一　今年は、祭りの出來もよく
若二　この宮元は云ふに及ばず、廣小路から並木まで
若三　花車練り物で、通路も止まる人の山
若四　どうか、こんな祭りを、年に二三度づゝもやりたい

ものだ。
若一　それはさうと、間違ひのないやうにしろと、年寄り
中より嚴しいお觸れ
若二　イヤモウ、花車の順から、踊り屋臺の順番まで
若三　詳しく記したこの番附。
ト淨瑠璃の觸れ書を出す。
若四　ドレ、ちよつと見せな。
若三　お前、讀んで聞かしてんな。
ト若者一、觸れ書を讀み上げる事あつて
若一　時に、もう繰り出す刻限。
四人　サア、行かう〳〵。
ト上手へ入る。知らせに付き、淨瑠璃太夫座前の幕を
切つて落す。直ぐに常磐津の淨瑠璃になり
〽屋臺囃子に浮き立つや、晝と夜との花見の群集。押し
分ける淺草の利益は深き宮戸川、三社祭りの賑はしく。
ト番附賣り
番附　三社さまのお祭り番附〳〵。
ト云ひながら、向うより出て來る。後より、紙細工荷
を擔き出て來り
紙細　蛇の目傘早替り、お茶臺、お茶壺、お茶碗となる。

八つ八通りに替る。
ト兩人、上手へ入る。向うより酸漿屋の荷を擔ぎ出て
來り
酸漿　酸漿屋、海酸漿〳〵、丹波酸漿〳〵。
ト上手へ入る。また向うより、手遊屋、風呂敷包みを
脊負ひ、手遊びを持ち出て來り
手遊　これは新板竹田近江が積り細工、お座敷にてのお慰
み。
ト上手へ入る。向うより片襷にて、箱を掛け、日傘を
さして、飴屋出て來り
飴屋　飴は一流太白練り、軟かにして、齒に付かず。名代
名代。
ト上手へ入る。
〽轉喧ましく割り竹に、先を拂はせ鐵棒は、眞間の手古
奈か、手古舞か、女とも見え、又男とも、見えて優しき
梅柳。
ト向うより、手古舞、鐵棒曳いて出て、上手へ通り拔
ける。
〽色香を升の揚げ障子、踊り屋臺と右左。
ト向うより、地走りの踊り出る。後より囃子の屋臺、

警固付いて出て來り

若者　モシ頭、お頼み申し上げます。

〽オツと所望と拍子木に。

トこれより、踊りになる。

〽茂りあふ、草も淺茅の一つ家に、宿り求めし稚兒櫻、軒洩る月にお姿を、ふつと見上げて賤の女は、云ひ寄る汐もなま中に、叶はぬ戀を思ひ初め、こがれ寄るとも片糸の、枠の車やわくらはに、一夜保たぬ仇枕、石の枕と聞くならく、底の苦患を助けんと、好色菩提解帶の、契りも深き福壽海、利益は正に國芳の、額に寫して。

トよろしく淺草一ツ家の踊りあつて

〽ヤア千代の初めの一踊り、雀踊りが所望ぢやが、合點か。

雀踊　オ、サテ合點だ……アリヤセ、コリヤセ、セツトセ、ヨイ〱

ト子役、奴の拵らへにて、八人、早渡りの鳴り物にて走り出て、直ぐに本舞臺へ來り、振りになり

〽宵の口舌のしらけた跡を、泣いて通るは、あれ時鳥、梅鉢ぢや、合點だ。

皆々　アリヤセ、コリヤセ、ソコセ〱、アリヤリヤンリヤン〱、ヤツトセ、ヨイ〱。

〽好いた同士が手を引き連れて、よれつ縺れつ、あれさざめ言、反り橋ぢや、合點だ。

アリヤセ、コリヤセ、ヨイヤ〱ヤツトセ、ヨイ〱。

〽勇ましや。

トこの人數、上手へ入る。

〽又もしやぎりに練り出す、次は牡丹に石橋を、引いて木遣りの聲々に。

木遣　オ、イヤシヨ、エ、イヨイヤレテコ、コレワセエ、イヤホイヤネ、ヨウンエイ、オシヤト、エ、ヤアトコトツチメテエ、イヤサコレワイヤサノセ、ヤア、エンヤコレハ、エンヤラセ。

ト此うち、向うより、祭り揃ひの袢纏、股引腹掛けにて、八人の手子舞ひ、後より、長庵、ぱつち尻端折り一本差し、この後より七郎助、黒紋付き着流し、駒下駄、大小にて出て來る。尤も花籠へ、牡丹の花を入れし曳き物を曳き出て來り

〽千穐萬歲常磐の松に、代々籠めて、女夫睦んで丹頂の鶴の。

手子　ヨイ〱

〽數の、雛鳥ちん〳〵千代々々囀る。
ヨイ〳〵。
〽かつらさま〳〵八重に根からむ、定家かづらに亙かづら。
ヨイ〳〵
〽はなアリヤ、千歳萬歳も添ひ遂ぐる、滅多矢鱈にめんめんめでたいなアか中、オイカケ〳〵中の綱。
オイヤシヨ。ヤア。
ト此うち、本舞臺へ來る。
長庵　ア、、めでたい〳〵、一つ〆めてくれ〳〵。
皆々　ヨイ〳〵。
ト手を打つ事あつて
手一　そりやアさうと長庵さん、こちらを手子舞ひに仕立て
手二　曳き物に附いて來い、賴む事があると云ひなすつたが。
手三　して、その賴みは
皆々　どんな事でごぜえます。
七郎　イヤ、その本人はこの七郎助、仲町の福淸が、今日石橋の役にさゝれ、爰へ來るを幸ひに、叩きしめてもらふ魂膽。
長庵　其うち、この長庵は、おそのを卷き上げ、お主達にも骨折り代を遣る積りサ。
手一　イヤモウ、惡い事なら命掛け、淸兵衞が筋骨拔いてら。
手二　さういふうちにも、勢揃ひの刻限。
七郎　オ、、さうだ。
長庵　赤熊を掛けて、アレ〳〵向うへ。
七郎　必らずぬかるな。
皆々　合點だ。
ト皆々忍ぶ。
〽松風の花を薪に吹き添へて、雪をも運ぶ山路かな、常に淸香の花降りて、笙竹きんくご夕日の雲に聞ゆべき、目前の奇特新なり。
ト向うより六三郎、赤熊獅子の拵らへにて直ぐに本舞臺へ來る。
〽峯に立樹も嵐に連れて、谷の谺の物凄く、苔滑かに露添ひて、渡り危ふき石橋の。
ト此うち、手古舞ひ出て、六三郎にかゝり、所作立廻りあつて、トゞ、長庵、七郎助出て
長庵　ヤア、淸兵衞と思ひの外

初演錦繪　三社祭の場

七郎　わりやア小柴の六三だな。
六三　オヽ、汝等が企みにて、この身の越度となつたる色紙、キリ〳〵渡して繩にかゝれ。
七郎　何を小癪な。
〽牡丹に戯むれ獅子の曲、大巾利巾の獅子頭、打てや囃せや牡丹芳々々、黄金のずい顯はれて、花に戯むれ枝に伏しまろび、實にも上なき獅子王の勢ひ。
ト手古舞ひ、皆々牡丹の持ち枝にて、また所作ダテあつて、トヾ手古舞ひを追ひ込む。
〽薙ぎ立てられて荷擔人は、皆散り〳〵に逃げて行く、折しも來かゝる清兵衞が。
ト向うより、清兵衞、派手な着付け、ぱつち、尻端折り、一本差しにて急ぎ出て來り
〽夢の知らせの牡丹の英、中より取り出す小倉の色紙。
ト清兵衞、舞臺へ來り、牡丹の曳き物へ心付き、中より袱紗包みの色紙を取り出す。
六三　ヤヽ、それこそ尋ぬる紛失の
清兵　色紙手に入る上からは、この兩人に繩打つて
七郎　さうはゆかぬ。
ト七郎助は清兵衞の持つてゐる色紙を取らうと手を出すを、六三郎はこの手を捕へ、直ぐに縛ろ。長庵を清兵衞捕へて、牡丹の曳き物の繩にて縛ろ。
〽かゝる手を、直ぐに折り分け、下げ緒のいましめ。
六三　何から何まで、御夫婦の
清兵　ハテ、禮には及ばぬ。歸參が肝要。
長庵　すりや、こちとらは。
六三　惡事の成敗。
七郎　おそのはどうでも
清兵　小柴の花嫁。
六三　チエヽ、忝ない。
清兵　めでたい〳〵。
〽實にやめでたき常磐津の、語り傳へて岸澤の、惠み潤ふ君子國、ゆるがぬ御代こそ久しけれ。
ト長庵、七郎助は、羨やましき思ひ入れにて立ち上がる。六三郎は引き据ゑながら、清兵衞に禮を云ふ。清兵衞も、長庵を引き据ゑ、キッとなり、双方よろしくめでたく打出し。

幕

三世相錦繡文章（終り）

けいせい三拍子　二幕

道中の小室節は扨も見事なお大名の嫁入に腰元の八文字さしかけ傘の雪の夜は東山の下屋敷につもる話は戀路の間違ひ

切るに切られぬ煙草の小口胸の炎は般若の面裏の裏ゆく上使の騙り見顯はした正體は助太郎館の怪異

馬士の錦袖

船頭の長袖

乳人の振袖

猿樂の道成寺はいとも妙なる芝能の中入に姫君の一文字菅の小笠で花のあな春日山の御社に籠めし誓ひは情の拷問

云ふに云はれぬ血判は口止めしたる車輪の轡音に聞えし勅使のしれ者萬歳謳ふ納まりは由留木家の繁昌

初演の繪番附

傾城三拍子――とん〳〵の三吉

上の巻

祇園社內煙草店の場
拜殿富突き場の場
下河原町三拍子の場

役名　山形屋彌兵衞。千切屋娘、お梅。同腰元、おこと。同、おはな。同丁稚駒吉。米屋、兵助。木屋、杢兵衞。八百屋、淸介。騰原周藏實ハ伊達與三兵衞。煙草切り、八五郎。大原會平太。箕面福之丞。小室富右衞門。八坂東太。音羽瀧藏。津山千藏。信貴山十郎。鷲塚八平次。山形屋番頭、傳兵衞。腰元、おせつ。干棗のお初實ハ福島左衞門娘光姬。煙草切り、三吉。

造り物、平舞臺、見附け繪馬堂。よき所に一間半の煙草店。飾り箱に煙草入れ並べあり、出し襖、看板、水引、暖簾、これに三吉煙草と書いてあり、橋がゝり葭簀圍ひ茶店。眞中に床几並べ、仕出し、煙草のんで居る。茶店の男、茶を汲んで居る。この見得よろしく、神樂打込みにて幕明く。

仕一　茶店の、今日は富突きで賑はしい事ぢやの。

茶男　左樣でござります。今日の富は、大はずみでござります。

仕一　さうして、もう追ッつけ突きであらうが、どうぞ第一が突どめの、百兩が取りたいものぢや。

仕二　時に、評判の孝行煙草でも、買うて行きませうか。

仕三　そりや、ようござりませう。シタガ、親仁も息子も店に居りませぬぞや。どこへ行きましたのぢや知らん。

茶男　イヤ、いつもの通り、車で方々へ親仁どんを連れて行きましたゆゑ、店番はわたしが賴まれて居りますわいの。

仕一　さうかの。なんでもこの祇園の、孝行煙草々々と、京中の噂ぢやわいの。

仕二　時に、そろ〳〵富突き場へ行きませうか。

仕三　さうしませう〳〵。ソレ、煙草の錢は爰に置きますぞや。

茶男　ハイ／＼、マア、よろしうござります。
仕一　マア、ござれ／＼
　ト神樂になり、上手へ入る。男、錢を入れ
茶男　時に、この三吉も、もう戻りさうなものぢやが、どうやら雪空になつて來た。ドレ、この間に一あたりせうわい。
　ト茶店の内へ入る。神樂になり、向うよりお梅、着附け振り袖、小吟帽子。腰元おこと、町家の腰元の形。お花、同じく腰元の形。駒吉、丁稚にて附き添ひ出て
駒吉　ヤア、御寮人さま、もそつと靜かにお出でなされませぬか。
こと　イヤ／＼、御寮人さまのお心急き。どのやうに申しても、靜かにおひろひはなされませぬわいの。
はな　それで室町から、ちつとのうちに、もう爰は祇園のお社。
うめ　ほんに早う來たわいの。
こと　サア、アタフタお出でなされたも、早うお顏が御覽じたいばつかり。さぞお樂しみでござりませうなア。
うめ　アレ又、おだてやるかいなう。
皆々　サア、お出でなされませ。

　ト皆々本舞臺へ來る。
こと　ソレ、駒吉どの、いつものやうに。
駒吉　ハイ／＼。
　ト煙草店の側へ行き
煙草おくれ……申し、煙草おくれ。
　ト睨んで見て又こちらへ來て
申し、誰れも居やしませぬぞえ。
うめ　そんなら三吉さまは見えぬかや。
はな　大方、どこぞへ買ひ物にでも、行かしやんしたのでがなござりませう。
うめ　折角來たものを。
　ト力を落すこなし。おこと、店を見て
こと　申し、店が明いてあれば、なんの遠い所へ行かしやんせう筈はござりませぬぞえ。大方程なう戻つて見えませう程に、マア、お宮へ參つて、宮の賑ひでも御覽じませ。
はな　其うちには、お下屋敷へおやりなされました、おせつどのも、戻つてござりませうぞえ。
うめ　なんの、宮が面白い事があつて。わしや爰に居るわいな。

こと　それでは人目に立つて、惡うござりませうぞえ。

うめ　それでも、この間から、度々來ても、とんと折が惡うて、物云ふ事がならんもの。

こと　マア、今日は是非ともとつくりと、お話しもさせますぞえ。

駒吉　お宮へお出でのその間、わたしがそこらを尋ねませう。

こと　オヽ、それがよい〱。マア、御寮人さま。

うめ　オヽ辛氣。

三人　マア、ござりませ。

ト神樂になり、お梅、煙草店へこなしあろ。皆々無理に連れ、上手へ入る。あと輕業の鳴り物になり、向うより番頭傳兵衛、着附け羽織、ばつち尻からげ。鷲塚八平次、着流し浪人の形にて連れ立ち出て

傳兵　この雪空ではと思ひの外、今日らでも人絶えのせぬは、この祇園さまの賑わひ。して、八平次さまらは、どこへござりますな。

八平　マア、どこと云うたら、只ブラ〱と當なしぢや。

傳兵　大方、膳所裏か、八軒であらうな。

八平　何を馬鹿な。

傳兵　ハヽヽヽ。マア、ござりませ。

ト本舞臺へ來り、床几にかゝり

八平　時に番頭、貴樣はどこへ行くのぢや。

傳兵　今日は此方の旦那が謡の會で、鷲山へ行かしやつた留守の間に、今日の富の札を買うて置いたゆゑ、どうあらうと、ちよつと見に出掛けました。

八平　それは格別、身共も、齋藤内藏之助と心を合し、由留木の家は滅亡させ、兄宮太夫どのは死なれたが、内藏之助の大望成就までは浪人の身を、以前のよしみとて、何かの世話、忝ない。

傳兵　イヤモ、それは仰しやるまでもない。お家へお出入りの家の番頭ぢやものと云ふ所なれど、主人ではなし、薄い馴染のこなさまを、世話して置くも、なんぞの時、此方の得にせうが爲。

八平　して、其方の借家に居る、伊達與三兵衞が事は。

傳兵　ア、コレ。

ト押へ、煙草店を見る。輕業の鳴り物になる。

幸ひ店に居らぬと見える。さて、段々とたぐつて見た所が、こちの旦那めが餘所ながら、心を附け居る鹽梅ではなんでも與三兵衞に違ひないぢや。

八平　然らば彼れが悴として居るは、由留木左衞門が腹變りの弟、左馬治郎と云ふ者。慥かな證據は、瑪瑙の月形の香箱を所持して居る筈。

傳兵　マア、さう聞いたゆゑ、その香箱をせたげるの魂膽、その香箱を、こなさまへ渡したら、直ぐに左馬治郎になつて、こなたは大名になれるがの。

八平　そりや申さずとも知れた事ぢや。

傳兵　さうなる時は、お出入りのお大名の方で、養子息子の義兵衞めを抛り出し、伯父隱居を取込んで、山形屋の旦那樣。

八平　何分その香箱を取り得るが肝心。

傳兵　それは追ッつけ。道々話す事もあれば。

八平　委細は小蔭で。

傳兵　八平次さま。

八平　番頭。

傳兵　去なんせ。

ト右の鳴り物になり、兩人上手へ入る。「綱手車」の唄になり、向うより煙草切り三吉、木綿やつし、車の綱曳き出る。與三兵衞、親仁の拵らへにて車に乘り、眼鏡かけ、本を讀んで居る。三吉、物思ひのこなしにて

三吉　いま石段で聞いたら、千切屋の娘が來たとの事。

與三　來たとは何が參つた。

三吉　イエ、それは、留守のうちに、煙草買ひが來たかと申す事でござります。

トこなし。煙草切り八五郎、着流し職人の形にて出て來り

八五　オヽ、三吉か。

三吉　八五郎、今日は休みか。

八五　サア、晝までは四條の鬼の腕に居たが、薬取りの間に惡うて、晝から休んだも、この間貴樣が頼んだ事を。

ト云ふを

三吉　アヽ、マア、店へ行かうぢやないかい。

ト右の唄にて三吉、車を曳き、本舞臺へ來る。米屋兵六、木屋李兵衞、八百屋清介、掛乞ひの形にて出て來りて

三人　オヽ、親仁どの、爰にかの。

與三　オヽ、これは皆の衆、さては祇園參りかの。

三人　イヽヤ、おいらは、ちとこなさんに。

ト云ふを打消し

與三　アヽ、アノ見舞ひにか。それはよく來て下さつた

の。

ト三吉へこなしあつて云ふ。

八五　時に、貴樣が賴んだ事の。

ト云ふを與三兵衞へこなしあつて

三吉　アノ、賴んだとは、ア、、成る程、手間の事であらうの。

八五　ハテ、さうぢやないわいの。

三吉　サア、金さへ先貸ししてくれりや、爰の店はさして置いて、はまりに行く氣ぢやわいの。

八五　イ、ヤイナウ、ソレ、金の。

三吉　ハテサテ、コレ。

ト與三兵衞へこなしあつて

後でとつくり相談せうぢやないかい。

ト與三兵衞こなしあつて

與三　オ、、こなたへ話した、後を云うて聞かさにやならんわいの……コリヤ三吉、其方は富突き場へ行て、富はまだ突かぬか、見て來やれ。

三吉　そりや此方も幸ひ。

ト思はず云ふを

與三　ヤ。

トこなし。三吉こなしあつて

三吉　イヤ、幸ひの連れぢや、八五郎、連れ立つて行かうか。

八五　オッと合點ぢや。

三吉　そんなら親仁樣。

與三　早う歸れよ。

三吉　ハイ〳〵。どなたもこれに。

ト唄になり、八五郎三吉連れ立ち、上手へ入る。後に三人こなしあつて

兵六　時に親仁どの、息子の側で云うては惡いと云はんすゆゑ、云はなんだが、こちの米代は八貫五百。

杢兵　木代炭代合して貳貫八百。

清介　こちは味噌から醬油、靑物代、都合合して一貫六百。

兵六　こりや一體、どう譯つけるのでごんす。

三人　早う片附けてもらひませうかい。

與三　成る程、さう云はつしやるは尤もでござるが、何を云うても身共が長の煩らひ、悴めは精出して働らいてはくれますれど、思ふに任せぬ瘦せ世帶、何卒いま暫らくの所を。

兵六　ならん〳〵。さういつまでも待つては居られんわいの。

杢兵　こなさまが拂はつしやれにや、いつそ息子に貰はうかい。

兵清　オヽ、さうぢや〳〵。それがよい〳〵。

ト立ちかゝるを、與三兵衛留め

與三　マア〳〵、お待ちなされて下さりませう。若い者と云ひ、アタフタと致して居ります悴、どうぞこんな事は聞かしともなうござれば、平にその儀は容赦にあづかりたい。

兵六　息子に聞かしともなくば、いつそ内へこなさまを連れて去んで、めつきしやつきしませうわい。

杢清　さうぢや〳〵。三人して車を引いて去ぬのぢや。

ト綱に手を掛ける。

與三　サア、それでは悴が案じますれば。

三人　そんなら、算用して下さるか。

與三　サア、それは。

三人　金が無くば、車引いて去なうか。

與三　サア。

三人　サア。

皆々　サア〳〵〳〵。

ト此うち傳兵衛窺ひ居る。

兵六　エヽ、面倒な。ソレ、二人の衆。

兩人　オヽ、合點ぢや。

ト綱を引きかける。傳兵衛よろしく隔て

傳兵　待て。

三人　ヤア、こなさまは。

與三　オヽ、お家主の番頭どの。

三人　待てと留めた、こなさまの料簡は。

傳兵　皆まで云はずと、ソレ。

ト金包みを抛る。兵六取上げ見て

兵六　ヤア、こりや小判で三兩。

トこなし。

傳兵　それで算用して置くがよいわい。

三人　それは忝ない。

兵六　併し、ちつとこれでは。

傳兵　剩るなら後の仕送り。

三人　心得ました。ドリヤ、お暇申しませうか。

ト唄になり、下手へ入る。あと合ひ方になり

與三　アイヤ、番頭どの、其許に只今の金子、お取替へも

らひましては。
傳兵　ハテサテ、何も遠慮には及ばぬ事。
與三　でも、それではどうも、身共が心が濟みませぬ。
傳兵　成る程なア。常から堅くろしいこなさまの事、何も氣休めぢや。そんならいつそ何なりと、質物おこさつしやつたがよいぢやないか。
與三　と云うて、見らるゝ通りこの風體。
傳兵　ハテ、何でも大事ない。ほんの心ゆかしぢやわいの。
與三　成る程。
トちよつと思案して、こなしあつて
如何にも質物渡しませう。
傳兵　アノ質物を。
與三　こりや此方に大切な入用の品なれども、暫時の間、
トこなし。與三兵衛、懐より香箱を取出して
質物にお渡し申す。
ト差出す。傳兵衛、取つて見てこなしあつて
傳兵　見りや古物の香箱。どうやら値打の有りさうな物ぢやの。
與三　されば、生地が瑪瑙でござれば、捨賣りにしても拾兩は慥かなもの。
傳兵　何か知らぬが、マア、預かつて置きませうわい。
ト懐へ入れ、こなし。
與三　只今も申す通り、大切な品なれば、金子さへ調ひなば。
傳兵　ハテ、何時なりと戻しませうわいの。
與三　しかと詞を番ひ申しますぞや。
傳兵　時に、思はず知らず遅うなつたが、もう彼れこれ富突きの時分なれば、爰で別れませう。
與三　そんなら行かつしやりますか。
傳兵　オイナウ。親仁どの、これにござれや。
ト唄になり、傳兵衛入る。あと彈き流し、合ひ方になり、與三兵衛こなしあつて
與三　實は身の差合せと云ひながら、あの香箱は大切ない……あの儘に金さへ調はば、いつ何時でも取戻さるゝ一品。些細な事に心を勞せしは、我れながら愚の至り。又どうなりともなるであらうぞい。
トこなし。合ひ方にて、三吉、捨ぜりふながら戻つて來て
三吉　親仁様、富はまだ突かずでござりますが、追ッつけ

始まるでござりませう。

與三　定めし群集であらうな。

三吉　イヤモウ、怪しからぬ人混みでござります。

與三　オ、、さうであらう〳〵。ア、コレ、兩足が健やかなれば、とも〳〵見物も致さうもの。さて〳〵殘念な事ではあるわい。

三吉　イエ〳〵、なんぼう人混みでも、この車を曳いて行くと、人が除けて通してくれます程に、サア、見に參りませう。

ト綱を取らうとする。

與三　イヤ〳〵、老人のよしない物見。よしに致さう。

三吉　ハテ、さう云はずと、ござればよいに。

トこなし。三味線入りの神樂になり、お梅、おこと、おはな、駒吉出て、三吉へこなし。三吉もこれにてこなし、ソワ〳〵して、フト與三兵衞見て、思ひ入れ、頭を振る。お梅、辛氣なこなしにて、紙を丸めて三吉へ拋ると、與三兵衞の顏へ當る。與三兵衞こなし。三吉、いろ〳〵仕方して、惡いと云ふ思ひ入れ。

與三　伜々……コリヤ伜。

ト大きな聲にて云ふ。これにて心附き

三吉　ハイ〳〵。

ト悄りする。

與三　そちや、何をモヂ〳〵致して居るのだ。

三吉　サア、これは。

與三　これはとは。

ト双方を見てこなし。三吉、こなしあつて

三吉　サア、アレ、アノ、向うに居てぢや丁稚どのは、毎日毎日煙草買ひに見えますゆゑ、今日も大方さうでござりませうがな。

トお梅へこなしあつて、お梅頷づく。三吉仕方して

サア、それでも今は、惡い〳〵。

與三　ヤ、惡いとは、何が惡いぞ。

三吉　サア、今は惡いのばかりで、善いのはないと申すのでござりますわい。

與三　それなれば、ツイさう云うて、別に仕方いたさいでもよいもの。

三吉　イエ〳〵、仕方云はぬと解りませぬもの。

與三　フム、仕方でないと解らぬとは、さてはあの小兒は聾か。

三吉　エ、。

與三　何か互ひに仕方ばかり致すからは、どうか啞聾のやうに見えるわい。

ト三吉、術ないこなし。此うちおことは駒吉に囁くと駒吉領づき、與三兵衛の側へ行く。

與三　オヽ、啞どのが物云ふさうな。

駒吉　わたしも親孝行を、あやかりたうござります。

ト綱を取上げるを

與三　イヤ／＼、身共はこれに用事もあれば。

駒吉　ヘテ、大事ござりませぬ。マア、ござりませ。

ト神樂早める。女形皆々手傳ひ、無理に上手へ車を引ツ張る。與三兵衛、これはしたりと拵ぜりふながら駒吉に車引かれ入る。女形あと見送り、こなしあつて

女皆　オヽ嬉し。マア／＼、邪魔は拂うた。

三吉　ヤレ／＼、大汗をかいた事ではある。

ト、お梅の方へこなし。

こと　幸ひの上首尾。マア、御寮人さま。

うめ　それでもどうやら。

ト恥かしいこなし。

こと　ハテマア、あれへお出で

皆々　なされませいなア。

ト三吉の方へ突きやる。お梅、三吉を見て袖にて顔を隱し、恥かしいこなし。三吉も恥かしいこなしにて、頭へ手を上げると、これにてトロンと輕業の鳴り物になり、おこと、お梅の手を取り、三吉の袖を持たす。おはなは三吉に手を握れといふ仕方する。兩人いろいろこなし。おこと、もどかしいこなしにて物を云へと云ふ仕方する。お梅、是非なう恥かしさうに

うめ　申し、三吉さま、お前、先度からおせつに云うてやつた事、聞いて下さんしたかえ。まだかえ。イヽエイナア、聞いておくれなさつたかえ。

三吉　ハイ、御勿體ない事仰しやつて下さります。お詞聞く聞かぬと、芥子のやうな事ではござりませぬ。

うめ　それでもこちや、まだ、ついぞそんな事した事がないゆゑ、怖いと云うたら、せつが、大事ないと云やるゆゑ、あの人に任してあるが、お前得心かえ。

三吉　ハイ、得心でござりますわい。

うめ　ほんまに承知かえ。

三吉　承知も／＼、承知々々あばばでござりますが、こりやどうやら提灯に釣り鐘、ちとこりや釣合はぬ色事でござりますわい。

うめ　エヽ、ツッとモウ、人の云ふ事を脇へ外らして、ほんに水臭い煙草屋さま。

ト抓る。

三吉　アイタヽヽヽ、水臭い煙草ぢやと仰しやるが、仙臺未聞の色事で、ハッと服部氣も舞ひ上がる仙人煙草、まだ獨り身の山本なれば、どうで云ふ事も油引かず、江戸の、イヤ、吾妻の詞ぢやないが、きざ、イヤサ、刻み煙草ぢやと、お氣に入らぬがちでござりませうぞえ。

こと　オヽ辛氣、ソレ、おはなどの。

はな　合點ぢやわいなア。

ト兩人して二人を抱きつかして

兩人　オヽしんど。

ト額外けると、橋がゝりより、大原曾平太、ぶッ裂き野袴、大小、代官の形。家來大勢連れ出て

曾平　者ども、ソリヤ。

家來　キリ〳〵うせう。

ト引立てにかゝるを、皆々悶りして支へ

こと　こりや何ゆゑに、御寮人樣を

皆々　なんとなされますえ。

曾平　何ゆゑとは恍けまい。身共は當所の役人、大原曾平太と云ふ者。和州福島家の伯父御、大學どのゝ頼みに依つて、詮議に廻るお尋ね者、光姫に相違あるまい。それゆゑ引立て歸るのサ。

三吉　アヽ滅相な。そんなお人ぢやござりませぬ。必らず粗相を。

曾平　云ひ譯あらば役所で致せ。ソレ、引立てい。

家來　ハッ。

トまた引立てにかゝる。三吉支へるうち、傳兵衞ズッと出て

傳兵　お役人樣。マア〳〵、お待ち下さりませう。

トよろしく割つて入る。

曾平　待てと止める汝は何者。

傳兵　ハイ、私しは京極通り、即ちあれに居ります者の家主、山形屋の番頭、傳兵衞と申します者でござります。

曾平　その山形屋の番頭が、何ゆゑあつて姫を庇ふぞ。

傳兵　サア、姫は姫でござりますれど、大名の姫ではござりませぬ。ありや室町の干切屋の娘、お梅と云うて、よい娘の大關、正銘證據と云ふは、この傳兵衞、おはもじながら、ぞつこん惚れ拔いて居りまする。ハイ、心から底から女房に持ちたい心の内。

ト三吉お梅こなし。
御推量なされて下さりませ。
曾平　ヤア、默り居らう。左樣な事が證據にならうか。繪
姿に似たが慥かな證據。ソレ、者ども。
ト顏にてこなし。
傳兵　ア、、滅相な。可哀さうに、どうあれが引立てさせ
られませうぞ。それとも達てと仰しやらば、私しを代り
に繩かけてなりと、あれは助けておやりなされて下さり
ませ。ソレ、女中衆ちやつと。
ト顏にて敎へる。皆々行かうとするを
曾平　イヽヤ、ならぬ。
ト寄らうとするを、よろしく留め
傳兵　ハテ、申し譯はどこまでも、私しが致します。ソレ
早う、そちらへ〳〵。
こと　そんなら、御寮人樣。
はな　それ〳〵、一先づ爰を。
うめ　そんなら。
ト三吉へ思ひ入れあつて行かうとするを
曾平　イヤ、さうはならん。
トまた行かうとするを留めて

傳兵　エヽ、どうぞ見遁がして下さりませ。
ト泣いて云ふ。
曾平　エヽ、面倒な。ソリヤ。
家來　ハツ。
ト傳兵衞を引退けるを、傳兵衞、滅多無性に、捕り手
に摑みつき、をかしみの立廻り。此うちお梅、女形
皆々下手へ逃げて入る。
ヤア、詮議ある女を取逃がしたる大罪人。
傳兵　サア、お腹が立つなら如何やうとも。彼れゆゑなら
ばいとひませぬ。
曾平　何は格別憎くい町人、眞葛ヶ原へ參り、役人中へ云
ひ譯いたせ。
傳兵　そりや何所までも、私しが云ひ譯いたしませう。サ
ア、繩をおかけなされて下さりませう。
トこなしあつて手を廻す。
曾平　イヤ、それには及ばぬ。
傳兵　ハテ、粹なお捌き。
曾平　町人。
傳兵　ソレ、科人を引立てなされませう。
ト唄になり、こなしあつて、この一件下手へ入る。三

吉あと見送り

三吉　なんの事ぢや。折角よい首尾であつたに、今のどさくさ。エヽ、いま〳〵しい。

トこなし。合ひ方になり、八平次出て來り、三吉へこなしあつて

八平　アヽ、浮世ぢやなア。誰れあらう、丹州福知山の城主、由留木左衞門が弟、左馬治郎とも云はるゝ者が、時世につれてこの風體。その日の糧に盡き果て。

ト最前の香箱出して

この瑪瑙の月形の香箱を、賣り拂はんとは思へども、身にも命にも替へ難き、大切の品なれば、ムザ〳〵人手には渡されもせず、と云うて、路用の糧には盡きてくる。アア、是非もなき有樣ぢやよなア。

ト思ひ入れ。三吉フトこれを聞いて、恟りして、ツカツカと八平次の側へ行き、香箱に手をかけ

三吉　誠に、紛ふ方なき月形の香箱。この香箱は。

ト取らうとするを振り切つて

八平　イヤ、盜み物でもなんでもない。こりや身共が親の筐の香箱。

三吉　そんなら、いよ〳〵由留木の若殿、左馬治郎さまでござますか。

八平　イヤ、身共は只の浪人。

トこなしにて云ふ。

三吉　如何やうにお包みなされても、この香箱が慥かな證據。ほんに〳〵、今の今まで、大抵尋ねた事ぢやござりませぬ。ようマア御無事で居て下さりましたなア。

ト嬉しきこなし。

八平　すりや、身共が左馬治郎ならば。

三吉　お隱まひ申しまする。ハイ、金輪際、家來のわたしがお力になつて、お家を立てさせませねば、未來にござる左衞門さまへ、申し譯がござりませぬ。

八平　すりや、世に便りなき身が力にならんとな。ハヽア忝ない〳〵。

三吉　斯う廻り合せますからは、親仁樣の心も、とくと糺した上、共々お力に致させませう。

八平　イヤ、世を忍ぶ身なれば、その儀は無用。

三吉　そりや兎も角も追つての事。併し、お供申さうにも親仁樣と一緒には置けませず、ハテ、どうしたものであらうぞ。

トこなし。煙草切り八五郎出て來て

八五　サア〳〵、三吉、貴樣が頼みの通り、方々へ頼んで五百がけが三十枚、大方寄せて貳兩貳分あらうぞや。

ト金出す。

三吉　そりや忝ない。

ト戴くを八平次、引ッたくる。三吉、愕り。

ア、申し、それは。

八平　主從となつたしるし、この金子は身が預かり置くのさ。

三吉　でも、その金は親仁樣が、わたしに隱して何かの心遣ひ。その負ひ目を償はん爲、友達頼んで拵らへたこの金。

八平　ハテ、其方が心を試した上では、何時にても返して遣はす。

三吉　左樣ならば兎も角も。併し、わたしが內を案內がてら、八五郎、とてもの世話次手に、あなたのお供を。

八五　オッと合點ぢや。

八平　然らば三吉とやら。

三吉　委細は宿所で。

八平　さらば。

ト唄になり、こなしあつて八五郎連れ入る。三吉、あと見送り

三吉　思ひがけない左馬治郞さまに、お目にかゝると云ひ、こんな嬉しい事はない。その上、頼んで置いた頼母子の金も、持つて來てくれると云ひ、今日は何と云ふめでたい日ぢやしらんて……シタガ、折角出來た頼母子の金は……惜しい事をしたわい。

トこなし。誂らへの唄になり、おせつ、腰元の形にて出て來り

せつ　こりや餘ッぽど遲うなつたわいなア。大方御寮人樣のお待兼ねであらう。ドレ、ちやつとお目にかゝらうわいなア。

ト云ひながら三吉を見て

オ、、そこに居やしやんすは、三吉さまぢやないかえ。

三吉　オ、、お前はおせつさま。さて段々とお前のお世話。

せつ　ハテ、なんのいなア。お前も頼ましやんす、また御寮人樣も御得心の事なれど、兎角よい事には寸善尺魔とやらで、よい首尾がないので氣の毒ぢやが、それで今夜は御寮人樣が、お內へお歸りなされず、安井前の下屋敷でお泊りの積りで、その用意して來たわいなア。

三吉　エ、、そりやアノほんまかえ。
せつ　ハテ、なんの嘘を云はうぞいなア。日が暮れたら裏手の切り戸から忍んでござんせ。しつぼりと逢はすわいなア。
　ト脊中を叩く。
三吉　エ、。
　トぞく〳〵して喜び、店戸棚より鬢附けを出して來て
これは悪いのぢやけれど、お前に上げうと思うて、繩手の延岡で買うて置きました。マア、取つて置いて下され。
せつ　滅相な。そんな事は、もうよしにして下さんせ。いつも心遣ひして下さんすゆゑ、氣の毒でならんわいなア。
三吉　なんのいなア。わしが冥加の爲ぢや。マア、取つて置いておくれ。
せつ　そんなら貰うて置きませう。
三吉　日が暮れたら、安井前の下屋敷の、裏手の切り戸へ行たら、
せつ　わたしが附いて待つて居るゆゑ、なんぞ合圖でもしやしやんせいなア。
三吉　サア、その合圖は、どうしたものであらうぞ。笛を吹いたら按摩と間違ふし、オ、、さうぢや〳〵。いつそ切り戸を、トン〳〵と三つ叩くが、それを合圖とはどうであらうな。
せつ　そんならアノ切り戸を。
三吉　トン〳〵ぢやぞや。
せつ　この様子を、ちやつと御寮人様へ。
三吉　コレ、トン〳〵を忘れまいぞや。
せつ　日暮れを合圖に。
三吉　忍んで行きませう。
せつ　その時こそは。
三吉　トン〳〵〳〵。
せつ　必らず待つて居ますぞえ。
　ト唄になり、こなしあつて下手へ入る。後に三吉、イソイソして
三吉　エ、、忝ない〳〵。これと云ふも、天道様のお庇。あの美しい娘を、日が暮れたら切り戸から、トン〳〵トンで
　ト天を拜み、いろ〳〵喜ぶこなしあつて、
エ、、まだ八ツ過ぎぢや。斯うして居るも待遠な。いつそ仕事でもして。

ト店の内へ入り、煙草切りの道具出して
樂しみがあると、仕事もよく出來ると云ふものぢや。時に、なんでも日が暮れたら、下屋敷の切り戸を、トントトントン。エヽ、嬉しいなア。
ト煙草刻みながら、いろ／＼嬉しいこなしあつて
併し、この形では行かれぬわい。
ト砥石盥の水にて水鏡見て、煙草の油刷毛にて頭へ油を塗り
マア、頭はこれでよいが、顔も洗ひたし、と云うて湯はなし、隣りの茶店で茶を貰うて洗はうか。オヽ、さうぢや、いつそ二軒茶屋で、豆腐の湯なと貰うて來う。
ト盥の水を明け
ドリヤ、一と走り行て湯を貰うて來うか。
ト唄になり、盥持ち、上手へイソ／＼として入る。

返し

造り物、見附け一面の竹菱垣、人群集の書割り。眞中に一間半の假屋建て、檜皮葺き、白木綿祇園守の紋付き幕を張り、富突き場の飾り附け。上手に大きなる建て札、今日富と書きあり、下の方、富の金割りの札かけあり、東西の床几に鉄面幅之丞、信貴山十郎、小寺富右衛門、津山千藏、役人にて腰かけ居る。八坂東太、香羽瀧藏、凜々しき役人にて立ちかゝり居る。家來大勢並び居る。右假屋の上に富突き藤吉着附け上下にて、富の錐を持ち、箱へ入れかけ居るを、平舞臺眞中に干様のお初、振り袖娘の形にて手な上げ留めて居る。この見得よろしく神樂にて道具とまる。

幅之　今一番のこの富を
皆々　待てと留めしは。
はつ　サア、最前からも申しますれど、何を云うても大勢の人混みゆゑ解りませぬが、どうぞお願ひには、その富を、どうぞわたしに突かして下さりませうならば、有り難う存じまする。
幅之　ナニ、この富を突かして
皆々　くれいとは。
はつ　さればでござります。この頃三日三夜さも續けての夢見、あんまり不思議な事ゆゑ、親々へ話しを致しましたら、そんな事ならお願ひ申して見たがよいと申されましたゆゑ、女子の身で恥かしい、大勢の人様の中で、無

理なお願ひ。

福之　これまで例なき事ながら、女が願ひ。こりや如何いたしたものでござらうな。

十郎　されば、神の告げとござれば、聞捨てにも相成り難し。

富右　何分神慮に任せし富。

千藏　殊に今一番と申し

瀧藏　大勢の人々も、見聞いたす事なれば

皆々　こりやお聞き屆けてあげなされませう。

福之　すりや、何れにも御承知か。

皆々　一統承知仕つてござる。

福之　この上は異議に及ばぬ。コリヤ／＼女、其方が願ひ聞き屆けくれたぞ。

はつ　そんならお聞き屆け下さりますか。

皆々　時刻が移る。早く突きやれ。

ト合ひ方になる。

はつ　ハイ／＼、左樣ならば、どなたも御免下さりませう。

ト假屋へ上がり、藤吉が持つて居る錐を取る。

福之　最早突留め、百兩の富。

トそれと顏にて敎へる。お初、箱へ錐を入れ突き上げ見て

はつ　エヽ、つツとモウ、これぢやないわいなア。

ト札を箱の中へ打込む。皆々惘りして

福之　ヤア、いま突き上げし百番の札。

皆々　元の箱へ打込みしは。

はつ　サア、わたしが思うた札ぢやないゆゑ。

ト十郎、富右衞門、ツカ／＼と行て、お初を引下ろし

富右　ヤイ、うぬが賴みに依つて、例なき事を許せしに

十郎　我が思ふ札でないとて、元へ打込み、事が濟まうと思ふか。

はつ　サア、そんならどうぞもう一度、突き直さして下さんせ。

福之　ヤア、まだ／＼此奴、太い女め、斯く大勢の人數を引受け

千藏　今一番と相成つたる札が、突き直しがなるべきか。

瀧藏　サア、この上は、只今突き上げし札の番數。

十郎　包み隱さず、この所にて白狀いたせ。

はつ　サアそれは。

福之　この多人數へ我れ／＼が云ひ譯。只今の番は。

はつ　サア、その番は。
福之　有體に白狀するか。
はつ　サア。
皆々　サア。
皆々　サア／＼／＼。
瀧藏　云はねば、いつそ。
　ト引立てうとする。
はつ　ア丶申し、待つて下さりませ。
皆々　して、札は何番なるぞ。
はつ　サア、その番は、千三百五十番でござりますわいなア。
福之　只今の當り札、千三百五十番。
　ト大きな聲にて云ふと、橋がゝりより傳兵衞走り出て
傳兵　ヤア／＼、富が當つたか。忝ない／＼。ソレ、千三百五十番の札。
　ト札を取つて改め見て
福之　相違なき番札、金子受取れ。
　ト三方に金を載せ渡す。
傳兵　ヤア、こりやマア夢ぢやないか。嬉しや／＼。
　トいそ／＼として喜びながら橋がゝりへ入る。

皆々　この上は女が詮議。
　ト立ちかゝるを、よろしくなだめ
はつ　マア／＼、お待ちなされて下さりませ。私しは三本木邊の者でござりますが、纔しい母さまゆゑ、悲しい身の上。遠いお大名へ奉公に上げうと云はしやんすれど、わたしは又行きともなうござりますゆゑ、どうぞ支度金の百兩さへ戻せば、遁がるゝ事と存じまして、今日の富の札を買ひまして、お宮へ願を掛けましたが、三日の間續けての夢見がよいゆゑ、お願ひ申しました今日の仕儀。札を打込みましたは、私しが不調法。どうぞお免しなされて下さりませ。
福之　いよ／＼それに相違なくば、宿所へ參つて糺した上の事。
はつ　サアそれは。
皆々　但し、それはとは僞はりか。
はつ　サア。
皆々　して、宿所は。
はつ　サア。
皆々　サア。
初皆　サア／＼／＼。

ト詰めかける。お初、ホイとこなし。チョン〳〵。

皆々　なんと。

トきめる。この見得よろしく、早き神樂にて返し。

造り物、元の繪馬堂へ戻る。矢張り神樂にて道具納まる。

ト上手より仕出し大勢出て來りて

仕出　エヽ、なんの事ぢや。折角突留めの百兩、してやらうと思うたに、いま〳〵しい。

同　今の千三百五十番の奴は、えらい仕合せ者ぢや。

同　イヤ又、今の街妻めが、札を箱へ抛り込んだで、むちやくちやにしをつたての。

同　ほんに、思や思ふ程殘り多い。いつそまん直しに、時雨蛤で一杯入れうわいの。

同　オヽ、それがよい〳〵。おいらも一緒に行きませう。

同　そんなら皆の衆、行きませうか。

皆々　サア、行きませう。

ト神樂にて橋がゝりへ入る。傳兵衛、繪馬堂の後より出て來り、あたりへこなしあつて、ちよつと手を叩くと、合ひ方になり、上手より、お初、返し前の形にて出て來り。

はつ　番頭どの、お前が頼みの通り、

ト云ひながら上着脱ぎ、切詰めの結び袖になる。

傳兵　まんまと首尾よく。

ト此うち八平次、出かけ聞いてゐる。

はつ　騙り負ふせた百兩の富。

ト八平次前へ出て

八平　賭博場で出逢つた干糠のお初、以前は大和の

はつ　アヽコレ、その後は云はずとも、京で馴染みの道樂づきあひ。

八平　併し、あの中を、よう抜けて戻つたなア。

はつ　サア、そこをさつぱり云ひ抜けて、戻るが干糠のお初でござんす。して、お前方に頼まれた、今の分け口わえ。

傳兵　オツと、この番頭が番頭。サツパリと、ソレ、受取つた。

ト紙包みの金をやる。お初改めて

はつ　こりや、たつた五兩ぢやないかえ。

傳兵　なんと、ぼろい仕事ぢやないかい。

はつ　イエ〳〵、殊によつたら命づく。こんな禮では引合

はぬぞえ。
八平　そんなら、われが望みは。
はつ　マア、五十兩かいなア。
傳兵　こりや途方もない術妻ぢや。百兩の內、祝儀引いて手取り八十五兩、この思ひ附きは八平次どの、これに三十兩として、百兩の富取つたおれが五十兩とは、割の悪い事ぢやと、內らへ涙こぼして料簡して居る所へ、なんぢや五十兩おこせか。そんな岩食ふやうな傳兵衛ぢやないわい。四の五の云はずと、それ持つて去んだ去んだ。
はつ　イヤ、こんな分け口持つて去んでは、この後わしが巾が利かぬ。斯う云ひ出したら金輪際、五十兩取らにやならんぞえ。
八平　さう云や此方もマアならん。それとも達て五十兩くれと云はば、わが身の上。
傳兵　オヽ、さうぢや。福島の光姫ぢやと、訴人をせうか
はつ　アヽコレ、滅多な事を云はしやんすな。
八平　そんなら、それで得心するか。
はつ　それぢやと云うて。
傳兵　否と云うたら、おれが訴人ぢや。
はつ　サアそれは。

八平　こりや、そんな事云はずと、マア、納めて置いたがよいぢやないかい。
はつ　エヽ、是非がない。今日は堪忍して上げるぞえ。
ト金を納める。
傳兵　マア、納まつて、めでたい〳〵。
トこなし。この時八五郎出て來りて
八五　オヽ、浪人どの、爰に居やんしたか。お前を連れ立つて去んでくれいと頼まれながら、とんと見失うて、最前から一遍と尋ねて居ました。サア、一緒に行かんせぬか。
八平　オヽ、それは大儀ぢや。時に傳兵衛、おれは最前の香箱を持つて、いよ〳〵左馬治郎になるワ。貴樣も山形屋の主ぢや。併し、それについて、まだ話したい事もあれば。
傳兵　オツと何も云はすと、委細は二軒茶屋で
八平　富が當つた祝ひ事に
八五　おれも一緒に
傳兵　ぱい一入れう。
ト此うちお初の脱いだ着附けを風呂敷へ包み
八平　そんなら一緒に。

傳兵　サア、お出でなんせ。
　ト唄になり、三人上手へ入る。お初、あと見送り、こなしあつて
はつ　ほんに、我が身ながらも恥かしや。女子の身であられもない、こんな事をするも、見初めた殿御の行くへを尋ね、二つには又、この身の詮議を遁がれん爲。紛失の般若の面を尋ね出さんと、此やうにまで成り下がり、種々心を盡しても、今に何の手がゝりも取り得ぬは、よくよく神佛にも見放されしか。どうした因果な身の上ぢやぞいなう。
　ト泣き落し、フト心付き、あたりへこなしあつて
あたりに人が居ねばこそ。マア、五兩でも今夜の元手。併し、あんまりな仕方。爰らに待ち受けて、二軒茶屋の戻りに。オヽ、さうぢや。とは云ふものゝ、まだ隙もいらう。ドレ、揚弓でも引いて來うか。
　ト唄になり、こなしあつて橋がかりへ入ると、引違へて駒吉、與三兵衛の車を引いて出る。但し與三兵衛車の上にて寢て居る。誂らへの合ひ方にて三吉、下手より戻つて來る。駒吉見て
駒吉　三吉どの、只今戻りました。

三吉　オヽ、それは御苦勞でござりました。
駒吉　このマア、寒いのに、寐てゐやつしやつては、風でも引きなさつては惡いと、二三度も起しましたが、よう御寢なつてござりますぞえ。
三吉　左樣でござりますか。このマア寒いのに滅相な。
　ト側へ行き。
親仁さま〳〵。
與三　フム〳〵。
　ト目を覺ます。
駒吉　ソレ、目が覺めましたぞえ。
三吉　滅相な。蒲團も無しに、なんの事でござります。モシ、風でも召しては、どうせうと思はつしやりますぞ。
駒吉　三吉どの、お前に渡しましたら、わたしは、もう歸りますぞえ。
三吉　ハテマア、よい。わしが道まで一緒に送つてやりませうもの。
駒吉　イエ〳〵、ツイ下屋敷まで、去にますのでござります。
三吉　オヽ、さうぢや。必らず最前の、トン〳〵を忘れぬやう。

駒吉　エ、。
三吉　イヤ・ようござつたなア。
　トこなし。
駒吉　おさらばでござります。
　ト唄になり、下手へ入る。三吉こなしあつて
三吉　サア、親仁様、もう歸りませうか。
與三　ハテ、まだ早い。日が暮れてからでもよいぢやないか。
三吉　エ、滅相な。暮れてから間に合ふものか。
　ト綱を引く。
與三　ナニ、間に合はぬとは、何が間に合はぬな。
三吉　サア、そりや・アノ、オ、、さうぢや。今の間に早う去なぬと、雪が降つて來たら、傘が間に合ひますまいと思うて。
與三　ハテ、雪が降つても何程の事がある。濡れるとさへ思へば心は急がぬ。
三吉　サア、さう云やそんなものぢやが、病人のお前、もし病が重つたら惡うござります程に、斯う云ふ日は、是非お歸りなさつた方が、よろしうござりませう。
　トそろ／＼車を引きかける。此うち、お初、橋がゝりより出て、與三兵衛を見て、恟りのこなし。
與三　ハテ、忙しない。
　ト三吉、ソロ／＼車引きながら
三吉　モシ、親仁さま、いつぞはお尋ね申しませうと存じましたが、一體お前樣の以前の御主人は、どこのお國でござりますえ。
　ト與三兵衛こなしあつて
與三　ハテ、異な事を尋ねる。身共が以前を尋ねるには、なんぞ仔細でもあつての事か。
三吉　イエ／＼、別に仔細と云うてはござりませぬが、思ひ出した時、尋ねて置くのでござります。
與三　成る程、それなれば申し聞かさうが、身は西國方の浪人。
三吉　フム。して、お名は何と申しますえ。
與三　名は萩原幸藏と申したての。
三吉　西國方とあれば、迂濶には。
　トこなし。
與三　ヤ、なんと。
三吉　イヤ・うか／＼する間に、もう日暮れ。
　ト本釣り鐘打つ。

ヤア、ありやもう入相。
ト思はず綱を引きツカ／＼と花道へ行く。與三兵衛、
悄りして

與三　こりや、如何いたす。

三吉　それでも入相。
ト向うへこなし。

與三　その金ゆゑに。
ト思ひ入れ。

三吉　心が責める
トこなし、フト兩人顏見合し、また氣を替へ
サア、歸りませうか。
ト唄になり、三吉、心急きのこなしにて、車を引き、
向うへ入ると、お初、ツカ／＼と前へ出て、ヂッと向
うを見ると、雪チラ／＼降ろ。お初、こなしあつて

はつ　ほんに思ひがけない。いつぞや高雄で見初めた殿御
此やうに心に誓ひを立て、尋ね廻つた甲斐あつて、やう
やう廻り逢うたゝ嬉しさ。飛び立つ思ひ、云ふに云はれ
ぬ親御の側。ほんにマア、親御へ孝行といひ、いとらし
いなり形。惚れたも道理。廻り逢うたこそ幸ひ、こりや
直ぐに後を慕うて。オヽ、さうぢや。

ト行かうとする。此うち瀧藏千藏出て

兩人　騙りの女め。
ト捕まへにかゝるを、振り切り、行かうとするを、兩人帶
を持つて引き戾す。お初、また行かうとするを、兩人
引立てる立廻り。この見得よろしく、神樂にて、返し
造り物、一面の黑板の塀、忍び返し、見越しの松。
眞中よき所に切り戶口。すべて雪持ち。この見得よ
ろしく「雪」の獨吟にて道具納まる。
〽花も雪も拂へば淸き袂かな、ほんに昔の昔の事よ。
ト右唄のうち向うより山形屋義兵衛、着附け羽織江戶
頭巾、町人の形にて蛇の目傘をさし、高下駄にて出て
來り。

義兵　大方迎ひの者に逢ふであらうと思うて、戾りかけて
今さら難儀ぢや。こん事なら鷲山から、駕籠に乘つて來
たらよかつたもの。こりや困つた雪ぢや。
〽我が待つ人は我れを待ちけん。
ト本舞臺へ來りて
こりやマア、下駄の雪を拂はにや步かれぬ。オヽ、幸ひ
のこの木蔭。ドレ／＼。

〽鴛鴦の雌鳥の物思ひ羽の、氷る褄の鳴く音も。
ト切り戸の側へ行き、傘を疊み、下駄を片足脱ぎ、トントンと切り戸を叩き、雪を落すこなし。これにて内より切り戸明けて、腰元おはな出て、三吉と心得て袖を引ッ張る。義兵衛、恟りして逃げようとするを、無理に内へ引込み、切り戸を締める。
〽さぞやさなきだに心も遠き夜半の鐘。
ト本釣り鐘。向うより三吉、大丸の印の傘をさし、おちよぼからげ、跣足にて走り出で、あと見送り、こなしあつて
〽聞くも淋しき獨り寐の。
三吉　親仁さまを寐さすので隙がいつたが、大方待ち兼ねてあらう。
〽枕に響く霰の音も。
ト本舞臺へ來て思ひ入れあつて、切り戸をトン／＼と三つ叩き、こなしあつて音がせぬゆゑ、又叩き、いろいろこなしあつて
約束のトン／＼／＼。これ程叩いても明けぬは、あんまり遲うなつたゆゑ、もう寐やしやつたかしらん。併しながら、あれ程まで堅う約束して置いたれば、よもやそんな事もあるまいし。こりや、あんまり内が廣いゆゑ、奧深にて聞えぬのであらう。ドレ、しつかりと叩いて見よう。
〽もしやといつそせきかねて。
ト無性に叩き、トヾ兩手にて叩きても、音がせぬゆゑ腹の立つこなしにて傘にて叩く。
〽落つる涙の。
トほつと草臥れたるこなしにて、ベツタリ下に居て吐息つく。この模樣よろしく、チヨン／＼。

返し

造り物、三間の二重、數寄家建て。見附け上手一間の床の間、地袋。下手世話襖、東西落ち間、植込み雪景色の書割り。右二重に蒲團敷き、お梅、下着、引扱帶にて、側に義兵衛、以前の形にて慄へて居る。行燈灯の消えたる模樣、暗がりの見得。續きの獨吟にて、靜かに道具納まる。
〽つらき命は惜しからねども、戀しき人の罪深く。
ト右のうち、奧よりおせつ、探りながら出て來りて
せつ　お二人とも日頃の思ひが叶うて、さぞお嬉しうござ

りませう。ナア、三吉さま。
ト探り當り
エ、お前も初心らしい。何を其やうに慄ふ事があつていなア。
トお梅の方へ引寄せるを、逃げようとするを、無理に引ッ捕へ
コレ、三吉さま。
トこれにて義兵衛、キッとこなしあつて、急に羽織脱ぎ、帶を解く。お梅は恥かしいこなし。おせつ、お梅を義兵衛の側へ引寄せ
靜かになされえ。
トこなしあつて奥へ入る。
〽思はぬ事の悲しさに。
ト兩人、いろ〳〵こなしあつて、義兵衛、お梅の側へ寄る。お梅、抱きつくを、前側屛風引き廻す。矢張り右の獨吟にてチョン〳〵、　返し
造り物、元の板塀になり、三吉雪だらけになり、切り戸に凭れ、つくばつて疲れるこなしにて、見すぼらしうなり居る。右の獨吟にて道具納まる。
ト三吉、トゞ根盡きたこなしにて、足を爪立て、傘を提げ、しを〳〵立ち上がつて

三吉　エ、マア、こりや胴慾な目に遭ふ事ぢや。最前からトン〳〵の千も二千も叩くのに、明けてくれぬは、どういふ事ぢや。とんと合點がゆかぬ。こりや大方、おれを一杯やり居つたのぢやわい。オヽ、さうぢや〳〵。こりや騙したに違ひはない。さうとも知らず、このマア雪の降るのに、手足はちぎれるやうな目に遭ふのは、なんの事ぢや。アタ阿房らしい……ア、それもさうかい。罰は目の前、怖いものぢや。こりや親仁さまの罰ぢやあらう。寐たうもないものを、無理に寐やしやれ〳〵と、叩きつけて寐かしたが、直ぐに報うて來たさうな。ほんに爭はれぬ、怖いものぢやなア……エヽ、いま〳〵しい。こりやおれを嬲りやがつたのぢやなア。如何におれのやうな者ぢやと云うて、ようマアこんな目に遭はしおつたなア。なんぼう顏が美しいとて、おのればかりが女子ぢやないわい。世間に女子は有りあまる程有るわい……思や思ふ程、アタ腹の立つ。モウ〳〵、こんな所に長居したら、どんな目に遭ふも知れぬ。ドレ、去んでこまそ〳〵

今夜は去ぬぞよ。今夜は去ぬけれど、明日はどんなものぢや、見い。餘所の御寮人樣でも賴んで、どえらい事して見せつけてこますわい。おれを騙した代りに、顏へ疵つけて、外へ嫁入りのならんやうにしてこますのぢや。それにしても、あの又おせつめも、其まゝに置かうか。待つて居い……エヽ、いま〳〵しい。去んでこますぞよ。

トいろ〳〵切り戸に向ひ、腹の立つこなし。

〽捨てたうき。

ト傘をさし、花道へ行きかけ、心殘りのこなしにて、ツカ〳〵と本舞臺へ立戻る。此うち切り戸、內より明くゆゑ、三吉、うまいといふこなしにて、內へ入らうとするを、內より義兵衞、傘下げ、出合ひ頭になり、三吉を突き退ける。三吉、摺り拔けて、また內へ入らうとするを、ピッシャリと內より戶を締める。これにて三吉、義兵衞に突き當り、義兵衞の顏を見ようとするを、義兵衞、ちよつと突き廻して傘を廣げ、グッと三吉を睨む。これにて三吉、反りかへる。始終獨吟のうち

〽捨てた浮世の山かつら。

ト兩人よろしく、チョンと木の頭。

幕

下の巻

山形屋店先の場
同裏借家の場
鳥邊山墓所の場

役名――山形屋義兵衞 實ハ伊達與八郎、同丁稚、傳九郎。同手代、勘六。同番頭、傳兵衞。隱居、閑齋。山城屋忠兵衞。和泉屋藤右衞門。仲仕、金藏。同腰元、おせつ。同下女、お鍋。同、お縫。娘、おみつ。大原曾平太。千切屋娘、お梅。腰元、お富。同、お糸。煙草切り、千太。同、十吉。墓守り、道樂。久三の丈助。醫者、上邊見脈。鷺塚八平次。腰原周藏 實ハ伊達與三兵衞。千糖のお初 實ハ福島娘光姬。煙草切り、三吉 實ハ由留木左馬治郎。

造り物、通し二重。見附け赤壁、納戶口。戶棚、帳箪笥。注文刺しの書割り。下の方、腰板、鼠壁の塀。

切り戸口。いつもの所に門口。一面の化粧屋根、すべて分限者内の模樣、幕の内より傳兵衛、番頭の形にて帳面に坐り、算用して居る。お霜、お糸、腰元にて、蝶足の膳を拭いて居る。お縫、下女にて、切り盤に椀を洗ひ上げて居る。おみつ、娘の形にて、花瓶へ花を活けて居る。正吉、長太郎、丁稚にて、手傳うて居る。この見得よろしく、琴唄にて幕開く。

ぬひ　サア〳〵、ちやつと拭いて下さんせえ。

しも　サア、大方片附いたわいなア。

ぬひ　申し、いと樣、あなた樣は最前から、この忙がしいに、アタ辛氣なその活け花。あちらへひねくり、こちらへひねくり、いつ埒のあく事やら、ほんにまどろしい。ちとお嗜なみなされませいなア。

しも　これはしたり、お縫どのとした事が、いと樣が遊ばす事、お前が何も構ふ事はないわいなア。

いと　それ〳〵、人の事云ふ手間で、お前こそ早う片づけたがよいわいなア。オヽ、笑止。

傳兵　エヽ、やかましいぞ。

ト云ひながら帳合ひして居る。

ぬひ　ハテ、そこらにぬかりがあるものかいなア。

いと　サア、ぬかりはないかしらんが、どうやら斯うやらマア、お町内のお客達はしまうたが、又これから御一家中を呼びますのに、そこらで水遣ひせずと、走り元へ行たがよいわいなア。

ぬひ　サア、そりやよう承知して居れど、走りは八百屋と肴屋が來て、料理拵らへして居るゆゑ、邪魔になるわいなア。

傳兵　エヽ、やかましいと云ふのに。

ぬひ　ハテ、よう呵るお人ぢやわいなア。どうで大勢のお客をする事ゆゑ、ちつとはそつとは、やかましからうわいなア。マ阿房らしい、つツとモウ。

ト呟きながら片附ける。唄になり、橋がゝりより勘六手代にて先に立ち、後より藤右衛門、忠兵衛、着附け羽織にて、町人の形にて出て來り、捨ぜりふにて内へ入り

勘六　ハイ、御一家衆方を、お供申して歸りました。

トこれにて奥より

閑齋　なんぢや、一家衆がござつたとな。ドレ〳〵、それへ行て逢ひませうか。

ト閑齋、十德頭巾にて出て來る。

藤右　さてマア今日は御馳走。時に御當家の嫁御の事も、いろ〳〵と存じましたが

忠兵　家柄と申し、丁度似合ひ相應な縁談と聞きまして、一家の私しども〻

三人　面目でござります。

傳兵　エヽ、やかましいぞ〳〵。

閑齋　イヤモウ、何とござるやら。若い者の致す事は、解つたものではござらぬての……時に、義兵衞は、どこへ行きをつた事ぞ。

勘六　ハイ、旦那様は、お町内のお衆方を、お禮がてら送つてお出でなされました。

閑齋　それにしては、暇のいる事ぢや。大方また例の俳諧話しで、うだ〳〵云うて居るのであらう。困つたものぢやわい。

傳兵　やかましい〳〵。

閑齋　ソレ、皆の衆達へ、お茶上げませぬかい。

傳兵　やかましいぞ。

三人　イヤモウ、構うて下さるな〳〵。

　トこなし。浮かれ出でたる東山の唄になり、向うより三吉、木綿やつし、職人の形にて、傳九郎、丁稚にて引ッ張り出て來り、花道にて

三吉　ハテ、忙しない。行きますわいの。

傳九　サア、行きますどころぢやない。一遍とそこら中尋ねたわいの。

三吉　サア、さうでもあらうが、親仁さまが髪結うて行けと云はつしやつたゆゑ、お旅町の床へ行たら、人がつかへてあつたゆゑ、やう〳〵小橋で、ちよこ〳〵とやつて來ましたのぢや

傳九　エヽ、お前等が、なんぼやつしたとて、なんの役に立つもので。サア來い〳〵。

三吉　これはしたり、おれを科人か何ぞのやうに

　トぼやきながら引ッ張られ、本舞臺へ來りて門口より

傳九　ハイ、裏借屋の三吉を連れ立つて歸りました。

　ト兩人内へ入る。

追ッつけ御用がある。そこらへ扣へたがよい。

三吉　ヘイ〳〵

　ト不承々々に片脇へ扣へると唄になり、橋がゝりより見脈、着附け羽織、慈姑頭、醫者の形にて出て來り、ズッと入り

見脈　イヤ、これは御一家中わは、早お揃ひと見えます

な。どなたも、ようこそお出でなされましたな。
傳兵　エヽ、やかましいと云ふに。
藤右　さてマア、何は差措きこの度は、こなた樣の御媒介と聞きましたが。
傳兵　エヽ、やかましい。默り居らぬか。
見脈　イヤモウ、日頃からお出入りのお內ゆゑ、この位のお世話は、致しうちでござりましての。
傳兵　エヽ、情ない。アタやかましい。いつそわいらを
ト算盤振り上げ立ち上がり、フト皆々を見て悧り。
ヤア、こりやどなたもいつの間に、
トちやつとこなしあつて
よくお出でなされましたな、
ト矢張り算盤振り上げて居る。
藤右　こりや番頭には、何かきつう腹立ちの樣子ぢやの。
傳兵　ヘイ〳〵、イヤ、別に腹立ちといふ事はござりませぬが、最前から、女子どもがやかましう申しまして、兎角算用の邪魔いたしますゆゑ、
見脈　さうして、その手はの。
傳兵　サア、この手は……オヽ、さうぢや。爰の柱に釘が出てござりますゆゑ、打ちませうと思うて……カウ〳〵、
ト柱を算盤にて叩く。
皆々　ハヽヽヽヽヽ、
トこなし。眞葛ヶ原の唄になり、向うより義兵衞、着附け羽織、袴、一本差し、丈助附き添ひ、後より金藏、仲仕の形にて附いて出て
義兵　金藏、丁度よい所で逢うたの
金藏　左樣でござります。私も只今、お內へお手傳ひに參りませうと存じまして、出かけて參りました所でござります。
義兵　それは大儀ぢやの。サア、マア、來や〳〵
金藏　マア、お出でなされませ
ト皆々本舞臺へ來り、門口より
丈助　お歸り。
女皆　ソレ、旦那樣のお歸りぢやぞえ。
しも　ドレ、奥を片付けて置かうわいなア。
いと　サア、ござんせいなア
ト皆々奥へ入る。義兵衞、內へ入る。
藤右　オヽ、義兵衞どの、いま戾らつしやつたか。
義兵　これはどなたも
ト二重へ上がり

隱居にも端近う、なんでござりますな。
閑齋　サア、其方が留守ゆゑ、御挨拶申しに出たのぢやわいやい。
義兵　それは御苦勞さまでござります。イヤモウ、お町內へ出ますと、ツイ一つ二つと話しが長うなりましての。さて今日は、ほんの內祝ひの印までに、お招き申しましたが、どなたにも、ようこそお出で下さりましたな。
藤右　サア、只今も申す事でござる。當時振合ひのよい千切屋の娘。
忠兵　聞けば御器量もよいとの事。それを貰ひ請けるとはきつい仕合せと云ふもの。
ト此うち三吉、これを聞き、心意氣のこなし。
藤右　シタガ、どういふ緣から、貰ふやうになりましたの。
義兵　されば、緣といふものは、味なものでござります。その譯と云ふは後の月、謠講で奧山へ參りました戻りがけ、下河原を通りましたが、何が雪で難儀いたしまして思はず立寄りました切り戶口が、彼の千切屋の下屋敷で計らず彼の娘に對面いたしましたが、緣になりまして、それからの相談でござります。
三吉　エ、いま／＼しい
ト思はず立ち上がり、フト皆を見て、恟りして扣へる。
傳兵　ヤイ／＼、いま／＼しいとは、何がいま／＼しいのぢや。
三吉　サアそれは。
傳兵　めでたい祝ひに、いま／＼しいと吐かすおのれこそ、いま／＼しいわい。
金藏　承りますれば、御夫婦仲もよいとやら、これ程おめでたい事はござりませぬ。
傳兵　イヤモウ、その仲のよさと云ふ事は、天にあらば雛ッ子の鳥、地にあらば蓮華の枝。蔓でも間さへありや、側へ寄つて、ぼちや／＼。モウ、こちらから見て居る、いまいましさと云ふものは。
見脈　ア、コレ、番頭どの、こなたまでが、いま／＼しいとは。
傳兵　イヤサア、こりやアノ、いま彼奴が云うた、いまいましいが寫つたのぢや。エ、いま／＼しい。
閑齋　イヤモウ、夫婦仲のよいのはよいが、どうぞ身代の歪まぬやうにして下され。
義兵　イヤ、隱居、そりや何云はしやりますな。

閑齋　何を云ふとは知れた事。元こなたは養子の身の上、又おれは伯父なれど家の血脈。そこでこの閑齋が後見して、いつ〳〵までも山形屋の名跡を、立てさゝうと思や氣になりますわい。このマア詰まつた時節に、嫁入りの何の彼のと物いりだらけ。さう云ふうちに、ツイ又子でも出來て見やしやれ。それこそ大抵の事ぢやあるまいと、今から案じらるゝわいの

傳兵　左やう〳〵。いま御隱居さまの仰しやる通り、儉約に儉約しても、辛い世の中。それに嫁入りの物入りのとした揚句には、あちらではぼちや〳〵、こちらではぼちやぼちや、あんまりぼちや〳〵が過ぎますと、上を見習ふ下とやら、ツイ家內が猥らになりますぞえ。

義兵　傳兵衞、默れ。おれが女房持つたら、なんで家內が猥らになるぞ。

傳兵　サア、それは、猥らぢやない、干鱈でござります。儉約して、燒き物もいつそ干鱈がよからうと思うて、オヽ、さうぢや、丈助、われに云ひつけて置いた通り、錦の店へ行て、干鱈見て來たか。

丈助　イヤ、知りませぬ。

傳兵　エヽ、物覺えの惡い。最前云ひつけて置いたに。

丈助　それでも、ちよつとも聞きませぬもの。

傳兵　ソレ、さう云うた者ぢや。人が云うて置くに、ひだらくな奴ぢや。

義兵　時に、どなたも御退屈にござりませう。マア、奧へござつて御酒一つ。

三人　それは御馳走でござりますな。

義兵　サア、隱居、妹も用意しや。

みつ　ハイ〳〵。

金藏　ドレ、私しは臺所のお手傳ひ。

見脈　仲人役に野拙は御案內。

傳兵　いかいお世話ぢや。

ト むつとしたこなし。

見脈　ハテ、構はつしやるな。

ト つんと云ふ。これにて傳兵衞むかつき

傳兵　べヽヽヽ。

ト 睨む、見脈も睨み返す。

兩人　べヽヽヽ。エヽ、おのれ。

ト 兩人面白い顏して、行かうとするを義兵衞隔て

義兵　これは如何な事。サア、ござりませ。

ト 唄になり、この一件皆々奧へ入る。あとに三吉傳九

郎丈助残り、三吉あと見送り

三吉　エヽ、いま／＼しい

　トこなし。

丈助　又いま／＼しいと云ふわい。此奴いま／＼しい奴ぢや。

傳九　さうして、貴様の縁は叶うたかの。

丈助　サア、マア、半分はよい方ぢや。

傳九　そりや大方、此方ばかりぢやあらう。

丈助　マア、そんなものぢや。

傳九　そんなら、我れ／＼と同行うちぢや。

　ト千年の水の菊水の唄になり、奥よりお霜、紙包みの鯛を持ち出て來りて

しも　オヽ、三吉さま、爰にかいなア。いとさまが、これをお前に上げましてくれいと、云はしやんしたぞえ。

　ト渡す。傳九郎これを見て

傳九　なんぢや、アノいとさまが。ドレ

　ト寄らうとするを突き退け

しも　エヽ、お前の知つた事ぢやないわいな。アヽ、三吉さま、さもしい物ぢやが、手の附かぬ綺麗な物ぢやに依つて、飯のおかずになとしなされえ。

　ト三吉、明けて見て

三吉　こりや鯛の焼き物。まだ外にいろ／＼お肴が

しも　慥かに渡したぞえ。

三吉　ようお禮云うて下されや。

しも　アイ／＼

　ト奥へ入る。

丈助　ヨウ／＼、旨いな／＼。いとの焼き物貰うて。

　ト煽てる。傳九郎腹立て

傳九　エヽ、いま／＼しい。此方へおこせ。

　ト引ッたくらうとするを

三吉　滅相な。こりや親仁さまへ土産にせにやならん。

　ト懐へ入れると、また奥よりお糸、紙包みを持つて出て來り

いと　丈助どの、爰にかいなア。

丈助　今度はおれや。誰れからぢや／＼。

　トいそ／＼して手を出す。

いと　嫁御さまが、お前に渡せと云うてな。

　ト紙包みを渡す。

丈助　そりやこそ嫁御が。ヱヽ、忝ない。

　ト戴き、喜ぶこなしにて

嫁御さまぢや〳〵
ト見せつける。三吉、けなりがり、附けて廻る。
どれマア代物を
ト開いて見て
ヤア、こりや何ぢや。筆の使ひさしを
トこなし。
いと　サア、川へ流して來いと仰しやつたわいなア。
ト云ひ捨て奥へ入る。
丈助　なんの事ぢや。いま〳〵しい
ト打ちつけ、腹立てるうち、又お縫、紙包みを持ち出るを
三人　今度は誰れぢやな〳〵。
ぬひ　三吉どのに、いとさまが。
傳丈　又かい。いま〳〵しい。
ト取らうとするを突き退け
ぬひ　こりや綺麗なお肴ゆゑ、お前に上げてくれいと仰しやつたぞえ。キツと渡したぞえ。
ト三吉に渡し奥へ入る。
三吉　こりや、重ね〴〵、有り難うござります。
ト戴き懐へ入れる。兩人ムツとして居るうち、奥よりおとみ、煙草盆持ち出て來るを見て
丈助　そりやこそ、又來た〳〵。
傳九　今度はおれであらうがな。
とみ　オヽ、お前ぢやわいなア。
傳九　それ見た事か。さうして、どうぢやな〳〵。
とみ　サア、澤山な煙草盆なれど、最前からのお客で、汚れたによつて、ちやつと掃除して置いて下さんせ。
傳九　エヽ、アノ、おれに掃除せいか。
とみ　早う掃除して下さんせえ。
傳九　エヽ、いま〳〵しい。思や思ふ程、阿房らしいわい。
ト腹立てる。
とみ　なんのそれが阿房らしい事があつてかいなア。さうして、掃除が出來たら、嫁御さまと旦那さまと、お風呂へお入りなされたいと仰しやるゆゑ、早う水も汲んで、焚いて置かしやんせい。
ト云ひ捨て入る。
傳九　なんの事ぢや、いま〳〵しい……三吉、この煙草盆の掃除するがよい
三吉　エヽ、何云ふのぢや。そりやこなたが云ひつけられ

たのぢやないかい。
傳九　サア、云ひつけられたは、おれぢやが、掃除は貴樣がするがよい。
三吉　そりや又なんで。
傳九　なんでとは貴樣、何しに來たのぢや。
三吉　何しに來たとは。
傳九　ハテ、合點の惡い。わりや手傳ひに來たのぢやないか。
三吉　それぢやと云うて、みす〳〵
傳九　何がみす〳〵ぢや。高が煙草屋の手間取りに行きや、日に二百か三百の錢取るのぢやないか。それを休んで今日爰の內へ手傳ひに來た貴樣、後方には燒き物附きで膳に坐つて、銀一の包み金してやるのぢやないかい。
丈助　それ〳〵、われが儲ける二日分。四匁三分してやつたら、煙草盆の掃除どころぢやない。おいらが按摩しても大事あるまい
傳九　さうぢや〳〵。例へ只でも、借家に住んで居りや、雨露に打たれぬ恩返し、冥加の爲ぢや。早う掃除するがよいわい。
丈助　イヤ〳〵、それよりは、マア、風呂の水を汲ますがよいわい。
傳九　イヤ、マア、掃除からするがよい。
　ト三吉の手を引ッ張るを
丈助　イヤ、風呂の水が肝心ぢや〳〵。
　ト三吉の手を引ッ張る。
傳九　イヤ、煙草盆ぢや〳〵。
丈助　イヤ、風呂ぢや〳〵。
　ト兩方より引ッ張る。よき程にて、三吉、摺り拔けるを取違へて、兩人手を引き合ひ、捨ぜりふにて奧へ入る。三吉あと見送り、こなしあつて
三吉　なんの事ぢや。惚れた娘は人に取られ、その上、煙草盆の掃除せいの、イヤ、風呂の水汲めのと、揚句の果には按摩せいとは、あんまり阿房らしいわい。ほんに、貧乏には何がなるものぞ。
　ト口惜し泣きに泣き落す。誂らへの合ひ方になり、おみつ、奧より出て來りて、三吉にこなしあつて
みつ　三吉どの、爰に居やしやんしたかいなア。
　トこれにて三吉見て
三吉　オヽ、こりやいとさま、最前は重ね〳〵、お忝なうござります。

みつ　何を云はしやんすやら。さう云はれると、術なうござんわいなア

三吉　滅相な。なんの術なうござりませうぞ。まだマア、お年もゆかぬに、あなた様のやうに、御深切なお方がござりませうか。

みつ　アノ、深切なと思うて下さんすかえ。

三吉　イヤモウ、思ひませいでなりませうか。それについて、ちつとあなたにお頼みが

ト こなし。おみつ嬉しきこなしにて

みつ　サア、お前の頼みなら、何なりと頼まれるわいなア。

ト 思ひ入れ。

三吉　そりや有り難うござります

みつ　さうして、お前のお頼みわえ。

三吉　ナア、そのお頼みと云ふは。

ト 云ひ憎いこなし。

みつ　サア、ちやつと云うて下さんせいなア。

ト 心急きのこなし。

三吉　サア、どうやら斯う云へば、私しが口から、どうも云ひ憎いやうなが、アノ、お前様が

みつ　アノ、わたしが

三吉　どうぞお情に嫁御さまに、ちよつと逢はして下さりませぬか。

みつ　エヽ。

ト こなし。

三吉　サア、ちよつとお目にかゝつて、申し上げたい事がござりますゆゑ。

みつ　そんなら、わたしへの頼みと云ふは。

ト 心意氣あつて

エヽ、つッとモウ、なんの事ぢやぞいなア。

ト こなし。奥より傳九郎出て來りて、三吉を引き退け

傳九　こりや、なんの事ぢや。わりや、なんでいとさまの側へ寄るのぢや。

三吉　サア、そりやちよつとお頼みがあつて。

傳九　なんぢや、お頼みぢや。そりやならん。おれがならんと云や、どこまでもならん〳〵、ならんのぢや。さうして風呂の水はどうした。

三吉　サア、その風呂の水は。

傳九　まだ汲まんのか。サア、早う汲んで來ぬかい。

三吉　そりや又あんまり。

傳九　何があんまりぢや。達て汲まさらさぬと、叩き上げても汲ますぞよ。
三吉　ハテ、汲むわいの。
傳九　サア、ちやつ〳〵と汲まぬと、家明けつけるぞよ。
三吉　エヽ、忙しない。
傳九　まだ行かぬのわい。
三吉　サア、行くは行くが、エヽ、いま〳〵しい。
　ト唄になり、ぼやき〳〵奥へ入る。
みつ　ア、コレ、三吉どの。
　ト奥へ行かうとするを引留め
傳九　オツと待つたり、彼奴を奥へやつて、お前を口說くは古いやつぢやが、コレ、いと、ようお聞きなされませや。
　ト無理に下へ据ゑる。合ひ方。
あの隱居の閑齋さまと云ふは、爰の內の血脈。その娘御のお前さまと、私しと女夫になつたら、養子息子の義兵衞さまは拋り出して、後は直さま我れらが世取り。
　ト此うち奥よりおせつ出て來り、ソツと仕方して、おみつと入れ替る。これにておみつはツイと奥へ入る。傳九郎これを知らず

ところで、其方は女房、我れらは旦那。春は花見に芝居行き、わが身と我れらが手を取つて
　トふとおせつの顏を見て愕り
ヤア、こりや違うた。
　トおみつを尋ねるこなし。
せつ　違うたとは、何が違うたのぢやえ。
傳九　サア、それは。違うたのすい性で、氣はざんざ。慥かに奥へ。
　ト奥へ走つて入ると、引違へて丈助、酒に醉うたるこなしにて出て來り、おせつを見てこなし。
せつ　ほんに、憎てらしい前髮ではあるわいなア。
丈助　イヤ、その代りに可愛らしい奴が爰に居るぞよ。
　ト云ひながら後より抱きつく。
せつ　ア、誰れさんぢや。惡い事さしやんすないなア。
丈助　イヤ、誰れさんでもない、久三の丈助さま。早う屆けにや出口走りと來て居るわい。
せつ　エヽ、又かいなア。アタしつこい。
　ト振り放す。
丈助　イヤ、しつかうても云はにや分らん。そさまが爰の內へ、嫁御に附いて來た時から、惚れて〳〵惚れこんで

居るこの丈助、そこでマア、我れらは久三、其方は腰元奉公。朋輩同士の似合ひ相應、丁度合うたり叶うたりと云ふもの。
ト此うち奥よりお梅、詰め袖、嫁の形にて出て來り、おせつと入れかはり、おせつは奥へ入る。
とサア、こんな長口上は取措いて、肝心要のお供先、お迎ひ提灯ぢやないが一挺とぼさう。こりやモウ、どうも堪えられぬ。マアちよつと
ト抱きつかうとして顏見合し、悔りして
うめ　違うたとは、何が違うたぞいの。
南無三、これも違うたわい
丈助　サア、違うた今宮天下茶屋。なんの事ぢやい。
ト奥へ逃げて入る。お梅、あと見送り、こなしあつて
うめ　ほんに、思ひがけない事から、爰の内へ嫁入り。大方三吉さんは、さぞ腹が立つてでござんせう。聞けば今日、爰へ來て居やしやんすとの事。どうぞちよつと逢うて、その夜の事や何やかや、云ひ譯がしたいものぢやが、どこに居やしやんす事ぢやぞいなア。
トこなし。傳兵衛駈け出て
傳兵　イヤ、爰に居やしやんす事ぢやわいなア。
ト嬢らしう側へ寄る。悔りして
うめ　ヤア、其方は傳兵衛。
傳兵　ハイ、傳兵衛、番頭の傳兵衛番傳、申し、御寮人さま、番傳其やうに胴慾になされまするぞ。いつぞや祇園で人に腹ごろ世話やかし、大抵氣を揉んだ事ぢやござりませぬぞえ。それに一言の禮云ふどころか、人に答へもなしに爰の内へ嫁入りして濟む事かいなア。京中評判の娘、室町千切屋のお梅さま、お前の名に准らへて、北野の天神さまへ願かけて、梅干一生絶つたも、どうぞしてお前を女房に持ちたいばつかり。一體あの天神さまも聞えぬをい。人に梅を絶たして置いて、餘所へ嫁入りさすとは、これがほんの、梅たと云ふのぢや。丁度幸ひの折から、ちよつと爰で叶へて下され。
ト抱きつくを突き放し
うめ　傳兵衛、そりや何しやるのぢや。わしは爰の嫁、わがみは番頭ぢやないかいなう。
傳兵　サア、それもあるやつ。大經師のお三茂兵衛、山形屋のお梅傳兵衛、番傳あらうと、叶へてもらはにやならん。
うめ　エヽ、知らんわいなア、

傳兵　エヽ、知つても知らいでも、斯うなつたら覺悟して居る。こんな事もあらうかと、見脈がこの合口、ソツとちよろまかして來たからは、否と云や突かうか。

ト見脈の合口を懷より取出す。

うめ　サア、それは。

傳兵　得心して下さるか。

うめ　サアそれは。

傳兵　突き殺さうか。

うめ　サア

傳兵　サア

兩人　サア〳〵〳〵。

ト附け廻す。お梅逃げ廻る。傳兵衛、追ひ廻す。よき程にお梅、帳箱を足元へ突きやる。これにて傳兵衛蹼き、この間にお梅、奥へ逃げて入る。傳兵衛、起き上がつて

傳兵　今度は逃げたか……逃げたのすい性で氣はざんざ。時に、あの醫者めの合口をちよろまかして、しぶたう敵役でやつて見たが、矢ツ張りゆかぬ。この上は思案通り引ツかたげて逃げるより外はない。さうなれば路銀が肝心。

トちよつと百兩包み出して

いま隱居めが一家の泉藤から、受取つたこの百兩、ちよろまかして來たも、こんな時の心當。併し、この隱し所に困る。古い仕組み、大枚の金を隱すとは、阿房の天上。それよりは氣遣ひのない質懷へ、しつかりと納める所へ、内から番頭さま〳〵と、忙しなう呼ばれるを、あわてまくで入ると云ふやつを、何喰はぬ顏で、ドリヤ、飯でも喰はうか。

ト唄になり、こなしあつて、ツイと奥へ入ると、引違へて奥より金藏出て來り、こなしあつて

金藏　あの三吉と云ふは慥かに

トこなしあつて

何分逢つてとつくりと。どうぞ樣子が聞きたいものぢやか。

ト思ひ入れ。奥よりおせつ出て

せつ　主税さま。

ト云ふを直ぐに押へ

金藏　アコレ。

トあたりへこなし。合ひ方。

其方は町家の腰元奉公。この主税は仲仕となつて、この

京地にとゞまるも、お行くへ知れぬ由留木の若殿、左馬治郎さまの在所を尋ねん爲。

せつ　その上福島の姫君にも、この京地にござるとの事。これとても、お家に繋がる右馬之助さまの云ひ號け。

金藏　サア、その若殿右馬之助さまにも、お果てなされたれば、左馬治郎さまのお行くへだに相知れなば、光姫さまと御夫婦となし、お家を立てんと帶刀さまの思し召し。

せつ　サア、その姫君さまにも、武將家より詮議嚴しければ、片時も心ならず

金藏　この上は一時も早く、左馬治郎さまの、心當りを糺すが肝要。オヽ、さうぢや。

ト立ち上がるを

せつ　アヽコレ、マア待つて下さんせいなア。

金藏　ナニ、待てとは。

せつ　サア、久し振りで逢うたといひ、幸ひのこの首尾。コレイナア

トじつとこなし。

金藏　エヽ、そこどころか。忠義の一事に、心の休まる隙はないわい。

せつ　サア、さうでもござんせうが、ちつとは女子の氣にもなつて下さんせいなア。

金藏　サア、この主税とても、木竹ではなけれども、何を云うても、人目にかゝらば何かの妨げ。

せつ　ハテ、その物堅いも時に依る。マア、大事ないわいなア。

ト手を取る。

金藏　これは如何な事。

ト振り切るを又手を取る。

せつ　マア、ちよつと來て下さんせいなア。

ト引ッ張るを

金藏　これはしたり、滅多な事を。

せつ　オヽ辛氣。

ト無理に引ッ張る。

金藏　ハテ、聞分けのない。

トこなし。唄になり、兩人奧へ入る。合ひ方になり、下手より三吉、水たごを荷ひ、呟きながら出て來り

三吉　なんの事ぢや。惚れた娘は取られる。煙草盆の掃除から、嫁御の入る風呂の水まで汲まんならんとは、なんたる因果ぢやしらん。アタいま〳〵しい。なんで貧乏に

生れたしらん。
トふと合口を見て
こりや合口が、どうして爰に。
ト取上げ、ちよつとこなしあつて
憎さも憎し、娘のお梅。
トちよつと抜いて見て
天の與へのこの合口。おせつを殺したその上で、お梅めも一思ひに、フム。
トきつと奥を目がけ立ち上がる所へ、見脈、合口を尋れ出て
見脈　ハテ、どこへ置き忘れたしらん。
トふと三吉の合口を見て
ヤア、その合口を
ト取らうとするを。ちやつと隠し
三吉　こりや、どうさつしやるのぢや。
見脈　どうするとは、どうぢやいな。その合口は、おれが合口、最前から探して居るのぢやが、さては奥でちよろまかしたのぢやな。油斷も隙もなる事ぢやない。サア、爰へ出してしまへ。
三吉　出せとは何を。
見脈　ハテ、恍けまい。いま隠したおれが合口。
三吉　イヤ、知りませぬ。
見脈　イヤ、知らんとて、出させずに置かうか。
ト取りにかゝるを突き退け
三吉　知らんと云や、どこまでも知りませぬぞ。
見脈　さう云や、いつそ
ト三吉にかゝる。兩人ちよつと取合ひながら、三吉奥へ行かうとするうち奥より
閑齋　サア／＼、皆來い／＼。こりやキツと吟味せにやならん。
ト閑齋先に義兵衛、おみつ、お梅、藤右衛門、忠兵衛傳兵衛、丈助、勘六、傳九郎、附き添ひ出て來て
皆々　こりや何事が起りました。マア、譯を云はつしやれ云はつしやれ／＼。
見脈　サア、その譯と云ふは、おれの合口を盗みましたゆゑのこの取合ひ。
傳兵　なんぢや、合口を取つた。ドレ、おれが取返してやらう。ソレ、皆も手傳へ／＼。
皆々　オヽ、合點ぢや／＼。
ト皆々三吉を苛なみ、合口を取返す。おみつお梅、立

たうとするを、義兵衛、顔にて押へるゆゑ、ヂツと扣へるこなし。
傳兵　そりやこそ合口が出たわい。しつかりと持つて居やんせ。
ト渡す。
見脈　ヤレ〳〵、恐ろしや〳〵。何分御政道が嚴しいゆゑ門中に巾着切りが無うて、家の下で働らくさうな。
ト腰へ合口を差す。
義兵　あの合口を。ハテナウ。
閑齋　時に泉藤どの、最前受取つた百兩、紛失したからは、もう一度こなさんから受取らねばならぬ。
藤右　それは閑齋どの、こなさまも無理な事云ふ人ぢや。百兩の金は、最前こなさまに渡した事。この二人の衆も見て知つて居らるゝぞや。
閑齋　サア、そりや受取つたに違ひはござらぬが、行くへの知れぬ大枚の百兩。
傳兵　ア、イヤ、御隱居、皆まで仰しやりますな。それも大方此奴めでござりませうわい。
閑齋　イカサマ、一事が萬事、吟味せい〳〵。
傳兵　畏まりました……ヤイ、大盜人め、百兩の金も出してしまへ。
三吉　イヤ、知らん、覺えはない。
四人　エ、出しをらぬかい。
三吉　イヤ、なんぼうでも取つた覺えはないぞ。
傳兵　エ、どう死太い。どうで一應では出しをるまい。
四人　オ、出さぬと、いつそ
ト立ちかゝるを、お梅思はず
うめ　ア、コレ、滅多な事を。
ト立ち上がるを義兵衛、ヂツと押へ
義兵　ハテ、女子の知つた事ぢやないわい。
うめ　それぢやと云うて。
義兵　ハテサテ、びこしやこせずと、ヂツとして居やうぞ。
ト呵る。三吉フトお梅を見て悧り。
三吉　ヤア。おのれは。
ト行かうとするを
四人　なにを。
ト立ちかゝり、懐へ手を入れ、二つの面と紙包みの肴を取出して
傳兵　そりやこそ、出たぞ〳〵。ドレ〳〵、ちよつと改め

てやらう。

ト明けて見て

ヤア、こりや何ぢや。鬼女の面、こちらは鯛の燒き物。その外には肴ばつかり。なんの事ぢや。肝心の金は無うて、こりや鯛面ぢや。

義兵　傳兵衞、その品とれへ。

傳兵　ハイ〳〵。

ト義兵衞の前へ持ち行く。不思議さうに取上げ

義兵　ハテ、妙な物を持つて居る奴。

トこなし。此うち三吉、お梅を目がけ行かうとするを敵役立ちかゝり、引きつけて居る。

閑齋　合口といひ、見馴れぬ面を持つて居るからは、いよいよ其奴に違ひない。詐なんでなと金の在所、云はすがよいわい。

傳兵　畏りました。サア、百兩の金は、どこへ隱した。吐かせ。

三吉　イヤ知らぬ

四人　どう死太い奴ぢや。さう吐かしや。

ト立ちかゝるを、ちよつと立廻つて三人を投げ退ける。傳兵衞かゝるを捻ち上げる。お梅おみつ、心遣ひのこなし。見脈留めて居る。また敵役起き上がつて三人一時に立ちかゝる。奧より金藏、ツカ〳〵と出て三人を見事に投げる　敵役、金藏を見て

傳兵　ヤア、わりや仲仕の金藏。

四人　こりや、おいらをどうするのぢや。

金藏　イヤ、どうするとは番頭さん、この和郎を何とさつしやるのぢや。

傳兵　ハテ知れた事、百兩の金の詮議するのぢや。

閑齋　おれが云ひつけて詮議さすに、われが庇ふは

四人　さてはおのれも同類か。

金藏　イヤ、さうではないが、この和郎が取つたといふには、なんぞ慥かな

傳兵　オヽ、證據の無い事云ふものか。

金藏　して、その證據は。

傳兵　サア、その證據は外でもない。あの見脈老の合口、いがめた三吉。

金藏　イヤ、そりや證據にはなるまい。

閑齋　そりや又なんで證據にならんな。

金藏　さればいの、金の百兩も盜む程の者が、ウカ〳〵とまごついて居やうか。盜んだら早速、その場を立退くが

人間の根性。殊に僅か合口位に目はかけさうもないものかと存じましての。
見脈　成る程、こりや尤もな事ぢや。
義兵　イヤ、さうも云へぬ。合口といひ、懷中にこんな品を入れて居る三吉。こりや、とくと吟味せにや、家主にどんな難儀がかゝらうも知れぬわい。
閑齋　さうとも／＼。こりやキッとせいらくせにやならん。
丈助　イヤ、そればかりぢやござりませぬ。まだ膳にも坐らぬ先に、どうしてこの燒き物、われが持つて居るぞ。
三吉　サア、その燒き物は。
トおみつを見てこなし。おみつもこなし。
傳九　但しは、いとさまに貰うたのか。
三吉　サアそれは。
義兵　何ゆゑこの面を持つて居るぞ。
三吉　サア、その面は。
傳九　どこで盜んで來た。
三吉　サア。
閑齋　有やうに白狀するか。
三吉　サア／＼。

皆々　サア／＼。
三吉　サア／＼／＼。
閑齋　エヽ、面倒な。親仁の前へ引立てゝ行て　吟味せい。
皆々　オヽ、それがよい／＼。サア、うせう／＼。
ト引立てにかゝるを
三吉　アヽ申し、マア／＼待つて下さりませ。
皆々　待てとは、百兩の行くへ。
傳兵　何もかも白狀する氣か。
皆々　キリ／＼吐かせ。どうぢやい。
三吉　イヤ、どのやうに云はしやつても、百兩といふ金盜んだ覺えはなけれども、老人といひ、病人の親仁さま、もしこんな事聞かしましては病の障り、尤も合口は、ちつと入用の事がござりまして、ちよつと借りました。又その面は、ちと譯あつて、さるお人からの預かり物、大切にかけねばならぬ一品、それゆゑ肌身離さず持つて居りますのでござります。まだその外に肴の事は、貰ひましたに相違ござりませねど、そのお人の名を申しましては、難が附きまして惡うござりますゆゑ、決して申しませねど、天道さまこそ、よく御存じ。親仁さまへ土產に

致しませうと思うて、待つて居りましたが、金の事は一切存じませぬ。この身の不調法は幾重にもあやまりますゆゑ、親仁さまの耳へ入れまする事は、どうぞ御料簡なされて下さりませ。申し、御隠居さま、旦那さま、美しい嫁御さま。

ト恨めしさうに云ふ。

いとさま、皆のお衆さま、どうぞお願ひ申します。なかなか盗人根性さげる位なら、こんな貧乏は致しませぬわいなう。

ト泣く。お梅おみつも泣く。義兵衛こなしありて

義兵　この様子では、一概に百両の金は、彼奴が盗んだとも云はれまいわい。

ト傳兵衛、これを聞いて

傳兵　旦那々々、お前様も、うまい事を仰しやりますわい。あのやうに哀れさうに云ふのが、盗人の奥の手。どうでも三吉が盗んだに違ひござりませぬ。人は知らぬがこの傳兵衛ばかりは、疑ひが晴れませぬ。矢ッ張り盗人は彼奴でござりますわい。

金蔵　コレ〳〵、番頭さん、こなさん、無理に三吉どのを盗人ぢや違いないと、あの人に科を塗りつけたがるこなさまの心底、おりや、どうやらをかしう思うての。

傳兵　ヤア。

金蔵　マア、外もちつと吟味するが、よささうな事かと思ひますわい。

義兵　イカサマ、金蔵が云ふ通り、親仁さまへの面晴れなり、いつそ家内の者の懐中、吟味するがよいわい。

傳兵　エヽ、アノ、懐を。

ト悄り、いろ〳〵こなし。

藤右　こりや尤もな事。斯ういふわたしらも、面晴れといふもの。

忠兵　サア〳〵、改めませう〳〵。

金蔵　サア、斯うなつたら、誰れ彼れと云はうより、マア、第一番に番頭さま、こなさまから改めさんせ。

傳兵　イヤ、おりや改めいでも大事ないわい。

金蔵　イヤ〳〵、さうでない。違て大事ないと云はしやれば、いつそおれが改めてやりませう。

ト立ちかゝる。悄りして

傳兵　アヽ、これはしたり、待て〳〵〳〵。

金蔵　それでも、こなさんから改めにや、側が改められぬ。マアちよつと

傳兵　ア、、忙しない。待つたり〱。待たうぞ。
　ト云ふうち、フト心附いて
　オ、、さうぢや。こりや旦那が仰しやる通り、百兩の金
は三吉の業ぢやない。こりや外に盜人があるわい。
金藏　サア、それぢやに依つて、皆が懷、吟味するのぢ
や。
傳兵　ハテサテ、情ない事云ふわい。三吉が盜まぬ金なら、
もう懷のせいらくはせいでもよいわい。
傳九　ア、コレ、番頭さま、そりや何云ふのぢや。
丈助　こりや矢ッ張り皆が懷を改めた上、盜人はあの三吉
に
傳兵　エ、、何をやかましい。默つてゐい。
丈傳　それでもアノ三吉が
傳兵　イヤ、盜みはせぬ。
丈傳　ヤア。
傳兵　こりや、てつきり隱居が思ひ違ひであらう。
閑齋　何をあんだらめ、どうしておれが思ひ違ひぢや。
傳兵　サア、そこが七度尋ねて人を疑へとやら云ふ事もあ
れば、なんであらうと、わたしが請合うて、後からキッ
と詮議して、お目にかけませうわい。

義兵　そんなら其方が詮議して
傳兵　ハイ、明日までにキッと出してお目にかけませう。
皆々　マア、それで譯が解りました。
閑齋　まだ疑ひ晴れぬ三吉、事の分るまでは、この面は預
かつて置かう。
三吉　アイヤ、その面は。
義兵　ハテ、この面は、主のおれが預かつて置かう。
　ト面を取上げ
　ソレ、金藏、片が附いたら、去なしたがよいわい。
金藏　畏まりました……サア、三吉、また事の起らぬうち
親仁どのも待つて居られう。
　ト紙包みの肴を取り、懷へ入れてやり
　サア、ちやつと去なつしやれや。
　トこなし。
三吉　ハイ。
　ト矢張り俯向いて居る。お梅こなし。
金藏　サア、早う去なつしやれ。
三吉　ハイ。
金藏　これはしたり、サア、早う〱。
　ト介抱して立たしてやる。

三吉　ハイ〳〵。
トしを〳〵立ち上がる。義兵衛こなしある。
段々のお情、有り難うござります。
ト云ひながら、敵役お梅を見て
エヽコレ、親がなくばなア。
トきつと思ひ入れ。
金藏　ヤア。
ト氣を替へこなしあつて
三吉　イヤ、お暇申しませう。
ト唄になり、しを〳〵として下座へ入る。
義兵　エヽ、いろ〳〵の事で、ホッとしたわい。
金藏　左樣でござりませう。奧へござつて、飲み直しとは
どうでござりますな。
義兵　成る程、わつさりとそれもよからう。サア、親仁さ
まも御一緒に。
閑齋　エヽ、そこどころかい。
義兵　サア、皆來い〳〵。
ト唄になり、お梅おみつ、三吉の後を見て居るを、金
藏見脈、無理に引立て、義兵衛先に、この一件、皆々
奧へ入る。後に傳兵衛、丈助、傳九郎、殘り、こなし
あつて
丈助　なんの事ぢや。折角三吉めを科人にして、八平次ど
のに頼まれた通りにしてやらうと思うたに、茶々無茶に
してのけた。
傳兵　ハテ、だんない、氣遣ひすな。彼奴が親仁から、質
に取つてある瑪瑙の香箱を、八平次どのへ渡して[illegible]れば
金輪際、彼奴をせたげたその上では、その香箱を持つて
八平次どのは立身出世。又おれは彼の義兵衛めをぼいま
くる魂膽。さうなる時は、惚れて居るお梅は、否でも應
でもおれが奧樣。なんと、巧い手番ひであらうがな。
丈助　サア、さう聞けば、うまいやうなが、斯う寄つた三
人は
傳九　さても女子に緣のない
傳兵　どうして因果な
三人　サア、生れぢやよなア。
丈助　それはさうと、今の時、なんで貴樣、あの詮議を
傳九　明日までと引延した、われが心は。
傳兵　サア、その心と云ふは、これぢや。
ト懷より百兩包み出して見せるを
兩人　ヤア、そりや百兩の

ト云ふを打消し

傳兵　ア、コレ。

ト眞中にて我が口を押へろ。これにて丈助は耳、傳九郎は目を押へる。この見得よろしく、チョン／＼にて

返し

造り物、二間の二重。見附き鼠壁、納戸口。上手折り廻り世話障子屋體。下手落ち間、二つ竈、棚廻り、橋がかりの方は隣りの門口、瀬山左衞門と云ふ表札打ちあり、奥は塀口。障子屋體の續き、表家の裏手心にて高塀、切り戸口、見越しの松、見切りにかつま塀、小さき門口。すべて裏借家の模樣。右二重眞中に與三兵衞、病人の體、捕り手大勢に取卷かれ居る大原倉平太、着附け、ぶッ裂き野袴、大小にて、擬勢して居る。この見得よろしく、バタ／＼にて道具納まる。

捕手　動くな

與三　こりや、この老人を、なんとなさるゝな。

倉平　なんともせぬ。大切なる詮議の其方。繩打つて御前へ引く。サア、尋常に腕廻せ……者ども、ソリヤ。

捕手　ハア／＼。

トばら／＼とかゝるを、居ながらちよつと立廻つて

與三　浪人しても駿原周藏、仔細を聞かぬ其うちは、滅多に繩には

トぽん／＼と投げのけ

かゝりますまい。

トきつと見得。

倉平　オヽ、その仔細は、汝が隱まふ福島家の妹、光姫が詮議。

與三　イヤ、左樣なお人、隱まひし覺え毛頭ござらぬ

倉平　ヤア、覺えないとは卑怯のあらがひ。汝が隱まひ居る由、伯父御大學どのより慥かな知らせ。なんと動きは取れまいがな。

與三　フム……して又、その姫君を差出しなば

倉平　その時こそは武將への申し譯、一旦武將より御媒介ありし婚禮を辭み、剩さへ家の重寶、般若の面を持つて國遠なしたる科に依り、武將のお怒り宥めん爲。首討つて出さゞる時は、福島家の瑕瑾、家國の爲。

與三　すりや、福島家の瑕瑾とな。

倉平　速かに相渡しなばよし、異議に及ばゞ家搜しせう

か。
與三　サア、その儀は。
曾平　サア。
與三　サア。
兩人　サア／＼。
曾平　エヽ、面倒な。者ども、ソリヤ
捕手　ハアヽ。御上意。
　トかゝるを又突き廻して、よろしくとめ
與三　待つた。麁忽召さるな。姫君の首討つてお渡し申さう。
曾平　ヤ、なんと。
與三　古主に繋がる福島の息女、圍まひ負ふせしと思ひしが、斯く露顯の上は是非に及ばぬ、首討つて差出しませう。
曾平　オヽ、でかした。首討つて渡すに於ては、隱まひし科は赦し得させん。サア、この上は、片時も早く用意の致せ。
與三　ハツ、さりながら、爰に一つのお願ひ。何卒尋常に覺悟すゝめますうち、暫時の御猶豫。
曾平　イカサマ、願ひ聞き屆け遣はさうが、それとても長うは待たれぬ。今宵夜中に、建仁寺の鐘を突き出すまで、容赦いたしてくれう、シタガ、必らずともに間違ひなく
與三　キツと首にして、お渡し申しませう。
曾平　然らば老人。
與三　お役人樣。
曾平　しかと詞を
兩人　番ひました。
曾平　家來、供せい。
　ト唄になり、橋がゝりへ入る。與三兵衛あと見送り、フムと思案のこなし。合ひ方になり、上手高塀の切り戸口より、お縫、案内して、見脈を連れ立ち出て來り
見脈　アヽ、隣の舞屋どのは、きつう稽古をはずまして居らるるわい。
　ト此うちお縫、捨せりふにて與三兵衛が側へ行き、手をつかへ
ぬひ　この中、旦那樣が申し越されました、お醫者樣をお供申して參りました。
　ト與三兵衛こなしありて
與三　それは近頃、御苦勞に存じます。どうぞお内へよろしうお傳へ下され。

ぬひ　畏まりました。見脈さま、これに御ゆるりと。わたしはお先へ歸りませう。
ト元の切り戸へ入る。見脈、穢ないと云ふこなし。
與三　サ、、申し、これへ〳〵。
見脈　ハイ〳〵……切り戸一重隔てたばかりで、とても穢ない
與三　エ、。
見脈　ても氣散じなお住居でござりますな。
トこなしあつて
ドレ、ちよつと脈體を。
與三　然らば御大儀ながら
ト手を出しかけるを
見脈　ア、、矢張り足から。
與三　アイヤ〳〵、足は叶ひませぬ。
見脈　サア、さう聞きましたゆゑ、足の脈が肝心。
與三　左樣なら御免下され。
ト足を出す。
見脈　サ、、遠慮なしに……ドレ〳〵。
ト小むづかしう足の脈を取つて
既に、病と申すものは、その病の在所の脈を考ふるが本文でござる。餘人のやうに、何病でも手の脈を窺ふは、横町の喧嘩を、内から聞くやうなもの。兎角側で見ぬ事は分らぬものでござるての。
與三　本腹がなりませうかな。
見脈　さればサ、命に別條はござらぬが、なんでも二三里歩行なるやうにならぬと、療治がたり悄いての。
ト眞面目に云ふ。
與三　ヘイ。
ト與三兵衞、呆れしこなしにて、見脈の顏を眺める。合ひ方になり、橋がゝりより、三吉、しな〳〵として出て來り、門口にてこなしあつて、我が形を見て、砂などを拂ひ、身繕ろひして、氣を替へ、イソ〳〵としてズッと内へ入り
三吉　親仁さま、只今歸りました。
與三　オ、悴、いま戻つたか。
三吉　ハイ、只今になりました。
ト見脈、何心なく三吉を見て、悔り、側にある合口をちやつと腰を差し、煙草入れ紙入れなどを懷へ捻ぢ込む。
見脈　そんなら、愛な息子どのと云ふは

三吉　トこれにて見脈を見て
　さう云ふあなたは。
　ト同じく悧りする。與三兵衛こなし。
見脈　もうお暇申しませう。
　ト立ち上がるを
與三　アイヤ〳〵、お待ち下され。悴めが歸りますと、一日見るより、合點のゆかぬあなたの素振り。こりや何か樣子の
見脈　イヤ、樣子と云ふは山形屋で
與三　アノ山形屋で、悴めが何か粗相でも致しましたか。
見脈　サア、その譯は。
　ト云はうとするを、三吉、云うてくれるなと云ふこなし。
三吉　ハヽヽ、イヤ、親仁さま、譯と云ふは、斯うでござります。最前あなたの云ひつけで、仕事休んで山形屋へ御婚禮のお祝ひの、手傳ひに參りましたところが、モシ、聞かつしやりませ。蛤のふくら煮に、鯛の濱燒、お吸ひ物が鰊の丸だき、それは〳〵途方もない御馳走の上、御酒が出まして、ところであのお人と、相撲を取りましたが、もしおれに勝つたら、アレあの脇差を遣らうとの約束。そこでわたしも爰を噴れと、なんの苦もなうあのお人を、ぶち投げましたが、約束ゆゑ、あの脇差を取られうかと、あの樣子。用心して持つて居られますのでござります。
　ト此うち見脈、さうぢやないと云ふ仕方。三吉はヤアうんと云うてくれいと云ふこなし。
與三　ハテ、それは卑怯な仕方。約束とござれば、その合口は悴めに、お遣りなさるがようござります。
見脈　エヽ。
　ト悧りして合口を抱へる。
與三　ハテサテ、すつぱりと遣つておしまひなされませ。
見脈　イヤサ、これはアノ。
　ト云はうとするを
三吉　サア、その事は山形屋の旦那が、御挨拶ゆゑ、料簡いたしました。
見脈　それはアノ
　トおれでないと云ふ仕方するを
三吉　ハテ、もうようござります。濟んだ事なれば、何にも云はぬがようござりますぞえ。時に山形屋の旦那からお前樣の土產にせいと云うて、この通り

ト返し前の紙包みと肴を出して
職人のこちらが、つひに喰つた事もない、しかも目の下八寸と云ふこの鯛の燒き物。又お前はお齒が惡いと云うて、こんな蒲鉾に玉子の厚燒、まだ其の外に海老のかんな屑もあり、ほんに旨い物づくめ。これで飯でもあがつたら、それこそこの中の不食も、いけるであらうと思や、こんな嬉しい事はござりませぬ。

ト側へ並べ喜ぶを、與三兵衞、ヂツと三吉の顏を見て

與三　チエ、、口惜しい。

トぢつと喰ひしばり、思ひ入れ。合ひ方。三吉、顏を覗き

三吉　ハヽン、口惜しいとは、お前、齒が惡うて喰はれぬと云はつしやるのかえ。

ト與三兵衞、耳へ入らぬこなしにて、三吉をヂツと眺め

與三　人は氏より育ちが肝心。時世につるれば心までが

三吉　エ、。

トこなし。與三兵衞、ちやつと氣を替へ

與三　茲な不孝者めが。

ト力味かへり、拳にて涙を拭き、キツと叱る。

見脈　これはしたり、不孝者とはなんの事。これまで孝行な息子を。

與三　親の心に合はぬ不孝な悴。常々云ひ聞かすを、そちや何と聞いて居るぞ。うぬも人間、大名も同じ人間。さすればいつ何時、立身いたさうやら。人の出世は何時知れぬもの。身は町人と成り下がるとも、心を虛うなぜ持たぬ。見りや乞食同然に、町人連れが喰ひ剩りを、有り難さうに持ち歸り、この親に與へんなぞとは、こりや身共を、犬猫のやうに思ふか。コリヤヤイ、この親は畜生ではないぞよ。あの茲な不所存者めが。その心ゆゑ、如何やうに申し聞かしても、親の手を放れ、立身出世せぬ未練者め。見るもなか／＼穢らはしい。キリ／＼そこを立つてうせう。

トきつと云ふ。見脈、氣の毒なこなし。

三吉　ア、イヤ／＼、親仁さま、肴貰うて來たのが、其やうに腹が立つなら、捨てゝもしまひます程に、どうぞ機嫌直して下され。

與三　只今のやうに申したが、口惜しいと、心に意氣張り思ふなら、疾より認め置きしこの書狀。

ト懐より封狀を取出し

これを持つて、丹波へ參るか。

三吉　その事ばかりは。

與三　すりや、立身出世の心掛けはないか。

三吉　サア、例へどんな立身出世せうとも、病氣の親を振り捨て、なんとオメ／＼行かれませうぞ。どうぞお情に機嫌直して、いつまでもお側に置いて下さりませ。

與三　それ程までに

ト　ぢつと愁ひのこなしありて、また氣を替へ

茲な、うつけ者めが。

トきつと云ふ。

見脈　これはしたり、あんな孝行な息子を、其やうに叱りつしやるな、第一マア病の障りにもならう程に、腹を立てずと氣を靜め、奧へござつて浮世話しを。

與三　忝なうござる。斯樣に申すも彼れが爲。

見脈　サヽ、そこをざつくに、マア、ござれ。

與三　悴、親が申す事、無理か道理か、とつくりと胸に手を當て、思案の致せ。

ト手を取り、上手屋體へ入る。

ト唄になり、障子ピッシャリ締め切る。三吉、あと見送り

三吉　どうした事やら、いつぞやより、する事なす事、親仁さまの氣に入らぬ勝ち。なんぞと云ふと、ガミ／＼と。こりやどうでも病の業か知らん。

トこなし。ジャン／＼と暮れ六ツ打つ。

オヽ、ありやモウ日の暮れ。

ト行燈出し、灯をともして

ドレ、この間に。オヽ、さうぢや。

ト屋體を覗き、こなしありて門口を締め、棚よりちろりを下ろし、ちよつとかざ嗅いで見てうなづき、茶碗を載せ、以前の肴を並べ、一間の押入れを明ける。内より八平次、着流し、口幕の形にて出る。三吉、こなしありて

最前から内に居りませなんだゆゑ、定めて御退屈にござりませう。せめてお氣晴らしに、お一つお上がり下さりませう、

八平　こりや何ぢや。

三吉　イヤモウ、ほんの有り合せなれど。

八平　おりや大名ぢやぞよ。聞く樣子が、われが親も慥かにおれが家來筋。なりや二人とも、おれが家來ぢやぞよ。

三吉　そりや仰しやらいでも、知れた事。例へ家來でなうても、いつぞや小田原で、不思議に拾うた遺言狀。伊達與三兵衞といふお人を、さま〴〵と尋ぬれど、今に在所の知れぬと云ひ、思はず出合うた由留木の御舍弟左馬治郎さま、何しに疎かに致しませうぞ。

八平　サア、その疎かにせぬ者が、これで酒を呑めとは、なんの事ぢや。われが親さへ食はぬ食ひ剩り、それ程食ひたくば、うぬ喰へ。

ト蹴飛ばす。三吉、片附ける。

それよりは、云ひつけ置いた金は出來たか。どうぢや。

三吉　サア、それも如才はござりませねど、何を云うても日雇ひの職人。高の知れた身の上で、大枚百兩といふ金がマア

八平　出來ぬと云ふのか。

三吉　サア、急にと云うては。

八平　して、般若の面は

三吉　サア、その面は最前、アノ

八平　どうぞしたか。

三吉　イエ、サア、そりやアノ、只今取つて參ります。

ト行かうとするを直ぐに引きつけ

八平　動きやがるな。こな不忠者めが。現在の主人が口をたれて頼む金子、僅か百兩ばかりの才覺いたしくれぬのみならず、大切な般若の面も、無くしたる不忠者め。サア、その面は賣り拂うたか。

三吉　エ、滅相な。

八平　賣り拂はずば、質に置いたか。

三吉　なんのマア、左樣な事を。

八平　然らばどうした

三吉　サア、それは。

八平　ヤア、この場を遁がれんとは野太い奴め。サア、キリキリ吐かしおらうぞ。エ、、吐かしおらぬか。サア、吐かさにや、カウ〳〵〳〵

トさん〴〵にくらはし、突き飛ばす。三吉、最前の事を思ひ出し、口惜しきこなしにて泣き落す。所作の鳴り物になり、下手より八五郎、千太、十吉、煙草切りの形にて、出て來り、ズツと內へ入り

三人　オ、三吉、內に居るかい。

三吉　オ、、さう云ふは仲間の者か。

ト云ふを直ぐに引きつけ

八五　わりや仲間を覺えて居るかい。われが常平生、親孝

行にするゆゑ、いぢらしい事ぢやと思うて、おれが頭立つて二人を頼んで、仕事先は云ふに及ばず、手間取り仲間でもよい顔ばかり選り出して、五百掛け三拾枚拵らへ親がけまで集めてこましたに、其まゝに札入れもせず、打捨てゝ置いてよいかい。サア、札入れさらさにや、親がけの割戻しせんかいの。

千太　さうぢや。札入れもせず、割戻しもせず、口先でちやらくらと吐かして、一日遁がれにして置いて濟むと思ふかい。

十吉　コリヤ、わりやそれでもよいか知らんが、頼み歩いたおいらが、顔まで潰すのぢやな。一體このせりふは

三人　どうさらすのぢや。

三吉　サア、さう云はしやるも尤もぢやが、何を云うても

トこなし。

八五　無いと吐かすのかい。さうしてマア、わりやその金何にしたのぢや。

三吉　サア、その金も皆

ト八平次を見る。

八平　何がどうしたと。

ト睨みつける。此うち下手より、お初出かけ居る。

三吉　サア、お前がなくさみに

八平　ヤア、うぬが呆氣ゆゑ、無くした金。身共が知らうか。馬鹿つくすな。

三人　サア、おいらのせりふは、どうするぞ。

三吉　サア、その事も

八平　般若の面は。

三吉　サア、その面も。

三人　譯が解らにや、引立てゝ去なうかい。

三吉　サアそれは。

八平　面はどうぢや

三吉　サア。

三人　片を附けるか。

三吉　サア。

八三　サア。

皆々　サア〳〵〳〵。

八五　エヽ面倒な。おいらが面晴れ。引立てゝ行くがよい。

二人　さうぢや〳〵。キリ〳〵うせあがれ。

ト引立てる門口より

はつ　イヤ、待つた。

皆々　待てと留めたは。
はつ　イヤ、わたしでござんす。
ト ぢつと内へ入る。八平次見て
八平　ヤア、其方は。
ト 恟りする。
はつ　ア丶コレ、互ひに名は云はぬづく。
ト こなし。
八平　オ丶、さうぢや。賭博場で出逢うた干糠のお初。
三人　おいらを留めたは、このせりふを。
はつ　ソレ。
ト 紙包みの金を抛り出す。八五郎、取上げ見て
八五　ヤア、こりや金が五兩。
はつ　それで算用して置かんせ。
ト 三吉こなしありて
三吉　ア丶、コレ〳〵女中、馴染みよしみもないこなたに
はつ　イヤ、よしみがござんす。
三吉　ナニ、よしみとは
はつ　それは後で……サア、お前方も算用濟んだら、キリキリ去なんせ。
八五　こりや忝ない。まん直しに、これで一廻りやらうかい。
二人　そりやよからう。サア、ざぶどのも一緒に。
八平　オ丶、一緒に行かう……コリヤ三吉、今の面の事は。
三吉　イヤ、それは夜中までには、キツとお手に入れませう。
八平　して又、百兩の金はどうする。
三吉　それも一緒にお渡し申しませう。
皆々　アノ、大枚の百兩といふ金。
三吉　ハテ、手には無うても思案がある。
皆々　ても、途方もない思案ぢやなア。
八平　キツと夜中を相待つぞよ。
三人　サア、りやんこどの。
八平　サア、來い〳〵。
ト 唄になり、この一件、橋がゝりへ入る。三吉、キツとこなし。
三吉　百兩の金と云はしやるも、定めて勝負事の元手でがなあらう。何を云ふもお主の云ひつけ。いつぞや祇園で八五郎を頼んで、連れさして戻つてから、日に〳〵募る我まゝ氣まゝ。悪い事の有り條。御意見申してもお聞入

れなき御氣性……あのやうに云はしやるからは、百兩の金と彼の面を、夜中までに手に入れる思案は……フム。
トこなしあつて、手早く煙草切り庖刀を取つて手拭に巻き
さうぢや。
ト駈け出さうとするを、お初よろしく留め
はつ　ア、コレ、待たしやんせ。
三吉　イヤ、放した〳〵。
トもがく。
はつ　イエ〳〵、放さぬ〳〵。樣子は知らぬが短氣な素振り。お前の體に、もしもの事があつた時には、後に殘つた親御さまへは、誰れが代つて介抱しますえ。
三吉　ヤア。
トぎつくりする。
はつ　サア、その介抱する者に、とつくりと得心さして、行て下さんせいなア。
トこなし。合ひ方になり
三吉　そんならこなたが
はつ　介抱するもお前へ心中。
三吉　ヤア、そりや又、どうして。
はつ　成る程、お前は御存じない事ながら、去年の高雄の紅葉狩、フッと見染めしその時から、身を持ち崩し、操を立て、國を立退き方々と、尋ねさまよふ甲斐ありて、この頃祇園の繪馬堂で、廻り逢うたるその時に、てもマア親御に孝行なと、思ふほど猶いや增す思ひ。わたしやどうもならん程、惚れて〳〵惚れましたわいなア。
ト取りつき泣く。此うち見脈、障子屋體より立聞きして居る。三吉こなしあつて
三吉　ハテ、思ひがけないこなたの深切。慥かにキッと受けましたぞや。
はつ　そんなら變らぬ夫婦の固めを。
三吉　イヤサ、その固めは。
ト心急きのこなし、この時
見脈　千秋萬歳の千箱の玉を奉る。
ト以前のちろりと肴を恭々しく兩人の前へ持ち行く。
兩人　ヤア、こなたは。
見脈　立聞きしたる女中の貞心。こなたの孝心。結び合する世話役も、看板打つた仲人醫者。幸ひ肴は表の裾分け山形屋の媒介もこの見脈。よい仲をあやかる爲
トこれにて三吉、又お梅の事を思ひ出すこなし。

マア、嫁御から。

ト茶碗を渡し、酒をつぐ。お初喜んで飲む。

ところで、ソレ聟君。

ト三吉の前へ茶碗を持たし、酒つぐ。三吉グッと飲む。

オヽ、めでたい〳〵。三國一ぢや、聟に成り濟ました。しやんしやんのしやん。マア、これで杯も濟んだと云ふもの。

トこの時バタ〳〵にて、切り戸よりお縫走り出て

ぬひ　見脈さま、爰にかいなア、急病ぢや。ちやつと來て下さんせ〳〵。

見脈　なんぢや、急病人ぢや。さうして、そりや誰れぢや誰れぢや。

ぬひ　サイナ、お嫁御さまが急病が發つて、今も知れぬ程に、早う來て下さんせ〳〵。

見脈　ヤア〳〵、あの嫁御が〳〵。

ト惘りして立ち上がる。

ぬひ　サア〳〵、ちやつと來て下さんせいなア。

ト手を引ッ張る。

見脈　待て〳〵、おれは裏から

ト切り戸の方へ行かうとするを

ぬひ　サア、ござんせい〳〵。

ト無理に橋がゝりへ引ッ張り入る。後にお初、恥かしさうに三吉の側へ寄り

はつ　申し、三吉さま、祝言の杯も濟む上は、誰れ憚らぬ女夫仲。この上は、早うわたしが心を、落ちつかして下さんせいなア。

ト手を取る。三吉そゞろになり

三吉　エヽ、そこどころぢやないわいの。

ト振り切るを

はつ　そんなら、わたしが氣に入らぬかえ。

三吉　なんの、さうではなけれど、斯う夫婦の約束したからは氣遣ひしやんな。わしが女房。

ト始終隣りへ氣の急くこなし。

マア、親仁さまにも引合さにやならん。大儀ながら介抱して、爰へ連れまして來て下され。

はつ　そりやお前、ほんまかえ。

ト嬉しきこなし。

三吉　ほんまとも〳〵、嘘でない證據は、祝言までしたでないか。

はつ　エヽ、嬉しうござんす。これと云ふも、祇園さまの

お引合せ。今日からは、ほんまの女子、お前の女房ぢやぞえ。女房なら、ドレ奥へ行て、父さまにこの事、云うて來ようか。

　トつか／＼と障子屋體の側へ行き、振りかへり

こちの人。

　ト三吉、手を組み思案して居る。

エヽ、コレイナア、こちの人。

　トこれにて心附き、顔を見る。

わたしやお前の、何ぢややらぢやなア。

　ト三吉こなしありて

三吉　オヽ、女房……女房も／＼、今ぬく／＼の女房ぢや。

はつ　オヽ、嬉し。

　ト唄になり、お初入らうとして、心ならぬ思ひ入れにて頷づき、片脇に窺うて居る。三吉、これを知らず、こなしあつて、側にある茶碗にて、我が額を打ち割り

三吉　これで行かずば

　ト最前の庖刀をちよつと懐より出して

こちらで

　トいろ／＼こなしありて

オヽ、さうぢや。

　トつか／＼と駈け出さうとするを、お初よろしく留め

はつ　マア／＼、待つて下さんせ。どうでもお前は

三吉　ハテ、心が急く。爰放せ／＼。

はつ　イエ／＼、様子聞かぬうちは、なんぼうでも。放しやせぬ／＼。

三吉　ハテ、女子の知つた事ぢやない。爰放した／＼。

はつ　イエ／＼、滅多にやらぬ／＼。

三吉　エヽ、面倒な。

　ト揉み合ふはずみに、思はず三吉の肱、お初の脇腹へ當り、ウンと悶絶する。これに構はず

ソレ。

　トついと橋がゝりへ走り入る。與三兵衛、障子屋體より

與三　今の物音は。

　ト躄り出る。お初、心附いて

はつ　ヤア、あなたは。

與三　詳しい譯はあれから聞いた。其方の貞心。何は兎もあれ、悴は何所へ。

　ト心急きのこなし。

はつ　サア、樣子は詳しう存じませぬが、刃物を持つて血相して、どこへやら行かしやんしたわいなア。
與三　ナニ、刃物を持つて駈け出せしとな。
ト悴りする。
はつ　サア、どうやら心ならぬ今の素振り。こりやマア、どうしたらよからのぞいなア。
トうろ〳〵する。
與三　日頃の孝心に引替へ、我れに隱して行くからは、一方ならぬ仕儀でもあらうが、あれが身の上、もしもの事があつた時は、未來にござる
ト云はうとして氣を替へ
イヤサ、今までの心盡しも水の泡。こりや此まゝでは
ト氣をいらち、行かうとしても足の叶はぬこなしにて
エヽ、コレ、なんたる因果なこの業病。行くも行かれず、捨ても置かれず
トいろ〳〵身を踠き、我が足を叩き
チエヽ、口惜しい。
トあせる。お初もウロ〳〵して側へ行き
はつ　お道理さまでござります。この上は、どうぞマア…
…と云うたところが、わたしは女子の事なり

與三　エヽ、コレ、何としたもので
ト兩人顏見合せ
兩人　あらうぞ。
ト當惑のこなし。この見得よろしく、チョン〳〵にて、返し
造り物、元の山形屋になる。眞中に三吉を細引にて引ッ括り、傳兵衞、傳九郎、勘六、東西より詰めかけ居る。二重の上に閑齋、煙管持ち、力み返つて居る。この見得よろしく、誂らへの合ひ方、バタ〳〵にて道具納まる。
皆々　動きさらすな。
傳兵　わりやマア、太い奴ぢやぞよ。
三吉　イヤ、男の顏へこの通り、疵つけられては、濟まんぞ〳〵。
閑齋　なんぢや。濟まぬもすさまじい。僅かの疵を云ひ立てに、わりや此方の內へ暴れにうせたか。
傳兵　仕返しもをかしい。うぬの方での動くうち、おいらの手足が遊んで居やうかい。馬鹿つくすな。
丈助　それ〳〵、そんな態になつても、あやまつたと吐かさ

ぬのみか、大枚の百兩おこせとは、野太い奴ぢや。
傳九　まだその上に、最前の面を返せとは、あの茲な
皆々　大盜人めが。
閑齋　こりや、此方の内へ、もがりにうせたものぢやな。
三吉　もがりでも、いがみでも、百兩に面附けて持つて去なにや、聞かんのぢや／＼
傳兵　エヽ、いま／＼しい才六め。皆寄つて、苛なめ／＼。
皆々　オヽ、合點ぢや／＼。
ト皆々寄つて打擲する。奥より義兵衞、ツカ／＼と出て、よろしく引分け
義兵　待て／＼／＼。
ト三吉を圍ふ、
皆々　イヤ／＼、叩き殺すのぢや／＼。
義兵　エヽ、やかましい。靜かにせい。近所の手前もあるわい。
皆々　へイ／＼。
ト靜まる。
義兵　さうしてマア、全體こりや、どうしたのぢや。譯を云うたがよいわい。
傳兵　イヤ旦那、お聞きなされませ。斯うでござります。この二才めが、最前の時、顔へ疵つけたと云うてねだり込み、剰さへ僅かな疵を云ひ立てに、百兩の金に面附けておこさにや、濟まさぬとわなりますゆゑ、假初めにも大枚の百兩といふ金、膏藥代によう遣らぬと申しましたら、そんなら疵つけられた仕返しせにや置かぬと、菜切り庖刀を振り廻して、暴れさらす無法者。御隱居始め家内の者に、ひよつと怪我過ちでもあつては悪いと存じまして、皆が寄つてかゝつて、取つて押へましたが、なんと、顔に似合はぬ悪い奴ぢやござりませぬか。
義兵　そいつは料簡のならぬ太い奴ぢやが、待て／＼
ト繩をほどき、引きつけて
ヤイ、わりやマア、爰な借家に居さつて、剰さへ今夜俄かに女房は死ぬ。その取込みを見かけて、ねだりをつけ、百兩の金してやらうとは、野太い奴ぢやなア。うぬマア仕樣模樣もある奴なれど、今夜の事ゆゑ料簡してこます程に、キリ／＼と去にさらせ。又われが欲しがる面は、最前の紛失の金の知れるまで、おれが預かつて居る。それを仰山さうに、キョロ／＼吐かしたら、打ち割つてしまふぞよ。また百兩の金もさうぢや。手を下げて、まともに頼みさらしや、隨分男づくで山形屋の義兵衞ぢや、

貸して遣らぬものでもないわい。

閑齋　イヤ、ならん〱、百兩はさておき、一文の事もならんぞ。

文助　オヽ、さうぢや〱。隱居樣、叩き殺してなら、百兩出し甲斐があると云ふもの。

傳九　こんな騷動さしやがつた奴、出すどころか、此方へ取らにやならんわい。

義兵　サア、足元の明るいうちに、去ね〱。エヽ、キリキリ去にさらせ。

ト三吉、始終無念のこなし。

合點が行たら、明日でもあやまりにうせい。

ト三吉、喰ひしばるこなし。

その面なんぢや。去にさらさぬと、うぬ、長家を叩き出すぞよ。

トこれにて三吉、ヂツとこなし。

エヽ、早う去にさらさぬかい。

ト表へ突き出す。

皆々　エヽ、見す〱去なすも

ト門口へ行かうとするを、義兵衞、突き廻して、門口をピツシヤリ締めて

義兵　ハテ、兎角町には事なかれ。

皆々　でも。

トまた行かうとするを

義兵　サア、皆も奥へ。

皆々　それぢやと云うて。

義兵　ハテサテ、云ひたい事は明日云へぢや。

ト唄になり、皆々門口へ心殘し、義兵衞こなしあつて、この一件皆々奥へ入る。後に三吉、しよんぼりとなり、ホツと溜息つくと、奥にて枕念佛になり、鉦の音する。三吉これにて、こなしありて

三吉　フム。すりや、いよ〱お梅は死んだに違ひないわい。それなれば、所詮今夜は埒の明かぬ事……と云うて、左馬治郎さまに請合うた百兩の金の出來方。折角元入れた甲斐もなく、さうとも知らず左馬治郎さまのお待兼ね。煙草切りの八五郎の內。彼奴が所は八坂の上町。マア、ちよつと行て一時も早う、お斷わり申さう。オヽ、さうぢや。

ト身繕ろひして花道へ行きかゝる。米屋唄になり、向うへ思案しながら、段々廻り、花道より通ひ道へ行く。よき所にて立ちどまり、こなしありて

イヤ〳〵、どのやうに云うても、お聞入れのあるお人でもなし。いつそ云ひ譯に、この身を

ト思ひ入れありて死なうと云ふこなしにて

さうぢや〳〵。

ト本舞臺へ來る。此うち道具、段々下手へ引く。米屋唄變り、鍛冶屋の鳴り物になる。但し合ひ方入り。

造り物、一面の町家續きの書割り。よき所に四ツ辻門の體。この側に新らしき番部屋、中に番人入り、軒下に松原通りと書きたる辻行燈。すべて夜中の模樣。よろしく道具納まる。

ト三吉、本舞臺へ來り、番部屋の側へ來ると、內にてチヨンと拍子木打つ。これにて三吉、フツと內の事思ひ出したこなしにて

年寄らしやつた親仁さまの御病氣、便りと云ふはおれ一人。今にもしもの事があつた時には……こりや迂濶には死なれぬわい。

ト番部屋を除けて立ちどまり

まだその外に、大事の用向き。

トこなし。內にて、四ツの夜番太鼓を打つ。三吉數へ見て

ヤア、ありやモウ四ツ。

トまた數へて見て

オヽ、矢ツ張り四ツぢや。夜中と云うても今一時。こりやマア、どうせうしらん。

ト吐息つき、バッタリ下に居ると、鍛冶屋唄になり、向うより藤右衞門、忠兵衞、お霜、お糸、出て來りて

皆々　ひよんな事でござりましたわい。

藤右　イヤモウ、人の壽命といふものは、果敢ないものでござりますての。

しも　さうでござんす。こんな事と知らず、最前までわたしに、お賴みなされた事もあつたもの。思へば〳〵お痛はしい。

ト泣く。

藤右　これはしたり、また泣くかいの。

しも　それでも內で泣くと、御隱居さまがお叱りなされますわいなア。

藤右　成る程、さうであらう。そんなら爰で泣いて去んだがよい。シタガ、こんな妙な事はない。婚禮に呼ばれて、葬禮送らうとは思はなんだ。

トこの話しをフト三吉聞きつけて、透かし見てゐる。
忠兵　さうして、義兵衞も義兵衞ぢや。せめて一夜さ留めて置くが定法。そこに今日死ぬや死なずに、急に內葬とは、あんまり胴慾ぢやないかい。
トニ吉始終聞き耳して居る。
藤右　それ〳〵、貳拾四時はさて置きて、四時經つや經たずに送り出すとは、忙しない事ぢや。時に、段々夜が更けて來る。ちやつと去にませう
忠兵　サア、參りませう。
ト捨ぜりふ、唄になり、番部屋の前へ行くと、內よりチヨン〳〵〳〵と拍子木打つ。四人上手へ入る。三吉あと見送り、こなしありて
三吉　今のは山形屋の腰元。今夜お梅を內葬との事。フムトこなしあつて
エヽ、附いて行て詳しう聞いたらよかつたもの。殘り惜しい事した。さうして、內葬は、どこへ葬むつたしらん。どうぞ聞きたいものぢやが……エヽ、いろ〳〵の事で、また思ひ出した。折角忘れて居たものを。
トこなしあつて、フト向うを見て
ヤア、遙か向うから來る提灯は、慥かに山形屋の印。大方これも葬禮の戾り道。通りの體にして、オヽ、さうぢや。
トこなしありて手早く頰冠りして
どうぞ詳しい樣子が聞きたいものぢやが。
トこなし。割り竹、鈴の音。三吉、向うへ行きかけると、段々この道具下手へ引く。四ッ辻、眞中になると向うより見脈、山形屋といふ提灯を持ち、尻からげ。お縫の手を引き
見脈　もそつと、しか〳〵歩かんかいの。
ト云ひながら出て來る。
ぬひ　それでも、怖いのと悲しいので、歩かれるものぢやござんせぬ。どうぞしつかりと手を引いて下さんせえ。
見脈　サア、手はしつかり引いて居るゆゑ、ちやつと歩いたがよい。夜が更けると、道が危ふいぞや。
ぬひ　サア、さうは思へど、目の先へ御寮人さまの顏が、ちらつくやうにござんすわいな。
ト此うち三吉、よき所にて摺れ違ひ、兩人の後より附き添ひ、話しを聞きながら段々附いて來る。
見脈　そりやその筈ぢや。なんの事もなかつたに、急に死なしやつた佛と云ひ、殊にお梅どのが遺言で、髮も衣裳

も其まゝ葬むつた事ゆゑ、とんと常の通りぢや。併しながら、あの美しい者を、あのまゝ土の中へ埋めるとは、なんと惜しいものぢやないかいの。

ト此うち本舞臺へ來る。三吉、附いて來る。

ぬひ　ア、モウ、何にも云うて下さんすな。わたしや怖いわいなア。

ト番部屋の前へ行く。チョン／＼と又、内より拍子木鳴らす。これにて恟りして飛び上がり

あれえ。

ト見脈に取りつき、顫ふ。此うち道具少し下手へ引き、番屋を消す。

見脈　エヽ、なんの恟りする事がある。ありや用心の爲の番屋の拍子木ぢや。あれで結句故障ないぢや。

ぬひ　わたしや、怖い／＼と思ふゆゑ、恟りしましたわいなア。

見脈　こなた、怖いかしらんが、おりやあの佛ばかりは、惜しいものぢや。

ぬひ　惜しいと云へば、鼈甲の笄留め、御寮人さまも死なしやんす事と知つたら、貰うて置かうもの。

見脈　サア、おれも分一をまだ取らぬうちに、ころりとは、きつい拍子ぢや。

ト云ひながら兩人、上手へ行く。お縫、何心なくフト振り返り、思はず三吉の姿を見て、また恟りして

ぬひ　あれえ。

ト上手へ逃げて入る。見脈も三吉を見て恟り

見脈　あれえ。

ト逃げうとしても、足の立たぬこなしにて顫うて居る。

三吉　コレ、恟りする事はない。わしぢやわいの。

ト手拭取る。

見脈　ヤア、こなたは。

ト顫うて居る。

三吉　さうして、山形屋の嫁を、土葬にしたは、どこぢやぞいの。

見脈　サア、そりやアノ鳥邊山の

三吉　アノ、鳥邊山ぢやの。

見脈　さうとも／＼

三吉　その上、遺言ゆゑ、髮形も其まゝで。

見脈　オヽ、其まゝ／＼

三吉　して、埋めた所は。

見脈　妙見前の大きな地藏の隣り、埋めた跡へ影燈籠を建

てる約束。
三吉　すりや、妙見堂の地藏の隣り。
見脈　土葬になつても箱入り娘。
三吉　あの棺箱へ、髪も形も其まゝに
見脈　生きたか死んだか分らぬ死骸。
三吉　せめての思ひ出。
見脈　しるしの燈籠。
三吉　オヽ、さうぢや。
ト見脈の合口を引拔き、腰に差し、ツイと向うへ走り入ろ。見脈、ウツトリとなり、腰を探り、後を見送り
見脈　ても途方もない奴ぢや。又おれの魂ひを引拔いて走りをつたか……どうでもこりや、彼奴に合口かしらん。
ト呟きながら、何か踏んだるこなしにて、雪駄をちよつと嗅いで、むかしい顔して
南無三、こりや人のではないわい。
ト向うを見詰め、また雪駄を見る。この見得よろしく太鼓のツトメにて、チヨン／＼。　返し
造り物、見附け黒幕。よき所に石の地藏。これに影燈籠もたせかけあり、墓守り道樂、剃りたて坊主、穢ない形にて指圖して居る。男二人、鍬にて土を掘つて居る。柳の吊り枝、妙見堂の太鼓のツトメにて道具納まる。
道樂　サア、もうよいか／＼。
男二　ハイ／＼、もう片附きました。
ト影燈籠を建てる。
道樂　てもマア、惜しいものを埋める事ぢや。併し、其ままで埋める事ゆゑ、今夜はキツと番せにやなるまい。
二人　それは御苦勞でござりますな。
道樂　時に、仕上げも來てあれば、一杯入れよう。サア、ござれ／＼。
ト右の鳴り物にて下手へ入ると、あと本釣り鐘、題目唄になり、向うより三吉、返し前の形にて走り出て、あたりを透かし見て
三吉　思ひ込んだ一心、ツイ思はずも爰は鳥邊山。埋めた所は地藏の隣り。フム
ト頷き、本舞臺へ來り、影燈籠を見て
最前開いた印の影燈籠。慥かに爰が
ト探る。以前の鍬、手先へ當る。

幸ひのこの鍬。エヽ、忝ない。

トあたりを窺ひ、影燈籠を退け、土を掘ると、中より棺箱出る。開かうとしても開からぬゆゑ、括つてある繩の結び目を持つて引上げる。これにて箱、下より上がるを、合口にて繩を切り、蓋明けると、内にお梅居る。直ぐに髪を持ち、引出してキッと見る。お梅フッと心附き、チロリと三吉の顔を見る。三吉、悄りして

ヤア、こりや目を明いたワ。

トお梅、三吉を見て悄り。

うめ　ヤア、お前は三吉さまか。

三吉　わりや、生きて居たか。

うめ　オヽ、三吉さま、逢ひたかつた／＼。

ト取りつくを

三吉　生きて居たら、忘れぬ怨み。

トきつとこなし。

うめ　エヽ。

三吉　ようマアおれを騙して、嫁入りしたなア。

うめ　サア、これには様子が。

三吉　なにを。

ト引寄せる。陀羅尼の鐘聞える。三吉キッとこなしありて

ヤア、ありやモウ夜中。

うめ　マア／＼譯を

ト寄り添ふを、三吉、合口にて切りかける。お梅、いろ／＼身を交し、とゞ逃げようとする端を持ち、引き戻す。題目唄にて、無理殺しの立廻り。トゞ、お梅の首をポンと切ると、下手にて人音するゆゑ、三吉、手早くお梅の袖を引ちぎり、首を包み、腰に括りつける此うち、道樂窺ひ出て

道樂　盗人め。

トかゝるを、握り拳にてくらはす。これにてウンと目をまはす。この拍子に影燈籠消える。

三吉　丁度幸ひ。

ト道樂を掘つた穴へ蹴込み

オヽ、さうぢや。

トついと向うへ行かうとすると、下手より傳兵衛、鉢巻肩脱ぎにて走り出で、三吉に行き當り、轉ぶ。三吉、構はずと向うへ走り入る。傳兵衛、起き上がり、後を見て

傳兵　途方もないあわて者ぢや。ウンともスンとも云は

ず、雲を霞と行きをつた。いろ〳〵の奴もあるものぢや。時に、常々惚れて居るこちの嫁、例へ死んでもだんない。日頃の思ひを

　トあたりを透かし見て

慥か地藏の隣り、影燈籠が建てゝあると聞いたが、何を云うても、この暗さでは何にも見えぬ。オヽ、さうぢやこちの嫁御に夜這ひに行く氣になつて、四這ひで尋ねるが近道ぢや。

　ト四這ひになり、尋ね廻り、影燈籠を探り當て

なんぢや。こりや影燈籠。どうして爰に抛つてあるかしらん。

　トちよつと思案して

ハヽン、解つた。さては早、犬めがかざを嗅いで、掘りをつたと見えるわい。併し、穴はどこぢや。爰らぢやないか。

　ト云ひながら、踏み込まうとして

ドツコイシヨ。爰ぢやさうな。

　ト手を入れ、道樂の手を取り

さてこそ爰に座します……サア〳〵、嫁御さまには、いざ先づこれへ。

　ト引上げる。道樂、グンニヤリして居る。

アヽ、定めて美しい事であらうな。これがマア、死んで居りやこそ、自由にもなるといふもの。生きてゐたりや、滅多に側へも寄せる事はない。

　トいろ〳〵こなしあつて

ハヽア、有り難い〳〵。誠にこれで本得心の形ぢや。

　ト又いろ〳〵こなしあつて、思はず頭を撫でゝ見て悑り。

ヤア、こりやどうぢや。髮も其まゝと聞いたが、さてはお寺で剃つたと見える。惜しい事したなア……イヤ、大事ない。例へ髮がなうても。

　ト引こかす。この時、道樂、心附いて

道樂　人殺しぢや。

　ト大きな聲で云ふ。傳兵衞、悑りして逃げるを引ッ捕へ立廻り、よき程に道樂、穴へはまる。傳兵衞、逃げようとするを、穴の中より足を持ち引摺り込む。傳兵衞、振り切り、上がらうとするを、下より足を捕へて引込む。この模樣よろしく、をかしみにて、チヨンチヨン、　返し

造り物、元の裏借家へ戻る。與三兵衞、萬年艸を茶碗に請け、キッと見て居る。少し早めた合ひ方、本釣り鐘にて道具納まる。

與三　人の生死を試すは、高野の萬年草を水に漬け見れば過ちある時は自づと沈むと聞き及ぶ。今この萬年草の萎みもやらず、生き／＼とこの有樣は。フム

トきつと見込み、こなし。

さては悴が一命、今に無難と覺ゆる。常からの短氣といひ、歸りの遲さ。もしもの事があつた時には、この與三兵衞が未來永々、御主人へ申し譯なし。疾にも斯うと知るならば、お身の上を打明けんもの。何を云うても殿左衞門さまの御代を讓らせまいと、深くも素性押隱し、我が子となしたるこの身の過り。先づ事なきうち、この樣子を物語り。オヽ、ソレ。

ト行かうとしても行かれぬこなしにて

エヽコレ、行くにも行かれぬこの業病。躄となりしは武運の盡か。チエヽ、口惜しい。

ト無念泣きに泣き落す。バタ／＼にて向うより三吉、ツカ／＼と走り出て、直ぐに内へ入らうとして、與三兵衞見て

ヤア、悴か。

ト飛びつくやうに云ふ。三吉、ベッタリと下に居て吐息つき

三吉　親仁さま。

與三　オヽ、こりや

トにじり寄り

ようマア戻つてくれたなう。

ト心嬉しきこなし。

三吉　ハイ、歸りました。

トこなしありて

御教訓の一言を、守つて歸りましたが、ちとあなたにお尋ね申したい事がござります。

與三　アノ、身共に尋ねたい事とは。

三吉　イヤ、外でもござりませぬが、元となたさまは、由留木の御家來でござりませうかな。

トぎつくりのこなし。また氣を替へて

與三　して、某が由留木家の家來なれば。

三吉　命に替へて持ち歸りし、土產の一品。

ト腰に卷いたる首を出して

イザ、お受取り下さりませう。
ト與三兵衛、キッと見て
與三　フム。この首を土産とは。
三吉　陀羅尼を合圖に、約束の姫が首。
與三　ヤ。
三吉　なんと、お身替りになりませうがな。
與三　天晴れ、出かした。
トじやん〳〵と九ッ打つ。
三吉　ヤア、ありやモウ陀羅尼。
與三　約束の刻限。
トきつとこなし。橋がゝりより曾平太、家來出て
曾平　最早約束の刻限。姫が首、受取らうか。
三吉　ハッ。イザ、お受取り下さりませう。
ト首を出す。曾平太取つて
曾平　オヽ、でかした。この上は、隱まひし科は差赦すぞ。
兩人　エヽ、有り難うござります。
曾平　家來、供せい。
家來　ハッ。
ト唄になり、橋がゝりへ入る。お初、納戸より出かけ出て、この時
はつ　聞いた〳〵。杯しても心の願ひ、叶はぬ腹癒せ。光姫と云ふは身替りの似せ首と、注進する。待つて居や。
ト向うへ駈け出すを
與三　姫君、待つた。
はつ　ヤ、なんと。
與三　干糠のお初とは假の名。誠は福島の息女光姫君。
三初　ヤア。
與三　マア〳〵、これへ。
はつ　自らを光姫と云ふ事は
與三　疾より存じて、この計らひ。
三吉　すりや、親人が請合はしやつた、姫君と云ふは。
與三　隱まはぬ姫君を、隱まひし體にもてなせしも、姫君のお身に凶事なきやうと、拙者が計らひ。
三吉　天晴れ流石の親人さま、この三吉が千切屋の、娘お梅に心をかけしも、初めより姫君さまの、お身替りにせんが爲。
與三　すりや、疾よりお身替りと存ぜしとな。
はつ　して、その仔細は。
三吉　サア、仔細と云ふも長き事。お二人とも、とくとお

聞き下さりませう。

ト篠入りの合ひ方になり、此うち義兵衛、上手切り戸口より出かけ、聞いて居る。橋がゝりより金藏出かけ、これも窺うて居る。

當春商賣用にて、丹波の小野原へ、煙草の葉の買出しの戻り道、助太郎館の野原にて、夢ともなく現ともなく、我れはこれ春日の神使なり、當國の領主由留木家沒落いたすと雖も、其方は至つて深き身寄りの者ゆゑ、この二品を相渡す程に、狀の名宛の人に屆け、由留木の家名再興せよと、云ふかと思へば其まゝ姿は消え失せて、手に殘りしは般若の面と、コレこの狀。

ト懷より一通を取出し見せ

それから內へ歸りても、あなたに隱してこの宛名。伊達與三兵衛と云ふお人、尋ねた程に／＼、詮方盡きて、拋つて置かうと思うたものゝ、イヤ／＼／＼、折角賴まれたもの、打捨て置くも本意ならずと、思ふにつけて、この狀を開いて見れば、弟御左馬治郎さまの後日の合ひ紋慥かな證據は。

與三　瑪瑙の月形、香箱が添へあるべしと、詳しい印であらうがや。

三吉　ハテ、親人さまには、よく御存じでござりますなア。それを證據に、やう／＼と、巡り逢うたる左馬治郎さま

與三　ナニ、若殿左馬治郎さまに巡り逢ひしとな。

三吉　サア、今日の今まで、親人さま、あなたに隱して御介抱、何を云うても大名のお胤、心に任せぬ無理ばつかり。

はつ　ほんに、憎らしい最前の體裁。

ト與三兵衛、思ひ入れありて

與三　すりや、若殿と名乘り、こなたに艱難させし者があるとな。チエ、、殘念な。

ト三吉、合點のゆかぬこなしにて

三吉　ヤア、なんと云はしやる。

與三　サア、その若殿は、眞赤な似せ者。

三吉　でも、現在證據の香箱が

與三　サア、その香箱を粗末になせしは、伊達與三兵衛が一生の誤まり。

兩人　して、その與三兵衛と云ふは。

與三　オ、サ、卽ち爰に。

ト手早く刀を腹へ突ッ込む。これにて兩人、恟り。與

三兵衛に取りつき、義兵衛金藏も駈け寄る。

三初　ヤア、こりや何ゆゑの
皆々　御生害でござりますな。
はつ　コレ、氣を慥かに持つて下さんせ。
三吉　申し、親人さま。
與三　ヤア、親人とは勿體ない。あなたは現在、この身の御主人。
皆々　エ、。
與三　由留木の御落胤、左馬治郎さまと云ふは、こなたの事でござるわいなう。
三初　エ、、、。
ト大愕り。義兵衛こなしありて
義兵　親仁さま、もう忰と名乘つても、苦しうござりませぬか。
與三　オ、サ、イヤナニ若殿、この與三兵衛が忰と云ふは幼少の砌り町人へ養子に遣はしたる。この與八郎と、國に殘せし與作ばかり。
ト此うち切り戸より見脈おせつ出かけ聞いて居る。
三吉　して、我れを我が子となし、養育さつしやつたその樣子は。

見脈　アイヤ、その樣子は、私しが申し上げませう。
ト前へ出る。
三吉　ヤア、こなたは。
見脈　イヤ、私しもまんざら、由緒かゝりのない者でもござりませぬ。マア、それはさて措き、あなたのお身の上と申しますは、先大殿さまの御妾服。この事兒御左衞門さま、御遺言にお聞き遊ばせしより、何卒あなたへ御代を讓らんと、卽ちこれなる與三兵衞どのへ、左衞門さまより密かの御諚あり、家を尋ね出せよとお暇賜はり、お國を立退き、あなたのお行くへ。
義兵　それと悟つて親人が、在所知れてもお國へ歸らず、お名を包み、我が子となし、今日まで包み隱せしも、何卒兒君左衞門さまに、御代を繼がし申さん爲。
金藏　それと云はねど、與三兵衞どのゝ忠義の計らひ。
三吉　それに又、この最期は。
與三　サア、勿體なくも我が子となし、養育なすうち、如何なる宿世の業病にや、足腰立たぬこの年月、主人にはごぐみ受くるが悲しさ。鐺つまりし大小の、鍔も外せど貧しい暮らし。宅替へしたるこの借家。現在我が子の借家とは、初めの程は知らざりしに、早くも忰が覺りしや、

それとはなしに貢がん心。他家へ遣つたる我が悴、貢ぎ受けては義理立たずと、力んで見ても、才覺にも、叶はぬものは世の貧福。據なく御主人の、筐の香箱、番頭の傳兵衞に、質物に差入れしが、御身の難儀、それとは夢にも知らずして、大殿若殿過ぎ去り給へば、何卒御代を繼がせんものと、書狀を認め、進めても、親の側をば放れぬ孝心、それゆゑ辛く當りしは、この與三兵衞が心に一物。さぞやお腹が立つたでござりませう。老いての思案の矯めすごし、忠義却つて不忠となつたる誤まり、未來へ參つて大殿へ、申し譯仕らん。これまでの不忠、傾平御免なされて下さりませ。

三吉　ア丶、その云ひ譯は何事ぞ。人となつたるこの三吉、これと云ふもこなたの庇。今さら大名になつたとて、親に別れて何樂しみ。矢ッ張り職人煙草切り、一升買ひの飯焚きで、親子暮らすが百倍樂しみ。必らず死んで下さるな。矢ッ張り親ぢや〳〵。親仁さま、どうぞ長生きして下さりませ。

義兵　ア丶、冥加ないそのお詞。元この義兵衞めは幼少にて、山形屋へ養子に參り、親人のお顏は存せねども、伊達の與三兵衞の悴と云ふ事、育てられたる乳母が話し。然るにいつぞやこの借家へ、ござつたその後、家賃の包んだ反古、伊達與三兵衞とありしゆゑ、もしやと思ひ、ソッと參つて何かの物語りの上、貢ぎなさんと申し上げても、御承引なき武家の堅氣。現在盜みの我が親に、貧苦をさせて、この身には、榮耀榮華も勿體なく、電やせん角やと思ふうち、後の月、安井前の下屋敷で、雪の下駄から思はぬ間違ひ、三吉さまとの一言が、合點ゆかぬと思ひしゆゑ、腰元どもを退けて、詳しう聞けば、憶れた男はこなた樣、どうぞ添はしてくれいと賴み。さてこそ親人さまの御主人、忠義の端と思ふゆゑ、嫁と披露し我が家へ呼び入れ、女夫になさんと心の工風。人目に謹ましう見せましたれど、モシ、これから先、怪我な事、指もさした事はこざりませぬぞえ。あなたに添はしますまでは、心の內のお主あしらひ。やう〳〵思ひ附いたる一思案、死んだと云うて假の葬ひ。また最前の打擲も、家內の者に覺られまいの爲ばつかり。

見脈　松原の辻で斯う〳〵と、この事こなた樣へ知らしてくれいと、義兵衞さまのお賴み。

はつ　それ程樣子を知りながら、いとしほさうに押退けて、わたしと祝言しやしやんしたは。

與三　サア、それこそ姫君と見定めしゆゑ、この與三兵衞が頼みしも、お家の家來の見脈どの。
金藏　我れ〳〵とても、斯く姿を變へ、都に足を止むるも、
せつ　若殿樣や姫君樣の、お行くへを尋ねん爲。
義兵　すつくりやつた今夜の葬禮。今頃はめでたう祝言と、思ひの外に敢へない最期も約束事。
見脈　こんな事とは露知らず、最前棺桶へ入れられた時、これから三吉さまと添ふのぢやと、いそ〳〵喜んで居られたもの。
せつ　ほんに果敢ないこの有樣。
三吉　そんなら假の葬禮が
はつ　ほんまの葬ひで
皆々　あつたかいなア。
　ト三吉、堪えかね
三吉　さうとは知らず、可哀やなア。詮議嚴しい姫君のお身の上、何卒身替り立てんものと、思ひ附いたる戀慕をば、誠の戀と思ひ詰め、さま〴〵の心盡し、忝ないぞよ。嬉しいぞよ。それに引替へ胴慾にも、最前鳥邊野の墓原で、思ひがけなう生きて居て、云ひ譯せんと云ふうちに、早突き出す陀羅尼の鐘、有無をも云はさず只一討ち……さぞや酷いつれない者と、怨んで居るであらう。魂ひ宙宇にあるならば、赦してくれ、堪えてたも。思へば〳〵、不便やなア。
　トこなしありて、お初も泣き、思ひ入れありて
はつ　これと云ふも、元の起りは自らゆゑ、さぞやあの世から憎う思うてござんせうなア。知らぬ事とは云ひながら、敢へない別れも因果ぞと、思ひ諦らめ、料簡して、どうぞ免して下さんせいなア。
　ト愁ひのこなし。
義兵　ア、今さら云うても返らぬ繰り言。何を云ふのも皆約束。現在側にありながら、親子は却つて他人向き。
與三　親と云ひしは家來にて
三吉　家來と思ひし、この身は主人。
金藏　思はぬ女が姫君樣、
見脈　仲人醫者もお家の家來、
はつ　嫁御は我れゆゑ未來の門出。
義兵　變るが浮世の。
　ト皆々手を取り交し
皆々　有樣ぢやよなア。
　トこなし。ジヤン〳〵と八ツ打つ。八平次傳兵衞出て

来て
八平　三吉、約束の百兩と、彼の面、調うたか。
ト三吉見て
三吉　百兩どころか、うぬを待つて居たのぢやわい。
ト見事に投げる。
八平　ヤア、こりや、うぬ、現在のお主樣を。
ト立ちかゝるを、
義兵　ハテ、モウ、何もかも顯はれたわやい。
トよろしく隔てる。
傳兵　ナニ、顯はれたとはな。
はつ　由留木の家老、官太夫が弟の八平次。
與三　すりや、主人と云ひしは、八平次とな。
八平　さう聞きや、うぬを、
ト切つてかゝるを、立廻つて刀もぎ取り。
三吉　憎さも憎し、主人の天罰。思ひ知つたか。
ト抉る。八平次苦しみ、懐より香箱を落す。金藏、手早く取上げ見て、
金藏　ヤア、こりやコレ、瑪瑙の香箱。
ト此うち傳兵衛を突き廻して
金藏　うぬも主人に仇なす片割れ。
傳兵　なにを。
ト振り切りかゝる。ちよつと立廻りのうち、義兵衛、傳兵衛の懐より金を出す。
南無三、それを、
ト行かうとするを、金藏、よろしく留めるうち
義兵　最前お約束申せし、面と金子百兩。
ト二品を差出す。
はつ　ヤア、こりやコレ、尋ね求めし般若の面。
見原　香箱までも揃ひし上は。
金藏　御祝言も調うたれば。
義兵　それを路用に、一先づ立退き。
皆々　時節を待つて
三吉　家を立てるも、せめての追福。
與三　チエ、、忝ない。
ト苦しむ。皆々見て
皆々　ア、コレ、今が
トこなし。切り戸より傳九郎、丈助、窺ひ出て
三人　うぬを。
ト丈助は三吉、傳九郎は義兵衛、傳兵衛は金藏にかゝるを、よろしく突き廻して、

義兵　一世の別れに。
はつ　二世の固め。
三吉　三世の緣で
トポン／＼と三人を一時に切る。與三兵衞、ガツクリ落入る。
あつたよなア、
ト皆々思ひ入れ。この見得よろしく、

幕

傾城三拍子（終り）

色のいろはの
　書初めに
お七吉三が
馴染の松竹梅

其往昔戀江戸染

四幕

文化六年三月森田座所演繪番附

其往昔戀江戸染——八百屋お七

序幕　吉祥寺の場

役名——小姓、吉三郎。赤澤十内。同弟、十作。大澤團右衞門。釜屋武兵衞。紅屋長兵衞。吉祥寺日和上人。八百屋娘お七。お七の母おたけ。下女お杉。お七の友達娘、おしか。同、おかつ。同、おさん。

本舞臺、眞中に曼陀羅をかけ、須彌壇三つ、具足大きく花を立て、欄間九尺づゝ振り分け、天人の彫り物あり。東の方を拔差しのなるやうに天人好みあり西の方障子屋體、すべて吉祥寺本堂の體。日和上人緋の衣、頭巾にて、同宿四人、皆々經を讀んでゐる題目太鼓、拍子木の音にて幕開く。

ト花道より同宿壹人出て來て

同宿　申し〳〵、和尚樣、どなたやら、お侍ひ樣か、直々お前に逢はうと仰しやりまする。

住職　ハテ、それは心許ない。旦那衆ではないか。

同宿　イヽエ、ついに見馴れぬお侍ひでござりまするが、いつもわせる釜屋の、武兵衞どのが、附いて參られました。

住職　なんぢや、釜屋の武兵衞が附いてわせた。それならばこの中、庫裡や客殿の屋根が漏つて、氣の毒なと話しをしたに依つて、その勸化にでも、附いてやらうといふやうな、人でも來たかな。道理で、昨夕は、燈明に丁字頭が立つたが、大方そんな吉相であらう。マア〳〵、此方へお通りなされませと云へ〳〵。

同宿　畏まりました。

ト一散に花道へ入る。

住職　サア〳〵、そこらを掃除せい。もうお經はいらぬ。勸化につく生佛か。有り難い〳〵。

ト向う揚げ幕にて

武兵　サア〳〵、斯うお出でなされませ。

ト花道より、團右衞門、羽織股引、旅の形にて、侍ひを連れ出て來る。後より、武兵衞、町人の形にて附い

て來り

住職　イヤア、武兵衞どのか。

武兵　和尚樣、この間はお目にかゝりませぬ。

住職　仰しやる通り逢ひませぬ。して、お客があるなか。

武兵　成る程。お客はあなたでござりまする。ヘイ、これが當寺のお上人でござりまする。

住職　ナニ武兵衞どの、あちらが生佛さまかな。

武兵　これサ、何を仰しやりまする。

住職　イヤ、ほんにそれよ。ツイ斯う云うては、御合點が參りますまい。先づ〳〵これへ、お通りなされませ。

武兵　先づ〳〵、あれへ、お通りなされませ。

圓右　ナニサマ、左やう致さうか。

ト圓右衞門、上座へ通る。

住職　ヤレ〳〵、ようこそお詣りなされました。お茶を上げませい。

圓右　イヤ〳〵、あんまりお世話をなさるな。

住職　イエ〳〵、愚僧が此やうに、世話を燒きまするも、持病でござる。ナニ武兵衞どの、こなた樣はア、信者でござるわえ。この中、ちよつとお話し申した、お世話の筋でお詣りでござらうの。

武兵　ハテ、お世話とは、なんの事でござりまするな。

住職　ハテ、この人は、恍けさつしやるな。ほんに氣の毒な。

武兵　イヤマア、あんまり氣の毒がらしやるな。わしや覺えはござらぬ。

住職　ハテ、あなたが今日のお出は、あの庫裡客殿の屋根の勸化で。

武兵　誰れがいの。

住職　イヤ、さのみ、大層な費用でもござりませぬ。尤もどいぶき瓦の下地ぢやによつて、足は長くてもよいぢや。

武兵　イヤサ、コレ、何を云はつしやるぞいの。

住職　去年の雪で、グツと痛みました。こりや御大儀ながら、なされば後生前生の。

武兵　ア、かしましい。あなたのお出は、ちと詮議者があつて、お出でなされた。そんな事ぢやござらぬわいなう。

住職　なんぢや、詮議者があつてござつた。

武兵　粗相云ふまいぞ。

住職　勸化ぢやござらぬか。

武兵　ハテ、詮議者があるといふに。
住職　それぢやに依つて、今時の丁子頭と、後家には油斷がならぬ。
同宿　何を仰しやります。
武兵　これサ、疎忽を云ふまいぞ。あなたは三河守範頼公の御家來、大澤團右衞門さまといふお方だ。滅多な事を云ふまい。
住職　さては範頼さまの御家來にてござりまするか。ハ、ア、不調法なる御挨拶、眞平御免下さりませい。
團右　イヤ〳〵、出家の儀なれば、さして咎めるところもない。住職にちと聞き合はせる事があつて參つた。何事も、包まずお云やれサ。
住職　ハ、ア、それは心得ましてござりまする。して、何でござりまするな。
團右　さのみ氣遣はしい事でもござらぬ。コレ、この天人の彫り物は、曾我の後家滿江の建立召されたと聞いたが左やうか。
住職　仰せの通り、この彫り物は、曾我の人々討死召されたる、その追善の爲に、後家御の建立でござりまする。
團右　成る程、左樣承つた。時に、我が主人範頼公、ちと仔細あつて、この寺の天女の顏貌に似たる女があるならば、金子は何程なりとも遣はさうと仰せあつて、諸々方々と詮議すれども、さて〳〵似た女もないものぢや。ところへ、これなる武兵衞、身が屋敷へ出入りにつき、聞けば貴僧の檀家の内で、町人の娘に、よう似た女があるとの事。いよ〳〵左やうかな。
住職　これは珍らしい儀を承はりました。其やうな事は一向心附きませぬぞ。
武兵　イヤ〳〵、これサ、さう云はつしやるな。コリヤ、こなたがいつち知らねばならぬ事だ。こなたの檀家のうちにござるわいの。
住職　なんぼ、さう云はつしやれても、此方に思ひ當る事はござらぬ。
武兵　そんなら、云ひますべい。本郷五丁目の八百屋久兵衞が娘お七、あれは天人の顏に生寫しでござるわいの。
住職　ハテナウ、イヤモウ、似たやら似ぬやら、拙僧檀家で心安うござれども、お七が顏を、しげ〳〵と見た事がないに依つて、そんな事、ねつから氣が附きませぬわい。
武兵　又そんな事は云はつしやるか。

團右　イヤ〳〵武兵衞、そりやさういふ事があるまいものでもない。出家の事なれば氣の付かぬ事もあらう。さて住職、そのお七といふ娘、これなる武兵衞が主人に申し上げて、奉公に出す筈。この方より久兵衞が後家の許へ、度々使を遣はしたれども、承引せぬゆゑ、今日拙者が參つたれば、お七は宿に居らず、聞けば、この寺へ來てゐるといふ事。依つて武兵衞が案內で參つた。サア、お七が居るならば出し召されい。お七を見ようばつかりに參つた。住職、サア〳〵、お七を出さつしやい、出さつしやい。

住職　成る程、心得ましてござりまする。寺で女を隱しませうやうがござりませぬ、居りさへ致しますれば、お前へ出しませう、が、今日は居りませぬ。

武兵　イヤコレ、噓を云はつしやるな。

住職　何しに出家が僞はりを申しませうぞ。お七儀はこの間、ちと氣色が惡うて、この寺へ參つて養生いたして居りました。御存じかも知れませぬが、拙僧めは、一家の事なれば心安うして、一兩日、逗留いたして居りましたが、昨日連れが參りまして、鎌倉へ參りました。ハテ、噓でない證據は、寺中を探してなりと、御覽じませ。先づ爰には居りませぬ。左やうに思召して下さりませ。

武兵　そりやアこなさん、爲になるまいぞえ。

團右　イヤ〳〵、コレ武兵衞、成る程和尚の云やる通り、居る事なれば寺を探して見れば知れる事ぢやが、噓もあるまい。して、それはいつ歸らう。

住職　されば、その程は知れませぬ。

團右　それも知れぬか。ようござる。然らば、いつまでもお七がこの寺へ歸るまで、待ち合はしませう。面倒にあらうが、我れ〳〵主從を爰に泊めてもらはずばなるまい。さう心得ておくりやれ。

住職　それはハヤ、何とも。

武兵　どうでごんす。否になまりせぬか。

住職　否と申す事も、ござりませぬが、どうも御不自由でござれば、御逗留なされては、ナア、弟子ども。

團右　イヤ、そりや苦しうござらぬ。主命なれば大事ない先づ落ちつきませう。許し召され。

住職　どうとも、お好きになされませ。

ト住職、不承々々にいふ。同宿は住職と目くばせして齒を立てる。

團右　彼の曾我の後家の建立めされたは、この天人ぢや

な。

住職　左やうさうにござりまする。

團右　イカサマ、この天人に似たお七ならば、大抵の娘ぢやあるまい。ア、、見たい〳〵。

住職　不調法な細工人でござりまする。ツイどうでも遣りツ放しに、彫つて置けばよいに、お七に似たやうに、なぜ又作つやら。

トこの時、花道より侍ひ一人走り出て來り

侍ひ　團右衛門さま、これにお出でなされまするか〳〵。

團右　コリヤ、角平ではないか。

角平　モシ〳〵、團右衛門さま、小田原から使者があつて、事の變もありさうなと申して參りました。お前様にも一先づお歸りなされ。拙者めは方々申し達しに參れば、早お暇申し上げまする。

ト云ひ捨てゝ入る。

團右　サア〳〵、もう長居はならぬわえ。家來ども、供をせい〳〵。

住職　モシ〳〵、もうお歸りなされまするか。

團右　其うち〳〵。

ト團右衛門は侍ひを連れて、逸散に花道へ入る。

武兵　南無三寶。こりや心元ないわえ。

ト駈け出す。住職止めて

住職　ア、、コレ〳〵、武兵衛どの。

武兵　なんだ〳〵。

住職　ほんの、湯漬でも參らぬか。

武兵　おきやアがれ。

ト駈けて入る。

住職　ヤレ〳〵、なんと弟子ども、彼奴らが食ひ潰してゐるのかと思つたら、急用が出來て歸つたに依つて、よい事はよいが、あの急用もいつやらのやうな、えい〳〵わアいぢやないかな。

同宿　どうやら、それらしいものでござりまする。

住職　どうぞ、お七の內へ、今日の樣子を知らせてやりたいものぢや。

同宿　私しがちよつと、知らせて參りませう。

住職　そんなら大儀。早う〳〵。

同宿　心得ました。

ト同宿一人、花道へ入る。

住職　何ぢやゝら、心忙しいやうなつたわえ。

ト住職、同宿、殘らず下手へ入る。唄になり、向うよ

り、お七の朋輩おしか、おかつ、おさん、娘の形にて出て來て

しか　おさんさんとした事が、お前のやうな遲い足があらうかいなう。

かつ　サア、もう爰が吉祥寺さんぢやわいなア。

さん　ほんにマア、爰が吉祥寺でござりまするかえ。でも早う參りましたなア。

しか　サイナア、お七さんが、この頃氣色が惡いというてこのお寺へ來てござんすと聞いたに依つて、お前方を誘うて、見舞に來たのぢやわいなア。

かつ　ほんにマア、あのお七さんの病は、どうした病やら、氣の毒な事でござんすなア。

さん　それで阿母さんも、いから苦勞になされてぢやわいなア。

しか　あれ見さんせ。さういふうちに、お七さんの阿母さんが

三人　見えるわいなア。

ト唄になり、向うより紅屋長兵衞、紅粉の荷物を脊負つて先に立ち、お七の母おたけ、好みの拵らへにて、供の者大勢附いて出て來る。

長兵　京紅粉や、寒の紅。

ト賣りながら、やつて來る。

しげ　これは、お七さんの阿母さん、お參りなされましたか。

たけ　これは〳〵、近所の姐樣たち、なんとして、爰へはござんしたぞ。

たつ　お七さんのお見舞に

三人　來やんしたわいなア。

たけ　朋輩といふものは有り難いもの。聞かしやんせ、このお七の見舞に來たといなう。

長兵　それは、ほんに氣の毒な事でごんす。そんなら、お七さんへの土產に、この紅粉を買はつしやれ。

たけ　コレイナウ、長兵衞どの、嗜ましやんせ。わしがお七の所へ土產は買ひまする。マア、其やうに云はずと、ようござつたと挨拶でもさつしやれいの。

長兵　ハテ、けうな事を、やつかまつしやるワ。お前方が靑物を押しつけて、賣りたがらしやるも商賣、わしが摑み附いて賣りたがるも商賣。ハテ、この寺で人を殺したがるも商賣でござるわい。

たけ　これはしたり、坊さん達が聞きまするわいの。

長兵　聞いてもようごんす。あつちの損の行かぬ噂だによつて。

たけ　まだいなう、ほんに商人といふものは、ヅカ〳〵と口をきゝたがる事ぢやぞ。

長兵　これは阿母、人聞きのよい。こなさんは錢儲けする事は、否でごんすか。

たけ　イヤ、そりや世帶持つて、稼ぐ者の儲ける事。否がるものはなけれども、こなさんのやうに儲けたがるものは、又とあるまいわいの。姐さん達聞いて下さんせ。爰へ來る道で、ぬしに逢ひましたによつて、幸ひお七とは仲好し、ちと氣を慰めてもらはうと思うて、道から誘うて來たに、矢張り道々、京紅寒紅ぢやわいの。ほんに今日一日商ひせぬとて、乞食にもならつしやるまい。ちつと嗜まつしやれい。

長兵　これサ、何を云はつしやる。いつそ乞食になれば、この苦しみはごんせぬわいの。人間並に門を列べてゐるに依つて、近所の出しつこ、番錢、節句錢、乞食になれば、この苦しみはござらぬわいの。

たけ　ほんに、それならば、矢張り坊さんでござればよいに。なぜに還俗さつしやれたぞいの。

長兵　わしが坊主を落ちたのも、みんなこの鼻が落しました。

たけ　なぜ、鼻が落しました。

長兵　鰯でも鯒でも、兎角煩惱の元は、この鼻に兆し、別して蒲燒のさんしよ醬油めが、こりや又、鼻ばかりぢやない、無性に何やらが嵩ぶつて來て、ツイ門前の娘を孕ましたが因果の塊り、餅がおこし米をせり合ふやうに喰べ居る。ところが五人口、これが油斷して、どうして喰はれるのぢやと思し召すぞ。

たけ　それはほんに、餘程大儀な事ぢやわいなア。それについて、いつぞは、こなたに、聞かう〳〵と思うて居たが、こなたの名を人が、べんちやう〳〵と云ふが、ありやこなたの俳名か、味な名でござるの。

長兵　何をしをらしい。俳諧して居るやうな世界が、どうしてあるものぞ。あれは、こなたの娘が附けたのぢや。

たけ　ナニ、お七が附けたとは。

長兵　ハテ、おれが名は、紅粉屋の長兵衛が長いから、べにちやう〳〵と呼ばれる。それから、どこともなう、爰でもかしこでも、べんちやう〳〵と云ひまする。

たけ　坊さんのやうな名を附けてゐると思うたが、それで

讀めましたわいの。
長兵　イヤ、元が坊主落ぢやに依つて、紅長といふも無理ではごんせぬ。時におらが名づけ親は、何してぢや。
たけ　さればいの、兎角あれが足は遲うて、埒が明くものではないわいなう。
しか　アレ〳〵。さう仰しやるうちに、向うへお七さんが
皆々　ござんしたぞえ。
ト出の唄になり、花道よりお七、振り袖衣裳娘の形、後よりお杉、下女の形にて附き、これに若い衆ついて出て來る。
かつ　お七さん、ござんしたか。この頃はお遠々しうござんす。
しか　あんまり久しう見えなさんせぬゆゑ、昨日和尚さんで聞いたれば、氣色が惡うて、このお寺に來てござんすとの事。
かつ　それゆゑ、お前の見舞に來ようと云うて、皆さんが案じてぢやゆゑ、おさんさんやおしかさんを誘うて來たわいなア。
さん　そしてモウ、ちつとは心ようござんすかいなア。
お七　サイナア、ほんによう深切に尋ねて下さんした。今日は大きによいやうぢやゆゑ、母さんと一緒に、觀音へ參つたわいなア。
たけ　オヽ、お七、おぢやつたか。ほんに遲い足ではあるわいの。
お七　母さん、遲かつたかえ。隨分お前に追ひつかうと思うたけれど、早う歩けば息が切れて、風で着物が此やうに〳〵。
ト裾の開くこなしあつて
どうも歩かれるものぢやないわいなア。
長兵　ムウ、どうも斯うも、いとしうてならぬわいなア。
お七　何云はしやんすやら。紅長さん、又かけるのかいなア。
たけ　ありやマア、なんの事ぢや、紅長さん、又かけるのかとは、こなさん、何をかけさつしやるぞ。
長兵　これはならぬ。ほんに野暮にやア困つたものだ。
たけ　でも、かけるものが、合點がゆかぬわいの。
長兵　イヤサ、あれは何でごんす。わしが鷹場に掛け商ひをするに依つて、どこぞでは掛け倒れにならうと、おらが親分のお叱り。コレ、親方、必らず掛けるのぢやアご

岩井粂三郎のお七（天保四年一月河原崎座所演）

んせぬ。現金にいとしいのでごんす。
たけ　ハテ、其方衆は、をかしい事を云はつしやるの。現金の掛けぢやのと、いとしがる賣買ひのあるものかや。
すぎ　これはならぬ。申し、お前様もお嗜なみなされませ
ほんにモウ、をかしうて〳〵、オホヽヽヽ。
ト笑ふ。皆々クツ〳〵笑ふ。
お七　あれ見さんせ。すぎがお前を滅多に笑ふぞえ。
たけ　サレバイノ、憎い奴ぢや。なぜ其やうに笑ふのぢや。
すぎ　イヤモウ、あなたがあんまり野暮ぢやに依つて、それがをかしうござりますわいなア。
たけ　その野暮とは、骨牌のなゝぼうやぼの事かや。
すぎ　あれ見さんせ。あの通りぢやわいな。皆さん、お聞きなさんしたかえ。イヤモウ、をかしうて〳〵。
ト轉げて笑ふ。皆々も笑つて居る。
長兵　アヽコレ〳〵、笑ふまい〳〵。おすぎもあんまり笑ふな。阿母が野暮ぢや〳〵と笑うたら、結句われが野暮であらうぞ。
すぎ　そんならあなたは野暮ではなうて、粋様でござんすかえ。

長兵　なんだ粋だ。オヽ、粋とも〳〵、品川から板橋まで通り拔けてある通り者よ。
すぎ　オホヽヽヽ。
たけ　コレ〳〵、其方衆は通り町ぢやの、横丁ぢやのと、そりやマア、何の事ぢやぞいの。
長兵　コレ阿母、其やうに恍けさつしやりますな。雀は百になつても踊りを忘れぬとやら。今こそあんな娘を持つて、かうとうな顏してござるが、その古へはお前も、きつい色事師であつたと云ふ噂でごんす。
たけ　ナニ、途方もない。わしがどうしてそんな事を。
お七　そんなら母さん、お前も若い時は、色事をさんしたのかいな。
すぎ　コレ申し。
ト皆々と顏見合せ、笑ふ。
たけ　ほんに、この子とした事が、幾つになつてもわつけない。親を捉へて、イヤモウ、物が云はれぬわいの。そんな事人中で云はぬものぢやぞ。ほんに呆れた子ではあるぞいの。シタガ、これも紅長どのが、とんだ事云はしやるから、起つた事ぢやわいの。
長兵　ハテ、其やうに云はぬものサ。若いうちは有うちの

事でごんす。
すぎ　そんなら阿母様も、丁度今のお七さまのやうに、振り袖召した事もござりませうな。
お七　ほんに、母さんの振り袖の時もあつたらうわいの。
たけ　ハテ、母が振り袖の時もなうて、どうせうぞいの。
　　トお七、思ひ入れあつて
お七　それはさうと、モシ、母さん、わたしやお前に云ひたい事がござんすが、いつそ云うてのけうか。あのな、あのな。
たけ　なんでござるぞいの。
お七　あのな、吉祥寺にござんす吉三さんは、可愛らしいお若衆さんぢやに依つて、どうぞ……わたしと女夫にして下さんせいな。
長兵　ヤア／＼、大きな事をまけ出したな。併し、こりやア無理もないわえ。
たけ　イヤコレ、紅長どの、つがもない。
　　トあたりを見廻し
畢竟、誰れも外に聞かねばこそよけれ、如何に頑是がないと云うて、ほんに、そんな大それた事云ふ事があるものかいの。おすぎもおすぎぢや。側に附いて居て、あんな事云はせる事はないわいの。ほんに／＼其方はマア、呆れ果てた事云やる。正真の娘の子と小袋には油断がならぬと、いつの間に其やうな事覚えたやら。コレ、あの吉三さまはナ、わしが姉、其方の爲には叔母様のお主、十郎祐成さまの忘れ形見。わしや其方のためには、矢ツ張りお主様ぢやわいの。殊に追ツつけ御出家遊ばすものを、どう殿御に持たるゝものぢや。つがもない。重ねてそんな小癪な事云やんなや。
　　トお七、しやくり上げて泣く。
すぎ　これはしたり、又おむづかるか。それぢや又、お氣合ひが惡うなりますぞえ。
たけ　なんぢや。今ので泣きやるか。
長兵　イヤ、コレサ／＼、ハテ、お前の今云はしつたは、ありやア嘘でごんせうな。
たけ　イヤ、わしや何も嘘はつきませぬ。
長兵　ハテ、コレサ、マア／＼、アレ。
　　トお七に思ひ入れにして
ナ、嘘でござりませう。サア、嘘でごんせうがな。ほんぢやと思ふとな、いつでも氣合ひが惡うなる。ナソレ、嘘でごんせうな。

トいろ／＼思ひ入れして、呑み込ませる。おたけ、やう／＼頷き

たけ　オヽ、さうぢや／＼。イヤ、こりや嘘ぢやわいの。

長兵　ムウ、成る程、嘘でありさうなもの。

たけ　今のは嘘ぢやに依つて、どうぞ望みの殿御が持ちたくば、早う達者になつたがよいぞや。

長兵　さうだ／＼。達者でなければ、先づ子が作られませぬぞ。

たけ　それ／＼、望みの殿御持たせて、わしも初孫を抱きませうわいの。

トお七、ニツコリとして

お七　母さん、そりやほんにかえ。

たけ　なんの嘘つかうぞ。可愛い其方の云やる事ぢやもの。

お七　さうすりや、わたしも嬉しいわいな。

たけ　サア、嬉しか早く達者になりや。

お七　サイナア、それさへ叶へて下さんすりや、わたしや直に達者になるわいなア。

たけ　オヽ、叶へいでわいの。ドレ／＼、目に一杯涙持つて居やる程に、顔拭いてやりませう。こちら向きや／＼

トお七が顔を拭うてやる。

長兵　エヽ、畜類め、阿母に可愛がられて、嬉しからうなちと笑ひ給へ。

お七　なんぢやいな。をかしうもない事を、笑はるゝものかいな。

長兵　でも、ちつと笑ひなせえ。

お七　否ぢやわいな。

長兵　否でも斯うして笑はせるぢや。

トお七をこそぐる。

お七　アレ、悪い事さんすないなア。

長兵　ちつとも笑はせねば男が立たぬよ。

ト無理にこそぐろゆゑ、お七、笑ひ出す。

すぎ　そりやこそお七さんの、笑ひが出たぞえ／＼。

ト皆々笑うて居る。テンツヽになり、花道より十内、着流し、大小にて出て來て

十内　これは／＼、よい所へ來合せた。何れも、いから御機嫌がよいわえ。

すぎ　十内さま、ようお出でなされました。

ト笑ひながら云ふ。皆々も笑うて居るゆゑ、十内、合點のゆかぬ思ひ入れあつて

十内　モシ、伯母御、何かをかしうござりまする。
たけ　オヽ、十内さま、お出でなされましたか。何がをかしいやら、取りとめた事もござんせぬ。娘がお伽に笑ひまするわいの。
お七　十内さん、ようお出でなさんした。
十内　これはお七、どうぢや。この間は氣分はよいか。まだ色合ひが勝れぬやうな。
ト長兵衛を見て
イヤ、紅屋どのも爰にてあつたか。
長兵　左様でござりまする。お七どのも、ずんどよいさうにござりまする。この間はモウ、そろ〳〵と拵らへる段になりました。
十内　何を拵らへるのぢやな、小刀細工でも拵らへますか。
長兵　アイサ、擂粉木が拵らへたいと云うて。
十内　それは似合はぬ事でござる。
長兵　成る程、とんだ物が好きでござりまする。
たけ　何をつがもない。
ト皆々笑つて居る。
十内　イヤ〳〵、さうでない。主のやうな氣の輕い人があるが仕合せ。大きな養生になる事ぢや。コレ、お七、必らずクヨ〳〵思ふまいぞや。其方に遣らうと思うて、よい繪を買うて來た。
ト懐より出して
ちと氣晴らしに芝居へでも行たがよい。わしが連れて行きませう。
お七　イヽエ、わたしや芝居より、ちつと望みがござんす。お前、聞いて下さんすとよいけれど。
ト思ひ入れ。
十内　それは易い事ぢや。何なりとも、云うて見や〳〵。
たけ　コレ、お七、滅多な事を云ふまいぞ。
十内　イヤ、可哀さうに、なんでも云うたがよい。叶へてやらう。
たけ　イヤ〳〵、そりやよして下され。まだ矢ッ張り子供ぢやに依つて、後先の考へがない。殊にこなたは可愛がつて、甘やかさつしやるに依つて、よい事ぢやと思うて、どんな事云はうも知れぬ程に、あんまり思うて下さんなや。イヤ、それはさうと、今日は十郎さまの立日ぢやの。
十内　成る程、左様でござりまする。それゆゑ今日も爰へ

參りました。去る者は日々に疎しと申せども、どうした事やら、御兄弟の御事は、明けても暮れても。
　ト云ひさして泣く　おたけ、ホロリとして
たけ　なんの忘られうぞ。わしも姉御に逢ひに曾我へ行さ祐成さまのいたいけに仰しやつて、彼れこれとお世話なされた面ざしを思ひ出せば、矢ッ張りそこにござるかと一歳に二三度ならで、お目にかゝらぬわしでさへ、此やうにお慕ひ申す御兄弟。ましてこなたは片時も、お側離れぬ御奉公申したお主樣ぢやもの、どうして忘らるゝものぢやぞいの。して、今日はお寺參りにござつたか。
十内　左樣でござりまする。御廟參は毎日のやうに參りまする。今日は別して叶はぬ用事があつて。
たけ　叶はぬ用とは、そりやなんで。
十内　サア、今日は最上吉日なれば、兼ねて知らつしやりまする通り、吉三郎さまのお身の上ぢやに依つて、今日御剃髪させませうと。
七杉　エヽ。
　ト兩人大きに膽を潰す。十内、呆れて
十内　ハテ、仰山な膽の潰しやう。吉三郎さまは御出家させませう爲、當寺へお預かり申したのではござりませぬか。それを今日剃髪さつしやるが、其やうに愕りさつしやる事は、ありそもないもの。
　ト此せりふ云ふうち、お七、長兵衛を突いて泣き出す
　十内、見て思ひ入れ。
長兵　成る程、そりやハヤ、兼ねて覺悟と云ひながら、ほんにマア、結構な事のやうな、惜しい……やうな事でもあり。シタガ、其やうに急でなくとも、大事ありさうもないものぢや。
十内　イヤ／＼、左樣ではござりませぬ。是非々々急に御出家させませねば、鎌倉の聞えも如何。殊に日頃若旦那には、兎角出家をお嫌ひなさるゝ御樣子ゆゑ。
お七　アレ、吉三さんは否ぢやと云はしやんすに、胴慾な事ばつかり。
　トまた泣くを、おすぎ、留めて
すぎ　コレモシ、また氣合ひが惡うなりますぞえ。
お七　イヤ／＼、わしや、そんな事は、否ぢや／＼。
長兵　サア／＼、なんでもおれが呑み込んで居る程に、わしに任せて、機嫌直しに、姐さん達と遊ぶがよい。おれと一緒に、サアござれ。
　ト立ち上がる。

そんなら皆さん。
女皆　サア、ござんせいなア。
　ト唄になり、長兵衛、お七を連れ、おすぎ、おかつ、おしか。おさん、付いて皆々奥へ入る。おたけ、氣の毒なる思ひ入れ。十内、呆れし思ひ入れにて
十内　モシ、伯母御、お七は何をあのやうに腹立てまする。
たけ　コレ、十内どの、親の口から近頃、云ひ憎い事ぢやが、お七めは若旦那に、どうもならぬわいの。
十内　吉三さまに、どうしました。
たけ　サア、あの吉三さまと、女夫にならねばならぬと云うて。
十内　すりやアノお七が。
　ト思ひ入れ。
たけ　サア、この間の病も、みんなそれでござるわいの。斯う云へば伯母が、未練な事云ふとも思はしやらうが、知らしやる通り、女の子とてはあれたつた一人、月よ花よと守り育て、あればつかりを樂しみに、長らへて居る大事の娘。こんな事氣病みにして、もしもの事があるならば、わしやモウ死んでも生きても迷ひの種になるわいの。こればつかりはこの母が、手を合す。あなたが御出家なされぬとて、さして障りもあるまい程に、慈悲ぢや情ぢや。どうぞあなたを還俗させまし、お七と女夫になるやうに。情と云ふは爰の事ぢや。どうぞ其方、取成しはなるまいかの。
　ト泣く。十内、呆れて
十内　コレ、伯母御、こなたは元が侍ひでも、町人の久兵衛が女房になつたゆゑ、心までも其やうにも未練になるものか。あなたは何ぢやと思はつしやる。河津三郎祐安の孫、十郎祐成さまのお嫡男。八百屋風情の聟にして、冥途にござる御兄弟樣が、喜ばつしやらうか、憎まつしやらうか。如何に曾我の人々の落ちぶれたればとて、十郎が忰の態を見よと、後指さゝれても、お七が不便にやア替へられませぬか。エヽ、見下げ果てた根性だなア。
　ト詰めかけて云ふ。おたけ、面目なきこなしにて、このせりふへかけて
たけ　アヽ、もう云うて下さるな。あやまりました。
十内　殊にあなたは。
たけ　サア、尤もぢや〳〵、尤もぢや程に云うて下さるな、血の道が發る。もう云うて下さるないの。

十内　イヤサ、斯く云へばとて、心強い氣で云ふではなけれど。

たけ　ハテサア、聞き分けて居まするわいの。今のは云ひ損なひぢや、手を合せて詫びる程に、赦して下され。アア、これと云ふも、子に迷うたゆゑ。面目ないわいなう。

ト思ひ入れ、涙を隠すこなしにて、立ち上がり、唄になり、しを／＼と奥へ入る。十内、後に殘り、思ひ入れあつて。

十内　ア丶、人界の愛執戀慕と云ふものは、是非もないものぢやなア。分けて親子の愛憐は、聖人もある慣ひ。或ひは我が子の惡しきを善しとし、病に死したる定業も、薬の惡しきゆゑなりと、醫師を恨みて悲嘆の涙に人目を忘るゝ。まして伯母御の一人娘、患らふ程の思ひぢやもの、未練の出るも尤も。とは云ふものゝ、若旦那も親御樣への御孝心、心強うも出家させ申さねばならぬ。イカサマ、地を走る獸

ト地へ取り、空を駈ける翅まで、ト太皷謠になり、十内、思ひ入れあつて立ち上がりチツと、こなしあつて、奥へ入らうとする。ト花道より吉三郎、若衆形、羽織袴、振り袖、大小の形にて、花手桶に、いろ／＼花を入れ、持つて出て來る。十内、これを見て、立戻り、花道の方へ出迎ひ、平伏して

十内　これは／＼若旦那樣、昨日は御機嫌をも伺ひませぬが、先づ變りませぬ御尊顔の拜しまして、憚りながら下郎めも、大慶に存じ奉りまする。

吉三　アイヤ、少しも氣遣ひ致すな。隨分息才で居る。

ト十内をキツと見て

コリヤ十内、其方が今日のその形と云ひ、いつもに變るその禮儀は何事ぢや。

十内　イヤ、さして改めまする儀もござりませぬ。

吉三　でも其やうに慇懃では。

十内　そりや申すまでもござりませぬ。お主樣なりや、敬ひませいで、なんと致しませう。

吉三　イヤ、さうでない。大俗の境界にこそ、君臣父子の尊敬もあらう。今日よりは剃髪染衣の身となれば、菜摘み水汲む沙彌法師に、位も氏もなき身の上。人姓の尊敬は受くるに及ばぬ。

十内　それはお頼もしい、お殊勝な儀でござりまする。それならば猶、尊敬いたさねばなりませぬ。有り難くも釋

尊のお弟子となり、勸化を得られし佛體を、尊敬いたさいで、なんと仕りませう。して、御持參遊ばされましたその花は。

吉三　サア、この花は、父君の佛前へ手向け、御回向申さんと、自ら手折つて來たわいの。

十内　それは猶しも御供養に相成りませう。拙者めが活けて差上げませう。これへ遣はされませ。

ト合ひ方になり、十内、花を受取り、活けて居る。吉三郎、上の方にある鏡臺を持つて來て、鏡を見て思ひ入れあつて

吉三　某、當寺へ參りてより、ついに鏡に向ひし事なく今日只今出家となれば、最早俗身の顔の見納め、殊に我が顔の父上に似たりと聞き、父祐成さまの御尊顔、拜む心で什物の、この鏡を借り受けしが、なんと十内、我がこの顔の父上に、似奉つた所があるか。

十内　如何にも仰せの通り、似たと申せば瓜を二つ。あなたのやうに似ましたる、親子も又とござりますまい。其まゝの祐成さまでござりまする。

吉三　ナニ、この顔の父上に、其まゝとや。ムウ。

ト鏡をヂッと見詰め、ホロリと泣く。十内もホロリとして

十内　イカサマ、御落涙は御尤も。いま鏡を御覽じますれば、最早その御尊顔には一生のお別れと思し召せば、お名殘り惜しう思し召す、そのお心で我れ〳〵兄弟が狩場にてお別れ申せし、その時の心のうち、御推量なされて下さりませ。

ト合ひ方になり

既に狩屋に近附きて、共に御先途見屆けんと、お供を願へば、未來までの御勘當、歸れとあるお詞に隨ひますれば、眼前に討死あらんお主樣、見捨てゝ歸る道すがら、四つ連れたる雁金の、二羽は獵師に打ち取られ、二羽は越路に歸るかと、心細くも踏む足の、怪我へ〳〵と向へども、心は後に狩屋のうち、はや三更の時至れば、今こそお忍びなさるゝ時刻と、思へば胸も五月雨の、涙の雨にそぼ濡れて、干る間も暫しと立ち休らへば、弟の十作、ヤア兄者人歩まれぬか、イヤ十作早う行けと、詞は互ひに急げども、居所の歩みや未申、裾野の方に大篝、光りは一度に狩場を照らし、天地を焦す煙のうち、鬨の聲山彦に谺して、耳を聾く騷動に、兄弟互ひに立ちどまり、如何にや十作、兄者人、今こそ時節到來して、御主

文政九年三月中村座上演

岩井粂三郎のお七　岩井紫若の吉三

人達も御兄弟、我れ／＼兄弟思ひの胸、十八年の欝憤も開けて照らす狩屋の篝火、これを見捨てゝオメ／＼と、何とて曾我へ歸られん、イザ返されよ兄者人、弟來れと飛ぶが如に駈けつけて、急げば廻る岨傳ひ、爰にさまよひ、かしこに轉び、駈け行くうちに裾野の篝、次第次第に消え行くを、見るに心も消え／＼と、間近くなれば事果てゝ、人を納むる鎭めの音も、カウ／＼と物淋しく、爰に呼はる聲聞けば、曾我の五郎時致は、御所の五郎丸が組みとめたり、兄の十郎祐成は、仁田の四郎が討つたりと、かしこに呼はり廻る聲、遙かに聞いて兄弟がすご／＼歸る心のうち、御推量なされて下さりませ。

トほろりと思ひ入れあつて

ア、、嘆くまじ、これ即ち實相中道、斯くの如くの因縁、斯くの如くの果は、皆これ本末苦行道、煩惱即ち菩提心、今日出家得脱のお姿、見奉れば某も、直ぐにその座で髪を下ろし、野の末山の奥までも、お供申し奉らん。急いで御出家なされませ。若旦那、吉三さま、ア、、面目ない物語り、致しましてござりまする。

ト此うち吉三郎、いろ／＼思ひ入れあつて、この時鏡臺を突き退け

吉三　コリヤ十内、その物語り聞く上は、出家は否ぢや。剃髪はせぬぞ。

ト十内、悄りして

十内　エ、、そりやなんと仰しやりまする。

吉三　イヤサ、出家はせぬぞ。この吉三郎は武士の悴、ちやに依つて武士の道を立てねばならぬ。出家にはならぬぞよ。

ト十内、呆れしこなしにて、ヂッと摺り寄り

十内　コレ、若旦那、氣が狂ひましたか。但し御座興でござりまするか。

ト吉三郎、頭を振つて居る。十内、思ひ入れあつて

ムウ、さては只今御兄弟の御最期を、嘆きましての物語り。それゆゑにお心が、變じましたでござりまするか。

吉三　くどい／＼。父上や時致さまの敵討ち、倶に天を戴かぬ武士の魂ひ、狩屋にての働らきは、武士の面目、仁義と云ひ、勇と云ひ、類ひ稀れなる父上伯父君。やみやみと人手にかけ、剩さへ時致のお首、討つたは何事ぞ。然れば武將頼朝は、賞罰知らぬ盲目大將。そんな武將に何をか恐れ、天下に稀れなる人々の、跡を空しく朽ち果てさせん。某今日より武門に返り、十郎祐成が子孫には、

かゝる英雄ありけりと、後の世までに譽を殘し、討死ありし人々の、修羅の妄執晴らさにやならぬ。其方までも今日より、魂ひ磨き忠臣なせ。出家にはならぬ、還俗するのぢや。

十内　エヽ、お情ない若旦那。寸善尺魔とはあなた樣のお身の上。それ程の事辨まへぬ、十內でもござりませぬが、仁田どのは仁義を兼ねたる侍ひなれど、海老名軍藏は奸曲非道、曾我どの輩の從類は、根を斷つて葉を枯らし、枕を高うなさんと謀る無法の強敵。祐成さまや時致さまは、一騎當千の英雄、御一門には和田どの御父に、烏帽子親の北條どのが後立、日本國中の民百姓まで、曾我を贔屓し、何卒敵が討たせたい討たせたい／＼と、影になり日向になつても事叶はず、十八年の春秋を、涙でばかりお暮らしなされたぢやござりませぬか。それにあなたは十郎さまに及びませうか。鬼神と呼ばれし時致さまに叶ひませうか。殊に祐成さま時致さまと違ひまして、兄上も弟御もなく、たつたお一人、御家來とても鬼王には、及びもつかぬ十內兄弟、お身の器量も助力の者も、父御樣伯父御樣に合せては、九牛が一毛と申しませうか譬へを取るに物のない、そのお身の上で強敵が討たれませうか。その上、又敵は御法度。破れば忽ち天下の科人、鎌倉中を引き廻され、刑罪に逢ふ時は、いま天が下に名譽たる、御兄弟の惡名を、末の世までもお殘しなされ、御本望でござりまするか。

ト吉三郎をヂッと睨み、涙を拭き、思ひ入れあつて

ムウ、聞えた。そんならあなたの還俗は、女房が持ちたいゆゑでござりまするな。あのお七を女房にさつしやる事はなりませぬぞ。こればつかりは、十內が、どこのどこまで留めにやアならぬ。還俗などゝは思ひも寄らぬ。なりませぬぞ。

ト吉三郎、無念のこなしあつて

吉三　エヽ、口惜しい。男子には生れたれども、女子にも劣つて儒弱なと、家來までにも恥辱を受けるか。殘念なこの上は望み叶はぬ我が命。ムウ、さうぢや。

ト腹切らうとする、此うち奥より

戒念　吉三どの／＼。

ト呼びながら、妙念、戒念、その外同宿大勢出て來て、この體を見て驚ろき

皆々　これは短氣な。マア、待たつしやい／＼。

ト口々に云うて、刃物をもぎ取り

和尚様が呼ばつしやる。マア、ござれ〳〵。
ト皆々、無理に吉三郎を連れて、奥へ入る。十内、殘り、茫然として、思案して居る。此うち合ひ方。

十内　アヽ、是非もなき若旦那のお行跡。あの氣色では出家得脱思ひも寄らぬ。とあつて、親御の御遺言、重い仰せを受けながら、私しに還俗さつしやいとも云はれぬ義理。お七が色に引かれての還俗か。又は一途に武士道を立てたいと云ふ思ひ込みか。兎にも角にも邪魔になるはあのお七……イヤ、邪魔と云へばこの羽衣。
ト羽衣を出して
いかい邪魔な代物。祐成さまがくれ〳〵も、文藏文太が一家もあらば、返し與へよとお預けなされし羽衣なれば、捨つるにも捨てられず、大切に肌身離さず。これさへ大きに邪魔になるに、若旦那ゝ我まゝ、お七が好色、そこら中が邪魔だらけ。十内が身の置き所がない。ハテ、どうしたものであらうなア。
ト思案して居る。と管絃になり、欄間の天女と入れ替り、十内を見て居る。
ハテ、面白い管弦の音色ぢやなア。かゝる寺地の地中に於て、十二律の音聲、拍子妙なる音樂を、奏する事はありそもないもの。尤も法華の葬式には、樂を奏して惡鬼を拂ふと聞き及ぶ、但し葬禮でもあつての樂か。何にもせよ、ハテ、殊勝な樂の音色ぢやなア。
ト音樂になり、十内、これを聞き入つて居る思ひ入れ、此うちお七、下へだん〳〵下りて來る。振り袖、帶とも模樣好みあり、お七、思ひ入れあつて

お七　モシ、十内さん。
ト十内、恟りして

十内　ヤア、おれを呼んだは誰れぢや。

お七　アイ、わしぢや。わたしぢやわいな。
ト十内、振り向き

十内　ヤア、さう云ふはお七ぢやないか。

お七　アイ、わたしやお前に、ちつと云ふ事がある程に、爰へ來て下さんせ。

十内　ムウ、云ふ事があらば、そこから云うても聞えるが、ても美しいものではある。現在おれとは從弟同士、尤も世間に從弟同士の女夫は澤山ある慣ひ、とは云へ心に思ひあるこの十内、女の顔もしげ〳〵と見た事はなけれども、今日の其方の顔形は、誠に人間とは思はれぬ。どうやら心に惚れ〳〵と。イヤサ、心が亂れたやうな。コレ

お七、其方はなぜ其やうに可愛らしいぞ。

おセ　サア、人間天上と隔たれば、過去の宿緣。天女がわたしに似たと云ふも佛の敎へ。みんな因果のなす業でござんす。いま妾でお前に逢うて、詞交すも因緣の、なす業でござんすわいな。

　ト十内、合點のゆかぬ思ひ入れあつて

十内　ハテ、いかう其方は因緣が好きぢやな。何ぢやか知らぬが、和尚樣の云ふやうな事云やるが、そちや常に其やうな、ませた事云ふ者ぢやなかつたが、ムウ、聞えた吉三さまと机の上で手習ひしながら、佛法話しの筆てんがう。そのてんがうから始まつて、若旦那を浮氣者にひろいだな。

おセ　それも因緣、これも又、今の緣には儘ならぬ、短かい契りに憂き目を見る。その惡緣は切るに切られぬ凡夫心。互ひに制しても留まらぬ程に、必らず憎いと思うて下さんすなえ。

　ト十内、呆れて

十内　イヤア、思ひ切つてまけ出したな。シタガ、因緣因緣と因緣に云ひ紛らし、その緣は又、いつ盡くるのぢや。

おセ　サア、その因緣の盡きるは十劫。

十ア　ムウ、十劫と云ふ、その數を知つて居るか。

おセ　ソレ、その手水鉢を見やしやんせ。

　ト手水鉢へ思ひ入れ。十内、見て

十内　ムウ、こりや眞田股野が力競べの青田の石。眞田の息女、敵股野を討ち取つて、この寺へ奉納ありし青田石の手水鉢。この石を見りや、なんとする。

おセ　その石を撫でゝ見さんせ。

十内　なぜこの石を撫でるのぢや。

おセ　マア、撫でゝ見さんせ。

十内　これを撫でると云つて、なんの手間暇もいらぬ事だ。

　ト撫でゝ

サア、撫でたが何とした。

おセ　サア、その劫を計る事は、けしいつから石、いつからと云ふ三千里四方の石を、天上界の三年三月に一度づつ、天人の羽衣で撫でゝ撫で盡した所が、いつから。サア、その石を撫でゝ盡きるか。撫でゝ見さんせ。

　ト十内、また石を撫で

十内　サア、斯う撫でたばかりで、これがどうして減るも

のか。
お七　それを撫で盡した所が一こふ　それを十ごふが間、生れ代り死に代り、互ひの縁に盡きぬ程に、必らず無體な妨げさしやんすな。
　ト十内、合點のゆかぬ思ひ入れあつて
十内　いよ／＼其方は合點がゆかぬ。如何に吉三さまに習うたとて、それ程までに法の道、覺えやう筈がない。そりやいつの間に覺えたのぢや。
　トお七、さめ／＼と泣く。此うち管絃高く奏す。
お七　それ程類ひ稀れなる石、いつからの大石も、翅を以て撫で盡す、天女の羽衣ない時は、梵天王の勅命ある、石を撫でる事の緩怠あれば、今まで半過ぎる程、撫で盡した大石も、また元の三千里四方の大石となつて、光陰戻すが悲しさに、九百年が間の憂き思ひ。推量して下さんせいな。
十内　九百年が間とは、そりやなんのこつた。
お七　アア、九百年と云ふはな。
十内　九百年とは。
お七　サア、九百年を百年引けば、
十内　八百年、八百は、やほとも讀む。
お七　サア、その八百萬の神かけて、この七が
十内　吉三さまに惚れたのか。
お七　イヽエ。
十内　なんと。
　ト思ひ入れ。管絃になり、これに合せて、お七、何か云ふこなし。十内、聞いて居る。こなしあつて
ナニ、吉三さまを思ひ切る。そりやほんの事か。
　トまた聞くこなしあつて
ムウ、その代りに、この十内と寢ようとか。そりや眞實。
　トお七、恥かしき思ひ入れ。十内も思ひ入れあつて
ムウ、それには、なんぞ譯があらう。何にもせよ、寢る氣なら、マア、爰へ來やれサ。
　トまたお七、物云ふこなし。
ムウ、なんと。この羽衣が爰にあるゆゑ、光氣に恐れて寢にくいとか、成る程尤も、シタが、この羽衣の置き所が。
　トあたりを見て
ムウ、幸ひ／＼この青目の石は文太が奉納。心を込めたる石なれば、お七が心底試す間、この羽衣をこれへ掛け

て。

ト右の羽衣を手水鉢へ掛けて

サア、爰へおぢや。

ト此うち管絃にて、十内、お七が手を取ると、ドロドロになり、手水鉢の水湧き上がる。十内、ウンと悶絶する。と音樂になり、お七、羽衣を取り、欄間へ上がる。と欄間の彫り物、元の通りになり、十内、心附き、あたりを見て

天女は〳〵。

トうろ〳〵して

それよ。

ト手水鉢を見て

南無三方、さては夢中になりしうち、天女に寶を取返されしか。九百餘年の間と云ふもの、日本の寶となりし羽衣を、今に至つて某が空しくなしたか。エ、殘念な。

ト欄間の方を睨み、思ひ入れあつて

今にも文太が子孫に逢うて、なんと云ひ譯あるべきぞ。時節とは云ひながら。ハテ、是非もない事ぢやなア。

ト向うにて遠寄せを打つ。十内、驚ろき

ヤア、あの太皷は慥かに遠寄せ。アレ〳〵、所々に烽火をあげて、人々の駈け迷ふ體。こりやア油斷はならぬわえ。何にもせよ若旦那に……ソレ。

ト十内、奥へ走り入る。矢張りドン〳〵にて、奥より上人、戒念、妙念、同宿四人、捨ぜりふにて、騒ぎながら出て來て

戒念　和尚樣、また先々月のやうに一揆が起り……した。

上人　如何にもさうぢやと見えて、あの太皷、こりや大方以前國遠の一揆であらう。それなれば十里ばかりも先の方ぢやが、また旦那方が逃げて來るであらう。その用意いたして置け、

皆々　畏まりました。

ト此うち始終遠寄せにて、この時早めて打つと、向うより若い衆の仕出し大勢、思ひ〳〵の形にて出て來てワヤ〳〵と捨ぜりふあつて、下座へ逃げて入る。また向うより團右衛門、以前の形にて、軍兵大勢連れて出て來り

團右　ヤア〳〵、この寺の住持は居ぬか〳〵。

住職　ハツ、拙僧が住持でござりまする。

團右　オ、、最前の住持、隨分盗人の用心せい。咽喉が乾く。水でも茶でも早く出せ。

住職　お茶を上げい〳〵。
　ト同宿、捨ぜりふにて、茶を汲んで出す。團右衞門、ガブ〳〵と飲み、むせる事など、をかしみあつて
　コリヤ住持。最前も申す通り、八百屋久兵衞が後家娘お七、この寺に居るであらうがな。
妙念　成る程、最前。
住職　コリヤ〳〵妙念、何を申す。
　ト妙念をキツと叱り
　最前も申す通り、今日はまだ見えませぬやうにござりまする。
團右　しかと左樣か。
住職　如何にも出家の教戒、僞はりは申しませぬ。
團右　そんならよいワ。今度爰まで出て來たは、畢竟その詮議には構はぬ事だ。ドリヤ〳〵、固めの場所へ早く行くべい。者ども參れ。
皆々　ハア。
　トどん〳〵にて、團右衞門、軍兵を連れ、下座へ入る皆々あと見送り
妙念　あの侍ひめは、なんの態だ。風吹く烏を見るやうにガヤ〳〵ソワ〳〵。
戒念　イヤ、ありやア茶を乾かしに。
住職　コリヤ〳〵、かしましい。扣へぬか。餘り口が過ぎるゆゑ。今も今とてお七が事を云はうとした。嗜なめ嗜なめ。
　ト向うバタ〳〵にて、十作、野羽織、菖蒲革袴、股立ちを取り、足輕の形にて出て來て
十作　これは〳〵和尙樣、同宿衆。
　ト急き込んで、息の切るゝ思ひ入れ。
住職　これは十作どの、何用あつて
十作　サア……どうも息が切れて申されませぬ。水を一杯下さりませ。
妙念　合點だ。
　ト水を持つて來る。十作、グイ〳〵と飲む。
住職　どうぢや。軍は此方へ來さうかな。
十作　アイヤ、軍は大磯小田原の邊の事でござりまするが、この騷動は諸所の烽火が揚つたゆゑでござりまする。それは格別、拙者めは、若旦那やお七どのゝ事につきまして、急に叶はぬ用事あつて。
住職　急に叶はぬ用事とは。
十作　サア、その用事と申しまするは、兼ねてより若旦那

を付け狙ひ、討ち果たさんと海老名軍藏、この騒動を幸ひに、見當り次第引ッ捕へ、情なくも失ひ奉らんと、この邊までも、草を分つて尋ぬる由。まつた範頼公よりは、八百屋のお七を出せ〳〵とせがまつしやるゆゑ、本郷へは催促の侍ひ衆、幾人來るか知れませぬに依つて、おすぎやお七どのが、内へ歸られては惡いゆゑ、ちよつと知らせに參りました。どうぞ伯母御にこの事を。

　トおたけ、奥より出ながら

たけ　オヽ、聞きました〳〵。

　ト出て

ほんに罪もない吉三さまを、殺さうと云ふも無理。また範頼さまも範頼さま、人の得心もせぬ娘を、無體に取上げ使はうとは、あんまり無理ぢやないかいの。

十作　サア、そこが泣く子と地頭の譬へ。權を以て押されれば、理も非道には勝たれませぬ。

たけ　そしてマア、どうせうと思はつしやるぞいの。

　トおたけ、氣遣ひの思ひ入れ。

十作　そりやア氣遣ひさつしやりますな。慈悲深い秩父さま、仁田さまへもとも〴〵に、若旦那のお身の上、お七どのゝ事までも、御兩所の計らひで、どうぞ難儀を遁がるゝやうにと、お頼み申して置きたれば、少しも氣遣ひござりませぬ。

たけ　イヤモウ、それはさうなうてはならぬわいの。ダガ、わしやお七は、本郷へ歸らねば、外にどこへも行き所がござらぬわいの。

十作　サア、それも氣遣ひござりませぬ。今度の軍は重忠さまの請取りで、本田どのが度々手柄をさつしやる上、仁田さまが加勢ぢやゆゑ、鬼に鐵棒、範頼どのゝ滅亡ももう二三日。マア、それまではこの寺に、矢ッ張り忍んでござりませ。

たけ　成る程、さうすりやよけれども、若い娘にわしばかり、このお寺に忍んで居るも、どうやら異なもの。

住職　さればサ、そこに惡い事がござる。最前見えた侍ひ衆、この寺にお七親子が隱れて居るに極まつたと睨んだ樣子。忍んでござるは構はねど、また侍ひ衆が見えた時は、愚僧の難儀。

たけ　イカサマ、それも氣の毒なり、と云うて外へは行かれず、こりやマア、何としたものであらうぞいの。

　ト思案の思ひ入れ。十作、手を打ち、心附きしこなしあつて

十作　アヽあるぞ〳〵。氣遣ひさつしやりますな。マア
　お七どのゝ隱し所はござりまする。
たけ　そりやどこに。
十作　サア、この欄間の內へ隱しまする。
住職　あの欄間へか。
　ト思ひ入れ。
十作　ハテ、隱れもない吉祥寺の欄間の彫り物、お七によ
く似たと云ふこの天女、範頼どのも、この彫り物から思
ひ附いて、お七を望まつしやるぢやアござりませぬか。
ぢやに依つて、この彫り物とお七を入れ替へ、天女にし
て置く時は、兼ねてお七に似たと云ふこの彫り物、誰れ
もこれには氣が附きますまい。
たけ　ほんに、それはよい思案ぢやが、あの彫り物は離れ
ますかな。
住職　離れますとも〳〵。コリヤ〳〵、妙念、あの彫り物
を。
妙念　心得ました。
　ト妙念、彫り物を取る。皆々同宿とも手傳つて欄間の
　天女を下ろす。
住職　なんと、よい細工でござらう。

たけ　ほんに、これは自由な事ぢや。して、わしはどうし
て隱れませうぞいの。
十作　されば、それにはわしも困りました。
　ト十作、當惑の思ひ入れ。おたけ、心遣ひ。
住職　アイヤ、氣遣ひせまい。それには愚僧が思案がござ
る。
十作　して、その思案は。
住職　サア、その思案と云ふは、ナ、コレ。
　ト十作に囁く。
十作　如何にも、それがようござりまする。コレ伯母御・
お前は和尙樣が、よいやうにさつしやる程に、氣遣ひせ
ずと奧へござつて、お七を早く寄越さつしやりませ。
たけ　合點ぢや〳〵。そんなら、よいやうに賴みますぞ
や。
　トおたけ、こなしあつて奧へ入る。と又ドン〳〵打つ
　奧より長兵衞、お七を連れ出て來て
お七　紅長さん、わたしを呼ばしやんしたは、吉三さんに
逢はせて下さんすか。
長兵　これはしたり、まだ逢はぬか。
お七　まだいなア。

長兵　コレ〳〵、泣くまい〳〵。ようメソ〳〵と泣いてばかり。氣遣ひせまい、今宵中には吉三さまに逢はせてやる。おれがどうともする程に、マア〳〵、來やれ來やれ。

住職　コリヤ〳〵お七どの、こなた、窮屈ではあらうが、ちつとの間、あの欄間へ上がつてござれ。

　ト本舞臺へ連れて出る。

お七　あそこへ上がつて居りや、吉三さんに逢はれるかえ。

長兵　ハテマア、そりやどうなとなる程に、マア、上がつて居やれサ。

お七　でも吉三さんに。

十作　ハテマア、上がつて居たがよい。兎や斯う云ふうち彼の侍ひめが來ては惡い。早う〳〵。

お七　そんならどうぞ。

長兵　ハテ、呑み込んで居るよ。サ、マア、上がつた上がつた。

　ト長兵衞、お七を抱き上げようとして

イヤ、こんな形の天女もあるまい。なんぞあのヒラ〳〵に似た裝束が。

　トそこらを見て、

あるぞ〳〵。

　ト水引を取つて來て、お七に着せ

これでよし〳〵。サア〳〵、上がり給へ〳〵。

　トお七を欄間へ上げる。お七、心遣ひ、ひやいな思ひ入れなどよろしく。

コレ、斯うして居るのぢや。

　ト天女の通りにさせて

なんと和尚樣、よい彫り物でござりますな。ハヽヽヽ。

住職　成る程〳〵。矢ツ張り其まゝの天女ぢやわいの。

十作　コレ、さう人形のやうになつて居て、誰れが來やうと、必らず物を云ふまいぞ。

お七　アイ〳〵、そんなら斯うして、あの人形のやうに、チツとして居るのかえ。

十作　さうぢや〳〵。サア、和尚樣、これから今の支度にかかりませう。

住職　如何にも。

長兵　して、阿母は。

十作　サア、阿母は、コレ。

　ト囁く。長兵衞、呑み込み

長兵　そんなら死んだ分にして、わしが代りに。
十内　コリヤ。サア、ござれ。
　トどん〳〵にて、長兵衞、十作、仕職、殘らず附き添ひ、奥へ入る。と下座より吉三郎、十内、出で來り。
吉三　コリヤ十内、最前からの其方が意見。如何にもわしが惡かつた。よく〳〵思案して見れば、其方が云ふのは皆尤もぢやわいの。
　トお七、吉三郎を見て、思ひ入れ。
十内　すりや、御得心でござりまするか。エヽ、有り難うござりまする。それは格別、今日のあの騷動、どうも心が心なりませぬ。拙者は神奈川邊まで參りまして、樣子を窺ひ參りませう。
吉三　それは大儀。早う行ておぢや。
十内　畏まりました。ソレ。
　ト矢張りドン〳〵にて、十内、向うへ一散に走り入る。吉三郎あと見送り
吉三　十内と云ひ十作まで、揃ひも揃うて忠義の者ども。この吉三郎を主人ぢやと思へばこそ、最前の諫め、用ひなんだはわしが誤まり。

　ト思ひ入れあつて
ドリヤ、佛前へ行て父上に、お詫び申し上げずばなるまい。
　ト立ち上がらうとして、欄間の方を見る。此うちお七いろ〳〵こなしある。吉三郎、顏見合せ、恟りして
吉三　ヤア、彫り物のあの天女が、動くと云ふは。
　トよく〳〵見て
ヤア、其方はお七どの
　トお七、恥かしき思ひ入れ。
イヤサ、お七どのではないか。
お七　アイ。
吉三　なぜ又そこへは上がつて居るのぢや。
お七　サア、爰に居れば、逢はるゝと云うて。
吉三　なんと。
お七　サア、爰に居れば逢はるゝと、紅長どのが云うてぢやに依つて。
吉三　そりや誰れに。
お七　サア、それはな。
吉三　誰れに逢はうと思ふのぢや。
お七　それ云はうかえ。

吉三　ト思ひ入れ、
早う云うたがよいわいの。
お七　そんなら云ふぞえ。
吉三　誰れに逢ふのぢや。
お七　アノナ……アノナ。
ト思ひ入れ。
オ、恥かし。
ト顔を隠す
吉三　それでは、どうも解らぬわいの。
お七　サア、アノお前に。
吉三　すりや、わしに逢はうと思うて、先刻からそこに上がつて、ムウ。そりやどうも合點がゆかぬわいの。
ト奥にて、ガン／＼と鉦を打つ。お七、悄りして、欄間より落ちろ、吉三郎、驚ろき介抱する。お七、吉三郎が手を取り、ヂツと見て俯向く、吉三郎、振り放さうとするを。お七、しつかり留める。
吉三　コレ、爰放した。人が來る。サ、、人が見るわいの。
お七　何云はしやんすやら。誰れも來もせぬもの。
吉三　サア、人が來れば悪い程に、來ぬうち放して。

お七　サア、わたしも人の來ぬうちに、アノ、お前にちつと。
吉三　すりや、人の來ぬ間に、わしに話しが。ムウ。
ト思ひ入れあつて
サア、云ひたい事があるなら、早う云うたがよいわの。
お七　アノお前、去年雛様立てた折、わたしが内へござんしたな。
吉三　ムウ、行つた、行きました。しかも、こなさんの雛様は、よい雛どもであつたが、今年もまた立てるであろその折は、また行て見ようわいの。
お七　あの雛様は何ぢやえ。
吉三　雛様は何ぢやとは。
お七　サア、ありや何を表したのぢやと云ふ事いな。
吉三　ムウ、ありや住吉淡島の女夫、妹脊の睦まじき語らひを表して、女子の祀るものサ。
お七　女夫とは、男と女子の事かえ。
ト思ひ入れ。
吉三　ハ、、、知れた事サ。
お七　そんなら、アノ、お前とわたしと。
吉三　どうしました。

お七　サア、その雛樣に。
ト恥かしきこなし。奥にてまたガンと鉦を打つ。お七
悧り、吉三郎に抱きつく。
吉三　コレ、人が見る。放して下され。ありや弔らひぢや
わいの。怖い事はない。サ、、放した／＼。
トお七、泣きながら、矢張りしがみついて居る。奥に
て
長兵　ア、、定業とは云ひながら、昨日までも今日までも
達者でござつたに、さて／＼、いとしい事しましたな
ア。
お七　いつそ、あのやうに死んだら、思ひもござんすまい
コレ、見さんせ、あの雛樣の時、お前に貰うたこの錦繪、
お前のお側に居ると思うて、肌身離さず大事にした、こ
の繪は鴛鴦。
ト出して見せ
どうぞ、この鴛鴦の妹脊にあやかり、お前のお側を離れ
ぬやうにと、氏神さんや佛樣、拜んだ事はござんせぬが、
この鴛鴦を朝夕に、拜んでばかり居たわいなア。これ程
いとしう思うて居るわたしが心、ちつとは推量して下さ
んせいなア。
ト泣く。此うち奥にて、稱名唱へる。長兵衛、目を
摺り／＼出て來て、これを見て、小隱れして窺ひ居
る
吉三　成る程、こなたの志し、度々の文玉章にて察せし
ゆゑ、その眞實は忝ない。仇疎かには思はねども、ど
うも心に從はれぬは、父上の遺言ゆゑ、是非とも出家せ
ねばならぬ身の上。ぢやに依つて、心強うは思はつしや
らうが、この戀ばかりは、思ひ切つて下されいの。
お七　すりや、どうあつても、お前は出家なさんすか。
吉三　サア、せねば叶はぬわしが身の上。心強いと恨まず
に、どうぞ思ひ切つて下されいの。
お七　ハア。
ト泣き落し、癪の差込みしこなしにて、ウンと悶絶す
る。吉三郎、悧り、長兵衛、駈け寄り介抱する。吉三
郎、ウロ／＼して
吉三　こりや、どうせうぞ／＼。
長兵　どうせうどころか、早く呼び生けさつしやい。
吉三　お七どの／＼。
長兵　お七どの。
ト呼び生ける事、いろ／＼あつて

吉三　エヽ、不極轉な。そこらに水はないか。
　　ト手水鉢の水を柄杓へ汲んで
　　合點ぢや。
長兵　サア、飲ませさつしやい。
　　飲ませると云うて、只飲むものか。口から早く。
　　ト吉三郎、口移しにお七に飲ませる。お七、ウンと息吹き返す。
吉三　どうだな。氣が附いたか。
お七　コリヤ、お七どの、氣をしつかりと持つたがよい。
吉三　サア、どうでもならぬかえ。
長兵　サ、それは。
吉三　それ〳〵、ならぬと今の通りぢや。
お七　是非に及ばぬ。
吉三　叶へて下さんすか。
お七　如何にも。
　　オヽ、嬉し。
武兵　ト抱きつく。長兵衛も柱へ抱きつく。向う揚げ幕にて
長兵　サア、みんなござりませ。
　　あの聲は慥かに武兵衛。見附けられちやアおたまりやアない。サア、二人とも奧へござれ。

お七　そんなら吉三さんも。
長兵　サア、早うござれ。
　　ト長兵衛、兩人を連れ、奧へ入る。矢張りドン〳〵にて、向うより武兵衛、侍ひ大勢連れて出て來て
武兵　なんでもこの寺に、お七親子が居るにやア違ひない。侍ひ衆、ぬからつしやるな。
皆々　合點だ。
　　ト踏ん込まうとする。奧より戒念、出て
戒念　アヽ、ドン〳〵が胸につかへて、飯も食はれるものではない。
　　ト口をムグ〳〵しながら出る。武兵衛、引ッ捕へ
武兵　コリヤ、づく入め、待ちやアがれ。うなアお七が居所を知つて居べい。吐かしやアがれ〳〵。
　　トこづく。
戒念　アヽ、痛い〳〵。飯の喰ひ立てを、さうひどくこづかれると、小間物店が出る。免して下され〳〵。
武兵　おきやアがれ。無駄口を叩かすと、早くまき出しやアがれ。
戒念　へどなら直ぐにまき出すが、お七が居所は、知らぬ知らぬ。

武兵　うぬ、知らないでどうするものか。ソレ、侍ひ衆、引ツ縛らつしやい。
侍ひ　動くな。
　ト戒念を縛る。
武兵　サア、つく入め、お七親子が在所を吐かせ。吐かしやアがらぬと、うぬ、酷い目にあはせるぞよ。
戒念　イヤ〳〵、どうあつても、お七どのは知りませぬが、いとしや阿母は亡者になつて、桶の中に居られます。
武兵　ムウ、そりやアどうも、合點がゆかぬ。侍ひ衆、その桶を引摺り出して、詮議をさつしやい。
侍ひ　合點だ。
　ト侍ひ大勢奥へ入り早桶を擔ぎ出す。
武兵　サア阿母、窒死にはならない。お七をどこへ隠して置いた。早く吐かせ。ナニ侍ひ衆、マア、此奴めを引き出さつしやい。
　ト皆々寄つて、桶を明ける。とドロ〳〵になり、中より長兵衛、經帷子、額に紙を宛て、亡者の拵らへにてヌッと出る。皆々、ヒヤアと驚ろき、奥へ逃げ込む。と下座よりお七、おたけ、出て來て、長兵衛を見て悧り。

お七　オヽ怖。
　トおたけが後へ廻ろ。おたけ、よく〳〵見て
たけ　ヤア、こなたは紅長どの。
長兵　コリヤ。
　トこなし。奥より武兵衛、出て來て
武兵　お七め、うせう。
　トかゝろを、長兵衛、支へて
長兵　爰構はずと、早うござれ。
七竹　合點ぢや。
　ト三重になり、お七、おたけ、一散に向うへ走り入る。
武兵　うぬ、お七め、待ちやアがれ。
　ト行かうとるすを、長兵衛、留める。面白き立廻りあつてよろしく。　幕

二幕目　八百屋の場

役名――仁田四郎忠常。海老名軍藏。長沼六郎。八百屋母、おたけ。同下女、おすぎ。友達娘、おしか。鳶の者、土左衛門傳吉。同、五尺染五郎。

釜屋武兵衛、小姓、吉三郎。八百屋娘、お七。

本舞臺、三間の間、八百屋店のかゝり、正面、上の方、三尺の鼠壁、これに帳面大分かけてあり、眞中に暖簾口、下の方に押入れ、乾物の箱を並べ、店先に、山形に、久の字の暖簾かけ、爰に誂らへの流しに青物いろ〳〵並べ、いつもの所に門口据ゑ、舞臺上の方、北の桟敷際まで板塀、これに兩開きの木戸を取付け、下の方にも同じく板塀に木戸を取付け、南の桟敷際に誂らへの火の見櫓。梯子かけ、太鼓吊しあり、てんつゝにて、幕明く、

ト花道より、長沼六郎、ぶッ裂き羽織、股引、侍ひの形にて、出て來る。後より、名主、月行事、町人大勢付いて出て

六郎　名主は居らぬか〳〵。

名主　ハイ〳〵、これに居ります。

六郎　どうだ。この町内の路地は出來いたしたか。

名主　ハイ、御覽の如く出來仕りましてござります。

六郎　出かした〳〵。この町は其方どもの丹精ゆゑ、早く出來いたしたが、下町邊は未だ出來いたさぬ所もあるゆゑ、今日某、その檢分の爲、所々を順檢いたせとある嚴命、疎そかならゝ天下の大事。この上ともに粗忽なきやう、必らず油斷仕るな。

名主　アイヤ、少しも油斷は仕りませぬ。晝夜ともに人を付け、大切に木戸を守り、もしも狼煙が上がりますれば、合圖の太鼓を打ちませうと、心付けて居りますれど、先づ何事もござりませぬゆゑ、益々天下泰平と、憚りながら喜ばしく存じ奉りまする。

六郎　如何にも〳〵。當時世上も穩やかにて、其方達も安堵であらう。これと云ふも、仁田の四郎忠常どのゝ働きにて、當時の武將頼家公、範頼公と、お和睦あつて、それゆゑ御代も靜謐に、治まつたと云ふもの。

名主　それはおめでたい儀でござりまする。さりながら、斯く泰平のこの御代に、あの狼煙や木戸々々を御用心には及びますまい。但しどこぞに戰でも始まりましたかえ。

六郎　アイヤ、それはさうでない。勝つて兜の緒を締めると、當時靜謐に治まれども、範頼公には隱居召されてござつても、まだ底心が胡散臭い、どんな叛逆があるとも云はれぬゆゑ、その用心に狼煙を用意し、木戸を拵らへ

變ある時は、その狼煙を上ぐると等しく、段々に太皷を合せ、早速鎌倉へ注進して、騒動を鎭むる爲。隨分ともに心を付けい。キッと申し渡したぞ。

名主　ハイ、畏まりましてござりまする。

六郎　隣り町へ案内いたせ。

皆々　先づ入らせられませう。

ト六郎先に皆々、下の木戸へ入る。在郷唄になり、花道より、下女おすぎ、着流し、前垂れ。娘おしか、振り袖衣裳にて、手洗ひ張り物を入れ持つて、兩人、出て來て。

すぎ　ほんに、おしかさん、いつもながら、よう手傳うて下んす。お庇でわたしも助かるわいな。

しか　なんのいなア。いつでも、遠慮なしに、どうせい斯うせいと云うて下さんしたがよいわいな。どうでわたしも用の無い身、一人で張つたり掛けたりすりや、歪みが出來るわいな。

すぎ　それ／＼、さうでござんすとも。知らしやんす通り阿母さまはお年の上。お七さまは手傳ひたう云はしやんすけれど、たつた一人の御寮人、大事の／＼金箱さま。此やうな事をさせましてはと、打つたり舞うたり。それにマア、女子と云うてはわし一人。ほんにお前に賴みたいは山々なれど、お前もお暇なお身でもないゆゑ、心なう云はれもせず、今日のやうに云つて下さんすりや、ほんにお禮の云ひやうもござんせぬわいなア。

ト兩人、布を廣げて居ろうち、てんつゝになり、花道より、傳吉、股引、袢纒、仕事師の形にて、荷ひに紋盡しの型を入れ、これを擔ぎ、手拭鉢卷、下駄がけにて、出て來て、直ぐに本舞臺へ來り

傳吉　ヤア、髱たちが張るワ／＼。いつ見ても美しいもんだわえ。おれもちつと手傳つてやらうか。

しか　オヽ、傳吉どの、ござんしたか。

すぎ　こりや、傳吉どの、また邪魔しにござんしたか。雇はれて水汲むなら、早う汲んだがよいわいなア。

傳吉　コリヤ妹、さうケン／＼と云はねえもんだ。

すぎ　エヽ、嫌らしい、措いて下さんせ。妹にしたり、女房にしたり、こなさんのやうな道樂者を、兄さんにはわしや嫌ぢやわいな。

傳吉　ムウ、妹が嫌なら、爰な命取りめ。

ト脊中を叩く。

すぎ　エヽ、モウ、何をさしやんす。着る物が堪らぬわい

の。

傳吉　おきやアがれ、げびざうめ。こんな褞袍が、なんの役に立つもんだ。待つて居ろ。富澤町の朝市で、いゝ奴を買つてやるワ。

すぎ　なんぢや。わしに着物買うてやらうとえ。おしかさん、聞きなさんしたか。ほんにこりや、をかしいわいな

しか　イエ／＼、さうも云はれぬぞえ。傳吉どのも男ぢや程に、嘘も云はしやんすまい。早う買うてもらうたがよいわいな。

すぎ　傳吉どの、戯れにもそんな人聞きの好い事云うて下さんすな。それよりは、あの村松町の三升丸買うて來て下さんせと、わしがこの中頼んで置いたぢやござんせぬか。それさへ埒が明かぬもの、着物買うてやらうも氣が強いわいな。

ト云ふうち、傳吉、懐より、三升丸の包みを出して

傳吉　この事か。

ト おすぎ、取つて見て

すぎ　こりや、なんぢやえ。

傳吉　約束の三升丸サ。しかも、おれが錢を拂つて來たが、こりやア主に土産にやらう。なんと、これでも氣が強いか。

すぎ　おしかさん、これ見さんせ。ほんに我折つたものぢやわいな。

しか　それ見やしやんせ。それぢやに依つて、あんまり悪うも云はれぬぞえ。

傳吉　ハテサ、人は氣受けが第一だ。おすぎが男と見かけて頼んだを、引かぬ所が男の生粋。土左衛門は男だよ。そればかりぢやアない。まだキッとした土産がある。

ト また、煎餅袋を出してやる。

すぎ　こりやなんぢやえ。

傳吉　知れた事、煎餅サ。

すぎ　ほんにお前は、優しい心だてにならしやんしたなア。

傳吉　エヽ、いま／＼しい。これで男か。

すぎ　爰な大盡さまめ。

傳吉　おきやアがれ。随分おれはげびざうだが、おれよりわりやア、げびざうだわえ。

すぎ　イヤモウ、なんとでも云はしやんせ。損のゆかぬ事

ぢやわいな。
傳吉　呆れるワ。コレエヽ、さう貰つて居るばかりが能ぢやない。おれが頼んだ事に云うてくれたか。
すぎ　頼んだ事とは、そりや何を。
傳吉　コレエヽ、そんなに恍けるなえ。
すぎ　でも、なんぢやか覺えぬわいな。
ト思ひ入れ。
傳吉　三升丸の事は、よう忘れねえな。
すぎ　そりや、わたしが頼んだ事、覺えて居いでわいの。
傳吉　得手勝手な女ぢやアねえか。コレエヽ、貰ふ物は貰つて置いて、頼んだ事を云つてもらはにやア、男が立たない。
すぎ　待たんせ。そりやお七さんの事かえ。
傳吉　知れた事よ。
すぎ　そりや、叶はぬ事、ならぬ事ぢや程に。
傳吉　默れ、めいため。思ふさま人を釣つて、貰ふ物も貰つて置いて、叶はぬならぬで濟まうと思ふか。
すぎ　でも、ならぬものを、どうなるものぢやぞいな。又こなさんも、よう思うても見なさんせ。あの華奢な可愛らしいお七さんの御亭さんに、こなさんのやうな日傭取りの土左衛門どのが、どうならるものぢやぞいの。そんなら、その三升丸や煎餅も、わしに取持たせやう爲に下さんしたか。
傳吉　知れた事だ。さうでなくつて、何しにわれに遣るものかえ。
すぎ　エヽ、嫌やの〳〵。そんな事なら三升丸も煎餅もいらぬ程に、サア〳〵、持つて行かしやんせ。ほんに阿房らしい人ではあるわいな。
ト以前の包みと袋を投げ出す。
傳吉　おきやアがれ。女だと思つて、云はせて置きやア、好きな痴言を吐かしやアがる。
しか　コレ、傳吉どの、聲が高いわいの。
傳吉　高くても大事ない。コレエヽ、見附切つて橋場まで、土左衛門傳吉と云つちやア、知らねえ者は一疋もないわえ。その傳吉さまが、お遣りなされた物を、うぬアよく抛り出しやアがつたな。
すぎ　オヽ、投げた。抛つたが、なんとしたえ。
傳吉　此奴、云はして置きやア方途がない。
ト天秤棒を振り上げる。おしか、留める。此うち、てんつゝになり、花道より、染五郎、紺屋の形にて出て

來て、これを見て、中へ入り、傳吉を留めて

染五　待て〳〵。傳吉、大人氣ない、なんの眞似だ。

傳吉　イヤサ、女だと思つて料簡すりやア、好きな御託を吐かしやアがるから、ぶんのめすのだ。

すぎ　イ、エイナア、あんまり無理な事ばつかり云うてぢやに依つて、ならぬと云へば、あのやうに打つの叩くのと云はれまするわいな。

しか　コレ〳〵、おすぎどの。堪忍さんせ〳〵。

すぎ　コレ、ぶつならぶつて見や。叩いて見や。

ト寄るを、おしか、留める。

傳吉　エヽ、うぬ。

ト又かゝるを、染五郎、留めて

染五　コレサ、いゝわえ。お主も男を立てる者ぢやアないか。おすぎも大概云うたがよい。畢竟心安いに依つて冗談紛れに云つたものだ。料簡しやれ〳〵。そして傳吉頼んで置いた紋はしは、洗つてくれたか。

傳吉　洗つたか洗はないか、明いた眼で見たがいゝわえ。

ト染五郎、そこらを見て

染五　ムウ、洗うてくれたさうだ。なんだかをかしな物の云ひやう。洗つて置いたら洗つたと、靜かに物を云つたがよい。明いた眼で見たがよいと、目を明かいで何が見える。鼻を明けて見えるか……とサア、斯う云へば云ひがゝり。コレ、傳吉、機嫌直しに、酒でも振舞はう。おれと一緒に、サア來やれ。

傳吉　イヤ、行くまいわえ。われに酒を振舞はれうと思うて、この紋盡しを洗ひはしない。最前お主が名主どのへ呼ばれたゆゑ、其うち暇がかけるに依つて、洗うてくれいと頼まれたが、男の意地、引きはしない、洗つてやる、酒を振舞はれう呑まうと、洗やアしない。馬鹿な面な。

染五　てもとが〳〵しい物の云ひやう、そんなら酒も振舞ふまい。とても物の事に、内まで擔いでもらひたい。

傳吉　男と見かけて頼むか。

と五　ムウ、見かけた〳〵。男と見て駈け込んだ　ハヽヽ敵討ぢやアあるめえし。

傳吉　イヤ、敵討と云やア、曾我十郎祐成の忘れ形見吉三郎が、仁田どのや荒井の藤太を、親の敵と狙ふに依つて仁田どのは構はつしやらぬが、藤太めが吉三郎を、見附け次第、切捨てにしようと云つて、尋ねると云ふ事だが。これも馬鹿げたこつちやアないか。さうまた敵を討

たないでも、よささうなもの。吉三郎と云ふ奴も、いかい白痴な若衆めぢやアないか。

すぎ　コレ、傳吉どの、滅多な事云はしやんすな。なんの吉三さんが敵を討たうと、云はしやんすものぢやぞいの。

染五　イヤ、さうも云はれぬ。成る程、吉三どのを藤太が狙ふと云ふ事を聞いたて。

すぎ　さればいなア。その狙ふのは敵討の詮議ぢやない、法界悋氣ぢやわいな。お七さんを手に入れうと思うて、吉三さんを狙ふのぢやわいなア。

染五　サア、それと云ふも、うぬが吉三さんが氣味が悪いゆゑ、臆病から起つた事よ。

すぎ　何を仰しやるやら。藤太がお七さんを手に入れようと思ひ付いたは、お前が釜屋武兵衞に、お七さんを書入れて、金借りさんしたから起つた事ぢやわいな、

染五　イ、ヤ。おりや、そんな事は知らぬ〳〵。

トこちらを向き。舌を出して笑つて居る。

すぎ　イエ〳〵、知らぬとは云はれませぬ。ソレ、その紋盡しの型を質に入れさんして、それからの事ぢやないかえ。

染五　如何にもこの紋盡しの染め型は、先年富士の御狩の時、大小名衆の幕の紋。時に今度の騒動ゆゑ、以前の如く幔幕に、紋盡しを染めよとの仰せ付けられ。ところが、おれが道樂ゆゑ、その染形を質に入れ、金を借りたは釜屋武兵衞。その染形を取戻さうには、金が無し、先からは急がれ、切端詰まつて武兵衞めに、その譯云うて頼んだりや、隨分貸してやる程に、預かり手形をせいと云ふゆゑ、心得たと手形をして、取戻したはこの染形。時に悪者の武兵衞めが、似せ判を拵らへて、金の代りにあのお七を、女房に遣らうと云ふ手形にして、母者人へ見せたゆゑ、母者人にも勘當受ける、おれが不運。全くおれが書入れたではなけれども、謀判しおつたれば、せう事がないわいの。

すぎ　そんならなぜ、その詮議はなされませぬぞ。

傳吉　ハテ、こんな事は女の知つた事ではない。その謀判の詮議を頼む裁許人が、海老名の軍藏だに依つて、出ると負けるは知れてある。所詮こりやア武兵衞でも藤太でも相手にして、染五郎が死なにやア濟まぬ。コレ、若いの、死ね。死んでなりとかぶり付いてなと、お七を武兵衞にやつちやア、人は格別、土左衞門が男が立たぬ。否

でも應でもお七をば、おれがそびいて女房にせにやアならぬ。染五郎お主も男だ。胴骨を据ゑてお七を遣るな。死んで了へ死なにやア立たぬ、先づおれが合點しないぞ。

染五　そりやア、おれも覺悟の前。コレ、おすぎ、爰を聞いてくれ。畢竟おれが謀判を糺した上、云ひ譯が立たぬ段になつた、とゞの詰りは死なにやアならぬ、そりやア元より合點だが、何を云つても母者人に、勘當請けて居る身の上。いま死ぬ時は生々世々、勘當赦さるゝやうがない。日頃わが身を賴むは爰ぢや。勘當さへ赦されりやア、その場から駈け込んで、似せ證文を反古にするか、相手になつて刺し違へるか、二つ一つにさつぱりと、埒明けてしまふ程に、どうぞ勘當の赦りるやう、詫び言しちやアくれまいか。

　トおすぎ、ホロリとして

すぎ　御尤もでござりまする。例へお七さんの事はなしとお前た阿母さんは、元より繼しいお仲ゆゑ、あなたも勘當なさるゝは、世間の聞えも氣の毒なと、仰しやつてではござんすが、大事の〳〵お七さんを、お前が質物になさんしたと云ふ、揉めになつたものぢやに依つて、世間へも立たぬと云うて、勘當なされたのでござりまするシタガ、繼しい中のお前ぢやゆゑ、世間でもあんまりようも云はぬでござんせう。何かに付けて、どうぞ御勘當を赦させましたいものでござんすわいなア。

染五　サア、その執成しを、どうぞ其方がよいやうに、賴むわいの。

傳吉　イカサマ、芝居でも、こんな狂言には、得て勘當がありたがるものだ。吉三どのゝ伯父御、五郎時致どのは阿母の滿江に、丁度主のやうに勘當受けて、兄貴の十郎どのが、ちんぷんかんを云ひ散らして、勘當の訴訟をしたと云ふ事。どうぞ主にも其やうに、世話をして勘當を赦させる、辯口のいゝ人がありさうなものだ。

　ト考へて居る。おすぎ、こなしあつて

すぎ　成る程、云はしやんす通り、曾我物語の滿江さまも河津さまの後家御。こちの阿母さんも久兵衞さまの後家御。

染五　まつた、五郎時致どのは、富士の御狩の假家にて、敵を討たん爲、死出の門出に勘氣の詫びが、名も似寄りの染五郎、謀判の詮議仕損ぜば、討ち果さんと死出の門出。その筋道は變れども、道理は同じ勘當赦し。時致どのに肖つて、叶ふまいものでもあるまい。

すぎ　サア、お笑止な事ながら、その時訴訟なされたやうな、祐成どのがないに依つて。
染五　そこを其方が計らひで。
すぎ　サア、どうもわたしも唐土の事は知らず、勘當の詫びは、どう云うてよいものぢややら、知らぬわいなア。
　ト染五郎、當惑の思ひ入れあつて
染五　コレ、傳吉、なんとお主が十郎どのになつて、詫び言しちやアくれまいか。
傳吉　馬鹿々々しい。おれがやうな十郎が、三千世界にあるものか。それこそ馬士に名主をせいと云ふやうなもの、殊に生れてから、人にあやまつた事のないおれが、どう詫び言がなるものか。
染五　サア、そこが男だ。何もお主があやまつて、詫び言をするでもない。喧嘩の扱ひを素面で、小さな聲で云ふやうなものぢや。お主でも詫び言してくれにやア、誰れも賴む者がない。
傳吉　イカサマ、そこもあるわえ。そんならなんでも、われが馬鹿を盡したを、詫び言する分の事だ。勘當の埓が明かにやア、おれがお七を手に入れる事もならない。いいワ。おれが勘當の詫び言してやるべい。

染五　すりや、訴訟してくれるとか。
傳吉　如何にも。落ちついて居ろ。おれが詫び言してやるぞ。
　ト染五郎、傳吉を拜んで
染五　ア、、忝ない〳〵。
すぎ　コレイナア、傳吉どの、お前、マア、なんと詫び言せうと思はしやんす。
傳吉　なにサ、こんな事に、さう口を叩くにやア及ばないコレ阿母、染五郎が勘當を赦してやらつしやい、おれが詫び言だ、どんな達引があらうとも、爰は一番おれが貰つた、土左衞門の傳吉が、詫び言を聞いてもらはにやア男が立たない。嫌だと云やアおれが相手だ。
　ト傳吉、無性に力むゆゑ、染五郎、おすぎ、呆れし思ひ入れにて、此せりふへかけて
染五　コレ待て傳吉。そりやア喧嘩の扱ひだ。それぢやアゆかない。なんでも主が十郎どのになつて。
傳吉　また云ふよ。十郎どのが云つた事を、どうして、おれが知るものか。
すぎ　待たんせ。それには好い物があるぞえ。
　ト曾我物語の本を持つて來て

コレ、見さんせ。この本は、その祐成さまや時致さまの御一生の事を、草双紙に作つた新版曾我物語。明けても暮れてもお七さんが、これぱかり讀んでござんすが、これに勘當の詫びの所もある程に、傳吉どの、コレ、讀んで見やしやんせ。

ト出す。

染五　成る程、こりやア好い思ひ付きだ。コレ、傳吉、こればつかりは、一生の恩に着る。染五郎が手を合せる。どうぞ訴訟して下されいの。

トほろりと泣く。

傳吉　エヽ、此奴、いま／＼しい。吠えやアがる。

しか　コレ、其やうに云はしやんすな。よく／＼の事ぢやに依つて、殿御の涙を流してのお頼み。わたしらも共々に云うてあげう程に、詫び言してあげて下さんせいの。

傳吉　たんにしろ、七面倒な詮議だが、斯う云やアちつとのろいやうだが、これも惚れてるお七へすると思やアよい。氣遣ひするな。曾我物語でやつてくれうワ。

染五　エヽ、忝ない。

ト喜ぶ。おすぎ、向うを見て

すぎ　アレ／＼、さう云ふうちに阿母さまの、お歸りぢやわいな。

傳吉　南無三、曾我の阿母が歸られちやア、五郎は爰にも置かれまい。隱れろ／＼。

染五　合點だ。そんなら傳吉。

すぎ　ハテ、其うちに阿母さまに見えては惡い。早うお出でなさんせ。

染五　合點だ。

しか　ドレ、わたしもお七さんに、知らせて來ようわいなア。

ト染五郎先に立ち、こなしあつて、おしか、付き添ひ暖簾口へ入る。唄になり、向うより、おたけ、前幕の形にて、若い衆一人、連れて出て來て、直ぐに本舞臺へ來り、門口を入りながら

たけ　ヤレ／＼、草臥れた／＼。

すぎ　阿母さま、只今お歸りなされましたか。

たけ　いま戻つたわいの。留主には誰れも見えなんだかいの。

すぎ　イエ／＼、どなたもお見えなされませぬ。

たけ　ハテナア……お七は機嫌はよかつたかや。ヤレヤレ、しんどや／＼。

ト云ひながら下に居る。傳吉、茶を酌み持つて來て
傳吉　先づお茶をあがりませ。
たけ　これは〱、土左衛門どのか。ヤレ〱、ついに見ぬ奇特な事ちや。給仕人が大曆で、茶が咽喉へ支へまするわいの。
傳吉　今日はお寺詣りでござりますか。
たけ　さればいの、先度の騷動の時分、寺で大分厄介になつて、それから禮もせず、人も遣らずに置いたに依つて今日はその禮參りに行きましたが、イヤモウ、年はとるまいもの、もう歩かれませぬわいの。
傳吉　イヤ〱、まだお若うござりまする。寺詣りにお出でなされまする、後姿を若い奴等が見ては、惜しい者を後家にして置く、流石本郷、名代物だと申しまする。
たけ　ホヽ、。また年寄りを捉へて嬲らしやる。ほんに久しいものぢやわいの。シタガ、今日はいつもと違うて、詞つきも慇懃に、畏まつて、さう實體にして居さつしやれば、男振りまでが、よう見えるわいの。
傳吉　そんなら、色男と見えますか。
たけ　成る程、色男ぢやわいの。
傳吉　その筈でごんす。今日はわしやア十郎祐成が仕打ちをしようと思ひます。
ト思ひ入れあつて云ふ。おたけ、心付かず
たけ　ホヽ、、こりやよからうわいの。十郎さまは男振りの好いばかりか、心柔らかに慈悲深うて、禮儀も備はり、その上勇氣もあつたゆゑ、何一つ不足ない男振り。それぢやに依つて、女中も惚れて色も取れる。こなたも色が取りたくば、今までのわやくを止めて、隨分おとなしうしたがよいわいの。ナアすぎ、なんとさうではあるまいかいの。
すぎ　左樣でござります。イエモウ、すんど温なしうなつてでござりまするわいな。
傳吉　イヤ、温なしいの段ぢやアごんせぬ。常は知らず今日ばつかりやア、十郎どのにならにやア、ならぬ事があるゆゑ。併し、爰に一つ氣の毒な事がごんす。
たけ　ハテナア、十郎どのになるに、氣の毒な事はありそもないものぢや。
傳吉　ある段ぢやアござりませぬ。肝心の五郎どのが居られませぬ。
たけ　なんとしたと。
ト　おたけ、ザツと思ひ入れ。

傳吉　サア、わしが十郎になつたところが、弟の五郎がございませぬ。

たけ　要な人は、何を云はつしやる。今日は十郎どのになりますると云うてぢやに依つて、如何にも祐成さまのやうになつたがよいと云うたに、其身をそのまゝ傳吉どのが、どうして十郎どのにならるゝものかいの。

傳吉　サア、そこをなつてお目に掛けませう。先づわしを十郎にして御覽じませ。お前が曾我の阿母さま、箱根の別當には吉祥寺のお上人。鬼王月小夜は、引ツくるめてお杉。團三郎は十作どの。斯う云ひ並べて見れば、なんと取りも直さず、曾我ぢやアごんせぬか。その曾我の學びに、肝心の五郎どのがなくつちやア、惠比壽講に呼ばれて、酒の出ぬやうなもので、どこか物忘れしたやうなものぢやアごんせぬか。

トおたけ、思ひ入れあつて、ホロリとして

たけ　有爲轉變は世の中の慣ひと云ひながら、憂しと見し世ぞ今は戀しきと、過ぎ行く昔は何事も、いと懷かしう語り慰む事もあるもの。まして御兄弟樣のお果てなされしその事は、面白い事はなうて、悲しい事ばつかりぢやわいの。

すぎ　左樣でござりまする。あなた方のやうなお身の上程哀れな事はござりませぬ。

ト曾我物語の本を取上げ

コレ、この本は新版の曾我物語、讀む者ことに泣かぬ人はございませぬ。

ト目配せして、傳吉が前へ置く。

たけ　サア、其方衆が草双紙讀んでさへ、あなた方のお身の上を、哀れと思うて泣かぬ者はないと云やる。まして妾は御兄弟さまに、直々にお目にかゝつて、お仲のよいを見るに付け、お二人の成行きを、泣かぬ日とてはなかつたわいの。總じて浮世の有樣は、迷へば是非は是非ともに非なり、夢の內の有無は有無ともに無なり、御兄弟の身の上は、明けても暮れても敵を討たんと、命を惜しまず思し召し、千種の花を見ては嘆き、空飛ぶ鳥にも御兄弟心を痛め、分けて痛はしいは小袖乞ひの折から、御勘當の御訴訟なさるゝ、兄御さまの哀れさいとしさ。モウモウ、あのやうな兄弟思ひは、又とあるまい。十郎さまのやうに、お情深い人と云ふは、マア、今の世に

傳吉　ござりますとも。お慮外ながら、女を騙したり、色めいた事は、十郎さまには及びますまいが、賴もしい所

は負ける事ぢやアござりませぬ。十郎どのゝ詫び言は、現在弟の五郎が訴訟。斯う云ふ土左衛門は従弟でも、從々弟でもない赤の他人の五郎が詫び言ゝ阿母さま、どうぞ勘當、赦してやつて下さりませ。

ト以前の本を開き見て

人の親の習ひ、盗みする子は憎うなうて、繩かける者を恨むるは、常の親の習ひにて候ふぞや、母聞いて、左様ならんものを。

トおすぎ、傳吉が袖を引いて

すぎ　コレ〲、そりや阿母さまの云ふ所ぢやわいな。初手のでよいわいな〲。

ト傳吉、心付いて

傳吉　オヽ、こりや云ふ所ぢやアなかつた。人の親の習ひにて候ふぞや。サア阿母。

トおたけ、合點のゆかぬ思ひ入れにて

たけ　コレすぎ。傳吉どのゝ云はしやる事は、なんぢややら解らぬわいの。

すぎ　サア、それはアノ傳吉どのは、さりとは優しい頼もしい人でござりまする。

たけ　何がいの。

すぎ　サア、あなたに訴訟されまする。

たけ　そりや、なんの訴訟ぢや。

すぎ　五郎さまの御勘當のお詫びを。

たけ　そりや、曾我物語の話しぢやないか。

傳吉　イヽヤ、話しぢやごんせぬ。この傳吉が十郎の氣取りになつて、五尺染五郎が勘當の訴訟をするのだ。赦してやつて下せえまし。頼まれたせうがにやア、わしも男どこがどこまでも、赦してもらはにやアなりませぬ。

たけ　イヤ、なりませぬ〲。そんな事なら聞きたうないぞ。必らず云うてもらふまい。娘お七が可愛さに、髪こそ下ろさね、心は疾から尼法師になつて居るわいの。それにマア、腹立てさせる不孝者……見れば、そこに曾我物語がある。それを讀んで見さつしやれ。殺生の苦界には、無量億劫の不孝を招く。そんな事云やれば、腹が立つわいの。

すぎ　エヽ、そりやお情ない。あなたは常に普門品をお讀みなさるゝではござりませぬか。如何なる觀音の誓ひにも、掟を背く者をば赦し候へと、お説きなされたではござりませぬか。

ト此うち、傳吉、曾我物語をあちこちと開き見て

文政九年三月中村座所演

五世松本幸四郎の傳吉

傳吉　イヤ、それよりやア爰に、ゑゝきをひめがあるわえ。
すぎ　そのきをひとはえ。
傳吉　天竺と云ふ所に、生滅婆羅門と云ふきをひがあつて、物の命を千日に千取つて、惡龍に生れんと願を立て、九百九十九人まで取つたれど、いま一人殺さうと思ふ者が、一疋もないに依つて、なんだかむづかしい山や海へ下りて、比翼の龜を捕らへ、殺さうとした所で、その龜が泪を流し、いま八十年の壽命を延びれば、萬年の惡業盡きて佛にならるゝ。然るに今爰で殺されると、また萬年が間後へ戻ると龜が泣くのを、阿母が聞いて、情なやその龜を助けて、我れを代りに命を取れと云へば、婆羅門これを聞き、出來たと云うて龜を捨て、阿母を殺さうとした不孝者。隨分おれも氣が強いが、去年の夏の流行り風に、十日ばかりと云ふものは、阿母の看病して寐ずに居た。それさへあるにこの婆羅門めは、當て事もない、阿母を殺さうとしやアがる。
　トおすぎ、本を取上げ
すぎ　天神地神もこれを捨てさせ給へば、天地裂け割れて奈落に沈む、母を殺さんとする子の命を悲しみて、心ならずも走り迎へ、婆羅門が髻を引ッ摑んで引き留むれば、髪は拔けて母の手にあり、婆羅門は奈落に沈んで苦惱を請ける。
　ト讀む。傳吉、引取り
傳吉　こんな惡い奴さへ、阿母は可愛がつて、我れを殺さうと云ふ事を忘れたと、この曾我物語にも書いてある。
すぎ　まつた、てんりんせう王の譬へ。
傳吉　般足太子の塚の神。
すぎ　皆これ親の慈悲ならずや、佛は衆生を思し召せども衆生は佛を思ひませぬ。親として子を思はぬ者がござりませうか。
　トおたけ、ズッと立ち上がり
たけ　默れ。聞きたうないぞ。滿江御前さまの時致を御勘當なされたは、親御の仁愛、大慈大悲の心から、出家して兄をも立て、家も立てよと御勘當。時致さまの還俗は、御父河津さまへの孝心ゆゑ、母御の詞もお背きなされた。すりや曾我殿原の勘當は却つて孝悌。その物語を不孝者の染五郎めに引比べ、勘當の訴訟などゝは穢らはしい。二度と云ふまい。聞く耳持たぬぞ。
　トおたけ、立腹のこなしにて、内へ入らうとする。暖

簾口より、染五郎、ツカ〳〵と出て來て、おたけを留め

染五　母者人、先づ〳〵お待ち下さりませ。お心に違ひましたる染五郎めでござりまする。只今これへ參りまして私しの不義仕らぬ儀を申し上げませうと存じまして、あれに扣へて居りましたが、兩人の者が嘆きましての、お詫びをもお聞入れなく、餘りと申せばお情なう存じまする。私しめが業でない事、一言申し上げませうと存じまして、お許しなきにこれへ出ましてござりまする。お聞き屆け下されませうならば、有り難うござりまする、

ト泪を拭きながら云ふ。此うち、おたけ、急き込み、いろ〳〵腹立て、思ひ入れあつて

たけ　サア、この母を殺しや〳〵。あの草紙にある生滅婆羅門がやうに、この母を手にかけて、殺せ〳〵。

ト染五郎が方へ摺り寄る。染五郎、當惑の思ひ入れ。傳吉、おすぎ、氣の毒なるこなし。

傳吉　コレサ、阿母、そりやアあんまり無理と云ふもの。

たけ　何が無理ぢやぞいの。親が子を勘當するに、人の知つた事かいの。昔から今に至るまで、勘當受けた子が、取次なしに親に物を云ふさへあるに、穢れたその手でわしを引留むるやうな事が、どこの勘當にあるものぢや。勘當赦さぬが腹が立つに依つて、殺さうと思ふのか。サア、殺しや〳〵。

ト詰め寄る。染五郎、あやまり入つて段々尻込みする

おたけ、泪を拭いて

エヽ口惜しいわいの〳〵。今こそ町人の久兵衞が後家元は河津さま、御家人。わしや侍ひの娘ぢやが、いま町人になり下がり、殊に女の親ぢやと思うて、侮つての事か。コリヤ、よう聞き居れ。あのお七はナ、夫久兵衞どのが、家にも身にも引替へて、不便がられたあの娘を、なぜ賣りをつた。イヤサ、妾奉公に出しませうと、よう手形に書いてやりやつたな。コリヤ、時致さまはな、御父河津さまへ孝行の爲に還俗なされた。それさへ阿母樣の御勘當。ましておのれは父親久兵衞どのゝ寵愛の、娘を賣つた不孝者。母が勘當せいでなんとせうぞいやい。ほんにモウ、お七と云ふ子さへ無くば、おのれがやうな不孝者を、なんの見て居やうぞ。おりや自害して、死にたいわいの〳〵。

ト泣き落す。染五郎、思ひ入れあつて

染五　コレすぎ、おりやマア、どうした因果であるぞいの。

氏神樣のお罰を請ける法もあれ、母人の事、仇跡かには思はねど、直々に云ふとすれば、御機嫌に背く。其方、取次ぎ聞いてたも。凡夫盛んに神祟りなしとやら、非道な者は益々榮え、正路な者は押籠められて、頭が上がらぬ今の浮世。範頼公の御謀叛を、誰れ一人押へる者もなく、權威を振ふやうなもので、この染五郎も如何に馬鹿者なれどとて、現在の妹を、金借り手形に書き入れやうか。惡人めらが計らひで、手形を拵らへ、似せ判までを捺したるゆゑ、理非を糺して、わしが惡名雪がんとは思へども、その役人も同類なれば仕方がない。この上は死なうより外の思案はごさりませぬ。

ト おたけが方を向き、また居直り

イヤ、こりや又慮外であつた。コレおすぎ、御勘當お赦しあれば、その座より立越して、證文の理非を糺し、叶はぬ時にやア町人でこそあれ、荒井の藤太と武兵衞めを討つて捨て、潔よう自害して、親久兵衞さまへ云ひ譯する。

ト 又おたけが方へ向ひ

サア、爰の道理をお聞き屆け下されば、どうぞお慈悲に御勘當、お赦しなされて下されませ。曾我御兄弟も富士の御狩に敵を討ち、共に死する門出に、御勘氣をお詫びなされし例もあれば、拙者めにも御勘當、お赦しなされて下さらば、親々への孝心も立ちまする。まつたお赦しなき時は、時致さまと同し事、父上への孝は立てど、母者人へは不孝の上塗り。未來永々盡きる事はこざりませぬ。

ト 思ひ入れあつて

斯う云ふ事をお願ひ申す前表にや、曾我物語に習ひまして、現世未來の祈禱の爲、法華經一部讀み覺え、毎日晝夜六萬遍の題目も、父上の菩提の爲、今日までもついに怠つた事もござりませぬ。どうぞお慈悲にお怒りを宥められ、御勘當お赦しなされて下されませ。

ト 泪ながら云ふ。おたけ、又ツイと立つて行かうとする。

コレ申し。

ト 染五郎、留めるを振り切り

たけ　コリヤ、引留めてなんとするのぢや。玆な不孝者めが。これに付けても死んだ佛が存生なら、おのれらに此やうに、侮らるゝ事もあるまいに、長生きして口惜しい、口惜しいわいやい。

ト泣き落し、また思ひ直して
アヽ、不孝者にかゝつて、お勤めが遅うなつた。ドリヤ奥へ行て、お題目でも唱へませうか。
ト行かうとするを、染五郎、留める。振り切つて、唄になり、おたけ、思ひ入れあつて、奥へ入る。染五郎後見送り、當惑の思ひ入れ。おすぎ、こなしあつて
すぎ　申し、五郎さん、もう今日はどう云うても叶ひませぬ程に、なんにも云はずに、お出でなされませ。
染五　ムウ、叶はぬとは、そりやなぜ。
すぎ　サア、お前、曾我物語を見たと仰しやつたが、これ忘れてかえ。
ト本を取上げ。
コレ、御覽なさんせ…我れらが思ふ事、母に露程も知らせ奉るべきか、計らひ候へと云ひければ、爰が時致さまの賢い所。時宗聞いて思ひも依らぬ御事なり、人の子が謀叛を起して出で候はぬに、その親聞いて急ぎ死んで、物思はせぬよとて喜ぶ母や候ふべきと書いてござんす。これを見ながら、御勘當さへ赦りたなら、直ぐに籐太を殺しての、武兵衞を切つてのと云うて訴訟さしやんしたとて、オヽ出かした、勘當赦す、行て死ねと阿母さまが、仰しやりさうなものぢやと思はしやんすか。其やうな云ひ損なひがあるゆゑに、今日の訴訟は叶はぬと云ふ事でござんすわいな。
染五　ムウ、こりやア成る程誤まつた。手形書かぬ云ひ譯せうばつかりで、そこの所へ氣が付かぬは、おれが不念イカサマ、斯うなる程の運おやに依つて、する程の事が行き違ふも尤も。コレ、傳吉、なんぞ好い思案はあるまいか。
ト傳吉、ツイと立つて行く。染五郎、留めて
コレ土左衞門、人が物を云ひかけるに、なぜわりやア返事をせぬのだ。
傳吉　やかましいわえ。どうぞお七を手に入れようと思つて、七面倒な荒事をやつたり、輕薄云うてあやまつたが、役にも立たぬ曾我物語。われにかゝつて錢儲けまで忘れちやアならない。オヽ、もう馬鹿な相手にやアなつちやア居ない。これから二三杯引ッかけて晝寐をするのだ。どうしても、あのお七は、おれが手に入れにやア置かない。われがいくら世話やいても、範頼どのでも糊賣りでも、おれがやらない。この土左衞門傳吉がやらないぞ。ドリヤ、お七を泣かせる夢でも見ようか。

ト合ひ方になり、傳吉、ツイと奧へ入る。おすぎ、氣の毒なる思ひ入れ。
すぎ　ア、なんぢややら、譯もない事云うて……申し、五郎さん、便りに思うた傳吉どのはあの通り。お前マアどうなさるお心ぢやえ。
染五　アア、どうと云うて、今さら仕樣も急にはない。
すぎ　それぢやと云うて。
染五　ハテ、また好い思案もあるであらう。
すぎ　わたしも思案して見ませうわいな。
染五　そんなら、おすぎ。
すぎ　五郎さん。
染五　後に逢はう。
ト唄になり、おすぎ、暖簾口へ、染五郎、下座へ入る。と直ぐに奧より、おせ、窺ひ〳〵出て來る。後より、おしか、お高祖頭巾と腰帶を持ち、出て來て。
お七　おしかさん、奧の首尾はどうでござんした。母さんが見はさんせなんだかいなア。
しか　イエ〳〵、小母さんは看經にかゝらしやんすと、なんにも知らしやんす事ではござんせぬ。コレ、お七さんわたしや腰帶と頭巾は持つて來たれど、あの吉祥寺まで行かしやんすに、わたし一人では心細い。なんとおすぎどのに、ちよつと知らせてはどうでござんす。
お七　イエ〳〵、そりやモウ直にならぬと云ふわいなア。昨日も吉三さんに逢ひたうて〳〵ならぬゆゑ、すぎに、どうぞ母さんに知れぬやうに、連れて行てたもと、わたしがソツと頼んだりや、つがもない事仰しやる。お前ゆゑに今度の揉めのある中に、どうして駒込くだりまで、連れて行かるゝものぢやてゝ、どうか母さんにも云ひさうにあつたゆゑ、そんならよしにしよう程に、必らず此やうな事、母さんに云うてたもんなと留めて置いたわいな。それぢやが、わたしや吉三さんに逢ひたうて〳〵、寐ても覺めても忘られぬわいな。畢竟今度の揉合ひも、あの武兵衞めが恐ろしい企み事。兄さんまでに苦勞をかけ、ひよつとあつちへ行くやうにでもなつたなら、わたしは生きては居ぬ覺悟。例へどのやうな憂き目に逢つて、身は八裂きになるとても、吉三さんより外、殿御は持たぬわたしが心。それ知つて居さんすおしかさん、どうぞ誰れにも知らせずに、吉祥寺へ連れて行て下さんせ。わし一人でも行く氣ぢやけれど、どうも道が知れぬゆゑ、お前を力に行く程に、どうぞ連れて行て下さんせいな

ア。
しか　そりやモウ、氣遣ひなさんすな。ほんにお前の身になつても、大抵の心遣ひぢやあるまい。ようござんす。わたしが連れて行て上げう程に、マア〳〵、支度さしやんせいなア。
お七　そんなら、誰れにも知らせずに、連れて行て下さんすか。そりや嬉しいわいなア。
トいそ〳〵して喜ぶ。おしか、頭巾を着せ、腰帯を締めてやる。お七も衣紋など直し、身拵らへして
しか　サア、ござんせ。
トてんつゝになり、兩人、花道へ行きかゝる。向うより、長沼六郎、ぶッ裂き羽織、野袴、大小の形。釜屋武兵衛、前幕の形にて、侍ひ大勢、付き添ひ出て來る。お七、おしか、顔を外けて通らうとする。行き違ひに六郎見咎め
六郎　コリヤ待て女。滅多に人目を忍ぶ體。何にもせよ怪しい奴だ。待ちやアがれ。
ト引き留める。兩人、ハッとこなしあつて
しか　イエ〳〵、わたしらは、何も怪しい者ぢやござりませぬ。この邊の町人の娘でござりまするが、急に用事がござりまして。
ト行かうとする。武兵衛、留めて
武兵　オッと待つたり。合點のゆかぬ様子と云ひ、八百屋の隣りの娘が、誰れを連れて、どこへ行くのだ。どレマア。頭巾を引ッ剝いで。
ト取つて
ヤア、わりやアお七。ハテ、えゝ所で逢つたなア。
六郎　なんだ、お七ぢや。取逃がすな〳〵。
トお七、おしか、逃げうとするを押へて
武兵　一寸もやるこつちやアござりませぬ。動きやアがるな。
ト引据ゑる。
六郎　ドリヤ〳〵。
トお七が顔をよく〳〵見て
ても見事、ハテ美しい者だわえ。範頼どのゝ望まれたも尤もだ。イヤ。爰なぼつとりもの。イカサマ、天女も跣足、誂らへても斯うは出來ない。コリヤ〳〵武兵衛、こりや御奉公になる事だ。喜べ〳〵。
武兵　イヤモウ、私しも不圖した事申し上げまして、今日までも彼れめが得心いたさいで、難儀いたしましたが、

今日は是非連れて參らうと、只今お供いたすところ、さて好い所で見付けましてござりまする。片時も早くお館へ、お連れなさるがようござりまする。

六郎　イヤ、さうでない〳〵。斯くお七めが手に入るからは、例へ親がやるまいと吐かしても、この六郎が貰はにやア置かない。氣遣ひするな。ドリヤ〳〵、某が阿母に逢つて、彼奴も共々御前へお出入り致すやう、申してくれん。武兵衞、八百屋へ案內いたせ。

ト立ち上がる。

武兵　そりやア有り難い思し召しでござりまするが、ひよつと邪魔が入つた時にやア、拾つた金を打ッちやるやうなもの。まんまとお手に入つたお七、取逃がさぬうち、マア、お屋敷へお連れなされませ。

六郎　そりやアちつとも氣遣ひするな。長沼六郎が手に入れたからは、金輪際放す事ではない。サ、、案內いたせ。

武兵　そんなら、斯うござりませ。

ト本舞臺へ來り、門口を入る。皆々入り、捕り手は門口に扣へる。

阿母は內でごんすか。阿母〳〵。

ト奧にて

たけ　誰れぢや。

すぎ　どなたぢやえ。

ト奧より、おすぎ、おたけ、出て來て、皆々を見て、ハッとこなし。

六郎　八百屋の後家は彼れか。

武兵　左樣でござりまする。コレ阿母、あなたは長沼六郎さまだ。お目見得さつしやい。

たけ　ヘエ、あなたが承り及びました、六郎さまでござりますか。

六郎　如何にも。

お七　申し母さん。

トおたけが方へ行かうとする。武兵衞、引き留める。お七、エヽと俯向く。

たけ　ハテ、泣く事はないわいの。恐れながら六郎さま、私し風情の町家へ、お出でなされまするさへ憚り多う存じまするに、娘お七をお捕へなされて、なんとなされまする。

六郎　なんともしないが、この六郎は娘お七が迎ひに來た。

三人　エヽ。

　ト惘り。

六郎　サア、先達てよりこの武兵衞を、幾度迎ひに遣はしても、酢の蒟蒻のと延引するゆゑ、今日は自身に乘り出したのぢや。町人風情のこの娘、範頼公のお側へ上がると云ふは、冥加もない有り難い事ではないか。

たけ　これは〱、何事かと存じますれば、合點のゆかぬその仰せ。範頼さまのお側仕へに、娘お七を上げませうとは、そりや何者に御對談なされまして、誰が上げませうと申しましたやら。左樣な事は一向私しは存じませぬ。

武兵　イヤ、阿母、さうは云はれまい。先達てこなたの息子、お七が兄の染五郎が、この武兵衞に金借りて、その質物に妹お七を、奉公に出さうと云ふ證文書いて、牡丹餅程な印形を、しつかりと捺してあるぞや。それに今さら知らぬとは云はれまい。隱し立てして大事の娘、捲上げられるのみならず、こなたも今まで住み馴れた、この屋體をぼい捲られまいものでもない。それぢやアこなたの爲にならぬぞ。

たけ　イヤ〱、お爲ごかし、措いて下されいの。こちの爲より、こなたの爲になるまいわいの。

武兵　ナニ、こなたの爲にならぬとは。

たけ　サア、女の子は父親の、歴として居る時でさへ、母に從ふ世上の習ひ。ましてお七は父親なし、後家のわしが育てた娘。それをわしには沙汰もせず、兄が合點でやらうと云うたてヽ、彼れが自由にならうかいの。殊にあの染五郎のならずめは、そんな惡い事する奴ぢやに依つて、疾に勘當してしまうたわいの。それぢやに依つて、彼れがこなたと相對で、法に背いた事して置いたを、根に持つて云はしやつても、誰れが合點するものぞいの。例へ將軍樣の仰せでも、横しまな事で下々を押へようとなされても、そりやなるまい。わしも娘はやられぬわいのサ、お七、構はずと爰へおぢや〱。

お七　アイ〱。

　ト立たうとするを、武兵衞押へる。

すぎ　爰へござんせ〱。

お七　サア、行きたいけれど、武兵衞さんが捕へて……エヽ、爰放して下さんせ。エヽ、放して下さんせいなア。

　トいろ〱身を揉む。

武兵　イヤ、放さない。身悶へすると着物が破れる。ヂッ

として居ろ……コレ阿母、こなたの理窟も聞えたが、マア、よく考へて見さつしやい。誰れあらう範頼さまのお望みなりや、手形がなくても、達て娘を上げいとありやア、出さずには置かれまい。すれば、どうで差上げにやアならないぞや。ぢやに依つて、是非とも連れて行くのだが、とても事に、こなたにも得心させて、機嫌よく連れて行かうと思うて、念を入れるのだ。

たけ　イヤ、機嫌よくりやますまい。成る程、虫けら同然のわしらが娘、高位のお方のお望みなりや、どうでも好きになる事ぢやが、こればかりはなるまいわいの。ハテ高位の仰せを背かぬも、天下の掟が嚴しいゆゑ。此やうな横しまな掟が、どこにあるものかいの。その本人にも母親にも合點させず、人の娘を無理無體に、威勢で連れて行かうと云ふ、そんな非道な掟なら、わしやどうもなんともない。ならば娘を連れて行きや。わしが息の通ふうちは、やらぬ〳〵。アイ、やる事はならぬわいの。

武兵　コレサ、阿母、惡い合點だ。天下の掟の奉公手形、その證文があるからは。

すぎ　サア、その證文も似せ物。

武兵　默りやアがれ。似せ物とはなんの事だ。染五郎が謀判したのか。云はせて置きやア太い奴等だ。われが知つた事ぢやアない。すッこんで居やアがれ。モシ、六郎さま、四の五の云ふにや及びませぬ。早くお七をお連れなされませ。

六郎　イカサマ、どう云つても得心しさうもない樣子。早く連れて歸るべい。引ッ立てろ。

侍ひ　ハア。

　トお七を引ッ立てる。おたけ、取付き

たけ　イヽヤ、やる事はならぬ〳〵。

武兵　退かつしやい。

　ト突き退けて、また取付くを押へ

　構はずと、ござりませ。

　ト渡り拍子になり、六郎、お七を引ッ立て、侍ひ皆々付いて、花道へかゝる。向うバタ〳〵にて、傳吉、以前の形にて、走り出て來て、皆々を押し戻し、お七を圍つて、しやんと見得。

六郎　ヤア、狼藉者、搦め捕れ。

侍ひ　捕つた。

　ト傳吉にかゝる。大勢を投げ退け、お七を引付けて

傳吉　どいつでも、指でも差すと毆り殺すぞ。

たけ　オヽ、傳吉どのか。好い所へ來て下された。マアマア娘、爰へおぢや。
ト寄らうとするを突きのめして
傳吉　さうはならない。おれ樣が爰へ來たは、貴樣達の肩持ちに出やアしない。コレ、阿母、このお七は、おれが貰つた。何も歸しやアしない。また範賴でも糊賣りでも、將軍さまでも乞食でも、やりやアしない。この傳吉がお內儀樣だワ。
六郎　イヤ、此奴、慮外な奴だ。物な云はすな、ふん縛れ。
武兵　アイヤ、マア〳〵、お待ちなされませ。私しが申し宥めませう。コリヤ傳吉、わりやア氣が狂つたか。明神祭りの手古舞ひで、勢ふとは違ふぞ。相手が惡い、お役人さまだぞ。若い者仲間の達引とは席が違ふワ。出直せ出直せ。さうないと爲にならぬぞ。この出入りは、おれが付ける。マア〳〵、お七を、此方へ渡せ。
傳吉　默りやアがれ、げんばく野郎め、相手が違ふも氣が強え。誰れだと思ふ。土左衞門の傳吉さまだぞ。おれ樣がこのお七にかツ惚れて居る事は、本郷きつて下谷でも箕輪の端までも知らぬものは一人もない。それに八面大王であらうが、どいつであらうが、このお七に指でも差させちやア、土左衞門が男が立たない。首が欲しかア勝手にしろ。お七はおれが女房だ、無駄口を叩かずと、早く內へ歸りやアがれ。
侍ひ　もう許されぬ。
トかゝらうとする。
六郎　コリヤ〳〵、待て〳〵。ハテサテ、小氣味のよい奴ぢやわえ。シタガ傳吉、わりやアなんにも知らないな。範賴公はなんぢやと思ふ。忝なくも將軍實朝公の伯父君、そのお方のお目にとまつたその娘、召寄せらるゝに妨げするとは、身の程知らぬ奴ぢや……イヤ、斯う云うても、實朝公やら範賴公やら知るまいが、下々の匹夫には知れぬ筈だが、所詮わいらが兎や角と云つたとて叶はぬ事ぢや。今日このお七が迎ひに向うた某は、鎌倉の役人、長沼六郎と云ふ者だ。早くお七をおれに渡せ。
傳吉　おきやアがれ。なんだ、長沼だ。道理で鼻の下が長いと思つた。長沼でも鈍間でも、無理にと云やアおれが相手だ。お七を渡す事はならぬわえ。ハヽヽヽ、おへねえ二本棒ぢやアねえか。
トぶツ坐る。六郎、急き込み

六郎　うぬ、憎い奴。もう許されぬ。逆磔刑にかけてくれる。者ども彼奴を

侍ひ　心得ました。

ト傳吉にかゝる。立廻りにて、傳吉、お七を取つて押へ、脇差を咽喉へ押當てる。皆々恟り。おすぎ、おたけ、心遣ひあるべし。

傳吉　とても多勢に叶はぬからは、お七をも刺し殺し、この傳吉も腹切つて心中立てる。これでもわいらは歸らぬか。

六郎　イヤ、此奴、いろ〳〵にくらへそばへる奴だ。なんでもお七を此方へ渡せ。

ト寄らうとする。傳吉、また脇差を突きつけ

傳吉　寄りやアがると一突きだぞ。

お七　あれえ〳〵。

ト焦る。皆々心遣ひあるべし。

武兵　ア、、コレサ〳〵、氣の短かい。お七に疵を付けられちやア、あなたへ對しておれが濟まぬ。コレサ、土左衞門、おれは構はぬ。粗忽をするな。ア、、困つた男だわえ。

傳吉　其方からさへ構はねば、おれが大事のおかみさん、なんの殺して詰まるものか。それとも構やア、たつた一突き。

六郎　ア、、コレサ〳〵、危ない〳〵。手は出さぬぞ。ても氣丈な奴だ。肝心の玉を捲上げて、好きな我まゝを吐かし居るから、どうも指も差されない。コリヤ〳〵、武兵衞、今日は身共は、マア歸らうわえ。

武兵　アイヤ、只今お歸りなされば、お七をばあの者が連れて歸るでござりませう。

六郎　でも、彼奴めがお七を手籠めにして、渡せと云やア殺すと吐かす。ナニ傳吉、わりやア手柄者だ。果報者だ、例へどのやうに働らいても、大勢を以て搦めるには、なんの雜作もない事ぢやが、人質を取られたゆゑ、先づ某は歸つてくれる。必らずともに早まるまいぞ。

傳吉　おれが女房のこのお七、殺さうが生かさうが、いらぬお世話サ。

武兵　うぬ、その頰桁を。

傳吉　どうしたと。

武兵　エ、、おのれは……イヤ、憎くもなんともない奴だ。サア、ござりませ。

ト合ひ方になり、武兵衞、六郎、侍ひ、皆々向うへ入

ろ。傳吉、矢張りお七を押へて居る。お七、いろ〳〵
踠く。
たけ　コレ〳〵、お七、手を出しやんな。危ないわいの危
ないわいの。
すぎ　コレ傳吉どの、こなさんもマアあんまりな。いとし
ほなげに、お七さんを其やうに、情ない手籠めにして、
なんとさんすぞいな。
傳吉　なんともしないが、情ないとは其方の事。日頃おれ
が頼んで置くに、なぜわりやア取持つてくれないのだ。
おれが女房になつて居りやア、今日のやうな難儀はさせ
ない。それにお七を此方へ寄越せ、やるまいわえ。今の
やうな二本棒を相手にして、命を捨てゝかゝつたも、こ
の玉を捲上げようばつかり。のめ〳〵とやつて詰まるも
のか。コレ、阿母、なんでも娘はおれが貰つた。オヽ、
内へ連れて歸る程に、マア、さう思つてもらひませう。
サア來いお七。エヽ、來やアがれ。
ト引立てる。此うち、脇差を下に置く。おすぎ、取つ
て隱す。おたけ、取付き
たけ　コリヤ、娘をどこへ連れて行くのぢや。ならぬ〳〵。
ト取付くを、傳吉、立廻りにて、おたけが胸倉を取つ
て、お七を膝に引敷き、そこらを見て
傳吉　女め、うぬ、脇差を隱しやアがつたな。
すぎ　オヽ、隱した。もうこれからは怖うない。サア、阿
母さまを放さぬか。
たけ　爰放さぬか〳〵。
傳吉　放してやるまいものでもないが、どうだ、お七をお
れにくれるか。くれると云はにやア、カウ〳〵〳〵。
トこづく。
たけ　アヽ、痛い、切ないわいの。エヽ、おのれはなア。
纐纈さまでさへ、道でなけりや上げぬお七。おのれら風
情に誰がやらうぞいの。それ程欲しか、わしを殺して、
どうなとせい。サア、殺しや〳〵。
ト摺り寄る。
傳吉　どう云や斯う云ふと、はツつけ婆アめ。
ト傳吉、おたけを散々にくらはす。おすぎ、支へるを
これも同じくぶち据ゑる。暖簾口より、染五郎、飛ん
で出て、傳吉を取つて見事に投げる。傳吉、投げられ
て呆れし思ひ入れ。
染五　コリヤ、妹、氣遣ひするな。この染五郎が來たか
らは、無體吐かしやアどいつでも、どなた樣でも、おれ

が相手だ。

すぎ　オヽ、五郎さん、好い所へござんしたなア。

　ト此うち、染五郎、肌を脱ぎ、傳吉へかゝらうとして、傳吉と顔見合せ、おたけ、脇見して居る。染五郎、肌を入れる。おすぎ、留めて

コレ〳〵、慮外も時に依る。大事ない〳〵わいなア。

　ト傳吉、染五郎が胸倉をズッと取り

傳吉　コレエヽ、うぬア青二才の分際で、この傳吉を投げやアがつたな。

すぎ　遠慮せずに〳〵。

染五　オヽ、投げた。投げたが、なんとした。

すぎ　さうぢや〳〵。

　ト喜ぶ。

傳吉　老ぼれや女めらばかりだと思つて、油斷して居る所を、うぬアよく投げやアがつたな。

染五　オヽ、年寄りや女を相手に、騒ぎやアがるから投げたのだわえ。

傳吉　うぬ。

　トかゝるを散々に叩き据ゑ

染五　ヂタバタすりやア、殴り殺すぞ。

　ト力んでおたけを見て、又チッとなる。おたけ、おすぎに染五郎を見て、目配せする。

すぎ　大事ない。遠慮はいらぬ程に、ナア。

　トおたけと傳吉へこなし

染五　ムウ、なんの遠慮。お七に指でも差して見ろ。叩き殺すぞ。

すぎ　さうぢや〳〵。

　トまた染五郎、傳吉にかゝる。傳吉、腹を立て、打つてかゝり、摑み合ひになるを、おすぎ留めて

すぎ　コレ、もうよいわいな。あんまりぢや〳〵。

染五　イヤ、こんな奴ア、叩き殺してしまふがいゝ。

　ト又かゝる。おたけ、思ひ入れあつて

たけ　コレ染五郎、もうよいわいの。出かしやつた〳〵、それでこそ、わしが子ぢや。

染五　エヽ、そんなら御勘當。

たけ　オヽ、赦さいでわいの。

すぎ　すりや、御眞實。

たけ　死なしやつた佛様かけて

染五　お赦しなされて下されますか。

たけ　くどいわいの。

染五　傳吉。
傳吉　染五郎。
染五　まんまと首尾よう。
兩人　エヽ、忝ない。
　ト兩人喜ぶ。おすぎ、おたけ、合點のゆかぬこなしにて
すぎ　こりやマア、どうでござんすぞいの。
たけ　わしも合點がゆかぬ。今まで刻んでも飽きたらぬ程わやく云うた傳吉どの、殊に五郎に最前から、打ち打擲に遭ひながら、わしが勘當赦すと云や、互ひに仲よう嬉しがらしやる。こりやマア、どうした譯ぢやぞいの。
傳吉　サア、合點のゆかぬも尤も。こりやみんなわしと五郎が仕組みでごんす。お七を手形に書入れたも、全く五郎が業でもなく、みな武兵衞めが惡企み。その元分けを糺さんにも、勘當と云ふ身に曇りある染五郎、所詮生きては居らぬと云ふを、見ても居られぬ義理。そこが友達のよしみゆゑ、不便さ餘るわしが計らひ。最前お七どのを口說いたも、彼奴をぼい返す爲に仕組んだ狂言。
染五　その狂言の序開きは、勘當御免あるやうにと、願はん爲のわしが荒事。
傳吉　この傳吉が敵役も
染五　妹を口說いて手籠めにしたも
傳吉　阿母を折檻したも、お七を今の侍ひに、やらぬ仕組みのわしが幕切れ。
染五　落ちる所は母者人の、心を少しは休めんと
傳吉　孝と誠の頼もしづく。この傳吉に免じても、どうぞ勘當。
染五　お赦しなされて下さらば
兩人　有り難う存じまする。
　ト平伏する。おたけ、喜びし思ひ入れにて
たけ　コレ、傳吉どの、マア〳〵爰へ來さつしやれいの。こなさんはマア、日頃喧嘩好きの我まゝ者、それに五郎が仲の好いのも、氣にかゝつて居ましたに、さりとは賴もしい、武士も及ばぬ志し。さうとは知らずこれまでは、疎かにして、今さら面目ないわいの。曾我の五郎さまには、朝比奈どのと云ふ後楯があつて、度々の難儀をお遁がれなされたが、その朝比奈どのにも劣らぬこなさんの志し、お七が難儀を救ふさへあるに、染五郎が詫び言まで、ほんに禮の云ひやうもないわいの。コレ〳〵お七、何をウツカリ、傳吉どのに、よう禮云やいの。

おせ　ほんにマア、思ひがけなう、力になつて下さんしたゆゑ、わたしもひやいな難儀を遁がれ、兄さんの御勘當も赦りると云ふは、此やうな嬉しい事はないわいの。わたしや斯うなる事とは知らず、先刻にお前に手籠めに遭つな時は、憎うて〳〵、恨んでばつかり居たわいなア。

すぎ　それ〳〵、わたしもハラ〳〵思うて居りましたが、憎いと思うた傳吉どのは、頼もしい志し。五郎さんの御勘當はお赦しある。ほんに此やうな嬉しい事はござんせぬわいなア。

たけ　其方衆の嬉しいも尤も。わしもこれで落ちついた。シタガ、傳吉どの、この上ともに、よいやうに頼んだぞや。

傳吉　そりやアわしが請合ふからは、ちつとも氣遣ひごんせぬが、また彼奴めが來るでごんせう。その用心をして置かつしやりませ。

染五　それもちつとも氣遣ひない。兼ねて仁田さまへお頼み申して置いたれば、氣遣ひな事はごんせぬが、今の樣子を仁田さまへ、ちよつと知らせて來ませうか。

傳吉　イカサマ、こりやアさうせざアなるまい。仁田どのが扣へてござりやア、なんぼ彼奴らが力んでも、所詮及ばぬ事だ。そんなら早く行つて來やれ。

すぎ　もし其うちに來たならば。

傳吉　ハテ、そりやアこの傳吉が扣へて居る。シタガ、わしもちよつと一風呂入つて來よう。

たけ　イカサマ、なんぼ狂言でも、身節が痛まう。揉んでござれ。

染五　そんなら傳吉、母者人。

傳吉　阿母、後に。

たけ　酒振舞ひませう。

ト合ひ方になり、染五郎は向う、傳吉は下座へ入る。

おせ、おすぎ、おたけ、殘り、あと見送り

すぎ　申し、阿母さま、ほんにマア、噓ながらあなたも、いから叩かれなさんしたが、どこぞ痛みは致しませぬか。

たけ　イヽヤ、痛むやうには叩かれねど、大分氣を遣うたゆゑか、血の道が起つて、肩が張つて來た。ちと和らげてたも。

おせ　わたしが揉んで上げうかえ。

たけ　イヤ〳〵、すぎがよい〳〵。其方にちと云うて聞かす事がある。爰へおぢや。すぎや、サア、揉んでたも揉

んでたも。

トお七、思ひ入れあつて、おたけが側へ寄る。おたけ居直り、おすぎに肩を揉ませる。

たけ　コレ、お七や、其方に疾から云うて聞かさうと思うたが。今までは扣へて居たが、この母が云ふ事を、よう聞きやや。今日のやうな難儀の起るも、其方があの吉三さんに迷うたゆゑ。此やうに端近い町中の事ぢやもの、隠す／＼と思うても、いつしか人の目つめにかゝつて、あんな事になるわいの。殊に戀路の習ひ、どんな事の詰まりになると、身をも命をも惜しまぬは浮世の情愛。兎角其方も、あの吉三さんを、いとしいと思うて居やるであらうが、その可愛いと思ふが、却つてあなたのお爲にならぬ。吉三さんと其方が仲、もし上へなと知れて見や、吉三さんのお身の大事。さすれば其方ばかりか、この母まで、不忠者よ不義者よと、後の世までも惡名を殘し、後指差さるゝがわしや口惜しい、悲しいわいの。爰の道理を辨まへて、どうぞ思ひ切つてたも。思ひ切つてたもいなう。

ト泣く。お七、しやくり上げて居る。

コレお七、この母が手を合す。吉三さんの事は、どうぞ思ひ切つてたも。

トお七、俯向いて矢張り泣いて居る。獨吟、相の山になり、向うより、吉三郎、編笠をかむり、胡弓を摺りながら、出て來る。

あれ聞きやつたか、今唄うた相の山の四つ門。あろ／＼の境界は、みな常ならぬ仇なる事に、心を留むる人を戒むと、吉三さんや其方が身の上。いつまでも若うては居ぬものを、變るまいぞと迷ふが煩惱。その煩惱のとゞの詰まりは、死なねばならぬ義理になり……サア、死んで花實は咲かぬ程に、どうぞ吉三さんの事は、思ひ切つてたもいなう。

トお七、しやくり／＼泣いて居る。トまた相の山になり、吉三郎、門口に胡弓を摺つて居る。お七、透かし見て、立たうとする。おすぎ、立つな／＼と思ひ入れにて留める。おたけも心付きし思ひ入れある。

すぎ　手の暇がない。通りや／＼。

たけ　これサ、進ぜませう。ハテ、面白いのに、なぜ通れいと云やるぞいの。

お七　ほんに、母さんさへ面白いと聞いてござんすに、すぎはマア、知らぬものかなんぞのやうに。

たけ　ムウ。知らぬ者かなんぞのやうにとは、そんならありや、其方、近付きかや。
お七　サア、あれはな。
　トつかへる。おすぎ引取り
すぎ　イエ〳〵、近付きでもなんでもござりませぬが、知らぬ者かなんぞのやうにと仰しやつたは、ありやアノ
　トつかへて
オヽ、それ〳〵、あなたのお好きな胡弓や唄を、知らぬかなんぞのやうにと、私しをお叱りなされるのでござりまする。
　ト云ふうち、お七、立たうとする。おすぎ、留める思ひ入れにて、おたけが肩を強く揉む。
たけ　アイタヽヽ、こりやあんまり強いわいの。さて〳〵面白い事ぢや。もつと聞きたい。唄はせい〳〵。
　トまた相の山になり、吉三郎、胡弓摺つて居る。おたけ、聞入りし思ひ入れにて、居眠りする。お七、立たうとする。おたけ、眼を明け、恟りして下に居る。吉三郎、外より覗き見て、立つな〳〵と云ふ思ひ入れ。お七、いろ〳〵こなし。おすぎ、ヂツとして居いと、いろ〳〵氣を揉み、又おたけが肩を強く揉む。おたけ目を覺まし
たけ　コリヤ、なんとするのぢや。
　ト云ふを聞き入れず、おすぎ無性におたけを、こづき廻し搖ぶる。おたけ、驚ろき
コレ〳〵、すぎや、こりやなんとするのぢや。
　トこれにて、三人ともに恟りして、お七はしやんとする。吉三郎は小隱れする。
あんまり強うて、肩も着物も堪るものではない。それはさうと、大分氣が欝々として來た。氣晴らしに酒一つ飲みませう、すぎ、ちよつと銚子杯持つておぢや。
すぎ　ハイ。
　トうぢ〳〵して居る。
たけ　早う持つておぢや。
すぎ　ハイ〳〵、兎角、内も外も用心したが、よささうなものぢや。
　ト門口へ思ひ入れして、暖簾口へ入る。お七、吉三郎に逢ひたきこなし、いろ〳〵ある。
たけ　アヽ、何事も、みな迷ひぢやなア。コレお七、其方はマア先刻から、いかうソワ〳〵して居やるが、アヽ聞えた。また吉三さんの事ぢやな。必らず其やうに、き

なきな思はぬがよいぞや。何事も執念深いは、いかい罪ぢや程に、ハテ、命さへありや、又どうなとなると思うたがよいわいの。今わしが取りにやつた酒、一つ呑めば樂しみ、二つは過ぎる、三つは足らぬと、それから段々重なれば、遂にその身を失ふ種ぢやに依つて、過ぎぬやうに、たつた一つばかりはの。アレあの

　ト木戸へ思ひ入れ。吉三郎、チツとこなし。

サア、あの酒で、其方が願ひの杯を、わしが許してやつたのは、よく／＼子が可愛さぢやと思うて、それからとんと思ひ切つて、必らずま一度飲みたいと、思はぬがよいぞや。

　トおすぎ、銚子、杯持つて來て

すぎ　ハイ、銚子持つて參りました。

たけ　オヽ、よう持つておぢやつた。この酒飲んで、一寐入り休みませう。床取つてたも。

すぎ　エヽ、アノ、爰にでござりますか。

たけ　ハテ、知れた事いの。

すぎ　それではどうも惡い事が。

　トお七と顏見合せ思ひ入れ。

たけ　なんであらうと、早う取りやいの。

すぎ　ハイ／＼。

　ト不承々々に押入れより夜着布團を出し、床を取つて

ハイ、お床のべました。

たけ　行て香を盛つてくりや。

すぎ　ハイ／＼、ほんに意地惡うお使ひなさるゝ。

　トぴんしやんして、暖簾口へ入る。

たけ　コレ、今の意見、必らず忘れまいぞや。サヽ、一つ飲みやや。

お七　マア、お上がりなさりませ。

たけ　サア、わしも飲まうと思うて取寄せたれど、また看經前であつたゆゑ、飲酒戒と云うて、佛樣の戒めぢやに依つて、飲まれぬ程に、マア、其方飲みや。必らず／＼今云うた事忘れて、ま一度逢ひたい、イヤサ、飲みたいと思ふまいぞや。サヽ、爰へ上がつて、アノ、表の

　ト思ひ入れあつて

サア、アノ、表の戸を締めて、しつぽりとこの床で。

お七　お前がおよるとて、お取らせなさんしたぢやござんせぬか。

たけ　オヽ、わしも今に寐ませうわいの。マア、三寶さまへ方便品一卷。その外佛樣達へ、提婆品、題目百遍づゝ

その間があつて寐る程に、其うち寒うないやうに、この床で酒飲んで構へて、やがて來る程に、長う寐やらぬがよいぞや……ア、、なんぢややら、打つたり舞うたり、子ゆゑの闇にあられもない、餘所目から見たら、ほんに氣狂ひぢやと云ふであらう。

ト云ひながらこなしあつて、唄になり、おたけ、奥へ入る。お七、あと見送り、拜みて、いそ／＼して表へ出で・吉三郎が手を取り、内へ連れて入る。

吉三　コレ。人が見るわいの。

お七　ハテ、誰が見やうと、遠慮も何もござんせぬ。見やしやんす通り、母さんのお許しで、お前と酒飲み、抱かれて寐いと云はぬばかりに、たつた今母さんの、云はしやんしたを聞いてゞあらう。ぢやに依つて、誰れが見やうと、ちつとも大事ござんせぬ。サア、爰へ來て、杯して下さんせ。ほんにモウ、母さんのお志し、わしや嬉しうて／＼。

ト吉三郎に寄添ひ、恥かしき思ひ入れ。

吉三　成る程、母御の志し、最前からあれにて聞き、忝ないやら面目ないやら、その志しを聞くにつけて、お七どの、親御の恩の深い事、思ひ知つたがよい。此やうな叶はぬ事に心を苦しめ、親にも憂き目を見すると云ふは、不孝の上に不孝の上塗り。今日又わしが爰へ來たは、いよ／＼剃髪して出家になるゆゑ、暇乞ひの爲。それにこなたの心では、わしが菩提の邪魔にもなり、いよいよ罪を重ぬる道理。今宵限りにわしが事、フツツリと思ひ切り、親人へも孝行盡してもらひたさ。人目を忍んで來た程に、淺い縁ぢやと諦らめて、どうぞフツツリ思ひ切つて下されいなう。

お七　そんなら、いよ／＼

吉三　サア、明日は出家遂げるわいの。

お七　エ、。

ト悄り、泣く。

吉三　コレ、聲が高いわいの……人が見るわいの。もしこの様子を、こなたの母御に見られては、どうも云ひ譯がない。

お七　なんの大事あるものかいな。わしやモウ、お前と離れては生きては居ぬ。それにお前は、坊樣にならしやんすとは、そりやあんまりぢや／＼／＼わいなア。

ト泣く。吉三郎、持て餘せしこなし。

吉三　コレサ、泣くまい／＼。わしが云うたは、嘘ぢや嘘

天保四年一月河原崎座所演

六世岩井半四郎のお七

ぢや程に、サヽ、機嫌直して。
お七　そんなら、坊さんにならしやんすは。
吉三　サア、嘘ぢやと云ふ事。
お七　そりや、眞實。
吉三　如何にも。明日と云うたは嘘。また師の坊のお心がどのやうに替つて、出家せぬやうになるまいものでもない程に、もう泣いて下さるなや。
お七　ナンノイナア、坊さんにさへならしやんせにや、わたしや嬉しいわいなア。
ト機嫌を直す。
吉三　イヤモウ、出家にはならぬ。出家せぬからは、早う歸つて師の坊の、お呵りを請けぬやうにせねばならぬ。また明日來ませう。
ト立ち上がらうとするをお七留めて
お七　コレ、待たしやんせ。最前も聞かしやんす通り、母さんの志し、粹を通して下さんしたこの杯。坊さんにならしやんすが嘘ならば、マア、杯などして、そしてアノ床へ入つて、どうぞアノ。
ト恥かしきこなし。
吉三　成る程、さうせまいものでもなけれど、今日はマア歸らねばならぬ。
お七　すりや、どうあつても。
吉三　コレ。
トお七、大きな聲で云ふを、吉三郎、袖にてちやつと留める。お七、直ぐにひつたり抱き付き、吉三郎、嫌がるを無理に夜着を着せる。此うち、合ひ方。向うバタバタにて、六郎、以前の形、侍ひ大勢連れて出て來て、直ぐに門口を入り、吉三郎を引出し
六郎　サア、この丁稚めだ。軍藏どのへ引ッ立てろ。
ト逃げうとする吉三郎を無理に引立て
番人ども。木戸を打て〱。サア、うせう。
ト吉三郎を引立て、下座へ走り入る。所々にて、拍子木を打つ。木戸を締める。お七、出て、ウロ〱して後を追つて行かうとする。おすぎ、奥より出て來て、お七を留め
すぎ　コレ、お七さん、どこへお出でなされます。
お七　サア、何者やら、吉三さんを無體に連れて行たわいの。わしも行かねばならぬ程に、爰放してやつてたも。
すぎ　イエ〱、あなたがお出でなされたとて、どうなるものでござりませう、マア〱、お待ちなされませ。

お七　イヤ／＼、放してやつてたも。わしや吉三さんと一緒に行く。エヽ、爰放しやいの。
　ト無理に振り切り、下座の方の木戸を叩き
爰明けて下さんせ／＼。
　ト木戸の内より
番人　何者ぢや。爰明ける事はならぬ／＼。
　トお七、また上の方へ來て、木戸を叩く。内より「ならぬ／＼」と云ふゆゑ、當惑のこなしにて
お七　どちらへ行ても、明ける事はならぬとある。こりやマア、どうせうぞいの／＼。
　トうろ／＼して泣く。おすぎ、氣の毒なる思ひ入れあつて
すぎ　御尤もでござります。明暮れ戀しい床しいと、思うてばかりお出でなされた吉三さん、いつそ今宵お出でなされねば、こんな事もあるまいに、いとしほなげに、しつぽりと抱かれて寐やうとなされたを、引連れて行きをつたもの、悲しうなうてなんとせう。酷いとも胴慾とも云はうやうもなけれども、今更なんと思うたとて、斯う木戸々々を打たれては、どなたの御威光でも明ける事は叶ひませぬ。シタガ、アレあの櫓にある大鼓を打てば、方々で狼煙を上げ、軍の起つた知らせとて、木戸／＼も忽ち開け、例へどこまで行かうと儘。アヽ、切合ひが出來ればよい。どうぞ木戸が明けて上げたいものぢやが。
　ト奥にて
たけ　すぎよ／＼。
　ト呼ぶ。
すぎ　ハイ／＼、只今參りまする。コレ申し、お七さん、もしこの様子を阿母さまが御覽じたら、大抵の事ぢやござりますまい。マア／＼、奥へお出でなされませ。
　ト手を取る。お七、振り切る。また奥にて、すぎやすぎやと險しく呼ぶ。おすぎ「ハイ／＼」と云ひながらお七を心遣ひのこなしにて、奥へ入る。あと合ひ方になり、お七、起き上がり、キッと櫓を見詰め
お七　オヽ、さうぢや、今すぎが云ふ通り、この木戸／＼も、あの櫓も軍の備へ。合圖の大鼓を打てば、合圖に開く固めの門。騒ぎに紛れて吉三さんの後を慕ひ、例へこの身は、どのやうに憂い目辛い目見やうと儘、逢ひたいと云ふ一念の、思ひを晴らさで置かうか。打てば打たるる櫓の太鼓……さうぢや。
　ト早目の合ひ方になり、お七、あたりを窺ひながら、

嘉永四年五月市村座所演

市川高麗藏の染五郎

八世市川團十郎の傳吉　坂東しうかのお七

裾引上げ、梯子の側へ走り寄り、上を見あげて、チッと思ひ入れあつて、梯子に昇り、怖がる思ひ入れ。こなしいろ〳〵あつて、トヾやう〳〵櫓へ昇り、太鼓の撥を持ち、思ひ入れあつて、ドンと打ち、また思ひ入れあつて、ドン〳〵と打つと、これに合せて、向うにても太鼓の音、狼煙の音、所々にて、早拍子木を打つドン〳〵早目にて、木戸を開き、こちらよりも向うよりも表方打交り、いろ〳〵思ひ〳〵の仕出し大勢、ワヤワヤと騒ぎながら行き違ふ。この中へ交り、向うより、傳吉、袢纏、たるみの股引にて、金棒を引き、出て來る。奥より、おすぎ、おたけ。下座より、染五郎出て來て

皆々　お七やアい〳〵。

ト皆々ウロ〳〵尋ねる。傳吉、この人數に行き當り

傳吉　ヤア、阿母、お七がどうしました〳〵。

たけ　サア、お七がどこへ行たか見えぬわいの。

すぎ　お出でなされませぬわいな。

傳吉　そりやア飛んだ事だ。

染五　傳吉、われも探してくれ。

傳吉　合點だ。

皆々　お七やアい〳〵。

ト尋ねながら、皆々花道の方へ來る。ト向うより、仁田の四郎忠常、海老名軍藏、野羽織、踏込みにて、侍ひ大勢連れ、武兵衛、着流し、名主、行事、その外町人大勢付き、提灯を持つて出で來り花道にて

侍ひ　仁田の四郎さま、海老名の軍藏さまのお出でだ。靜まれ〳〵。

ト傳吉、おすぎ、おたけ、染五郎、四人を見て

名主　コリヤ〳〵、こなた衆もそれに扣へてござれ。

四人　ハツ。

ト舞臺に扣へる。

軍藏　コリヤ、侍ひども、他町の騒ぎは鎭まつたか。

侍ひ　左様でござりまする。先づ餘所は鎭まつたさうにござりまする。

軍藏　そりや一段の事ぢや。シタガ、大分怪我人もあつたであらう。何にせよ、稀代の珍事。これと云ふも、この櫓で太鼓を打つたから起つた事。斯程の騒動いたさせたるは不敵の曲者。名主、月行事、これへ參れ。

侍ひ　名主、月行事。出ませい〳〵。

皆々　ハツ〳〵。

ト出る。

武兵　コレ、名主どの、今お役人の仰せの通り、この町内で合圖の太鼓を打つたに依つて、町内中の騒ぎとなつたその打つた奴はどこに居る。キリ〳〵爰へ引出さつしやい。

ト忠常、此せりふへかけて

忠常　コリヤ〳〵、町人、扣へて居れ。役人の詞も待たず差出た奴の。

武兵　ヘイ。

ト蹲まつて居る。

忠常　コリヤ、名主行事の者ども。兼ね〴〵申し付け置く通り、暮れ六ツ限り木戸を締め、往來の者を止め、用心いたさば、他所他町より入込んで、この騒動に及ばする筈はない。察するところ曲者は、この町内の者と見ゆる。兼ねて左樣な人體の者、心當りはないか、どうぢや。

ト此うち、軍藏、あたりをキヨロ〳〵見て、櫓のお七を見付け

軍藏　お騒ぎあるな仁田どの。アレ、あの櫓に、何か怪しい奴が忍んで居る。

皆々　ヤア。

ト櫓を見て

忠常　如何にも。

ト思ひ入れ。

皆々　何か居りまする。

ト此うち、舞臺の四人も櫓を見て、恟りして

傳吉　ヤア、そこに居るは。

すぎ　お七さんでござりますか。

たけ　ほんにマア。大膽な。そこへ何しに上がりやつたのぢや。サア〳〵、下りや〳〵。

傳吉　早く下りた〳〵。

トお七、怖々下りる。傳吉、染五郎、介抱して、下ろしてやる。

たけ　其方はマア、なぜにあのやうな所へ上がりやつたのぢや。サヽ、すぎと一緒に、奥へおぢや〳〵。

すぎ　サア、お出でなされませ。

トお七が手を取り、行かうとする。

軍藏　コリヤ待て。女、詮議があるぞ。

七杉　エヽ。

ト恟り。

武兵　さうだ〳〵。ちつとも動くまいぞ。

傳吉　うぬ、また差出やアがる。

ト立ちかゝるを、染五郎、留めて

染五　コリヤ、傳吉、お役人の前だ。鎭まれ〳〵。

ト傳吉、ムゥと鎭まる。忠常、おたけに向ひ

忠常　コリヤ女、この者は其方が娘か。

たけ　左樣でござりまする。まだ年端も參りませぬゆゑ、何事も辨まへず、あの櫓へ上がりましてござりまする。

忠常　アイヤ、其方には問ふに及ばぬ。娘に直々詮議いたす。コリヤ、七とやら、これへ參れ。

お七　ハイ。

ト忠常が前へ出て、兩手を突く。

忠常　其方が名は、なんと申す。

お七　ハイ、七と申しまする。

ト慄へて居る。

軍藏　ハテ、よい態々。心からとは云ひながら、勸める時にアイと云やア、こんな事にもなるまいに、我まゝ氣隨を吐かすゆゑ、飛んだ事になつたのだワ。

忠常　アイヤ、軍藏どの、其やうにお叱りあるな。まだ幼年の事でござれば、うろたへてオド〳〵致し、何を申すか相解らねば、詮議の妨げ。ナニ、七とやら、其方があれに昇つて居たは、定めてこの騒動が怖さゆゑ、隱れて居つたものであらうな。

お七　イエ〳〵、さうぢやござりませぬ。

軍藏　そして、何しに昇つたのだ。

お七　アイ、あの木戸を明けうと思うて、あの太鼓を打ちに。

ト忠常、此せりふを笑ひにて紛らす。

軍藏　コレサ、仁田どの、貴殿は何を笑ひ召さるゝ。大切のこの詮議、笑つて居ちやア濟ませぬぞ。

忠常　イヤサ、その大切がをかしうござる。御覽の通り、脊丈は伸びたやうなれど、まだ幼年のこの娘。これしきの他愛もない事に、其許は目に角立ての詮議立て。拙者はそれが笑止でござる。ハ、、、、。

ト笑ひ

ナニお七、其方は鈍な奴ぢやわい。いま其方が云うたは僞はり。騒ぎが怖さに、あの所へ昇つて居つたのであらう。サ、、隱しては惡い。有やうに申せ。

お七　イエ〳〵、なんの隱しませう。眞實あの太鼓を打てば。

ト忠常、また此せりふを咳にて消す。

軍藏　コレサ〳〵、仁田どの、そりやなんと云ふ詮議の仕やうぢや。
忠常　されば拙者は、この程の時候に中りましたかして、
　エヘン〳〵。
　ト咳をせき
　アレ〳〵、御覽の通り、殊の外痰が起ります。
軍藏　措かつしやい。馬鹿々々しい。そんなら身共が詮議いたさう。いま其許の咳つしやるうち。あの娘めが云うた事、この軍藏は聞き取つた。あの櫓の大鼓を打てば、四方の木戸が明くゆゑに、それであそこに居つたと云うた。コリヤ、ヤイ、女、なんとさうであらうがな。
お七　アイ、ようお前は知つてぢやな。
　ト皆々ハツと思ひ入れ。
軍藏　しかとさうか。
お七　アイ、吉三さんに逢ひたさに、それで大皷を打つたのぢやわいなア。
軍藏　繩打て。
武兵　捕つた。
　トかゝるを、忠常、見事に取つて投げ
忠常　うぬ、素町人の分として差出た奴。科人の繩打ちに町人のおのれを頼まうや……コリヤ、この者を引据ゑい。
傳吉　ハツ。
　ト傳吉、武兵衞を引立て、腕を捻ぢ上げ、引据ゑる。
忠常　軍藏どのもお扣へなされい。斯く正直のこの娘に、たんの縛め。拙者が預かり參るでござらう。ア、是非もないこの場の體裁。
　トお七が手を取り、ヂツと思ひ入れあつて
　コリヤ娘、その吉三とやらに逢はせて遣はす。身と一緒に、サア參れ。
　ト立ち上がり
　軍藏どの、イザ、御同道仕らう。
軍藏　コリヤ、仁田どの、お待ちなされい。ナニ町人どもゝこの上ともに用心しろ。キツと申し渡したぞ。八百屋の奴でもどいつでも、お七めに手ざしはなるまい。よい態よい態。
傳吉　なにを。
　トかゝるを皆々留める。軍藏、睨み付けて
軍藏　へ、、、ハ、、。サア、ござれ。
　ト忠常、お七を連れ、軍藏先に立ち、侍ひ付き添ひ行

かうとする。おたけ、取付き

たけ　アヽ、こりやマア、どうなる事でござりまする。

ト侍ひ隔てゝ

侍ひ　寄るな／＼。

ト隔てながら花道へかゝる。此うち、武兵衛、起き上がり、逃げ出さうとするを、傳吉、金棒にて隔て、立廻り。此うち、三重になり、忠常、お七、軍藏、皆々向うへ入る。染五郎、おたけ、おすぎ、これまで後見送り居て、この時、がつくりと下に居るをキッカケに双方この仕組みよろしく、拍子、幕。

三 幕 目　鎌倉決斷所の場

役名――仁田四郎忠常。海老名軍藏。長沼六郎。荒井藤太重宗。荒井源藏重國。科人、片瀨の又六同、戸塚の菱五郎。同。勘兵衞。同、呑兵衞。友達娘、おしか。八百屋母、おたけ。同下女、おすぎ。八百屋娘、お七。

本舞臺、三間の間、廂付きの高二重。箱段。見附け金襖、笹龍膽の紋付けし幕を絞り、銅樋をかけ、すべて鎌倉決斷所の體。上の方に三つ道具を飾り、下の方、橋がゝりの方に寄せ假牢を見せ、前通り格子戸たて切り、幕の內より、右二重舞臺眞中に獅噛火鉢を据ゑ、軍藏、上下衣裳の形にて、莨のんで居る平舞臺上の方に、六郎、納豆烏帽子、半素袍にて、床几にかゝり居る。下の方に、侍ひ四人扣へて居る。時の太鼓にて、幕明く。

六郎　最早時刻は何時でござりませうな。

軍藏　只今鳴るは五つでござらう。

六郎　然らば、赦免の科人ども、これへ呼び出しませうかな。

軍藏　如何にも。最早時刻でもござれば、左樣いたされるがようござる。誠に君の御盛德、今に始めぬ事ながら、寛仁大度の君子でござる。この度先君御年忌に付き、御赦免仰せ付けられし科人ども、中に死罪を遁がるべき奴は、一人もござらねども、お慈悲を以ての御赦免は、先君にも劣らせ給はぬ御仁君でござる。

六郎　イカサマ、仰せの通り、又とあるまい名將でござる。併し、斯くまで民を憐れみ給ふ御仁君でありながら、八

百屋お七は格別、荒井の藤太が罪科を御免なされぬは、
如何いたした儀でござらうな。
軍藏　ハテ、それに知れた事でござる。藤太めは君の御恩を忘却いたし、叛逆人の範頼公に荷擔なし、猶も惡事を勸めしゆゑ、輕からぬ科人。依つて日本國中の諸大名への見せしめ。まつた一つには、範頼公の御心中、知り拔いて居る藤太ゆゑ、彼れめを許し遣はしては、叛逆謀計の種がござらぬ。それゆゑお赦しないのでござる。又お七めは火付けの科、殊に範頼公の御謀叛も元はと云へばあのお七に御執心から起つた事。不便ながらも生け置いては、始終の妨げ。彼れこれ以てお七めは、所詮遁がれぬ命でござる。
六郎　イカサマ、左樣承れば、どうも遁がれぬ命でござる。然らば今日、御赦免の科人ども、呼び出しませうか。
軍藏　成る程、申し付けられてよからう。
六郎　最前書付けの通り、今日赦免の科人ども、これへ召し呼びませい。
侍ひ　ハア。
　ト牢の方へ向ひ
片瀨の又六、罷り出でませい。
内方　ハア。
　ト科人又六出る。
軍藏　コリヤ、其方は片瀨の通り者ぢやな。
又六　左樣でござりまする。賭博に負けまして、致し方がござりませぬゆゑ、日蓮さまの似せ筆を拵らへまして、大金を騙り取りました科ゆゑ、召捕られましてござりまする。
六郎　如何にも、書付けの通りぢや。有り難いと思ひませい。おのれ、死罪を遁がるゝ奴ではなけれども、お慈悲を以てお助けなさるゝ。重ねて左樣な惡事を致すと、首が飛ぶぞよ。以後をキッと愼しみ居らうぞ。
又六　ハイ〳〵、有り難うござりまする。
軍藏　罷り立て。
又六　ハッ。
　ト下座へ入る。
侍ひ　てつぺい菱五郎、罷り出ませい。
内方　ハア。
　ト菱五郎、科人にて出る。
六郎　わりやア戸塚のきほひぢやないか。

菱五　左樣でごんす。きほへばえゝ事かと思つて、無暗に人に喧嘩を仕掛け、揚句の果に伯父貴の頭を打ち割り、その科ゆゑに、暗い所へ參りました。

軍藏　ハテ、滅法界な奴ぢや。おのれも以後をキツと嗜なめ。罷り立て／＼。

菱五　ハツ。

ト下座へ入る。

侍ひ　勘兵衞、吞兵衞、罷り出ませい。

ト牢の內にて

兩人　ハア。

ト兩人、科人の形にて、出て來る。

軍藏　わいらは大森の百姓、兩人ともに同罪の奴等。われが名はなんと。

勘兵　ハイ、勘兵衞と申しまする。

六郎　われは。

吞兵　吞兵衞と申まする。

軍藏　ムウ、勘兵衞吞兵衞、わいらも、こりや口ゆゑに仕出かした科ぢやな。

勘兵　左樣でござりまする。わしらは元より、信濃者も及ばぬ大食でござりまするが、貧乏人の事ゆゑ、腹一杯食はれぬと思はつしやりませ。

吞兵　そこで譬へに申す通り、貧の盜みに戀の歌、フツとした出來心で、さる所の矢尻を切つて、藏の金を盜みました。

軍藏　ムウ、矢尻を切つて盜み出した金子なら、定めて大分の金であらうな。

吞兵　さのみ大分でもござりませぬ。

軍藏　して、如何程取つた。

勘兵　凡そ三千三百兩。

六郎　おきやアがれ。山王の櫻の木ぢやアあるまいし。して、その金を何に致した。

吞兵　サア、盜むや否や矢鱈食ひ、饅頭羊羹柏餅、干菓子水菓子駄菓子は勿論。

勘兵　煑賣り麥飯鰻屋鮨屋、蕎麥屋は勿論、ありとあらゆる食ひ物に、食はぬ物はござりませぬ。

六郎　ハテ、恐ろしい食ひ潰し。して、その金は、みな喰つたか。

吞兵　左樣でござりまする。善光寺さまではござりませぬが、七日七夜食ひ通しましても、まだ食ひ足りませぬ。六鄕の奈良茶に行つて、また二三十杯食つたところが、

拂ふ金がござりませぬゆゑ、食ひ逃げしようとする所を
お役人に見咎められ、たうとう
兩人　召捕られましてござりまする。
軍藏　イカサマ、卑しい科人ども。おのれら、海老責めにもする奴ぢやが、お慈悲を以て許し遣はす。重ねて食事を扣へ居らう。
兩人　ハア、有り難うござりまする。
ト兩人、立つて、下座へ入る。
六郎　荒井の藤太を、これへ引け。
侍ひ　ハツ。
ト花道へ向ひ
ヤア／＼、方々、荒井の藤太を引出し召されい。
侍ひ　畏まつてござる。
ト時の太鼓にて、花道より、藤太、百日鬘、科人の體にて、大繩をかけられ、侍ひ二人、この繩を取り、出て來て、直ぐに本舞臺へ來り、藤太を引据ゑる。
六郎　藤太どの、ハテ、苦々しい對面でござる。
軍藏　今では貴殿も、さぞ後悔でござらうな。
藤太　こは心得ぬ仰せでござる。各々にこの態で、對面いたすは面目次第もござらねども、誰れあらん荒井藤太重宗とも云はるゝ侍ひ、盜人めらと一包めに、獄家の住ひ致すと云ふは、某が運の盡き。本意を遂げた者ならば、各々方をまツこの如く、囚人らしく糺明せんに、殘念至極。さりながら、斯くなるは元來覺悟の事でござれば、先非を悔む事もござらぬ。片時も早く罪科に行はれたさ只それのみを願ふばかり。全く後悔など致すやうな、卑怯未練な重宗ではござらぬ。
軍藏　イカサマ、貴殿の日頃の氣性、その覺悟は致されいで叶はぬ事。さりながら、よく考へても見られい。今その儘に刑罰あらば、後代までも惡人の汚名は遁がれぬ。一旦心を改められ、切腹召さるゝが、侍ひの本意でござらう。
藤太　軍藏どのゝ仰せではござれども、輕からぬ科を犯し、死刑に遭ふ時に臨んで、一旦心を改むるが、侍ひの本意とは。
軍藏　サア、その譯は、範賴公は今隱遁、隱居には渡らせ給へど、御心底には一天下を、手に入れんとの企てある由。所々の手配り、忍び／＼の計略まで、上聞に達してござる。
六郎　然れば、例へ萬に一範賴公、勝利を得られたとて、

こなたは虜となつたる身分、明日にも敵に事を發せば、
味方に於て軍神の血祭り、最初に首を刎ねられて、なん
の忠にも功にもなるまい。

軍藏　まつた範頼公を見限つて、實朝公へ忠義を立て、先
日より拷問せし、範頼どのゝ隱謀、一味の輩、一々白狀
あれば、その身の幸ひ。

六郎　道の道たる君に仕へ

軍藏　忠義の高名末世に殘り

六郎　萬民塗炭の苦しみも

軍藏　貴殿の功で救ふと云ふもの。

六郎　すりや、天下の爲。その身の爲。

軍藏　叛逆徒黨の一味の者ども、委細の譯を白狀召され。

藤太　ムヽ、ハヽヽ。流石は朋友のよしみだけ、君の爲、
國家の爲、まつたこの身の罪科をも救はんが爲と何れも
が、詞を盡してのその教訓、過分に存ずる。さりながら
存じてさへござらうならば、貴殿の教へまでもなく、速
やかに白狀して、忠臣とも呼ばれ、命をも全うして、民
百姓の難儀をも、救つてやりたいものなれども、一向存
ぜぬ。範頼公に密かの企てが、ある事か無い事か、徒黨
の人數は誰れ人が、一味同心せしか、存ぜぬ所が運の極
め。此まゝに相果つべき運命なれば、是非に及ばぬ。詞
盡して問はれても、知らぬ事は、どこまでも存ぜぬ存
ぜぬ。

軍藏　すりや、我れ〳〵が斯程まで

六郎　詞を盡し尋ねても

藤太　知らぬ〳〵。

兩人　すりや、どうあつても白狀は。

藤太　くどい〳〵。

軍藏　是非に及ばぬ。この上は又、手を替へて拷問申し付
けずばなるまい。先づ假牢屋へ引立てい。

侍ひ　畏まつてござりまする。

ト合ひ方になり、兩人、藤太を引立て、下座へ入る。
と向うより、おすぎ、前幕の形にて、重箱包みを持ち
おしか、着流し、振り袖にて、兩人、連れ立ち、出て
來て

しか　最前も云ふ通り、今日はどうぞお七さんに、逢はせ
てや。

すぎ　合點でござんす。今日はしみ〴〵逢はせます程に、
樂しんでお出でなさんせ。

しか　さう云うても今日も又、わしを騙すのではないかい

な。ほんに毎日々々、こなさんと連れ立つて爰へ來ても、あのお七さんには一度も逢はせてもらへぬさかい、今日はわたしが拜む程に、どうぞちよつとなりと逢はせて下さんせ。

すぎ　逢はせませいでわいな。お七さんもさぞ、お前方に逢ひたう思うてゞござんせう。殊に吉三さんとは、只ならぬ仲ぢやゆゑ、さぞ懷かしう思うてゞあらう。ほんにこれまで片時も、阿母さんのお側をば、お離れなされぬあのお子が、今日まで丁度五十日餘り、お内を離れてござんすもの、そのお心を思ひやり、わたしや、おいとしうて〳〵。

ト ほろりと思ひ入れ。

しか　そしてアノ、牢屋と云ふ所は、きつう怖い所ぢやと云ふ事。お七さんも、さぞ怖う思うてござんせう。

すぎ　イエ〳〵、ほんの牢屋は、いかう怖い所ぢやさうぢやが、お七さんの入つてござんす所は、分に座敷が仕切つてあつて、たつたお一人お出でなさんす。怖い牢とは違ふわいな。

しか　そんなら、常の座敷も同じ事かえ。

すぎ　サイナア、疊が敷いてあつて、何も不自由な事はないといなア

しか　そんなら、わたしもそこへ行て、お七さんと一緒に居たいものぢやな。

すぎ　仁田さまへ願うたら、それもなるまいものでもない程に、氣遣ひせずと、マア〳〵、ござんせいなア。

ト 兩人、本舞臺へ來る。軍藏、見て

軍藏　こりやアおすぎ、今日も又、お七が所へ見舞ひに來たか。

六郎　今日はハヤ、お七が方へ見舞ひ物遣はす事は叶はぬ持つて歸れ〳〵。

すぎ　ハイ〳〵、成る程、毎日々々あなた方に、お取次をお頼み申しまするゆゑ、御面倒に思し召すも、御尤もではござりまするが、こりや常々からあのお子が、きついお好きでござりまするから、持つて參りました草のかちんでござりまする。何も怪しい物ぢやござりませぬ程に、どうぞお屆けなされて下さりませうならば、有り難う存じまする。

六郎　イヤ〳〵、かちんであらうが、まちんであらうが、罪極まつたあのお七。

すぎ　エヽ。

ト思ひ入れ。
六郎　サア、今日明日のうち、お仕置に仰せ付けらるゝ筈ぢやに依つて、役人の外、外々より、決して音信は叶はぬわえ。
　　トおすぎ、おしか、驚ろき
すぎ　すりやアノお七さんには、今日明日のうちお仕置に。
六郎　それゆゑ通路は叶はぬわえ。
すぎ　ハアヽ。
　　ト泣き落し
せめては兼ねてさう云ふ事、風の便りに聞いたなら、それと覺悟の事なれば、驚ろく事はあるまいに、仁田さまのお裁きゆゑ、よもや障りはあるまいと、心強う思うて居たに胴慾な。今日明日のうちにお仕置とは……そりやどのやうなお仕置に。
六郎　ヤア、かしましい世迷言、どのやうなお仕置やら、まだお上から御沙汰もないに、ナニ我れ〳〵が知るものだ。
すぎ　そんなら、お科のその譯は。
軍藏　まだ我れ〳〵も知らぬわえ。
すぎ　御存じなくば猶の事、この世の別れの暇乞ひ、ちよつと逢はせて下さりませ。
しか　申し、お侍ひ樣、わたしもお願ひ申しまする。どうぞちよつとなとお七さんに。
軍藏　ハテ、叶はぬ事ぢや。
すぎ　すりや、どうあつても。
軍藏　叶はぬ〳〵。
すぎ　おしかさん。
しか　おすぎどの。
　　ト兩人、顏見合せ、ホロリと思ひ入れ。
六郎　罷り立てい。
兩人　ハイ。
　　トうぢ〳〵して居る。
軍藏　方々、引立てい。
侍ひ　ハア、立ちませい。
　　トこの時、向うにて
忠常　方々扣へい。仁田の四郎忠常、それへ參つて承らう。
　　ト鼓の合ひ方になり、忠常、上下衣裳、大小にて、出て來て、花道にて、ちよつととまる。

軍藏　これは〳〵忠常どの。
六郎　先づ〳〵これへ。
忠常　然らば御免下されい。
ト本舞臺へ來り、二重へ上がり
早速ながら軍藏どの、罪科赦免の科人どもは、最早申し付けられてござるか。
軍藏　如何にも。先達てお渡しありし帳面の通り、計らひましてござる。
トおすぎ、前へ出て
すぎ　これは〳〵、仁田さまには、好い所へお出でなされて下されました。最前からあなた方へ、お願ひ申せどお聞入れなら、却つてお叱りを請けましてござりまするが、どうぞ私しどものお願ひ申し上げます事、お聞き屆けなされて下さりませうたれば、有り難う存じまする。
忠常　ムウ、某へ願ひとは、そりや聞くに及ばぬ。また赦免の願ひであらう。お七も最早科極まり、今日明日のうち所刑にも行はるゝ事。其方が願ひは叶はぬわやい。
すぎ　イヱ〳〵、御免のお願ひではござりませぬ。この重の内は、主人お七が好物の品でござりまするゆゑ、私しが遣はしまするのでござりまするが、どうぞお七へお屆けなされて下されませいと、最前からお願ひ申せど、お聞入れもござりませぬゆゑ、あなた樣へお願ひ申すのでござりまする。どうぞ仰せ付けられまして、お屆け下されませうならば、有り難う存じまする。
忠常　ムウ、然ればお七が赦免の訴訟ではなく、其方が寸志のその品ゆゑ、お七に遣はしくれいとか。
すぎ　左樣でござりまする。
忠常　軍藏どの、お聞きの通り彼れが願ひ。最早罪科極まりたるお七が身の上。これしきの儀は、此方の料簡で、聞き屆け遣はしてもよろしうござらう。
軍藏　イヤ、そりやなるまい。大切なる科人へ、どうして左樣な猶豫な事。既に、越王勾踐は、獄屋へ魚を投げ込みて、その魚の腹中に密書を認め置いたゆゑ、それにて遂に、本意を達した例しもござる。彼れこれ以て、その願ひは叶ひますまい。
忠常　その儀は少しも氣遣ひござらぬ。今この所で貴殿と拙者立合ひにて、彼れが持參の器を開き、とくと檢分いたした上、仔細ござらば如何やうとも。コリヤ〳〵女、いま聞く通りその器、この所で改めし上ならでは、屆くる事は叶はぬが、改めても大事ないか。

すぎ　なんの大事ござりませう。左様なら、この重の内、
お改めなされたその上で。
忠常　仔細なければ届けてくれう。
軍六　アイヤ、その儀は。
忠常　ハテ、後日にこの儀、御さつとあらば、四郎忠常、
申し開き致すでござらう。
すぎ　エヽ、有り難うござりまする。そのお詞に甘へまして、お願ひ申しまする。とてものお慈悲にこの器、どうぞ私しが持参いたしたう存じまする。
忠常　尤もの願ひ、聞き届けてやりたいが、その儀は叶はぬ。科極まりし上からは、何者でも對面ならぬ。例へ、詞は交さずとも、寸志の品さへ遣はさば、其方の心底は届くと云ふもの。
六郎　成る程、こりやア仰せの通り。何にもせよその器、食物とあるからは、我れ等が吟味いたすであらう。
ト重箱を取つて、忠常が前へ置く。
イザ、仁田どの、お改めなされ。
忠常　如何にも。
ト重箱の蓋を取る。内に色紙入つて居る。軍藏見て
軍藏　さてこそ／＼、食物と僞はつて、入れて置いたる怪しい書面。
ト忠常、取上げ見て
忠常　「まだ四季に色づく山の紅葉かな、この夕暮れを待ちて見よかし」ムウ。ハテナア。
ト考へる思ひ入れ。軍藏「ムヽ」と思ひ入れありて
軍藏　「まだ四季に色づく山の紅葉かな、この夕暮れを待ちて見よかし」仁田どの、御油斷召さるな。この歌は、お七が方への謎でござる。まだ四季に色づく山の紅葉とは、出る仕方もあらうに依つて、この夕暮れを待つて見よと、歌の心の判じ物。女めが最前より、お七に直々渡さんと申したは、斯様な品がござるゆゑ。さすれば彼奴が心底に、一物あるに違ひござらぬ。長沼六郎、引ッ捕へて詮議さつしやい。
忠常　アイヤ、お待ちやれ。全く以て、この歌は、左様な儀ではござるまい。軍藏どのゝ御判斷、相違いたした。
軍藏　ムウ、某が判斷、相違とな。して、仁田どのには如何に存ぜらるゝな。
忠常　サア、この歌は過ぎし頃、庄司重忠、曾我兄弟の面面へ、敵工藤を討ち取るは、未だ時刻が早いに依つて、この夕暮れを待ちて見よ、日頃の本意も達せんと、短慮

を止むる教訓に、送られし歌。曾我兄弟もこの歌の心を察して、易々と敵工藤を討ち取つたる事、貴殿も御存じ。

軍藏　さればサ、それだに依つて、この度も、矢ツ張り、その傳。

すぎ　イエ〳〵、そりやあなた樣の御料簡違ひ。よう御覽うじませ。その手蹟は、お七さまのお手でござりまする。

忠常　ムウ、如何にも、こりやア女筆と見える。いよ〳〵以て合點ゆかぬ。何ゆゑ又お七が認めしこの一首、お七が方へ遣はすのぢや。

すぎ　さればでござりまする。この歌はお七さまより、吉三さまへ、この夕暮れに逢ひたいと云うて、遣はされまする謎の歌てござりますが、吉三さまの申されまするは、お七も最早科極まり、お仕置に遭ふ上からは、我が身も今は髮を下ろし、出家する心ぢや程に、この歌は今日までも、肌身離さず持つて居たれど、この後持つても輪廻の妨け、燒き捨てんにも、本意ないから、お七が方へ返してくれと、賴まれましてござりまする。それゆゑの今のお願ひ。どうぞ、お七さまに、直々に、この事も申したうござりまする。又このお子はお七さまと、日頃、仲好い友達でござりまするが、お七さまに逢ひたいと申しましてゞござりますゆゑ、お叱りをも顧ませず、幾重にもお願ひ申しまする。

しか　どうぞ、お慈悲に、ちよつとなと、お逢はせなされて

兩人　下さりませ。

ト辭儀する。

六郎　イヤ、ならぬ〳〵。例へ、お七が手蹟であらうが、疑がはしいその古歌、キツと糺さぬ其うちは、何事もならぬ〳〵。

ト此うち、軍藏、重箱に目を附け

軍藏　仁田どの、この器にはまだ、何か怪しい物がござる。

忠常　怪しい品とは。

ト見て

「打向ふその事ばかり思へたゞ、返らぬ昔知れぬ行末」

コリヤ、女、この歌の手蹟は男。こりや何者が認めた。

すぎ　サア、その歌は、吉三さまのお筆でござりまする。その歌の心は、互ひに向ふ行く末は知れぬものぢや程に、

その事ばかり心がけ、これまではない昔おやと諦めて、例へ死んでも迷うてくれなと、吉三さまから、お七さまへ教訓の歌でござりまする。

忠常　イカサマ、尤もなる申し分。願ひの通り、お七に對面申しつける。

すぎ　エヽ。

　ト思ひ入れ。

忠常　と云ひたいが、マア、ならぬ。尋常に縄かゝれ。

すぎ　エヽ……そりや、何ゆゑに私しに。

忠常　云ふまでもない、不屆き者。はや明日は刑罪と、科極まつたるお七こそ、大切なる天下の囚人。既に、古へ越王勾踐、呉王が爲に獄屋の住ひ。越王討たれんとする折から、内通に依つて助けられ、呉王を討ち取り、會稽山に恥を雪ぎしその例し。これとは等しからねども、七も即ち天下の科人。その者方へ内通のこの歌。サア、例へ内通でないにも致せ、上意を蒙むり、某が預かるところの科人なれば、その分には差措かれぬ。

しか　そりやお情ならござりまする。其やうに、なされずと、どうぞ。

すぎ　イエ／＼、おしかさん、あなた方の仰しやるは、御尤もでござりまする。お上の掟を叛きましては濟まぬとの御意、是非に及びませぬ。サア／＼、縄をお掛けなされて下さりませ。

　ト向うバタ／＼にて、おたけ走り出て來て

たけ　マア／＼、お待ちなされて下さりませ。お七が母でござりまする。

六郎　ヤア、慮外者、扣へて居らう。大切なる詮議あるゆゑ、縄打ちするを何ゆゑ留めた。

たけ　御尤もでござりまする。御詮議の様子は存ぜねど、昨日までも、其やうな、お達しもないこの女子。定めし今日も娘が見舞ひに參りまして、何か不調法な事でもござりまして。

六藏　不調法の段ではない。科極まつたる其方が娘へ、何か怪しい書面を遣はし、内通なさんとひろぐゆゑ、女ながらも、その分には差措かれぬわえ。

たけ　ほんにそれはマア、大膽な事いたしましてござりまする。又すぎもすぎぢや。如何に辨まへないと云うて、わしにも知らさず、其やうな物持つて來ると云ふ事があるものぢや。畢竟其方が氣が附かぬから、斯樣々々致しますると、わしに、ちよつとなと、知らせたら、此やう

にあなた方の、お叱りは請けまいに………憚りながら仁田さまへ申し上げまする。何事も辨まへませぬ女子の事。お上の掟に背きましたは、存ぜぬゆゑの不調法でござりまする程に、そのお詫びは幾重にも、私しがお願ひ申し上げまする。どうぞ、お慈悲にお見遁がし遊ばされ下さりませ。

忠常　ムウ、尤もなる申し分。如何にも其方が申す通り、掟を知らぬゆゑではあらうが、大法なれば、速やかに、糺明いたした上でなければ、赦すとは申されぬ。さりながら、年端も行かぬ娘お七、長々牢舎いたせし上、すぎをも糺明申し付けば、其方は勿論、すぎが親族友達も、さぞ嘆かはしう存ずるであらう。依つて、すぎをば其方に、キッと預け遣はす間、取逃がさぬやう守護いたせ。

たけ　エヽ、有り難うござりまする。私しがお預かり申しますからは、お氣遣ひござりませぬ。

六郎　無駄を云はずと、早く立て。

竹杉　ハア。

　トおすぎ、おたけ、おしか、立たうとする。

忠常　アイヤ、暫らく。其方どもへは忠常が、聊か尋ぬる仔細がある。暫らく扣へい。

三人　ハア。

　ト三人、下に居る。

忠常　その仔細は外でもない、其方達はお七が身の上、さぞ嘆かはしう存ずるであらうな。

たけ　嘆かはしい段ではござりませぬ。子に甘いは母親の世間の慣ひでござりますが、分けて、わたしは子煩悩、題目講の話しにも、こなたのやうな子に親は、近所にあるまいと、皆申してござりまする。その子煩悩の私しが娘、今度のやうに御詮議に遭ひまする事ぢやもの、悲しうなうて、なんと致しませう。どうぞ、命に觸らぬやうにと、毎日々々湯島にござる、天神様、雜司ヶ谷の鬼子母神様へ跣足詣り。年寄りで、行歩も叶はず、どこもかしこも痛みますれど、推して參るも、お七が可愛さ。あるとあらゆる神佛、お願ひ申せど利生もなう、今日はお慈悲で科人を、お助けなさると人の噂。夕刻聞くより嬉しうて／＼、お呼び出しもあらうかと、寐られぬ儘に用意して、心待ちして居りましたが、今までなんのお沙汰もないゆゑに、どう云ふ様子か案じられ、參つて見れば、この體裁。最前ちよつと承れば、娘は科が極まつたとやら。今度のお慈悲に娘は、お赦しはござりま

せぬか。

ト涙ぐみて云ふ。忠常、ホロリとして

忠常　重々尤もなる願ひ、なれども、よく料簡も致して見い。この度、天下に騒動あるゆゑ、用心の爲、嚴重に相固めよと、町中へ仰せ出され、構へしところの木戸を開かせ、人々を騒がせしは、重々の罪科。關所破りも同罪なれば、町中を引廻せし上、焙烙死刑に行はるゝ。

三人　エヽ。

たけ　すりや、どうあつても娘が命は。

忠常　助けたいものなれども、その儀は叶はぬ。

三人　ハア、。

ト泣き落す。

忠常　心からとは云ひながら、まだ辨まへなき女子の事、戀の一途に仕出かせし業……其方達が嘆くも尤も。かけ構ひなき某まで、不便の涙にくるゝわやい。

三人　チエヽ、

ト大泣き。合ひ方になり、向うより、源藏、白髪鬘、野羽織、踏込み、大小の形にて、訴狀の箱を風呂敷に包み、持つて出て、直ぐに本舞臺へ來り

源藏　憚りながら、お役人樣へお願ひの筋ござつて、參上いたした者でござる。どうぞ、お取次頼み存ずる。

六郎　ヤア、おのれ、何者なれば、願ひとあるに、刀を手挾み、推參至極。下がり居らう。

トきつと、云ふ。源藏あわてゝ

源藏　ハツ〳〵。こりや、如何にも拙者が誤まり。

ト兩腰を取り、花道へ置く。

忠常　我れ〳〵への願ひとは、先づ其方は何者ぢや。

ト源藏平伏して

源藏　ハツ、拙者めは九州に、侘住居仕る者でござりまするが、この度、初めて出府いたせし仔細と申すは、兼ねて、お聞き及びもござりませう、この度牢舍いたしたる、藤太重宗が親、荒井源藏重國と申す者でござりまする。

六郎　アノ、御自分が。

源藏　如何にも。

忠常　成る程、忠常、兼ねて聞く。藤太が實父源藏は、九州に居住して、文武を兼ねし侍ひとの事。定めて、この度出府ありしは、藤太が罪科、赦免の願ひに出られしか。

源藏　御尤もなる御賢察。如何にも悴が儀でござれば、罪

の輕重に依りまして、御憐愍のお仕置、願ふまいものでもござらねど、この源藏は左樣な未練な侍ひではござらぬ。御存じもござらうが、もと藤太めは、先將軍、賴朝公のお側にて、召使はれたる、かぶつきり。幼少の時分より、力量人に勝れしゆゑ、輕き者より召出され、成人するに隨ひて、次第に强き、その力、八十人に對するとの事。君の馬前で度々の功名。御所の五郎丸重宗と、人に知られし烏滸の者、富士の御狩の折からも、鬼神と呼ばれし五郎時宗、生捕りたる功に依つて、新たに拙者が家名を賜はり、荒井の藤太重宗とて、分外の所領を頂戴。斯く高恩を蒙むりながら、蒲どのゝ謀叛に組みして、忠臣の道を忘るゝ人外め。拙者が一緒にあらうずならば世上にこの事沙汰なきうち、彼れめを手討ちに仕り、惡名をも請けさせず、拙者に於ても君の厚恩、少々は報はんに、國を隔てゝ今更後悔。赦免の訴狀など致すやうな拙者ではござりませぬ。悴が儀は如何やうとも、仰せ付けられ下されませう。

忠常　如何にも、その儀は左樣あらいでは叶はぬ筈。して又、重國には何用あつて、これへは參つた。斯く云ふは仁田の四郎忠常、願ひの趣き承はらう。

源藏　どなたかと存ずれば、仁田四郎忠常どのとな。然らば拙者が願ひの趣き、申し上ぐるでござらうが、粗忽に口外なり難き、密事でござれば、あらまし書面に認めてござる。イザ、御披見下さりませう。

ト風呂敷を解き、訴狀を忠常が前へ出す。忠常開き、讀んで見て

忠常　訴狀の趣き承知いたした。委細の儀は、口上を以て申さんとの事。この書面の趣きでは、ちと某も心當りの儀もあれば、その譯巨細申し聞かせられい。

源藏　願ひの趣き、早速お聞濟み下されまする段、有り難う存じ奉りまする。さりながら、この儀は密々の儀でござりますれば。

トあたりへ思ひ入れ、忠常も思ひ入れあつて

忠常　如何にも〳〵。ナニ、何れも、彼れが密事を承るうち、暫らくあちらへ。

六郎　心得てござる。

軍藏　何れも參れ。

侍ひ　ハ、ア。

ト軍藏、二重を下りる。六郎その外侍ひども附き添ひ下座へ入る。

たけ　私しも御門前へ参りまして、扣へまするでござりま
すか。
忠常　アイヤ、其方どもには、未だ申し達する用事もあれ
ば、暫らくあれに扣へてみよ。
ト下の方へ思ひ入れ。
三人　畏まりました。
ト下の方へグツと寄り、扣へて居る。
忠常　重國、近う。
源藏　ハツ〳〵
ト忠常が前へ出る。
忠常　この願書の趣きは、藤太が儀は差措いて、範頼公の
御謀叛につき、汝一つの謀り事あるゆゑ、言上したいと
記してあるが、して、その謀り事の仔細はどうぢや。
源藏　ハツ、その仔細と申しまするは、悴藤太を御糺明遊
ばされまするは、範頼公へ一味徒黨の者どもを、御詮議
の爲ではござりませぬか。
忠常　如何にも。
源藏　畏れながら、そこがちとお廻り遠い儀と存じ奉る。
いはれざる枝葉を御詮議ござらずとも、根本たる範頼公
を失ひ奉らば、枝葉は自然と枯るゝの道理。何ゆゑ範
頼公を除く御思案はなされませぬな。
忠常　ムウ、尤もなる申し分。して、蒲どのを除く方便が
あるか。
源藏　サア、北方に美人あり、一度笑めば城を傾け、二度
笑めば國を傾く。依つて女郎を傾城、傾國と申す。我が
朝にも、唐土にも、女に迷ひ、國家を失ひ、身を亡ぼす
の例し云ふに及ばず。蒲どのゝ謀叛は何ゆゑ。吉祥寺の
欄間にかけし、天女の容貌美なるに依つて、これに迷は
れ、その天女が容貌に似たる女を求めんと、元の起りは
その事ゆゑ。
忠常　如何にも、其方が申す通り。
源藏　サア、その基たる八百屋お七、この度の罪科をば、
赦免仰せつけられませう。
忠常　なんと。
源藏　關八州に隱れなき、吉祥寺の欄間の彫り物、天女に
似たる八百屋お七、蒲どのにも彼れに執心。然れば今度
の罪科をばお赦しあつて、その代り過怠と名けて、蒲ど
のへ妾奉公に差上げさせ、これを以て、心を蕩かし、酒
宴を勸めて一味の者ども、お心に叛くやうになし、蒲ど
のを亡ぼさんに、なんの手間暇。然らば軍勢の費もなく

民百姓をも惱ませず、自然枝葉も枯れ行きて、天下は益ます太平長久。なんと、この謀り事は如何でござらう。

忠常　如何にも、その儀は好き計策。割符を合す重忠の言上。まツその如く、秩父の重忠、兼ねて言上。

源藏　そんなら、この儀を秩父どのにも。

　ト忠常、懷中より一通を出し

忠常　これを見られい。お七が死刑を赦せし上、反間の謀り事を用ひんとある、この書面。この事君へも言上して、即ちお七が死刑を赦され、言上の如く致せよと、上意を請けて四郎忠常、只今これへ出席いたした。

　ト源藏、感心したるこなし。

源藏　ハツ、聞きしに違はず、四相を覺る聰明睿智の重忠どの、さこそあらんと存じてござる。然らばその儀を、仰せ渡され、今宵のうちに妙計を、お授けあつて然るべく存じまする。これにござつて詮なき拙者。然らばお暇。

　ト立たうとするを

忠常　アイヤ、暫らく。斯程の事を存じつけたる智謀の其方。其まゝに歸參も便りなき事。この謀り事成就するまで、とてもの事に、見屆けてもらひたい。

源藏　そりや、兎も角も、お指圖次第。

忠常　然らば暫時、窮屈にはあらんが、あれに忍んで委細の樣子。

　ト格子の方へ思ひ入れ。

源藏　そりや又何ゆゑ。

忠常　只今この所へ、藤太を引出し、詮議いたす一儀あれど、其方がこれにあつては何かの手支へ。依つて、かしこに暫しのうち。

源藏　心得てござりまする。

　ト下の方の格子の蔭へ忍ぶ。忠常、おすぎ、おたけが方へ思ひ入れして

忠常　兩人とも、これへ。

杉竹　ハツ。

　ト前へ出る。

忠常　コリヤ、其方ども、氣遣ひ致すた。娘が儀に附き、喜ばしい仔細があるぞ。

たけ　エ、なんと仰しやりまする。

すぎ　ハテ、お七さまの事について、何やら嬉しい事があるといな。

たけ　何を仰しやるやら。今日この頃、なんの喜ぶ事があ

らうぞ。なんであらうと、娘が死んでしまうては。
忠常　イヤサ、その娘を助けて遣はす。
杉竹　エ、。
ト思ひ入れ。
しか　お七さまを助けるといな。
ト前へ來る。
忠常　如何にも。明日死刑に行ふ者なれども、重忠どのと某が、料簡いたし、助け遣はす。
杉竹　そりや御眞實。
忠常　白痴者めが。裁判人たる某、僞はりを申して濟むものか。
杉鹿　阿母樣。
たけ　二人の衆、
三人　こりやマア、夢ではあるまいか。助かるといな助かるといな。
忠常　コリヤ、騷ぐまい。餘人が聞いては事の破れ。さりながら喜ぶも道理。娘もこの儀承らばさぞ喜び。
ト口々に云ふ。忠常制して
たけ　イエモウ、喜ぶ段ぢやござりませぬ。コレ、すぎ、ちよつと本鄕へ行て、この事を染五郎へ知らせてたも。
すぎ　ハイ〳〵。ドリヤ、行て參りませう。
ト行かうとする。
忠常　コリヤ〳〵女、其方には、未だ申し付ける役目がある。その知らせには、あの者を。
トおしかへ思ひ入れ。
しか　ハイ〳〵、畏まりましてござりまする。そんなら、おすぎさん、わたしが行て來ようわいな。
竹杉　どうぞ、さうして下さんせ。
トおしか行かうとする。
忠常　コリヤ、待て女。彼れが助かると申す事、必らず、外へ沙汰いたすな。染五郎ばかりへ密かに申せ。
しか　畏まりました。
ト三重になり、向うへ走り入る。
忠常　コリヤ、兩人、お七を助けると申したは、此方より申し付くる大役あるゆゑ。その役儀、異議なく承知いたすに於ては、如何にも、助け遣はすが、もし又その儀をならぬと申せば、是非に及ばず、矢張り死罪に行ふが、申し付くるその役目、其方ども〳〵に、お七が合點いたすやう、とくと申し含めい。
たけ　その大役と申しまするは、マア、どのやうな儀でご

ざりまする。

忠常　その儀は密かに。近う。

　ト おたけ、忠常が方へ行く。忠常囁く、おたけ呑み込み。

たけ　畏まりましてござりまする。何がさて、命さへ助かりまする事なら、どのやうな事でも致させいで、なんと致しませう。コレ、おすぎ、斯うぢやわいの。

　ト おすぎに囁く。

すぎ　サア、その事はよいはよけれども、御合點なされば よいが。

たけ　ハテ、阿房な事云やる。この事を合點せにや、命がないわいの。死ぬる思ひをする事なら、どんな事でもせいでわいの。兎角申す事はござりませぬ。早う、そのお役目を、仰しやり付けて下さりませ。

忠常　然らばそれに扣へ居れ。只今申し付くるであらう。

　ト 下座の方へ向ひ

長沼六郎、荒井の藤太を引出し召され。

六郎　畏まつてござる。

　ト 荒井の藤太に、長沼六郎付き添ひ、侍ひ繩を取り、下座より出て來る。

忠常　如何に藤太、最前も申す通り、蒲どのゝ逆心は、とても本意を達する事は叶ふまい。いはれざる隱し立てして、無益に犬死いたさんより、潔く白狀いたせ。

藤太　こは仁田どのにも似合はぬ仰せ。例へ本意は達せぬとて、今さら心を飜へし、白狀いたす藤太でござらば、かゝる大事を頼まれませうや。如何なる責に逢ふとても、變ぜぬ性根を見込んだ上、頼まれた、この重宗。知らぬと申す詞は變ぜぬ。斯くなる上は、知つた事でも、最初の詞、反古には致さぬ。火責め水責め鉛の熱湯、隨分力の續くだけ、如何やうとも拷問召され。とても白狀は仕らぬ。

忠常　然らば兎角云ふに及ばぬ。長沼六郎、引立てゝ嚴しく拷問。

六郎　承知いたしてござる。侍ひども、引立てい。

侍ひ　ハツ。立ちませい。

　ト 引立て、六郎付き添ひ、格子の内へ入る。おたけ、思ひ入れあつて

たけ　憚りながら仁田さま、只今のお詞を承りますれば荒井の藤太を、あのやうに、御詮議遊ばされまするには及びますまい。

忠常　そこが一つの謀り事、一計三用の手段を以て、事を納めん重忠どのゝ計略。藤太が親の源藏、この一計を勸むれども、彼れが心底知れざれば、藤太を強く責めて見せ、心にかけねば誠の忠心。もし又藤太が苦痛をも、助けん爲の計略なるか。それを試さん便りの一ツ。また二つには其方が娘、もし浦などのへ行く事を、承引せざるその時は、藤太が苦しむ體を見せ、承引せざればあの通り呵責を見するが、それでも浦どのゝお心に從はぬかと、申さん爲。また三つには藤太重宗、拷問に堪へ兼ねて、白狀いたさんものでもない。これ以て無益にあらぬ詮議の一つ。一計三用を含らする、便りとはこの事ぢやわい。

　ト おたけ、感心したるこなしにて

たけ　マア、お侍ひ樣の智惠は又、格別なものでござりまする。そんなら娘にその事を。

すぎ　成る程〳〵、こりや、結構な御料簡。お七さまのお命を救ひまする事なれば、ちつとも早う、その事を、お聞かせなされて

兩人　下さりませ。

忠常　ナニ、侍ひども、お七をこれへ。

侍ひ　ハッ。

　ト 合ひ方になり、奥より侍ひ大勢、お七を連れ出て來る。格子の内にて

六郎　サア、重宗、有やうに白狀せまいか。

　ト 重宗を打擲する。お七これを聞き、愕りしながら出て來る。

すぎ　ヤア、お七さまでござりますか。

たけ　お七かいの〳〵。

　ト 取りつき泣く。

お七　お前は母さん、おすぎも、よう來てたもつたなア。なぜにわし一人、あのやうな怖い所に置いて、母さんや吉三さんは、來て下さんせぬぞいなア。

すぎ　そのお恨みもお道理なれど、吉三さまぢやとて、お前に逢はるゝ位なら、お出でなされいで、なんと致しませうぞいなア。

　ト 格子の内にて

藤太　百杖でも千杖でも打たば打て。肉は裂け、骨は微塵に碎くるとも、云ふ事に於ては、云はない〳〵。

六郎　ヤア、云はぬとて、其まゝに差措かうや。斯うしても云はぬか……これでも云はぬか。

ト さゝらにて喰はす音する。藤太ウン〳〵と唸る。お七、オロ〳〵して

おせ　あの聲は何ぢやぞいな。わしや、怖いわいの〳〵。

たけ　イヤ、ありや怖いものぢやない。科人を責めるのぢや、面白いものぢや程に。マア、ちやつと行て見やいの。

ト おせ、頭振つて

おせ　イエ〳〵モウ、わたしや、そんな事見る事は、否ぢやわいな。

たけ　なんであらうと、この母が云ふ事ぢや。マア、行て見やいの。

ト 嫌がるお七を無理に格子の側へ連れて行き、格子を覗かする。お七見て、つかへを起すこなしにて、ウンと下に居る。おすぎ驚ろき

すぎ　申し、お七さま、氣をしつかりとお持ちなされませ。ほんに、マア、否ぢやと仰しやるものを、無理な事ばつかり。申し、お七さま。

ト 抱き起す、介抱する。

藤太　アヽ、苦しい〳〵

ト うん〳〵と呻く。お七、恟りして

おせ　ありやマア、どうなる事ぢや。怖いわいたう、怖いわいなう。

ト また障子の內にて

源藏　六郎どの、責めが手緩い。其やうな事で怖ぢる奴ぢやアござらぬ。ふり〳〵にかけて血吐かずば、白狀せまい。天秤責にさつしやい。

六郎　合點だ。

ト 責める。お七、オロ〳〵して

おせ　母さん、すぎ、怖いわいなう〳〵。わしや、あのやうな事聞く事は否ぢや程に、早う內へやつて下さんせいなア。

たけ　オヽ、怖うなうてわいの。まだ〳〵、あんなものではない、焙烙の死刑といふは、等活地獄の苦しみ。今宵七ツの鐘を合圖に、其方はそのお仕置ぞ。

おせ　エヽ、アノ、わたしが。

たけ　サア、其方がなした罪ゆゑに。

おせ　そりやマア、ほんの事かいなア。

すぎ　ほんの事かぢやござりませぬ。あの責を見てさへ、恐ろしう思うておやに、お前樣はマア、どうしようと思うておやえ。よう思案して御覽なされませいなア。

おセ　その思案とは、どうするのぢやぞいな。
忠常　アイヤ、その思案と申すは、この度の一件に付き、此方より申し付くる役目がある。その役目さへ勤めなば、あの如き拷問にも及ばす、焙烙死刑の罪科も赦す。右の役目は兩人へ、先刻申し聞かせ置いたれば、彼れに問うて、右の役目、相勤むれば、命助かるのみならず、その身の仕合せ。まつた手引き致さねば、焙烙の死刑に行ふ思案極めて返答いたせ。
お七　そんなら、そのお役目さへ勤めたら、あのやうな目には遭はぬかえ。
すぎ　サア、お命助かるその上に、吉三さまにも逢はれまするわいなア。
お七　そりや嬉しい事ぢやが、その役目と云ふは、マア、どのやうな事を勤めるのぢやえ。
たけ　マア、どんな事とて、其方の身に叶はぬ事でもない、女子の身でも心安う勤まる役目。外の事でもない、わしが口から、どうも其方には云ひ憎い事ではあれど、一通り云うて聞かす。今度三河守範頼さま、御謀叛の思し召し立たれ、民百姓の歎きとなる。こりや、何ゆゑぢや、其方に惚れてござるゆゑ。そこで其方が死罪になるを、お助けなされた命の替りに、範頼さまへ御奉公に上がるのぢやわいの。それさへ應と合點すりや、あのやうな酷い目に遭うて、死ぬる命を助かるのぢや。ハテ、命に替へる物があらうか。生きてさへ居りや、また好い事もあるわいの。サ、應と云や〳〵。
ト格子の内にて、ウン〳〵呻く。
お七　こりや、マア、どのやうな目に遭ふのぢややら、きつう苦しさうな聲ぢや。
たけ　どのやうな事ぢややら、マア、行て見や〳〵。
ト無理に障子の方へ連れて行く。呻く聲する。
お七　ナウ、怖いわいの〳〵。
ト平伏し泣く。
すぎ　あれよりはまだ、憂い目に遭はしやんすのぢやが、お七さま、御奉公なさんす事は嫌かえ。
お七　命さへ助かる事なら、隨分奉公しませうが、そりやなんの奉公ぢやえ。
忠常　妾奉公しや。
お七　なんとえ。
たけ　範頼さまに、抱かれて寐て、お心を蕩かし、天下の爲に蒲どのを、騙し負ふせれば、人の爲その身の爲。な

んと、好い御奉公であらうがな。合點がいたか。

ト お七、默つて思案して居る。

すぎ　サア、爰がいつち大事の所でござりまする。應と仰しやれば命が助かる。嫌ぢやとあれば、恐ろしい仕置のうちにお果てなされる。生きるか死ぬるか、地獄、極樂の境ぢや程に、よう御料簡なされませ。

たけ　料簡までもない。應であらうな。お七、合點か合點か。

ト 格子の內にて

藤太　とても白狀せぬからは、殺せ／＼。

六郎　これでも云はぬか／＼。

ト 源藏出て來て

源藏　ヤア、方々、白狀せぬ死太い悴め。最早、彼奴が命も體も、少しも惜しむ事はない。

忠常　お七への見懲らし、焙烙死刑に行ひ召され。

六郎　心得てござる。

ト 格子の內より煙り大分立つ。

忠常　アレ、あの體をお七に見せい。

たけ　畏まりました。お七、お七や。

ト 嫌がるお七を無理に格子を覗かせる。お七、慄へながら見て、トヾ、ウンと悶絶する。おたけ、おすぎ驚ろき

すぎ　お七さま／＼。

たけ　お七やアイ／＼。

ト 呼び、介抱する。おすぎ、水を持つて來て飮ませるお七心付く。

たけ　コレお七、氣が付いたか。なんと、あのやうに苦しんでも、範頼さまへ行く事は嫌か。

すぎ　サア／＼。應と仰しやりませ／＼。

お七　嫌ぢや／＼。例へこの身は阿鼻焦熱、叫喚の苦しみに死ぬるとて、吉三さまより外に殿御は持たぬ。範頼さまへ行く事は嫌ぢや。嫌ぢや／＼わいなア。

たけ　すりや、あのやうに苦しんでも

お七　吉三さまより外へ行く事は、嫌でござんす。

すぎ　命にかけても操を立て。

お七　サア、早う死んで、未來で女夫になりたいわいなう。

ト おすぎ、おたけ、ホロリと思ひ入れ。

兩人　仁田さま。

忠常　兩人、

源藏　斯くまで深き惡緣は、如何なる前世の報いなるか。
四人　ハテ、是非もない事ぢやなア。
ト源藏、牢へ入り、藤太が首を引ッ提げ、出て來て
源藏　心からとは云ひながら、非業の最期。せめては首を申し請け、
忠常　あと懇ろに供養。
たけ　娘が得心せぬ上は
竹杉　ハア。
ト泣き落す。忠常、源藏、よろしく見得にて。拍子幕。

大切　浄瑠璃の場 鈴ヶ森の場

淨瑠璃「新綴房雛世話事」常磐津連中
同「道行手向の花暈」竹本連中

役名——小姓、吉三郎。仁田四郎忠常。海老名軍藏。白酒賣り、きたり喜之助。八百屋母、おたけ同下女、おすぎ。土左衞門傳吉。八百屋娘、お七

本舞臺、三間の間、正面金襖、二重舞臺、欄間、蹴込み、結構に仕立てたる御殿かゝり、御簾卷き上げ、內に紫の幕を張り、上の方に毛氈かけたる高臺、爰に常磐津連中居並び、右二重舞臺に雛の道具いろ／＼取散らし、左右櫻の立ち木、日覆よりも櫻の吊り枝、見事に飾り、すべて雛段の模樣よろしく三味線入りの下がり葉にて幕明く。
ト切り穴より心と云ふ字の魂ひ、二つ引き上げる、前
〽雛祭り、人形天皇の御宇かとよ、巴にめぐる曲水の、緣は異なもの芦田鶴も、今日は晴れたる女夫事。
ト三味線入り誂らへの鳴り物になり、上の方に、お七地びたい振り袖。着流しの形、瓔珞を冠り、結構なる十二單衣の上ばかり着て、小さな米炊桶を持つて立ち身。下の方に吉三郎、若衆鬘、着流しの上へ束帶の上ばかり引ッかけ、冠をかぶり、庖丁を持ち、雛の俎板にて、長芋を切つて居る見得にて、セリ上げる。
〽現なや、天の日なみにあらねども、おものゝはまの手業とて男雛の料理拵らへに、しどけ形振り飯炊く女雛、水もくもでの杜若、杜若娘に角髮の、若衆姿も榮三郎、互ひに思ひ合ふきどし、樂しさ外にあら世帶。

トこの文句にて、兩人よろしく振りあつて
お七　モシ、吉三さん、わたしが心の念が届いて、世間も晴れて此やうに、結構な女夫になるからは、どうぞ二世を固めの杯。
吉三　ハテ、そりや知れた事いなう。これまでは人目を忍ぶ二人が仲。今日よりしては遠慮なう、妹脊の縁を結ぶ印、杯せいでどうせうぞいなう。
お七　嬉しうござんす。
〽折もこそあれ向うより。
ト揚げ幕より喜之助、手甲、脚絆、淺黄頭巾、白酒賣りの拵らへにて、誂らへの桶をかたげ、出て來る。
〽山川と、風のかけたる一腰は、流れ渡りの出商ひ、雛の節句と賣り子まで、豐島屋だけに如才なう、團扇をちよつとかざし草〽富士の白雪や朝日で解ける。〽解けたらどうしたえ。〽娘島田は口舌の半でサア寢て解ける。〽やれ、よい〳〵よい評判で賣りかける、江戸の得意ぞ有り難さ、お七はこれて幸ひと。
トこの文句にて、喜之助、よろしく振りあつて、本舞臺へ來る。お七、思ひ入れあつて
お七　ほんに、よい所へ商人さん、アノ、わたし等は今爰で、女夫の杯するのぢやけれど、仲人さんがないに依つて。
喜之　オツと、皆までのたまふな。そんな事なら來り喜之助と云ふ白酒屋。女雛男雛のお二人樣、仲人になつて上げませうが、先づ世帶を持つには、第一に夫婦喧嘩を覺えねば。
吉三　ムウ、その女夫喧嘩と云ふものは、アノ、いろは短歌の本にある。
喜之　それ〳〵、そのいろは短歌を知つてなら。
お七　そんなら、あのやうにせにや、世帶とやらが
喜之　持たれぬ段ではござりませぬ。夫婦喧嘩の投げ道具は、わたしが運んで上げますから、サア、稽古がてらにちつとも早く、お前はあなたの胸づくしを。
お七　アイ〳〵。そんなら斯うかいな。
〽と吉三郎が胸づくし。
喜之　それ〳〵、もつと兩手でしつかりと。
お七　アイ〳〵、斯うかえ〳〵。
ト吉三郎をこづく。
吉三　アイタ、、、。
喜之　そりやそこで。

〽いの字云ひ交し、〽ろの字ろく〳〵にまだ寢もせで、はの字始めてしつぽりと、にの字二世までかけてやと、云はしやんしたが、ほの字ほんぼに身にこたへ〽への字片時も忘れず居るものを、外の女子にその帶を、との字解かしやんしたらきかぬぞえ。〽ちの字ちつともそのおやき、りの字悋氣は此方から、ぬの字濡れてもし、るの字留守にて、をの字置いてもと、わの字我れらは腹が立つ〽かの字必らずその口を、よう覺えてと手當りに、〽連木擂り鉢盃盆、雛の調度の投げ打ちに、こちのかみさん隣りのお婆、澤瀉なりの大家樣、雪駄片しに下駄片し、これはお內儀どうでんす、先づ御亭主も默つたり、待つたり三助足元の、茶碗の缺けであいたしこ。

ト この文句に合せて、吉三郎とお七、夫婦喧嘩の振りよろしくあり、喜之助、雛の道具をいろ〳〵運ぶと、兩人投げつけせり合ふ。喜之助、取りさゆる事、文句の通りよろしくあつて

喜之　マア〳〵、あの鹽梅で每日やつて御覽じませ。さてこれからは女夫の杯。サア〳〵、そこでと、びいどろの杯銚子取持つて、似合ひの花の若木同士。

ト喜之助、雛のふらそこと杯臺を持ち、兩人が中へ坐り

〽葉山しげ山しげり合ひ、彌生月の雛遊び、飾りし雛は何々ぞ、數もあまがつ犬張り子、二つ枕の草紙にも、嫁入り道具や二葉草、織殿屋の孫三郎に、腰卷模樣を織らせた、唐づくしを織り手をこめて織らせた、さつても見事に織る機は、綾や錦の花紅葉、〽五人囃子の囃し方、太鼓の撥に鉦入れて。

ト これより鳴り物入りの大小のあしらひ。

〽一おきや二おきや三おきや櫻、五葉の松にあれ見さい鳶に烏がなア、ねぢやけた首で、獨り頷き話しをしやるちやうろに乘せてちやうろはかしこ、殿樣お馬、しやんと召させて小室節〽竹にサア雀はナア、エ、品よくとまるナアエ、とめてサア、とまらぬナアエ、色の道かいなナアエ、〽姉さん長持やいつ來るえ、〽提灯ともして今來るえ、〽牡丹餅でおいどを叩くやうだナアエ、〽ハイシイ道中行列揃へて露拂ひ、先づは豐かに振つて振り袖花の雪、日傘で振り込め、アリヤンリヤリヤ、コリヤンリヤリヤ、七草踏みやれお乘り物、拍子とり〳〵なまめけり。

ト この文句にて、吉三郎、お七、よろしく振り。

喜之　イヤ、どうも云へない〳〵。心も浮き立つ櫻月、ほんに櫻と云へば、さぞ夜櫻が。
吉三　コレ〳〵、その夜櫻とは、何れの名所。
喜之　御不審尤も。お寺育ちの吉三さま、夜櫻は御存じあるまい。さらばお聞かせ申さうか。
〽吉原のや。〽春の夕暮れ來て見れば、入相の鐘に花ぞ咲きけり。〽花を見捨てゝ歸る雁、〽燕はいつも花の客猪牙で急ぎの二丁立ち、三丁立ち、押せ押せ押せ、しつぽ〳〵はらつぽう、椎の木ぢや、はんぶんぢや、浮いた浪とや花川戸、爰淺草の觀世音、三社權現横になし、浮氣に戀の仲の町、寛濶華麗の長羽織、今宵も爰に色上戸、酒に幇間が浮かしたて、〽津山おかめ、女は津山の山の古狐、眉毛濡らしてかゝるべい、コリヤ〳〵〳〵なんとがな、一貫三百十四馬、牛となしても乘せたやな、痩せ畑のぼうふやは、丁度ならぬに極まつた、コリヤコリヤ〳〵もちこいなア、そこせい〳〵、そつこで夜毎に通ふ神。
喜之　ハヽヽヽ。
ト笑ひながら、下に居る。吉三郎、思ひ入れあつて
〽吉三郎は今更に。

吉三　イヤナウお七どの、切なるこなたの心にめで、一旦女夫になつたれども、父の菩提のその爲に、出家にならねば叶はぬこの身。どうぞフッツリ思ひ切り、道心させて下されい。賴みまする〳〵わいなう。
〽お七はちやつと耳に手を、聞えぬ心恨めしと、差しこむつかへ押し靜め。〽あれ又そんな酷い事、云うて泣かすが嬉しいかえ、そもやわたしは母さんと、お歳暮參りした時に、可愛らしいと思ひ初め、その十一の書初めに、戀と云ふ字を書き習ひ。〽十二の暮れは友達の、仲間はづれと浮き名立つ、はや十三の正月は、始めて月の障りとなり、〽恥かしい事いはばしの、寄るべなければくよ〳〵と、焦れてなんと松竹梅、湯島にかけし筆の跡、〽かたみに殘し死にもせめ、念が屆いて差向ひ、火箸で灰へ。〽い。〽と。〽しいの、假名も叶ふの緣結び、〽きつとやいのとたまさかに、忍ぶ人目もいとひなう、ほんの女夫になるや否、また胴慾などばかりにて、むせび歎くぞいぢらしき。
トこの文句にて、お七、クドキの所作よろしくあつて吉三郎に取りつき泣く。喜之助、呆れしこなし。
〽オヤ〳〵〳〵こりやどうぢや、痴話り給ふかお口

文化六年三月森田座上演

三世坂東三津五郎の白吉ト喜之助

舌か、こんな所が仲人役、杯代りについちよつと、口吸ひものゝ白魚に、木の芽利かしてやらしやんせ。
　トお七を吉三郎に抱きつかせる。兩人、ツン／＼して居る。
〽紙雛樣ぢやあるまいし、互ひにひつたり抱きついて、それ仲直りを、〽白酒や。
　ト嫌がる兩人を、喜之助、無理に抱きつかせる。兩人ひつたり抱きつき、思ひ入れ。
〽甘酒賣りではなけれども、三國一と手を打つて、祝ふや宵のよそへ唄、〽取り合せ、桃の節句と曙櫻、海のきぬ／＼香に匂ふ、うら山吹と餘所目にも、床しらしいぢやないかいな、いづれ劣らぬ桃櫻、〽サアこれからがお床入り、〽常寧殿の箱の內、雨と雲井の夢覺めて、思ひや後に如何ならん、後の思ひや如何ならん。
　ト三人よろしくあつて、トゞ喜之助、兩人を屛風の內へ連れて入る。この見得、よろしく納まると、チヨンと木について、一面に黑幕を切つて落す。
　本舞臺、向う黑幕、爰に駕籠屋二人、駕籠を舁き上げてゐる見得。時の鐘にて道具とまる。

　トどろ／＼にて、心といふ字を日覆より下げ、駕籠の內へ引いて取る。
駕一　コレ、棒組みや、慥か阿母さまは、駕籠のなかで眠つて、怖い夢でも見さしつたさうだ。
駕二　成る程、剛氣に駕籠が搖れる。下ろせ／＼。
駕一　それがいゝ。下ろせ／＼。
　ト駕籠を下に下ろし
駕二　モシ／＼阿母さま、どうなされました／＼。
駕一　魘されてゐなさるやうだ。モシ、どうなされましたどうなされました。
　ト駕籠の垂れを上げる。おたけ、內より珠數を持ち、まろび出る。
たけ　娘いなう。コレお七、吉三さん、娘いなう。
　トうろ／＼尋ねる思ひ入れ。駕籠かき介抱して
駕一　コレ、阿母樣、お心をお附けなされませ。
駕二　夢に魘はれさつしやれたか。
たけ　ムウ、そんなら、今のは夢であつたか。
兩人　とつくりと目が覺めましたか。
たけ　忝なうござる。夢は五臟の煩らひとやら、切めて最期に娘が顏、暇乞ひにと思うても、足腰も叶はぬこそ、

辻駕籠に助けられ、爰まで來たも夢うつゝ。

ト思ひ入れあつて。

おすぎや〳〵、コレ、駕籠の衆、あれはどこへ行きました。

駕一　いま向うへ、大勢の人が見えましたゆゑ、今日の科人ではないかと、見に行かれました。

駕二　シタガ、もう歸られませう。

たけ　イヤナニ駕籠の衆、戻りにも又頼まう程に、ちつとの間、どこぞに休んでゐて下され。

駕一　ハイ〳〵、畏まりました。

駕二　左やうなら、そこらで一杯やらかして參りませう。

たけ　コレ〳〵、おすぎに會はしやつたら、早う來いと云つて下されや。

駕一　ハイ〳〵、さう申しませう。

たけ　頼みましたぞや。

ト駕籠屋は駕籠をかたげて下手へ入る。

ほんにマア、思ひがけない今の夢。あの仰山な御殿で、娘と吉三さま、雛樣事の睦ましう、女夫にしたその喜ばしさ。覺めればそれに引替へて、もうあそこに見えるが鈴ヶ森。エヽ、今の夢が百年も、なぜ覺めずに居てはくれぬ事。殘り多いわいなう〳〵。いつどこへ行きやつても、顔見るを待ち兼ねてゐたけれど、今日は可愛や娘の顔、見たらこの世の別れぢやと思へば、いつそ死にたいわいなう。ほんに世間の譬への通り、盗みする子は憎からで、繩かける人が怨めしいわいなア。怨めしいわいなア。コレマア、すぎは何をしてゐる。すぎイなう〳〵。

ト呼ばりながら、しを〳〵として下手へ入る。矢張り波の音、時の鐘になり、武兵衛、尻からげにて狀箱を持ち走り出る。後より、十作、序幕の形にて、これを追ひ駈け出で來り、武兵衛を止めて

十作　雲を霞と鎌倉より、逸散走りの急ぎの狀、思ひがけなく横合から、引ッ攫んで、こりやアどこへ。

武兵　仔細は云はずと駒込の、寺で見かけた青侍ひ、何か樣子の有りさうな、狀箱ゆゑに、この武兵衛が。

十作　盗人ならばそりやア目違ひ。命にかけて捲き上げても、金にはならねえ、その狀箱、いらざる事に骨折らずと、キリ〳〵身共へ返して行け。

武兵　金になつてもならねえでも、目にかゝつたらどこまでも、この狀箱は此方の物だ。

十作　さう云や、うぬを。

ト拔きかける。

武兵 どつこい。

トこれより、誂らへの鳴り物になり、この狀箱をかせに、兩人世話タテあり、トゞ花道へ追ひ駈け入る。浪の音になり、黑幕チョンと切つて落す。

本舞臺、向う眞中に髭題目の大石塔、このあたりに振りよき大樹の松、爰に供養塔婆を立て、うしろ淺黄幕、左右竹矢來、嚴しく結ひ廻し、好き所に突棒刺股かざり附け、舞臺先一面に打寄せの浪板、すべて鈴ヶ森の體。浪の音にて道具とまる。

ト向うより、見物の仕出し大勢、捨ぜりふにてあちこち見廻して下手へ入る。この仕出しの後より、傳吉、好みの形にて出て來る。

傳吉 あの阿母やおすぎが、暇乞ひに來たさうだが、人混みで怪我でもせにやアよいが、どこに來てゐる事やら。

ト舞臺へ來て、あちこち見廻し、上の方へ入る。時の鐘を打ち上げ、時の太鼓になり、向うより、忠常、軍藏、野袴ぶッ裂き羽織、大小にて十手を持ち出で來り黑股引、黑羽織の侍ひ、四人附き添ひ、直ぐに舞臺へ來る。

忠常 軍藏どの、今日はお役目御苦勞に存じまする。

軍藏 なんの／＼、併し、お七めが飛んだ事を仕出かして、貴殿にも何かと御苦勞千萬。

忠常 役目なれば、是非ない事ではござれども、未だ年端も行かぬ娘、不便な事とは思し召さぬか。

軍藏 ナニ不便な事がござらう。大それた科人なれば、若輩の者でも成敗いたすは世上へ見せしめ。もうせさうなものでござる。

忠常 最早、參るに程もあるまい、暫時の間。

軍藏 相待ちませうか。

ト兩人床几にかゝり控へる。上手の太夫座の張り物を打ち返す。これに、竹本連中居並び、淨瑠璃になる。

〽憂き事の多かるゆゑに浮世ぞと、誰れかは名づけそめぬらん、任せぬ戀の是非なくも、憐れなるかや、お七こそ。

ト淨瑠璃になり、東の揚げ幕より、お七、振り袖扱帯の形にて、襟へ水晶の珠數をかけて、縛られしまゝ馬に乘せられ、仕出し警護の役人大勢附き添ひ、中の間の歩みより花道へかゝる。

〽よしなき事を仕出して、身を捨札に罪科も、朝の露と消えて行く、死出の旅路や町々の、木戸ははかなき一里塚、急がぬあの世近づけば、この世は後になりふりも、島田つやなき束ね髮、襟にかけたる水晶の、珠數の玉々云ひ交す、未來の契り長房と、切めて今際の力草、南無妙法蓮華經々々々々々々々、二八の花も仇嵐、盛りも待たで散りて行く。

ト この文句にて、花道の眞中へとまる。

おセ　御見物の皆樣へ申し上げまする。若いお娘御樣をお持ちなされましたなら、隨分早う御緣にお附きなされませ。いま斯ういふ身になつては、どうも仕やうはござりませぬ。又お娘御樣方は、このお七がよい見せしめ。親の許さぬいたづらなぞ、必らず〳〵遊ばすな。果は斯うした淺ましい、恥かしい名を流すのも心柄。不便な事ぢやと思し召し、只一遍の御回向願ひ上げまする。

〽類む手さへも縛り繩、顏さし入るゝ懷を、洩れて流るゝ涙橋、引かるゝ綱のいつとなく、隙行く駒の鈴ケ森、最期の場にぞ着きにける。

ト 此うち、かすめて浪の音。

軍藏　ソレ、お七めを引摺り下ろせ。

皆々　ハツ。

ト おセを馬より引下ろし、眞中へ引据ゑる。

忠常　コリヤ七、最前決斷所で申し渡せし通り、觸れ置きたる法度を犯し、櫓の太鼓を打ちし科、女童とて赦されぬ政道の表、何事も宿業と思ひ諦らめ、潔よう仕置を受けよ。云ひ殘したき儀もあらば、心措かずと申し殘せよ。

〽仁慈も厚き詞の末、お七は重き顏をあげ。

おセ　年端もゆかぬ身を以て、御法度を背きしゆゑ、皆樣へ御苦勞かけ、殺されますも心から。云ひ置く事はなけれども、せめて名殘にたつた一目。

〽それと云はねど、親よりも、逢ひたい見たい戀しい顏もしやとばかり、伸びあがり、伸びあがりても竹垣の、隙間がくれの人群れに、目は泣き腫れて見えわかぬ。

ト この時、下の方よりおたけ走り出るを、傳吉、おすぎ止めながら出で來り

たけ　コレ、お七イなう。

おセ　ヤ、母さん、よう來て下さんしたなア。

ト 寄らうとするゆゑ、引き据ゑる。

すぎ　すぎも來て居りまする。

たけ　一生の別れぢやもの、來いでよいものかいなう〳〵。

傳吉　お七さん、傳吉だ〳〵。

ト思はず三人、お七が側へ寄る。侍ひ、棒にて止める。

軍藏　ヤイ〳〵、かしましい。ソレ、三人とも引摺り出せ。

皆々　ハア。

ト侍ひ皆々立ちかゝる。これを止めて

忠常　アイヤ〳〵軍藏どの、お扣へなされい。これが逆賊謀叛と云うではなし、身寄りの者の暇乞ひ、暫しのうちは我れ〳〵が料簡。

傳吉　ハイ〳〵、仁田さまへお願ひ申します。とてもの事に親子の者へ、何卒末期の水杯、御免なされて下さりませうなら、ハイ〳〵、有り難う存じまする。

忠常　何はしかれ、願ひに任せ云ひつけてくれう。ソレ、侍ひ衆。

侍ひ　ハツ。

ト手桶に柄杓を添へて、眞中へ持つて來る。

忠常　心靜かに、進め遣はせ。

傳吉　エヽ、有り難う存じまする。

トこれより、床の合ひ方になり、傳吉、水を汲んで、おたけの側へ持つて行く。

サア、阿母さん、お前飲んでお七さんへ。

ト思ひ入れ。これにて心付いて

たけ　そんなら、これが、忠常さまのお情で、親子一世の水杯。

トこの時、傳吉、柄杓をおすぎへ渡し、飲ませろと云へど、おすぎ腰が立たぬゆゑ、傳吉介抱する事あり、おすぎ、やうやくおたけに一口飲ませ、思ひ入れにて上の方へ持ち行き、お七俯向いてゐるゆゑ

すぎ　サア、お七さん〳〵。

トこれにて、お七、顏を上げる。

お七　オヽすぎ。

ト兩人顏を見合せ、ヂツとなつて泣き落す。

すぎ　お七さんの心では、まだ誰れやらと杯が、したからうと思へば、それが、それがおいとしいわいなアおいとしいわいなア。

たけ　同じ事なら、この水を、ほんの酒で杯事、お七が飲んで吉三さんへ、献すやうな事ならば、さぞ嬉しからう。

〽なんの因果で此やうな、悲しい憂き目見る事か、可哀

八世岩井半四郎のお七

の者やとばかりにて、咽び嘆くぞいぢらしゝ。

傳吉　エ、コレ、ちよつとなりと吉三さんに。

お七　アヽ、もう云うて下さんすな。聞く程戀しい吉三さん、目先に附いて、未來でも。

〽迷ふは、あなたの事ばかり。

わたしが死んだその跡へ、もしござんして淺ましい、形を見てなら、さぞや愛想が盡きやうかと、わたしやそれが悲しうござんすわいなア。

〽今死ぬる身の今までも、おぼこ娘のあどなさを、聞く親始め諸見物、一度に降らす涙の雨、濱邊の水も増るらん。

軍藏　ヤア、べん〳〵と時刻が移る。早くお七を成敗しろ。

忠常　いつまで云つても盡きせぬ名殘。

皆々　キリ〳〵覺悟。

三人　ハアヽ。

ト泣き落す。

〽惜しや、若木を緋櫻と、浮名を末に殘しける。

ト侍ひ皆々を突き退け、お七を引立てる。この時、向うバタ〳〵にて、十作、麻上下股立ちにて、赦免状を竹の先へ挾み、これを持つて走り出で來り

十作　待つた〳〵、早まるまい。鎌倉御所の嚴命にて、罪を犯せしお七ながら、戀ゆゑ法度破りし科、死罪を赦し島といふ心を以て、湯島へ流罪。即ちこれに赦免状。

軍藏　ナニ、赦免とな。

ト十作が持つたる状へ手をかけるゆゑ、拂ひ退け、忠常へ渡す。忠常は披き見て

仁田　誠にこりやコレ、赦免状。お七が命は助け遣はす。喜べ。

皆々　エヽ、有り難い。

ト皆々思ひ入れ。軍藏ウムとお七へ思ひ入れ、忠常これを止めて見得。

忠常　めでたい〳〵。

傳吉　先づ今日はこれぎり。

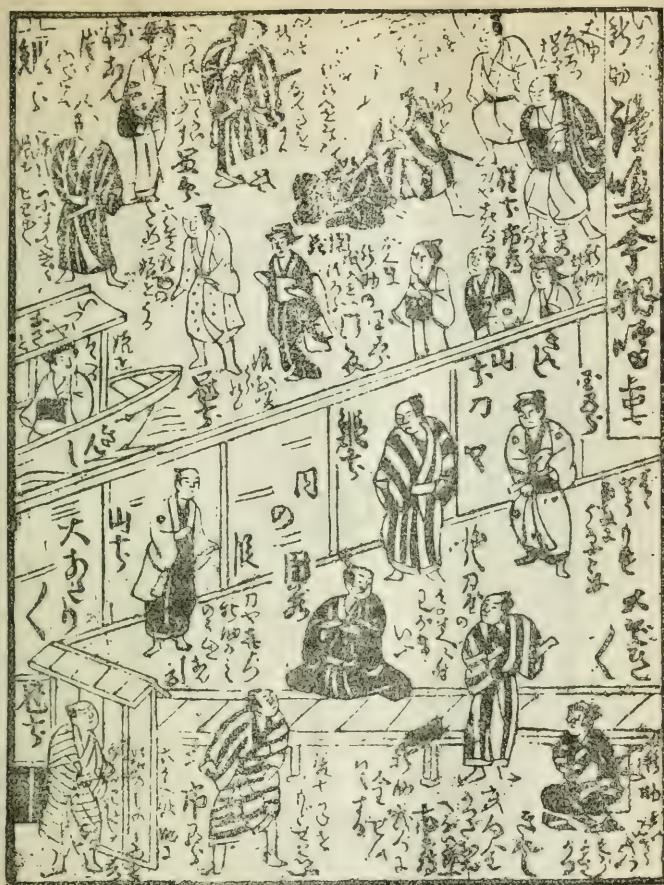
めでたく打出し

ひやうし幕

其往昔戀江戸染（終り）

吉原の春雨に
しつぽり濡れし
居續けのむかひ酒
けさ鮫鞘の達姿に
薫る浮名の橘屋が
かへり新助さま參る

鐘鳴今朝噂

二幕

文政二年七月角の芝居所演繪番附

鐘鳴今朝噂――いろは新助

上の巻

徳庵堤の場

役名　男達、初花傳七。刀屋喜右衛門。同女房おくま。同娘、おりく。井筒屋才兵衛。同抱へ、いろは。三上丈助。角力、千力勝五郎。百姓、六兵衛。同娘、おさき。升屋武右衛門。茶店の五兵衛。刀屋新助。井筒屋お里。見てくれ彌八。

造り物、平舞臺、見附け一面の高土手。舞臺前浪板、東西に小松の幹、土手に色ざしのげんげ花蒲公英の書割り、臆病口より橋がゝりまで浪の幕、向う取散らしの遠き鴻の池新田、村方土藏白壁新田會所、よき所に掛け茶屋。この前より藤の幹を見せ、紋板返し、藤の花見事に盛り、すべて徳庵堤の體。幕の内より仕出し、土手の上下に行き合ひ、喧嘩せりふにて、在郷戻りの合ひ方にて幕明く。

ト仕出し出て

仕出　なんと、今日は四月八日、觀音様のお開帳の終日に、此やうに日和がようて、きつい仕合せの。

同　イヤ、觀音様よりこちらがきつい。マア、日和がよいので參詣も夥しい。諸商人も大きに違ひおちや。

ト云ひ〳〵茶店の前へ來て

同　なんと、見事な藤の花盛り。爰で白酒一杯やらうではないか。

ト腰かける。五兵衛、出て

五兵　サア〳〵、お休みなされませ。これが十二文、これが二十四文。

ト云ひ〳〵猪口を出す。

仕出　オツと、おれは燒酎交ぜて、十二文が所ついでもらはう。

同　おれは生酒にせうかい。

ト引ツかけて

オヽ、なんぞ肴があればよいなア。

同　この花を見て肴にせうかい……藤咲くやわれかおれかの濁り店……どうあらう。

同　さつてもえらいワ。も一つ呑まうか。

　トまた呑んで

同　サア〱、日のたけぬうち去なうかい。

五兵　もそつとお休みなされませ。やがて出ますがな。

仕出　イヤモウ、爰の渡しを待つて居たら日が暮れる。

　ト仕出し皆々入る。合ひ方になり、この時喜右衛門、おくま、おりくに、丁稚長吉附いて出る。

くま　サア〱、娘、おぢや……コリヤ長吉、おのれまでが愚図々々と、其やうに餘所見さらして、辨當の中がガタガタになるわい。

長吉　オツトセウ、其やうに急かずと、どこぞで休んだがよいなう。

くま　エヽ、何を吐かしくさる。其やうに休んだら、錢が堪らぬわい。

長吉　ヘイ〱。

喜右　オヽ、イ〱、もちつと靜かに行かつしやれいなう。

くま　親仁どの、きうつ遲れさつしやるの。

喜右　イヤモウ、大抵氣を急いた事ぢやない。其やうに息せきと忙しなう歩きやるな。ちと又、久し振りで菜種の畑の道行でもせうと思うて、樂しんで來たものを、後に置くとは、あんまりつれないぞや。

　トおくまの尻をポンと叩く。

くま　ナニ、こなたとおれとが、やんがて冥途へ道行でがなあらうぞい。

喜右　イヤ〱、滅多に死んではつまらぬなう。

りく　ハイ〱、左樣でござりまする。いつまでも長生きなさんしたら、やがてこちの人の身持ちも納まり、お二人樣へ孝行を致した上、送りませねばわたし等女夫が、未來は恐ろしうござりまする。

喜右　婆、あれ聞いたか。孝行な事云うてくれるなう。あの心の百分一、新助めにあれば……イヤ、ア、なんぢや。今日は觀音樣かけて野駈け、氣ほうじに來て悉皆忘れませう〱。イヤナニ、コリヤ長吉よ、毛氈を、アレアレあの廣見の芝の上へ敷いて、その包みを出して、なんと、あそこで辨當を開かうか。

くま　サヽ、皆もござれ〱。

　トこれにて居直り

五兵　モシ〱、これへおかけなされて、お辨當をお開きなされませ。お茶も沸いてござります。又お望みなら、燒酎も白酒もござります。

くま　オツト〳〵、その酒はきつい禁物。茶店へ腰かけると氣が張る癖に錢が出る。それでは此方の勝手が惡い事だらけ。茶も内から佇み込んで來たれば、咽喉も乾かず矢ツ張り向うの廣見で藤の盛りを見て、氣いらずに辨當を開から。それ〳〵、あんまり息せき歩いたから、腹がげつそり。握り飯もよう喰ふ。何やらの淨瑠璃節で、年寄りと紙袋と、入れにや立たん。サア〳〵、おりくも來い〳〵。

りく　ほんにわたしよりか、あなた方。あそこでお辨當をお遣ひなされ。わたしはその間に、蒲公英やつく〳〵しを摘んで置きませう。

喜右　それ〳〵、内へのお土産は嫁の嫁菜の根引き、わが身の側に新助が、ぴつたりとつく〳〵し、嫁、祝うて土産にしや。

ト唄になり、おくま、喜右衛門、臆病口へ入る。おりくは嫁菜蒲公英を摘んで、笠の内へ入れる。

武右　オヽイ〳〵。

ト呼ぶ。おりく、後を見て行かうとする。武右衛門、呼びながら出て來り

先刻から呼んで居るに、聞かぬ顏して居ては、あんまり酷いぞや。つれないぞや。胴慾ぢやぞえ。聞えぬぞや。おりく、どうぢやぞいなう〳〵。

ト尻を叩く。

りく　オヽ、誰れかと思うたら武右衛門さん、また例の惡じやれ。コレイナア、常はともあれ爰は往還、人目もあり、誠に堅苦しい父樣母樣、あそこの堤に休んでござるひよつとこんな事を見附けられたら、常から身持ち惰弱にするやうに思はれて、わたしの身が立ちませぬ。じやらじやらと、てんがうして下さんすな。わたしには新助と云ふ、男のある身でござんすぞえ。

武右　なんぢや、新助と云ふ男がある。

りく　アイ。

武右　あるも凄まじいわい……コレ、こなさんが男ぢやと思うて居る新助は、いろはと云ふ、花やかな女房が極まつてあるぞや。

りく　エヽ。

武右　その譯云うて聞かさうか。立ちながら云ひ憎い。マア、下に居やんせ。さて斯うぢやわい。貴樣の男の新助は、井筒屋のいろはと云ふ女郎と、深い仲ぢやと云ふ事は、こなさんは知らんせぬか。

りく　ムウ、わたしぢやとて男の後から付いて歩きはせず、詳しい事は知らぬけれど、ハテモウ、少々の色事は、男の身にて有うちの事かいなア。

武右　それ〳〵、其やうに粋が捌けるに依つて、あの新助が廓通ひ。鮫鞘の新助とまで、差名を取る程の男、今ではいろは新助と評判、名代の色男。今日も今日とてこなさん所へ、新助に用があつて寄つて來たれば内は居ぬ。どこぞと思へば、いろはとこつそり觀音參り。手に手を取つての道行といなう。お前方は逢はんせぬか。

りく　なんと云はしやんす。新助どのは、いろはを連れて野崎參りとかえ。

武右　そりやア、そろ〳〵とござつたぞ〳〵。なんと腹が立たうがの。

りく　なんのマア、例へいろはさんと花やかにさしやんせうが、そりやア一つも構ふ事はなけれども、堅いお二人に、一筋道のこの堤で逢はしやんしたら、こちより新助どのが。エ、、ツツとモウ。

武右　なんの〳〵、玉の腐つた男を、其やうに深切に思はずに、これ幸ひに緣切つてしまうたら、新助もいろはと女夫になつて喜び、又お前も、萬ざら若後家では置くまいし、また似合ひ相應な緣組みが、世間にまゝある事。面當てに誰れでもおれでも、相談はいつでも出來る。今日の出會ひは德庵堤、幸ひ名代の五兵衛が白酒、祝言と出かけようかい。

ト武右衛門、白酒の德利と茶碗を取つて來る。此うちおりく、心遣ひ。五兵衛、ソロ〳〵出て見る。

先づ祝言の夜は、嫁御から一つ上がれ。おつぎ申します

ト茶碗を出す。

五兵　モシ旦那、それは十二文でござりまする。

武右　なんぢや十二文。ハ、、、。エ、、これは〳〵、とつとモウこちの内ぢやと思うた。五兵衛、貴様の白酒は評判ぢやぞや。

五兵　なんとござりまするやら。

武右　藤の花の富士見酒、上り詰めては上もなき。

五兵　戀なればこそ茶碗酒……一ツつぎませうか。

武右　つぎもせい……オツと、あるぞ〳〵。

ト飲んで、おりくへさす。五兵衛、餘所見して居る。

も一つ飲まうか。

ト錢を拋つてやる。五兵衛、錢を讀む、武右衛門、何杯もぼやき〳〵飲む。五兵衛、錢の足らぬこなし。

五兵　アヽイヤ〱、肝心のどぶが切れてござりまする。
ト武右衛門、錢引ツたくり、生酔ひにて
武右　ヤイ、錢がなけにやア金では飲めぬか。この升武は
そんなおやないぞよ。
ト紙入れより金を出して遣る。
モウ、こりやアこの店中の物、皆飲み上げるのぢや。
見とむない。あつちへ行け〱。
ト五兵衛、内へ入る。
サア、祝言の杯は濟んだ。幸ひの掛け茶屋、人目がくし
の葭簀の内で、籐に卷かれて寝て花やらう。サア、ごん
せ。
トいろ〱あつて抱きつく。おりく、突き放し
りく　エヽ、先刻から聞きとむない事の有り條。さうして
こちの人新助どのとは、懇ろの仲の義理も思はず、まし
てこの間もこちの人が、半次郎さんの事でなけねばなら
ぬ二百兩の金、拵らへて下さんすと、直ぐにお前が其う
ち百五十兩、時借りに借つて置きながら、戻さうとも思
はず、こちの人には證文ばかり突きつけ、コレ、あの證
文で新助どのへ、手詰めの金の間に合ふと思はしやんす
か。そればつかりでも義理知らずと思うて、わしが心で
蔑すんで居るけれど、新助どのは男氣ゆゑ、友達中の義
理を思うて、今日までもその事を云ひ出さしやんせぬ。
心に恥ぢて見やしやんせ。エヽ、人でなし。あんまりで
あらうがな。
武右　あんまりとは何ぢや。借り貸しは金ばかり相對ぢや
ぞよ。女房も借りる。その代りに首枷りの印として、證
文やるわえ。合點か。いま印形を渡さうか。
トひよろ〱として抱きつくを、いろ〱振り放し
りく　エヽ、こなさんのやうな人は、相手になる程腹が立
つ。爰放してもらひませう。男のある女子を捉へて、じ
やら〱と。
トいろ〱あつて入る。武右衛門、後にヒヨロ〱し
て
武右　こりやア待て〱。
トいろ〱あつて、五兵衛、店を片づけて居る、後か
ら抱きつく。
五兵　フウ〱〱。
武右　エヽ、なんぢや。待ち居れ〱。
ト兩人よしろくあつて、茶店の内へ入る。あと合ひ方
にて、いろは、女郎の町風、練りの帷子素足にて、安

房草履、後がけして、衣裳を少し短かく着て、日傘をさし、後より丈助、侍ひの形、次ぎに千力、相撲取りの形にて、何れもよろしく出て來り

千力　モシ旦那、あのげんげん花の盛り、赤い所を毛氈の心で、ちとお休みなされませぬかい。さうして、可哀さうにいろはどのも、歩きつけぬに依つて、足を痛めた樣子。歩き振りが惡いぞや。

いろ　アイ、あんまり人が眺めるに依つて、それで氣を急いたので、とつとモウ鼻緒の當つた所が、此やうになつたわいなア。

丈助　それぢやに依つて、始めから船にせうと云うたりやア、船は嫌ひの、駕籠が否ぢやのと、無理に歩いて來たに依つて、それで其やうに鼻緒擦れが出來たのぢや。ドリヤ〱、直してやらうか。

ト紙を引裂き、鼻緒を直し

ハテサテ、主人の草履さへ直さぬ身共なれど、いろはさまなら草履は愚か、何なりとも、氣に入るやうにと辛抱するは、爰は韓信が市人の股を潛りし例し、黃石公は沓の所ぢや。なんと憎うはあるまいがの。

いろ　其やうにして、わたしに義理をかけしやんす程、一倍否とも云はれぬ仕儀。

千力　なんといろは、丈助さまに從ふと云ふ

いろ　返事のならぬも、この義理ゆゑ。

丈助　その義理とは、どの義理ぢや。

千力　ハテ知れた事、刀屋新助に立てる義理か。

いろ　それ程よう知つて居りながら、術ながらすやうに、お前方も、あんまり無粋ぢやわいなア。

丈助　イヤモウ、ずんと無粋な中の野暮。賣り物のいろは

千力　揚詰め身請けのならぬと云ふ法もあるまい。

いろ　法はなけれど色里に、お客と間夫に逢ふ時の、品は變らぬやうなれど、味の所は云ふに云はれず、張りのあるは互ひの義理。始めの色里の手も切らず、又のお客にせりふしては、そのお客へ義理を立てゝも、始めの色に不義理になる。それでお前の返事のならぬ、義理と云うは、この義理でござんすわいなア。

千力　成る程、義理づくしの云ひ譯けうといものぢやが、旦那を平潰しに潰さしては、おれが立たん。いろはどん、爰は一番立てゝもらはずばなるまいわいなう。

いろ　サア、よいわいなア。なるかならぬの返事も、折のあるもの。今日に限つた事かいなア。マア、物參りする

のに腹立てさんしたら、信心が無になるぞえ。
丈助　イカサマ、心に諸々の不淨を思うても、口に諸々の不淨を云はず、そんなら折よくよき返事をしやれ。時に千力、あの足元では野崎までは心元ない。船も廻せと云うて置いたれば、この川筋を來るであらう。堤を下りて見て來やれ。
千力　そんなら濱に附けてあつた屋形は、さうでござりませう。
丈助　それ〳〵。
千力　駕籠も吊らして來た筈ぢやが。
丈助　駕籠は身共が呼んで來る。コリヤいろは、われは爰に待つて居れ。ドリヤ、駕籠呼んで來てやらう。
　ト千力は上手の下、丈助は元へ戻ると、あと合ひ方にて、いろは、あたりを見て
いろ　儘ならぬ浮世とは、よう云うたものぢやなア。あのやうに深切にして下さんす、お客は否なり、今日までは無理を勸めの不肖にして、帶紐とかぬ丈助さま、モウさう〳〵は騙されまい。半次郎さんのお頼みを立てゝ、丈助さまに觸れては、新助さんへわたしが節は立てゝも、色と勤めとの道は立たず……但しは道を捨つるがよいか、又は新助さんの顔を立てるがよいか。ア、どちらがよからうなア。
　ト思案のこなし。火なぶりの唄になる。
あの船で唄ふは餘所の戀……ほんにマア、この新助さまも、もうござんしさうなものぢやがなア。一筋道のこの堤、船では逢はれぬと思うて、それで歩いて來たものをどう云ふ首尾ぢや、逢うて聞きたいものぢやなア。
　ト唄のくさりより唄ひ出し、看板着たる駕籠舁き、駕籠を舁き出で、つくばいして
駕籠　モシ〳〵、いろはさま、よい所でお目にかゝりました。手前の駕籠に、旦那を乘せて參りましたぞえ。
　トいろは、聞いて、好かんと云ふこなし。
いろ　エヽ、ツツとモウ、誰れも頼みもせぬものを、こな樣もこな樣ぢや。大事の思案の邪魔をしてからに。好かん好かん。
　トつん〳〵と云ふ。駕籠舁き、氣の毒なこなしにて
駕籠　それはお氣の毒。わたし等は當てた顔で、一挺御褒美とのづんばい打つて、肩も輕う宙を飛んで參りました。こりやアマア旦那、どう致しませうな。
　ト駕籠の内へ云ふ。内より

新助　あれがあゝ云ふ受けなら、大儀ながら駕籠を戻して
たも。
ト駕籠の垂れを上げる。いろは、新助を見て悄りして、
側へ寄り、駕籠に取りつき
いろ　コレイナア、氣の悪い。わしや丈助さんが駕籠を迎
ひに行きやしやんしたに依つて、それで乗せてござんし
たのぢやと思うたわいなア。又こなさんもこなさん方ぢ
やゝ新助さまなら、初手から云うたがよいわいなア。
駕籠　モシ／＼、それぢやに依つて、旦那を乗せて参りま
したと、申しましたぢやかいないなう。
いろ　それでも、旦那ぢやと云うてぢやに依つて、それで
ツイ丈助さまぢやと思うたのぢやわいなア。
新助　アヽ、もうよい。どうでお侍ひの丈助さまは旦那で
わし等は町人の素寒貧ぢや。わが身達もわが身達ぢや。
旦那あしらひする事があるか。旦那と云ふはお侍ひ客の
丈助さま、左様な結構な丈助さまとは存ぜず、そのお客
がお召しなさるゝ、我れがやうな素寒貧、勿體ない。鶯
の籠の中へ、雀放したやうなものぢやに依つて、逢はぬ
のは不肖して、大儀ながら大坂まで戻してたも。
駕籠　ハイ／＼。

トうじついて居る。
いろ　イヤ／＼、去なしやせん／＼。人を爰まで歩かしき
て、これ見たがよい。下駄なら歩きよいのに、ついに穿
つけぬ草履で、こないになつたわいなア。
新助　エヽ、侍ひ客と手を引いて、徒跣足での樂しみは、
花やかな事。さうした所は、とんと屋敷のお妾様と見え
る。きついものの。まだ旦那のお歸りなさらぬ先に、サ
ア、早う駕籠を戻してくれ。コリヤ、やらぬかい／＼。
駕籠　ハイ／＼。
トこれより始終合ひ方にて、駕籠舁き、腰の振るやう
に仕打ちあつて、兩方の垂れを上げ、そろ／＼駕籠を
舁き出す。いろは、新助、駕籠と下とに口舌あり
いろ　今日の餘所行きは、お前も知つて居てからに、もう
大概に苛らしやんせいなア。わたしや此やうなお客と、
面白さうに觀音様へ參るのも、どうぞして一日でも、茶
屋座敷を離れたら、痃やうのなんのと嫌らしい事を聞く
まいと思うて、觀音様をかこつけて。
新助　ホヽ、逢ひにきたやらが呆れるわい。
いろ　誰れかえ。
新助　丈助さまに。

明治四十五年三月明治座上演

實川延若の新助　市川松蔦のいろは

いろ　オヽイヤ、措いておくれ。丈助さまぢやないわいな
ア。
新助　旦那でなうて、誰れであらうぞい。
いろ　誰れぢやあろ。お前ぢやわいなア。
新助　なんぞ云うてか。微かに聞える。
いろ　エヽ、憎。お前にぢやわいなア。
ト新助を抓る。
新助　エヽ、憎。お前とは嫌らしい。措きくされ。アイタ、
アイタヽヽ。
いろ　逢ひたか去んで、お家様に逢はしやんせいなア。
トまた抓る。
新助　オヽ、去なしたがるに依つて、去ぬるのぢやわい。
いろ　誰れがいなア。
新助　おのれがいなア。
トいろ〳〵揉み合ひ、新助を駕籠より引き落す。紙入
れ鼻紙、いろ〳〵落す。ぼやき〳〵拾うて居るうち、
いろは、駕籠屋に呑み込ます。駕籠屋呑み込んで、駕
籠を置いて元へ入る。
エヽ、見ともない。爰は往還ぢやわい。サア、駕籠やつ
てくれ。

トぼやき〳〵思ひ入れある。
いろ　その駕籠舁いて行く人は、どこに居るえ。
新助　なんぢや。ちやんと吹き込んだな。エヽ、ワ、おれぢ
やとて躄ぢやあるまいし、去なさにや歩いて去ぬわい。
ト行かうとする。いろは、駕籠を横にして、前へ立ち
よろしくあつて
いろ　オツと、大坂へは男禁制の關所が立ちました。
新助　ハア、面白い事ぢや。その關所も大方、丈助の誂
らへのお作りであらうぞい。大坂へ去なれにやア爰まで
來たもの、まだ日も高い、觀音様へ參つて去なう。
ト去なうとする。いろは、取りついて
いろ　イエ〳〵、參らすことはならん〳〵。
ト新助、振り放して行かうとする。また取りつき
イエ〳〵、コレ、新助さん、お前、色を浮氣でさんすか、
但しは實でさんすか。
新助　なんと。
いろ　コレ、仁王三郎の刀は、お前欲しうはござんせぬか。
新助　ヤア。
いろ　お前の身にも命にも替へ、大切な半次郎さまのお爲
で、丈助と。

新助　ヤア、。
いろ　刀が欲しいばつかりで、まだ肌身は穢しはせぬけれど。
新助　そんならアノ三上丈助と云ふ侍ひは、仁王三郎の刀お所持して居るに依つて、お前に惚れたを幸ひに。
いろ　どうで一度は。
新助　ヤア、。
いろ　堪忍して下さんせ。
　ト顔を隠して泣く。新助、心附き
新助　出かした。堪忍してくれ。何事もおれが悪かつた。泣くな／＼。
いろ　そんなら疑ひは。
新助　晴れたとも／＼。日本晴れがしたわい。
いろ　オヽ嬉し。
　ト抱きつく。
新助　理詰めで斯うゆかにやアならぬところ。
いろ　どうぞお前には隠し負ふせてと思うて居たのに、とつとモウ人を疑うて。
新助　また疑ふまいものでもないが、まだほんまにあの丈助と寝やせぬか。
いろ　知れた事いなア。
新助　イヤ、押す事は押さねばならぬ。それで讀めた。この間から半次郎さまが、わが身に云はねばならぬ事が、ある／＼とばつかりで、云ひ兼ねて居やしやつたが、てつきりこの事。なんの、これならこれと云うたがよいになア。
いろ　ムウ、わたしを丈助の方へ遣つてくれいと、半次郎さまがお頼みなら、お前やる氣かえ。
　ト顔をヂツと見て
水臭いお方ぢやなア。
新助　エヽ、こりや痛いわい。
　ト頬べた叩く。
いろ　どうでわたしが叩くのが、痛かろぞいなア。ちやつと去んで、おりくさんに擦つてもらはしやんせいなア。
新助　エヽ、なんぞと云ふと二言目には、女房の事を云ひ出し居るがな。
いろ　又さうぢやないかいな。
新助　其やうに云ふに依つて、云うて聞かすが、この間松坂屋善七から、借つて來た二百五十兩の金は、其方が身請けの足しにせうと思うて、爰に持つて居る。殘り百五

十兩の金は、仁王三郎の刀の事につき、金がいると半次郎さまのお頼み。心當てに持つて居れど、升武より二三日貸してくれとの頼み。顏づくで貸して置いた、その證文も即ち爰に持つて居る。これ程までに凝つて居るものぢや。それに常住おれを疑うて。

ト證文と金を出して見せる。

サア、これでも嘘か。

いろ　ほんに、こりや金ぢやなア。そんならお前は、わたしをば、眞實女房に持つ氣かえ。

新助　持つ氣でなうて堪るものか。

いろ　さうして、お内儀樣は……どうしなさんすえ。

新助　ありやア内の飾り。ほんの付合ひに持つて居る女房ぢやわえ。

いろ　何をよい口な。

新助　でも嘘ぢやなし。

いろ　ほんまかえ。

新助　知れた事。

いろ　女夫ぢやぞえ。

ト兩人チッと抱きつく事よろしくあつて、新助、向うを見て恟りした心にて、ちやつと飛び退き

新助　南無三。

いろ　何とぞさんしたかえ。

新助　イヤ、何ともせぬが、たつた今云うた付合ひの女房や。親仁樣が爰へ見える。

いろ　エヽ、どこぞ隱れる所はあるまいかいなア。

新助　わりやア、此方の者知つて居るか。

いろ　イヽエ、ついぞ逢うたこともござんせぬ。

新助　そんならよし〳〵。わりやア爰に居て、おればかり隱してくれ。幸ひこの駕籠の内。

ト入らうとする。いろは、新助の手を取り

いろ　コレイナア〳〵、わしぢやてゝ一人爰に居て、どうせうぞいなア。

ト此うちおくま、喜右衛門、おりく、三人の聲する。

新助　どうせうてゝどうするものぞ。アレ〳〵、もうそこへ。ヤレ情なや。

ト無理に駕籠の垂れを上げ入り、内より兩方捕まへて居る。いろはも入らうとする事、いろ〳〵あり、この時新助、紙入れを落し、知らずに居る。

くま　どこで落した。尋ねて見やつしやれ。

喜右　それが知れてあれば、尋ねるには及ばぬわいなう。

くま　でも、慥かこのあたりまで持つて居やしやんしたではござんせぬか。
ト云ひ〳〵尋ねて來り、おくま、件の紙入れを見て
コレ〳〵親仁どの、捨てる神ありやア拾ふ神ぢや。頭陀袋を落した代りに、結構な紙入れを拾うたわいなう。
ト取上げる。おりく、見て、それはと云ふ心にて
りく　ほんに、こりやアよい紙入れでござんすなア。
ト云ふうち、いろは、ウヂ〳〵して居るを見ておりく
モシ女中さん、この紙入れは、お前さんのぢやござんせぬかえ。
いろ　ハイ……イ、エ、左樣な物落した覺えはござんせぬ。
りく　それでも、お前はそこに何やら尋ねてぢやに依つてそれで問ひまするのぢやわいなア。
くま　ア、コレ、わが身も甘い和郎ぢや。懷の物が落ちかかつてありやア、手を出して取る時尋ねぢや。それをなんの其やうに、こちから知らしてやる事はおぢやらぬ。拾うた物に此方の爲には德庵堤で、落した袋の入れ替へぢや。ナウ、親仁どん。
喜右　イヤ〳〵、さうでない〳〵。僅か袋物一つ落しても騷々しい。尋ねて居る氣になつては、その紙入れを落した人は、さぞ惜しかろ。ドレ
ト取つて見て
唐羅紗に蝦夷錦の通り裏。こりや餘ッぽどの物好きな人の拵らへた物と見える。しかも小はぜは正銀ぢや。ハテサテ派手な。
ト中を改め見て
ナニ、刀屋新助さまへ。
ト恟りして
こりやコレ、此方の新助が。
トおくま、聞いて紙入れを引ッたくり
くま　なんぢや、新助が名の書いてある、狀の入つたこの紙入れ。そんなら新助めが。
トいろはを見て、紙入れを懷へ入れ、氣味合ひあつて
さては新助を誑らかす、いろはとやら、ちりぬるとやら云ふ女郎は、われぢやな。
トいろは、恟りして
いろ　なんのマア、左樣な者ぢやござりませぬ。わたしや町の、アノ、女子の腰元の、アノ、オヽ、おくめと申す

者でござりますわいなア。
くま　なんぢや、腰元ぢや。でも派手な腰元ぢやなア。その腰元がたつた一人、爰に何をして居るのぢや。
いろ　ハイ、いま爰で肝心の、奥樣を迷ひ子に致しましたに依つて、それでひよつと爰に落しては置かなんだかと尋ねて居たのでござんすわいなア。
くま　エヽ、どぎまぎと合點のゆかぬ。
ト駕籠を見て
どつでも新助めは、このあたりに。
ト駕籠の垂れを上げかける。いろは、留めて
いろ　コレ、おかみさん、何をなされまするえ。
くま　オヽ、新助の紙入れが爰にあるからは、なんでも彼奴はこの駕籠の内に。
トまた寄る。
いろ　こりや、わたしが乘つて來た送りの駕籠、それに手をさへて、何をなさんすぞいなア。
くま　アノ、たつた今、町の腰元ぢやと云うたわが身は、この駕籠に乘つて來たか。
ト云ふ。いろは、恟りして
いろ　エヽ。

トまた寄る。おりく、留めて
りく　母さん、待つて下さんせ。お前の御推量の通り、ひよつと新助さまが、この駕籠の内に居やしやんしたら、お前はどうなさるゝお心ぢやえ。
くま　ハテ知れた事。見せしめに、いろはも彼奴も丸裸にして、爰から直ぐにぼいまくるのぢや。
りく　さうさしやんしては、お前は濟まうが、わたしが女子の道は立ちませぬ。なぜと仰しやれ。世間の人が、あれ見い、刀屋の嫁は、我が器量がないゆゑに、姑と一つになつて、現在の男を人中で恥かゝし、追ひ出したと云はれては、わたしは夫へ不貞女になりまする。それぢやに依つて、例へ爰に新助さまが居やしやんしても、出やしやんせぬがよいわいなア。
くま　エヽ、ぬるまが何を云ふぞい。此やうに女郎を連れてびつつくを、此まゝに抛つて置いたら、こちらは愚かわれまでも笑ひもの。男は女がらと云ふ譬へ。おれが云はいでも、われから吟味せにやアならぬ所ぢやわいやい。エヽ／＼、なまぬるつこい義理立て。そこ退け／＼。
トおりくを引き退けかゝるを、喜右衛門、中へ分け入り

喜右　婆、待ちや。
くま　なぜ留めさつしやる。
喜右　ハテ、留めてやるが其方の爲ぢや。
くま　なんで〳〵。
喜右　紙入れを落したは、此方の新助が麁相、それが爰に落ちてあつたと云うて、あながち新助がこの駕籠の内に居ると云ふ證跡がござらぬ。
くま　でも、見せとむながる、あの駕籠の内。
喜右　それは知れた事。マア、乘つて來た女中の駕籠なれば、中には何か入れてあるやら知れぬ駕籠の中。理不盡に手をかけて、もしあの中に新助が居ぬ時は後悔、その云ひ譯はどうしやる。
くま　イヤ、云はしやんすな。新助が爰に居ぬものが、なぜこの紙入れが落ちてあつたぞ。
喜右　ヤア。
くま　但し、この紙入れに手足があつて、この堤まで歩いて來たか。
喜右　さればさア、紙入れに手足はなけれど、爰は往還。新助も觀音參りして、爰を通つて落して行くまいものでもない。丁度わが身が大事にかけて持つて來た、頭陀袋さへ落したぢやないか。その紙入れは新助のではない。あれが持つて居るのは奧縞の二つ折り。そりやア新助の紙入れではない。
くま　云はしやんな。あれが紙入れでないものが、なんで刀屋新助と書いてあるこの狀が、なんで入つてあるぞ。
喜右　ハテサテ世間狹い。現在朝夕側に付き添うて居る、あの女房のおりくが知らぬその紙入れ、新助のではない。新助と書いた狀は、そりやア餘所の新助。とつくりと物を見定めもせずに我まゝな。あの女中の乘つてござつた駕籠は、云はゞマア途中での納戸帳臺、迂濶に手をかけ駕籠の内に新助か居ぬ時は、後の後悔。この云ひ譯はあるまいがの。
くま　ヤア。
喜右　それぢやに依つて、常住おれが後から、こなたの仕損なひ償うて廻るのぢやないか……女中さん、思ひも寄らぬ難題を云ひかけたは、此方の婆が料簡違ひ。氣に障つた事もあらうが、この事はわしに免じて、料簡して下され。
　トいろは、喜右衛門を拜む。
いろ　なんのわたしが、心に障る事がござりませう。最前か

らの樣子と云ひ、定めてあなたが。
ト おりくを指して云ふ。
喜右 ハテ、その云ふ譯もするに及ばぬ。一見の女中同士、
サア、それで濟んだら日も闌けた。婆、參りませう。
くま 現在新助めが落した紙入れを、無理無體に落さぬに
して、結構裁いて居やしやるぬるまどの。アノ、又この
紙入の内には、新助が手になけりやアならぬ物も入れて
あらうが、その時おれがのでござりますと、とこぼえるを
見るやうな。アヽ、こなたが結構さつしやるのでなけり
やア、よい山の揚げ所であるけれど、一旦は喰うて此ま
まにして置く。碌な奴は一人もないて……この長吉めは
居眠つて居るか。長吉よ〱。
長吉 ハイ〱。
ト 長吉、出ろ。所へ丈助、千力、出て
丈助 刀屋新助、用事がある、待て。
千力 いろはどの、旦那やこの千力を出し拔いて、本妻ど
のや親子連れ、打寄つてこつてり話し。天井拔けの間夫
狂ひ。肝心の金銀を出して、連れてござつた丈助さまに、
砂道歩かすやうなせりふは、千力がさす事ならぬ。大盜
人め、さう思うて、そこへ出やがれ。

ト これを聞いて、喜右衛門、キッとなる。
くま おれが推量の通り、あの女郎は、此方の新助を誑ら
かすいろはぢやなア。
喜右 ハテ、いろはであらうが、なんであらうが、それを
今爰で、なんの吟味する事がある。其方へ退いて居やう
てや。
ト おくま、ふくれて扣へ居る。
イヤ、斯う見りやア、こなたも、角力取りさうなが、如
何に力を商賣にすると云うて、かさおくには立たぬもの。
そのお山衆がいろはぢややら、片假名ぢややら、又こち
の息子の新助の色ぢややら、なんぢややら知らぬ。こち
らが道端で出逢うたが不肖。そちこちと云うた、とりや
袖の振り合はせと云ふもの。云うたが僻事とあつて、つ
いに見ぬお侍ひの腰になつて、この喜右衛門を盜人呼は
り、聞き憎い。年こそ寄つたれ刀屋喜右衛門、刀商賣す
りやア、どのお屋敷へも出入りして、そしりは知つて居
る。お侍ひでも角力取りでも、怖うはない。サア、なん
で盜人呼はりするのぢや。サア、理窟に依つて料簡せぬ
サア〱、返事はドヽどうぢや。
ト 兩人せりかけて云ふ。いろは、おりく、氣の毒なる

こなし。
りく　コレイナア、お前方も、人に物を云ふと云うて、大儀な事云うたがよい。父様のお腹立ちは、皆尤もぢやわいなア。
いろ　丈助さま、お前は駕籠を迎ひに行くと云はしやんしたに依つて、わたしや爰に待つて居たのぢやないかいなア。それにヅカ〳〵と、あんまりな事ばかり。
千力　エヽ、默らつしやれ。イヤコレ、ひんこ、餘り其やうに猛々しう物云はれな。あながち手を出して盗みするばかりを、盗人と云はぬぞや。其方の新助が爰に居る、揚詰めの内をチヨロ〳〵と、小宿へうせて身仕舞ひの間を引ッ込み、惡ぜりふ打つどう盗人の骨頂。揚句には客の懐探しに歩く。新助が盗人の親なら、なんと貴様も盗人ぢやあるまいか。
喜右　ヤア、新助が人の懐探すとは。
千力　いま女郎に云ひつけ、後日日柄の催促に金の無心。その上前を取る盗人。なんと違ひごんすか。
喜右　サア、それは。
千力　サア、どうぢやい。
ト きめる。喜右衛門、ヂツとなる。おくま、ツカ〳〵と出て
くま　エヽ、産れてからこの年まで、こんな事聞かぬこちら女夫に、でんどで正めんからしをる大措りめ。爰へ出て、この垢抜きしをらう。
ト 駕籠の内へ當てゝ云ふ。新助、堪らず出ようとする。喜右衛門、聲かけ
喜右　コリヤ、出まいぞ〳〵。
千力　ヤ、なんと。出まいとは何が出まい。
喜右　サア、おれが出ると云ふは、婆、わが身が爰へ出て云へば、却つて物事が悪いに依つて、ヂツと齒を宥めて出まいぞ〳〵。何事もおれに任して、出ぬがよいと云ふ事ぢや。
ト 駕籠をおくまへかけて云ふうち、丈助、心遣ひ。
丈助　イヤ、出にやアなるまい。現在義理ある盗人の悪名を付くるは、わが身を出して、親の首へ繩かけるも同然腑甲斐ない大盗人の大腰抜けめ。なんと千力、これでは出さうなものぢやがな。
千力　イヤ、滅多には出ますまい。女郎や仲居を騙るとは違うて、相手は手剛いお侍ひなり、角力取りなり、滅多にはえゝ出まい。ナア、いろは、どうぢや。これでもあ

の丈助さまのお心には從はぬか。
いろ　エヽ、今までよさへ、うるさうて〳〵ならぬもの。其やうに意地惡さしやんすと、猶否になるわいなア。
千力　否と吐かしや、この通りぢや。
ト喜右衛門の首筋引きつける。いろは、おりく、惆りして寄るを留める。
りく　こりやア、なんとさしやんす。
千力　なんぢや〳〵。ナニびこつきさらすのぢや。
ト振り廻す。おくま、ツヽと出て
くま　こりやア親仁どのを、どうするのぢや。滅多な事しやつたら、角力取りでも按摩取りでも、相手にし兼ねる女ぢやないぞよ。爰放せ〳〵。エヽ、放しをれやい。
千力　此やうにしらるゝが否なら、新助いろはが手を切らしませうと、請合ひの一札書け。
喜右　筋ない事に打擲しられ、それが怖うて、當人の得心せぬ一札を、アイと云うて書かうか。馬鹿らしい。
くま　エヽ、死太い。義理ある親に面恥かゝしても、爰へ出てうせぬかいやい。
千力　イヤ、斯うしても證文書かぬか。
喜右　書かぬ。
丈助　出ぬか。
ト新助堪らず出ようとする。
りい　ア、コレ、滅多に爰へ出やしやんすな。
くま　イヤ、出い。
丈助　サア、書け。
喜右　イヤ、書かぬ。
千力　イヤ、出ぬか。
喜右　出まいぞ。
くま　出い。
喜右　イヤ、書かぬ。
丈助　出い。
千力　書け。
丈助　サア。
二人　サア〳〵〳〵。
丈千　ド、どうぢや。
ト詰め合ふ。千力、喜右衛門を散々にくらはすゆゑ、新助、飛んで出て、千力を突き退け、皆々引取りの見得よろしく
千力　ヨウ、わりやア新助、惡い所へ
丈助　よう出たなア。

新助　イヤモウ、先刻から、出たうて〳〵ならなんだ。ところが出まいと云はんすゆゑ、それでやう〳〵出たのでごんすわい。

ト突き放し、おくま、喜右衛門を上へ直し

親仁様、母者人、お二人様の手前と云ひ、女房おりくが心に恥ぢて、出憎い所を見込んで、彼奴等が狼藉。親仁様や母者人へ合はす顔はなけれど……云ひ譯はゆるりとする。女房ども、よいやうに執成ししてたも

ト帯を締め、気を替へ、ズッと向うへ出て

サア、物事をいろ〳〵隠すは、もうならぬ。もう斯うなつてからは構はぬ。如何にも貴様達の云ふ通り、爰に居るいろはは、おれの相方ぢや。付合ひで長々は、呼び出して逢うて居りやア、なんでおれが盗人ぢや。サア、盗人の譯聞かう。

千力　サア、その盗人と云ふは、丈助さまの揚げのうちをおれがちよんの間切るに依つて

新助　あんだら盡すなえ。いろはは賣り物、其方の座敷の明いたうちは、また外の茶屋へも送らにやアならぬ。なんぞおのれ等が女房か何ぞのやうに、それ程外々へやりともないなら、いろはを身請けして、石の唐戸へでも入れては置かぬ。さほどの甲斐性はあるまいが。サア、金輪際、盗人の垢抜かにやア、おれは格別、お年寄りの親仁様の、冥途の障りになるが悲しい。サア〳〵、お侍ひ、關取り、どうぢや〳〵。

丈助　千力、身がこれぢやに依つて、扣へいと云うたれば、おれに任せと云うたではないか。この返答は、どうぢや。

千力　ハテ、ようござりまする。イヤコレ、新助、盗人呼はりしてなりとも、貴様とこれへ出して、いろはがせりふをして、金輪際貰はうと思うてした仕事。盗人呼はりしたが、おれが無調法。あやまりましたぞ。

新助　貴様が盗人と云うて置いて、後で料簡して下されと云うたれば料簡するか。よもや料簡はなるまいがの。此方の心になつて見て料簡なるか。ならぬ所へ料簡つけて見たがよい。人は格別、おりやア料簡がなるまいと思ふわい。

千力　尤もぢや。ハテ、料簡がならにやアせう事がない。あの丈助さまは金輪際、おれが世話せにやアならぬお侍ひ。あのお人に成り代り、おれが貴様に存分になる程に、喰はしなりとも踏みなりとも、存分にして料簡さんせ。

トいろ〳〵體を摺りつける。

新助　こりやア味にせりふを持たしかけて來たな。もし料簡ならぬと云つて、おれが貴樣を打擲したら。
千力　イヤモ、叱られやらが踏まれうが、云ひ分はごんせぬわい。
新助　その心なら料簡しよう。例へこな樣を今爰で、踏んだり蹴つたりしたと云うて、親達の憤りが靜められるものでもない。さつぱり美しう、いざこざなしに濟ましてやりませう。
千力　すりやア、打ちも叩きもせずに置いて。
新助　如何にも。その代りに望みがある。
千力　望みとは。
新助　貰ひたい。
千力　何を。
新助　あのお侍ひが所持してござる、仁王三郎の刀が。
千助　ヤ、なんと。
丈助　身共が所持せし刀とは、變つた物が欲しいのぢやなア。
新助　只は貰はぬ。商賣の代物、不躾ながら金出して所望したいが、なんと談合して貰はれまいか。
千力　何がさて、易い事。おれが詞を立てゝ、料簡して下さつた貴樣の事。如何にも丈助さまの所持のお道具、大切な物なれど、世話して買はしてやりませう。
丈助　イヤ、コリヤ〳〵千力、それでは此方の升武へ。
千力　ハテ、何もかもわたしに任して置かつしやりませ。例へ本主がなんと申さうと儘よ。おれが吞み込んで賣つてやりませう。
新助　それば近頃お働らき。忝ない。
千力　その代り、此方もこなさんに貰ひたい物がある。
新助　わしにくれとは。
ト思案して
いろはが事か。
千力　イヤモウ、里で粹の名を取つて居る新助。けうといものぢや。とんと違はぬその通り、なんと丈助さまにやられまいか。
ト新助、こなしあつて
新助　そりやア、あれさへ得心すりやア易い事ぢやが、いろはには親方があつて、おれが儘には。
千力　それも貴樣さへ得心なら、隨分相談の出來るやうにして置いたが、いよ〳〵いろはを貰うたぞや。
いろ　アヽ、コレ〳〵、滅相な事を請合はしやんすなえ。

新助　ハテサテ、最前云うた……イヤサ、もう斯うなるからぢやに依つて、われとおれとが手を切つたといふ、親達や女房への潔白に、おれが世話して、あのお侍ひ方へやれば、刀が出て來る道理。商賣の代物と、女郎と替へるは、正眞の丸を黄金にするやうなもの。ナ……合點してあなたの方へ行たがよいわいなう。關取り、そんなものぢやござんせぬか。いよ／＼いろはは遣りましなぞや。

千力　先づ以て忝ない。これで頼まれたおれが顏も立つと云ふもの。忝ない／＼。

新助　イヤモウ、こなさんよりは、おれが盗人の惡名も拔けたと云ふもの。色里へ入込まうと思はねば、商人の氣散じ。例へなんと云はれても、マア、金儲けさへすりやア、顏が立つて行くと云ふもの……モシ、只今お聞きなされまする通り、斯う譯を立てますする上は、どうぞ御料簡なされて、お歸りなされて下さりませ。

くま　イヤ、まだ合點のゆかぬ。どうやらドギ／＼した鹽梅ぢや。親仁どの、また騙されまいぞや。

喜左　イヤ／＼、モウ、あの通りに譯立てゝ、商賣の道具買ふ氣になつたら、もうやつたものぢや。それでおれも辛抱した甲斐がある。おりく、われも喜べ。

りく　ハイ／＼、どうなる事ぢやと、とんと案じて居りましたが、雨降つて地固まると、こんな嬉しい事はござんせぬわいなア。

喜右　オヽ、嬉しかろ／＼。おれも安堵しました。ヤア、婆、それはさうと、もう日足もきつう西に傾いた。あんまり遅うなるでないか。近頃勿體ない事なれど、モウとつくりと爰から拜んで、そろ／＼去なうぢやあるまいか。

くま　アノ結構な息子どのにかゝつて、あつたら遊山に出て一向に面白うなかつたわい。サア／＼、ソレ又おりく新助を爰に置くと、猫に鰹節をあてがうて置くやうなものぢや。一緒に連れて戻らつしやれ。

喜右　ハテサテ後の後まで氣を廻して、結句あれが氣を惡うするやうなものぢや。今日の今まで親の意見や、女房の云ふ事さへ聞かずに、凝つたあれが事、いま發然と得心したもの、水離れが肝心ぢや。新助、わが身は後に殘つて、とつくりと差合ひなしに云ひたい事やつて、

　トおりくと顏を見合して

イヤサ、その刀とやらを、とつくりと改め、取つて戻つたがよいぞや。ナアおりく、ちつとの間、貸してやつたと云うて、萬ざら白晝に麁相もあるまいぢやないか。

りく　ハイ〳〵、なんのマア、これまで長の年月、大事の主を、いろはどのゝ揚詰めにあひ、心の底を見さがされ、今になつてから、わたしが貸さぬと云うたとて、どうなるものでござりませう。そこはよいやうに相談さしやんしたら、歸りには内へ戻して下さんせえ。

ト いろはへ當てゝ云ふ。いろは、術なきこなし。

いろ　ハイ〳〵、左樣に仰しやつて下さりますると、わたしや爰で、直ぐに消えたうござんす。モウ、何にも申しませぬ。堪忍して下さんせ〳〵。

喜右　ヤイ〳〵、もう何も云はぬ事〳〵。時に何れも、お暇申さう。最前はなんのかのと間違ひづくで、赤目吊つたりしたが、何事もこの座ぎり。觀音樣のお請けのないは……只何事も草の葉の、程々に置け露の玉、重きは落つる人の世の中……新助、後から戻りや。婆、ござれ。

くま　アイ。

ト 唄になり、三人よろしくあつて、向うへ入る。

丈助　さて新助、契約なりやア、いよ〳〵いろははこの丈助が貰うたぞよ。後で云ひ分あるまいがの。

新助　何がさて、一旦男の申した事、違ひは致さぬが、わたしもこな樣にお約束申した、仁王三郎の一腰、申し請けまするぞや。

丈助　ハテ知れた事、武士の詞に二言はない。イヤナニ千力、先達て讃州高松の重寶、紛失いたしたと云ふ事聞き及ぶ。その刀と、この仁王三郎の鍛冶は同國同姓。只今二振りの刀、即ち千貫の折紙道具、先達て桝屋武右衞門と云ふ町人が手より、所望いたさせくれよと頼み居る。これとても金銀づく、何れへなりとも其方が望む所へ遣はせ。合點か。

ト 差添を渡す。

千力　慥かに預かりました。

ト 云ふ所へ才兵衞、肝煎りの形にて出て來り

才兵　丈助さま、千力さま、いろは。ホウ、新助さまも、これにござりまするか。

新助　オ、肝煎り才兵衞どのか。これには觀音下向でござりますか。

才兵　イエ〳〵、わたしはいろはが事で、お二人樣にお目にかゝりに參りました。いよ〳〵身請けは今日中になされまするか。

丈助　有やうは新助、其方を出し拔いて、この所で身請けの相談いたさうと思うて居つたが、斯う打解け合ふ上か

らは、隠すに及ばぬ。しかと身請けを致すぞよ。
新助　ハテ、手廻しな。
いろ　コレ〳〵親方さん、肝心のわたしが得心するやら、せぬやら知れもせぬのに、滅多に相談はなるまいぞえ。
才兵　合點せうが、せまいが、年の内は親方任せ。どうやら悪い蟲がついて、腐りの入つた代物。早う見切らにやアならぬ。否でも應でも丈助さまへ、行てもらはにやアならぬぞよ……さらば、お金を受取りませう。
丈助　成る程、金渡さう。千力、此方には手詰めの場所。寶は身共が差し合したこの一腰、金にして才兵衛へ渡してくりやれ。
千力　いま聞く通りの譯。サア、急に金が入用。刀を改め、金にせうか。
新助　して、その刀の價は。
千力　ハテモウ、玄人のわが身の事。折紙の外口錢も取れまい。
新助　すりやア〳〵千貫で。
　　ト胸算用して
成る程、金渡さう。いま爰に持ち合さぬが、一緒にござれ。内で渡さう。
千力　ア、イヤ〳〵、此方も爰でなけりやアならぬ金。せめて手付けだけなりとも。
新助　尤もぢや。此方もそれは勝手づく。
　　ト懐中を探す事あり、いろは、心附き
いろ　お前の紙入れは、先刻に母さんが拾うて、持つて去なさんしたぢやないかいなア。
新助　ほんになア。あの紙入れの中は、桝武に取替へて貸してある百五十兩の證文、その金も外で借つた二百兩の内を、五十兩はいろはが事でおれが使うて、百五十兩はこの刀の心當てに、退けて置いた百五十兩の證文、入れて置いたが、もし母者人が見られたら、内證で渡してくも置くやうに思はつしやろが、それは格別、差當つた今の入用。人にも事かゝすと云ひ、ちよつと追ひ駈けて。
　　ト行かうとする。
千力　コリヤ〳〵新助、わが身の紙入れに、金があるやら落したやら、此方は知らぬ。われが金取りに去ぬのを、爰に待つて居やうか。馬鹿つくすた。才兵衛どん、新助から金が渡らにやア、其方へも渡らぬ金。明日へ延ばされうか。
才兵　イエ〳〵、今日はどの道受取ります筈の身のしろ代

手付けなしに今日まで待ちました。モウ、さう〳〵は待たれませぬ。

千力　新助、聞く通りの譯ぢや。金出さぬか。

新助　サア、その金は。

才兵　金がなければ、いろはは外へやりますぞえ。

丈助　身請けがならにやア、刀は外へ賣り拂はうか。

新助　サア、それは。

千力　金渡すか。

新助　サア、その金は。

才兵　いろはを外へやりませうか。

丈助　刀を賣らうか。

新助　サア。

丈助　サア。

皆々　サア〳〵〳〵。

丈千　どうぢや。

ト責めかゝる。新助、當惑する。

武右　その刀おれが買はうわい。

ト武右衛門、ズツと出る。新助、見て

新助　オヽ、よい所へ桝武。定めて様子聞きやつたであらう。友達のよしみ、見兼ねて出たは、定めておれが取替へて置いた金を、持つておぢやつたであらう。サア、早うその金を渡して、刀を此方へ。

武右　イヤ〳〵新助、そりやア何を云ふのぢや。金貸したの取替へたのと、そりやアマア何事ぢや。

新助　何の事とは、後の月の六日、松坂屋善七から借つた二百兩のうち、百五十兩に藍玉屋へ仕切りにやるうち、暫し貸してくれと、しかもわが身の直筆で、證文が書いて取つてある。しかも直筆ぢやぞよ。

武右　こりやア〳〵、新助、わりやア養子の部屋住み、金も借らねば買ひも廻るまいが、憚りながらこの桝武、世事の氣散じ、三ヶ所の掛け屋敷かけて、立てようと轉がさうとおれが胸次第。何か不自由で刀屋の入り聟風情のわい等に、金借つてなんにせうぞい。さうして今聞きやアなんぢや。證文がある。ドレ、どんな證文ぢや。見ようかい。

新助　證文の入れてある紙入れを、落した事を立聞きして今さら横に出るのぢやなア。コリヤヤイ、拾うた人はおれが母者人、抜けようと云うて抜けさすものか。待つて居れ。

ト行かうとするを首筋を引きつける。その手を取り

こりやア、なんとするのぢや。
武右　なんとするとは新助の生盗人。貸さぬ金を盛りかけて、おれが懐中に金のある事を見込んで、刀の代金粟手にせうとは怖い事。サア、證文出せ。出しさらさぬか。
新助　こりやアうぬ等寄つて、この新助を目論見かけるのぢやなア。
武右　目論見とは、何が目論見。われがやうな悪企みは、ようせぬわい。
ト武右衛門、新助を喰はすと、惘りして
新助　でんどでんに悪名つけるのみならず、男の面を
武右　毆つたらどうした、まだ其まゝでは置かぬのぢや。
新助　現在おのれが難儀の場所を、救うて貸した百五十兩の金。如何に證文が爰にないとて、空恍け、剰さへ人中で男の顔を。
ト武右衛門を引きつける。
丈助　こりやア〳〵。刀を買はうと云うて出た枡武を、手籠めしてどうさらす。
ト千力、新助を引き退ける。
千力　どんちやんつかして、いろにが身請けの茶々入れさらすのぢやな。

ト新助にかゝり、少し立廻りあつて
新助　こりやアうぬら、この新助を目論んだのぢやな。
武右　何をこま言ぬかす。
ト武右衛門、新助を喰はしにかゝる、振り放すを丈助新助へ打つてかゝる身をかはして丈助を引きつける、武右衛門、新助にまた叩きかゝる。立廻りあつて、いろは、始終心遣ひあり、よき所にて傳七、飛んで出で、三人を見事に投げ退け、新助を囲うて
傳七　こりやアうぬら、新助を手籠めにして、どうさらすのぢや。
いろ　オヽ、傳七さん、よい所へ、よう來て下さんしたなア。
ト傳七をあふぎ立てる。
新助　みす〳〵貸した金を、借らぬと云ひ、皆目論見寄つてこの通り。エヽ、口惜しいわい〳〵。
傳七　尤もぢや〳〵。ちよつと聞いたところが、皆あいつらが悪企みと見える。何も云やんな、知れてある……イヤコレお侍ひ、枡武、千力、ちよつと爰へ出てもらはうかい。
丈助　こちらにか。

トよろしくあつて、丈助、後より武右衞門、千力、傳七が左右に出て

武右　こりやア傳七、わりやアかけも構はぬ所へ出て、こちらを投げて置いて、逆ねだりせうと思つて、呼ひ出したか。

千力　イヤコレ、傳七、前は場所で關取り株の貴様でも、角力やめて引いて居りやア、今では五分々々の人間。あんまりぞんざいはたくと、千力が料簡せぬぞよ。呼び出したは何の用ぢや。

傳七　イヤ、取出しの千力關取り。其方から料簡しても、兄弟分の新助を、人中で無體な打擲しられては、おれが聞かぬ……爰な大盜人めが。

丈千　なんでおいらが盜人だ。

傳七　借つた金を借らぬと云ふのみならず、新助が色のいろはを、横合から請け出さうの、女房にせうのと歪んだ事を云ふ侍ひの、腰押しは知れてある。コリヤヤイ、うぬがはいくさしの時分から、番付のかざ嗅いで居る初花ぢや。手玉に突くやうな角力取りが、高をどし云うて、それを喰ふものか。あんだら盡せ。ジタバタさらすと、角力封じて五器の身を上げるぞ。

千力　イヤ、わいらが器量で上げられるなら上げて見い。

武右　イヤ、面倒な。疊んでしまへ。

ト武右衞門、かゝるを蹴り倒し、千力、かゝるを角力事の立廻りにて、前を蹴上げる。千力バツタリ、轉げる。此うち丈助、才兵衞、これを見て額ふ。

傳七　才兵衞どん、ちよつと爰へ來て下んせ。

才兵　ハイ。

傳七　いろはが身請けは、おれがするぞえ。

才兵　エヽ。

傳七　おれが方から金渡すまで、外へ遣つたら爲にならぬぞ。

才兵　ぢやと申して。

傳七　ハテ、聞かんす通りの譯ぢや。刀を新助方へ買ひ取らねば滅多に身請けの金は出來ぬ。斯う云ひかゝつたら、刀も新助が手へ買ひ取らせ、又いろはも此方へ身請けせねば、人中で面恥かいた新助が立たぬ。さう思うて不肖ながら、二三日待つてもらはう。初花の傳七が、斯う云うた詞が手付けぢやと思うて、才兵衞どの、一番立てゝもらはざなるまい。

才兵　イヤモウ、わたしは十方旦那、どこへなりともお金

の早い方へやりまするが、お前を立てゝ明日までは待つて上げませう。

傳七　それは忝ない。イヤコレ、いろはどの、もう爰は構はず、何もかもおれが爰にある程に、才兵衛どのと早う去なんせ。

いろ　アノ、わたしが身は、お前が呑み込んでならよけれど、この體を見捨てゝは、どうも去なれませぬわいなア。

傳七　サア〳〵、よいてや。コレ、才兵衛どの、キッと詞を番うたぞよ。サア〳〵、大事の代物。早う連れて去なんせ。

才兵　ハイ〳〵サア、いろは、早う駕籠へ乘りやいなう。

いろ　そんなら新助さん……イヤサ、傳七さん。後で主の短氣の出ぬやうに、賴みますぞえ。

傳七　サア、よいわいなう。新助はおれが一緒に連れて去ぬ。

才兵　幸ひの駕籠。オヽイ〳〵。駕籠の衆、來てもらはう

ト駕籠舁き出る。無理にいろはを乘せて

いろ　新助さん、必らずぢやぞえ。

ト才兵衛、駕籠の垂れを下ろし

才兵　サア、駕籠やつてもらひませう。

ト合ひ方になり、駕籠向うへ入る。丈助、千力、武右衛門、ソロ〳〵起きて

丈助　コリヤ〳〵、駕籠屋、待て〳〵。アア〳〵、千力、武右衛門も來やれ。これより直ぐに駕籠に附いて、ワッサリと呑み直さう。サア〳〵、來やれ〳〵。

千力　おのれ、この仕返しは、いつでもするのだ。

武右　オヽ、さうぢや〳〵。なんだい〳〵。

ト千力、顔へ〳〵強い身振りして。

千力　なんの〳〵、初花はなんぢやい。新助、あんまり強い事吐かすな。大盗人の大騙りめが。

ト新助、腕まくりして、行かうとするを、傳七、抑へる。

武右　なんぢや。まだ何ぞ云ふ事があるか。うぬ……ヨ、横面を……イヤ、留めさつしやりますな……こりやア待て〳〵。イヤ、留めさつしやりますな。彼奴等を、ハテサテ弱い、エヽ、うぬ傳七、覺えて居れよ。

ト武右衛門、丈助と二人のせりふを一人にて云ひ〳〵強い振りして入る。

新助　エヽモウ、どうも。

ト新助、堪らず血相して、行かうとするを、傳七、留

めて

傳七　尤もぢや、道理ぢやが、いま爰で荒立てゝは、大事の刀に手に入らぬぞや。

新助　ぢやと云うて、人中で今の惡口。いよ〳〵おれが顔は立たぬわいの。誠に刀は枡武めらが手にあれば。

ト　また行かうとするを留めて

傳七　ハテサテ、町所の知れてあるあの枡武、殊に證文はわが身の手にあれば、猶以て動きは取れぬ。わが身の腕の入れ黒子、堪忍の二字は何の爲ぢや。

新助　サア、國から來たこなたの意見の入れ黒子、これがありやアこそ今の辛抱。あの刀を取返し、半次郎さまを歸參さすまではと、辛抱して居るのでござんすわいの。

傳七　オヽ、それがよい〳〵。ドレ、その脇差、こちらへおこしや。

新助　イヤ、これは。

傳七　サア〳〵、マア、こちらへおこしやいなう。

ト　引ッたくつて、脇差に封印を附けて、新助に渡す。

半次郎さまを歸國さすまでは大事の體、必らず短氣を出すまいぞ。この達引はおれが代つて、わが身の顔を立ててやる。おれもわが身の魂ひ預かつて。

ト　脇差を新助へ渡す。新助、取つて

新助　こりやアコレ、こなたの魂ひ……斯う取替へる上からは

傳七　互ひに凶事のないやうに

新助　嗜なむ腕の入れ黒子。

傳七　今日の出入りはおれがする。

新助　そんなら顔の立つやうに。

傳七　思案はおれの胸にある。

新助　何にも云はぬ、忝ない。

ト　立ち上がつて

とは云ふものゝ。

傳七　ハテマア、今日の恨みは明日の鮫鞘。

新助　初花咲、時節もあらう。

傳七　新助。

新助　傳七どの。

傳七　マア、行きやいなう。

ト　戻り夜船の唄になり、兩人向うへ入ると、合ひ方變つて、綺麗なる船を曳き、揃への形にて、五人土手の上を船曳きの模樣にて、橋がゝりへ入る。後に六兵衛おさき、しな〳〵と出て、よき所へ坐り

六兵　こりやアおさきよ。いま父が頼んだ事、よう聞分けて、奉公に行つてくれよ。

さき　アイ、ついにこれまで顔も知らぬ姉様なれど、姉様の爲になる事なら、どのやうな奉公にでも行きますわいなア。

六兵　オヽ、よう云うてくれた。あの姉のおまつが出來た時は、村方も不作ゆゑ、年貢に詰つてぎつかわと育てられるどころぢやなかつた。隣り村の左次が世話で、大坂の谷町、刀屋喜右衛門と云ふ刀屋、爰にも產があつて、生れると直ぐに取つて行た、その代りにとあつて、あつちから丁銀百目下さつたに依つて、一生不通で養子にやつた、その金で、庄屋どのへ頼んで、年貢の納まり、いま安穏に雜炊でも啜つて、今福村の六兵衛と云はれるのも、姉めが庇。それから程なく婆は死ぬる。力と云ふはわればかり、婆が話しで聞いたやら、姉に逢ひたい〳〵と、云ひ暮らした今日の今、爰へ來る道で蒲公英摘んで居た所の女中、思はず互ひに見た顏、幼ない時の面ざし見違へぬが親子兄弟の緣の盡きぬところ。それから仕事も上の空、樣子を聞けば聟どのゝ身の上、先の詰まらぬお山狂ひ、大切ない仁王三郎とやら云ふ脇差がなければ二人が心中、姉めが悲しからう、可愛い事ぢやとつおいつ、思うても出來ぬものは金。先刻に聞けば女郎の身請けとやら、在所の奉公とは違うて、大きに金になるもの。われが器量を見るところが、親の慾目か知らぬが、先刻のお山に滅多に負けはせぬ。その顏に白粉を塗つたり、紅をつけたら、餘ッぽどの見事なお山になり、姉が爲なら、どんな奉公でもせうと云うてくれるは、卽ちこの親の爲にも孝行ぢや。百目の金に賣れた姉、その恩に替へてさす奉公。コリヤ、堪忍してくれよ。

ト愁ひの模樣よろしくある。

さき　其やうに泣いて下さんすな。姉さんやお前の爲なら、大坂のお山屋へ、早う連れて行つて下さんせ。

ト淚を隱して云ふ。六兵衛、

六兵　オヽ〳〵〳〵。

さき　シタガ、わしが行つたら明日から、麥よばしたり晝間の茶を持つて行て進ぜる者があるまい。それが悲しいわいなア。

ト泣く。六兵衛、引き抱へ

六兵　オヽ、道理〳〵。孝行な事、よう云うてくれたなア。われがやうな孝行者を、賣つてやる親の心、推量してく

れ推量してくれ。

トまた泣く。この前より見てくれ彌八、木綿やつしの袷羽織を肩にかけ、觀音下向の體にて來かゝり、聞いて居る。この時、屋形船を舞臺の外へ引き出す模様よろしくある。始終合ひ方。

さき　モウ〳〵、泣いて下さんすな。內へ去んだら近所の衆へは、大坂の一つ家へやつたと云うて置いて下さんせ。コレ、何も泣かしやる事はないわいなう。

六兵　オヽ、おれよりは、われが目には淚を一杯持ち居るぢやないかい。モウ〳〵、泣かぬ程に、わが身も泣きやんな。

さき　アイ、お前も泣かしやんな。

六兵　オヽ、泣きやんせぬわいなう。オヽ。

さき　エヽ。

トしめ泣きに泣き落す。この時、彌八、思はず前へ出て

彌八　てもさても、よう思ひ切つて、その娘を奉公にやる氣にはならしやつたなう。

トずつと出る。二人悔りして

二人　エヽ、お前は。

彌八　イヤ、大事ない。親子の衆の實義を聞いて、思はず爰へ出た。おれも親は泣きより、萬ざらの他人でもござんせぬ。刀屋の婆さんの甥の彌八と云ふもの。

六兵　その甥御が、どうして爰へ。

彌八　觀音參りの下向道、二人の愁歎、來かゝつて後へも先へも行かれぬ程の、入り組んだ今の話し、聞く程伯母が憎うなり、どうぞ新助が儘にして、金拵らへてやりたいと思うても、ほんに身一つ。併し、運に叶うて相場で手が合うたら、早速おれが身請け、身拔きをしてやる程に、今日のところは、二人の思惑通りして見やんせ。

六兵　成る程、親子の誠さへ屆けば、姉娘の爲にしてやる奉公。娘よ、早う支度せい。

さき　あのやうに勇みをつけて下さんすお方があれば、わたしも力がござんす。とてものお世話に、お前樣を賴んで。

六兵　ほんに、出かし居つた。おれぢやと云うて、大坂の勝手を知らず、娘賣らうと振賣りに歩かれもせぬ。どうぞこなさんが世話して、この娘を賣つてやつて下されませ。

彌八　おれぢやと云うて、賣つて見た事はなし、預かつて

去んでも、どんなものぢやが。
六兵　それでも差詰つた先刻の難儀。
さき　とてもの事なら、早うわたしを金にして、姉聟さんの難儀を、救うて下さんせいなア。
彌八　おやと云うて、いま急に買ひ手がなければ。
六兵　どんなものぢやなア。
さと　その奉公人、わしが抱へやんせう。
ト井筒屋おさと、船の障子を明け、ズツと出る。三人悄りして
彌八　火急の場所へ
六兵　この娘を
彌八　抱へてやらうと仰しやる
六兵　お前は。
さと　大坂島の內、井筒屋と云ふ置き屋でござんす。
彌八　そんなら新助の相方の、いろはどのゝ親方の。
さと　アイ、おさとでござんす。最前からの樣子、船の內から殘らず聞いて、貰ひ泣きしましてござんす。元の起りは、此方の抱へのいろはゆゑ。新助さんの金事、差詰つたこの場の仕儀。そこを思うて抱へに出た親方、奉公人に見所があるに依つて、本年極めて百五十兩。持ち合はした手付け金。
ト袱紗包みを抛つてやる。六兵衞取つて
六兵　そんならこの娘を。
さと　本年ぐるめ百五十兩。
さき　父さん。
六兵　娘よ。
兩人　エヽ、忝なうござりまする。
彌八　サア、埒が明いた。これも偏へに娘の孝心。觀音樣の引合はせ。親仁どん、喜ばつしやれ……南無觀世音菩薩々々々々々々。
ト奥を向いて拜む。おさき、よろしくあつて
さと　イヤモウ、親孝行と云ふものは、自然とその身に報い來て、遂には出世が出來ませう。
六兵　兎角女子は氏なうて、玉の輿が有り難い。モウ、その船で一緒に連れて、お歸り下さりませ。
さと　義理と情に身を捨つる、いづくの親の水放れ。思へば一つ
彌八　乘合ひの
さと　緣の柵。
六兵　情の風。

彌八　もやひを解いて行かつしやりませ。

さき　彌八さん。

彌八　おさとさん。

さと　お世話でござんす。

ト障子ピッシャリさす。船、曳き込む。彌八、六兵衛よろしく泣き落す。引ッ張りの見得にてよろしく

ひやうし　幕

下の巻

井筒屋の場

役名――男達、初花傳七。井筒屋おさと。六兵衛娘、おさき。三上丈助。枡屋武右衛門。角力、千力勝五郎。仲居、おとく。花車、おきし。高松半次郎。井筒屋いろは。刀屋新助。

造り物、二重舞臺、見附け長暖簾、臆病口に高き中二階飾りあり、橋がゝりの方茶屋格子、門口あり、掛け行燈。好き所に線香場。この見得、伊三郎帳箱に附いて居る。

トおとく、仲居、おきし、花車の形にて忙しさうに出て

とく　アイ、小松さまは、今日は直ぐ内の揚げにして下さんせ。

きし　ハイ〱でもまだ朝飯も喰べずでござりまする。マア、ちよつとお戻しして下さりませ。直ぐに送りませう。

とく　コレイナア、昨夜のお客で、今日は直ぐに他所行きぢやわいなア。それぢやに依つて、わしが分けて、その云ひ譯に來たのぢやわいなア。

きし　それに御贔屓、忝ない。併し、お客の方に如才はござりますまいが、この節他所行きは、あんまり派手になされますなえ。隨分ともに目立ぬやうになされませ。

とく　そりや取つて來るわいなア。

きし　さうして、もう他所行きは、三つ附きましたぞえ。

とく　オヽ、なんぢやいなア。他所行き三つと云ふ事は、どうしてあるぞいなア。

きし　イヤ、モウ、この節は、例へ三つ附きましても、同じくば送りとむなうござります。けれども、お前様ぢやに依つて預けます。それがお嫌なら早う戻して下さりませ。

とく　サア、このやかましいので、とんと弱りぢやわいな

ア。是非がない。

ト　びんと出て

ほんに、あの子の着替へ出して置いておくれえ。

伊三　サア、先づ小松さまは片附けた。

ト帳箱改めて

モウ、これからは、いろはさゝばかりぢや。柳屋へ行て急いて來うか……ア、まゝよ、向うに如才もあるまい。ドリヤ、マア、一服せうか。

ト内へ入る。奥よりおさと、おさき出て

さと　兎かく女は髮形とは、よう云うたものぢや。ソレ、鏡でとつくりと見や。見違へるやうにならうがの。これから、いろはが妹女郎にして、出世をさゝねばなりませぬ。もう在所の、父樣の事は、とんと忘れてしまうて、爰の氣持ちにならねばならぬぞや。茶屋先へ行ても座敷の執成し、お客の氣取り、寐間の手管。こりや云ふに云はれぬ祕傳のあるものぞえ。もうこれからは、わしをわが身の母さんのやうに思はにやならぬぞえ。

さき　アイ、何もかも、よう合點して居りますけれど、在所育ちの藪鶯、野邊の仕事や田の草取り、手業より外には知らぬ不束なわたし。親の爲とは云ひながら、大枚の金に賣られたわしを、合點して買うて下さんした、旦那さんやお家さんの志し、忘れは置きませぬ。この御恩を送る勤め、おのれやれと思うては居れど、お山衆の眞似をして見ても、着る物が纏はれて、階子から落ちるやうで、邪魔になつてならぬもの。どうぞ着物を短かう着て行く事なら、隨分ともに釜の下をさし燻べ、また掃き掃除もしませうが、いま仰しやつた寐間の作の手管とやらは、布織る時に火の中へ、入れる物でござんすか。それも、とつくりと敎へて置いて下さりませ。よう覺えて奉公大事にしませうが、定めて今頃は、父樣か淋しう暮らして居やんせうと思うて、そればかりが、わしや悲しうて悲しうてなりませぬわいなア。いま一度父さんに逢たひ逢ひたい、逢ひたうござんすわいなア。

ト泣く。

さと　オヽ、道理ぢや／＼。が、在所の事を忘りやと云ふは爰の事ぢや。やんがて在所へも連れて行かうし、また舟へ行たり、ソレ、花見に連れ立つて、かうし、其うちにツイ面白いといふ事を知らう。モウ／＼其やうに、キナキナ思ふ事はないわいなア。

さき　アイ。

さと　エヽ、まだ泣きやるかいの。折角美しうしてやつた身仕舞ひが、剝げるわいの。エヽ、ツッとモウ、女子の腐つたやうに。コレ、泣きやんないなう。

さき　アイ。

さと　やがて父樣が逢ひに來てぢや筈ぢや。エヽ、聞分けのない。もう追ツつけ衣裳着替へて、店へ出ねばならぬわいの。

ト云ふ、奥より

傳七　その水揚けの新造買ひませう。

ト莨盆提げ、ズッと出る。

さと　お前は傳七さん。昨日はいろはが事、お世話さんでござんした。

傳七　イヤ、なんのいなう。世話するといふではなけれど、畢竟、世話うちの新助が緣に連れて、ツイ見捨てにもならぬ譯。それは格別、その新造の舟下ろしを、この傳七が買ひませう。花附けて借して下んせ。可哀さうに、外の心も知れぬ客に逢はされもせまい。おれが買ふと云うて、コレ、おりや此やうな年端もゆかぬ者は嫌ひぢや。必らず件はなしぢや程に、さう思うて下んせ。

さと　ハテ、あらうがあるまいが、お前に貸したからは、心任せにして、隨分あしらうてやつておくれた。

ト兩人笑ふ。唄になり、傳七、おさきの手を取つて奥へ入る。と後へ駕籠舁き込み、二重舞臺へ附けて

駕籠　ハイ、いろはさま、お歸りでござります。

いろ　アイ〳〵。皆さん、大儀でござんした。

ト垂れを上げて、いろは、ズッと上がり、すまぬ顏して居る。

さと　オヽ、いろは、戻らんしたか。昨夜から逢ひませんの。柳屋へ行て居やつたさうなが、お客は誰れぢやえ。

いろ　アイ、里勇さんが見える筈でござんしたけれど、見えなんだに依つて、それで文を殘して戻りましたわいなア。

さと　マア〳〵、內着と着替へて休まんせ。ドレ〳〵、出してやりませう。

ト戸棚より內着の着物出してやる。いろは、着替へ、おさと、衣裳を疊み、いろ〳〵あつてヤ、コレ、いろは、わが身はマア、きつう顏の色も惡し、根つから浮き〳〵しやらぬが、なんぞ苦になる事があるか。但し、どこぞ惡いかや。

いろ　イエ〳〵、どつこも惡うはござんせぬわいなア。

さと　イヤ〳〵、隠さんすな。ソレ、涙ぐんで居やるぞや。いろは、どうしたものぢやぞいなア。なんの其やうに苦にせずと、ちつと氣を浮き〳〵紛らしたがよいわいなう。マア〳〵、爰へおぢや〳〵……いろは、わしやちつとわが身に、話したい事があるわいの。

〽煙草盆とり舞臺の前へ出て

サヽ、此やうに云うたら、また有觸れた意見をすると思やろが、さうぢやないぞや。その氣の縺れてあるのに、なんの意見をせうぞいなア。アヽ、なんぞ面白い話しでもしたいものぢやが……オヽ、それ〳〵、この間わが身も行きやつた、浚へ講に、あの都さんの彈き手ぢやあつた、葛の葉。あの子の音〆めは大抵可愛らしい音〆めぢやないかいの。一體、端唄の文句といふ物は、ウカ〳〵聞いて居れば、なんでもないが、わしも初めは勤めした身ぢや。意見しられた事もなんぼもあつたぞいなう。色事でもして居る時は、それの外の座敷は上の空。色の事ばかりは忘れられんに依つて、お客の手前には上の空。惣體また色事ほど、面白いものはない。その面白いといふうちはよいが、深うなるに隨うて、嬉しいといふ事がある。その嬉しいが嵩じて、悲しい事が出來るのも皆戀の道。丁度其方や新助どのゝ身の上でも。

いろ　エヽ。

さと　サア、新助さまや、わが身の上に、そんな事はあるまいと云ひたいが、又ないとも云へぬぞや。さうして、あの刀の事はどうなつたかや。

いろ　エヽ、お前、アノ、その事を。

さと　知らいでなんとせうぞいの。さぞ心遣ひであらうが、其やうに苦に病まずと、なぜ心よう手に入るやうにしやらぬぞ。

いろ　ツイ、心よう手に入るやうとはえ。

さと　サア、その譯は、あの丈助といふ侍ひが、其方に逆上り詰めて居るこそ幸ひ、とんと、身を打任せさへすりや、なんの苦もなう金も手に入り、また刀も手に戻るぢやないかいなう。

いろ　サア、それはさうなれど。

さと　新助さまへ立たぬといふのか。そりや其方の一圖の料簡。いとし可愛といふ所ばかりの義理を思つて、眞身の義理を立てるといふ所へ、氣が附かぬといふもの。堅くろしいばかりが貞女とは云はぬぞや。男の爲なり、例へ嫌な客にでも、肌身を觸れるのも勤めのうちの貞女ぢ

やわいの。嫌ぢやあらうが、あの丈助さんに抱かれて寐さへすりや、新助さんの願ひも叶ふ。また大事にかけて居やしやんす、半次郎さまとやらの身の上も、無事で納まるでないか。すりや、これが眞實、誠の義理立てといふもの。ナア、合點がいたかや。

いろ　アア、そりやよう合點して居るけれど、どうも、あの丈助に。

さと　抱かれて寐るのが嫌であらう。それもそこが辛抱ぢや。お山鑑と云はせたい。ハテ、さうして置いて、その上では、身請けせうと云うたれば、マア、一旦身請けしられて、あつちへ行たがよいわいな。例へ身請けしられても、何かはわしが呑み込んで居る。氣遣ひしやんな。其方の胸も心の曇りも、晴れるやうにしてやるわいの。サア〳〵、くどう云うては却つて其方の氣の障り。三方四方を思ひやり、コレ、いろは、勤めの内の其方の誠、破つて立てる思案をさんせ。

ト唄になり、心殘して、よろしくあつて入る。いろは、後に殘り、俯向いて、いろ〳〵辛氣なこなしある所へ、奥よりおとく出て、

とく　コレイナア、いろはさま、わたしや今奥から聞いて、お前の心を察して居たわいなア。それはさうぢやが、いろはさま、お家樣が事を分けて云うてぢやのに、これはしたり、どうした事ぢやいなア。そんな時には、お酒でもあがらんかいなア。

ト銚子杯を持つて來て

サア〳〵、爰で臺所酒と出掛けようか。

トいろ〳〵捨ぜりふにて諫める。矢張り浮かぬ心にて俯向いて居る。此うち始終合ひ方。奥より千力出て

千力　おとく、いろはが心底、とつくりと、見定めたら、丈助さまへ身請けさせまするが、爰はどうぢや。

ト胸を叩く。

とく　サイナア、今も今とて、その事を云ひ出して居るのでござんす。お前も大方、奥で聞いて居やんしたぢやないかいなア。いろはさま、千力さんのお世話で、丈助さまの方へ請け出されて行く氣でござんせうがなア。

いろ　アイ、マア、さうぢやわいなア。

傳七　イヤ、新助が手は切つても、おれが忌みが切れぬぞ。

ト傳七、奥より出る。

千力　誰れぢやと思へば初花か。昨日は德庵で術ない目に遭はしたなア。さうして、何か、わりやどうでも、新助

が味方になつて、いろはが身請けの茶々入れるのか。
傳七　イヤ、邪魔はせぬ。おれも一旦新助に頼まれて、いろはが身請けは聲をかけて置いたれば、親がゝりの新助、殊に義理ある兩親、女房、その縁を引いた、あのおりくが深切、イヤモウ、思ひ廻して見ても、いろは新助が仲は、引分けにやならぬわい。
　トいろは聞いて恟りする思ひ入れ。
サア、誰れがどう云はうと、おれが邪魔して、新助が、手を切つて、千力、貴樣の方へ世話せうわい。
千力　ヤア、なんと云やる
傳七　それで、さつぱりと、昨日の意趣晴らして、丈助どのとやらに、いろはを取持つてたも。サア、斯う云ふも、どうやら千力が怖さに、傳七が後へ寄つたと笑ふ人もあらうが、そこが名を取らうより徳の所。折入つて頼みがある。その譯と云ふは、桝武が手に入れてある、仁王三郎の刀、あれをどうぞ新助が方へ貰うて下され。それを貰へば、双方が納まるといふもの。コレ、兩方の手では物はならぬ。此せりふを五分々々に、分けてもらへば兩方よし。颯取り、頼みましたぞや。
千力　成る程、聞えた。如何にも、こなさんの顔も潰されまい。いろはさへ得心して、新助との仲、さつぱりと手を切つて、新助が居る所で、惚れてござる丈助さまに、抱かれて寝さへすりや、その時は身の代の三百兩も、刀も遣らうわい。
傳七　こりやア面白い。古手屋の上を行た愛想盡かしよりは、まだもそつと辛抱のなり悪い、あれが前で抱かれて寝ねば。
千力　滅多に渡さぬ刀と金。
いろ　そんなら、わたしがならぬ辛抱し通して、丈助さまに逢ひさへすれば。
とく　お前の思ふ新助さまの望みも叶ふ。
傳七　それでおれが、新助に請け合うた詞も立つ。
とく　のいて男の顔立てるか。
千力　新助さまの詞を立てるか。サア、いろは、返事は、どうぢや。
いろ　それから逢はぬ、新助さまの、板渡しに、念もないやら、丈助さまの思惑も立て、；前方の顔も立つやら、双方丸う納まるやうの、返事は後にするわいなア。
千力　面白い。新助が來るまでに、仲直りの杯傳七どん。
とく　樣子知らねど、仲直りとはおめでたい。打混じてお

杯を。

千力　そんならおとく、銚子直して下んせ。

傳七　ドレ、新造嬲つて遊ばうか。

ト唄になる。この一件よろしくあつて入る。向うより丈助、武右衛門、件の刀を持つて捨ぜりふにて出る。

武右　丈助さま、元は仁王三郎の刀は、國からお前が盗んでござつた。それも知らずに、新助めが欲しがるを幸ひに、二百兩の金を工面して宛がうて、この仁王三郎の刀を餌に、百五十兩の金を借つたは、どの道踏まうと思うて居る所へ、彼奴が證文の入つた紙入れを落したが此方の仕合せ。婆めが拾うて出さぬを幸ひ、たうとう二百兩の金は、本家からなす筈に、にじくりつけてしまうたところが、百五十兩は、いろはが身請けの半金。なんと、身にも附かぬ事を、これ程に取入れて、お世話申すお出入り方は、ござりますまいがな。

丈助　イヤ、今孔明と呼ばるゝ程の枡武。この恩は忘れぬぞよ。

武右　イヤモウ、恩にかけにやなりませぬ。時に、この井筒屋へ、いろはが事で、千力も來て居る筈でござりまする。

丈助　然らば尋ねて見やれ。

ト兩人内へ入る。キヨロ〳〵見て

武右　ハテサテ、茶屋の内といふものは、明けらけにして不用心。お内儀、留守か。

ト云ふうち、奥より千力出て

千力　これは丈助さま、枡武、早速ながらめでたいワ。

丈助　めでたいとは、金の事聞いたか〳〵。

千力　イエ〳〵、お前の望みの、いろはが身請け、傳七めを取込んで、いろはにも親方にも、呑み込ませ、今日中に埒明ける筈に、手を打つて置きましたぞえ。

丈助　ヤ、それは働らき。けうといものぢや〳〵、きついワきついワ。

武右　ア、コレ〳〵、あんまり氣が早い。其やうに孔明が幾人もあつて、滅多には喜ばれぬ。傳七めが邪魔ぢやと定めて、新助めを立合はして置くと、また深い所へやり居らうぞえ。

千力　イヤ、そりや氣遣ひない。その替りに新助が手に、なければならぬ仁王三郎の刀を、やつてくれと頼みかゝり。そこでおれも呑み込んで、マア、一旦いろはをお前に抱かれて寐さした上でなければ、刀も金も渡す事はな

らぬと喰はした。なんと、えらいものか。
丈助　イヤモ、えらいぢや／＼。どうでも孔明の團扇は、われが方へ上がつたわい。
武右　ても、孔明が安うなつたワ。さうして傳七めは、どこに居る。
千力　サア、たつた今まで奥で立つて居たが。
武右　よし／＼、なんでも、あつちの工面に乘つた顔で、コリヤ。
ト丈助、千力に囁く。千力呑み込み
千力　よう／＼コレ申し。
ト千力、武右衛門へ囁く。
丈助　よし／＼。
ト謀し合す所へ、おとく、蒲團を中二階へ運ぶ。千力、呼びとめ
千力　コリヤ／＼、そりや晝中に何するのぢや。
とく　エヽ、お前も不粋なお方ぢやわいなア、いろはさんの床とつて上げるのぢやわいなア。
丈助　いろはを寐さすのぢや。エヽ、羨ましい。
とく　サイナア、丈助さまとやらいふ、身請けのお客にお出るさうなが、待つて居るうち待ちかねて、そこで、いろはさまは先へ寐て居やんすのでござんすわいなア。
ト聞いて丈助、ゾク／＼喜ぶ。
千力　モウ、それ聞いてか。待つて居るといなア／＼。
丈助　なアに、嘘ぢや／＼。
トいろ／＼あるうち、奥よりいろは、醉うた振りにて出て、三人に目を附け、何も云はず、さつと二階へ上がり、よろしくあつて、
いろ　ぶゞを一つ下んせや。
ト障子ピッシャリ閉すと、丈助ゾク／＼する。
千力　なんと、あれ程までにして置きました。これから後はお前のせりふ次第ぢや。ナウ枡武。
武右　誠に怪しからぬ事ぢや。サア、斟酌せずと。
丈助　どうやら恥かしうなつて來た。
千力　エヽ、何やら斟酌なされまするな。
ト懐より狀を出し
これ御覧じませ。いま奥でいろはに書かした、お前の事を頼みのこの狀。これを手を廻して、新助めに渡すワ。いよ／＼この狀で、彼奴が顔は立たぬやうになると、昨日身請けの事を請け合つて置いた、初花との同士打ち。それを腹癒せに、昨日、貴様とおれが、徳庵での意趣返

し、手を下ろさずに、脇からさす工面ぢや。えらいか。

武右　イヤモ、えらい。貴様とおれは、粋を通して一杯入れうか。

千カ　それ〳〵、新枕の初床に、旦那は二階へ。エヽ、あやかり者。

ト丈助が背中を叩く。唄になり、よろしくあつて、千カ、武右衛門、連れ立つて入る。丈助、後に殘り、思ひ入れあつて、二階へ上がると、新助、花道より、半次郎、橋がゝりより、兩方よき所にて行き合ひ

半次　オヽ、新助ぢやないか。わが身に逢ひたうて、最前から一遍と尋ねて居るわいの。コレ、大事ぢやわいの。大事ぢやわいの。たつた今、國元から飛脚が持つて來たこの狀。サア〳〵、これ讀んで見てたも〳〵。

新助　ハイ、サア〳〵、ござりませ〳〵。大事とは、ドヽどんな事でござります。さうしてマア、きつう氣を急いてござりまする。マア、この狀は、何を申して參りましたな。

ト云ひ〳〵狀を開き見る。

半次　何をどころぢやないわいの。あの仁王三郎の刀は、家の重寶、紛失の事が荒立つては、この半次郎が身の上とあつて、三右衛門どのゝ情にて、あの刀今夜中に手に入らぬと、三右衛門どのへ云ひ譯がないに依つて、おりやモウ思案極めにやならぬわいなう。

新助　サア〳〵、ようござります。成る程、この狀を見ますれば、仁王三郎の刀、殿樣より差上げよとの御上意ゆゑ、事急になり、紛失の由申し上げては、親御の元よりお世話になりし、三右衛門さまも切腹に及ぶとのこの文體。

半次　それ見やつたか。コレ〳〵、爰を見や。それぢやもの、わしが氣が急くまいか……まだ〳〵、コレ〳〵、爰を讀んで見や。右刀いまだ相知れざるや、手に入り候はば早速持參いたし、歸國いたさるべく、何事も急なる事に候ふ、油斷あるまじく候ふ。サア、見や、この通りぢやもの、おれが心が急くまいか。

新助　サア〳〵、ようござります。

ト紙入れより證文出し

これ御覽じませ。この證文で譯立て致し、刀は追ッつけお手に入れまする。なんにもお案じなされますな。

半次　そんなら、その證文で埓の明く事かや。そんならおりや嬉しい。どうぞ其方に如才もあるまいが、早う首尾

右してたもや。

新助　畏まりました　追ツつけお知らせ申し上げます。

半次　アヽ嬉しや。そんならおりや、若野へ行つて、ちよつとの間待つて居やうかいなう。

新助　御酒でも、かつて、待つてござりませ。

半次　刀さへ手に入れば、歸參も叶ふわしが身の上。

新助　元の通りの高松の若旦那、おめでたい〳〵。

半次　コレ、新助、必らず何かを頼むぞや。コレ、おりや若野に居るぞ。後には飛脚が返事を聞きに參る筈ぢやぞや。早うぢやぞや〳〵。

ト云ひ〳〵向うへ入る。

新助　なんにもお氣遣ひなされますな。追ツつけそれ、持つて參りまする。コレ申し、とばついて怪我なされますな。斯ういふ狀が來たら、案じなさるも無理ぢやない。エヽ、併し武右衛門めに逢ひたいものぢやが、丈助が腰押して、いろはが身請けの世話すると吐かしたからは、どうぞ爰へうせるであらう。また傳七どのも、この證文の事を案じて下さつたが、手に入つた事を聞かして、喜んでもらひたいものぢやが。

ト捨ぜりふ云ひ〳〵内へ入る。二階にて

いろ　丈助さま、お前にこれまで、わたしを疑うて居やしやんしたであらうがなア。

丈助　イヤもう、疑ふ段ぢやないわい。これまで其方に振りつけられたは、みな新助ゆゑ。

いろ　丈助さま、お前はわたしが憎いかえ。

丈助　なんのわが身が憎からうぞいの。新助が事は思ひ切つたと云ふこれが證據。なんと、身請けして連れて去ぬが、身共が國へ來るか、來ぬか。

いろ　ハテ、斯うなるからは、お前の女房ぢやもの、蝦夷や對馬の果まで、一緒に連れて行かしやんせ。

丈助　オヽ、可愛。

新助　ありや、いろはと丈助の聲。合點のゆかぬ。

ト心意氣あつて

オヽ、聞えた。昨日證文の事、おれが手にないに依つて、刀取る金があるまいと思うて、金なしに侍ひを落して、刀を取返すあれが心か。エヽ、コレ、もう其やうにせいでも大事ないのに、この證文が手に入つた事が、早う聞かせたいなア。

ト此うち、傳七出て

傳七　オヽ、新助、おぢやつたか。其方が側へ刀が手に入

つても、折紙が添へてなければ、鰹かきも同然、仁王三郎の正銘にはならんぞよ。

新助　オヽ、傳七どのか。逢ひたかつた。そんなら先刻からの樣子を。

傳七　オヽ、皆聞いて居たが、その證文で武右衞門とせりふして、金が戻つて刀を買うても、折紙がないと、なんの役にも立たぬぞよ。

新助　サア、そりや刀さへ買へば、その折紙は刀に附けて。

傳七　イヤ、そりや戻らぬぞよ。

新助　ヤア。

傳七　サア、その折紙を餌にして、あのいろはを手に入れる、丈助どのゝ思案の底。

ト此うち武右衞門、千力、後より見聞いて居る。

新助　ムウ、そんなら、その折紙を取らうばかりに。

傳七　コリヤ。ムウ。

ト、ぢつと押へ、靜かにと云ふ心にて、後を見る。千力、武右衞門を見て、ハッと思ふ心にて氣を替へ

コリヤ、イヤサ、コリヤ新助、いろはは、さういふ氣は微塵もないぞよ。イヤ、さうでもあらうかい。身請けするすると、口でばかり云うて、粒三文振り廻しも出來ぬ甲斐性なし。金のたんとある侍ひの世話になるのが、マア當世かい。

新助　ヤア、なんと云ふのぢや。

傳七　イヤサ、あんまりわれが甲斐の廻らぬので、嫌になつたさうなぞよ。高でわれが嫌ぢやげな。丈助さまにお世話になると、いろはがあれに云うたわい。

新助　そんなら、アノ

ト氣色して又氣を替へ

なんぢややら、ドキ／＼とした。コレ、あれとおれとが仲は、何かと世話にして下んす、こなた。それに、あれが外で濟まぬせりふがあれば、おれになり代つて、そのせりふをしてくれにやならぬ……エヽ、聞えた。こりや、いろはと、こなさんが相對で、あの刀を取らうばかりに、おれに腹を立てさするも、矢ッ張りつゞまる所は、おれが爲にするのか。エヽ、とつと、さうならさうと、打割つて云うて下さんせや、コレ、氣が揉めるわい／＼。

傳七　ホヽ、癇癪で來るところを、思ひ直して、尻へ手を廻した思案は、きついものぢやが、とんとさうぢやないぞよ。心から、底から、いろはは玉が返つてあるぞよ。

新助　そんなら、アノ

ト二階へ行かうとして、氣を替へ

エ、、阿房らしい。高が玉の返つた女郎の事。こんなせりふは後へ廻し、何よりかより、大事の刀屋。武右衛門めに逢うて、この證文の事。

ト門口へ出ようとする。

武右　新助待て。武右衛門は爰に居るワ。

ト武右衛門出る。

新助　武右衛門、われに逢ひたかつたわい。ソリヤ、百五十兩の證文、なんと見たか。しつかりと判は捺してあるぞよ。

武右　その證文、どうしてわれの手に入つた。

新助　この證文ゆゑに、新助は人中で、打ち打擲しられるやら、まだ／＼口惜しい事の有り條。その禮は今、爰で云ふ。腰骨擦つて待つて居やんせ。

武右　昨日も昨日で、金の事、證文が内にあると云うたゆゑ、内へ行ても、證文はないぢやないか。それに又、證文とは合點がゆかぬ。ドレ、見ようか。

新助　オ、、見せるぞよ。

武右　ハテ、大方こりや、われが仕事であらうぞい。

新助　しかも、われが直筆で、おれにお越したこの證文。

武右　ドレ。

ト取らうとする。

新助　なんと、動きはとれまいがな。

傳七　新助、その證文、おれにおこしや。

新助　ヤア。

傳七　ハテ、大事ない。常から兄弟同樣にするこの初花、わが身の顔の立たんやうな事してよいものか。その證文で金取返し、われが顔、立ちさへすりやよいぢやないか。

新助　イヤ、合點がゆかぬ。いろはとおれが仲の事は引請け、世話してくれるこなたが、ありやなんぢや。イ、ヤイノ、いろはと侍ひとは寐て居るぞや。おれが目の前で、あんな事さして、これぱかりでもおれが顔は立たぬぞや。それを知つて居ながら、なんとも云はぬこなさんの心。滅多にこの證文は渡されぬ。

傳七　サア、それは段々譯のある事。

ト武右衛門と顔見合して

イヤサ、われが男を立てさへすりや、よいぢやないか。

武右　初花、それでは先刻の約束が。

傳七　サア、役に立つか立たぬか。あの證文、おれが方へ預かつて

トこなたに遣るといふ仕方する。武右衛門、よしと呑み込む。

サア、新助、何事も初花が呑み込んで、マア、おれに任して、腹の立つ事、サア、爰に居ると、ムシヤクシヤと腹の立つ事だらけ。マア／＼、その證文おれに預けて、早う内へ去にや／＼。

新助　人に知られた初花どの、穢いせりふせう筈もなし、殊に、いろはがあの體裁、こりやなんぞ入組んだ樣子のありさうな事……ようごんす。そんならこの證文は、こなさんに預けて、おりやマア内へ去にやんせうが、半次郎さまのお國から、斯う云ふ状が來たに依つて、コレ、急になつた。傳七どん、必らずともに頼みますぞや。

傳七　サア／＼、よい、合點ぢや。證文渡して、早う去にや。去にや。

新助　コリヤ、武右衛門、われへの禮はキッとあれど、傳七どの、詞を立て、今は云はん。重ねてキッと、お見舞ひ申す。覺えて居よ。ソレ、傳七どの、證文渡す。

ト傳七に渡す。向うバタ／＼にて半次郎、出て來て、内へ入る。

半次　オ、、新助そこか。

新助　オ、、半次郎さま、仰山な。なんでござりますぞ。

半次　なんぢやどころか、急になつて來たわいの／＼。さうして、あの刀は取戻してたもつたかや。

新助　サア、その刀は、もう追ッつけ持つて參りまする。いま暫らくお待ちなされませ。

半次　コレイナウ、其やうに隙取つては、國の樣子が心元ない。殊に明け六ッには乘船すると云うて、川口に使ひの者が待つて居る。それに、今に刀は手に入らず、もしこの刀が間違うては、親仁さまは元より、お世話になつた三右衛門どのも、身の上ぢやわいなう。

新助　サア、私しもその事で、氣を揉んで居りまする。

半次　さうして、そこに武右衛門どのも居てぢやが、早う金を返して、刀を取つてたもらぬかいなう。

武右　エ、、又しても金々と、なんぞおれが新助に、金でも借つて居るものかなんぞのやうに吐かすわい。アタやかましい。

半次　コレ新助、武右衛門どのゝやうに云はつしやると、矢ッ張り金は借らんやうの口振り。コレ、先刻の證文渡して、早う金を取戻してたも。

新助　サア／＼、よろしうござりまする。烏はカア／＼云

ふものでござりまする。證文出しますると、途中の噂も上がりませぬ。マア〳〵、お待ちなされませ。イヤコレ、傳七どの、若旦那がきつう氣を急いてござる。今の證文、武右衞門どのに渡して下され。マア〳〵、金のせりふからしまひやんせう。

傳七　イヤ、新助、そりやア何云ふのぢや。折角此方へ取つた證文、うま〳〵われに遣つてよいものか。ナウ、枡武、

武右　さうとも〳〵。おれが立役めかしても、滅多に、フワとは乘らぬ新助。また貴樣が今のやうに、實事師でやつたので、ぽつかり嵌つたあの證文。味よう喰うた、あの面わい。ハヽヽヽ。

ト新助惘りして

新助　傳七どの、どうやら合點のゆかぬこの場の仕儀。

半次　常々新助とは、懇ろな初花どの。

新助　それに、手の裏返すやうな今の……こりやマア、なんの事ぢやぞい。

傳七　オヽ、われが胃の腑に落ちつくやうに、いま云うて聞かさう。高が斯うぢや。男づくで馴んだに依つて、千力が顏立てゝ、いろはを丈助さまの方へ身請けさせ、又この證文も、武右衞門の方へ渡し、われが貸した金を、砂にしてしまふぢや。なんと、ようしたものか。

新助　ムウ。そんならこれまで懇ろにしたは、表面の見せかけ。われは疾から根性が腐つてあるのぢやなア。エヽ、見違へた。根生ぢやなア。

ト傳七の胸倉取る。

傳七　痴者め、こりやア何をするのぢや。コリヤ、おのれは國から、ふらてんで、來た時から世話をして、今の刀屋へ養子にやり、刀屋新助と云はれるゝやうに、誰れがしたと思うて居るぞ。それになんぢや、一言の禮も云はず、述懷の有り條。エヽ、見ともない、爰放せ。

ト新助、無念のこなし。

エヽ、放しやがれと云ふのに。

ト腕を叩き落し

なんぢややら、おのれが甲斐性のない事を云はず、おれを恨む腑拔け玉。イカサマ、阿房であるぞ。

武右　コリヤ、ヤイ、人を恨む事はない。皆その身を恨んで居たがよいわい。われがやうに、騙り事をしたり、引ツかけたり、そんな奴は、どうで疊の上では、えゝ死ぬまい。野垂れ死するであらう。アヽ、可哀さうな奴。

ト新助、無念のこなし。半次郎、キッとなり

半次　さうぢや。

　ト腹切らうとするを、新助とめる。

新助　半次郎さま、なんとなされまする。

半次　なんとするとは新助。エヽ、其方に聞えぬぞや。疾から頼んだ刀の事、よい〳〵と請合つて置きながら、いろはが事ばかりに凝つて居て、刀の事は上の空、所詮刀は手に入るまい。さすれば親人の大恩ある、三右衛門どのも切腹。それを知りつゝ、わしがマア、どう生きて居られうぞ。殺さしてたも〳〵。

新助　マア〳〵、お待ちなされませ。お前様を殺すまいと思うて、いろ〳〵と氣を揉んで居りますが、お前様の目には見えませぬか。サア〳〵、金はござります。ハイ、外に金の心當りはござります。例へ證文がなうても、金さへあれば刀は手に入る道理。サア、金があつても、刀を取戻しても、お前、死なしやりまするか。

半次　なんのマア。さうして、その金の心當りとは。

新助　イヤサ、その心當りは……サ、オヽ、ナニ、それそれ、いろはが客先で、詞述べると申しておこしましたに依つて、もう其方から、追ッつけ來るでござりませう。

半次　エヽ、何云やるぞいなう。いろはは心が變つて、侍ひの方へ身請けしられるぢやないかいなう。

新助　なんのお前、ありや嘘でござります。ハイ、女郎は客と寐るが勤め。誠を立てるは、たつた一人。

傳七　イヽヤ、その一人は、おれぢやと思うたら當が違ふ。オヽ、いろはは玉が腐つてあるぞよ。

新助　ヤア。

　ト傳七、二階の障子を明ける。屏風に、いろはと丈助の帯かけてある。

傳七　得心なうてあのやうに、帯紐解いて抱かれて寐やうか。

　ト新助キッとなる。半次郎を見て氣を替へる。

半次　あのやうな水臭い女郎の事を、矢ッ張りわが身は思うて居やるか。エヽ、おりや見て居ても腹が立つてならぬ。なんの、あのやうな氣ぢやもの、わが身に入れる金の事、なんとして〳〵。

新助　エヽ、これはしたり短氣な。見てござつてさへ、お腹の立つこの場の仕儀。その本人の私しが、ヂッと堪えて居る胸のうち、どのやうにあらうと、思うて下されます。サア、ようござります。モウ〳〵、いろはが方は當

には致しませぬ。證文を取戻して、武右衛門が手から金
取つてお目にかけませう。
武右　まだ證文のせりふかい。エヽ、久しいものぢや。
新助　初花、ちよつと逢はうかい。
傳七　アノ、おれにか。
新助　暇はとらぬ。ちよつと爰まで。
　ト傳七、こなしあつて向うへ出て
傳七　なんの用ぢや。
　ト新助、脇差を抜き
新助　こりやコレ昨日徳庵で、互ひに取交した二人の魂ひ
　ぢやぞよ。
傳七　如何にも、元々へ取戻さう。
　ト取替へる。
新助　傳七、懇ろは、これぎりぢやぞよ。
傳七　ハテ、さうかいやい。
新助　これまではいかい世話。
傳七　イヤ、そりや互ひぢや。
新助　この後、新助を世話したなどゝ、大きな事云ふなよ。
　サア、出せ。
傳七　そりやア何を

新助　われが取つた百五十兩の證文、いざこざなしに出し
　てしまへえ。
武右　コリヤ〳〵初花、その證文遣つたら、物云ひぢやぞ
　よ。
傳七　氣遣ひさんすな。おれが手へ入つた物、滅多に渡し
　てよいものか。
新助　オヽ、渡さにやア、おれが斯うして取る。
　ト立ち上がり、傳七が懐中の證文を新助出す。立廻り
　のうち、武右衛門ちよつと取り破る。
　ヤアその證文を。
武右　破つたが、なんぢや。證文々々と、アタやかましい。
　これでさつぱりした。
傳七　エヽ、破らいでも大事ない事を、短氣な事さんした
　なう。
新助　あの證文がなければ、金の蔓は切れ果てた。所詮刀
　は手に入らず、ハア、もうこれまでぢや。
　ト血相して、武右衛門に切つてかゝる。兩人立廻りに
　なる。おさと、おさき走り出て留める。
さと　コレ　マア〳〵待たしやんせ。新助さん、何かの樣
　子は皆聞きました。マア〳〵、待たしやんせ。お二人な

から此方のお客、どちらに怪我があつても悪い。マアマ
ア待つて下さんせ。
新助　やられたい程、やられた上、義理で搦んだ金で取戻
したあの證文、それまでを、あの通りにしられて、男が
立たぬ、顔が立たぬ、爰、放せ〳〵。
さき　コレ申し、お前の身にもしもの事があつたら、姉さ
んが、なんとさしやんせうぞいなア。
新助　ヤア、こなたは。
さと　今日この内へ入込んだ新造。
さき　父さんと相談して、悲しい勤め奉公も、姉さんやお
前の爲。
新助　ヤ、、、エ、。
ト無念のこなし。傳七を見てぎしむ。
半次　コレ、こなた、短氣を出して刀の事、誰れが取り戻
してくれる。
新助　エ、。
半次　いろはが心は替るし
新助　アア、それぢやに依つて
ト行かうとする。おさき、半次郎とめる。
半次　おりやどうせうぞいなう。

ト取りつき泣く。新助、いろ〳〵腹立てる事あり、兩
人とめる。
さき　コレ、お前が短氣出しやしやんすと、姉さんも、わ
たしも。
ト死ぬるといふ事をして見せる。
さと　つい一筋や二筋に、義理の搦んだ身ぢやないぞえ。
新助　サア、そこを思うて居るに依つて。
トまた氣色する。
さと　コレイナア、新助さん、心を静めてとつくりと、堪
忍したらまた物は、さうかと云ふやうになる事は、これ
までなんぼうもある事ぢやわいなア。爰はわたしに打任
せ、マア、去なしやんしたら、よかりさうなものぢやぞ
え。
武右　コリヤ、人そばへすなよ。おれは逃げも走りもせぬ
程に、云ふ事があ　なら來い。エ、、爰な土甲斐性なし
めが、コレ
トおさと、おさき、半次郎。新助に云ふなと、仕顔す
る。
新助　エ、コレ、半次郎さまの事や、在所の親仁樣へ今日
の義理。その事を思はずば、うぬら此まゝでは。

武右　なんぢや〳〵。
新助　おさとどん、今云はしやんした堪忍を堪えたら、後では、さては、さうかとなり行くやうにと、サ、その一言で何も云はずに。
ト二階と傳七を見て
去ぬるぞよ。
ト新助、側にある杯を取り、二つに割り、おさとに見せて
二つに割つたこの杯、この半分で酒が飲まれるか。又この半分で酒が飲めるか。どちらで飲んだらよいなう。
ト半分をおさとの方へ突き出す。
さと　されば、そりやアどちらでも、飲めそむないものぢやぞえ。
新助　どうすれば飲めるか。この返事を、いろはめに問うて下んせ。
さと　サア、そこは漆で繼ぎ合したら、元の通りに飲めさうなものぢやぞえ。
新助　漆の奇妙で繼ぎ合せ、金粉を以て蒔繪を書けば、杯の疵も隱るゝ。サア、金粉を以て、ナア初花。爰で云はぬ、イヤサ、男を捨てゝ、新助は出て行くぞ。二つに割つた杯の返事をせいと、賣女めに渡して下んせ。
ト傳七を、キッと見て、また氣を替へ
半次郎さま、ござりませ。
ト半次郎を連れて入る。あと打寄り
傳七　なんと、武右衛門、どんなものぢや。
武右　イヤモウ、きついものぢや。貴樣が敵役での黑權、けうといものぢや。
傳七　なんぢややら、科もない杯を打ち割つて、それを、しほに去にをつた。なんと、きつい腰拔けぢやないかい。それにさうと、丈助さま、きついしつぼりぢや。サアサア、爰へ出やしやんせ〳〵。
武右　ほんに丈助さま、うまい〳〵。エヽ、恥かしい事はない。サア〳〵、爰へ〳〵。
ト丈助、寢卷の儘で、蒲團すつぼりかぶつて居る。いろはも思ひ入れにて出る。
丈助　イヤモウ、野良の新助が血相では、二階をさしてうせるかと、身共は、いろはが懷へ、ヂッと屈んで居つたてや。
武右　ハヽヽヽ。時に丈助さま、傳七がきつい世話でござりました。この禮は、キッと仰しやらねばなりませぬぞ

え。
傳七　イヤ、そのお禮は、先刻に云うた刀の折紙。
丈助　そりやア爰に持つて居る。いつなりとも、刀と引替へ。
傳七　サア、その刀は百五十兩の證文で、武右衛門が買ひます。
武右　ア、イヤ〳〵、コレ〳〵傳七、その證文、今おれが破つてしまうたが。
傳七　コレ、貴樣が破つたは似せ物。誠の證文は、これに座します。
ト懷より出す。武右衛門見て
武右　ほんに、こりやア、おれが書いた百五十兩の證文。こりや、なんの事。
傳七　サア、この證文は百五十兩の爲替も同然。四の五のなしに、その刀、おれに賣らんか。
武右　それでも、これは。
傳七　不得心なら魂ひ入れ替へて、あの新助が腰押して、金のせりふにかゝらうか。
武右　えゝサ、よいわいなう。折角砂にしたこの證文、また物云ふとは、こりやアなんの事ぢや。エゝ、いま〳〵しい。
さと　サア、これからは奧へ行つて、わつさりと、どなたも、一つ上がらんか。おさき、其方もおぢや。コレ、いろは、半分の杯、ソレ、割つたぞや。
丈助　サア、傳七、いろはも來い。
いろ　マア、先へ行かしやんせ。
傳七　そんなら今云うた、折紙もその刀も。
武右　奧で貴樣に渡さうわい。
さと　サア〳〵行かしやんせ。
ト唄になり皆々入る。いろは一人殘り、半分の杯を見て
いろ　新助さん、よう堪忍して下さんしたなア。
トしめやかなる唄になり、いろは、手水鉢にかゝり、嗽ひしたり、着物振うたり、いろ〳〵仕打ちあるべし。よき所にて、新助、花道より出る。矢張り唄のうちなり。
新助　寒山寺の八ツ打つまでに、刀をキッと取返しますると、請合つて、半次郎さまは慰めて置いたが、所詮手に入らぬあの刀。おのれ傳七め、待つて居れよ。
ト云ひ〳〵本舞臺へ來る。いろは、鏡臺を出し剃刀で

死なうと云ふ心にて、紙に包み、こなし。

いろ　新助さん、この杯の返事をせいとは、さぞ腹が立つたでござんせう。わたしが心は。

ト丈助、二階より覗く。鏡に映る。いろは、恟りして表を見、新助と顔見合せ

ハテ、思ひがけない。

新助　いろは。

いろ　新助さん……いつの間にござんした。

新助　先刻にから爰にゐたが、わが身、剃刀出して死ぬる氣か。

いろ　エヽ…………イエ。

新助　イヤ、さうであらう。常の氣に似合はぬ先刻の體裁。なんでも様子があらうと思うて、おりや差向ひに逢ひに來た。先刻は、よう丈助と寐てくれたなア。

いろ　オヽ、わたしやなんにもお前に、譽めてもらふ筈はないわいなア。

新助　イヤ、譽めにやアならぬ。わが身がその志しを思へば、ほんに〳〵、男のおれは及びたえた事ぢや。よう最前の辛抱してくれたなう。

いろ　なんの事ぢやぞいなア。

新助　イヤモウ、女子の貞女といふはそれぢや。悪う思うたら、おれが體に罰があたるぞいなう。

いろ　それはマア、なんの事ぢやぞいなア。

新助　なんの事とは……ア、こりやア其やうに云ふのは少し自慢心ぢやなア。半次郎さまに無ければならぬ大事の刀、その刀を取らうにも金はなし、あの丈助が惚れて居るを幸ひに、わたしや新助さんが嫌になつた、どうぞ世話して下さんせ、如何にも世話せうと云ふ所を捕まへて、そんならこれ程お金がいるが下さんすか、ハテ女房にさへなる氣なら、遣らいで、なんとせうと、その金を取つて、刀を半次郎さまへやれば、心底は届く道理。それでも顔が立たずば、自害するか、首縊るか、身を投げるか、命さへ捨てたらよからうと、高を括つて、先刻のやうに、おれの目の前で寐たといふものは、心底と云はうか、誠と云はうか。いろは、忝ないぞや〳〵〳〵。

トいろは、右のせりふのうち、丈助の方を見て、いろいろ心遣ひあり

いろ　コレイナア〳〵、新助さん、なんぢやぞいなア。人の心も知らいで、エヽ、わたしやアそんな事、知らぬわいなア。

新助　コレ、もうよいわいなう。誰れも人は居やアせぬわい。わが身と差向ひぢや。コレ〳〵、エヽ、まだ誰れぞに見せるものがあるのかいなう。
いろ　イヽエ、誰れにもして見せるものはないが、新助さん、先刻のやうに、わたしが丈助さんと寐て居たのを、眞實ぢやと思うてか。但し嘘ぢやと思はんすか。お前の目から、なんと見えるえ。
新助　ハアテナア。
　ト思案して
眞實と見たら、おれがわが身になんで、此やうに云はうぞいなう。
いろ　人の心は上から見えぬものぢやなア。お前ほどの人さんぢやが、わたしが心は見えしやんせぬなア。
新助　サア、おれも心はぎつつくに依つて、今のやうに問ひかけたのぢや……そんなら眞實、緣切る氣か。
いろ　ハテ、さうでなうて、なんとせうぞいなア。
　ト新助、氣色して
新助　イヽヤ、そりやア嘘ぢやあろ。
いろ　何が嘘ぢやえ。
新助　これまでのわが身の心底、大抵の事かいのう。
いろ　でも、嫌になつたら、せう事がござんせぬ。
新助　そんなら、眞實緣切る心ぢやなア。
いろ　丈助さんの方へ行くわいなア。
新助　金があると云ふのか。
いろ　ハイ、わたしや術ない暮らしする事は、嫌でござんす。
新助　誓言で聞かう。
いろ　死なしやんした父さんや母さんを
新助　無限奈落、
いろ　落さつしやつても……構やせんわいなア。
新助　そやりア、眞實ぢやな。
いろ　オヽ、くど。
新助　エヽ、うぬはなア。
　ト引き廻し、キッとなる。本吊り鐘。新助これを聞き、悔りして
ヤア〳〵〳〵、ありやア寒山寺の八ッの鐘。半次郎さまへ約束の刻限。エヽ。
丈助　出かしたいろは、ソレ、約束の物。
　ト丈助、折紙を、いろはへ抛つてやる。
新助　モウ、けたいぢや。

ト切りかける。丈助、枷になつて、新助にかゝる。

寄りやアがつたら死暴れだぞ。

ト立廻りになる。傳七出て留める。武右衛門出て、新助を支へる。丈助、逃げて入る。傳七新助立廻り。いろはを、ポンと切る。いろは、ウンと反る。おさと出て新助を留める。

さと　ア、、コレ〳〵、新さん、傳七さんの世話で、仁王三郎の刀、手に入つたわいな〳〵。

ト新助に突きつける事。新助、急いた心にて

新助　ヤア〳〵〳〵、ナ、なんと。

傳七　わりやア取らうとして居たなア。コリヤ、とつくりと見い。仁王三郎の刀ぢやがゝ。

ト新助見て惘り〳〵、ヂッと目を据ゑ刀を見る。

新助　オ、、これは。

傳七　コリヤ、新助、これまでおれが憎かつたであらうがなア。

新助　傳七どん、こりやアマア、どうした譯ぢやぞいなう。

傳七　わが身が持つて居る刃物を見い。昨月取替へたおれが脇差。さういふ短氣が出やうかと、刃を引いて、おれが差いて居たりやこそ。

新助　ほんに、こりやア刃引きぢや。あんまり早まつて、いろはも、あそこへ切りつけたが。

傳七　コリヤ、短氣は損氣ぢや。ちつと嗜みやいなう。刀があつても折紙がなくては、正銘にはならん。その折紙を疵つけぬやうに取らうばかり、おれも憎い敵役をしたのぢや。ソレ、折紙は、いろはが持つて居る、早う取つて譽めてやつてたも。

新助　コレ、いろは、何かの譯は傳七どんに聞いた。して、その折紙はどこにある。

さと　コレ、いろは、氣を慥かに持ちや。死にはせんぞや死にはせんぞや。

いろ　新助さん、顏合すも恥かしい。いつそ殺して下さんせ。

ト泣く。

傳七　新助が人殺しになつたら、下手人にならねばならぬ。何かの事は後へ廻して、折紙を早う渡せ。

トいろは、折紙を、新助へ渡す。

新助　エ、、忝ない〳〵〳〵。出かした〳〵。これと云ふも三人の世話。忝ない〳〵。刀、折紙揃うた上は。

さと　一時も早う、半次郎さまへ。

新助　合點ぢや。

ト改め見て

ヤア〳〵、傳七どん、こりやア折紙ぢやないわいなう。

ト傳七も見て恟り。いろは、おさと、皆々ホイと息つぎ、バツタリと坐る。新助、思案して死なうとする。

傳七　コリヤ、待て。死ぬるに及ばぬ。すりや、折紙は丈助、武右衛門。

新助　ヤア。

傳七　イヤ、彼奴等にやられては、初花が男が立たぬばかりでない、わが身の大事……程は行くまい。ぽツ駈けて、折紙を。

ト行かうとする。新助とめて

新助　イヤ、其方はやらぬ。この新助が二人を締め上げ、折紙を取り戻す。

傳七　イヤ、取り戻すは、この傳七。

新助　イヤ、その代り、何より頼むはこの刀に、半次郎さまの身の上。

傳七　成る程、承知した。そんなら、爰構はずと。

二人　それを云ふ間も道の後れ。

新助　傳七どん、頼みますぞえ。

傳七　新助、ちつとも早う。

新助　合點ぢや。

ト新助、足からげ、走り入る。おさと、奥へ入る。あと踊り三味線にて、返し。

向う黒幕、茶屋格子、掛け行燈。すべて裏手の模様。始終踊り三味線。丈助、武右衛門、花道に出て

丈助　ヤレ〳〵、危ない。すんでの事に首二つにならうとした。肝心の刀は新助めに。

武右　そりやア氣遣ひなされまするな。刀はあつちへ渡しても、折紙さへ持つてござれば、鰹かきも同然。して、慥かに持つてござりまするか。

丈助　最前、いろはめに渡したは似せ物。誠の折紙は爰に持つて居るが、千力に渡してくりやれ。

ト折紙を武右衛門へ渡す。

この上は、いろはは身が女房。

武右　めでたい〳〵。一つ打たませうかい。しやん〳〵。

ト手を打つ所へ、バタ〳〵にて。新助出て、武右衛門に行き當り、新助、兩人を引きつけて

市川米藏の煙草切り三吉

(傾城三拍子御參照)

新助　サア、四の五のいらぬ。うぬ、持つて居る折紙を、キリキリ此方へ渡せ。

丈助　否ぢや。正眞の刀を渡したさへ、いま〳〵しいもの、折紙渡してよいものか。

武右　マア、その刀、此方へ渡せ。

ト取りにかゝる。

新助　さう吐かしやア、いつそ手を突ツ込んで。

トこれより踊り三味線早める。三人、立廻りのうち、向うバタ〳〵にて、千力出て、その立廻りの中へ入る。皆々透かし見て

武丈　わりやア、千力か。

千力　お二人樣。

兩人　新助めを、殺らしてくれい。

千力　合點ぢや。

ト右四人立廻りのうちへ、武右衛門は逃げて入る。兩人を切り倒し、止めを刺す。この時、傳七、半次郎出て、新助に行きあたる。新助心得、切つてかゝり、よろしく立廻り、傳七、飛びのき、透かし見て

傳七　新助ぢやないか。

新助　傳七どんか。若旦那も御無事で。

ト兩人息つく。

傳七　二人の奴ばら、出つくはしたが、折紙渡さぬに依つて。殺らしたか。ホイ。して、折紙を持つて居るか

ト丈助の懷中を探し

新助　まんまと折紙は手に入つたれど、私しが身は人殺し。

傳七　ハテ、半次郎どのさへ歸參させなば、後はお上の御裁許次第。

半次　二品揃ふ上からは

新助　片時も早う船場へ。

傳七　めでたい〳〵。一先づこの場は、お立ち〳〵。

トこの見得よろしく　　ひやうし幕

鐘鳴今朝噂（終り）

櫻の幹に裝束をかけ奉る八幡の御誕生嬉し家老と局の諫言手際は采配の陣扇
おのづと廻る淀車瀬川にむれる千鳥の在所がたい行くては岩木當馬が無聲の忠臣

添

渡雁戀玉章　一幕

柳の梢に振袖をかけ奉る筑摩の御利益悲し家中と妻の讒言手利は葛籠の舞扇
自然と廻る鍋まつり瀧川つれて身は蛙聲丸目出度納むは松田十内が有聲の義臣

并

石川や濱の
　眞砂はつきるとも
世に戀草の
種は盡きまじ

弘化四年五月中村座所演番附

渡雁戀玉章——かりのたより

三浦家下館の場
裏町髪結床の場

役名——三浦兵部之助。愛妾、若草。腰元、玉章。村井傳八。平岡權之丞。駒田久馬。高木四郎太夫。醫者、養仙。下剃り、千吉。中間、目助。同、段助。髪結ひ、浮世伊之助實ハ松田主水。

本舞臺、四間中足、本緣附き。二重向う銀張り風雅なる襖、上手一間風雅なる手摺り附き。中二階、數寄屋障子、下手四つ目垣、梅の立ち樹、日覆あり、同じく吊り枝、後へ寄せて風雅なる枝折り門、すべて梅ヶ谷三浦家、下屋敷の體。舞臺上手へ寄り權之丞、袴着流し、手拭にて片襷をかけ、爼板へ鯛を載せ料り居る。久馬、傳八、同じ形、銀の燗風呂へ同じく燗德利を入れ、摺り鉢にて味噌を摺つて居る。ちり／＼の合ひ方、小太鼓の通り神樂にて幕明く。

權之　コレ、傳八どの、しつかり味噌を摺らつしやい。それそれ、摺り鉢が逃げ歩いて、そこら中が味噌だらけになります。

久馬　イヤモ、手前共は摺りますが、味噌といふ物は、さて／＼摺り惜いものだ。傳八どのは一番樂な役でござる。

傳八　イヤ、左やう仰せられな。この燗番といふものは、いつも同じ加減にするは、なか／＼骨が折れまする……料理人の權之丞どの、鯛はもう出來ましたか。

權之　只今出來ます。片身は刺身、目玉は潮の吸ひ物、御前樣の御趣向の、阿彌陀の光り、一番落ちを取らねばならぬて。

傳八　御前樣と、お部屋の若草さまは買ひ物の方。お歸りに間もござるまい。

久馬　御前樣にはこの程より、御所勞と云ひ立て、このお館へ御逗留にて、晝夜の御酒宴、我れ／＼どもまでよい慰み。

權之　母屋のお腰元若草さまを御執心にて、お部屋に遊は

されたれども、若草どのは如何の事にか、御前樣のお心に隨はぬゆゑ、このお屋敷へお連れあつて、手を替へ品を替へ、お口說きなされど、得心せぬ片意地者。それゆゑ未だ御披露もなく、振り袖形のお部屋樣。

ト此うち久馬、向うを見て、

久馬　とかう云ふうち、アレ〳〵、向うから御前樣のお歸り。

傳八　然らば爰を片附けて、お出迎ひ致されい。

兩人　心得ました。

ト三人、舞臺を片づけ出迎ふ。花やかなる唄、小太鼓の神樂、向うより九字齋、茶道の形、桃色の手拭を冠り兵部の大小を差して出る。次に兵部、派手なる羽織袴、殿の拵らへ、庭下駄にて綺麗なる提げ籠へ靑物を入れ、持つて出る。若草、振り袖衣裳、庭下駄にて、三升樽と通ひ持ち、重さうに持つて出る。玉章、腰元形、外に腰元四人、附き出る。

權之　これは御前樣、お部屋樣

三人　只今お歸りでござりますか。

兵部　コリヤ〳〵、皆の者、どうしたものぢや。今日一日は身共と若草は、中間役の買ひ物方。二人ながら今歸つたかと、斯やうに申せ〳〵。

若草　殿樣のお指圖にて、圖に當つた買ひ物役。持ちつけぬこの酒樽。重うて〳〵なりませぬわいなア。

九字　御茶道の九字齋が、殿樣代りのお客なれば、なんでも好きな物を腹一杯、食べないぢやアなりませぬ。

玉章　それに引替へ、お端下の玉章は、なんの因果か阿彌陀樣の圖に當り、今日一日何も食べられぬとは、因果な事ぢやぞいな。

腰一　わたしどもは仕合せと、九字齋どのゝお供役。

腰二　皆一同の

女皆　お客樣。

久馬　何は兎もあれ、御前樣には

兵部　まだ〳〵左やうに堅く申すか。

三人　サア〳〵、爰へ。

兵部　ネイ。

ト右の鳴り物にて、この人數、舞臺へ來る。

權之　サア〳〵、お客樣は、これへ〳〵。

九字　イヤ、有り難い〳〵。

ト九字齋、二重眞中へ住ふ。

久馬　サア、腰元衆もお客なれば、あそこへ行かつしやい

行かつしやい。

腰一　イエ〳〵、わたしどもより、御前様には

四人　先づ〳〵あれへ。

兵部　イヤ、身共は中間なれば、矢張り爰に居るのぢや。

若草　申し御前様、御趣向のお役目も濟みましたれば、いつもの通り御酒宴を、

玉章　こりやお部屋様の仰しやる通り、モウ〳〵、阿彌陀の光りは、これぎりがよろしうござりませう。

兵部　イカサマ、身共も中間の役に、がつかりと草臥れた。サア〳〵、酒に致せ〳〵。

女皆　畏まりました。

傳八　コレ〳〵九字齋どの、いつまでそこに居るのだ。此方へ下りたり〳〵。

九字　そんなら阿彌陀の光りは、もうしまひか。折角客になつて、旨い物を食はうと思つたら、これぢやア築地へ歸られない。

兵部　こりや九字齋めが、出かし居つたわい。

腰一　サア〳〵、御前様。

三人　あれへお越し遊ばされませ。

ト浮いた合ひ方になり、女形皆々、捨ぜりふにて二重に褥を敷き、兵部これへ、若草はこの上手、女形後へ住ふ。九字齋は大小を刀掛けへ掛けて、久馬と兩人にて奥より蒔繪の臺の物を持ち出る、傳八、燗風呂より銚子を出す。

權之　サア〳〵、御前、一獻召上がりませ。

兵部　オヽ、過分〳〵。サア、つぎやれ。

ト兵部、杯を取る。女形、酌をする。

コリヤ、若草、なぜ其やうに浮かぬ顔を致し居る。機嫌を直して一つ飲みやれ。

若草　有り難うは存じますが、常から御酒は不調法、殊に今日は氣合ひが惡うござりますれば、お宥しなされて下さりませ。

ト浮かぬ顔をして居る。

兵部　その浮かぬ其方が機嫌、取らう爲に今日の趣向。三浦兵部ともあらうものが、中間小者の學びまで致す、身共が心を推量いたせ。コレ若草、其方はつれない者ぢやぞよ。

若草　其やうに仰しやる程、わたしは氣合ひが惡うござりますわいなア。

權之　これはしたり、若草どの、如何いたしたものでござ

る。御前がよく／＼に思し召せばこそ、御母公よりお貰ひ遊ばされ、辱なくもお部屋と敬ひ、このお－館にて日毎の御遊興。有り難い事と思はれ、御前樣のお心に、お隨ひなされいサ。

若草　ほんにわたしの心も知らず、お前までが同じやうに、捨てゝ置いて下さんせいな。

久馬　さて／＼片意地な事ばかり。こなた樣の心を浮かさうと、夜前にても我れ／＼どもが藝盡し。

傳八　侍ひたるべき者が、藝者どもが致す遊び藝。これも忠義の端でござる。

玉章　ほんに皆さんの隱し藝、誠に／＼感心ぢやわいなア。

腰一　中にも權之丞さまの三味線は、きついものでござります。

腰二　また久馬さまの棚の達磨の振り事。

腰三　傳八さまはお聲がよいゆゑ、一しほ端唄の面白さ。

腰四　それに九字齋どのゝ、芝居物眞似の聲色や。

玉章　面白いやら、をかしいやら、お腹の皮を撚りましたわいなア。

權之　それでは褒めるのかと思へば、我れ／＼どもが藝といふを、惡く申すのだな。

腰一　イエ／＼、面白い事でござりまするわいなア。

四人　若草さま。

若草　ほんに、わたしゆゑに皆さんのお心遣ひ。お嬉しうござりまする。

玉章　そりや御機嫌が直りましたわいなア。

權之　サア、御前、一獻召上がりませ。

兵部　イヤ、若草が側に居らねば、酒が旨うない。若草を爰へ呼びやれ。

腰一　若草さま、御前のお側へお出でなされませ。

ト これにて若草、不承々々に立ち上がる。

皆々　サア／＼、早う／＼。

兵部　これへ參れ／＼。

ト 若草、是非なく兵部の側へ住ふ。

この杯を其方に遣はす程に、一つ飲んで誰れなりと、これに居る者のうちに、其方が氣に入つた者に合ひをさせい／＼。

ト 若草へ杯を遣る。

若草　左やうなら、わたしが氣に入つた者に、合ひをさせいと仰しやりまするか。

兵部　オヽ、勝手に致せ／＼。

玉章　サア〳〵、御前さまのお許し。わたしがお酌を致しませう。
ト酌をする。
若草　この杯の合ひを頼むは、
ト見廻す。
女皆　どなたでござりませうな。
久馬　差詰めこの久馬でござるかな。
ト手を出さうとする。
若草　お前ではござりませぬ。
久馬　ホイ、しまつた。
傳八　然らば、この傳八かな。
若草　エ、モ、嫌ぢやわいなア。
傳八　ハテ、惡い請けぢや。
兵部　そんなら、あれに居る權之丞か。
若草　イエ〳〵、あのお方は嫌ひでござりまする。
權之　エ、愛想のない。
トむつとする。
兵部　コリヤ〳〵扣へて居らぬか。
九字　左やうなら、この九字齋ではどうでござりまする。
若草　イエ〳〵、お前でもござんせぬ。斯う見渡した合ひの杯、毎日顔を見て居るお方ばかり、どうしたらよからうぞいなア。
腰一　お待ち遊ばせ。誰れぞ顔の替つたお方が。
腰二　左やうでござります。珍らしいお方が。
四人　有りさうなものでござります。
ト腰元三、思ひ入れあつて
腰三　モシ、ござりますぞえ〳〵。
四人　誰れさんでござりますえ。
腰三　誰れと云うたら、このお下屋敷の裏手に居る、髮結ひどのはどうでござりませう。
玉章　ほんに、裏手のあの浮世床の髮結ひどのは、わたしや大好きぢやわいなア、
腰四　そんなら爰へ呼んで、お合ひさせては如何でござりませう。
若草　ほんに、裏手の髮結どのに致さうかいな。
兵部　なに、裏手の髮結ひとは、
若草　あの亭座敷から見えまする、髮結ひ床の事でござりまする。
兵部　その髮結ひに、其方どうして近附いた。
若草　どう致しまして、近附いたではござりませぬが、こ

の杯の合ひの仕手がござりませぬゆゑ、その髪結ひがよからうと存じまして。

男三　ハテ、變つた所へ杯が參るな。

兵部　イヤ／＼、こりや時の興によからう。呼びに遣はせ遣はせ。

權之　ソレ、お許しが出た。呼びにやらつしやれ。

玉章　ハイ／＼。左やうなら、わたしが呼んで參りませう。

皆々　サア／＼、早く／＼。

ト右の合ひ方にて玉章庭下駄にて、下の枝折り門へ入る。

權之　あの髪結ひめは日頃から、生白けたしやツ面が氣に喰はぬ。今にもこれへ參つたなら、寄つてかかつて慰みもの。

久馬　大名の座敷へ、賤しい髪結ひめを呼び出し、杯の合ひをさせるとは、神武この方ない趣向。

傳八　流石は粹の御前樣、若草どのゝ好み次第になさるとは、寛仁大度のお心、恐れ入りましてござりまする。

權之　併し、髪結ひめは、もう參りさうなもの。

兩人　さて／＼暇のいる事でござる。

ト下の方にて

玉章　サア／＼、早うござんせいなア。

ト變つた合ひ方、枝折り門より伊之助、着流し、髪結ひの拵らへ、わげ棒を頭へ挿し、手を拭きながら、玉章附いて出て來り

申し、髪結ひどのを、連れて參りましてござりまする。

ト皆々見て

權之　ヤイ髪結ひ、御前樣が御用がある。

兩人　それ／＼、出ませい／＼。

ト伊之助、思ひ入れ

伊之　ヘイ／＼、私しが只今仕事をして居りましたところあのお方が、お部屋樣のお召しぢや、早う來い／＼と、引ツ張つてお出でなされましたが、なんの御用でござりまする。

權之　なんの御用か、只今解る事だ。

女皆　もそつと向うへ、出やしやんせいなア。

ト玉章、前へ出す。若草は伊之助へ見惚れる思ひ入れ。伊之助、兵部の顏を見て思ひ入れ

伊之　ヘイ、これはあなた樣が、お殿樣でござりまするか。

何事の御用か存じませぬが、見る影もない髪結ひ、何事
も御免なされて下さりませ。
兵部　コリヤ／＼髪結ひ、何も恐れる事はない。只今この
席にて酒宴の相手に、其方を呼び出したのだ。
伊之　なんと仰しやりまする。お歴々樣方のお酒の御相手
を、わたしにせいと仰しやりますか。
權之　オヽサ、爰で縺れた杯、其方に合ひをさせるとあ
る、お部屋樣の思ひつき。
久馬　有り難い事だと三拜いたせ。
傳八　白癡、其方が名は何と申す。
伊之　ヘイ、私しは浮世床の伊之助と申しまする、賤しい
髪結ひでござります。
兵部　いや、下々といふものは、なか／＼氣輕なものぢや。
苦しうない、近う參れ……若草、あの者に杯を取らさぬ
か。
若草　ハイ。
ト杯を取つて
モシ、ついで下さんせ。
ト腰元一、酌をする。若草飲む。
モシ、そこなお人、お慮外ながら、上げますぞえ。

伊之　左やうなら、私しにお杯を
兵部　身共が取次いで遣はさう。
若草　それは餘り憚りで。
兵部　エヽ、よいと申すに
ト杯を引取り
コリヤ、杯を取らせる。一つ飲め／＼。
ト伊之助へ杯を抛つて遣る。
伊之　ヘイ／＼、左やうなら、あなたがお部屋樣でござり
ますか。有り難うございますが、私しは御酒は一向下さ
りませぬ、お杯ばかり頂きませう。
權之　コリヤ、髪結ひ、折角お部屋樣が下されたお杯。
兩人　サア、一つ飲め／＼。
玉章　ドレ、わたしがお酌をしようわいなア。
ト酌をする。
伊之　アヽモシ、どうぞ少しお注ぎ下さりませ。
ト一つ受けて、やう／＼飲み思ひ入れ。
權之　誰れなりと其方、見立てゝ獻せ／＼。
伊之　ヘイ／＼、左やうなら、あなた樣へ。
ト兵部の方へ出す。
久馬　コリヤ、下司め、勿體至極もない。

傳八　御前へ對し、不作法者め。
兵部　イヤ〳〵、苦しうない。献せ〳〵。併し、その杯は
　餘り小さい。
　ト杯すましの錫の鉢の水を明け
　サアこれで呑んで、身共へ献せ〳〵。
伊之　どう致しまして、其やうな物で。
權之　コリヤ、御前の御意を反くか。
伊之　左やうではござりませぬが。
傳八　然らば一つ呑め。
　ト鉢を伊之助の前へ置く。
久馬　身共が注いでやらう。
伊之　左やうなら、どうぞ少し下さりませ。
　ト鉢を取る。久馬、無理に注ぐ。
　アモシ、滅相界な。どうしてマア、これが呑まれますも
　のか。
兵部　コリヤ髪結ひ、呑まれずば、身共が助けて遣はさう。
伊之　それでは餘り畏れ多うござります。
兵部　苦しうない、これへ出せ〳〵。
　ト久馬、取次ぐ。兵部、鉢を取る。一口呑み、後へ唾
　を吐き込み

　サア、後を呑め。
　ト出す。若草、思ひ入れ。
若草　アヽモシ、それはあんまり。
兵部　何があんまり。大名の呑みかけ、有り難いと三拜し
　て、これを喰へ。
　ト鉢を伊之助へ打ちつける。若草、恟り思ひ入れ。玉
　章、拭いてやる。
權之　ヤイ、下司野郎め。御前のおつけなされた杯を、な
　ぜ打明けた。
伊之　どう致しまして、私しが。
三人　サア、改めて、一つ呑め〳〵。
伊之　あなた方、それは御無體と申すもの。生得酒は嫌ひ
　でござりますが、畏れ多い殿樣の　召にあづかりまして
　お部屋樣のお杯ゆゑ、一つ頂戴いたしました。モウ〳〵、
　どうぞ御免なされて下さりませ。その上、まだ仕事も仕
　掛けて、お客樣方が待つて居りますれば、どうぞお暇を
　お願ひ申します。
　ト立たうとする。久馬留めて
久馬　イヤ〳〵、御前樣からお暇の出ぬうちは、歸す事は
　罷りならぬ。

傳八　賤しい町人の身で、御大身のお屋敷へ召され、お杯頂戴するは、願うても出來ぬ事だ。
伊之　左やうなら、仕事を片附けて、また參りませう。
權之　イヤ〱、その杯の納まりの附かぬうちは、歸す事は罷りならぬ。改めて、一つ飲め〱。
ト此うち若草、思ひ入れ
若草　ア、モシ、皆さん、酒は呑まぬと云ふ人を、無體にせずと、もう堪忍してやらしやんせ。
玉章　左やうでござります。若草さまが、お杯の相を願ふと仰しやつたが、今では氣の毒。
若草　もう歸して上げて下さんせいなア。
三人　イヤ〱、どうあつても歸す事は、ならぬ〱。
兵部　コリヤ〱皆の者、若草が歸せと云はば、歸してやりやれ。
三人　おやと申しまして。
兵部　ハテサテ、若草が、氣に合うたやうに致せ〱。
權之　コリヤ、髮結ひ、お暇が出た。
三人　早く歸れ〱。
伊之　そんなら、もう御免なされて下さりますか。エヽ、有り難うござります……左やうなら殿樣、お暇をいたします……それにお出でなされますお部屋樣。
ト若草、チッと顏を見る　伊之助も若草を見て、思ひ入れあつて
へイ、お暇申します。
ト唄になり、伊之助思ひ入れあつて下手の門へ入る。若草、あと見送つて居る。
權之　あの髮結ひを、もつとひどい目に逢はさうと思つたに。
兩人　惜しい事を致しました。
兵部　ハテ、もうよい。捨て置け〱
ト若草、矢張り後を見送つて見る。兵部、目を附けて
コレ若草……コリヤ、若草。
トきつと云ふ。若草、惆り。
若草　仰山な、何事でござりますえ。
兵部　そちや今の髮結ひに氣があるか。
若草　エ……ホヽヽヽ。思ひがけない。あのやうな賤しい者に。
兵部　イヤ、氣がある〱。氣のある證據は、あの髮結ひめが歸つた後を、眺めて居つたではないか。
若草　イエ〱、どう致しまして、そんな心はござりませ

ぬわいなア。
權之　イヤ／＼、若草どの、こなた樣があの髮結ひめに氣のある證據は、いつでもあの亭座敷から、嫌らしい目遣ひで、髮結ひ床を見てござるであらうがな。
若草　お前までが同じやうに。あの亭座敷は眺めがよいゆゑ。それを名立てがましう、意地の惡い事ばかり、
兵部　イヤ／＼、身共を嫌ひ、あの髮結ひめに氣のある樣子。疾から睨んで置いた。
若草　そんなら、あなたのお心に隨はぬゆゑ、あの髮結ひに心があると、仰しやるのでござりますか。
兵部　知れた事。それゆゑ寵愛いたす身共に、帶紐解かぬではないか。
若草　そりや御前樣のお眼鏡が違うたわいなア。
權之　ナニ、御前のお目鏡が、
兩人　違つたとは。
若草　サア、この裏手に髮結ひ床のある事は、このお屋敷へ參つてから。あなたのお心に隨はぬは、お上屋敷に居る時からの事。心に染まねばいつまでも、お返事はなりませぬ。
兵部　そりや又、何が氣に入らぬ。
若草　ハイ、お大名が氣に入りませぬ。
兵部　ヤ。
若草　この身は賤しい町人の娘でも、心に染まぬ玉の輿の、お部屋樣、敬ひ傅かれるが恥かしさ。得心ならねば、金輪際、例へお手討にならうとも
兵部　身が心には隨はぬか。
若草　御免なされて下さりませ。
　トあちらを向く。兵部ムッとして
兵部　そう云やいつそ、
　ト刀を持ち、立ちかかる。この時、四郎太夫、奥より少し老けたる拵らへ、袴羽織、大小にて、ツカ／＼と出て、兵部を留める。
四郎　アイヤ、御前、暫らく。
　ト皆々、四郎太夫を見て
女皆　ヤア、あなたは御家老。
兵部　誠に其方は四郎太夫。
權之　思ひ寄らざるお越しと云ひ。
兵部　不屆きな女、手討に致すを、なぜ留める。
四郎　お留め申すは、こなた樣のお爲。
兵部　なんと申す。

四郎　コリヤ、腰元衆、若草どのを伴ひ、暫らく奥へ。

女皆　畏まりました。サア、若草さま。

若草　左やうなれば、四郎太夫さま。

兵部　ムウ。

ト立ちかかるを留めて

四郎　ハテ、ござれと云ふに。

若草　後刻お目もじ致しませう。

ト唄になり、若草先に皆々、玉章、九字齋附いて奥へ入る。この時、若草、扇を落して入る。兵部、思ひ入れ。

兵部　サア、皆の者、奥へ參れ。

三人　ハツ。

ト皆々奥へ行かうとする。

四郎　殿、お待ちなされい。何れも。待たつしやい。

兵部　四郎太夫、用事あるか。

權之　して、我れ〳〵どもへ。

兩人　御用向きでも。

四郎　ずんとある。暫らく扣へておいやれ。

三人　へエイ。

兵部　身共は奥へ

ト行かうとする。

四郎　イヤ殿、イヤサ馬鹿殿。この四郎太夫が幾度申し越せし事、お忘れあつたか。

兵部　また意見に參つたか。

四郎　如何にも。

兵部　聞く耳ないわえ。

トまた行かうとするを留めて

四郎　聞きたくなうても、申し上げねばならぬ。お下にござれ。コレサ殿、エヽ、お下にござれと申すに。

トきつと云ふ。兵部、トンと下に居る。四郎太夫、睨みつける。兵部、顏見合せ、兩人キッと思ひ入れ。誂らへの合ひ方。

エヽ、縱から見ても横から見ても、女にかゝると他愛のない大馬鹿殿……お氣に入りの何れも、先づ端に居る權之丞どの。

權之　へイ。

四郎　久馬どの。

久馬　へイ。

四郎　傳八どのぢやの。

傳八　傳八めでござる。

四郎　皆お揃ひで、他愛のない馬鹿侍ひ。
權之　ナニ、我れ〳〵を。
三人　馬鹿侍ひとは。
四郎　馬鹿侍ひであるまいか。これなる殿が腰元の若草に御執心にて、得心せぬ女子を、無理にお部屋とならせ、この下屋敷にて晝夜の遊興、お上屋敷へお歸りなく……コレ殿、よくお聞きなされ。鎌倉御所へ參勤なさらず、屋敷へお歸りなく……所勞と云ひ立て下屋敷に引籠り、遊里へ入込み、ものゝ條々痴け事とは思ひながら、未だ奥方とても定まらぬ御身ゆゑ、御前體を繕ろひ置くを、よい事と思ひ、餘り女に現を拔かして、もし本病にでもなつたら、どうしようと思はつしやる。お氣に入らぬ御意見を申すも、皆こなた樣を大切に存ずるから。密かに守り樣子を見れば、あの若草を無理口說き、得心せぬゆゑ手討にすると今の體裁。こなた樣は大名ぢやがや。あの女に限らず、優れた女を心任せにしようと、自由自在の身を以て、さりとは苦々しい……おてまへ達も、御意見の一つも申さず、踊り狂ふお側追從、揩かつせえ。もしこの事が鎌倉御所に聞えなば、如何やうのお咎めがあらんも計られず、御歸館あれと幾度使者を以て申し越すに、お歸りないゆゑ、今日は是非お供して罷り歸る。サア殿、直さま御歸館なされ。コレ……殿。エヽ、張合ひのないお人だなう。

ト苦り切つて云ふ。兵部、思ひ入れあつて

兵部　したり。誤まつた〳〵。コリヤ、三浦兵部、兩手を突く。過分なぞよ。
四郎　なんと仰しやる。
兵部　其方が只今の意見、ぞつこんこの身に沁み渡り、如何にもあの女を思ひ切り、上屋敷へ歸らうわえ。
四郎　すりや、只今拙者が申せし事、お聞濟みあつて
兵部　直さまこれより上屋敷へ。
四郎　イヤ、早呑み込み、合點參らぬ。そのお詞が實ならば、御誓言が承りたい。
兵部　すりや、疑念が晴れぬと申すか。
四郎　如何にも。
兵部　ムウ。

ト變つた合ひ方にて、兵部、小柄を拔き、刀にて金打する。

四郎　すりや、御前には、
兵部　只今の詞、虛言ないと云ふ武士の金打。

四郎　イヤ、お出かしなされた。それで拙者も安堵仕る。定めて何かと御用もあらん。拙者は暫らく休息仕り、後刻お供いたすでござらう……何れも、無禮無骨は老年だけと免し召されい……左やうならば御前、

兵部　四郎太夫、大儀。

四郎　ハツ。後刻御意得ませう。

ト唄になり、四郎太夫、思ひ入れあつて奥へ入る。皆々あと見送り

權之　御前樣、四郎太夫へ金打まで遊ばされしは。

久馬　いよ／＼若草どのを思ひ切り。

傳八　お上屋敷へ御歸館遊ばす。

三人　御所でございますか。

兵部　毛虫親仁めは、眞顔になつて金打したゆゑ、誠と心得喜び居つた。心憎きは若草め、あの髮結ひめに心をかけると、睨んだ眼に相違はないわえ。

久馬　最前の様子では、髮結ひめも心のある様子。

傳八　彼奴に吠え面かかせる、魂膽がありさうなものでござる。

ト權之丞、最前若草が落せし扇を見附け、思ひ入れ。

權之　モシ、御前、妙計がございます／＼。

兵部　ナニ、妙計があるとは。

權之　あの髮結ひめが所へ、若草どのの似せ文を遣つて、釣り寄せ、吠え面かかせると云ふ趣向にどうでござります。

兵部　こりや、なか／＼一興ぢや。早く文を書かせて、持たせてやれ／＼。

權之　幸ひ、爰に若草どのの自筆の扇。これを手本に似せ文を。

傳八　オツと、その似せ筆は身共が得手物。寸分違はぬやうに書きませう。

兵部　この儀、首尾よく致しなば、其方どもに褒美を遣はさう。サア、傳八、早く認めい。

傳八　心得ました。さらば似せ筆にかかりませう。

ト傳八、硯箱を持ち來り、扇を手本に文を書く。

久馬　して、このたびの使ひは、何者がようござらう。

權之　その儀も身共が所存がござる……モシ、畏れながら……。

ト兵部へ囁き

でござります。

兵部　オヽ、出かす／＼。計らへ／＼。

權之　まだその上の魂膽秘密。
兵部　どうぢや〳〵。
ト權之丞、兵部へ囁く。久馬は傳八が書くのを覗き見る、この見得、早めたる合ひ方、七ツの時計にて、この道具廻る。

本舞臺、うしろ一面の煉り塀。眞中二間の髮結ひ床よろしく飾りつけ、芝居の番附、寄席のびらなどを張り、入り口暖簾は吊り上げてあり、上手塀の内、一間の二階障子立てあり、下手、梅の立ち樹、用水桶。すべて梅ケ谷、髮結ひ床の體。床の中に伊之助以前の形、町人の髮を結うて居る。千吉、下剃りの形にて、醫者の髭を剃つて居る。さんげ〳〵にて道具とまる。

町人　モシ親方、根の弛いのは嫌ひだから、しつかりとやつてくんなせえ。
伊之　ハイ〳〵、この位でようござりますか。
町人　イヤ、上加減、奇妙でござります。
千吉　旦那、お前樣の髭は、ひどく強いから、暇がいります。
醫者　今日は病家も急がぬから、緩りと剃つて下さい。
ト此うち伊之助、結ひしまひ
伊之　ハイ、よろしうござります。
町人　アイ、これはお世話でござります。
千吉　ヘイ、お歸りなされませ。
ト町人は下手へ入る。
伊之　サア、旦那、こちらへお出でなされませ。
ト醫者こちらへ來り、伊之助、捻ぜりふにて、月代を剃る。右の鳴り物にて、下手より下男一人出て來り
下男　モシ、節の下の伊勢屋でござります。若い衆に來て、坊さんの月代を剃つて下さりませ。
伊之　ハイ〳〵、畏まりました。カウ、千吉や、てめえ行つて剃つて上げろ。
千吉　まだ伊勢屋の泣きツ子が。恐れるね。
伊之　そんな事を云はねえものだ。
千吉　そんなら、一緒に行きませう。
下男　大きに御苦勞だね。
ト右の鳴り物にて、千吉、砥石を手拭へ包み、町人に附いて、下手へ入る。上手より目助、中間の形、以前の女扇を持ち出て來り

目助　親方、空いて居るなら一つ束ねて下さい。

伊之　お前は三浦さまのお中間衆。直ぐでござります。お入んなせえ……モシ旦那、よろしうござります。

醫者　アイ、一服のんで行かう。

　ト醫者、腰をかけて煙草をのむ。

目助　サア、お前、濕しなさい。

伊之　そんなら顔からやらう。

　ト目助、件の扇を床几の上へ置き、顔を濕し、伊之助捨ぜりふにて髭を剃る、此うち醫者、件の扇を取つて見て

醫者　なんぢや……梅が香や人の心に春知らす。若草……ハテ、よい手蹟だ。

伊之　モシ、その扇は、どなたのでござります。

目助　その扇は、おらがのだ。

伊之　何か發句が書いてござりますね。

目助　それは、おらが殿樣のお部屋樣が、書かしつたのだ。先刻お庭口に落ちてあつたから、拾つて持つて來たのだ。

醫者　ハヽア、三浦さまのお部屋ならば、雪の下の若菜屋の娘だな。ハテ見事な手蹟だ。

　ト扇を、よき所へ置き

伊之助どの、世話でござつた。

伊之　ようお出でなされました。

　ト右に鳴り物にて、醫者、下手へ入る。上手より中間段助出て

段助　なんでも爰の床だらう。

　ト床を覗き、目助を見て

オイ、目助、爰に居たか／＼。

目助　オヽ、段助、なんだ／＼。

段助　てめえ旦那が呼んでござる。早く來い／＼。

目助　いま髮を結つて行く。ちつと待て。

段助　コレサ、急な用だ。早く來い／＼。

目助　いま直ぐだから、待てと云ふに。

段助　イヤサ、後で結へ。早く來い。

　ト段助、目助を無理に引ッ張つて上手へ入る。伊之助見送り

伊之　コレサ／＼、ちよつくら束ねて上げよう。オヽ、イオオイ……錢も置かずに行つてしまつた。また後で來るだらう……この頃は餘ッぽど日が長くなつた。ドレ、一服やらう。

ト四ツ竹の合ひ方。伊之助、件の扇を取つて
なんだ。梅が香や人の心に春知らす……若草……こりやア今の中間衆か、忘れて行つたのだ。この若草と云ふは腰元で居たを、殿樣がお部屋にして、この下屋敷へ連れて來てござるが、どうした事か、殿樣を嫌つて、抱かれて寐ないと、中間衆の話し。あのお妾が、毎日あの二階で方々眺めて居る時に、顏を見合せると、ニツコリ笑ひかゝるのは、自惚れか知らねえが、とうかおれに氣があるのかしらん。凡夫の淺ましさにあちらから妙な目附きをされると、あんまり惡くはないものだ。……イヤ〱、さうだ〱。今日あのおめかから呼びに來て、行つて見れば、おれに合ひをさせると云ふを、殿樣が腹を立つて寄つてかゝつて無理に酒を強ひた時、おれが顏をチツと見た目の中、どうもおつりきだわえ……この扇に書いた發句も、梅が香や人の心に春知らすと、心のあるを人に知らすと、梅の香の春を知らすに譬へた發句。手蹟と云ひ、器量と云ひ、おれが世にある時ならば、女房に持つも、まんざら釣合はねえ女でもねえなア。
ト右の扇を持ち、茫然と思ひ入れ。右の合ひ方にて、上手より、玉章出て來り、この樣子を聞いて居て、

玉章　申し、伊之助さん。
ト そつと袖を引く。
伊之　エヽ、お前は先刻の女中さん。
玉章　今お前さんが獨り言云つて居やしやんした戀の桟け橋、渡らぬ先に七種薺ぢやなけれども、お前にソツと渡してくれと、囃し立てられ、持つて來たわいな。
ト 懷中より文を出して見せる。伊之助、悸り、振り放して、床の中へ入らうとするを、留めて
玉章　これはしたり、ちよつと待たしやんせ。
伊之　イエ、モウ、どうぞ堪忍しておくんなせえ。
ト 逃げようとするを捕へて
玉章　コリヤ、最前は飲ましやんせぬ酒を、意地惡う勸めて、わたしが助けて上げたかつたわいな。今度はお部屋樣が内證で、人に云はれぬ大事の御用で、わたしが、正直者ゆゑ、ソツとお渡しなされたこのお文。モシ、お部屋樣が、お前に惚れておいでなされるわいな。
伊之　エ。
玉章　次にはわたしも……イエ、わたしは後廻しにして、最前の目遣ひ、お前は大概承知でござんせう。この文を、ちやつと見て、早う返事して下さんせいな。

伊之　エヽ。如何にお前方が慰みがないとて、人を嬲るも大概にしなせえ。
玉章　イエ〳〵、嬲るのぢやない。眞實ほんまぢやわいな。
伊之　例へ眞實でも、私しは心願があつて、色事は斷ちものでござります。
玉章　アレ、まだ矢ツ張り疑うて。わたしが命と釣替へのこの文ゝ返事を聞かねば云ひ譯がないわいな。
伊之　お前が云ひ譯ないのを、おれが知つた事かな。
玉章　イエ〳〵、是非とも逢さにやならぬわいな。
ト文を爭ふ。この時、上手よりの二階の内にて
玉章どの〳〵、若草さまが召しまする。玉章どの〳〵。
ト呼ぶ。
玉章　ハイ〳〵、只今參ります……コレイナア、玉の杯、緣の玉欄、たま〳〵賴む玉章が、願ひを叶へて、伊之助さん、默つて取つて下さんせ、なア。
ト無理に、伊之助の懷中へ文を入れる。
伊之　コレサ、おらア嫌だと云ふに。
ト戾さうとする。
玉章　エ、モ、知らんわいなア。

ト早き唄になり、玉章、文を打ちつけ、上手へツイと入る。伊之助、文を拾ひ
伊之　コレサ、これを持つて行つてくんな。オイ〳〵、もう行つてしまつたか。
ト見送つて、思ひ入れ、本釣り鐘。
ア、日が暮れるか。何にしろ、灯りをつけようか。
ト變つた合ひ方になり、伊之助、火打ち箱を出し、掛け行燈へ灯をつけ、件の文を見て
なんだ、浮さま參る、春の野より……春野に生える、こりやア若草の隱し詞。この間からの素振りと云ひ、あるまい事でもなし。マア、なんにしろ讀んで見よう。
ト文の封を切り、以前の扇に比べ見て
違ひなし〳〵……ナニ〳〵「思し召しの程も計り兼ね候へども、この程より御許さまを見初め、亂れ染めにし心の程は、其方樣にも御汲ませと押計り參らせ候ふ、兎角に思はぬ人に思はれ、氣強うも心の下紐解かぬ、この身を、口說かるゝ悲しさ、針の筵につらなる思ひ、暫しは憂さも忘れたく、折よく殿には追ツつけ上館へ、お歸りに候ふまゝ月の入りを合圖に、裏門口よりお忍び給はるべく候ふ、假初めの手枕に、千夜を一夜のお物語り致した

く、恥かしくは候へども、云はねば止み難き心の程、よきに御汲みわけ、くれ〴〵お忍びの程待ち入り參らせ候ふ、何事も御見の節と、惜しき筆留め參らせ候ふ……」
最前の目遣ひと云ひ、そんなら眞實アノおれに。ムウ。
ト文を見て思ひ入れ、この時、後口にて
侍ひ　お供揃ひ。
大勢　ハア、。
ト踠する。かすめて行列三重になる。伊之助・思ひ入れ。
伊之　この文にある通り、そんなら殿には、いよ〳〵上屋敷へ歸ると見える……こいつア飛んだ事になつて來た。……据ゑ膳を喰はねば男の恥。これから直ぐに裏門から。……併し、この形ぢやア油染みて居る、ドレ、ちよつと着物を。
ト提灯の蠟燭へ灯をともさうとして、誤まつて灯消える。時の鐘。
エ、、眞暗になつた。こいつア飛んだ粗相をしたわい。
ト火打ち箱を探す思ひ入れ。行列三重、時の鐘にて、この道具廻る。

本舞臺、元の座敷、前側障子たて切りあり。右の鳴り物にて道具とまる。と行列三重とまると、時の鐘、合ひ方にて、上下より、久馬、傳八、出て來り、思ひ入れあつて、小聲にて
久馬　傳八どのか。
傳八　久馬どのか。
久馬　コレ。
ト傳八へ囁く。
傳八　心得ました。
久馬　必らずともに、ぬからつしやるな。
鐘八　合點だ。
ト右の合ひ方、兩人囁き合ひ、二重の障子の内へ入る、時の鐘、靜かな合ひ方になり、下手の門より、伊之助、頰被りにて、窺ひ〳〵出て來り、思ひ入れあつて、小石を拾ひ、礫に打つと、障子の内、灯消える。伊之助、さてはと思ひ入れあつて、ソロ〳〵屋體の障子を明ける。左右に、久馬、傳八、木太刀を持ち、窺ひ居る。二重よき所に金盥、碁盤直しある。伊之助、探り〳〵二重へ上がり、金盥へ足を踏み込み、辷り倒れる。愕りして逃げるはずみに、碁盤にて足を打ち、

權之　ドッサリ下に居る。後より、權之丞、手燭を袖に隱し
出て、伊之助に突きつけ。

權之　何れも。狼藉者でござる〳〵。
ト伊之助悸り、逃げようとして、足の痛む思ひ入れに
て、舞臺へ飛び下りる。此うち、久馬、傳八、木太刀にて、伊
之助を打ち据ゑる。伊之助、悸りして

伊之　ア、モシ、私しは狼藉者ではございませぬ。お宥
しなされませ〳〵。

權之　狼藉でないとは野太い奴。

久馬　面を隱せし胡亂者め。

傳八　被り物を、取り居らう〳〵。
ト伊之助の手拭をとる。權之丞、手燭を出し、顏を見
て

權之　ヤ、わりやア最前の髮結ひだな。

久馬　何ゆゑあつて、面を隱して忍び込んだ。

傳八　定めて盜みをする心であらう。

三人　有體に、白狀いたせ〳〵。

伊之　ア、モシ、私しは盜みをするやうな者ではござり
ませぬ。御免下されませ〳〵。

權之　うぬ、盜みをせぬ者が、なんで座敷へ忍び込んだ。

伊之　サア、それは。

久馬　殊に面を隱したが胡亂の第一。

伊之　サア、それは。

傳八　盜賊に相違はあるまいが。

伊之　どう致しまして私しが。

久馬　但し、盜賊でないといふ云ひ譯あるか。

伊之　サア、それは。

皆々　サア〳〵〳〵。

兩人　キリ〳〵と白狀いたせ。
ト權之丞、伊之助の懷中より文の出かゝりしを見附け

權之　何れも、見さつしやれ。此奴めが懷中に、怪しい狀
を持つて居るわえ。
ト伊之助の懷中より文を引き出す。伊之助、それをト
思ひ入れ、權之丞、文を見て
さてこそ、この一通は、お部屋の若草どのゝ手蹟、殊に
これは嫌らしい濡れ文。さては若草どのと、密通いたし
居るな。

伊之　どう致しまして、そんな覺えはございませぬ。

權之　この上は、殿の御前で不義の成敗。

兩人　野郎め、覺悟。
ト伊之助を引ッ立てようとする。この以前より、四郎太夫、奥より出かゝり居て
四郎　何れも。待たつしやれ。
ト眞中へ出る。
權之　ヤ、あなたは御家老。
三人　四郎太夫どの。
四郎　先刻より殿のお立退き、暫らく睡眠いたし居つたが、何か物騷がしく、盜賊呼はり、何事でござる。
權之　イヤ〳〵、盜賊どころではござらぬ。此奴、大それた、不義者でござる。
四郎　して、この者は。
久馬　この裏町に居る、髮結ひでござりまする。
四郎　ナニ、髮結ひとな。して、不義の相手は。
傳八　相手は即ち、殿の御寵愛の若草どのでござる。
四郎　ナニ、お部屋とな……こりや後で吟味いたさねば相成らぬ。して、なんぞ證據でもござるか。
權之　慥かな證據は、お部屋より遣はされたるこの艷書。
四郎　その状、これへ。
ト權之丞、件の文を、四郎太夫の前へ出す。四郎太夫見て
こりやコレ、その女より男の方へ送りし一通。この手蹟は、お部屋の手蹟に相違ないか。
權之　全く相違ござりませぬ。
四郎　お部屋をこれへ呼ばつしやれ。
權之　ハッ……お部屋樣、若草さま、御用がござる。
兩人　若草さま〳〵。
ト呼ぶ、合ひ方になり、奥より、若草、女形附き出て來り
女四　あなたは御家老樣。
若草　さうして皆さん、わたしをお呼びなされたは、何か御用でもござりまするか。
ト何氣なき思ひ入れ。四郎太夫、合點のゆかぬ思ひ入れ。
權之　其許をこれへと申せしは、こなた樣へ疑ひがかゝつてござる。
若草　私しに、なんの疑ひがござります。
權之　その疑ひと申すは、この文、覺えがござらうがな。
ト件の文を見せる。若草見て
若草　この手蹟は私しの手に、よう似せて、書いてござり

ます。
ト此うち、四郎太夫、腰元一へ囁き、腰元一、心得奥へ入る。
權之　それゆゑ疑ひがかゝつてござる。
若草　そりや又なぜでござりまする。
權之　その儀に、これに居る髮結ひめが、その狀を持參なして、忍び込んだる不義大罪。
若草　でも、その狀は、私しが書いたのではござりませぬ。
トこれを聞き、伊之助惘り。
伊之　エ、なんと仰しやります、あの文が、あなたがお書きなされたのではござりませぬか。
若草　私しは覺えはござりませぬ。
伊之　エ、、。
ト惘り思ひ入れ。
權之　此奴、馴合ひで、この場をくろめる不屆き奴。サア、若草どの、有體に白狀さつしやれ。
若草　それぢやと、云うて、私しは、そんな覺えはござりませぬ。
權之　然らば、知らぬといふ云ひ譯がござるか。

若草　サア、それは。
久馬　云ひ譯なければ不義の大罪。
傳八　御前へ引ッ立て、面縛させん。
久馬　若草さま。
兩人　お立ちなされい。
四郎　アイヤ、詮議に及ばぬ。密通ではござらぬ。
三人　ナニ、不義でないとは、
四郎　その狀は僞筆でござる。
三人　なゝなんと。
四郎　最前より、合點ゆかぬと思ひしが、若草どのゝ立振舞ひ、その色を見てその氣を知ると、兩人の者は不義でござらぬ。外に企んだ者がござる。
權之　慥かな證據ありながら、外に企んだ者があるとは、
四郎　その證人、お目にかけう……コリヤ、玉章、來やれ。
玉章　畏まりました。
ト合ひ方にて、奥より玉章、腰元一附いて出る。敵役惘り
三人　ヤ、其方は玉章。
玉章　最前權之丞さまが、身共に內々頼まれたが、戀の取持ちは女子がよい、裏町の髮結ひに、其方が頼まれた體

にして、この文を渡してくれいと仰しやるゆゑ、ほんまの事と思うて、文を持つて參りましたが、樣子を聞けば拵らへ事ぢやとの事ゆゑ、御家老樣へ申し上げたわいなア。

三人　ヤア〳〵〳〵。

トこの時、上手屋體の障子を明け、兵部、窺ひ居る。

腰一　さういふ事とは露知らず、聞けば聞く程いとしらしい。

腰二　寄つてたかつて酷い目に合はせた上。

腰三　あのやうに縛られて

女皆　笑止な事でござりまする。

四郎　この企らみを致した人も、大概それと

ト上を見て、兵部と顏合せ、兵部、障子をピッシヤリ閉める。

エヽ、苦々しい……これも一人の仕業でない。そこらあたりに智慧の附け人が……權之丞、その繩解いて、若い者を歸さつしやれ。

權之　イヤ、それは。

四郎　それはとは、相伴におてまへ方も、繩にかかりたいか。

三人　どう致して。

四郎　然らば早く解かつしやれ。

ト敵役、不承々々に繩を解く。伊之助、痛い思ひ入れ。

それに居る若い者、それへ出やれ。

伊之　ヘイ。

ト前へ出る。合ひ方。

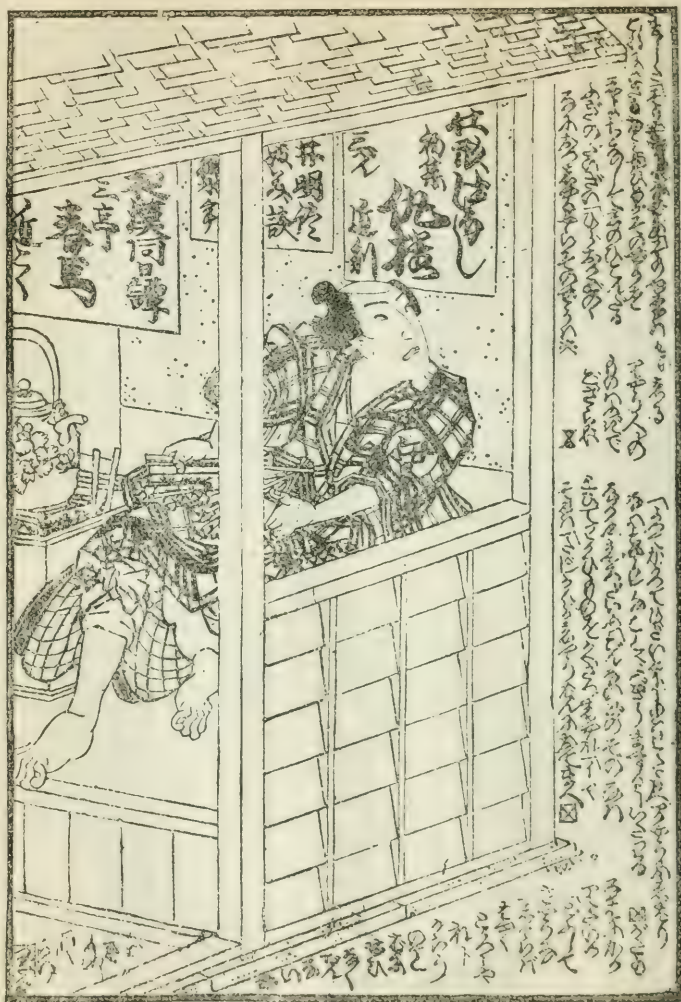
四郎　見れば、其方も下賤の生立とも見えざる物腰。まだ年若なれば、色には兎角迷ひ安きもの。かゝる事にて盜賊騙りの惡名を受けぬやう、必らずともに心得たるか。

伊之　有り難うござります。云ふ譯いたすも面目ない仕合せ。先程お中間衆が、お部屋樣の手蹟の扇を持つて來て忘れたその後へ、持たせて寄越したあの似せ文。いよいよ以て企みのある事とは、夢三法存じませず、大膽にも裏門から、忍び込んだお座敷の内、金盥に踏み辷り、逃げれば碁盤で向う臑、打たせる仕掛けの落し穴に、かゝりましたも皆天命。只今の御意見が、この身に沁み、この後心を改めます程に、どうぞ此まゝ、お宥しなされて下さりませ。

玉章　こんな事と知つたなら、持つて行かねばよかつたもの。

若草　思ひも寄らぬ災難で、縫目にまで遭はしやんした、元の起りはこの身ゆゑ、これも矢ッ張り殿様が。
四郎　コレ・物數云はず、無事に歸すがこの場の納まり。
三人　思へば〳〵。
四郎　云ひ譯あるか。
三人　ムウ。
　ト思ひ入れ。
四郎　若い者、早く歸れ。
若草　思へばいとしい。
　ト寄るを押へて
四郎　アコレ……殿のお立ちを相待たうか。
伊之　ヘイ、お暇申します。
　ト唄になり、四郎太夫先に女形、玉章附いて奥へ入る。伊之助、思ひ入れあつて下手へ入る。敵役三人上手へ入る。若草殘り、合ひ方になり、思ひ入れ。
若草　思ひがけない今宵の仕儀。如何にお心に隨はぬとていとしほらしい伊之助さんが、酒の合ひを根に持つて、いろ〳〵の拵らへ事、高木さまのお情で、怪しい詮議も恙なう、濟みは濟んでも濟まぬはこの身。お寐間の伽に口說かるるが悲しさ。帶紐解かぬは三年以前、片瀨龍りのわざくれに、云ひ交した殿御の面ざし、伊之助さんによう似たと、アッと見初めた心の迷ひ、最前纏れた杯を、賴んだばつかりに、拵らへ事で疑ひかけ、難儀に遭うたもわたしゆゑ。密かに逢つて詫び事も、自由にならぬこの云ひ譯。せめて一筆。さうぢや〳〵。
　ト合ひ方にて、硯箱を持つて來て、文を書きかかり、思ひ入れ。
イヤ、もし又、見咎められては、却つて難儀をかける道理……と云うて、云はねば矢ッ張り云ひ譯が。こりやマア、ひよんな事になつたわいな。
　トいろ〳〵思ひ入れあつて、文を書き
どうぞ人目にかからぬやう、手渡しする仕樣が、ありさうなものぢやなア。
　ト唄になり、文を書く思ひ入れよろしく、この道具廻る。
　本舞臺、元の髪結ひ床の内に伊之助、行燈を灯し、足へ膏藥を張り、手拭にて結へ居る。時の鐘、四つ竹の合ひ方にて道具とまる。
伊之　ヤレ〳〵、今日のやうな、とんだ目に遭つた事はね

安政四年一月所演當時發行

草草紙所載繪揷浮世床の場

え。飲めねえ酒を無理無體に飲ませられ、その上にあの拵らへ文。どんな者でも自惚れて、行かねえでなるものか。よく〳〵一杯やりやァがつたな、碁盤で向う臑をやッつけられ、揚句の果に荒繩で縛られ、それもあの妾を〆めた上なら仕方もねえけれど。併し、いゝ所へ、あの御家老樣がござつたばかりに、無難に濟んで歸つたが、モウモウ、これに懲りねえ事はねえ。

ト云ひながら、以前の扇を見て

伊之　エヽ、元の起りはこの扇だ。見るもなか〳〵、いまいましい。

ト扇を引裂き捨てる。この以前より若草、二階の障子を明け、舞臺を見て、以前の文を出し、下へ投げようとして、いろ〳〵思ひ入れ、簪を拔き、文を結へ附けて投げるゆゑ、伊之助の前へ落ちる。

エヽ、なんだ……カラリと音がしたが、何だか落ちたやうだ。

トあたりを見て、文を拾ひ、見て

こりや簪に附けた文。

トこの聲を聞き、若草、思ひ入れあつて、障子を締める。伊之助、文を見て

伊之　伊之助さま參る、若草より……エヽ、アタしつこいほててんがう。いゝ加減にしやアがれ。間拔けな者ならもう一杯、喰はにやアならねえこの狂言、意趣も遺恨もねえ者に、赤耻かかせた先刻の始末。初手は此方が誤まりでも、今度は先から仕掛ける喧嘩。こりや料簡がならねえわえ……さうだ。

ト早き合ひ方になり、伊之助、身拵らへして、文と剃刀を懐へ入れ、ツイと下手へ入る。時の鐘、道具廻る。

本舞臺、元の座敷。二重上手に、兵部、刀を拔きかけ居る。眞中に、伊之助、これを留め、權之丞を引きつけ、久馬、傳八、立ちかゝり、時の鐘、早めたる合ひ方にて道具とまる。

兵部　ヤア、予が前とも憚らず、慮外働らく下司下郎め。

權之　最前の意趣を根に持つて

久馬　お側近く尾籠の振舞ひ。

傳八　身動きなさば

三人　手は見せぬぞ。

トきつと云ふ。

伊之　オヽ、慮外合點、無禮も承知、意趣も遺恨もない者を、慰さみたい程慰さんで、恥をかゝせたその上に、また投げ込んだこの附け文。
　ト文を見せる。
御大身でも大名でも、返答次第で髮結ひが、命の梳き櫛切り元結、根揃へ根〆め根限り、どなたこなたの容赦はねえ。性根を定めて直んなせえ。
　トよろしく立廻つて、キッと見得。兵部、思ひ入れあつて。
兵部　皆の者待て。
三人　イヤ、慮外のこの下郎。
兵部　コリヤ待て。先刻の一埒は相濟み、得心の上にて歸りしを、又ぞろ文を投げ込んだとは、合點ゆかぬ。
伊之　ゆくもゆかぬもあるものか。恥面かゝせる二度の附け文、覺えがないとは云はれまいが。
　ト簪に附いたる文を、兵部が前へ抛る。兵部、取つて見て
兵部　伊之助さま參る。若草より。
三人　ヤア〳〵。
兵部　この簪の紋所は裏菊、見覺えある若草が簪。

伊之　なんと覺えがあらうがな。
　トきつと云ふ、兵部、文を拔き見て
兵部　ナニ〳〵「今日しは計らぬ事にて思はぬ御災難、くれ〴〵もお氣もじに存じ參らせ候ふ、これとても元はこの身より起りし事、定めて御立腹の程察し候へども、夢夢こなたには知らぬ事に候へば、お宥させ給はるべく候ふ……」こりや若草が自筆の文體……なんの事だ。
　トこれにて、伊之助、合點のゆかぬ思ひ入れ。權之丞文を取つて
權之　又々この程より、わたしが心の徒らより、お前樣を見初め……どうやら風が變つた。
兵部　後を讀め〳〵。
權之　お前樣を見初めし心の誠お心厚くお思ひ下されしに思はぬ御災難をかけ、さて〳〵お氣の毒、なんにつけても心に染まぬ殿樣のお心入れ、身を切るやうに御座候ふ。
　ト兵部、腹を立つ思ひ入れ。久馬、文を取り
久馬　ドレ〳〵……未だ帶紐は解き申さず候ふ折ふし、見初め參らせ候ふお前樣ゆゑ、この身の末をお任せ申したき心體に御座候ふ……イヤ、ほてくろしいこの文言。

ト傳八、文を取つて
傳八　必らず〱外々へお約束下されまじく、お目もじの上、申し上げたき事山々に候へども、人目の關を憚り、何事も御見の節と申し殘し參らせ候ふ、めでたくかしく。
三人　ヤア〱〱。こりやどうぢや。
ト皆々呆れたる思ひ入れ。伊之助、悄り思ひ入れ。兵部、焦れる思ひ入れ。
兵部　憎い女め、此やうな心底になるも、みな髮結ひの仕業。女郎もこれへ呼び出し、打ち放さねば腹が癒えぬ。ソレ、其奴を引摺ゑい。
三人　ハツ。
ト久馬、傳八、兩方より、伊之助を引立てる。
伊之　そんならどうでも。
權之　殿のお手討ち。
兩人　覺悟ひろけ
トこの時、上の屋體より、四郎太夫、寛ひ居て、障子を閉める。バタ〱にて奥より、玉章走り出て
玉章　ハツ、殿樣へ申し上げます。若草さまがこの場の樣子をお聞きなされ、裏門からどつちへやら、お出でなされました。
兵部　すりや、若草めが行くへが知れぬとな。
玉章　侍ひ衆が追ひかけて行かれましたが、わたしも尋ねに參りませう。ヤレ〱、大事でござります。
ト玉章走り、奥へ入る。
兵部　重ね〲憎い女め。直ぐに手分けなして身元の詮議。
權之　して、此奴めは。
兵部　繩かけて引連れ參れ。
ト兵部、花道へ行きかゝる。四郎太夫、出て
四郎　殿、いづれへお越しなさる。
兵部　イヤ、某は。
四郎　御歸館でござるか。
兵部　歸館どころでない。
四郎　すりや、何ゆゑに。
兵部　予が寵愛の若草め、この者ゆゑに行くへ知れず。追ツつけ手討に致す。
四郎　成る程、お憤り、御尤もと申したいが、それが誠の馬鹿殿でござる。
兵部　なんと。
四郎　色好みに身の破滅、先刻御意見申したを、お忘れあつたか。

兵部　おやと云うて、これなる匹夫め。
四郎　ハテ、この者にても、身に覺えなき、不義者に云ひ立てられ、男の意地づく、命を捨てに參りし樣子。御愛妾の身の納まり、この若者も拙者が預かり、とくと實否を糺した上、御存分に致されませう。
兵部　すりや、予が詞の立つやうに。
四郎　何事も、お上館に於て計らひ仕りまする間、殿には一刻も早く、御歸館なされませう。
兵部　でも、若草めが身の上。
四郎　それも拙者が尋ね出し、直さま後より。サヽ、御歸館あれ。
兵部　そんならどうでも歸れか。
四郎　御意に及ばぬ。
兵部　エヽ、いま／＼しい。
ト奥より近習大勢出る。兵部、先に敵役三人、近習附いて花道まで行きかけ
四郎太夫々々々々。
四郎　ハッ。
兵部　如何にしても憎い髪結ひめ、首にして持ち歸れ。
四郎　ハッ。
兵部　先刻の艶書と違うて、似せ物は喰はぬぞ。
四郎　ハッ。
兵部　よいか。
四郎　ハッ。
兵部　エヽ、何を云うても返事ばかり。しかと申し渡したぞ。
四郎　殿のお立ち。
皆々　ハア、。
ト行列三重になり、兵部先に皆々附いて向うへ入る。四郎太夫、二重へ上がり、見送り居る。伊之助、思ひ入れあつて
伊之　なんの事だ。初手來た文が似せ状ゆゑ、二度目の文が誠と知らず、返報返しに暴れ込み、詳しく知れた文の文言。そんなら内で讀んで見ればよかつたに。その上お部屋樣も越度。なんの事だか譯が解らねえ……モシ、旦那樣、重ね／＼有り難うござります。もう私しは歸りましても、よろしうござりますか、旦那樣。
ト云へども、四郎太夫、思案しながら、ヂツと、伊之助へ目を附け居るゆゑ、氣味の惡き思ひ入れ。
左樣なら、私しはお暇いたします。

卜思ひ入れあつて行きかゝる。四郎太夫、此うち袴の股立ちを取り、下げ緒にて襷をかける。

四郎　コリヤ、待て。

伊之　ヘイ、御用でござりますか。

四郎　その用事は。

卜長押に掛けたる鎗を手早く取り、ツカ〳〵と下り、伊之助へ突きかける。伊之助、愕り立廻つて、鎗首をキツと取つて

伊之　旦那樣。こりやなんとなされます。

四郎　一旦助けし其方なれど、殿の御意はもどかれぬ。

伊之　エ、。

四郎　命を貰うた。

卜四郎太夫、振り拂ひ、突く。伊之助心得、立廻つてキツと見得、誂らへの鳴り物になり、兩人立廻り。上手の障子を明け、若草窺ひ居る。四郎太夫、伊之助、面白き立廻りあつて、よろしくとまり、思ひ入れ。

四郎　ハテ、心得ぬ其方が手の內。槍に九段の慣ひあつて入れ身三段透かし身三段、拔かれ身に取つて、右縛外縛、

卜また立廻つて

伊之　三角の構へと見せ、後を走る一双兩段。

卜振り拂ふ。

四郎　逆風八重垣。

卜突きかけるを留めて

伊之　必勝村雲。

四郎　裏に取つては

伊之　山鳥羽返し。

卜立廻つて

八方責め。

四郎　車返しの極意まで、左振流の奧儀。この流儀は稲毛の家より、外に用ゆべき流儀にあらず。察するところ其方は、松田主膳が倅、主水に相違あるまいが。

伊之　なんと仰せらるゝ。

四郎　最前よりの立振舞ひ、合點のゆかずと思ふに違はず、下賤に似合はぬ今の手の內。包まず姓名明かされよ。

伊之　ハツ、お察しの上は包んで詮なき事。我が身の上の一通り、お聞きなされて下さりませう。

卜變つた合ひ方。

もと私しは稲毛の家臣、松田主膳が倅。某若年の砌り、御主君鴫立澤へ小鳥狩りの折から、朋友何某と、下がり居たる鴫の元まで遠上の爭ひ。然れば小鳥を遠矢にかけ

遠近を定めてと狙ひを極め某が、矢先に驚ろき立ちたる小鳥。我が遊興を妨げしのみならず、遠近も定まらずと、以ての外の主君の御不興。すべて射術の極意といふは、鳥の命は斷たずして、一鳥を射落せし、それを證據に遠近の爭ひには勝つたれども、若年に似合はず、主君へ詞を返せし不忠と、父主膳の勘當受け、それより諸國を遍歷なせしが、故鄕の空の懷しく、鎌倉へ立歸り、髮結ひとなつて下賤の世渡り。この裏町へ引き移り、暮らすうち、三浦家のお部屋樣、若草どのゝ面ざし格好、三年以前片瀨にて、云ひ交せし女が形に、似たと思ひし心の迷ひ。拵らへ事と露知らず、忍び込んだる最前の仕儀。……危ふい難儀助かりしも、四郎太夫さまのお情。武士たる者にあるまじき、色に迷ひしこの身の恥辱。主君に背きし天罰で、思ひ當りし身の災難、面目次第もござりませぬ。

ト思ひ入れにて云ふ。若草、これを聞き走り出て來り

若草　そんならわたしが日頃、尋ねし戀しい殿御、伊之助さん、矢ツ張りあなたでござりましたかいなア。

ト伊之助、悄り思ひ入れ。

伊之　さう仰しやるは若草さま、どうして爰に。

四郎　オヽサ、駈落ちと僞はりしは、矢張り殿樣を御歸館させん、身共が計らひ。

ト此うち若草、守り袋より誂らへの香箱の片しを出し

若草　伊之助さま、これ覺えてお出でなされますか。

ト出す。伊之助見て

伊之　見覺えあるこの香箱。その片しは即ち爰に。

ト伊之助、守り袋より同じく片しを出す。若草見て

若草　ほんに、それ〳〵、しつくり合うたこの香箱。

伊之　これにて思ひ合すれば、三年以前末の秋、片瀨詣りに通夜せしその夜。

若草　つい、わざくれが誠になり、人目を忍び末かけて、云ひ交したる妹脊事。

伊之　御燈の灯暗ければ、定かに顏も見分からず

若草　いづくのお方と云ふ事も、互ひに知らず、名も聞かず。

伊之　また逢ふまでの證據にと

若草　分けて貰うた香箱の

伊之　絞りを菊の唐草は

若草　八千代をかけしわたしが殿御。

伊之　二世と誓ひし若草どの。

若草　焦れ慕うた伊之助さん。
伊之　不思議な縁で
若草　ござりましたなア。
ト思ひ入れ。四郎太夫聞き、思ひ入れ。
四郎　初めて聞きたる二人が仲、盡きせぬ縁の今宵の面會、親はなうても子は育つ。コリヤ、この高木四郎太夫は、其方が實の伯父ぢやわやい。
伊之　なんと仰しやる。
四郎　誠や、宿世の縁とは云ひながら、身共が父は三浦家普代の老臣、惣領たる某は、高木の相續、其方が父たる松田主膳は、母方の縁にて稻毛の家中へ、養子となりしが、若年の砌り、劍術の爭論より、兄弟互ひに不和となり、音信不通に過ぎ行く年月、勘氣を受けて他國せしゆゑ、これまで對面せざりし其方、然るところ弟主膳も、某も互ひに積る老の坂、自然と兄弟睦まじく、過ぎ越し方を思ふにつけ、勘當なせし其方が行くへ、尋ね求めし折からに、賤しからざる其方が振舞ひ、もしやと思ひ手練の試み、案に違はぬ、松田主水。縁につれたる若草どの、勘當赦し夫婦となし、松田の家名相續させん。必らずともに安堵いたしやれ。

伊之　ハツ、有り難きそのお詞。一徹短慮の主膳どの、一人の伯父あつて、兄弟不和とて、姓名も、いづくの誰れと敎へねば、高木どのとは夢聊か、互ひに知らぬこの場の面會。
若草　わたしが一人の姉さんも、身持ちが惡さに母さんの御勘當。その妹の私しが、知らぬお方と徒らを、云ひ出し兼ねて居りましたに、あなたのお慈悲で今宵から、二世も三世も替らぬ女夫。
伊之　斯うした事とは露知らず、拵らへ事の不義密通。
若草　誠となつたる二人が命。
伊之　お助けありし伯父者人。
若草　いつの程にかこの御恩。
伊之　忘れられざる御情。
兩人　エヽ、有り難う存じまする。
四郎　イヤ、不便ながら、助け置かれぬ武家の掟。
兩人　エヽ。
四郎　法度を背きし不義の兩人。
ト伊之助、若草、顏見合せ
伊之　掟とあらば是非に及ばぬ。サア、すつぱりと
若草　お手討になされて

昭和三年七月明治座所演

實川延若の髮結ひ三二五郎七

兩人　下さりませ。
四郎　イヤ、命は助ける。
兩人　なんと仰しやる。
四郎　武士の掟の立つやうに……ハテ、何をがな。
ト本調子の合ひ方。四郎太夫、思ひ入れあつて、臺實木の紅梅の枝を折つて來り
兩人ともに、前へ出い。
兩人　ハツ。
ト前へ出る。四郎太夫、手燭を二重へ置き、梅の枝にて兩人を打つ、梅の花、ハラ〳〵と散る。兩人顏見合せる。
四郎　唐土聖王の世に、罪ある者に百杖打つて、これを放つ。飛び散る梅は二人が血汐。これにて成敗相濟んだ。
ト梅の枝を抛る。
兩人　エヽ。
四郎　死骸は人目に立たざるやう。
兩人　そんなら二人は。
四郎　この場を落花。
兩人　何から何まで。
ト兩人、手を合せる。四郎太夫、手燭にて、若草の顏を見て
四郎　若草どの。
若草　エ。
四郎　女夫になつたが嬉しいか。
若草　ハイ。
ト顏を隱す。
四郎　コリヤ、どこぞそこらで仕へ。
ト四郎太夫、若草を伊之助の方へ突きやる。これにて若草、伊之助に抱きつく。四郎太夫、手燭の火を吹き消すを木の頭。
ト四郎太夫ニツコリ笑ふ。これをキザミ、早めたる合ひ方にて
ひやうし幕

渡雁戀玉章（終り）

艫淸が夢の　五十年その
繪まき物を
花錦の潤色

邯鄲枕物語

一幕

初演の給番附

邯鄲枕物語 ― 艪清の夢

池の端待合の場
鶴の池座敷の場
新町吉田屋の場

役名 ― 鶴の池善右衞門。吉田屋の梅ヶ枝。支配人、作左衞門。家主、六右衞門。米屋勘助。薪屋太喜助。貸し物屋六助。安藝の内侍。仕丁、知惣次。盗賊、唯九郎。鳥追ひ、お七。蕎麥屋、陰德屋與四郎。金拾番、福六。横島伴藏。中間、可介。手代、新兵衞。艪清女房、おてふ。艪屋清吉。

本舞臺、三間の間平舞臺、正面、板羽目、これに彩色、繪發句の聯を掛け並べ、長床几を置き、落ち間の心。上手、暖簾口、これより置き舞臺へ、手摺り付きの椽を掛け渡し、上の方、中二階、下手、建仁寺垣、柱に待合、横に高島と印せし掛け行燈。いつもの所、風雅なる枝折り門、爰に黑八、紺屋手間取りの拵らへ、采配にて塵を拂ひ居る。番太郎、箒を持ち、掃除してゐる。通り神樂、鞠唄にて幕明く

番太　コレ、紺屋の番頭、今度越して來る奴は、何者だか知らねえが、不性者に店を貸してはいけねえぜ。

黑八　さうよなア、不性かまめか知らぬが、女房は素敵に美しいさうだ。

番太　さうか。そんなら時々來て、掃除をしてやりませう。それにつけても、お前の親方、六右衞門さんといふお家主は、深切な人だ。番太郎のこちとらまで附けて下さる。あゝいふお人もないものだ。

黑八　大きな聲をしなさんな。中二階を掃除してゐるからよ。

番太　ナニ、惡くも云やアしめえし。そりやさうと、お前懐へ入れてゐる書いた物は、そりやなんだ。

黑八　こりや、中二階の袋戸棚にあつたから、なんだか知らねえが、持つて來た。

番太　ドレ、見せなせえ……ナニ〳〵、淨瑠璃名題。

　トよろしく讀み終る事あつて

黑八　なんだか面白さうなものだ。内へ持つて行て、みんなに見せよう。

番太　イヤ〳〵、こりや、先に爰に住んでゐた者の品だから、いつ取りに來やうも知れねえ。おれが自身番へ大切にしまつて置かねばならぬ。

黑八　へゝ、うまくいつて、持つて歸つて

番太　敷紙を貼るのだ。ハヽヽヽ。

黑八　何にしろ、晝飯と出かけよう。

番太　ちよつと六右衛門さんに斷わつて行かう。

ト階子の側へ來て

モシ、私しどもは、お内へ行つて、お晝をたべてから、また參じます。

黑八　親方、お前の履き物は、床几の上へ載せて置きましたよ。

番太　そんならお先へ。

黑八　アア、行きやせう。

ト兩人、花道へかゝる。向うより米屋勘助、薪屋太喜助、貸し物屋六助出て來り、兩人と入れ違ひ

勘助　オイ〳〵、この近所の待合茶屋へ、今日引越して來る者があるが、知つてゐるか。

黑八　ムウ。

ト頭を振る。

太喜　廿一二の素敵にいゝ年增だ。

番太　そりや女か。男で廿一二で素敵にいゝといふのは、おれだ。

勘助　コレ〳〵、皮肉を云はずと、知つてるなら敎へて下せえ。しかも、待合茶屋で、高島といふ家名が附いたさうだ。

黑八　アヽ、それなら、アレ、向うの掛け行燈、あすこであらう。

三人　オヽ、ほんにさうだ。

ト兩人、向うへ入る。

太喜　彼奴が隣りの內から知らせで、斯う〳〵いふ所へ越して行くと云つたゆゑ、お前方を誘ひ合つて、今年は一番新らしく、先へ廻つて悧りさせてやる思ひ附きサ。

勘助　內の小僧を見せにやつたら、いま荷拵らへをして居たとの事だ。

太喜　併し、もう彼れこれ、來るでござりませう。

六助　そんならお二人

兩人　サア、參りませう。

勘助　ト本舞臺へ來り、內へ入り
コウ、こりやよい茶店だ。池の端から、根津、谷中
一目に見渡します
太喜　マア、奧の座敷へ行つて、一服やりませう。
勘助　それ〳〵、今にも來た時、爰にゐてはまづいから
六助　丁度、火道具も爰にあり
勘助　そいつは奇妙。サア、お出でなせえ。
ト奧へ入る。向うより、おてふ、世話女房の拵らへ。
清吉、ぼつとかづら、木綿どてら、尻端折り、向う鉢
卷にて、古葛籠の蓋へ世帶道具、風呂敷包みを入れし
を、兩人して擔ぎ出で來り、花道へ下ろして
てふ　わたしや、もう擔ぎ物は、懲り〳〵したわいなア。
清吉　其やうな事を云つてなるものか。また店立てをくへ
ば、引越さねばならぬ。かしう玉と店立ては喰つて味う
ないものぢや。
てふ　ホヽヽヽ、さうして、まだ幾町ばかりござんすえ。
清吉　もう十二三町ぢや。
てふ　エヽ、まだ其やうにござんすかえ。
清吉　そんなら負けて、ツイ向うの內ぢや。
てふ　エ、憎らしい。焦らしてぼつかり……サア、早う行
かうわいなア。
清吉　オツと合點、やつとこしよ。
トかたげ、舞臺へ來り、內へ入つて
てふ　ほんにマア、よい內でござんすなア。
清吉　いゝ內であらうがの。その上、お家主が掃除をして
置いて下すつた、
ト荷を取り出しながら
てふ　それに引きかへ、今までのお家主のやかましさ。た
つた今、店を明けろと云はれた時、お前は留守なり、ど
うせうと思うたわいなア。
清吉　その上、あの町內の癖として、僅かばかりの借りを
惡ひつから催促しをる。おれがやうなあんけらかんで
も、體が痩せ細くなるわいの。
てふ　爰へ越して來た事を、誰れも知つた者がなければ、
マア、當分は樂ぢやわいなア。
清吉　よもや、爰まで尋ねて來まいわいの。
ト三人、出かゝつてゐて
三人　イエ、疾に參つて居りました、
ト兩人恟りする。
勘助　コレ、清吉どの、昔の春狂言などには、後から掛乞

ひが附いて來るものだらうなが
太喜　今日貴様が引越す事は、去年の暮れにちやんと知つて居たゆゑ、一昨日から、爰の內へ辨當を運んで
三人　居催促ぢやわいなう。
清吉　滅法に早い催促人ぢや。
六助　コレ、爰へ越すなら越すと云つて見さつしやれ、直ぐに帳面へ棒を引いてやりますワ。
清吉　ナニ、嘘ばつかり。ハヽヽヽ。
勘助　差向ひでは、論がひぬ。こんな所でも、家主とか芋虫とかいふものがあらう。サア、そこへ案內さつせえ。
兩人　サア、もう料簡がならぬ〱。
てふ　マア〱、お靜かになされて下さりませ。まだ御近所へお近附きにならぬうち
勘助　其やうなこと構ふものかえ。
三人　サア、案內さつしやい〱。
ト二階より六右衛門、家主の形にて、采配を持ち、鉢卷をして、下りて來り
六右　ヤイ、蛆虫めら、何を吐かしやアがるのだ。
勘助　コレ、譯も知らずに、こちとらをなぜ蛆虫と
三人　吐かしたのだ。
六右　いま二階で聞いてゐたら、こんな所にも、家主とか芋虫とかいふものがあらうと、吐かしたぞよ。
三人　ムウ。サ、それは。
六右　おれが芋虫なら、うぬ等は蛆虫。それがどうしたと云ふのだ。
勘助　ハヽヽ。これはお初にお目にかゝりました。そんならあなたが、お芋虫さまで……イヤサ、お家主さまでござりましたか。
太喜　ツイうろたへまして、云ひ損なつたのでござります。このお人は米屋、私しは薪屋、この人は貸し物屋でござりまする。
六右　長く云ふに及ばねえ。貸しがあるゆゑ返せ、今はないからもう少し待つてくれろと、あやまる。こりや天下一統のお定まりだわえ。この界隈に隠れのない、家主の六右衛門が挨拶だ。明後日までに返しさへすりや、云ひ分はあるめえがな。
清吉　モシ、大家樣、どうも明後日までには、なか〱以ちまして。
六右　ハテサテ、おれが立替へても返してやる。
太喜　さうして、お家主の

三人　お內はえ。
六右　ツイ、そこの木戸を廻り、紺屋の六右衛門と尋ねて來い。
勸助　商賣が紺屋で、明後日とは、どうやら當に。
六右　まだ愚圖々々吐かしやアがるか。
六助　參ります〳〵。左やうなら
三人　六右衛門さん……サア、行きませう。
卜橋がゝりへ入る。
清吉　お前樣が、二階にござらうとは、夢さら知らず、誠に當惑いたしました。
てふ　ほんにマア、僅かばかりの買ひがゝりを、あのやうに云はいでもの事。また明日から、掛取り衆に云ひ譯するのかいなア。
六右　エヽ、氣の小さい事を云ふまい。爰の店はどんなに客が來ると思ひねえ。錢金が摑み取りだ。
清吉　それはマア、有り難うございます。私しは、船の艪を拵らへまする職人でございますが、義理ある御主人の流浪さつしやつてござりまするが、その元は、聖德太子の一軸が紛失ゆゑ、仕事も何も其方のけにして、尋ねましたところが、雪の下の質屋にあるといふ事を突きとめヤレ嬉しやと思へど、請け戻す金子がなさに、只ウロウロ致して居るばかり。
てふ　どうぞして請け戻し、御主人を歸參させ申せば、こちら二人は死んでも大事ございませぬ。
清吉　何を申すも、大枚の金、出來る當てはなし。
六右　出來る、おれがよい謀り事を傳授する。五十や百の金は、瞬くうちに出來る。
清吉　エヽ、そりや、どのやうな事でございますな。
六右　さればサ、この邊は遠國の大名方が多いゆゑ、侍ひ衆が、ほろ醉ひ機嫌で茶を飲みに寄る。ところでかみさんが、その器量、ニッコリと笑ひながら茶を持ちかける。そりや、猫に鰹節、直ぐにグニヤ〳〵〳〵。
清吉　ア、モシ〳〵、それでは、嚊を人の弄みもの、そりやなりませぬ〳〵。
六右　これはしたり、みんな聞きもしねえうちに……さうして懷へ手を差込まんと欲する時、貴樣が出て、間男見附けたと云ふワ。身分に關はるゆゑ、あやまる、こちらは料簡ならぬと、わつぱさつぱ、その中へこの家主が飛び込んで、扱ひとなる一件。
てふ　それしきの事で、お金になる事なら、横しまながら

ナア、申し。
清吉　どの道。正直正當な事をして居ては、金は出來まい。
併し、冥利の惡い詮索でござりまするなア。
六右　これはしたり、武士は切取りしても、身を立てると
いふぢやアねえか。貴樣も御主人の爲、殊に向うから仕
掛ける色事なりや、自業自得といふものだ。何にしろ、
茶店でもするに、亭主があつては程が惡い。これから貴
樣を、かみさんの兄貴にするワ。
清吉　兄貴になると、どうやら畜生道へ落ちるやうで、
六右　ハテサテ、晝は兄弟、夜は夫婦。
てふ　そんなら、これから主の事を、兄さんと云ふのでご
ざりますかえ。
六右　いで鎌倉といふ時には、間男見附けたと、貴樣が出
ると、おれが扱ひに入るワ。ソレ直ぐに金だ。
清吉　成る程、そんなら稽古をして見ようか。
てふ　どうやら、云ひ損なひさうな事ぢやなア。モシ、こ
ちの……兄さん。
六右　うめえ〳〵。
清吉　コレ、こちの嬶ではない……妹やい。
てふ　兄さん。

清吉　妹。
六右　四月がお釋迦で……五月がお幟……六月天王わいわ
い……ハ、、、時に質請けの金高は。
清吉　利分廻し百兩なれど、その御主人の御恩を受けた者
が外にもあつて、五十兩は調達するとて、骨を折つて居
るとの事。
六右　よし〳〵、こいつは、とつくり思案をしにやアなら
ねえわえ。
清吉　何分よろしうお頼み申します。嬶、お茶など入れん
かい。
まつ　アイ〳〵。
ト葛籠の内より、茶道具を出し、焜爐を煽ぎ立てる。
向うより伴藏、着流し、大小、後より可介、紺看板、
中間にて、甲斐絹の風呂敷に、南部行李のやうな箱巾
に、七福神の掛け物に、長き夜の歌を書きたるを入れ
封印を附けて、包みを持ち出て來り
可介　お旦那、あの又質屋の番頭めが、何を申すか知れま
せぬに、あなたばかり誠に受けて
伴藏　イヤ〳〵、鑑定書を、彼奴が方にどめて置いたとて
代物を此方へ請けてしまへば、あつて益なき品だ。なん

でも、池の端邊の待合茶屋にお待ち下さい。手前は茅町の大佛屋と申す餅屋へ寄つて、用を達して參ると申した。

可介　それなれば、幸ひ向うに待合茶屋がござります。

作蔵　ナヽ、あれにて待ち合さう。サヽ、來やれ〱。

ト舞臺へ來り

エヽ、大分客が混み合つて居るな。

六右　そりや來た……イヤ、ナニ、私しどもは、客ではござりませぬ。

清吉　わしは妹ではない、兄貴、これは妹、この人は大家さんでござりまする。

六右　妹どのや、お茶はよいかの。

作蔵　イヤ、手前は、ちと、爰に待ち合す者があるゆゑ、暫らく店を借り申したい。

てふ　ハイ〱、御ゆるりと遊ばしませ。モシ、こちの……兄さん、奥へ焚きつけようではござんせぬか。

清吉　成る程、爰に居ては、大家さんの謀り事が。

六右　アヽコレ、らッちもねえ…イヤサ、此やうに取散らす客屋があるものか。穢ないものは、みな奥へやつたがいゝ。

清吉　これより裏道の始まり〱。

ト おてふ、前垂れに包みし櫛道具を抱へ、六右衛門、清吉、葛籠を荷ひ、三人入る。後へ誂らへの南部行李を忘れて行く。

作蔵　ハヽヽヽ、何かソワ〱してばかり致して、さては、まだ商賣に馴れぬ者どもと見ゆる。

可介　爰に茶屋株を買うて、今日引越して來たばかりと見えまする。

作蔵　なんにしろ、あの太鼓の音はどこぢやな。

可介　この後は、仲町でござりますから、晝寄席に、手品でも出てゐると見えまする。

作蔵　その騒々しいのが、勿怪の幸ひぢや。この度請けた聖徳太子の書賛の一軸、大切な物なれど、拜まして遣はすぞ。

可介　それは、有り難うござりまする。

ト可介の持ちたる包を明け、誂らへの綾の組みたる枕の形したるものを出し、鹿手水をつかひ、蓋を明け、内より表具をしたる軸を引出し

作蔵　ソレ、どこともなしに、頭が下がるやうぢやらう。

可介　ヘイ、歌は矢ッ張り長き夜の、とりの眠り●書は、

寳船でござりますな。
伴藏 されば當春、鷁龍丸、新造下ろしの節、古例とあつて鎌倉御所より、手前主人、預かりのこの一軸を持參すべきところ、去年紛失なし、寫しを持ち出で、濟ましたれど、御寳藏番の隼人は、それより永のお暇となつた。所で、この手紙が手に入り、鑑定書さへ受取らば、直ぐに殿へ差上げ、云はずと知れたこの身の御加增。われもその姿では置かぬ。喜べ〳〵。
可介 しつかり包んで、封印でも附けてお置きなされませ。
伴藏 オ、サ。
ト箱に入れ、紐を締め、紙にて封印をつけ
コレ〳〵可介、そこを曲れば茅町。大佛屋へ參り、樣子を聞いて來てくりやれ。
可介 畏まりました。あの酒吞みが、餅屋とは氣が附きませぬ。
ト橋がゝりへ入る。暖簾口にて
てふ モシ兄さん、お燗を附けて下さんせいなア。
トおてふ、茶臺に茶碗を乘せ、持ち出て
お一つ、召上がりませ。

伴藏 ア、構やるな〳〵。
ト茶碗を取らうとして、フト顏を見込み、ウツカリ落す。
オ、、これは麁相。
ト鼻紙を出す。
てふ ア、モシ、これにござりまする。
ト手拭にて拭ふ。
伴藏 イヤ、誠に、砂の中の黄金とや云はん。あでやかあでやか。
てふ ホ、、、、お嬲り遊ばすも、大概がよろしうござりまする。
伴藏 イヤ〳〵、嬲るでない。手前も隔年、勤番に下れども、おてまへのやうな美婦人に未だ見えし事はない。併し、いま承はれば、兄さん、お燗をつけてくれいと云うたが、さては亭主と樂しみ酒か。但しは、世話になる旦那とか申すのが參つたと見ゆるな。
てふ なんのマア、不束なわたしを、世話するお人がござりませう。元より亭主も親もなく、兄弟二人暮らしで居りまするわいなア。
伴藏 イヤ、どうも誠とは思はれぬぞよ。

てふ　なんの僞はりを申し上げませう。去年までは扇ケ谷の、さるお屋敷に御奉公を致して居りましたれど、旦那さまが急にお國へお立ちになつて、此やうなお恥かしい商賣を始めましてござりまする。

伴藏　ヤレ、可哀さうに、なか〳〵御殿下がりなどの出來る業ではない。なんと手前が閑ひ妾になつてはくれまいか。どうぢや〳〵。

ト手を取りながら、脇差を取つて、脇へ置き、懷へ手を入れる。後へ淸吉、六右衞門、ツッと出て窺ひ居て

六右　ソリヤ。

淸吉　間男見附けた。そこ動くな。

伴藏　ヤア、亭主持ちか。

てふ　アレ、わたしや、なんにも知らぬわいなア。

六右　女房はおらが捕へた。其方の侍ひ。

淸吉　合點だ〳〵。代官所へ、サア、うしやアがれ。

伴藏　ア、コレ、間男の間の字もせぬうち。

淸吉　ヤア、吐かしやアがるな。うぬら二人、ふん縛つて。

トあたりの繩を取る。

伴藏　これは、とんだ災難だ。

トうろたへ、刀ばかりを腰に差し、自分の枕行李と心得、南部行李を抱へて外へ出て

六右　無法な奴に逢つては叶はぬわい。

淸吉　泥坊だ〳〵。

ト伴藏は逸散に向うへ逃げて入る。

てふ　云ひ合はせたやうには、ならなんだわいなア。

六右　淸吉どのが急き込んだゆゑ、逃がしてしまつた。もう少し我慢をする所であつたものを。

淸吉　どうして〳〵、あれから我慢をすると大事な所へ、六右　サア、それだから、なんでもかみさんが、しつかりと褌を締めてかゝらにやアならねえ。

てふ　それはさうと、そこに腰の物があるではござんせぬかえ。

淸吉　オヽ、こりや、今の侍ひのぢや。ちよつと持つて行つてやらうか。

六右　茶代の代りに、置いて行つたのであらう。

淸吉　ヤア、爰に封印の附いた枕のやうな物があるが。

六右　でも、何か大事さうに抱へて逃げ出し居つたが。

てふ　オヽ、爰へ書き物を入れて置いた、南部行李がござんせぬわいなア。

清吉　そんなら、間違へて行き居つた。なんにせい、中を明けて見ませう。

ト蓋を明けにかゝるを

六右　ア、コレ／＼、封印を切つては、此方の越度になる。脇差も行李も、そつくりして置いて、今に向うから詫を入れて來る。所でおれがしつくり掛合うて、物にしてやるワ。

てふ　よろしうお頼み申ましする。

ト茶臺へ茶碗を載せて出し

お茶を一つ、お上がりなされませ。

六右　コレ／＼、おれに茶を出しても、金になりませぬぞや。

三人　ハヽヽ。

ト三人、茶を飲み居る。下手より可介、大佛豆と記せし袋を提げて出て來り

可介　ヘイ旦那、只今行つて參りました。

清吉　ソリヤ又來た。

六右　シイ／＼。

可介　コレ、おれの旦那は、どこへお出でなされた。

清吉　それぢやア貴樣は、今の侍ひの供か。

六右　間男の家來なら、逃がすな／＼。

可介　ナニ、旦那が間男だ。それは大變々々。

ト逃げにかゝるを

六右　てめえを逃がして堪るものか……繩はねえか、繩はねえか。

清吉　爰にある／＼。

ト細引にて、可介を腰繩に縛る。

清吉　サア、てめえの屋敷へ案内しろ。

可介　どういふ譯か知らないが、案内するから、その袋を持つて來てくれろ。

六右　なんだ、これか……大佛豆……よし／＼、持つて行くから、サア、行きやアがれ。

ト可介、縛られしまゝ、花道へ逃げて行くを、六右衞門、繩の端を持つて引ッ張る。これにて可介、四つ這ひになる。袋より豆を出し、可介に打ち付けながら、向うへ入る。

清吉　ヤレ／＼、金儲けの先づ口明けは、出來たといふものだ。併し、朝飯喰つて、引越して來たまゝぢや。飯を食はしてくれぬか。

てふ　ほんにマア、いろ／＼の事で……仕掛けはして置い

たゆゑ、いま直ぐに炊いて上げるわいなア。

清吉　そんなら、早うしてたも。飯の出來るうち、ちよつと横になつてゐる程に、飯が出來たら、手びどく起してくれ。草臥れてゐるゆゑ、起きられはしねえよ。侍ひが間違へて行たこの行李、丁度よい。ヤツコラセエ。

ト作蔵の置いて行つたる枕行李を枕に、横になる。

てふ　それでは、風を引くわいなア。

ト古い掻巻を出して掛け、六枚屏風を立て廻し

わたしに連れ添ふばつかりに、幾瀬の苦勞をしなさんす。それも何ゆゑ、身の貧より……金が敵の世の中ぢやなア。

ト思ひ入れあつて、奥へ入る。知らせにつき、ドロドロになり、この道具、居所にて變る。

本舞臺、欄間を下ろし、枝折り門をセリ込み、正面張り物、眞中より引割り、中二階と共に左右へ引いて取る。銀張り花の丸の欄間、蹴込みを取り付けたる常足の二重を押し出す。正面、墨畫、金張りの御簾、上手に手摺り付き九尺の廊下、杉戸の見切り、向う、灯入りの奥座敷、數多書き割りたる片漏斗の遠見。日覆より櫻の吊り枝。二重、よき所に、千兩箱十二積み上げ、すべて鶴の池、奥座敷の體。下手淨瑠璃臺。建仁寺垣を打ち返す。蹴込み、秋草の盛りを書割りたる。庭先の模樣よろしく、道具納まる。

ト直ぐに、清元の淨瑠璃になり

清へ仇と情に身はうつゝなく、夢に悟道を求めたる、蜀の盧生が喜見城へ千歲の齢保つなる、天のこんづと菊の酒・榮花過せば憂しと見し、艱苦の昔、忍ばしく。

ト薄ドロ〳〵にて、屏風の內より、箔押しの蝶番ひ、日覆へ引いて取る。これにて上手へ常磐津連中の出語りになり

常へ奥はなまめく、女中の聲。

腰元　サア〳〵、お早うお出で

皆々　遊ばされませう。

常へ浪花に名にし大分限、掛けがへのなきほんそ子は、類ひ稀れなる兩魂病、機嫌とり〳〵腰元の、介抱麁略たかりけり。

ト上手の廊下より、腰元、錦の褥、蒔畫の煙草盆、鼻紙臺を持ち出て、平舞臺、上手に直す。善右衛門、五

十日、亂鬢、前帶、派手なる小袖、壺折りかけ、腰元兩人の肩へかゝり出て、褥の上へ直り

善右　かゝる事と知つたなら、髮も取上げ、湯浴みもせんもの。思ひよらざる客人の到着。

腰一　神力應護と申しながら、百三十里の遙かな道を

腰二　瞬く間にお伴ひ申すとふい、此やうな不思議な事はございますまい。

腰三　三歳この方のおしつらひも、お心に叶ふ事あれば、忽ち御全會遊ばすとの

腰四　お醫者方の仰せなれば

腰一　程なく御本腹遊ばさば、如何ばかりお嬉しう存じ上げまする。

善右　最早、暮るゝに間もあるまい。六ツを打たぬその前方。

腰二　畏まりました。

腰三　ドレ、お屛風を。

腰四　ア、コレ、靜かに〱。

清〽とゞめながらもいち早く、男見たさの腰元が、裾もほら〱取り退くる、屛風の内は、高鼾、かくては果てじと手を突いて。

ト女形、屛風を取りのけると、清吉、錦の蒲團、房附きの長枕にかゝり、掻卷を引ッ掛け、寢入り居る。

腰一　若旦那樣、お目をお覺まし

皆々　遊ばされませう。

ト此うち、時鳥、日覆にて啼く。清吉、目を覺まし以前の形にて起き上がり

清吉　ア、草臥れた〱。オ、時鳥が啼くか。どうでも池の端は、お山が近いからだなア……ヤア、こりやなんだ。雛樣を見るやうな夜具だ……これはしたり、お客樣が來てござるとも知らず、眞平御免なされませ。彼奴も彼奴だ。

腰一　ア、申し、不意にお目覺め遊ばしたゆゑ、左やう思し召しまするは、御尤もでござりまするが

腰二　爰は、あなたのお住居では

兩人　ござりませぬ。

清吉　エ、……左やう、サ。ナニ、まだ蕎麥振舞ひもせす樽代もやらぬゆゑ

常〽我が家なりと口籠う、云はれぬ心奧と外、見廻し悄り、立ちつ居つ、更に不審の晴れやらず。

モシ〱、わしは一體、どうしたのでござりまするえ。

腰一　御合點の參らぬもお道理さま、女子の我れ〳〵が、
　申し上げるも恐れあり
腰二　疾より、重手代のお方々、お待ち受け申して居られ
　まする。
腰一　ソレ、作左衞門さまを。
腰三　畏まりました。
　ト奥にて
作左　アイヤ、只今參上仕るでござりませう。
　ト作左衞門、老けたる拵らへ、羽織、袴にて出て來り
ハ、ツ、私し事は、當家の手代作左衞門と申しまする者
　幾久しうお目をおかけ下されませう。
清吉　へ、、、御近所へ參りました、いけぞんぜえ者でご
　ざります……一體、爰はどこでござります。
作左　ハ、ツ、爰は大坂高麗橋、鶴の池善右衞門の別宅で
　ござります。
清吉　エ、……モシ〳〵、それでも、今日ね、池の端へ引
　越して……今日ね、池、鶴の池。少しは緣のねえではね
　えが、百三十里違つて居る所へ、越して來よう筈がある
　まいではござりませぬか。
作左　ハ、ツ、御尤も至極。先づ、掻いつまんで申し上げ
る。樣子と申すは、あれに入らせられまするは、當家の
　御主人、旦那さまにござりまする。
清吉　へ、、、。
作左　然るところ、三年以前、其許樣の姿繪を御覽遊ばし
　てより、フト御病床にお付きなされしゆゑ、長崎までも
　人橋をかけ、名醫方をお呼び申しましたところ、これは
　世にも稀れなる離魂病といふ病にて、晝は變らぬ男に
　て、暮れ六ツよりは、女に精を變へる難病。その病根の
　晝姿に似た者を、連れて參つて、望みを叶へて遣はすよ
　りは、良藥はないとの事。
腰一　それより六十餘州へ手分けをなし、雲を當途の尋ね
　者。
腰二　東の江戸は繁華ゆゑ、先づ專一に尋ねるがよいと
腰三　御親類方、お手代衆。
腰四　百人餘のお方々、皆お下りでござりました。
作左　當地にては、名僧智識、諸寺諸山へ祈禱を賴みまし
　たる折柄、鞍馬山の東光坊の申さるゝには、最早一命、
　明日にも危ふい。當山の正山坊を賴み、この仁を瞬く間
　に攫つて來て、病人に逢はせなば、直ぐに全快疑ひな
　しとの仰せに從ひ、正山坊さまをお賴み申し、あなたを

ソッとお浚ひ申して、お連れ申しましてござりまする。

清吉　ヘエ、、それぢやア旦那が大病ゆゑ、藥の爲に、私しが入用だと、云ひなさるのは、ハ、ア、生膽を取るのだね。べら坊め、これを取られて堪るものか。

ト胸を押へて逃げようとする。

善右　ア、、イヤ、清吉どの、さら〳〵左やうではござらぬ。御得心下さらば、晝は當家の主は私し、暮れ六ツより其許様が主に直り、身代は御存分に致されて、不束ながら、行く末長くお情を……イヤサ、面目もなき我が業病、御推量下さりませ。

清吉　成る程、お前さんのやうに云ひなさると、解つたやうで、解らぬやうだが、さうしてお前さんは。

善右　アノ手前は。

ト云ひ兼ねるゆゑ、

作左　ア、、イヤ、暮れ六ツよりは、あなた様の

女皆　御新造さまでござります。

清吉　それでも、旦那は男ぢやねえか。

腰一　サア、夜に入りますれば

皆々　女におなり遊ばしまするでござりまする。

清吉　そりや、マア、さうでもござらうが、野郎頭ぢやアきりまが悪いなア……それも御縁づくだから、仕方がねえとしたところが、散々今まで苦勞、厄介をかけた女房を。

作左　ハツ、其許様のお内方は、直ぐに今朝お迎への手代ども、關東へ遣はしましてござります。

清吉　そんなに、お物入りをかけては。

作左　ア、、イヤ、夜ばかりの旦那さまでも、あの通り、十二萬兩は、一ケ年のお小遣ひ料。

ト清吉、積み上げてある金を見て

清吉　ヘエ、。

ト暮れ六ツの鐘なる。

作左　ありやもう暮れ六ツ。

腰一　ソレ、晝姿の翠君様。

ト鼻紙臺の紙ひろげる。

皆々　早うお側へお出で遊ばしませいなア。

善右　わしや、恥しいわいなア。

ト女になりたるこなし。

清吉　オヤ〳〵妙々。

腰一　三歳この方、お焦れなされた戀人様。

皆々　ハテマア、お側へお出で遊ばしませ。

ト善右衛門を、清吉の側へ突きやる。

清〽顔見合せておもはゆく、ほんに思へば、つれないと恨むも無理な、片思ひ。

常〽隣國とやらの錦繪で、ふつと見初めて、現なく、三歳この方焦れても、人して云はんよすがさへ、浪花の浦を遙かなる、東の土產の双六を、明暮れ詠め幾里を、越えては文もやるせなく、淚の床の小夜更けて。

清〽軒端を洩るゝ月影の、さすをあなたと抱き留めて、じつと引き寄せ、顏と顏。

常〽合はす時計の目覺しに、さては現か、情ない、覺めての跡の悲しさを、思ひやつてと、打ちつけに、ひつたりいだき、月と梅、離れがたなき風情なり。

ト兩人よろしくある。向うにて

呼び　御上使のお入り。

作左　ヤ、、思ひがけない、御上使さまでござりまする。

清吉　ヤレ〳〵、待ち焦れてゐた。

作左　すりや、旦那さまには、疾より御存じ。

善右　何は兎もあれ、お迎へ申しやいなう。

皆々　畏まりました。

呼び　御上使。

清吉　しめた。

ト安藝の內侍、好みの衣裳、檜扇を持ち、後より仕丁、朱の爪折り笠をさしかけ、次へ大和、仕丁の形にて三方に土器を載せ、持ち、この後より和惣次、後茶筅、仕丁の形、好みの拵らへにて、櫻の枝へ上書を結びつけ、持ち出で來り

常〽時めくや、葵かざして五つ衣、露とりなりも、床しくも、重き上意に遙々と、かなたへこそは入り給ふ。

ト本舞臺へ來る。

作左　これは〳〵、町人風情の善右衛門が別宅へ、勿體もなき御上使のお入り、有り難き仕合せに存じ

女皆　上げ奉りまする。

善右　そこは端近。イザ先づこれへ

女皆　お通りあられませう。

ト內侍、上手へ通る。時又、子役は、下手へ扣へる。仕丁は、下手へ入る。清吉、眞中に住ふ。

內侍　土も木も、我が大君の國なれば、民百姓とて隔てなし。然るに御當代、大臣の位を讓らんと、御心を惱ませられしゆゑにより

和惣　老臣達の上聞に、當家へ參りし男子こそ、萬民撫育

の性質あり、直ちに供奉なし來れよとの御上意。
大和　俄かの事ゆゑ、かしづきも、我れらが附き添ひましてござります。
和惣　即ち、持參の御書。その旨しかと、心得てよからう。
清吉　ナニ、おれを大臣さまにする。途方もねえ。このぞんぜい者がなられるものかえ。いま鶴の池の亭主になるさへ、手こずつて居るものを、モウ〳〵、そんな事は無駄な詮索だ。
內侍　ナニサマ、下の者の推量には、かたくろしう思うてあらうが
和惣　例へ御殿の內なりとて、戀に貴賤の差別なく
內侍　誰れ〳〵も參つてたべ。
ト思ひ入れあつて
清〽雲の上は、ありし昔に變らねど、敷島の德により、三十一文字に和らげて、
常〽殿中儀式のあらましは、先づ靑陽の新玉に、君に齡を幾千代の。
清〽例しは子の日、小松引き。
常〽それを在所で云はうなら、仲よい同士が、打連れて。
清〽くはへ煙管の大根引き。
常〽すゞなの拍子、芹薺、睦まし月とひめ始め、そりや年々の出來秋に、貢積み出す飾り馬。
ト此うち、內侍に和惣次摺んで、よろしく振りあつて
內侍　妹脊の仲も彌生時
大和　雛の女夫へ捧げ物。
清〽あれ見やしやんせ蛤の、千尋の濱に育ちても、外の貝にはあはぬとは、女子の操、殿達も、同じ心ぢやあるまいか。
常〽桃花の節會、曲水は、春を愛でぬる振舞ひの、くるり廻りのお杯。
清〽合ひの押への、お手元を。
常〽ひねり上戶とそやされて。
清〽腹立てゝ見つ、泣いて見つ。
常〽笑ひ壽ぐ菖蒲草、御所の小町の、局見世。
トよき程に、清吉はこれに聞き惚れ、思ひ入れあつて立つ事。
清〽攝家清花も、そゝりぶし、待つ身や辛い夕凪に、燒くや藻汐の身を焦す、オヤ憎らしい知らぬ顏、よくまア。昨夜入り口の、新子の所へ上がり口、片足上げて隨身の、

ふざけた形で、いちやつきは、青公卿らしいぢやないか
いな。
常〽えゝ、措いてくれ、おのれこそ、なまな二歳と深草
に、業平の事知つてゐる、それ都人と突き放せば、さう
は、さゝぬと、腰元が、引けや戀路の。
清〽初子の日、小松たものではないかいな。
ト此うち、クドキ模樣いろ〳〵あつて、腰元、褥、脇
息を前へ持ち出し、清吉をこの上へ坐らせる事あつ
て、
清吉　ア、、目が廻る〳〵。そんなに振り廻してくれる
な。のぼせ上からア……イヤ、おれは、その逆上性だか
ら、冠り物をする商賣はお斷わりだ。
内侍　ナニサマ、樣子を聞けば無理ならず。この上は、上
意の男子は、一月に萬兩の黃金相違なく、遣ひ捨つる町
人の器量ゆゑ、其まゝに差措き候ふと、上聞に達し申す
べし。
清吉　そりやマア、工面をしろと云はれては、むづかしい
が、一月に萬兩遣ひ捨てるのなら、兄弟分と又相談して
やツつけませう。
和惣　ホ、、神妙なるおことがお受け。お局樣にも御滿
足。
内侍　その誓ひを聞く上は、急ぎこれより歸館せん。
善右　ア、申し、遠路の御下向、一先づ母家へお入りあつ
て、不束ながら九獻お一つ
腰一　其うちあなたは、お支度調へ。
腰二　邯君樣を母家へお迎へ。
清吉　ア、コレ〳〵、おらア、その本家へ行くは窮屈だ。
矢ツ張り爰で。
作左　お心任せに計らひませう。左やうでござらば
六人　御上使樣には
皆々　先づお入りあられませう。
清〽上意はなんと分たねど、是非も内侍は打連れて、母
家をさして。
トこれにて清元連中を消す事。作左衞門。案内して、
内侍、和惣次、大和、善右衞門、腰元附き添ひ、向う
へ入る。
清吉　オイ、姐さん、何より先へ、飯を食はせて、香のも
のでもいゝから……イヤ〳〵、香のものではない、鶴の
池の旦那が、そんな卑しい事も云はれまい、といつて我
慢して居れば、死なねばならぬ……オ、、母家へ行く道

は、往來だらう。茶飯か夜蕎麥賣りの居ぬ事はあるまい。ちよつと二り杯、底を入れて來よう。妙々……それにしても、一文も持たぬ。ア丶、あの千兩箱の遣ひ始めをしよう。

ト百兩包みを出し、封を切り、小判を出し

先づ、この一兩で飯を喰はう、おつりはいらぬと、當百の積りでやるワ。この位にせにやア。なか／＼一月に萬兩は遣はれるものぢやねえ。

ト小判を三尺へくろみ、ソロ／＼花道へかゝりながら

これにつけても、さぞ嬶アめが、尋ねて居るだらう。早く知らせてやりてえもんだなア。

ト薄き風の音にて、知らせなしに東西の窓蓋を下ろし正面、屋體の前へ並木の道具幕を振りかぶせ、上手の衝立、番小屋に打返す。軒に捨金番と切りぬきし、灯入りの行燈になり、薮だゝみを引き出す。

ドンブリ日が暮れてしまつた……オ丶、向うの方は富士の山だ。この鹽梅ぢやア飯屋も來さうもねえ。そつちこつちするうちに、婚禮のお高盛りが出るであらう。こりやア内へ行つて待つてゐやう。こゝが男の辛抱だ。

常〽後は床入り新枕、獨り笑みして立ち戻る、後の方より。

ト揚げ幕にて

唯九 オヽイ／＼

清吉 なんだ、誰れか呼ぶやうだ。イヤ／＼、此方のこつちやアないさうだ。

唯九 待てと云はゞ、待ちやアがれ。

常〽呼びかけ出づる大をのこ、狹い大道大股に、追ひつき後へ立田山、白浪とこそ見えにけり。

ト唯九郎、大百日、大縞どてら、丸括けをしめて、下に網襦袢、刀を差し、重ね草履を履き、花道よき所にて出會ひ、清吉、慄へ／＼舞臺へ戻る。唯九郎附いて來り

ヤイ、若いの。最前から呼ぶのに聞えぬか。但しは聾かドヽどうぢややい。

常〽とどつちよう辭。

ト忍び三重に、ゴンになり

清吉 聞えて居りましたが、腹に他愛がござりませんで、返事は遲うなつた。御用はなんでござりまする。

唯九 跡を附けて來るからは、云はずと知れた山賊夜盗、四の五と吐かしやア。

ト刀を抜き

見たか。二尺八寸だんびら物、うぬがどてッ腹へお見舞ひ申すぞ。

ト土手板へ突き立てる。

清吉　エ、、ソ、それには及ばぬ。オ、、丁度よかつた。爰に小判が百兩ござります。これで足らずば丸裸になつて上げますから、どうぞ命ばかりはお助けなされて下さりませ。わたしは、江戸にいろ／＼の事がしちらしてござります。それに恩を受けた人の事で、いろ／＼難儀……イヤ、申しても益ない事。どうぞ御慈悲に御料簡下さりませ。

ト三尺を解き、金を前へ出し、ソッと顔を見上げる。

唯九郎は、貫のみ居る。

ムウ、これでは、まだ持つてゐるとかのお疑ひが晴れますまい。丸裸になつて差上げませう。

唯九　默りやアがれ。百兩の金に着物まで、脱がうと吐かすか。そんな物を取る盜賊だと思ひ居るか。

清吉　ヘエ、、そんなら生膽でもお入用かね。

唯九　わいらがやうな小さな膽が、目藥にもなるものかい。

清吉　それでも鰻位は利きませうね。

唯九　うぬ、人を馬鹿にしをつて、見やアがれ。いつそ斯うして。

清吉　ア、、モシ／＼、どうぞ御勘辨なされて／＼。エ、、コレ、誰れぞ來ておくんなせえ。ヤアイ、人殺し。

ト呼べど叫べど後先に、往きかふ者も並木蔭、衿髪とつて無二無三、引立ておのが大どてら、すつぽり着せて帶くる／＼、樣子知らねば氣も仰天、生きた心地はなかりける。

ト此うち、清吉を引立て、藪たゝみの蔭へ連れて行き、唯九郎、帶を解き、どてら脱いで清吉へ着せる。

アレエ、／＼。

唯九　早く着ろ／＼。

清吉　アレエ、／＼。

ト唯九郎、襦袢一つに、黑の股引の形になり、大どてらを着せる。兩人よろしく支度出來て、前へ出る。清吉ヒョロ／＼と前へ倒れる。

ア、、萬歳樂々々々、着物が手足へ搦んで、動く事がなりません。

唯九　まだ免されぬ。待て／＼。

卜唯九郎、自分の衿に掛けたる皮の財布を出し、清吉の首に掛ける。これにて、前へヒヨロ〳〵となる。

清吉　ア、、こりやアどうする〳〵。

唯九　金ならたつた四百兩。われに取られるのだえ。

清吉　そんなら、あなたは、追剝ぎでなくて

唯九　オヽ、この界隈に隱れのない、追剝がれ樣だワ。

常〽貧の盗みのそれならで、徳の餘りの夜働らき、悠々として歩み行く。

卜これにて又、清元の淨瑠璃臺を打ち返す。

清〽おゝ悲しやの聲も出ず、暫し途方にくれにけり。

卜此うち、唯九郎、六法を踏み、向うへ入る。

清吉　オヽイ、追剝がれさん、どうぞこの金だけは、宥してくんねえ。コレ、一月に萬兩を遣ひ捨てぬと、上意に背く罪とやらに行はれます。その上に、また四百兩、これがどうするものか……併し、盗人の物を持つて見てはかゝり合ひになるかも知れぬ。幸ひ誰れも居てゐぬ樣子。爰へ捨てゝ行かう。それがよい〳〵。

卜財布を取つて前へ置く。此うち、番小家より捨金番、福六、繻子の袢天の拵らへにて、捨金番の弓張り、棒を突き立て、後に窺ひゐる。

ヤレ〳〵、これでマア、ナウ〳〵とした。

福六　見附けたぞ。

清吉　エヽ、、。

卜悧りする。

福六　當人のおれが聞くとも知らず、四百兩の金を捨てるなんのと、不屆きな奴。コリヤ、おのれのやうな横着者があるゆゑ、辻々にこの通り、捨金番の小家を建て、晝夜の張り番。すんでの事、此方の越度にならうとした。サヽ、キリ〳〵首へ掛けてうせをらう。

清吉　ハイ〳〵、併しながら、この財布の金は、いま追剝がれに出合ひまして。

福六　それは、おのれが油斷と云ふもの。ウヂ〳〵すると打ちのめすぞ。

清吉　イエ〳〵、只今々々……ア、、とんだ災難に遭ふものだ。

卜行きかゝる。福六、小判の落ちたるを見附け

福六　待て〳〵。イヤ、モウ、油斷も透もなるものではないぞ。そこら一面に小判が捨てゝあるではないか。

清吉　この位な事は、大目に見たつても、いゝぢやアねえかね。

福六　罷りならん。拾ひ居らう。
清〽なんと云ひ譯、泣く／＼も、落ち散る黄金拾ひ込み縞の財布の裏道傳ひ。
與四　蕎麥にうめん、蕎麥うはうい。
常〽客を伴ひ、立出づれば。
ト此うち、清吉、財布へ小判を拾ひ込んで居る。上手より蕎麥屋與四郎、繻子好みの拵らへ、股引、腹掛けにて、そばうどん陰德屋と記せし行燈を照らし、御膳籠を荷ひ出て來る。後よりお七、繻子好みの拵らへ、鳥追ひにて、編笠に三味線を抱へ出て來り
お七　蕎麥屋さん、爰の所が風が通していゝよ。一杯おくれな。
與四　畏まりました。
ト拵らへにかゝる。
福六　イヤ、今夜は大分手間が取れた。しつかり捌けたと見えるな。おれにも一杯くんねえ。
與四　只今、直ぐでござります。
清吉　オヽ、お前を待つうちに、いろ／＼の災難に逢ひました。どうぞ早う、此方へもくんねえ。
お七　オヤマア、虫のいゝ。先口がありますよ。
ト編笠を取り、かゞんで喰ふ。
福六　ナニ、ちつと取逆上せてゐる野郎だから、仕方がねえ。蕎麥屋さん、やつてくんねえ。
與四　畏まりました……サア、お上がんなさい。
ト清吉に出し、本物の蕎麥を喰ふ。
清吉　エヽ、有り難い／＼……オヽ、旨い／＼。もう一杯其方の入れ物でくんねえ。
與四　さうだらうと思つて、拵らへて置きました。たんと上がつておくんなさいませ。
清吉　これは／＼。
トまた喰ふ事。
與四　なんだか、どうも物騒な晩でござりますな。
お七　今も、太左衛門橋の上に、千兩箱を縛し付けて、既に川の中へ、抛り込まれる所を、人が通りかゝつて、やうやう助かつたが、金は縛つたまんま。どうも仕様がないと云ふし、男泣きに泣いてゐたわいなア。
清吉　ヤレ可哀さうに、人事とは思はぬ。早く行きませう早く行きませう。
ト財布の小判を一枚出し、ソッと荷の上へ載せ
爰へ置きましたよ。

ト行きかゝる。
與四　ヤア、太え奴だ。拂ひ逃げだ〳〵。
福六　打ちのめせ〳〵。
ト胸ぐらを取り、打つ。
おセ　マア〳〵お待ち。わたしに預けておくれ〳〵。
與四　とんでもねえ。蕎麥を食はれた上、拂ひをされたりして堪るものか。
おセ　サア〳〵、この金を財布の中へ入れて、あやまつてお出でよ。お前、まだ所の樣子を知らぬのだね。
清吉　やう〳〵今し方、渡はれて來ました。何も存じませぬ。大きに衒相を致しました。
福六　ほんの出來心だから、宥してやるがいゝ。
清吉　モシ、わたしは、勝手を存じませぬが、いま追剝がれに遭ひまして、爰に都合で、五百兩ござりますが、これやどうしたら遣はれませう。
與四　どうして、この節は、たつた十兩でも遣ふ事は出來ねえが、新町の揚屋でも行つて、剽輕な女郎にでもかゝつたら、どうかなるかも知れねえ……イヤ〳〵、人の事に構つて居て、賣り損ふといけねえ。
おセ　わたしもそこらまで、一緒に連れて行つておくれな。
福六　そんなら早く片附けなせえ……コレ、月見には、しつかり仕込みなせえよ。
與四　有り難うござります。そんなら姐さん
おセ　サア、行かうわいなア。
常〽挨拶そこ〳〵、別れ行く。
落〽人も夏過ぎ、秋更けた、心詞も分たねば、たゞ茫然たるばかりなり。
ト此うち、蕎麥屋、おセ、編笠を落し、向うへ、福六は番小屋へ入る。
清吉　なんだか、一つも解らねえ。江戸なんぞで、食ひ逃げをして、打たれる者はあるが、錢を拂つたと云つて、打ちのめすといふは、所々で、いろ〳〵と變るものだ……なんだ、編笠が落ちてゐる。ア、今の鳥追ひが忘れて行つたのだらう……オヽイ、笠が落ちて居らア、と云つた所が聞えもしめえ。打ッちやつて置け〳〵。
トあたりへ捨てる。番小屋の内にて
福六　一旦、手に持つた物、捨てる事はならぬ〳〵。
清吉　エヽ、とんだ物を脊負ひ込んだ……イヤ、いま彼奴らが、金を遣ひ捨てるには、新町の廓へ行つて、太夫を

買つたら、どうかならうと云つたが、新町へ行くには、この笠は天の助けだ。何にしろ所が變ると何もかも、斯う違ふものかな。鳥追ひは春のものだに、今し方、時鳥が鳴いたと思つたら、十五夜には來いのと、成る程、着物がジメ／＼して來た……オヽ、寒い。冬になつたのかしらん。内に居る時は、ちつとばかりの借金に責められ、爰へ來たら、金があり過ぎて困るし、これを思へば、世の中に、金ほど辛いものはないなア。

ト花道へ行き、大どてらを引拔く。好みの反古染めの着附け、黑繻子の帶になり、矢張り財布は、首に掛けて居る事。これと一時に、正面の道具を切つて落す。

本舞臺、上より三間の平舞臺、櫛形の欄間、上下、銀張りの襖、此うち又、中仕切り、金襖をたて切り、所々に銀張りの燭臺を照らし、下手、床、違ひ棚爰に箱を置き、小鼓を飾りある事。以前の門口、吉田屋の掛け行燈附けて、セリ上げ、上手、紫縮緬の蒲團のかゝりし炬燵を突き出し、双方一時に道具替り、東西の窓蓋を明ける。よろしく道具納まる。

清吉　今まで、眞暗であつたと思つたら、一度に明るくなつた。ハヽア、爰は慥かに廓、向うに見えるは吉田屋とある。よし／＼、居た客の積りで上がつてくれべえ。さうだ／＼。

常〽忍ぶとすれど黄金花、散らす嵐を尋ね侘び、今日の難儀をくひしばる、羽織もがなと思へども、任せぬ浮世うか／＼と、うさんらしくも吉田屋の、内を覗いて。

喜左衞門、内にか。ちよつと逢ひたい。喜左々々。

常〽鼻に扇の横柄なり、聲聞きつけて、奧よりも。

ト踊り地になり、奧より仲居五人、以前の腰元の拵への上へ赤前垂れを掛け、出て來り

腰一　オヤ、總清さん

腰二　ほんに、あなた、お騙しなされうと思ひなされて

兩人　マア／＼、お入りなされませ。

清吉　これはしたり、さりとては。

腰三　イエ、また其やうな事仰しやつて

腰四　脇へお上がりなされうと思し召して

皆々　ハテマア、お上がりなされませいなア。

ト手を取り、無理に内へ入れ

腰一　マア／＼、お炬燵へお入りなされませ。

腰二　旦那さんも、おかみさんも、毎日あなたのお噂ばか

り、申して居られました。
腰三　幸ひ今日は、こちの內の餠搗き。そこへお大盡さまのお出でなさるといふは
腰四　此やうためでたい事は、ござりませぬ。
五人　ようマア、お出でなされましたなア。ト辭儀する事。
清吉　なんだか、おれには口をきかせねえで、まだ門口でいろ〳〵する事があるのに、とんと番狂はせだ。併し、大分冷えるの。
腰五　あなた、これをお掛けなされませ。
ト黑の羽織を着せる。此うち、門口へ小判、一分銀、二朱金、澤山降る。
モシ〳〵、あなた、冷える筈でござります。表を御覽なされませ。また降つて參りました。
清吉　併し、雪空でもなかつたがなア。
腰一　イヽエ、雪ではござりませぬ。小判と二朱金、丸いお金も交つて。
清吉　此方の方は、いつでも、こんな事があるかね。
腰二　サア、小判なら小判、一朱なら一朱と、片附いて降るとよろしうござりまするが。

腰三　間違つて降るので、道が惡うて、歩かれませぬわいなア。
清吉　この鹽梅ぢやア、むづかしいわえ。
五人　エヽ。
清吉　イヤサ、花魁はどうだえ。鹽梅が惡いやうに聞いたが。
腰一　サア、あなたの事をお案じ申して、去年の暮れから引いてお出でなされましたが、やう〳〵御全快なされました。
腰二　まだお目が惡うございります。
清吉　目が惡い……しめた。
腰三　今日は丁度、阿波のお客がお出でなされて、奧へ來てゞござります。
清吉　へエヽ、そりやア色男かえ。
腰四　イヽエイナア、酒の上の惡いお方で、花魁を蹴たり踏んだりなさんすわいなア。
腰五　梅ケ枝さんは、わたしがお呼び申して來ようわいなア。
清吉　オイ〳〵……花魁は夕霧でなくて、梅ケ枝かえ。
腰一　また御冗談を仰しやりますかいなア。

腰二　ほんに、マア／＼、繪濟さま／＼と、御表德は存じて居りまするが、あなたのお名前を、ナア、皆さん。
清吉　おれが名か。梅ヶ枝の相方だもの、なによ……傳兵衞だ。
五人　エヽ。
清吉　梅ヶ枝傳兵衞……長谷川町だ……自體は、もと侍ひだ。侍ひの時は、梅ヶ谷の治郎直實。
腰三　ホヽヽ、あなたのやうな、お口の輕い方もないもの。太鼓持ち衆でも、跣足でござりますわいなア。
腰四　なんにせい、めでたい餅搗きの事でござりますゆゑ。
五人　ほんに、旦那さんへお知らせ申して。
　ト立ちかゝるを
清吉　オッと待つた。祝儀日の事だから、先づ銘々へ惣花だ。
　ト財布を出す。
腰一　ほんに、嬉しさのまゝ、忘れて居りました。
腰二　家例でござります。ザッと私しどもから
五人　お祝ひ申し上げまする。
　ト後より三方に、銘々水引を掛けし祝儀包みを出し

腰三　早う、奥へお知らせ申しませう。
腰四　あなたは、これに御緩りと
腰五　サア、皆さん
五人　ござんせいなア。
　ト奥へ入る。
清吉　餅搗きだといふから、二三十兩づゝも、祝儀をやらうと思つたら、却つて、手盛りを食つた。さうして、あの女どもは、鶴の池で見たやうな顏だが、廻し者ぢやねえか知らん。なんでもこの鹽梅ぢやア、遣ひ切る事は出來ねえ……オヽ、いゝ事を思ひ出した。三尺餘りの瓶を緣の下へソッといけ込んで、遣つた振りをしちやア、中へ打込むより仕方がねえ……三尺餘りの瓶が欲しいなア。
常〽二八十六で文つけられて。
なんだと、二八十六文で、蕎麥を食つて、踏み附けられた……もう唄に拵らへやアがつたと見えるわえ。
清〽二九の十八で、ついその心。
　ト金を數へる事よろしくあつて
どうしても、遣はれぬは、この身の災難……ヤ、もう歸りまする／＼。併し、此まゝ歸つては、お局さまへ云ひ

譯が。
清〽すまぬ心の中には暫し、澄むはゆかりの月の影。
常〽四五の廿なら、一期に一度、わしや帯解かぬ。
彼奴等は、四十包みを五人、銘々寄越しやアがつた。四五の二百兩なら、一時に一度と、影で賴んで謳はせるのだな……オヽ、梅ヶ枝といふ女郎は、三百兩の金に困つてゐると聞いた……先づ三百兩金の、へる道は出來たといふものだ。
清〽財布を脇へ奥座敷、待ち設けたろ梅ヶ枝は、明け暮れ戀しい詰り顔。
常〽それと見るより、胸づくし
ト奥より梅ヶ枝、眼病の傾城、紅絹の裂れを持ち出て、よろしく窺つて、だしぬけに
梅枝　コレ。
清〽なんぞいなア、源太さん、お前と一體斯うなつたは、並大抵の事かいなア。
常〽色をも戀も打越して、心底づくの二人が仲を、お前の心に隔てがあらば、わたしも云はにやならぬ、えゝ心强や、胴慾と。
清〽袖から袖へ手を入れて、じつと引き寄せ、引きしむれば。
常〽とつて突き退け。
清吉　エヽ、側へ寄りやアがるな。この狐女郎の猫傾城の萬歳傾城め。
梅枝　ナニ、この梅ヶ枝を、萬歳傾城とはえ。
清吉　オヽ、その因緣を云つて聞かせよう。
ト床の間の鼓を取つて來り
侍ひ衆に、踏まれたり、蹴られたりするを、萬歳傾城と云ふわいやい。
常〽誠にめでたうさむらひける。
しかも、足駄穿いて蹴るやら。
清〽年立歸る足駄にて、誠にめでたう侍ひける。
常〽たとへ蹴られても、踏まれても、志す所はお前の爲。
まつちやらこ、ヤ、まつちやらこ。
清〽だんない〳〵。
常〽ほゝやれ〳〵。
清〽だんない。
常〽ほゝやれ。
清〽だんない〳〵大事ない。

常〽手振りも譯もないませて
清〽更にせうどは。
清常〽なかりけり。
梅枝　踏まれたり、蹴られたりした代り、万兩を遣うても
らふ約束にしたわいなア。
清吉　ナニ、客に無心を云つてやつて、貰ふ約束をした……
……コレ〳〵、こなたは、三百兩の金に困つてゐるといふ
から、わざ〳〵持つて來た。梅ヶ枝は、利足にとんと氣
が附かずと云ふ川柳があるから、ソレ、これが利足とし
て、四百兩。サア、受取んなせえ。
梅枝　ア丶、モシ、情ない事云はしやんす。お前の爲に、
無間の鐘を撞いてからこの方、晝より金に責められて
所詮生きては居られぬわいなア。
清吉　ナニ、おれゆゑに、金に責められると云ふのか。ハ
ハア、おれも金に責められる。こりやアお前が死ぬなら、
次手におれもやッつけよう。
梅枝　エ丶、嬉しうござんす。
ト幕明の脇差を見附け
清吉　オ丶、こりやア先刻の脇差だ。
梅枝　早く殺して、

清吉　オ丶、合點だ。
清〽云ふ間も涙打ち拂ひ、屏風取出し、立て廻し、盧生
が枕それならで、飯炊く隙に三ヶの津。
常〽一目に見たる逆夢の。
ト兩人、心中のこなしにて、屏風を打廻す。
常清〽眠りは覺めて。
ト双方の太夫座を消し、大ドロ〳〵にて以前の番ひ
蝶、屏風の内へ入る。
本舞臺、以前の艪清内の道具に納まろ
ト黒八、番太郎、奧より出て來り
番太　大きに兄貴、御苦勞であつた。
黒八　内の親方が、手傳つてやつてくれろと賴みだから、
今朝から内の仕事も儘にして……併し、あの艪清と云ふ
人は、い丶人だなア。
番太　誠にい丶氣前の者サ。それだから、二階の障子も貼
つてやりました。ヤ、先刻引越して來て、屏風を立て廻
して寐てゐるのだな。
黒八　イヤ、誠に氣樂な者だ。なんだが、うなされてゐる
やうだ。

番太　逢ひねえ。怖い夢でも見てゐるのだらう。
黑八　おかみさんに、知らせてやらう。
兩人　オヽイ、おかみさん〳〵。
　ト屛風の後を廻り、上手へ入ろ、薄ドロ〳〵になり、上手よりおてふ、膳に茶碗、向うづけなどを載せて、持ち出て來り
てふ　こちの人、飯が出來たぞえ。オヽ、襲はれてぢや。
　ト膳を置き、脇差を鞘ごと持つて、屛風を押しこかす。内に淸吉、元の形に變り、振り廻してゐる。
　コレ、お前は、どうしなさんした。危ない。爰を放しなさんせ。
淸吉　エヽ、覺悟しながら、今となつて、
　ト心附き
　ヤア、わりやア嬶。そんなら爰は。
てふ　池の端の、越して來た内でござんす。
淸吉　そんなら、今のは、フウ……夢であつたか。
てふ　エヽモ、しつかりしなさんせいなア。
淸吉　コレ嬶、おれは、大坂の鶴の池の畔に入つてなア……それから大臣さまになるところを、やう〳〵斷りを云つて、新町の吉田屋へ上がつて、惣一番と云ふ花魁を買つたと思やれ。
まさ　お前も、この中で、女郎買ふどころぢやござんすまいがな。
淸吉　サア〳〵、おぬしにも濟まぬと云つて、金があり剩つて、心中をする所であつた。
まさ　ほんにマア、油斷も透もなるものぢやござんせぬ。
　ト膳を出す。向うより手代新兵衞、逸散に出て來り、直に内へ入り
新兵　オヽ、淸吉どの、大事だ〳〵。
兩人　ナニ、大事とはえ。
新兵　旦那さまに譯を云つて、やう〳〵娘御の身賣りを留め、雪の下の質屋へ行つて聞けば、期日が切れたから、餘所の侍ひに賣り渡した。併し、今日中に、元利を持つて來たら、渡さうとの事。
淸吉　よし〳〵。金なら、何千兩でもある。ソレ。
　ト立ち上がり、後を見て
　オヽ、夢だつた。
てふ　エヽ、モウ、それどころぢやござんせぬ。こりや、なんとしたら
三人　よからうなア。

明治七年十月中村座所演番附

ト橋がゝりより、伴藏、走り出て、内へ入り

伴藏　コレ〳〵、最前うろたへて、大切な寶と、此やうな行李と取違へて參つた。

清吉　ヤ、わりやア間男だな。

伴藏　サア〳〵、七兩二分位はなんでもない。此方は百兩の……オヽ、爰にあつた。

ト以前の行李に手をかける。

清吉　イヽヤ、現金に寄こさぬうちは、こいつはやらぬ。

伴藏　これはしたり、放せ〳〵。

ト爭ふ。これにて封印切れて蓋明き、内より件の一軸出る。新兵衞取上げ

新兵　ヤヽ、こりや疑ひもなき太子の眞筆。

伴藏　南無三、それを。

清吉　ハヽア、その寶船を枕にしたゆゑ、結構過ぎて困つた正夢。

新兵　此奴は、旦那へ仇なす伴藏。

伴藏　それ知られたら。

トかゝるを、立廻つて

てふ　心を碎いた甲斐あつて

清吉　寶も手に入る上からは。

新兵　御主人方は、本地へ御歸參。

伴藏　ヤア、めでたい〳〵。

清吉　大きにお世話だ。

ト伴藏、ちよつと立廻るを、見事に投げる。これにて頭取出て

頭取　先づ今日はこれぎり。

めでたく打出し。　ひやうし幕

邯鄲枕物語（終り）

城木を而后の墨畫は
娘八丈の正面摺
派手な金江の隈取は
女藝者の極彩色

東都名物錦繪始

上中下
續三枚

初演の繪番附

東都名物錦繪始 ―― 鳥目の一角

序幕

柳島妙見の場
根岸の場

役名――秋月一角。金江金五郎。仲町藝者、小三。佐藤銀平。高木伴藏。松田軍兵衞。萩原千次郎。菱川息女、千種。古筆見、六浦良助。儒者、薄洞。城木屋聟、喜藏。同手代、丈八。同丁稚、金太郎。和國橋の髮結ひ、才三。粂本女房、おいと。粂本の娘分、おたね。粂本のおゆり。妙見の水茶屋、おまつ。木挽き、伊太郎。同、松五郎。船宿、辨竹。船頭、長吉。中間、谷平。同、關内。金毘羅參りの傳。腰元、おいね。下男、太助。

本舞臺、三間の間、一面の繪馬堂。茶店の飾り附け。下の方に梅の立ち木。下座の入り口、大きなる松の木吊り寄せ「影向きの松」と記しある札を立て、すべて柳島妙見地内の體。幕の内より喜藏、やつし、町人の息子にて、丁稚金太郎を連れ、下座の方を向いて休んでゐる。下の方に、金毘羅參りの傳、金毘羅參りの形にて、天狗の面を箱に附けたるを背負ひ、錢を貰うてゐる。繪馬堂の脇に木挽きの伊太郎、同じく松五郎、木綿やつし、木挽きの拵らへにて、竹の先に千社參りの札を附け、軒口、柱などに貼つてゐる。仕出し大勢、茶店に腰を掛けてゐる。妙見の水茶屋おまつ、茶屋女にて、茶を汲んでゐる。仕出し大勢、花道と、兩方より行き違ふ。この見得、通り神樂にて、幕明く。

喜藏　南無妙見大菩薩さま〳〵。

傳　金毘羅さまへ御信心の願主諸願

喜藏　コリヤ、金太郎よ。ちよつと茶店で休んで行かう。

金太　ハイ〳〵、それがようござりませう。

ト床几に腰を掛ける。おまつ、茶を汲んで出す。仕出し皆々、茶を飲んでゐて

仕一　ドレ、これから龜井戸へ行つて歸りませう。

仕二　玉屋か、巴屋で、一杯飲んで行きませう。

仕一　サア〳〵、ござれ〳〵

ト通り神樂にて、仕出し皆々下座へ入る。向うより千種、振り袖、屋敷娘の拵らへ。腰元おいれ附き添ひ、仲間谷平、供をして出る。花道にて

谷平　申し、お孃樣、さぞお草臥れなされましたでござりませう。幸ひあそこで、ちよつと御休息なされませ。

千種　今日は大事の用があつて、妙見さまへお參り申す次手に、待ち合はさねばならぬ人があるわいの。

いれ　ほんに、それ〳〵。古筆見の良助どのが、掛け物の目利きを極めて、この柳島まで持つて見える筈ぢやござりませぬか。

千種　サイナウ、それでマア妙見さまへ、早うお參り申さねばならぬわいの。

いれ　左樣ならば、マア御本堂へ、お參りなされませいなア。

千種　わしが願ひの叶ふやう、其方衆も共々に、よう拜んでたもいの。

いれ　ハイ〳〵、畏まりましてござります。サア、谷平どの。

谷平　サア〳〵、お參りなされませ。

ト始終通り神樂にて、千種、おいれ、谷平を連れて、下座へ入る。此うち繪馬堂より、伊太郎、松五郎、千社參りの札を貼つて出て來て

伊太　マアこの繪馬堂で、大概貼り殘しはあるまい。

松五　後の方に山の手の札がたんと貼つてある。また一服のんでから貼らう。

伊太　本堂は人込みで貼り憎いの、姐さん。

まつ　アイ、千社參りのお札は、どなたも大概この繪馬堂でござりますわいなア。

ト喜藏、二人を見て

喜藏　オヽ、木挽きの伊太郎、松五郎、長棹持つて岡釣りに出たかと思やア、千社參りの札貼りか。

伊太　オヽ、城木屋の氣旦那喜藏さま。ようお參りなされました。

松五　初春早々から信心でござりますなア。

傳　その御信心の若旦那から、金毘羅さまへ御名代の、お初穗を願ひまする。

喜藏　これはしたり、此方は宗旨違ひだ。

伊太　出たのがない。通れ〳〵。

松五　妙見さまの地内へ、金毘羅とは惡い思ひ附き。

伊太　併し、おれは信心だから、お初穂を上げよう。
ト錢を遣る。傳取つて
傳　御信心のお方、息災延命、敬つて念じ奉る。
伊太　コレ／＼、おれは達引いてお初穂を餘計に遣つた。もちつと念を入れて拜みさうなものだ。
傳　ハテ、それでも僅か十二銅では、敬つて念じるには及ばぬ。どつとあやまつて念じ奉る。
ト通り神樂になり、下座へ入る。
伊太　あの金毘羅めも、朝からむくつてゐる樣子だ。
まつ　毎日酒に醉うて居りますわいなア。
喜藏　イカサマ、彼奴飮んだくれと見えるわえ。ハテ、浮世は色と酒ぢやなア。
伊太　其うちにも喜藏さまなどは、美しいおかみさんはあり、
松五　金は不自由なく、この上なしの身の上で、まだ慾張つての神だゝきでござりますなア。
喜藏　何を云ふぞい。その色の道が、思ふやうにならぬによつての神參りぢや。
伊太　あのお駒さんといふ嫁がありながら
兩人　思ふやうにならぬとは。

喜藏　さればいやい。あのお駒めは、ズツと小さいからの云ひ號けで、二人ともに頃合ひの女夫になつて、三國一を謳ふ筈を、どこのはずみの間違ひで、三味線の黒焼でも飮み居つたかして、ツン／＼して居るわい。
兩人　ムウ、そんなら聟といふ名ばかりで、
喜藏　猿鷄のとん／＼かゝぢや。
兩人　して、その心は。
喜藏　ハテ、お榮が前ぢやといふ事。
兩人　おきやアがれ。
喜藏　そこで先づ聞いてくれ。おれも、モウ／＼、なんの別にあれ一人が女でもなし、吉原か深川でワッサリと女郎買ひと、そこら中買ひ廻つても、おれが氣に入つた女がない。又あつても、其奴は思ふやうにもしなしをらぬ。こりやおれが因果であらうと、それから淺草の地藏樣へ、七日の間跣足參りをして願うたぢや。向うへ行つて地藏樣へ、私しが因果でござりまする。どうぞあのお駒が得心いたしますやうになされて下さりませ。たつた一度でもようござりますと、一心に掛けて願うたら、コレ、地藏樣の御利生は爭はれぬものぢや。
兩人　ハテ、そりやどういふ御利生でござりまする。

喜藏　サア、聞いてくれ。お駒が云ふには、申し、喜藏さんえ、どうぞわたしは、ちつと心に願ひがあるによつて、御鬮が取つてほしいと云ふによつて、オツと合點呑み込んだと、直ぐに今朝むつくり起きるやいな、この柳島へ來て、また百度參りぢやが、つら／＼と考へ見るに、なんぼ材木屋の娘でも、生娘ではもうない筈。下積みにする栗丸太、虫が附いてゐやせまいかとも思はるゝて。

伊太　ア、イカサマ、さう云つて見れば、ちつと氣障な事がござりますわえ。

喜藏　氣障な事とは、何が氣障な事。

伊太　松五郎、われも知つてゐるであらう。和國橋の才三が事よ。

松五　ウヽ、成る程。あの髮結ひの才三が。イカサマ、彼奴はあの近所でも、音羽屋の息子に似てゐるといつて、娘子供が評判するが、ほんに彼奴は氣障な奴だわえ。

喜藏　ハヽア、誠に燈臺下暗しと、今まで心が附かなんだは、この喜藏が一生の誤まり。得てあんな奴に人知れず、手入らずを締められるもの。こりやよい所へ氣が附いた。マア、第一さうあらうが、あるまいが、あんな奴がへちまふと、イカサマ、ちつと氣障にもあり。

松五　若旦那、これからわしら二人が氣を附けて、怪しい事があつたら、ナア、伊太よ。

伊太　さうよ。二人が仲を引き割るは、わツちが商賣。木挽きの一德。

松五　大方今日は仕事を休んで、爰らへ來るのでござりませう。

喜藏　そんなら、彼奴がうせたなら

伊太　引ツつかまへてけい、じめ汁。

松五　しゞめ汁は、裏門の料理屋で

喜藏　前祝ひに一杯やらうか。

兩人　若旦那喜藏さま。

喜藏　サア、來やれ。

ト通り神樂になり、喜藏、伊太郎、松五郎、金太郎も附いて下座へ入る。直ぐに出の唄になり、向うより仲町の藝者小三、深川藝者の拵らへ。粂本の女房おいと、茶屋の女房の拵らへ。粂本のおゆり、茶屋女の形。船頭長吉、誂らへの額を風呂敷に包み、抱へ出る。

長吉　ヤレ／＼、土手通りは道が惡いで、大きに困りました。

ゆり　これぢやによつて、下駄で來てよかつたわいな。小

三さん。この額はあの繪馬堂へ上げなさんすのかいなア。
いと　小三の姿を寫した額ぢやによつて、大方御本堂へ納めるのであらう。ナア、小三さん。
小三　サイナア、わたしもさう思うたけれどな、お堂はたんと提灯や何かで込みあうてあるによつて、あの繪馬堂へ上げる筈に、この間、頼んで置いたわいなア。
長吉　そんなら早くあの茶店へ
ゆり　サア、ござんせいなア。
　ト矢張り右の唄にて、皆々本舞臺へ來る。おまつ出て
まつ　これは小三さん。皆さんも、ようお參りなされましたなア。
小三　おまつさん、この間、お前に頼んで置いた、額を持たして來たわいなア。
いと　ほんに、成る程、御本堂よりは爰が、晴れ〴〵としてよいわいな。どこぞよい所へ、早う上げてもらひなさんせいなア。
まつ　小三さん、お前がこの間さう仰しやつたによつて、御本堂へ斷わり云うて、錐と鐵槌借りて置きましたわいな。
　ト茶店の引出しより鐵槌と錐を出して渡す。
小三　そりやお世話でござんしたな。長吉どん。次手によい所へ上げて下さんせいな。
長吉　アイ〳〵、合點でござります。
まつ　ドレ、わたしも手傳うてあげうわいな
いと　小三さん、其うちマア、一服のみなさんせいなア。
まつ　サア、お茶をお上がりなされませ。
　ト小三、おいと、床几に腰かける。長吉は腰掛けて、繪馬堂へ額を打ち附ける。おゆり捨ぜりふにて手傳ふ。此うち通り神樂になり、向うより高木伴藏、袴、羽織、大小、中間一人連れ、後より儒者薄洞、胴貫、頭陀袋、儒者の拵らへ、檜笠を持ち、出て來り
薄洞　伴藏どの、よい所で面會仕りました
伴藏　薄洞先生、身共もいろ〳〵と用談が重なつたるところ、丁度幸ひ。
薄洞　然らば、あの茶店で、暫時御休息。
伴藏　サ、お越しなされ。
　ト兩人本舞臺へ來る。此うち皆々額をよき所へ掛ける。
長吉　丁度こゝらがよい所でござります。
ゆり　雨に濡れてようござんすわいなア。

いと　ほんによう出來たわいなア。
伴藏　オヽ、仲町の小三。妙義參りか。
小三　伴藏さん、よう參りなされましたなア、
いと　小三さん、あなたはお近附きかいなア。
伴藏　近附きの段か、小三とは大抵必安い事ではない。
薄洞　伴藏、すりやこの婦人が噂に聞いた、仲町の小三とやら申す藝者か。
伴藏　かね〴〵貴殿へお話し申した、秋月一角どのが執心の額の小三。なんと綺麗な者でござらうがや。
薄洞　噂に聞いたが、逢ふは始めて。ハテ美しいものでござる。
伴藏　それだによつて一角どのも、眞赤になつてのぼせてゐられます。
小三　伴藏さんの久しいものぢやわいな。
薄洞　聞けば、小三は、常々から風雅の道に心を寄せ、殊に、瀧本流の手蹟が見事と聞いたが。
ゆり　アイ、小三さんのお手は見事ぢやと、深川中での評判でござりますわいなア。
まつ　ほんに、小三さん、あの梅の木。請地の講中から納めもの、あの梅に、短册が附けて置きたうござります。
なんぞちよつと書いておくれなされませいなア。
いと　小三さん、おまつさんの云ひなさんす事ぢや。書いて上げなさんせいなア。
まつ　短册も丁度貰うて置きましたわいな。
　ト硯箱と短册を前へ置く、
小三　其やうに云ひなさんす事ぢやに依つて、幸ひあの額へ附けて上げうと思うた梅の發句
　ト云ひながら硯箱を引寄せ、短册に發句を書き
これでも大事なくば、マア、堪忍して下さんせいなア。
まつ　これは有り難うございますわいなア。
　ト薄洞取つて
薄洞　これは、ドレ〳〵、ちと見せやれ。……「梅が香も君がほだしや神の庭」……成る程、松花堂、一しほ見事。
これでは一角どのが熱心も無理ではない。
小三　人さんにお目に掛けるもお笑ひ草。お恥かしうござりますわいなア。
長吉　時に、小三さん、お別當樣へ、ちよと寄つて行かずばなりますまいが。
小三　おまつさん、ちよつと一緒に連れて行て下さんせいなア。

まつ　アイ〳〵。ちよつと行つて屆けて參りませう。マア、この短册は、この梅の枝へ斯う附けて……、モシ、ちつとの間、お免しなされて下さりませ。サア、小三さん。
小三　おいとさん。お前も一緒に。
いと　わたしは次手に押上へ寄る所があるによつて、マア、お前方は先へござんせいなア。
ゆり　そんなら早う、小三さん。
小三　どなたも、おゆるりとお休みなされませえ。
ト唄になり、小三、先におまつ、おいと、おゆり、長吉附いて下座へ入る。後に薄洞、伴藏殘りて、こなしあつて
伴藏　先生、かね〴〵お手前と申し合はした一儀、首尾よく取計らひくれ召されたか。
薄洞　如何にも。その儀は身共が折を窺ひ、まんまと首尾よく、盜み取つたる宗近の貫汲刀。
伴藏　コレ。
ト押へる。合ひ方。伴藏、薄洞に家來がゐると目交せする。
中間　コリヤ、其方は別當方へ參つて扣へて居れ。
中間　畏まりました。
ト下座へ入る。薄洞、頭陀袋より箱を出し
薄洞　即ちこれが萩原の重寶、貫汲刀の小柄。
ト伴藏取つて改め見て
伴藏　誠に萩原の珍藏、貫汲刀の小柄。この度、京都花園家より仲立あつて、菱川家との婚姻の取結び、双方の寶取替へ渡すべき武將の嚴命。
薄洞　菱川家の寶といふは、衣通姬の畫像。貫汲刀と婚姻の印し、引替への約束。
伴藏　兼ねて朋友松田が惚れてゐる菱川の娘千種。現在從弟の萩原千次郎に云ひ號けあれば、容しく心を苦しめ居つたが、兩家の寶取替へ渡せとあるを幸ひ、この貫汲刀を人知れず、菱川家の寶物と入れ替へ、あの方の寶物を盜み隱せば、仲立の指圖を待ちかね、私しに貫汲刀を娘の方へ贈つたなれば、千次郎は追放。
薄洞　その謀り事をなすは豐島先生、兩人へ出入りの奧醫めは幸ひ、一件は身共ならでは事ならぬと仰せ御尤も。
伴藏　どうぞこの貫汲刀と、あの方の卷き物と、ソツと摺替へてもらひたい。
薄洞　如何にも、その儀承知ではござるが、御覽の通りに旅行の體。それゆゑこの一品も、先づ貴殿へ返却いたす。

明日急に西國へ出立いたせば、なか〳〵斯様な事に取合つては居られぬ。先づ、貫汲刀は其許へ返却いたしまする。

伴藏　アヽ、コレ〳〵、先生。成る程、旅立ちで心が急くであらうが、何分、いま爰から、此まゝで旅行召されてはつまらぬもの。

薄洞　イカサマ、世話に申す、十の階子を九つまで、佛作りて魂を入れぬやうなものでござる。

伴藏　幸ひ今日、菱川家の娘千種も妙見へ參詣なし、古筆良助が目利きの畫像、爰で受取る約束。

薄洞　すりや、アノ千種が

伴藏　さすれば丁度折に幸ひ、明日の旅立ちなり、コレ。

ト紙入れより金を取り出して包み、薄洞に渡し

憚りながら餞別のしるし、駕籠にでも乘つてお行きやれ。

ト薄洞、金を取つて

薄洞　さほどに仰せらるゝ事なら、今日、折を窺がつて、寶物を入れ替へませう。

伴藏　首尾よく行けば、また身共が

薄洞　嚢中自ら御合點かな。

伴藏　この伴藏が承知でござる。

薄洞　然らば何かは木蔭にて

伴藏　サヽ、お出でなされい。

ト通り神樂になり、二人こなしあつて下座へ入る。矢張り右鳴り物にて、向うより六浦良助、袴、羽織、町人の拵らへにて、男に風呂敷を持たせ出る。後より髪結ひ才三、ぱつち、尻からげにて、妙見の札を頭へ差し、出て來る。

才三　申し〳〵、良助さま、お前様も妙見參りでござりますか。

良助　オヽ、これは和國橋の才三どんか。わしはお屋敷の御用で、妙見様へ參る次手に、御用を勤めるのでござりまする。

才三　私しは又、御年始の餘慶かと存じました。マア、あの茶店で一服お上がりなさりませぬか。

良助　イカサマ、あれで待ち合せるうち、一服のんで行かう。

才三　サア、お出でなされませ。

ト本舞臺へ來て

コレ、奴、てめえは別當様へ行つて、菱川のお嬢様がお參りなされたか、聞き合せて來やれ。

奴　ハイ〳〵。
ト下座へ入る。才三、良助、床几に腰を掛け

才三　春になつては、ちつと日も延びたやうでございますなア。

良助　イヤモ、大きにゆつたりしまするわいの。
ト始終通り神樂にて、向うより城木屋手代丈八、手代の拵らへ。太助、同じく下男の拵らへにて連れ立ち出て

丈八　オヽ、和國橋の才三どん、年が明けてまだ逢ひませぬの。

才三　城木屋の番頭さん、ようお參りなされました。オヽ太助か、貴樣も一緒か。

太助　番頭さんと一緒に、冬年の掛け殘りを集めがてらに廻つて來ました。マア、お達者でめでたうございます。去年はちよつと歲暮に行きます筈を、忙しいで無沙汰になりました。

才三　ナニサ、奉公人の身だものを。親方の首尾さへ大事にすれば、それが第一といふもの。ナア、申し、番頭さん。

丈八　それ〳〵。イヤモ、この太助はこなたの請け判で、城木屋の內へ奉公。正直だといつて親方も喜んでゐられる。

才三　なんでもマア、辛抱して勤めるがよい。正月だといつても、內へも早く歸るがよし、使ひに出ても道寄りなんぞはせぬがよいぜ。

太助　イヤモ、芝居近所でありながら、去年ちよつと堺町を見たばかり。四日市の夜鷹さへ、そゝつた事はございませぬ。

丈八　ほんに四日市といへば、通り町の尾張屋へ行つて、冬年の小割り貫の十丁の代が參りませぬと、斷わりを云つて來て、直ぐに內へ歸るがよい。

太助　ハイ〳〵、合點でございます。そんなら才三さま、ゆるりとお參りなされませ。
ト懷より書附けを出してやる。太助取つて

才三　隨分早く歸らつしやいよ。

丈八　また安宅の長屋をひやかすまいぞよ。

太助　ナニ、數の子ぢやあるまいし。
ト通り神樂になり、向うへ入る。

丈八　ハヽヽヽヽ、正直な奴でござる。時に、この息子どのは、もう參られたか。どうぞちよつと逢ひたいものだ

初演の錦繪　尾上松助の才三

瀬川銀次郎のおまつ　澤村源之助の金五郎

が。

ト下座よりおまつ出て

まつ　これは、マア、どなたもお免しなされて下されませ、ツイ店を明けてござりますわいな。

トめい／＼に茶を汲んで出す。下座より良助の男出て來る。

良助　オヽ、奴か。お孃様はお出でなされたか。

奴　ハイ、お別當樣にお出でなされますが、あなたもお出でなさりませぬか。

良助　ドレマア、ちよつとお目にかゝつて來ようか。

丈八　おれも喜藏さんに逢つて來ませう。

才三　そんなら參つてお出でなされまし。

良丈　ドリヤ、行つて來ませうか。

ト通り神樂になり、良助、男を連れ、丈八も下座へ入る。才三あとに殘り、繪馬堂をいろ／＼見て

才三　この繪馬堂には、いろ／＼な額がかゝつてあるわえ。爰で茶を飲むは大當りだ。姐さん、もう一つくんなさい。

ト通り神樂になり、向うより金江金五郎、着附け、袴、大小にて出で來り

金五　閏月があるにしては、餘程早い梅の綻び。柳島の春色は又格別。ドレ、あの茶店で、足を休めて參らう。

ト始終右の鳴り物にて、本舞臺へ來て

ちと許しなされませ。

トこちらの床几に掛ける。おまつ、茶を汲んで行く。才三矢張り腰を掛け、繪馬堂を見ながら

才三　モシ、この繪馬堂には、新らしい額がたんとかゝりましたね。

まつ　お堂は提灯がたんとあるので、大概爰へ上がりますわいな。

ト金五郎も繪馬堂を見る事あつて

金五　イカサマ、どれも／＼面白い額が掛けてある。

トかすめて鳥追ひの三味線、通り神樂打つてゐる。

才三　モシ、あの新らしい女郎の繪馬は、いつ上がりました。しかも豐國が書いたのだね。

トよく／＼見て

なんだ、「願主福田屋うち額の小三。」……ムウ、福田といふから、なんでも商賣屋から上げた額と見えるわえ。

まつ　アイ、仲町の藝者さんの、上げなさんした額でござりますわいな。

才三　それにしては、ちんぷんかんを上に書いたが、女の手なら餘ッぽど捻つた藝者だわえ。
金五　額の小三と記したところは、いかさま女の手蹟と見える。
まつ　左やうでござりまする。仲町での噂ぢやさうにござりまする。瀧本流とやらを見事に書いてぢやというて、あの梅の枝に附けてある短册も、小三さんが書いて置かしやんした、梅の發句でござりますわいな。
金五　ムウ、梅の發句を書いて置いたとは。ドレ〳〵。
ト梅の枝の側へ行き、短册を見て
「梅が香も君がほだしや神の庭。」……ハテ、これは見事な手蹟ぢや。うるはしい姿の風俗といひ、殊更風雅の道にも心ある小三とやら。藝者とあらば賣色も同然ぢや、ハテ、優しい女もあればあるものぢやなア。
才三　不躾ながら旦那、お前様は繪が、きついお好きと見えますわえ。
金五　ハヽヽヽ。イヤ、餘り美しう見事に書いたこの姿繪。遊里の藝者などに、斯程の人品は少ないもの。殊に又、手蹟といひ、一通りの藝者ではあるまいて。
才三　イカサマ、藝者でも餘ッぽど妙な奴と見えます。さうしてこの繪は畫いた通りなら、どうか路考に似てゐる所もある、……成る程、女を畫かせては、豐國がよく畫きますねえ。
ト始終金五郎はこの姿繪馬に見惚れゐる。この時、下座より木挽きの伊太郎、松五郎出掛けゐて囃き合ふ。才三これを知らずに
ヤレ〳〵、あんまり繪馬に現を拔かれて。ドレ、これから妙見樣へお參り申して來よう。
ト立ち上がる。伊太郎、松五郎ズッと出て
伊太　オヽ、才三か。べら坊にいゝ春だの。
松五　大分工面がいゝかして、すつかり出立の妙見參り。
伊太　コレ、女郎買ひならおいらも行かうぜ。負つてくりやな。
才三　オヽ、木挽きの伊太郎。松五郎。いつもの千社參りか。
伊太　インニヤ、おいらは借錢參りだ。
松五　お主ア大分娘に色があるさうで、工面がいゝと見える。ちつとおいらに貸してくりや。
伊太　八の野郎が附き馬の出入りで、お主が床を叩ッ毀した時も、木挽き仲間が暖簾まで達引きしてやつた事があ

らア。
松五　その羽織でも脱いで貸してくりやな。
才三　お主達もどうしたものだ。初春早々、殊に神參りの途中で、云ふ事があるなら、床へ來るとも、內へ來るともしたがよい。そして見りやア、どこでか飲んで來たのか。マア機嫌よくして參るがよい。
伊太　飲まうが、飲むまいが、おいらが勝手だ。なんでもちつとばかり貸してくりやな。
才三　ハテ、しつこく物を云ふもんぢやアないわな。
松五　コレ、片商賣は廻り髮結ひ、半分色で食つてゐる才三だ。
伊三　色に足じまひをしてもらつたら、おいらに達引は出來さうなものだ。
ト才三ムッとする。
才三　此奴等は大きにお世話を吐かしやアがるわえ。人樣の聞いてござるに、おれが色で食はうが、食ふめえが、うぬらが世話になるものか。默つてゐりやアいゝかと思つて、此奴等ア、何か根のあるものゝ云ひやうだ。誰れぞに頼まれて來たな。
伊太　やかましいわえ。根があるの、なんのと、夜店で福壽草を買やアしめえし。
松五　むづかしい出入りはない。おいらと一緒にあゆびやアがれ。
ト才三が胸倉を取りにかゝる。
才三　エヽ、見つともない、何をしやアがる。
ト振り放して突き倒す。有りあふ縫ひぐるみにて打つてかゝる。才三直ぐに引ッたくり、叩き倒す。これにて兩人下座へ逃げ込む。
才三　うぬら、どうするか。
ト追ひ掛けようとするを、金五郎留め
金五　アヽ、コレ／＼、若いの。もうよい。料簡してやらつしやい。
才三　太い奴等でござります。
金五　サヽ、善惡は人が承知ぢや。料簡召され／＼。
才三　お武家方ならあんな奴は、すぐにポンとやつておしまひなさるゝに。併し神參りの途中、逃げたら、儘に致しませう。
金五　それがよい／＼。
トこの時開帳の太鼓打つ。
あの太鼓は何時ぢや。

まつ　イエ、あれは妙見様のお開帳の知らせでござります。
金五　それは幸ひ。よい所へ來合せました。
まつ　わたしも拜んで參りませうか。
才三　サア、お參りなされませ。
ト題目太鼓になり、金五郎、才三、こなしあつておまつも附いて下座へ入る。また通り神樂になり、向うより萩原千次郎、着流し、大小にて出て、花道にとまり
千次　不案内の場所ながら、大方聞き及んだ柳島の妙見といふはあれであらう。先づあれへ參詣しませうか。
ト右の鳴り物にて、本舞臺へ來る。この時奧にて
いれ　千種さま、ちやつとお出で遊ばしませいなア。
トこれにて千次郎、ちよつと葭簀の蔭へ忍ぶ。合ひ方になり、千種、良助出て
良助　これは御浪人様。丁度よい所でお目にかゝりました。先づ何が差措き、その一軸お渡し申して、私しも安堵でござります。
千種　ほんに、何かといかい世話でござつたわいの。
いれ　その一軸に、極めの印が附きますれば、直ぐに御婚姻が調ひますかいなア。
トこの時下座より薄洞ちよつと出て、この體を見て、

入る。
良助　親良菴が直筆に、極めを附けた金岡が眞蹟、それが卽ち婚姻の引出物でござりませう。
いれ　吉日をお待ち遊ばすばかり。さぞお嬉しうござりませうな。
良助　その一軸をお渡し申した上は、本堂にて支度調へ歸りまする。
千種　そんなら、もう去んでかいの。
良助　御ゆるりとお歸りなされませ。
ト合ひ方になり、良助こなしあつて下座へ入る。千種、件の箱を持つて
千種　ほんに、この一軸の目利きが出來たに就ても、久しうお便りもある事か、ほんに辛氣な事ではある。
トこの時葭簀の蔭より萩原千次郎出て
千次　千種どの。變つた所で逢ひましたの。
ト千種恟りして
千種　ヤア、あなたは千次郎さま。
いれ　ほんに、今も今とてあなたのお噂。
千種　どうしてマアこの所へ。思ひ掛けない。ようお出で遊ばしましたなア。

いれ　千種さまは每日々々、あなたの事ばかり。それはさうと、お供もなしに只お一人、お忍びの御參詣でござりますかいなア。

千次　アイヤ、成る程、家來は門前の川岸に。船を乘り越して只一人、わざと忍んで參つたのぢやわいの。

いれ　ムウ、成る程、御家來は。左やうなら、あちらは人混み、何やかやのお話しは、ナ申し、

ト千種に囁き

私しは御本堂へ、ドレ、行て參じませう。

ト合ひ方になり、下座へ入る。千種こなしあつて

千種　千次郎さま、何から云うて上げうやら、便りの節も後や先、早う迎ひの輿入れを、月日數へて待ちますわいな。

千次　サア、この千次郎　段々と、話せば長い身の入り譯、緣邊を等閑にかと、こなたの思惑、氣の毒さ。何を云はうも大切な家の寶を……………イヤサ、他と婚姻すると云ふやうな、不束な事ではない。いづれにしても、近々に調ふ婚姻。

千種　此方の家の寶は、この通りに極めの印を書かせた上、キツと持つて居りますわいな。

千次　サア、その寶が調ふ程、この身の切なさ。

千種　エヽ。

千次　イヤサ、切なるこなたの志し、忘れはおかぬ。忝い。

千種　ほんに、今日爰でお目にかゝるも、妙見樣のお引合せ。

千次　誓ひを結ぶ柳島

千種　柳の原の末かけて

千次　影向の松の變らぬ契りを

千種　千次郎さま

千次　千種どの。

千種　オヽ、嬉し。

ト抱き附くと、下座にて皆々

皆々　其奴、打ちのめせ〳〵。

トわや〳〵云ふ。これにて千種悄り、千次郎ちやつと千種が手を引き、葭簀の中へ入る。トばた〳〵になり、金毘羅參りの傳、暮明きの形にて、生醉ひにて、よろけながら出てくる。酒屋の男二人、棒を持ち、追はへ出る。薄洞、後より附いて出る。

薄洞　マア〳〵、待たつしやりませ。

傳　ヤイ〳〵、此奴等は、この金毘羅樣をどうするのだ。

男一　うぬ、どうするとは、行者の癖に、酒肴の食ひ逃げ。
男二　貰ひ溜めた錢があらば、早く出さぬか。
傳　錢はあつたが、先刻に皆飲んでしまつた。其やうに吐かすと、金毘羅樣の罰が當るぞよ。
男一　アレ、あんな事を云ひます。思ひ入れ叩き伏せるがようござります。
薄洞　コレサ〳〵、貴達達のが尤もだが、アレ、あの通りの生醉ひだ。醒めての上の分別になされませ。
男二　イカサマ、今日は店も忙がしい。此まゝに置いて、後に性根を附けるがようござる。
皆々　サア、ござれ〳〵。
ト始終通り神樂にて、酒屋の男、下座へ入る。此うち金毘羅參りの傳、箱を下ろして醉ひ倒れ、下の方へ來て、グウ〳〵鼾をかいて寢る。薄洞、傳を見て
薄洞　此奴はづぶ六醉ひ居つた。ア、誠に酒量りなければ亂に及ぶぢやな。
ト傳を見て
ヤレ〳〵、騷がしい奴等ではある。
トあたりを見廻し
最前チラリと見かじつた菱川家の珍藏、金岡の直筆、慥かにあの葭簀の內へ
ト思ひ入れ。始終通り神樂かすめて、此うち薄洞さし足にて、葭簀の間より千種が持つて來た一軸の入りし箱を持ち出し、我が懷より最前の貫波刀を出し、あちらこちらに箱を入れ代へ、ソッと元のやうにして、また葭簀の間へ入れて、こちらへ來て
サテ、先づ首尾よく入れ代へた。どうぞ早く伴藏どのに手渡ししたいものだが。
ト下座より高木伴藏出て
伴藏　先生、爰か。件の一儀は。
薄洞　オ、伴藏さま、まんまと寶をあちらこちらへ。
伴藏　コレ。
ト押へてあたりを見て
大事の事を大きな聲で。……殊に、あたりに何者か。
ト傳を敎へる。
薄洞　イヤ、あの者は金毘羅參り、熟醉いたして他愛はござらぬ。……先づお約束の一品。
ト箱を渡す。伴藏取つて
伴藏　よし〳〵。首尾よくいつたも先生の働らき。卽ち謝禮は輕少ながら。

ト懷より金を出してやる。
薄洞　これは近頃過分に存じまする。拙者はこれより直ぐに旅行仕る。追つて狀通に便宜を承りまするでござらう。
ト此の時下座にて
喜藏　金太郎よ〳〵。金太〳〵。
ト呼ぶ。
薄洞　あの人聲は。
伴藏　コレ。
ト囁く。二人はあの葭簀にゐるかと云ふ思ひ入れ。
ではござらぬか。
薄洞　天晴れ賢察、才子〳〵。
伴藏　お別れ申す。
ト薄洞は向うへ、伴藏は箱を持ち、葭簀張りの内へ思ひ入れして、通り神樂にて、下座へ入る。喜藏、呼びながら出て
喜藏　彼奴めは、また天神樣にどへ行き居つたか。金太よ金太よ。
トあつちこち尋ね、葭簀の側へよると、葭簀ゴソ〳〵と動く。喜藏、聞き耳立て、ソツと覗いて悔り飛び退き
ムウ、何か知らぬ枕元に
トさし足にて、貫汲刀の入りし箱を持つて出て
金岡の正筆、書像の眞蹟。……極めの印があれば、取つて置いたが何ぞの用に。
ト葭碗の方を見ながら件の箱を懷へ入れ、又ソツと來て聞き耳立て窺ふ。此うち床几の上に腹這ひになけていろ〳〵思ひ入れ。始終題目太鼓にて、奥より丈八出て來て
丈八　ヤレ〳〵、若旦那に逢ひたいものだが。
ト方々尋ぬる思ひ入れにて、フツと喜藏を見て、いろいろをかしき身振りをしてゐるゆゑ、悔りして呆れる思ひ入れ。ト喜藏、さま〴〵思ひ入れあつて、床几の上よりトンと落ちる。
喜藏　アイタヽヽヽ。
丈八　若旦那〳〵。どうなされました。モシ、丈八でござります。喜藏さま。
喜藏　オ、丈八か。アイタヽヽヽ。
丈八　これはしたり、どうなされました。喜藏さま。
喜藏　イヤモ、喜藏か。木造か

丈八　申し、お前様に、わざ〳〵お目に掛ける物があつて参りました。
喜藏　おれに見せる物とは。
丈八　イヤ、外でもない。先づめでたい耳寄りな事がござります。
喜藏　なんぢや、耳寄りとは。馬道のどら焼きの事か。
丈八　イエ、お駒さまからお文が参りました。
喜藏　ヤ、、、、。ナニお駒が文をおこしたとは、そりやほんの事か。
丈八　サア、女夫といふ名ばかりで、まだ廣めもせぬ事ぢやによつて、内證でソツと渡してくれいと、コレ
ト文をちやつと出す。
喜藏　ヤア、、それは。
丈八　アイヤ、それから御覽じませ。ハ、、、、。時に今、この所にて讀み上げますが、なんと、前祝ひがありさうなものでござりますな。
喜藏　オツと、丈八。何にも云ふな。ソレ。
ト紙入れより一兩出してやる。
丈八　これは有り難い。さらば高々と讀み上げませうか。
ト床几に腰を掛け、喜藏茶碗に茶を汲んで行く。丈八取つて飲み、文の封を切る。これより四つ竹の合ひ方になり。
「一筆示しまゐらせ〳〵、そもじ様と私しは、幼ない時よりの云ひ號けにて、いはゞ相生ひ双葉の女夫、結ぶの神の深き緣かと、山々嬉しく存じ上げまゐらせ〳〵」
喜藏　ヤア〳〵〳〵。なんと云ふ、山々嬉しく存じ上げまゐらせ〳〵。して〳〵、後はどうぢや〳〵。
丈八　この後が肝心の所。爰らで一つ服模がなければ、
喜藏　ドツコイ、讀んばり。ソレ、一兩。
ト又やる。丈八取つて
丈八「親々の手前もあれば、わざと外目にはそれとなく、わたしが心はどのやうな、義理約束があらうやら、斯ういふ事を露知らず……イヤ「知らせたい」……申し、知らせたいと書いてござります。
喜藏　させたいでは又一兩ぢや。
ト又やる。丈八取つて
丈八「知らせたいと思へど、たゞ主がいろ〳〵と袖褄引いて下さんす程、しみ〳〵嫌で」
喜藏　ヤ、、なんぢや。嫌とは。
丈八　イヤ、嫌ではないが、恥かしいにて候ふ。」

喜藏　ムウ、その筈ぢや〳〵。

丈八　「モウ〳〵、ふッつりばつたりと、お前はどこぞへ行かしやんせ。ほんにしみ〴〵大嫌ひ。」

喜藏　ヤア〳〵、なんだと。

丈八　「嫌ぢやわいなア、めでたくかしく。」

喜藏　ヤア〳〵〳〵、そりや何の事ぢや。

丈八　とんと譯が知りませぬ。

喜藏　道理で最前本堂で取つた御鬮。初めよし、後に惡しと出たわい。

丈八　一體マアあのお駒さんは、近所でも慥かに和國橋の才三めに、コレ。

ト囁く。

喜藏　ムウ。あの髮結ひの才三めとか。

ト丈八囁く。

丈八　でござります。

喜藏　エ、、いま〳〵しい。最前それも聞いたによつて、木挽きの伊太郎と松とに呑み込ませ、方附けてしまふ目算。

丈八　疫病の髮結ひで、戀の敵を取るがようござります。

ト下座より金太郎出て

金太　若旦那、爰にお出でなされましたか。

喜藏　金太よ、われはどこへ行つて居つた。サア、早う歸る。供せい。

丈八　若旦那、まだいろ〳〵話しもあり、お假屋橋から船で

喜藏　炬燵を仕掛けて、とつくり相談。

丈八　喜藏さま。

喜藏　丈八。

丈八　サア、ござりませ。

ト通り神樂になり、喜藏、丈八を連れ、金太郎附いて向うへ入る。ト下座より才三出て

才三　ヤレ〳〵、大きに遲くなつた。ドレ、ちつとも早く歸りませうか。

ト行きさうにする。後へ伊太郎、松五郎出て

兩人　ヤイ、才三め、待ちやアがれ。

伊太　うぬア先刻、人がゐると思つて、氣の强い事を吐かしたな。

才三　此奴等は、先刻にも懲りないので、まだまごついてうしやアがる。

伊松　うぬを締めようと思つて待つてゐた。うしやアがれ。

才三 ト胸倉を取りにかゝる。
　此奴等は、もう打ッちやつては置かれねえ。
　ト両人を取つて投げる。これより題目太鼓になり、両人縫ひぐるみにて打つてかゝる。この立廻りに後の葭簀を押しこかす。内より千種、千次郎逃げ出す。伊太郎、松五郎、悔りして、逃げる。才三郎、下座へ追うて入る。千次郎あとを見て
千次 さて〳〵、騒がしい事ではある。
千種 申し、最後爰に置いた、大切な箱が見えませぬわいなア。
千次 ヤ、、ナニ、箱が見えぬとは。
　ト悔りうろたへる。この時後へ伴蔵出かけ
伴蔵 大切な寳を失ひ、その態になつた馬鹿殿千次郎どの、両家の親御へ沙汰なしに、こつそりと忍び合ひ、ハテ、よい手廻しをさつしやるの。
千種 エ、、そんなら、萩原のお家の寳、貫汲刀も
伴蔵 疾に紛失してしまひました。併し菱川家の寳、金岡が書きし衣通姫の一軸は。
千種 サア、その一軸は、
伴蔵 ムウ、口ごもつて返事召されぬは、ハア、、聞こえた。さては寳も紛失したのか。
千種 さうぢや。
　ト千次郎が刀に手を掛ける。
千次 ハテ、例へ寳が紛失にもせよ、死んでは却つて親御へ不孝。マア、必らずともに早まるまいぞ。
伴蔵 何は兎もあれ、両家の寳紛失とあれば、千次郎は格別、千種は身共が屋敷へ連れ行く。
　ト引ッ立てにかゝるを、振り拂ひ
千種 イエ〳〵、例へどのやうな事があつても、何しに此まゝ歸られませう。
伴蔵 それだによつて、身が屋敷へ連れ歸る。
千次 アイヤ、まだ婚姻も調はぬうちに、千種どのを私しに、こなたの屋敷へ。
伴蔵 連れ歸つて悪いと思ふ千次郎。なんで又此やうに、乳繰り合つて居つたのだ。
千次 サア、それは。
伴蔵 云はゞ縁者の仕置の爲、いぢなぢ云はすと立たつしやい。
千種 ぢやというて。
伴蔵 千次郎どの、こなたにも詮議がある。千種どのゝ事

は構はず措かつしやい。
ト千種を引立てる。
サア、千種どの、立たつしやい。
千種　イエ〳〵、否でござりますわいなア。
ト否がる。作藏は千次郎を突きのけ、千種を引立てにかゝる。通り神樂になり、バタ〳〵にて、下座より伊太郎走り出で、作藏に突き當る。
作藏　アイタ、、、。
ト顔を抱へこなし、下座より、才三、松五郎を追はへながら出て、作藏を押しのけ、トゞ伊太郎と松五郎を捕へ
才三　うぬは太い奴ぢやアないか。頼んだ奴を吐かしやアがれ。
ト引ッ捕へながら、千種を見て
ヤア、あなたはお屋敷のお孃樣。
千種　ほんに其方は家來の才三郎。
才三　思ひがけないこの場の樣子。
ト伊太郎、松五郎振り放すを、ちよつと當てる。
どうした譯でござります。
千次　千種どの、そんならこなたの

千種　元は、屋敷に勤めた才三郎。
才三　不思議な所でお目にかゝりました。
作藏　ヤイ〳〵、素町人め。わいらが存じた事ではない。慮外な奴め。大切な詮議のその中、外から喧嘩を持ち込んで、さゝほうさにしをつた。
才三　こりやをかしいわえ。其方の事を、ナニおれが知るものか。モシ、千種さま、何か樣子は存じませぬが、有りふれたこの場の始末。あなたはマア本堂へお出でなされまし、後から參つて、何かの樣子をとつくりと承ります。マア、早くお出でなされまし。
千草　ほんに、よい所へ來てくりやつた。そんならわしはアノお堂に
才三　マア、お早くお出でなされませ。
作藏　イヤ、やる事はならぬ。
ト捕へようとするを、才三止める。此うち千草振り切つて、下座へツイと入る。
ヤイ〳〵、うぬ、素町人め。何ゆゑあつて、あの女を逃がしてやつた。うぬはこれから、その分にならぬぞ。
才三　ハテ、小むづかしいお侍ひだ。何は格別。モシ、お前が萩原千次郎さまでござりますか。

千次　成る程、わしは千次郎ぢやが、今の千種の詞では

才三　サア、その入り譯もお話し申しませうが、マア、合點の參らぬあなたのお姿。

千次　大切な寶紛失ゆゑ、詮議の爲に忍びの姿。

才三　すりや、あなたのお家の寶物が

千次　紛失した上に、また菱川家の寶も、今日爰で

作藏　紛失してしまつたわえ。

才三　ハテナ、兩方の寶が、云ひ合はせたやうに無くなつてしまつたとは、なんでもこりやア盜人が、近くにゐるに違ひないわえ。

ト思ひ入れ。作藏懷を押へ、キツと思ひ入れ。

千次　一方ならぬ武將よりのお媒人。この寶がない時は兩家の斷絶。

才三　ムウ、私しとても、今でこそ斯樣な身なれ、元は千種さまのお家に勤めたこの才三郎。古主の御難儀。これは力一杯に寶の詮議。お氣遣ひなされますな。

千次　兎角、よいやうに頼みます。

ト此うち作藏思ひ入れあつて、懷より寶物の箱を出し、才三が氣取りはせぬかといふ思ひ入れにて、ソツとこちらへ來て、隱し所に困り、金毘羅參りの傳が金毘羅の荷物へソツと隱し、又こちらへ來て

作藏　サア、千次郎どの、キリ〳〵立たつしやい。

千次　アイヤ、この千次郎には、何ゆゑあつて。

作藏　ハテ、知れた事だ。寶の詮議。千種と二人忍び合ひの、云ひ譯はあるか。

千次　サア、それは。

兩人　サア、

三人　サア〳〵〳〵。

ト此うち金毘羅參りの傳、そろ〳〵醉醒めの思ひ入れにて、目を醒まし

傳　ヤレ〳〵、醉が醒めたら、ぞく〳〵寒氣がする。これから又、兩國で泡雪でも食つて行かうか。

ト捨ぜりふにて、荷箱を脊負ひ、行きかゝるを、作藏見て悔りして

作藏　ア、コレ〳〵、その中には大事の

ト云ひさうにして才三に思ひ入れ。傳知らずに

傳　コレサ、この侍ひは、何をするのだ。

作藏　イヤサア。

ト云ひさうにしては才三へ思ひ入れ。此うちに傳、ツカ〳〵と揚げ幕へ入る。

ア、、コレサ〳〵。オ、イ〳〵。
　ト呼びながら伴藏は跡を追うて向うへ入る。才三見て
才三　あの侍ひは狂人かも知れぬ。
千次　慥かに彼れらが企みし事とは云へ、慥かな證據もなければ。
才三　ハテ、詮議はどうでもなりまするが、マア、お前樣は早うお宿へ。併し、千種さまの身の上、ちよつと私しが。
　トこの時良助、下座より出て
良助　才三どの、案じさつしやりますな。お孃樣は御本堂に、腰元衆と一緒にござれば、氣遣ひはない。
才三　そんなら私しは、お前と一緒に、千次郎さまをお供して、道々何かの委細の樣子を。
千次　詳しう話して千種が事も。
才三　これから直ぐに參りませう。
　ト後へ伊太郎、松五郎出て
兩人　うぬ、才三め。
　トかゝるを、伊太郎は良助、松五郎は才三、突き廻はし、ポンと當てる。
才三　うるさい奴等だ。ハ、、、、。……サア、お出でなされませ。
　ト三人、向うへ入る。下座より千種走り出て來る。おいれ、谷平附いて出て來る。
いれ　これはマア千種さまのお氣の短かい。どれへお出で遊ばしまいぞいな。
千種　大切な一軸を失うたによつて、所詮千次郎さまに添ふ事もならず、生き存らへて何樂しみ。千次郎さまに今一度お目にかゝつて、直ぐにその場で死ぬる覺悟。爰を放してたもいの。
いれ　滅相な。マア、お待ちなされませいな。
　トこの時、後へ粂本女房おいと、出かけ聞いてゐる。
千種　イヤ〳〵、どうあつても死ぬる覺悟ぢやわいなう。
いれ　ほんに、こりやひよんな事ではある。どうしたらよからうぞいの。
　トこの時おいと後より
いと　申し、それには、よい思案がござりますわいなア。
三人　ヤ、お前は。
いと　仲町の粂本のおいと申しまする茶屋の女房。最前から何かの事は承つて居りまする。菱川のお姫樣なりやちつとマアわたしが方に、折入つてお世話申さにやな

らぬ義理もござります。マア〳〵、何かは私しが内へお
出で遊ばして、とつくりと譯の立つやうになされませい
なア。
千種　始めて逢うて、頼もしい情のお詞。併し、今云うた
大事の寶、
いと　サア、それも先刻に仰しやつた、髮結ひの才三さん
とやらが、身に引請けて、お前のお世話。氣遣ひはござ
りませぬわいな。
ト此せりふを聞いて後に伊太郎、松五郎囁き合ひ、伊
太郎は向うへ入る。松五郎は殘りゐて窺ふ。
いれ　左やうならば何かは道々、とつくりと
谷平　サア、おひろひなされませ、
ト松五郎出て
松五　才三が世話をする娘なら、引ッ張つて意趣晴らし。
トかゝろをおいと、突き廻はして、有り合ふ手桶を打
ちかぶせる。松五郎、ヒヨロ〳〵となつて上の方の切
り穴へはまる。皆々悔り。
いと　サア、お出でなされいなア。
ト通り神樂になり、向うへ入る。下座より金五郎出て
來て

金五　イカサマ、日足が餘程永う覺えるやうな。ドレ、最
前の茶店で、もう一服たべて行かうか。
ト腰を掛け、繪馬堂の額を見て、梅の短冊を見て
ハテ、見れば見る程あてやかな、よう畫いたこの繪、殊
に又、この短冊の書きぶりでは、成る程、此やうに美し
うもあらうか。ハテ、見事な綺麗な風俗おやわい。
ト餘念なく見惚れる。この時下座にて
ゆり　サア〳〵、ござんせいなア。
ト鳥追ひの三味線になり、小三、先におゆり、長吉、
おまつ、出で來り
小三さん、おいとさんは先へ去ぬると云はしやんしたわ
いなア。
長吉　大方、小船で歸りなさつたかも知れませぬ。
まつ　マア、御ゆるりとお支度でもなされませいなア。
小三　ほんにおまつさん、今日はいかいお世話でござんし
たな。
ゆり　ちつとわたしが方へも遊びに來なんせえ。
まつ　アイ〳〵、樂しんで居りますわいなア。
ト此うち金五郎フッと小三を見る事あり、小三知らず
に

小三　そんなら又この間に參りますわいなア。

まつ　お靜かにお出でなさんせいな。

ト矢張り右の合ひ方、通り神樂にて、小三、花道へかかる。金五郎、小三をヂッと見て「さてはあれか」と云ふ思ひ入れにて、また額を見る。小三これを知らずに皆々向うへ入る。金五郎ヂッと見送る。ト入相の鐘鳴る。金五郎、短册を持ちながらつく〴〵見て、口の内にて讀み下し、ウツカリとあと見送り、思はず床几を立つて、ツカ〳〵と行きさうにする。

まつ　モシ、お扇子がござりますわいなア。

ト金五郎、心附いたる思ひ入れ。木の頭。

金五　こりやお世話でござる。

トよろしくキザミ　　ひやうし幕

ト引返し、ツナギ、時の鐘

本舞臺上の方、二階作り、下の方、二間の二重舞臺、檜皮屋根の廻り竹緣、兩方とも、前側障子引き抜き、眞中見通しの奥、竹垣。隔ての塀、切り戸附き、すべて根岸の寮、隣り同士の道具、好みあり。上手に枝折り戸。側に椿の立ち木。下の屋體に添うて石燈籠、手水鉢、柴垣のあしらひ。緣先に木地の釣り燈籠仕掛けあり。花道際に枝折り戸。幕の内より小三、着流し、駒下駄にて、椿の枝を手折らうとしてゐる。關内、奴にて、紅葉傘をさしかけてゐる。雨車、和らかなる合ひ方にて、大幕切り落す。

ト小三こなしあつて、椿の一枝折り取る。露のかゝりし心にて

小三　オヽ、つめたい。

ト關内、帶に挾みし手拭を取つて差出す。小三、枝を口に啣へ、手を拭く。これをキッカケに雨車やんで、鶯笛になる。

關内　もはや春雨も晴れました。

ト傘をすぼめる、屋體の内にて

一角　春風雨を送る東籬の外。黃鳥高く囀る朱簾の内。

トこの時、東の障子一面に引抜き、見附け唐紙、上手床の間、刀掛けに大小を掛けある。秋月一角、着流し長煙管にて煙草のみながら、籠の鶯に目を附けてゐる

春知り顏に鶯めが、心よく啼くワ〳〵。

小三　ほんに最前から、餌をかふのを忘れてゐたわいな

ア。

ト二重へ上がり餅鉢を取つて、餅をかふこなし。上手より佐藤銀平、高木伴藏、羽織、大小にて、下駄を穿いて出て來て

伴藏　一角どの、御在宿でござるか。

ト上手の枝折り戸を明け入る。

關内　お旦那。伴藏さま、銀平さまのお出でゞございます る。

一角　これは高木氏。佐藤氏、よくこそ御入來。サア、これへ〳〵。

銀平　御免下されう。

ト二重へ上がる。始終鶯啼。

小三　お二人樣、ようお出でなされました。お免しえ。

伴藏　お手入れがよいか。よく啼きますな。

小三　段々引きがようなりましてござんす。

一角　關内、お茶を上げい、

關内　ネイ〳〵。

ト奧へ入る、

銀平　さて存じ寄らぬ永の御滯留。今日は、ちと密々に、御相談の儀もござるゆゑ

伴藏　銀平どのと申し合せ、おしかけ伺候いたしてござる。

一角　仰せの通り、この度拙者罷り下りましたるは、各々の御主人萩原家と、菱川家の御婚禮、お仲人は身共が主人花園中將どの、即ち武將のお指圖を以て、兩家の名器を互ひに取替へ、お取結び仕らん爲、中將どの名代として、わざ〳〵下向いたせしところ、計らざる二品の紛失。

關内　お茶を差上げませう。

ト差出す。

銀平　イヤ、構やるな〳〵。

伴藏　武將の上意たる御縁邊、萬一調はざる時には、我れ我れども主家の大事。

一角　そこを察してこの程より、拙者病氣と申し立て、この根岸の寮へ引込み、日を重ね、滯留のうち、名器だにお手に入らば、御兩家ともに無事の納まり。

銀平　萬事は貴殿のお心一つ。よろしく頼み存ずる。

一角　これは痛み入つたるお詞。何かは差措き、たまのお出で、御酒でも申し附けませう。打寛ろいで、ゆる〳〵とお話しなされい。

伴藏　お心遣ひは決して御無用。打續く春雨、さぞ御退屈
幸ひの晴れ間、ちと山谷邊へお供仕らうか。
銀平　これは又、野暮な事云はつしやる。アレ、江戸一番
の名取りの藝者、小三を側へ引寄せてのお樂みだもの、
ナニ外へござる心があらう。なんと關內、さうであらう
がの。
關內　ハイ、御意でござりまする。そこの所がハヤ、妙な
もので、何分小三どのが打解けて、肝心の所が、イヤハ
ヤ、じれつたくて堪へられませぬて。
伴藏　なんと云ふ。すりや今に彼の
ト一角を見る。一角、面目ないと云ふこなしにて脇見
する。
そりやアとんだ事だの。
銀平　小三、おてまへ、なんと心得て居る。よく／＼に思
し召せばこそ、先頃より揚詰めになされ、この所まで引
きつけて御寵愛。
伴藏　承知すればその身の活計だ。爲に惡い事は申さぬ。
色よい御返事を致したがよいわサ。
小三　御深切によう云うておくれた。嬉しうござんす。
ト合ひ方變り、こなしあつて鶯籠を向うへ持つて出て
小三が今の身の上は、丁度この鶯と同じ事。
銀伴　とは又どうして。
小三　サレバイナ。この雛鳥も、例へ藪鶯と笑はれても
心の儘に枝から枝へと、飛び廻るが鳥の樂しみ。無理に
捕へて籠の內へ、押籠められた術なさは、どのやうにあ
らうと思うてぞ。ちつとは又、鳥の心も推量して見て下
さんせ。
關內　アレサ、あの通りでござりまする。
小三　わたしが願ひは、まッこの通りに
ト籠の口を明ける。鶯はバッと飛んで庭の椿の枝へ留
まる。
「豆腐呼ぶあとを根岸の初音かな。」
ト　鶯囀る。
アレ、嬉しさうに。
ト兩人顏見合せ
ゆるりとお遊びえ。
ト唄になり、小三こなしあつて奧へ入る。兩人、氣の
毒なるこなし。一角は煙草のんでゐる。關內は橫手を
打つて
關內　ハ、ア、小三どのが、お旦那のお心に從はぬ因緣が

解りましたわい。
一角　その様子がどうして知れた。
　　ト少し急いて云ふ。
關内　御兩所様にもお聞きあられませう。即ちこの塀隣り、武士の出養生と相見え、年頃は廿一二、サ、ちよつと紀伊國屋と云ふやうな男めが住つて居ります。
銀平　その侍ひめが、どう致した。
關内　サア、そこでござりますて。四五日以前、暮れ前に何か心あるやうに、この二階を見上げて居つたが、此奴どうやら小三どのに、惚れて居ると見えまする。
伴藏　ハテ、憎い奴だなア。
關内　なんぞのはずみに小三どのも、彼の侍ひめをチラと見て、ナア……ではござりますまいか。
一角　ムウ。
　　トきつと手を組む。銀平、伴藏、顔見合せ
伴藏　銀平どの
銀平　伴藏どの。ござれ。
　　ト押取り刀にて立つ。一角留めて
一角　御兩所、こりやどこへござる。
銀平　御寵愛の小三どのに、心を通はす青二才め。
伴藏　我れ〳〵どもが引立て參る。お留めなさるな。
　　トまた行かうとする。
一角　これはしたり、粗忽千萬。畢竟只今申せしは、關内めが目推量。若輩なれども武士とあれば、僅かな證據も捕へぬうち、理不盡を申し掛けては、却つて笑ひを招くやうな道理。
銀伴　おやといつて。
一角　身が料簡がござるから、マ、鎭まらつしやい〳〵。
　　ト兩人ヂッと下にゐて
銀平　して、御自分の
兩人　御思案とは。
一角　コレ。
　　ト兩人に囁く。
銀平　イヤ〳〵、そりや危うござる。何程貴殿が能書にもせよ、女の手と男の手蹟。
伴藏　萬一彼の侍ひが見知るまいものでもない。外に御手段はござるまいか。
一角　サ、そこでござる。拙者幼少より瀧本流の假名を好み、丹精を盡し、學びました。小三めも松花堂を心掛けて書きますれば、同様の儀でござるから、例へ手蹟を

見知り置くにもせよ。なか／＼僞筆とは存じも寄らず。
細工は流々、仕上げを御覽なさるゝがよい。關内、硯。

關内　ネイ／＼。

ト硯箱を持ち行く。一角、サラ／＼と書いて

一角　其方は、コリヤ。

ト囁き、文を渡す。

關内　すりやこの文を、垣隣りの侍ひに。

一角　小三が艶書と思はす手段。必らずぬかるな。

關内　委細畏まりましてござりまする。

ト時計の暮れ六ツ鳴る。

作藏　最早暮れ六ツ。

一角　御兩所のもてなしには、鷄締めさせて、夜とともに
酒宴。

銀作　それは御馳走。

一角　さらば、御案内いたさうか。

ト唄になり、一角、兩人を連れ、奥へ入る。後に關内
こなしあつて

關内　これは斯うすれば斯う。ムウ。よし／＼。

トいろ／＼思ひ入れあつて、切り戸を明け、下の屋體
の前へ行て

ちとお頼み申しませう。

ト内にて

金五　誰れだ／＼。

ト皷の合ひ方になり、障子一面に引拔き、張り交ぜの
襖、焜爐にきびしよを掛け、金五郎、着流しの形、短
檠の火にて本を見てゐる。

關内　苦しうない者でござりまする。

ト金五郎、關内を見て

金五　お身は慥かに、隣の寮に召仕ひの關内とやら。

關内　アヽ、申し／＼、お靜かになされて下されませ。旦
那へ聞えては、つまらない儀でござりまする。

トわざと上の屋體へ心遣ひのこなし。金五郎、心得ぬ
思ひ入れにて

金五　まだ近附きにもならぬおてまへ、身共には何用あつ
て。

關内　その仔細と申すは、これを御覽下さりませう。

ト右の艶書を差出す。金五郎、何心なく取つて

金五　「樣參る、焦るゝ身。」……ムム、こりやコレ艶書で
はないか。

ト矢張り皷の合ひ方にて、始終上の屋體へ心遣ひのこ

初演の錦繪　澤村源之助の金五郎

なしながら、摺り寄つて
關内　何を隱しましせう。下郎が旦那のお妹御、隔ての垣の透間より、あなたのお顔を御覽あつて、甚だの御執心拙者めを密かに召され、まッから〳〵と切なるお話し。餘りおいとしう存ずるから、物堅きお旦那の目顔を忍びて、艶書の取次ぎ、何卒お聞入れ下さるならば、ネイ……
……。
ト思はず大きく云うて、ちやつと口を押へ
有り難う存じ奉ります。
ト摺り寄り、小聲にて云ふ。金五郎こなしあつて
金五　返事に及ばぬ。その艶書持つて歸りやれ。
關内　エヽ。
金五　嫂水に溺るゝとも、手を以て助けざるは柳下惠が賢なる例し。左やうにこそはあらずとも、父母の許しもなきに、私しせんは道にあらず、下郎ながら其方も、武士の作法は知りつらん。無益の仲立ち、嗜なみ召され。
ト艶書を投げ返す。
關内　御意御尤もにはござれども、情も武士の道具とやら、何も兎もあれ、此お文は。
ト差出す。

金五　イヤ、見るに及ばぬ、
ト戻す。
關内　サ、そこを何卒。
ト また差出す。
金五　ハテサテ、しつこい。
關内　どうござつても。
トこの時、内にて
作藏　關内はどれへ行かれた。
關内　へイ〳〵、只今歸りまする。
作藏　關内々々。
關内　へイ〳〵〳〵。
ト艶書を投げやり、切り戸のこちらへ來てシヤンと締め、思ひ入れ。金五郎フッと見て、どうやらといふ心意氣にて、チッと取上げ
金五　この手蹟は
トぢつと思ひ入れ。合ひ方になり、金五郎、短檠の火を掻きたて、關内思ひ入れあつてあたりを見廻し、心にうなづき、刀掛けを取つて來て、切り戸の側へ直し、「斯うして置けば」といふ思ひ入れして、ツイと奥へ入る。金五郎は文を繰返し見て

今宵は主も留守なれば、障子へ寫る灯影を合圖に、忍んで來よとの此文體。この頃柳島の妙見にて、見覺えある女藝者、小三とやらが筆勢に、斯程までに似たるものか。何にもせよ。

ト手箱より口蘂の短册を出し、引合せ見て

ヤヤ、こりやコレ同筆。すりや隣家の妹といふは

ト上の屋體を見る。本釣り鐘ゴンと鳴る。

ハテ、思ひがけない。

ト合ひ方、この時、上手の障子の内にて

關内　餘程夜も更けたれば、明朝の儀に遊ばさるゝがようごわります。

作藏　イヤ〳〵、朧月の夜道も一興でござらう。

銀平　左樣々々。湯治の儀なれば、四五日はお歸りもあるまいから、萬事に氣を附けてお留守をしやれ。

關内　畏まりましてござりまする。

作藏　イザ、參りませう。

ト金五郎これを聞き取り、思ひ入れにて

金五　文面に違ひもなく、主は只今他出の體。

トまた文を見、短册を見て

額の書面に心動き、殊に、手蹟發句の優しさに、心を掛けし額の小三、折もがなと思ふに幸ひ、渡りに船のこの艶書、いつそ。

ト椽より飛石へ下りかゝつて

イヤ〳〵、假にも餘人の別莊へ、忍び入るは本意でない。といふて情ある心ざし、此まゝに無下にもならず。ちよつとは大事もあるまい。

ト駒下駄を穿き、庭へ下り行かうとして

思へば道ならぬ事ではあり、ハテ、何としたものであらうなア。

ト蛙の聲。なまめいたる合ひ方になり、此うち銀平作藏出て、囁き合ひ、作藏はうなづき、探り入る。銀平は塀に身を寄せ、聞き耳する。金五郎、いろ〳〵思案のこなしあつて

「白浪の名をば立つとも吉野川、花ゆゑ沈む身は如何にせん」と、三井寺の行燈が歌の心。思ひ切つて。さうぢや。

トさし足にて切り戸の側へ行く。内にて銀平「うまい」といふこなしにて、竹刀を構へ、窺うてゐる。金五郎、延び上がり

もう灯影の見えさうなものぢやが。

トこの時、障子屋體へ灯影映る。金五郎こなしあつて、さし足にて忍び寄つて、切り戸をヂッと押すと雨方へ開く。入らうとして刀掛けに躓き、こける。銀平、物も云はず打つてかゝる。金五郎「南無三」と逃げうとする。危ふく一つ二つ立廻つて、散々に打ち据ゑる。金五郎、衣裳も裂け破れ、髪も亂れる體。

銀平　盗賊が入りました。燈火々々。

作藏　心得ました。

トばた〳〵にて、作藏、手燭を持つて出て

銀平　縄にないか〳〵。取逃がさぬやうに、ぶッちめるがようござる。

トこの時奥より小三出て

小三　皆樣、騒々しい。なんでござんすぞいなア。

作藏　小三どの。聞かつしやい。泥坊が入りました。

小三　それはマア、怖い事でござんすわいなア。さうして盗人は逃げましたかえ。

作藏　泥棒は此奴でござる。

小三　エ、。

ト慄ふ。

銀平　何も恐るゝ事はない。足腰の立たぬやうに、ぶちのめして置きました。

作藏　コリヤ、面を上げい。

ト金五郎を引立て、手燭を差附け

ヤア、おてまへは傍輩の金江金五郎でないか。

金五　銀平どの。ホイ。

ト俯向く。

作藏　先達て病氣の由、出養生と承つたが、何ゆゑ……ハア、聞えた。こりや惡所狂ひの金に手支へ、盗賊をさつしやるのか。ハテ、恐ろしい根性だの。

銀平　退かつしやい。

作藏　ヤイ、大盗人め。うぬがやうな業晒しは、以後の見せしめ、面に極印を。

ト寄らうとするを、小三留めて

小三　お待ちなさんせ。

銀平　なぜ留める。

小三　さればいなア、この人が盗人ならば、お前方に手を負はせ、叶はぬとても逃げる筈。一腰をたばさみながら刀の柄に手を掛けず、むざ〳〵打擲に遭はしやんしたは。どうやら様子のありさうな事。

銀平　でも、コレ、現在

小三　これはまた騷々しい。マア、チッとしてゐなさんせいなア。

銀伴　太い奴の。

ト始終蛙の聲。合ひ方。小三こなしあつて、金五郎が側へ行き

小三　斯う見たところが、お前の人柄、盜賊などのさもしい業をしさうなお方とも見えず、合點のゆかぬこの場の樣子、どういふ譯でござんすぞいなア。

トこれまで金五郎俯向いてゐて、この時顏を上げて

金五　さういふおてまへが聞き及ぶ、額の小三どのでござるか。

小三　アイ、よう知つてゐやしやんすなア。

金五　アノすりやいよ〳〵、こなさんが

ト小三をいろ〳〵見て

身共が今の生恥は、こなたゆゑでござるわいの。

小三　ついにお近附きにもならぬお前が、わたしゆゑと仰しやるは。どうも合點がゆきませぬわいなア。

ト金五郎、最前の文を出し

金五　それ讀んで見さつしやれ。

ト小三取上げ、開き見る。銀平、伴藏、しまうたといふこなし。

小三　「おさげすみも恥かしながら、思ひ餘つてわりなくも、筆取りむかへ〳〵、如何なる宿世の緣にや、お姿を垣間見しより、切なる心をかくばかり……戀すてふ君は知らじな鶯の、根岸の里に啼き盡すとは、……人目の關けれぱ深き思ひはよそにお推もじ遊ばして、今宵は主も留守にて候ふまゝ、障子へうつる灯影と共に、御忍ばせ給はれかし、何事もその節と〳〵」……ヤア、この文は

金五　お身が手蹟か。

小三　成る程、よう似てはありながら、斯うした文を書いた覺えはござんせぬわいな。

金五　ムウ、すりや覺えはないとか。

小三　アイ。

ト小三こなしある

金五　ムウ。

ト小三をチッと見る。

小三　どうしてあなたはこの文を

金五　サヽ、心の外と世の諺。面目もないこの場の云ひ譯小三どの。一通り聞いて下され。

ト鼓の合ひ方になり

拙者事は金江金五郎と申して、萩原家に仕ふる者。去秋より積じゆの惱み、部屋住みの事なれば、病氣保養の爲願ひを立て、隣り座敷に閑居のうち、この程心願の旨あつて、妙見宮へ參詣の折から、新たに掛けたるそもじの繪姿、見るよりフツと心の迷ひ。九花帳に李夫人の繪姿を掛けられしは、死別の人を悲しむ戀。折ふし庭に美はしき梅の梢に附きたる短册、立寄り見れば優しき發句。「梅が香も君がほだしや神の庭。額の小三」と記したる、手蹟の流儀は松花堂。彼れといひこれといひ、紫式部が湖月の面影。風雅稀れなる世の中に、かゝる女もあるものかと、いよ／＼增る思ひ草。短册を懷中し、立歸らんと思ふところ、そもじには御存じなけれど、餘所ながらお姿を、見るよりいとゞ增る思ひ。ウカ／＼歸る道すがら、あはれ幸ひの傳もがな、一度は見え我が眞心を、物語りて慰まんと、かね／＼期したる折も折、この家の下男關内とやらが、仲立せしその艶書。宛名はなけれど短册にて、見覺えある小三の手蹟、見ると等しく飛び立つ心地、前後を忘れ、灯影を合圖に、切り戸を潜つて忍ぶと等しく、躓く所を思ひも依らず、暗がり紛れに斯く打擲、無念の耻辱を受けたるも、隣りの垣を越えたる誤り。貧の盜みに戀の歌。盜賊でない云ひ譯は、小三どの、この通りでござるわいの。

ト いろ／＼こなしあつて云ふ。此うち小三、文を見ては金五郎を見て、「さては」といふ思ひ入れあつて

小三　ほんにマア、思ひ掛けない話しを聞きましてござんす。お氣の毒やら、嬉しいやら、數ならぬ身をそれ程までに

ト 寄らうとして、兩人を見て、こなし合つて

なんとお禮を云はうやら、又、この文の出所も、慥かにそれと

ト 奥を見て

あらはに云へば、事の破れ。お前の身に曇りのない、その云ひ譯はどこまでも、私しが證據に立ちますが、とはいへ、理不盡な打ち打擲。さぞ口惜しうござんせうが、身の災難と諦めて、今宵の事はこの座ぎり、無事に濟まして下さんせ、こりや私しが、お前樣へお賴みでござんすわいなア。

銀平　イヽヤ、さうはなるまい。主人の留守に盜賊を、此まゝに歸しては

伴藏　一角どのへ我れ／＼が、云ひ譯が立ち申さぬ。

小三　すりやどうあつても、此お方を
銀件　縛し上げて何かの詮議。
小三　その詮議より、この文の出所を調べたなら、どこからどこへどう廻つて、誰れが科にならうやら。
銀件　ヤア。
ト金五郎こなしあつて
金五　自ら作せる災ひは、遁がるべからずと聖の詞。心からなる身の錆は、何をか喞ち、誰れをか恨まん。
ト切り戸に取り附き、立ち上がり
アイタヽヽヽヽ。
小三　ア、申し。
ト寄らうとするを、銀平隔て
銀平　ハテ、打ッちやつて奧へ來やれサ。
ト小三、金五郎の方をヂッと見て
小三　お髮もばら／＼。お召し物まで其やうに
金五　それも誰れゆゑ。
小三　おいとしさうに。
トまた行かうとする。件藏、金五郎を切り戸の外へ突き出し、あとピッシヤリさす。
金五　ハテ、身は煩惱の犬ぢやなア。

ト唄になり、件藏、銀平、小三を引立て奧へ入る。金五郎は萎れながら西の屋體へ入る。あと流行り唄になり、向うより辨竹、船宿の形、「武藏屋」といふぶら提げ、粂本の娘分おたね、おゆり、出て
辨竹　それ／＼、道が惡い。滑らないやうに。
ト提灯を見せる。
たゆ　アイ／＼、合點ぢやわいなア。
ト云ひ／＼本舞臺へ來る。
辨竹　オヽ、こりや切り戸が明いてあるワ、
ト三人内へ入り
ちとお頼み申します。
關内　誰れだ／＼。
ト奧より出て
オヽ、武藏屋のおたね、おゆり、打揃つてよく來たな。
ゆり　この間はすつきりと音信をなさらぬゆゑ
たれ　小三さんに話もあり、角さまにお見舞ひに來たわいな。
關内　旦那は今お留守だが、暮れ前からお客があつて、やらかしてゐる最中だ。奧へ來て酌でもしろよ。
辨竹　それは幸ひな所へ參りました。おたね、おゆり、奧

へ行て、

兩人　サア、行かんせいなア。

ト始終右の唄にて、皆々奥へ入る。あと蛙の聲。篠入りの合ひ方になり、二階の障子一面に開く。小三、立て膝にて文を書いてゐる。側に利休行燈に火を燈しあり、よろしく書きじまひ、硯箱より小刀を出し、切り、封じて、こなしあつて、下の方へ投げようとして、キツと思案をし、鏡袋を取上げ、包んだ袱紗を見て、思ひ入れあつて、下に置き、書いた文を寸々に引裂き、右の袱紗を解いて物を書き、小刀にて小指を突き、血判をして、「これを、どうぞして遣らう」といふ思ひ入れ、フッと氣の附いたるこなしにて簪を拔き、結び附け、釣り燈籠の火影目當にバッタリ打つ。仕掛けにて軒の燈籠へしやんと立つ。「ア、嬉しや」といふ思ひ入れ。金五郎、手燭を持ち、障子を明け、あたり窺ひ、右の袱紗を見て、手早く拔き取り、とくと見て

金五　こりやコレ小三が名宛の起證。すりや眞實

ト二階を見上げる。小三、障子をバッタリたてる。金五郎思ひ入れあつて

イヤ／＼、彼れらが企みと知らざるゆゑ、僞筆の艶書に心迷ひ、思はざる不覺を取りしも、慮りの足らざるところ。起證の餌に釣寄せて、又もや身共に、恥辱を與へん企みよな。

トくわつとせき上げるこなし。

エヽ、一度ならず。二度ならず、斯程に嘲弄せられては、もう堪忍がならぬわやい。

ト刀掛けの大小を取つて腰に差し

宵の恥辱に重なる遺恨。事によらば主を始め、一人も殘らず

ト「切る」といふこなしあつて

ソレ。

ト勢ひ込んで、上手の屋敷へ駈け込まうとする。一角ツッと出て突き廻し

一角　案内もなくどこへござる。

ト金五郎、一角をキッと見て

金五　さいふ御身は。

一角　花園家の諸太夫、秋月一角、この旅館の主でござる。

ト云ひ座に着く。

見かけますれば御自分には、いかう急き込んでござる體、仔細ばしあつての儀か。……これはしたり、マヽ、お下

にござれ。

金五　秋月一角。遺恨あらば名乘りかけ。なぜ尋常に勝負はせぬ。事を企みに恥辱を與へ、自滅させんと計らふは、武士に似合はぬ、卑怯であらう。

一角　こは思ひ寄らざる一言。つひに御意得ぬ其許へ對し、遺恨のあるべきやうはござらぬ。

金五　それに僞筆のこの艶書は。

ト打ち附ける。

一角　ナニ、僞筆の艶書とは。

ト取上げ開きて、

エヽ、聞えた。さては、身が留守中に朋友どもが、なんぞ悪戯。悪洒落サ。ハヽヽヽヽ。

金五　ヤア、落附き自慢、その意を得ぬ。何にもせよ、目指す相手は主の貴殿。思案の極め、返答召され。サ、なんと。

トきつと詰め寄る。

一角　お急きなさるな〳〵。御立腹の段、重々御尤も。朋友どもが不調法は、身不肖なれども秋月一角。この如く兩手を突き、頭を下げて、お詫び申す。眞平御免下されい。

金五　一旦の恥辱は格別、再び身共を釣り寄せて、嘲弄して慰まんと、僞筆の起證はなぜ送つた。

一角　ヤア。

金五　疑はしくばこれを見よサ。

ト右の袱紗を突き附ける。一角取つて見て

一角　ヤア、こりや小三が自筆の起證。

金五　なんと。

ト一角金五郎をキッと見て

一角　ムウ。さては。

トくわつと急き込んだるこなしにて

小三はどれに居る。小三々々。

ト内にて

たれ　申し、小三さま、角さまが呼んでおやわいな。

小三　アイ〳〵。そこへ行くわいなア。

ゆり　サア、ちやつとござんせいなア。

小三　オヽ、せはし。

ト和らかなる合ひ方になり、小三、おゆり、おたれ、附き添うて出る。一角こなしあつて

一角　近う來い。

トよき所へ座る。

小三、わりやこの袱紗覺えがあるか。

小三　ヤア、それは。

ト寄る所を首筋取つて引き寄せ

一角　動きやアがるな。玆ないたづら女郎が。

ト三人取りさへ

辨竹　申し〳〵、こりや何事でござります。

たれ　マア〳〵、ようござんすわいなア。

一角　寄つたら、うぬら、宥さぬぞ。

三人　ハイ。

トすつこむ。一角、小三を突き放し

一角　くど〳〵と聞くにや及ばぬ。可愛さ餘つて憎さが百倍。覺悟極めて、それへ直れ。

ト小三こなしあつて

小三　斯うなるからはなんの未練。わたしゆゑにお侍ひ樣の、一分捨てゝ下さんした、金五郎さまのお心ざし、骨身に堪える嬉しさに、ほんに身もよもあられぬ程、惚れいでなんとせうぞいなア。

ト金五郎思ひ入れ。一角「ムウ」とキッとなる。

サア、さぞ憎からう。尤もぢや。腹が立つなら、切らしやんせ。例へずた〳〵に刻まれても、怨みとは思ひませぬ。申し、金五郎さま、君が一日の情に妾が百歳の命とやら書き殘した文の敎へ。唐も大和も姫御前の、殿御へ立てる操は一筋。この世で枕は交さずとも、未來は必らず……待つてゐるぞえ。

金五　云ふにや及ぶ。身共も武士。色情に身を亡ぼす、うつけ者と笑はゞ笑へ。誹れる者あらば、誹りもせよ、千金にも代へ難き、命を捨てる心ざし、無下になすは鬼畜木石、却つて義もなし、勇もなし。この場で直ぐに敵討ち、返す刀に腹かッさばき、相果てるは覺悟の前。

小三　よう云うて下さんした。そのお詞が直ぐに引導。冥途の道は

金五　夫婦もろとも

小三　手に手を取つて

金五　共に成佛。

小三　エヽ、嬉しうござんす。サア、角さま。

ト首さし延べる。

一角　望みの通り。

トすらりと拔く。辨竹、おゆり、おたれ、ガタ〳〵慄ふ。一角、目先へ差し附け

今が最期だ。

大正三年一月市村座上演

六世尾上菊五郎の一角　三世尾上菊次郎の小三

小三　南無阿彌陀佛。
ト合掌する。一角、小三が顔を見て、いろ〳〵こなしあつて
一角　ハテ、美しいものだ。
ト振り上げた刀ガツタリ弱る。
小三　暇がいるほど迷ひの種。早う殺して下さんせ。
一角　どうも切られぬ。
小三　エヽ。
一角　その美しい顏を見ては、どこへ刀が當てられう。コリヤ、小三、戀も情も命あつて。思ひ直して一角が、心に隨ふ氣はないか。どうぢやぞいやい。
小三　捨てる命は二つはない。この世に心は殘らぬわいな。
一角　すりや、どうあつても、
小三　オヽ、しつこい。否ぢやわいなア。
一角　さう云や、いつそ。
トまた刀を振り上げる。
小三　サア〳〵〳〵。
ト體を突き附ける。一角キツとなり、また顏を見てぐんにやり
一角　手討ち止めた。

小三　なんと。
一角　お身が嫌へば嫌ふ程、おりや可愛うて〳〵、どうも堪えられぬわい。
ト人體崩すことなし
金五　武士に似合はぬ未練の振舞ひ。
一角　卑怯未練と笑はれても、一思ひに殺さうより、生けて置いて、金輪奈落、口說き落して抱いて寢にや、武士の意地が相立たぬ。
ゆり　アヽ、嬉しや最前から、ハア〳〵思うて、癪が發りさうであつたわいなア。
たれ　イヤ、角さま、あなたの揚げ詰めも、今日限りなれば、マア、小三を連れまして歸りませうわいな。
一角　ムウ、イカサマ。爰に置いては何かの目障り、今宵は一先づ連れ歸れ。
辨竹　船を待たして置きました。夜の更けぬうち、河岸まであゆばつしやりませ。
ト金五郎こなし。
金五　小三が心底承り。此方に遺恨は殘らぬ。して、一角どの、こなたの所存は。
一角　云ひ分あれど、今は申さぬ。重ねて御意得る折もご

ざらう。
金五　何時なりともお目にかゝらう。
一角　しかと詞を番ひました。
金五　然らば身共は、罷り歸る。
一角　どうなりとも勝手にさつしやい。
ト合ひ方になり、金五郎切り戸を出る。小三、右の袱紗を椿の枝に結び附け
小三　金五郎さま。
ト金五郎止まる。
わたしが心は、ソレ。
ト切り戸のあなたへ抛る。金五郎取上げ
金五　玉椿の八千代まで
小三　變らぬ色のその一枝。
金五　忝ない。
ト雨車。蛙の聲になり
たれ　ヤア、また降つて來たさうな。オヽ、辛氣。
辨竹　モシ、旦那、お傘を。
ト金五郎、一角、紅葉傘を取つて、双方より小三に差出す。小三、思はず兩手に取つて、一角の方を見て突き放す。一角、ヒヨロ／＼となる。金五郎の傘を取つて戴く。一角「うぬ」と傘振り上げる。金五郎、突き廻して切り戸ピッシャリ。小三は傘をしやんと廣げる。一角は打ちつける。右の途端一時、擂り鉦入りの鳴り物にて、よろしく
ひやうし幕

二幕目

城木屋の場
柳原の場

役名——城木屋庄兵衞。同聟、喜藏。同手代、丈八。同娘、お駒。同丁稚、金太郎。同下男、太助。手代、嘉助。同、伊兵衞。和國橋の髮結ひ、才三。才三母、おろく。神田の興吉。松田軍兵衞。飯島城之助。城木屋の乳母、おくに。同腰元、きり。同、たか。遊び人、八。

舞臺にて知らせの木を入れると、靜かに東西の窓蓋を下ろす。本釣り鐘を撞き出す。
本舞臺、三間の間、二重舞臺。上手、店戸棚、上下とも明け立てあり。眞中暖簾口。下の方、鼠壁、こ

れに帳面數多掛けあり。東の方、折り廻り障子屋體。この前に竈、大釜。人出入りあり。水瓶に蓋をして下座、藏の横手切り破りあり。いつもの所、門口、戸を締め、すべて城木屋店の間の道具。幕の内より右二重に嘉助、伊兵衞、手代にて、金太郎、丁稚の拵らへ、右三人蒲團を引きかぶり、寢てゐる。割り竹、鐵棒の音、犬の聲にて幕明く。

ト向うより神田の與吉、どてら、山岡頭巾、大出刃を手拭にて卷き、帶に差し、竹瓢簞と火繩を振りながら出る。犬の聲かまびすしく、花道に立ちどまり、揚げ幕の方へ物を投げてゐるこなし。これにて犬の聲段々に遠ざかる。本舞臺へ來て、思ひ入れあつて、藏の壁を右の出刃にて切り破り、竹瓢簞を出してがらつかせ、よろしくあつて、忍び込む。火繩を振りながら、奥へ行かうとして、聞き耳するこなしあつて、ヂッと扣へる。ト奥より喜藏、帶解け擴げにて、ヌッと出る。與吉と行き合はうとする危ふき模樣。與吉は摺り拔け、上の方へ行く。喜藏、蒲團に躓かうとして四つ這ひになり、障子屋體の側へ探り行く。與吉は水瓶に腰を掛け、透かしてゐる。喜藏、小聲にて

喜藏　お駒や。女房どもや。……よう寢てゐるさうな。

ト障子屋體をソッと明ける。内に太助、下人の拵らへ、連尺の仕掛け、自在の釘に細引を掛け、ブラ〳〵と首吊つてゐる。喜藏、探り寄つて

コレ、おれぢや。喜藏ぢや。喜藏さまぢや。おりやあんまりの切なさに、又も忍んで來たわいなう。

ト膝を撫でる。鷄笛、烏聲になる。

ヤア、起きて立つてゐやるか。なぜにぢやぞいの。コレ、お駒〳〵。

ト膝を持つていさぶる。太助クルリと廻る。

コレ、こちら向きや〳〵。

ト又くろりとこちらへ廻る。

ほんに其方は胴慾な者ぢやぞや。云ひ號けは名ばかりで、祝言もせず他人向き。側へ寄るとピンシヤン〳〵と、アレアレ〳〵、もう鳥が啼く、今が絶對絶命ぢや。ツイ

ト寄り添ふ。此うち窓蓋靜かに上がる。與吉恟りして、表へ出ようとして、こなしあつて大釜の中へ隱れる。喜藏いろ〳〵あつて

オヽ、つめた。とつと死人に觸るやうな。

トいろ〳〵撫でゝ見て恟り

ヤア、……こりや首縊りぢや。皆、起きんかい〳〵。
ト嘉助、伊兵衛、伸び、欠伸して
伊平　騒々しい、なんだ〳〵。
喜蔵　なんだどころか、どいつか爰に首を吊つて居るわい。
ト慄へ〳〵云ふ。
嘉伊　ヤア、。
トあわてゝ起きる拍子に、金太郎を踏む。
金太　アイタ、、、。痛いワ〳〵。
ト泣く。
喜蔵　そこに寝てゐたは、伊兵衛嘉助ぢやないか。
嘉助　若旦那でござりますか。
ト金太郎は二軍の端に居眠つてゐる。
喜蔵　伊兵衛は爰へ来てくれ。嘉助は早く表を明けてくれ。
嘉助　ヘイ〳〵。
ト二重舞臺より踏み外し落ちる。
アイタ、、、。とんだ目にあつた。
トぼやき〳〵表を明ける。舞臺明るうなつたる心にて
伊兵　ヤア、首吊つて居るは太助めぢやな。
ト嘉助、外を見て
嘉助　こりや、ガラリと明けてある。

ト云ひながら切り破りを見附け
ヤア、。サア〳〵、大變だ〳〵。
喜蔵　どうした〳〵。
嘉助　藏の矢尻が切つてござりまする。
喜伊　ヤア。
ト奥より城木屋庄兵衛、町人の拵らへ、手拭にて顔を
拭きながら、丈八、番頭の形、帯なしい〳〵出て
庄兵　怪しからぬ、店が騒がしいぞよ。
嘉助　旦那様。番頭どの。
伊兵　あれを御覧じませ。
庄兵　太助めではないか。ハテ、怪しからぬ事をしをつた
わい。
嘉助　まだそればかりぢやござりませぬ。申し。
ト門口へ連れて行て
あの通りでござりまする。
庄兵　ドレ。
ト見て、こなしあつて
丈八々々。
丈八　ヘイ〳〵。
ト同じく見て

丈八　ヤア、、こりやとんだ事ぢや。
庄兵　外の様子、内の體。只事ではないわい、
丈八　左やうでござりまする。太助が宿受けは髪結ひの才三。早速呼びに遣はされませ。
庄兵　こりやよう氣が附いた。コリヤ、伊兵衛、お藏屋敷へ行て、この様子をお屆け申し、御檢使を願うてくれ。
伊兵　畏まりました。
丈八　コリヤ、金太郎。急な事があると云うて、髪結ひの才三を、いま呼んで來い。
金太　ハイ／＼。
嘉助　ところで、この死骸を
　ト下ろさうとする。
丈八　ア、、コレ／＼。御檢使様のござるまでは、滅多に動かされぬ。見苦しい程に、障子を締めて置かつしやい。
嘉助　これでよしか。
　ト障子締める。
庄兵　時に丈八、爰は端近、店では取入つた相談もならぬ。何かの事はおれが居間で
喜藏　成る程、それがよろしうござりまする。
伊兵　左やうなれば、私しは
金太　髪結ひどのを呼んで參りませう。
丈八　また道で冗談すな。
庄兵　ア、、人を使へば、苦を使ふぢやな。
　ト唄になり、庄兵衛は奥へ、伊兵衛、金太郎は向うへ入る。喜藏、丈八、嘉助殘る。合ひ方。丈八奥口を見て
丈八　若旦那、昨夜の泥坊は勿怪の幸ひ。
喜藏　サア、それについて話しもあれど、こぞつてゐては工面が悪い。店を掃除する顔で
丈嘉　エ、、成る程、承知々々。
　ト喜藏は埃をはたく。丈八は棕櫚箒、嘉助は手盥と雑巾を持つて、掃除するこなし。鼓の入つた合ひ方になり
喜藏　元おれは親仁の甥で、惣領の庄松は、子供の時から家出をして、今にとんと行くへが知れぬ。そこでおれも取込んで、妹娘のあのお駒と、娶合すといふ親仁の料簡。こいつ巧いと思ひの外、あの阿魔めがピンシヤンピンシヤン。いま／＼しくて業が沸えて、堪へられたものぢやない。
　ト無性に障子の埃を叩く。

丈八　伏してつら／＼考ふるに、その一物はこの町の、あの髮結ひめ、彼奴が〆めて居る。……慥かな證據はお嬢樣から、髮結ひに渡す文を、ちよいと卷きあげて置いたゆゑ、太助めの懷中へナ、よい手番ひでござりませうがな。

嘉助　何より大事はこのお墨附。

ト懷中より出し

昨日奧藏へ金を出しに往た次手に、してやつて置きました。しつかりお渡し申しまする。

ト喜藏取つて

喜藏　大切な殿樣の御判の据つたこの書き物。失うたを科にして、親仁を追ひまくる。

嘉助　一旦家內は上がり物。

丈八　軍兵衞さまとの云ひ合せ。

喜藏　後はソロリと舁へ下さる。

丈八　この番頭は樂隱居。

嘉助　後役は斯くいふ嘉助、

喜藏　千秋萬歲。

嘉助　めでたい揃ひ

丈八　祝うて一つ。

ト手を打たうとする。

喜藏　ドツコイ。打つては堪らぬ。

丈八　そんなら何かは

喜藏　今日の一埒。

嘉助　若旦那。

丈八　マア奧へ。

ト唄になり、丈八、嘉助奧へ入る、後に喜藏こなしあつて

喜藏　イヤ、また此やうなうまい事がつかへて來るものか。この間柳島の妙見で、不思議に手に入つた、コレ／＼、コレコレ

ト掛け硯の引出しより、前栽の寶の箱を出し

この一品を軍兵衞さまへ持つて行けば、褒美はズツシリ。先づこれは斯う懷中する。

ト懷へ納め

さて、この墨附をおれが所持するは甚だ危ふい。どこぞよろしきとめ所が

トあたり見廻す。

困るといふ古いやつぢや。

ト內より

庄兵　喜藏はどこにゐる。相談がある。ちよつと來てたも。

喜藏　ハイ〳〵。呼ばれるといふも古いやつぢや。
庄兵　今ぢや〳〵。
喜藏　ハイ〳〵。
　トうろたへ
うろたへも古いやつぢや。
　トいろ〳〵ある。
庄兵　喜藏々々。
喜藏　ハイ〳〵。マアちよつと爰へ。
　ト大釜の中へ抛り込む。
庄兵　喜藏々々。
喜藏　ヤレ、せわしない。
　ト唄になり、喜藏、奥へ入る。ト釜の蓋を内より明け、與吉、首を出して、右の墨附をとくと見て
與吉　素人に油斷はならぬわい。
　ト又すつぼり入る。と内にて
こま　イヤ〳〵、どのやうに云やつても、わしや否ぢやわいなう。
　トなまめいたる合ひ方になる。奥よりお駒、振り袖、娘の拵らへ、狆を抱き、おくに、乳母の形、腰元きり、たか、附き添ひ出る。

くに　これはしたり、それでは濟みませぬ。云うて聞かせます事がある。マア、お坐りなされませ。
　ト下にゐる。お駒、身を背け、狆を撫でゝゐる。
申し、なんぼうお年がゆかぬとて、あなたのやうにお聞分けがなうては、お育て申したこの乳母が、旦那様へ申し譯がござりませぬ。あの喜藏さまと、お小さいからの云ひ號け。御祝言なさるゝが、親旦那様へ御孝行。よいお子様ぢや。サア、アイと仰しやれ。ナウ、二人の衆、さうではないかなう。
たか　お乳母どのゝ云はしやるのが、尤もか知らねども、憎てらしい若旦那様。お孃様のお嫌ひなさるゝは、お道理ぢやないかいなう。
きり　エヽ、これはしたり、お乳母どのが氣を揉んでゐさんすに、其やうに云ふものかいなう。申し、お孃様、お否ではあらうけれど、御祝言なされませ。あの若旦那様の事なら、わたしどもは
くに　得心するであらうなう。
きり　矢ッ張り否ぢやわいなア。
くに　エヽ、モウ、何を云ふのぢやぞいの。
　ト腹立てる。

こま　アレ、きりや高でさへ、あのやうに云やるではないかいの。

ト おくに、こなしあつて

くに　そんならもう申しませぬ。フツ〳〵お勤め申しませぬ。その代りこの乳母は、今日きりでお暇をもらひまする。

こま　ヤア。

くに　ドレ、この通り、旦那樣へ。

ト 立つて行かうとする。お駒取り附き

こま　否ぢや〳〵。こちや其方を返す事は、いや〳〵。

くに　そんなら御得心なさるゝか。

こま　祝言も否。返す事も否。もう堪忍してたもいなう。

ト おくにに取り附き甘へる。

くに　これはまたぞんきな事ぢや。

ト 通り神樂になり、向うより才三母おろく、中年、町女の拵らへにて出て、後より八、附いて出て來る。

八　モシ〳〵、姐御。向うが城木屋でございやす。そんなに駈け出しなさんな。

ろく　ほんにさうだつたな。

八　わたしを爰へ連れて來て、なんぞ用があるのか。

ろく　外でもない。話した通り、あの娘をちよろまかすに、おらが野郎の才三がゐちやア、化けの皮が顯はれる。來てゐるか、來てゐねえか、われ、ちよつと窺つてくれろ。

八　合點だ。

ト 門口へ來て、また立歸り

兄いはゐやせん。お孃と外に二人、丁度いゝ塩梅しきだ。

ろく　そんなら、おのしやアな、内を氣を附けてくれろ。

八　オイ。首尾よくやんなせい。……カウ、錢を十二文くんな。

ろく　何にする。

八　一ぺい湯へ入つて行く。

ろく　かする奴だ。

八　ドリヤ、溫まらうか。

ト 八、向うへ入る。おろく、本舞臺へ來る。

ろく　城木屋さまは、內方でござりまするな。

きり　アイ、さうでござんすわいな。

ろく　左やうなら、御免なされませ。

ト ずつと內へ入る。

くに　こな樣は何の用で、どこからござんした。

ろく　ハイ、わたしや柳原邊の者。內方のお孃樣に、內々

お話し申したい事があつて、それでわざ〳〵參りまして
ござんす。
きり　お孃樣、あの女中知つてござるかえ。
こま　ついに逢うた事もないお方ぢやわいなう。
ろく　成る程、まだお目にかゝつた事はないけれど、お話
し申せば遁がれぬ者。皆樣は少しの間、爰を遠ざかつて
おくれなされ。
くに　それはどうやら。
　ト氣遣ひこなし。
ろく　何にも氣遣ひな事ぢやござんせぬ。あのお子さんの
お爲によい事でござんす。
くに　さういふ事なら、其方衆も
たか　一緒に奥へ行かうわいな。
ろく　お邪魔でござりまする。
　ト乳母こなしあつて、三人奥へ入る。おろく、摺り寄
つて
此やうに申したら、藪から棒のやうに思ひなさんすであ
らうが、コレ、
　ト奥口見廻し
わしや髮結ひ才三が母でござんすわいな。
こま　エヽ。そんならお前が……ようお出でなさんしたな
ア。
　トおろく顏にて「出よ」とする。キッパリした合ひ方
になる。兩人向うへ出て
ろく　お駒どの、こなさんは、わしが息子の才三と、懇ろ
してゐようがの。
こま　エヽ。
　トはつと思ふこなし。
なんのマア。
ろく　隱すには及ばぬ。知つてゐます。見る影もないあの
才三を、不便がつて下さんす志し、ほんの嫁御のやうに
思うて、懷かしうござんしたわいなア。
　トお駒こなしあつて
こま　樣子を知つての上なれば、隱さうやうはござんせぬ。
必らず叱つて下さんすなえ。
ろく　なんの叱るどころかいの。これまで逢ひにも來たけ
れど、釣合はぬ身を恥ぢて、わざと音信もしませなんだ
が、今日は是非ともお前に逢ひ、相談せにやならぬとい
ふは、才三の歸參が叶うたゆゑ。
こま　エヽ。

ろく　イヤ、悔りする事はない。元の武士に立歸れば、御主人の威光を借り、表向きから云ひ入れて、天下晴れての才三が嫁。

こま　エヽ、そりやマア、ほんの事でござんすかいなア。

　ト　いそ〳〵する。

ろく　サア、それ程めでたい事なれど、思ふに任せぬ譯といふは、恥かしい事ながら、髮結ひまでなり下がり、尾羽打枯らした長の月日。武具は元より、身の廻り、何貯へのあらばこそ。義理ある才三に親御の名跡、繼がす事さへならぬとは、口惜しいやら、悲しいやら、母が心の苦しさを、推量して下されいなう。

　ト　泣かうとして、わざと食ひしばるこなし。

こま　それはマア、ひよんな事。どうぞ仕樣はない事でござりませぬかいなア。

ろく　仕樣というて、皆金づく。こなたのやうに金銀の、有り剩る所もあるに、可愛や才三は一生埋れ木。果報拙い身の上ぢやわいなア。

　ト　けしかけやうに云ふ。お駒、ウロ〳〵して

こま　申し、阿母樣。よい思案をして上げて下さんせいなア。

ろく　サア、お出でた。

こま　エヽ。

ろく　ヤ、サア、そこぢやわいな。一人娘のお前の事、金銀は自由であらう。貢いでさへ下さんすりや、あの子も早速世に出るといふもの。ツイ四五百兩ばかり、この母に貸して下さんせ。

こま　それはいつちお心安い。お父樣にさう申して、貰うて來て上げるわいなア。

　ト　立つて行かうとする。

ろく　滅相な。それ云うてよいものか。ソツと、こなさんの内證で。

こま　内證で上げたうても、金子藏の出し入れは、手代どもの役なれば、わたしや勝手は知らぬわいな。

ろく　ム。イカサア、さうあらう。そんなら何ぞしつかりした、質種を貸して下さんせ。

こま　質種とは、何の種でござんすえ。

ろく　いかに大所の娘ぢやというて、餘りなのろ助ぢや。

こま　わたしやお駒といひますわいな。

ろく　コレ、質といふはな、衣類でも、道具でも、それを抵當に金を借りる事ぢやわいな。

こま　それには、どのやうなものを上げたらようござんすえ。
ろく　すれば、マア、金持ちの娘には、いつち頭の道具が金目、櫛、笄の類なりと、隨分よいのを貸して下さんせ。
こま　其やうな物でもよければ、ツイ爰にでもあるわいな。
　ト重ね戸棚の引出しより櫛箱を出し、持つて出る。喜藏見て引込む。
これはお出入りのお屋敷へ上げるといふ、よい櫛でござんすさうな。マア、これなりと才三さまの、お役に立てて下さんせ。
　トおろく取つて見て
ろく　こりや玳瑁で、しかも三光。五百兩は丈夫なもの。そんならこれはマア借りまする。とてもの事、少々でも、小判で才覺はなるまいかな。
こま　サア、才三さまのお爲なら、どうなりして上げうが、ちつとの間勝手へ行て
ろく　そりや待つてゐますが、內の手前は、目見得に來たお針ぢやと云うて置かしやんせ。
こま　アイ／＼。そんなら阿母樣。
ろく　隨分早う頼みまする。

こま　乳母や／＼、どこにゐやるぞいなう。
　ト唄になり、呼び／＼奥へ入る。ト引違へて、奥より喜藏出て
喜藏　おろくか。うまい事したな。
ろく　お前の知らせで、あのさまめをたぶらかし。
喜藏　この科を云ひ立てに、お駒は二階へ座敷牢。そこへ仕掛けの無理無體に、ぶつてしめると、後はブル／＼。とはいふものゝ、酢につけ、粉につけ、邪魔なはあの親仁め。
ろく　殘り多い年でもない。叩き殺すがいつち近道。
喜藏　おれもさうは思へども、ひよつとぐれたら竹鋸。
ろく　オヽ、思ひ出したわいな。それにはいつち善い物がある。コレ／＼。
　ト腰の巾着より藥の包みを出し
こりやコレ妙藥の痺れ藥。これを酒で食はすが最期、立ち所に中風ぢや。あの才三が親仁めも、たうとうこれでやツつけた。後腹やまぬ妙法ぢや。マア、用ひて見やしやんせ。
喜藏　そりや忝ない。さらば頂戴。
　ト取らうとする。

ろく　オヽ、厚かましい。只はならぬ。五十兩ばかり遣はされ。賣つて上げる。
喜藏　と云うて、爰に金はないが、待て〳〵。
　ト最前の寶の箱を出し
金の抵當にこの寶を、ちつとの間預かつて、どうぞその痺れ藥を。
ろく　しよ事がない。馴染み甲斐に藥は上げるが、後で金と引替へぢやぞえ。
喜藏　合點ぢや〳〵。
　ト互ひに引替へ
さうした所で、コリヤ、
　ト囁く。
ろく　合點ぢや。
喜藏　マア奥へ。
ろく　ドレ、酒なりとぐづらうか。
　ト行かうとして
必らず金と引替へぢやぞえ。
喜藏　サア、えいわえ。
　トまた行かうとして
ろく　五十兩ぢやぞえ。

喜藏　よいと云ふに。
ろく　ヤレ、金儲けは大抵ではないぞ。
　ト唄になり、おろく奥へ入る。後に喜藏こなしあつて
喜藏　こりやよい物が手に入つた。時に、こいつぢや。
　トあたりを見廻し
毎朝親仁めが頂きをやる神棚のお神酒徳利。よし〳〵。
　ト通り神樂になり、神棚の三方を下ろしてくる。此うち向うより才三、髪結ひの拵らへにて、鬢盥を下げ、金太郎と連れ立ち出る。
金太　サア〳〵、ちやつとござれ〳〵。
才三　さりとて忙しない小僧ではある。
　ト云ひ〳〵本舞臺へ來て、門口を入らうとする。この時
喜藏　金の口が痺れ口。
　トこれにて才三、金太郎を押へ、ヂッと扣へる
銀の口が只の酒。この金の口の方を親仁めに喰はせばノ
ルブル。うまい〳〵。
　ト元の通り神棚へ直す。
才三　若旦那、それにござりますか。
　トずつと入る。喜藏悸りして

喜藏　どいつぢや。悄りするわい。
才三　イヤ、才三めでござりまする。何やら急な御用があると云うて、小僧どのが呼びに見えましたが、お髪でも致しますかな。
喜藏　そこどころか、太助めが昨夜首を縊り居つて、内は亂騒ぎぢやわい。
才三　エヽ、そりやとんだ事しをりました。
喜藏　それについて何かの相談。親仁が奧に待つてゐらる。
才三　常から正直なあの太助め。よく〳〵なんぞ……左様なら旦那様に、お目にかゝりますでござりませう。
喜藏　サア。おぢや〳〵。
ト先に立ち行かうとして、立ちどまり、神棚を見る。才三も同じく見る。兩人こなしあつて
才三　金の方が
喜藏　ヤア、
才三　痺れ藥。
才三　サア、參りませう。
ト唄になり、兩人奧へ入る。あと合ひ方。與吉釜よりソツと出ようとする。人音するゆゑ、ちやつと引込む
喜藏引返し、鉢を持ち出て、こなしあつて
喜藏　才三めが氣取つた様子。
ト右の酒を入れ替へ、ありやこりやにして
斯うして置けば、よし〳〵。
トついと入る。與吉ズツと出て、思ひ入れあつて、また元々へ入れかへ
與吉　御見物、必らず仰しやつて下さりますな。
ト唄になり、また釜へ入る。
ト合ひ方になり、向うより伊兵衞案内して、飯島城之助、松田軍兵衞、羽織、袴、家來附き添ひ出て
伊兵　サア、斯うお出で下さりませう。
ト本舞臺へ來て
旦那々々、御檢使様のお入りでござりまする。
ト奧より庄兵衞、嘉助、喜藏出て
庄兵　これは〳〵、御兩所様、御苦勞に存じまする。
喜藏　見苦しうはござりますれども、
軍兵　イザ、城之助どの。
城之　先づ〳〵。
ト合ひ方になり、兩人、上へ通る。
軍兵　城木屋庄兵衞。手代どもが訴へによつて、委細の様

子は聞き屆けた。
城之　代々お出入りを勤むる其方、我れ〱惡しくは計らはぬであらう。
庄兵　有り難う存じまする。
城之　して、死骸は。
伊兵　卽ちこれでござりまする。
　ト障子を明ける。
軍兵　取下ろしてよからう。
嘉助　畏まりました。
城之　その上、盜賊が入つたとある。紛失の品は相知れたか。
庄兵　只今調べて居りまする。丈八〱。
丈八　ヘイ〱〱。
　ト奥より出て
段々調べました所が、大切な殿樣の御判の据つたお墨附が見えませぬ。
庄兵　一災起れば二災起ると。ハテ、思ひも寄らぬ。
　ト此うち嘉助、伊兵衛、死骸を直す。
城之　先づ差當る橫死の詮議。
軍兵　城之助、立合うて遣はされい。

城之　承知いたした。
　ト兩人太助が死骸を見て
軍兵　こりや、コレ、自身に發得して、縊れたるものとは見えぬ。飯島どの、御自分には如何思し召す。
城之　御意の通り、無體に餘人が締め殺し、斯く拵らへしに相違ござらぬ。
軍兵　して、この者の一家親類、定めて請け人もあるであらう。
　トこの時才三出て
才三　太助めが請け人は、卽ち私しでござりまする。
　ト向うへ出て、
城之　われは。
才三　近頃御町內へ參りました、才三と申す髮結ひでござりまする。
軍兵　死骸の懷中改め見よ。
侍ひ　ハツ。
　トいろ〱探し
斯やうな物がござりまする。
　ト濡れ文を渡す。軍兵衛見て
軍兵　その髮結ひめに繩ぶて。

侍ひ　ハツ、捕つた。
　ト一人十手にて、打つてかゝるを、腕首をキツと取つ
　て
才三　狼藉な。なんとさつしやる。
　ト引ツ外して打つてくるを
潔白なこの才三、繩かゝる覺えござりませぬぞ。
　ト見事に取つて投げる。軍兵衞ソツと寄つて、才三を
　取つて引き附け
軍兵　こな横道者めが、死骸の懷中に所持したる、艶書の
宛行は「才三さま參る、駒より。」
庄兵　ヤア、すりや才三は娘と
嘉助　疾から不義してござりまする。
庄兵　コリヤ、娘を爰へ呼べ／＼。
伊兵　ハイ／＼。
　ト奧へ入る。
軍兵　ヤイ、泥坊め。うぬ、駒と不義せしを、この者に見
附けられ、無體に殺して、縊れし如く計らひしに相違な
い。
　ト突き放し
ぶち据ゑて縛し上げい。

侍ひ　ハツ。
　ト双方よりかゝるを立廻つて
才三　待つた。一應御尤もではござれども、太助を殺さう
と存じつけば、請け人の私し、手前の内へ取込んで、人
に知らさぬ仕樣もござらう。我が手に殺しながら、證據
になるべき一通を、わざと死骸の懷へ、入れ置く馬鹿も
ござるまい。こりや私しに意趣あつて、企んだに違ひは
ない。恐れながら、今一應、とくと御吟味
　トとん／＼と千鳥に投げ
遊ばして下さりませう。
軍兵　それをうぬに習はうか。手向ひせば、身が手を下ろ
して
　ト向はうとする。
城之　イヤ／＼、お急きなさるな。只今彼れが申すも一理
再應吟味を遂げし上、越度なきやう計らふが、我れ／＼
が役目の表。その罪に服せざるを繩打つは無成敗。先づ
先づ。
軍兵　それは格別、大切なる殿の御判の据ゑられた、お墨
附を失ひしは、重罪の城木屋庄兵衞。その身は牢舍、家
財は闕所。

庄兵　エヽ。
軍兵　但し、云ひ譯の筋があるか。
庄兵　サ、それは。
軍兵　サア
庄兵　サア
軍兵　サア〳〵〳〵。
軍兵　家内殘らず封印いたせ。
侍ひ　ハッ。
　ト行かうとする。
與吉　お役人待つた。詮議の筋が間違つた。
　ト蓋を取り除けスッと出る。
軍兵　相好といひ、白晝に、その中に屈み居るは
與吉　知れた事、泥坊サ。
皆々　ヤア、。
　ト表へ逃げる。
與吉　神田の與吉といふ盜賊でえす。ドレ、お神輿を持ち出さうか。
　ト合ひ方になり、水瓶を踏まへ、下りてくる。
喜藏　ア、、コリヤ〳〵。盜人と幽靈は晝出るものぢやないわい。途方もない。
　ト慄ふ。庄兵衞、與吉を見て
庄兵　ヤア、、おのれは兄の庄松。
與吉　コレ〳〵〳〵。サ、庄松、ナ、正まつ交りなしの盜人。そこで白晝に出たものだ。さらば妾らへ臺座を据ゑようか。
　ト眞中にどつかと坐る。
軍兵　夜盜のざまで詮議の批判。先づうぬに。
　トつか〳〵と寄つて、十手振り上げる。その手をキッと留め
與吉　オッとジタバタと騷ぐまい。外から入つた盜人より内にゐる泥坊の、詮議するが結局近道。
軍兵　なんと。
與吉　我れと名乘つて出るからは、逃げよと云つても滅多ぢや動かぬ。唾みの性根は別でえすわい。
　ト突き放し、庄兵衞思ひ入れあつて
庄兵　思ひがけもない。どうしてマア。
與吉　親仁樣、イヤサ、年の寄つた玆な親仁。こなたが盜まれた、墨附とやらはこれか。
　ト見せて
喜藏　ヤアそれは。

ト寄らうとする。

與吉　欲しいか。

喜藏　ドッコイ。

ト後へ寄る。

與吉　べつこ。……コリヤ、耳の穴をさらへて、よう聞いて下され。盜人だといつて同じ人間。よい事ぢやとは思はねど、止めうというても止められぬは、こりやおれが云はいでも、前生の因果の報い。玆な内へかまつたは、錢金の欲しいばかりぢやない。この首の落ちないうち、餘所ながらたつた一度

ト庄兵衞を見る。庄兵衞も思ひ入れ。

アヽ、これもごくに立たぬ述懐。爰に入つてゐたりやこそ、手に入つたるこの墨附。ソレ、云ひ譯を立てさつしやれ。

ト庄兵衞へ抛る。

庄兵　勿體ない。

と戴き

お改め下されませう。

ト城之助開き見て

城之　殿の御判に相違ない。

與吉　マア、一方は方附いた。ヤ、コレ、若いの。その死骸をとつくり見て、身の明りを立てたがよい。

才三　イカサマ。

與吉　マア、一服やらかさう。

ト才三ズッと寄つて死骸を改める。こなしあつて、懷を探つて見て

才三　心下に溫まりのあるは。

ト引起して活を入れる。太助ゥンとのる。

丈八　南無三。

ト立ちかゝる。

才三　どうした。

丈八　ハテ、よう戻つたなア。

ト思ひ入れ。

才三　太助、おれぢや。氣を慥かに持て。

ト太助、才三を見て

太助　才三どのか。

才三　コリヤ、わりやなんで首を吊つた。

太助　イヤ、昨夜奧藏の入り口で、あの番頭がお墨附の箱を。

才三　もうよい。その後は何にも云ふな。ヂッとしてゐ

い、

ト方寄せ

申し、若旦那、番頭樣。これで才三が身の明りは

喜藏　イヽヤ、立たぬ。まだ間男の科がある。

才三　なんと。

ト奥バタ〳〵にて、伊兵衛、お駒を引き立て出るを、おくに、きり、たか、支へ出る。

くに　こりやお孃樣をどうするヿぢやぞいなう。

丈八　どうもせぬ。間男の吟味するのぢや。

三人　エヽ。

喜藏　コリヤ、お駒、お屋敷から誂らへの、三光の差し櫛は、われが盗んで、あの才三めに渡したであらうがな。

庄兵　丈八、抽出しを改めて見い。

丈八　畏まりました。

喜藏　この喜藏が手短かに。

ト箒を持つてかゝらうとする。才三、喜藏を引き廻して

才三　若旦那。人の科よりお前の身の上。親旦那へ痺れ薬を飲まさうといふ企みの底。

喜藏　ヤア。

才三　コレ。

ト神棚の三方を持つて出て

金の口が痺れ薬、銀の口が只の酒。なんと胸に應へやうがな。

喜藏　イヽヤ、知らぬ。覺えはない。その知らぬといふ潔白に、この酒おれが飲んで見せう。

ト與吉、煙草をのみながら

與吉　東西々々。

ト笑うてゐる。

才三　アノ、見事、この金の口を。

喜藏　如何にも。

ト有り合ふ茶碗を取つて

サア、われ注げ。

ト才三注ぐ。喜藏こなしあつて、グツと飲む。此うち丈八向うへ出て

丈八　どのやらに探しましても、お誂らへの櫛は見えませぬ。

庄兵　ヤア〳〵。コリヤ〳〵。お駒、そちや取つた覺えがあるか。

くに　ちやつと云ひ譯を遊ばせいなア。

庄兵　コリヤ、どうぢやぞいやい。

ト お駒こなしあつて

こま　父樣、堪忍して下さんせ。成る程、その櫛は、ちよつと欲しい事がござんして、わたしが取りましてござんすが、才三さまに上げたのではござんせんわいなア。

嘉助　ムウ、して、その櫛はどうなされた。

こま　サア、それはな。

くに　どうぢや。譯を仰しやれいなア。

こま　譯はどうも云はれぬわいなう。

ト 丈八側へ寄り

丈八　申し、ようお聞きなされや、あの櫛は大切な萩原家の奥樣、お誂らへの御用物。お役人樣もあれにござれば、ツイ無いとばかりでは、旦那の御難儀になりますわいな。

こま　なんと云やる。そんならあの櫛が見えぬと、父樣の難儀になるかや。

庄兵　この庄兵衞、奥樣へ申し譯がないわいやい。

こま　父樣、わたしはまた其やうな、大事の物とは知りませなんだ。コレ、きりや、最前ござんしたお針樣を、爰へ呼びましてたも。

きり　ハイ／＼、申し、お針さん／＼。ちよつと來て下さんせ。

ろく　オヽ、忙しない。なんぢやぞいなア。

ト 奥より出る。才三見て

才三　ヤア、お前は。

ろく　アヽ、コレ／＼、髪結ひどの、必らずツカ／＼と物を云ふまい。ナ、云うたら髪におくれが出るぞや。

才三　ハテ、思ひがけもない。

ト お駒こなしあつて

こま　申し、おかみ樣、ちよつと來て下さりませ。

ト こちらへ連れて來る。

ろく　なんでござりまするぞいな。

こま　サア、お氣の毒にはござんすが、最前お前へ上げた櫛な。

ろく　エヽ。

こま　それがなうては、父樣の御難儀になるげにござんす。どうぞナア、ちよつと。

ト ぐづ／＼云ふ。

ろく　申し／＼、この子とした事が、そりやマア、何を仰しやるぞいなア。

こま　ソレイナア、最前の
ろく　エヽ、最前とはなんでござんす。
こま　お前に上げた櫛の事いな。
ろく　わたしや、いつ、あなたに、何を貰ひましたえ。
こま　ツッとモウ…玳瑁の三光の櫛の事。
ろく　どこにいな。いついな。アヽ、アヽ、聞えた。三光
三光と云うてぢやのは、どうでも此お子には、稻荷樣が
附いておぢやさうな。ほんに大枚な事を云ひなさんせ。わ
たしや何にも覺えはないぞえ。
こま　そんならどうでも。
ろく　しつこい。知らんわいな。
ト きつと云ふ。お駒いろ／＼思ひ入れあつて
こま　さらぢや。
ト才三が櫛箱の剃刀にて自害せんとする。庄兵衞留め
て
庄兵　待て。わりや櫛を失うて、云ひ譯なさに死ぬるの
か。
こま　さらばでござんす。
庄兵　これはしたり、尤もは尤もなれど、例へどのやうな
難儀になればとて、其方を先立てこの親も、なんの生き
てゐる心があらう。
こま　それぢやというて。
庄兵　ハテ、婆は死ぬる。たつた一人の
ト與吉を見て。
サア、可愛い娘もしもの事があつたなら。おりやなん
とせうぞいやい。
ト泣く。お駒取り附き
こま　勿體ない、其やうに。
庄兵　親ぢやもの、子ぢやもの。
ト與吉へかけて云ふ。與吉、煙管をバッタリ落す。
こま　エヽ、有り難うござんす。
トしがみ附いて泣く。此うち喜藏、毒の廻るこなしあ
つて
喜藏　アイタヽヽ。
嘉助　若旦那、どうさつしやりました。
喜藏　とつと、たらちうが、ふな／＼ちて、あを／＼／＼。
ト言舌の廻らず、フナ／＼する。才三、おろくを見て
才三　エヽ、コレ、云ひたいわい／＼。これまで度々手を
盡し、意見をしたも水油。この場の樣子も梳き上げたら、
櫛の行き端、何の縺れ、解くに解かれぬ義理ある仲。撫

で附けて置く胸のうち、ちつとは推量さつしやい。
　ト くひしばる。與吉思ひ入れあつて
與吉　イヤ、その櫛もおれが取つて、疾に脇へばらしてしまつた。
皆々　なんと。
與吉　あの大釜の中にゐて、モ、何もかもこの耳へ。さらばぶちまけてしまふが最期、何奴も此奴も
　ト 睨み廻す。皆々氣味の惡いこなし。
サア、こゝには、妾ら當りにゐる人の、纏しい中の義理に責められ、切ない心を察しやつて、何事もこの身一つに。
　ト 最前の文を拾ひ、寸々に引裂く。
丈八　ヤアヽヽ、證據になるその文を。
　ト 行かうとするを、才三引き戻して
才三　コレ、番頭。證據爭ひする氣ならば、この太助に一部仔什を
丈八　サ、それは。
才三　すツ込んでゐさつしやい。
與吉　ソレ、商賣がらぢや。手拭きにさつしやい。
　ト 才三が前へ抛る。
才三　忝ない。
與吉　お墨附といひ、櫛の盜賊、白狀すれば主を始め、外へ祟りはあるまいがな。
庄兵　ヤイヽヽ。うろたへて、そりや何を云ひをる。
與吉　ハテ、とても素手では通らぬ體。科の箇條はいくらあつても、取らるゝ首はたつた一つ。この世に心殘りはなけれど、後で他人に嘆きを掛ける。これが一生の不孝の仕納め。
　ト 才三が向ひ
コレ、若い和郞。最前からの樣子を見れば、惡い他人を持ち、いかい苦勞をすると見える。
才三　推量の通り、子ゆゑに悲しむ親もあれは
　ト 庄兵衞を見る。
與吉　親ゆゑに泣く子もある世の中。
　ト おろくを見る。
才三　赤の他人と
與吉　他人とが
才三　斯うまた寄れば寄るものか。
與吉　よくヽヽこれも、前の世の
才三　因果づくで

與才　あらうぞいの。
ト時計の七ッ鳴る。
城之　最早七ツ。
與吉　白状は座敷で致さう。サア、繩掛けて引かッしやれませ。
ト手を廻す。
城之　健氣の覺悟。科人揃つた。
ト繩掛ける。おろくこなしあつて
ろく　ひよんな所へ來かゝつて、思はぬ災難を受けうとした。怖やの〳〵、足元の明いうち、ドレ、わしも歸りませう。
ト合ひ方になり、行かうとする。喜藏ブナ〳〵して留め
喜藏　たいでんの、たゝらのゝは、とれたりて、いのゝとた、つといやつ。
ろく　此お人は邪魔さしやんすな。
ト突き倒す。喜藏解らぬ事云つてしやべる。
丈八　申し〳〵、さう身を揉んで堪るものか。ヂッとしてござりませ。
ト無理に押へる。

才三　女中、こなた、それで云ひ分は
ろく　あつても云はぬ。有り難いと思へ。
才三　エヽ。こなたはなう。
ろく　どなたも、おやかましうさんにござりませう。
ト表へ出る。
才三　キリ〳〵と行かつしやい。
トおろく花道へかゝる。向うより八、出て來たり、行きあふ。
ろく　オヽ、痛えな。目を明いて歩きやアがれ。
八　堪忍しねえ。……姐御ぢやアねえか。
ろく　八か。なんで來た。
八　もうお前も用のある時なり、首尾はどうだと案じて來た。
ろく　誰れだと思ふえ。おろくさんが御出馬ぢやア、向うに敵はねえわい。
八　時代なせりふだ。
ろく　以前はお屋敷だけだ。不承しや。
八　鹽梅がよかア、符牒をくんねえ。
ろく　忙しない野郎だ。まだ代物がある。これ見や、三光の鼈甲の櫛よ。漢の武帝といふ唐の人の書いた掛け物。

八　なんだ。漢の武帝だえ。
ろく　武帝サ。
八　布袋が開いて呆れらア。
ろく　無駄云ふな。斯う云つちやア自慢らしいが、口説き上手のおれだ。向うが娘、才三よりおれに惚れた。ソレ、口説き上手にツイほだされて、騙されて咲く室の梅。おれまで浮かしやアがつた。
ト門口シヤンと締めて唄になり、おろく、ぼやき／＼向うへ入る。
城之　ナニ、軍兵衛どの、一件落着の上は、最早引取らうではござるまいか。
軍兵　左樣いたさう。
ト城之助こなしあつて
城之　ナニ、庄兵衛、最前よりの一部仔什、心遣ひ察し入る。この盗賊の出生も
ト扇にて胸を叩き。
何事も承知いたし居る。安堵しやれ。イザ、參らうか。
軍兵　ソレ、科人を引ッ立てい。
侍ひ　ハツ、立たう。
ト合ひ方になり、城之助、軍兵衛花道へかゝる。庄兵衛、與吉が袖を扣へ
庄兵　コレ、盜人どの、なるたけは云ひ譯して、どうぞ命を
與吉　サア、助からうとは思へども、所詮遁がれぬ天の網。コレ、お娘、便りのない年寄り、起臥しに氣を附けて、二人前の孝行を
こま　エヽ。
與吉　賴みますぞや。
こま　ヤア！そんなら話しの
ト寄らうとして。
庄兵　コリヤ。
ト押へて。
與吉　この身の果は鈴ケ森。首になつて逢ひませう。
トほろりと泣く。
侍ひ　うせう。
與吉　さらばでござる。
ト唄になり、與吉、立派に引立てられ、向うへ入る。庄兵衛、お駒、與吉があと殘り多さうに見送る。喜藏涎を流し、何ぢや分らぬ事を云うて無性にしやべる。
庄兵　コリヤヤイ、うぬが手盛りを食うたは、敵たうた親

の罰。と云うて捨てゝは置かれぬ。コリヤ、乳母、女ど
も、奥へ連れ行き、醫者を呼んで見せてくれ。
くに　サア、若旦那。
きり　奥へお出でなされませ。
庄兵　丈八、皆の者、喜藏へ氣を附けい。
太助　畏まりました。
丈八　サア、おぢや〳〵。
ト女達喜藏が手を取る。喜藏分らぬ事をしやべり〳〵
皆々附き添ひ、奥へ入る。才三こなしあつて
才三　イヤ、申し、旦那様。お心遣ひでさぞお疲れ。取り
とめたと申すものゝ、當分お役には立ちますまい。この
太助は、私しが引取りまして、養生が致させたうござり
まする。
庄兵　それも尤も。こなさんと娘が事、例へ覺えはないに
もせよ、人の口には戸が立てられぬ。氣の毒ながら、暫
らく出入りを遠ざかつてもらひませう。……人の噂も七
十五日、其うちには沙汰も止み、浪風なしに納まるであ
らう。必らずともに、怨んでばし下さるなや。
才三　勿體ない、何しにお怨み申しませう。左様なら私し
は、もうお暇申しまする。サア、太助、立て〳〵。

庄兵　娘、其方も奥へ。
こま　アイ。
才三　おやかましうござりました。
ト唄になり、お駒、才三へこなしあつて、庄兵衛奥へ
行き、才三は太助を先に、こなしあつて向うへ別れ入
る、この頃、胡弓入り、獨吟になる。
こま　父様の今のお詞では、もうこれからはフツツリと、
才三さまには逢はれまい。とても添はれぬ事ならば、い
つそ。
ト死ぬるといふこなしあつて
父様への云ひ譯は、たつた一筆。さうぢや〳〵。
ト胡弓入りて獨吟になり、行燈の火を掻き立て、書置
を書く。此うちよき程に、奥より狆走り出て、側へ附
く。
オ、市かいなう。聞いてたも。わしやひよんな身になつ
たわいなう。必らず後で、この書置を、父様に上げてた
も。頼んだぞや。
ト首たまへ結び附け、門口へかゝる。錠おりてあるゆ
ゑ、いろ〳〵して「辛氣な」といふこなし。此うち狆
飛び歩き、幕明きの切り破りより外へ出て、鳴いては

また內へ入り、色々狂ふ。お駒心附き
オヽよう教へてたもつたなう。
ト切り破りより出ようとする。狆、袖を咥へて留め、いろ／＼邪魔するゆゑ、屋體の柱に括り附け、外へ出て、花道まで行く。
せめてま一度才三さまに。
ト舞臺の方を振り返り
さらばでござんす。
トこけつまろびつ向うへ走り入る。狆、身をもがき、切りに鳴く。奧より庄兵衛出て
庄兵　市めが無性に鳴き居るが
ト見て
オヽ可哀さうに、誰れが爰へ括り附けてたぞ。
ト解きながら右の書置を見て
なんぢや、書いたものが。
ト開き見て、大悔り
ヤア、こりや娘が書置。皆、來いよ／＼。早う來てくれいやい。
くに　ハイ／＼。なんでござりまする。
トおくに、きり、たか、出る。

庄兵　コリヤ、お駒が書置を殘して、死にゝ行たわいやい。
三人　エヽ。
ト男大勢出て
大勢　お孃樣が、どうでござりまする／＼。
ト庄兵衛ウロ／＼する。おくにうろたへ
くに　書置が死にゝ出て、お孃樣が殘つてあるわいなう。
大勢　ヤア。
くに　書置ぢや。お孃樣ぢや。
大勢　ようさぢや。てうさぢや。
ト庄兵衛は行燈を持ち、あちらへ行たり、こちらへ行たり、皆々うろたへ廻る。チョン／＼にて道具廻る。
本舞臺、三間の間、一面の黑幕。草土堤。眞中に茶店しまうたる心にて、葭簀を立てかけ、この內に掛け行燈ともしあり、一面に柳の吊り枝。禪のツトメの鳴り物にて、道具とまる。
ト向うより伊兵衛「白木屋」と云ふ弓張りを持ち、嘉助、丈八、喜藏を肩に掛け出る。
伊兵　おろくは大方、內に歸つて居るであらう。

嘉助　若旦那を連れまして行かねば、何分譯が分らぬといふもの。
丈八　エヽ、情ない。おれが首筋を涎だらけにさつしやつた。
　トこんな事云ひ〳〵本舞臺へ來て
伊兵　マヽ、爰へ掛けてござりませ。
　ト床几へ掛けさせ
嘉助　おろく〳〵。
ろく　誰れだ。何者だ。
　ト葭簀を上げて出る。喜藏、おろくを見て分らぬ事云ふ。
丈八　サア〳〵、もうお前は默つてござりませ。時に、最前貴樣に渡した一軸を取戻さうと思うて、それで若旦那を連れて來た。
ろく　返しては進ぜませうが。こりや藥代の形代金と引替への約束。
伊兵　厚かましい。その痺れ藥は物の見事にやり損なつたそれで矢ッ張り金取るか。
ろく　知れた事サ。手盛りを食つたは其方の麁相。取る物は取る筈サ。

丈八　エヽ、どう云へば斯う云ふと、是非がない。
　ト金三兩ばかり出してやる
ろく　こりや何だな。たつた三兩か。
嘉助　わりや又、なんぼう取る氣だ。
ろく　約束だから五十兩サ。
三人　ヤア。
ろく　元この一軸とやらは、盜み物であらうがの。
三人　なんと。
ろく　代官所へ持つて出たら、てまへ達は首があるまいが。
三人　サ、それは。
ろく　四人の首を、五十兩なら廉いものだぜ。
嘉助　そりや又あんまり。
ろく　否ならよしな。勸めはせないのサ。
丈八　さう云や、云はしてしまはにやならないわい。
ろく　てまへ達の手に合ふやうな、甘口な女ではねえぞ。
　ト此うち喜藏這ひ寄つて、茶店より出刃を取つて來て油斷してゐる所を、一かせ切る。おろく「ウン」と反り又ムツクと起きて

ろく　こりや騙し殺しだな。
　ト此うち上手より仕出し、三人出掛ける。
人殺し。
　ト三人、恟りして引返し、逃げて入る。
丈八　せう事がない。やつてしまへ。
兩人　合點だ。
　トめい〳〵薄刃、刺身庖丁の類を取つて來て、おろ〳〵を散々に切り、ト丈八止めを刺す。喜藏フナ〳〵して葭簀の蔭へ入る。
嘉助　どうだ息は。
丈八　止まつた〳〵。
　ト刻ろ。向うバタ〳〵。
伊兵　南無三。人影。
丈八　忍べ。
　ト三人、葭簀へ入る。向うより才三、小提灯をともし、氣の急く見得にて出ろ。時の鐘になる。
才三　あの鐘は初夜だな。荻生の塾へは一筋道。ソレ。
　ト本舞臺へ來て、血に滑り、提灯振り上げ
怪しからぬこの血。……ヤ、、、、、。こりや、母者人。
ヤ、、、、、。

　トどうと下にゐて
エ、コレ、惡事の報いといひながら、淺ましい非業の最期。ホイ、
　ト此うち三人囁き合ひ、物をも云はず眞木にて打つてかゝる。才三かい潜つて
ヤア、うぬらは城木屋の手代めら。さては母者人を殺したも、うぬらが仕業に極まつたな。
丈八　親子一緒に
三人　くたばつてしまへ。
　ト突いてかゝる。立廻つてキッと留り
才三　親の敵、覺悟しろ。
　ト見事に尻、りんと揚げろ。禪の鳴り物激しくなり、三人を相手に世話ダテ様々あつて、ト三人に手を負はせ
母の敵思ひ知つたか。
　ト一々止めを刺し、こなしあつて
以前はともあれ、今にては町人のこの才三、親の敵といふも私し、人を殺せばこの身は解死人。繩目の耻に逢はんより、いつそ
　ト出刃にて腹切らうとして、落ちたる寶の箱をフッと

見て。
こりやコレ慥かに
ト透かし見て
紛ふ方なき了意が筆。眞像の箱の書附け。エヽ忝ない。何にもせよ。
ト蓋を開き見て
ヤア、こりや一軸はなくてこの裏さし。ムウ。
トきつと思案して
とても助からぬ一命なれど、一旦この所を立退きて、この一品を去來さまに手渡しゝ、箱の手蔓に一軸の詮議をとくと頼み置き、その上にて、とも角も、先づ母人の、お死骸を、せめてもの假りもがり。
トしんめりした合ひ方になり、おろくの死骸を葭簀の蔭へ抱いて入れる。この時喜藏を見附け
ヤア、うぬは喜藏め。
ト喜藏逃げうとするを引き戻し
毒食はゞ皿だ。
ト刎る。向うバタ／＼にて、與吉走り出て、この立廻りの中へ入る。才三、喜藏を切り倒す、與吉、才三に行き當る。才三直ぐに、與吉に切つてかゝる。この立廻りにて與吉の繩フツツと切れる。途端に眞仰向にこける。才三「うぬ」と振り上げるを、與吉、手を支へながら足にて脛をキツと留める。チヨンと木の頭。才三、引つぱづす。與吉ムツクリと起きてよろしく留め、互ひに顏をキツと見る。よろしく
ひやうし幕

三幕目

仲町糸本の場
同中庭の場

役名 ―秋月一角。松田軍兵衛。佐藤銀平。高木伴藏。萩原千次郎。金江金五郎。龜井彌惣兵衛。金毘羅參りの傳。仲間關内。西方寺の名月院。曉月寺の西念坊。糸本女房、おいと。振り袖女郎、小糸。糸本藝者、お浪實ハ菱川息女、千種。藝者、小三。小三姪、おもん。糸本のお袖。糸本の仲居おひで。同、おゆり。料理人、喜助。醫師、富田邊竹。太鼓持ち、龜吉。廻し。惣吉。
本舞臺、三間の間、通り平舞臺。見附け端手なる大

襖、下座の方、格子。いつもの所、門口。すべて深川条本表の間の體。幕の内より高木伴藏、佐藤銀平着流し侍ひの拵らへにて、小判を一兩づゝ持ち、お袖、仲居、おぎん、同じくおはま、各々仲居の形、喜助、料理人、太鼓持ち龜吉、富田邊竹、醫者の形右の人數「蛇の尾取らう」をしてゐる。賑はしき太鼓、摺り鉦入りの鳴り物、幕明く。

作藏　この花誰が子。

皆々　その花わしが子。

伴藏　わしの子にや遣らぬ。

銀平　この花誰が子。

皆々　その花おれが子。

銀平　惚れた者にや遣らぬ。

皆々　ソリヤア。

ト本舞臺を追ひ廻す。龜吉、邊竹、小判を引ッたくる。

龜邊　サア、しめたぞ〱。

喜助　また邊竹さんと龜ぼうに卷き上げられた。

伴藏　サア、これからは酒だ〱。

ト唄になる。踊り地になる。金毘羅參りの傳、序幕の形にて、笈を負ひ

傳　おらが錢で、おらが酒をおらが口へ、おらが飲んだ、なんだ、馬鹿々々しい畜生め。

トひよろ〱と門口へ來て鈴を振る。

龜吉　モシ、傳めが參りました。

ト銀平うなづく。

伴藏　喜助、ちと密々の用談がある。女どもを連れ、奥へ。

喜助　畏まりました。サア、お出で。散り櫻とせうではないか。

そで　アイ〱、もし御用があらば

作藏　此方より手を叩かう。

女三　サア、ござんせいなア。

ト女形三人、料理人喜助を連れ、奥へ入る。邊竹、門口へ出る

邊竹　傳か、入れ〱。

傳　邊竹どんか。いま〱しい面だの。

ト内へ入る。

邊竹　此奴、食びどれだな。

傳　おらを呼びに寄越したは、酒でも振舞ふ積りか。早く飲みたいよ。

作藏　コリヤ〳〵。傳とやら、近う〳〵。其方を呼び寄せしは別儀でない。この春、柳島の妙見にて、身が奪ひ取つたる貫波刀、據ろなく其方が、笈の內へ打込み置き、とかうするうち、その場の騷動。それゆゑにこの程より其方が行くへを尋ね居つた。

傳　ハア、、そんならおりや、この春に、信濃の方へ傷らきに去んで、やう〳〵昨日戻りましたのサ。

龜吉　して、今に貫波刀は、恙がなく所持して居るか。

傳　貫きうとやら、掲げうとやら、こんな物なら持つてゐやんす。

ト笈より序幕に箱を出して見せる。銀平取つて

銀平　相違なき箱の書附け。この品を我れらが方へ取上げて置く時は、いかやうに踠いても、千次郎が歸參は叶はぬ。

作藏　イヤ、左樣でない。尤も、箱の書附けは、貫波刀と記しあれども、双方の寶は眞像の一軸。

龜吉　いづれにもせよ、兩家の緣談、破るゝやうに計らふが、軍兵衛どのへの御奉公。ナニ、傳とやら、この寶を我れ〳〵、

傳　戻してやりませうが、その代りに、ズッシリ酒手を貰ひませう。

龜吉　いげちなら飲みたがる奴だ。

作藏　まだ其方にはこの代りに、頼まねばならぬ事もあり

邊竹　何かの事は二階で。

傳　酒さへ飲まして下さるなら、この館でも進ぜませう。

作藏　然らば一間へ、

皆々　マア、お入りなされませ。

ト合ひ方になり。作藏、傳、奧へ入る

龜吉　邊竹老、福田屋の藝者お浪といふは、菱川の息女千種の前。

邊竹　惚れてござる軍兵衛さまへ、寶もろとも持つて行けば、褒美はズッシリ。

龜吉　引ッ淩つて行く算談がありさうなものだが。

邊竹　愚老もその思案最中だわい。

ト內にて

いと　表の間が賑やかにござんす。サア、ちやつとお出でなさんせいなア。

ト合ひ方になり、おいと、千種を連れて出で來り

千種　コレ、いとや、殿樣はまだお出で遊ばさぬかいな

ア。
いと　ア、モシ、この衆は皆内輪、大事ないとは云ふものの、必らずその殿樣の事を、あからさまに仰しやるなえ。
千種　惣右衞門が情にて、緣ある其方の世話になり、斯ういふ姿に身をやつすも、紛失の一軸詮議の爲。
いと　ア、モシ、それを仰しやる事かいな。御家來といひながら、心の置かるゝ伴藏さま。あなたにはマア奧へ。
千種　小三、金五郎がおぢやつたなら、殿樣の事を。
いと　サア、何事も、おいとがよいやうに。あなたはお早う。
ト千にて奧へ行けといふ。
千種　皆の者、後に逢ひませう。
ト合ひ方になり、奧へ入る。
邊竹　いはれがあるとはいふものゝ、あんな橫柄な藝者もないものだ。
皆々　ハヽヽヽ。
ト向う揚げ幕にて
名月　京都千榮寺明月院本堂建立。

西念　お志しはござりませぬかな。
ト曲太鼓の鳴り物になり、向うより名月院、僧衣、花の帽子にて、水晶の珠數を爪ぐり、錫杖を持ち、後より西念坊、腰衣の小僧にて、經箱を持ち、鐵鉢を捧げ、講中三人附き添ひ出て、花道に立ちとまり
講一　イヤモシ、和尙樣、今日は大分勸化の捗が參りました。
名月　さうとも〳〵。半月餘り滯留のうち、各々の丹精ゆゑ、寄進物も過分に受け納め、これより愚僧は知音の方へ立寄るゆゑ、各々にも休息召されい。
講二　明日は回向院で、お前樣の御說法。
名月　法席で逢ひませう。
三人　お先へ歸りませう。
名月　御大儀〳〵〳〵。
ト三人は向うへ入る。
サア、講中を歸したれば、これからは極樂世界。西念、いつもの方へ。
西念　合點でござりまする。
ト入れ代つて、本舞臺へ來て、西念坊、門口へ立ち
名月院和尙勸化。

名月　エヽ、さういふのではないわい。
ト引き退け
おいとは宿にゐるかな。
ト門口より覗く
龜吉　お客だぞえ。
いと　アイ〳〵、誰れさんでござんすえ。
名月　おれぢや〳〵。
ト招く。
いと　ハヽヽヽヽ、和尙樣、よくお出でなされた。サア、
お入りなされませ。
名月　差合ひはないか。
いと　いつもの顏でござりまする。
ト内へ入る。
邊竹　ヤア、これは和尙樣以ての外、お早いお入り。
龜吉　さては小三さまをお望みゆゑ
名月　云ふに及ぶ。花車どのと、約束。
いと　コレ、お銚子ぢやぞえ。
ト手を叩く。
皆々　アイヽヽヽ。
ト喜助、女三人に臺の物と盃を持ち出る。

龜吉　先づお始めなされませう。
ト名月院が側へ持ち行く。
名月　イヤ〳〵、愚僧元より禁酒〳〵。
龜吉　然らばこの肴を。
名月　これはしたり、坊主に魚物を勸めるとは。
龜吉　でも、あなた、小三さまを。
名月　野暮な奴。小さんに鱗はないわい。
邊竹　して、これまで小三さまを、毎度お呼びなされた
か。
名月　イヤ〳〵、先頃この邊を托鉢の折から、フト彼れが
容貌を見初め、頻りに煩惱止み難く、毎度當寺へ參詣し、
小三知識を招待すれど、いま繁昌の大德ゆゑ、未だ御緣
を結ばぬぢや。
いと　一昨日から口を掛け、しまひまして置いたれば、追
ッつけ見えるでござりませう。
名月　滿足〳〵。ところで、一大事がおはします。小三は
藝者の事なれば、彼の上品、上座へ至るには、なか〳〵
修行がむづかしからう。斯ういふ姿で御意得ては、彼奴
往生を致すまい。
龜吉　イカサマ、男がよくても御出家では、先づお色氣が

薄い形。
いと　それにはよい事がござります。
名月　方便が、あるか〳〵。
いと　お袖、わしが居間の小簞笥に、金江さんにお預かり申した羽織と頭巾がある。ちよつと取つて來てたも。
そで　アイ〳〵。
ト奧へ入る。
邊竹　時に、斯うでござります。先づ新造衆でもお呼びなされ、その上、そろ〳〵と小三を口說きかけるといふ、御趣向がようござります。
名月　なか〳〵以て、外の女郞を呼ぶなどゝいふ志しは氣もない事〳〵。
喜助　それでは床が納まりませぬ。畢竟これは吉原で名代を取つた心。
ゆり　それには、とんと色氣のない、小糸さまを揚げまするがよい。小糸さん〳〵。
小糸　アイ〳〵。
ト振り袖女郞の形にて出て
なんの事でござんすえ。
ぎん　あなたはお前のお客さんぢや。お側へ行て、御挨拶をさしやんせいなア。
小糸　わたしの客はこの坊主かえ。こちやこんな丸い頭は否いなア。
ト頭を撫でる。名月院悔り。
名月　小兒ながら、ハテ、洒落たものぢやな。
ト　お袖、頭巾と羽織を持つて出て
そで　ハイ、取つて參じましたわいなう。
いと　よし〳〵。モシ、この羽織とお頭巾に、ちやつとお着替へなされませ。
名月　シタリ〳〵妙々。
龜吉　和尙樣はそれで濟まうが、この弟子はどうしたものであらう。
邊竹　お小僧は、これ〳〵。
ト風呂敷包みより小袖を出し
小糸さんの着替への振り袖。
名月　さらば還俗いたさうか。
ト合ひ方になり、皆々捨ぜりふにて、名月院に羽織、頭巾、西念坊に振り袖を着せる。
邊竹　サア、つまらぬ。坊主頭に振り袖は。
喜助　下界の鵺とも云ッつべし。

龜吉　騷ぐまい〳〵。
　ト手拭にて頭を包む。
　これでよしか。
名月　どうぢや。似合うたか。
そで　似合うた段か。皆見やしやんせ。金五郎さんに生寫しぢやないかいなア。
名月　なんといふ。この姿が金五郎といふ人に似てゐるか。
いと　似たとは愚か、お聲まで、とんと其まゝでござります。
名月　ハテナア。
　ト思ひ入れ。
龜吉　さつぱりと拵らへは調うたが、これからが物云ひぢや。
名月　ヤイ。西念、必らず坊主臭い事を云ひ居るな。
西念　ハツ、キツと相愼み居りまする。
喜助　先づ和尚樣を取措いて、明月院の文字を其まゝ。
邊竹　俳名は曉さん
郡吉　娘の名が西念でもあるまい。
いと　間違はぬやうに、お才さん。

名月　小三は、もう見えさうなものぢやが。
　トこしらへつゝになり、向うより龜井彌惣兵衞、股引、合羽、旅侍ひの形。おもん、振り袖娘、同じく旅姿にて連れ立ち出る。
もん　コリヤ、べいよ。早うをば樣に逢ひたい。逢はしてくれ。
彌惣　お道理でござります。少しの手がゝりを得ましたれば、是非今日明日のうちには、お逢はせ申しまする。サアサア、お出であられませう。
　ト云ひ〳〵本舞臺へ來て
ものも、賴みませう。
名月　西念、玄關に案内があるさうな。
西念　ハア
彌惣　賴みませう〳〵。
西念　ドレ、どなたでござりまする。
　ト門口の側へ行く。
彌惣　深川の粂本と申すは、これでござるかな。
西念　左やうぢやげにござりまする。
彌惣　然らば罷り通りまする。
　ト内へ入る。

各々御免下されい。
ト もんが手を引き、ほか／＼と行て襖を明け、入らうとする。喜助留め
喜助 モシ／＼、どこへお出でなされまする。
彌惣 奥へ參り、御亭主に御意得まする。
いと 主は私しでござりまする。
彌惣 さては御自分でござるか。これはしたり。
ト 下にゐて刀を拔き
拙者儀は上方筋の者、即ち馬喰町の旅宿、津野國屋彌兵衞方より、指圖によつて、わざ／＼伺候いたしてござる。
いと それはマア、ようぞやお出で下されました。見苦しうはござりますれど、マア／＼これへ。
ト 向うへ連れて出て、坐らせ
可愛らしいお子樣。ようお出でたなア。
彌惣 サテ、御亭主。早速ながらお頼み申す。拙者、女郎一人求め、國元へ話しの種に致したい。隨分無疵で、性のよいのを掛け値なしに、お負けなされて下されい。その代り、代金も切れのないのを擇つて、お拂ひ申さう。
いと 畏まりました。あなたのお氣に入りさうな女郎衆は誰れがよからうぞ。追ッつけ呼びに遣はしまする。マアお酒でも召上がられませい。
彌惣 イヤ／＼、お構ひなされな／＼。
名月 待つてゐる小三は見えず、ハテ、怪しからぬ者が出て來た事ぢや。
ト 摺り鉦入りの唄になり、向うより小三、女藝者の形、廻し三味線を下げ、連れ立つて出る。
小三 惣助どの、昨日の文を屆けて下さんしたか。
惣助 ハイ、慥かに渡して參りました。
ト 云ひ／＼本舞臺へ來て
小三 おいとさま、今宵は。
ト ずつと内へ入る。
いと オヽ、小三さま、お早うござんした。
小三 龜吉さん、昨日はコップで、よくきつい目に合はしたな。今日はキッと敵を討つ程に、覺悟してお出でよ。
ト 扇にて脊中を叩く。
龜吉 大あやまり／＼。諸事これでござります。
ト 拜む。
西念 南無阿彌。
ト 十念のやうに云ふ。名月院ヒイヤリ。小三

小三　オヽ、この子は悔りするわいなア。
　ト云ひさま、下にゐる。
惣助　ハイ、箱。
　ト差出す。
ゆり　アイ、御苦勞。
　ト廻しは引返し、向うへ入る。
そで　小三さま、ちやつとお客樣のお側へお出でいなア。
小三　アイ〳〵。あなた、ようお出でなされたなア
　ト名月院を見て
ヤア、お前は金五郎。
　ト云はうとして
さんではないが、ほんにまた此やうな
いと　なんと、よう似たぢやないかいな。
小三　お羽織の紋といひ、矢ッ張りさうかと思はるゝわいな。
　ト名月院こなしあつて
名月　これは小三師。ようこそ御參詣下された。野子事は、曉と申して、そと致した……町人でござる。かね〳〵貴僧の高德を承り及び、面談の致したく存ずるところ、今日の仕舞ひとやらんは、彌勒の出世を待つ心地、多少曠劫の宿緣にて、値遇いたすも佛祖の冥慮と、信心肝に銘じてござる。
　ト談議のやうに云ふ。
西念　冥加鐱々々々。
小三　オヽ、辛氣。此お客さんは學問がお好きやら、物云ひの堅いお方ではないかいなア。
邊竹　イヤ、お客より小三さん、藝者に似合はぬきつい物識り。
龜吉　お手は瀧本流の能書なり
喜助　琴、三味線は云ふに及ばず
邊竹　笙、篳篥の隱し藝。
ひで　そこで誰れ云ふとなく
いと　額の小三さまと
皆々　云ひますわいなア。
名月　戒名の因緣、速かに解りました。お客に、御奇特御奇特。
小三　オヽ、惡洒落な。いろ〳〵の事を云ひぢやわいた。
　ト此うち彌惣兵衞、小三を見ては、おもんを見合せ、思ひ入れあつて
彌惣　小三どのどやら、ちよつとお目にかゝりたい。

小三　わたしかえ。
　トこちらへ來て
なんでござんす。
彌惣　ト彌惣兵衞、行儀に手をつかへ
　拙者は大坂近邊の出生、この度所用ござつて當地へ罷り下り、女郎を求め申したく、當家の御厄介にあづかる筈。先刻よりの一部仔什、これにて見聞いたせしところ、古今稀れなる小三どの、失禮ながら拙者めに、お附合ひ下さらば、先祖の譽れ、家の面目と、如何ばかり大悅至極に
　ト此うち名月院、小三が手を取り、元の上の方へ連れて行く。彌惣兵衞はこれを知らずにゐて、この時フッと顏を上げ
これはいかな。いづれへござつた。
名月　イヤ、小三師は、愚僧が賣約いたしたでござる間、左樣お心得下されい。
　ト彌惣兵衞立つて側へ行く。
彌惣　左樣ではござらうが、其許樣は當所の產と見受けました。また重ねての折もござらう。今日は是非にも拙者が御恩借仕る。サヽ、お出で下されい。
　ト手を取つて下の方へ連れ行く。
名月　イヤ、そりやなりますまい。此方へ來て下されい。
　ト上手へ連れて行く。
彌惣　どうござつてもお借り申す。
　ト引つ張る。
名月　此方の仕舞ひでござる。
彌惣　お借り申す。
名月　邪魔なされな。
　ト双方へ引ッ張り合ふ。
小三　アヽ、コレイナ。わたしをどうなさんすぞいなア。
　ト邊竹、分け入つて
邊竹　この納まりは、一番わたしが附けませう。
彌惣　すりや、おてまへが
名月　落着を。
邊竹　ハテ、高が斯うでござりまする。曉さまは先からお約束、というて遠方からお出でなされたお侍ひの、一分を捨てさせる事か、みめでもない。ところで、あなた方お二人が、狐拳をなされまして、曉さんがお勝ちなら、云ひ分なしの當り前。お侍ひが勝たつしやつたら、御苦勞ながら、小三さま、今宵一夜を二つに割り、一時替り

に、兩方のお座敷をお勤めなされませ。それでは互ひに遺恨もなし、丸う納まるこの場の捌き。小三さま、この思案はどうでござります。

いと　こりやよい思ひ附きぢやわいな。併し、あなた方のお心わえ。

名月　それは五分の弱味なれど

彌惣　鄕に入つては鄕に隨ひ

名月　是非に及ばぬ。承知いたした。

龜吉　左樣ならば曉さま。

いと　行司は年役、邊竹老。

龜吉　さらば狐拳の、始まり〳〵。

ト大小の鳴り物になり、名月院、彌惣兵衞、仔細らしく向うへ出て、互に辭儀する。龜吉、行司のこなし、エイと云ふと

名月　一、二、三。

ト兩人同じ事する。

龜吉　オツと、勝負は合ひさし、途端のわれ。こりやいつそ斯う致さう。お二人樣を一座にして、太鼓末社を摑み込み、大騷ぎに致しませう。ナア、御兩所樣。

名月　イカサマ、それも一興であらう。

彌惣　代金も二つ割りだぞ。

龜吉　こりやまたきつい頓痴氣だ。

彌惣　ナニ、身共を頓痴氣とは。

龜吉　イエ、サア、深川では利口なお客を、頓痴氣と申しまする。

彌惣　すりや身共も頓痴氣の内か。

皆々　頓痴氣さん〳〵。

彌惣　さうあらう事ぢや。

いと　小糸さん、曉さんを奧二階へお連れ申して下さんせ。

小系　アイ〳〵。サア、坊さん。

ト云はうとする。名月院、顏にて押へる。

のやうなお客さん。

ゆり　頓痴氣樣も御一緒に。

彌惣　不案内の身共なれば、萬事よろしく

名月　ナニ、小三師、御誘引申さうか。

小三　あなた方はお先へ。

惣彌　イザ、曉どの。

名月　頓痴氣公。

惣彌　御同伴仕らう。

ト唄になり、彌惣兵衞、おもんを連れ、名月院、西念

伴藏　坊を連れ、龜吉案內して奧へ入る。引違へて伴藏出て
　小三が參つたとある。どれに居る。オヽ、小三、こ
の間は逢ひ申さぬ。
小三　お二人樣、よい御機嫌でござんすなア。
伴藏　おてまへ、金五郎ばかりを大事にせずとも、少しは
我れ〲にも附合うておくりやれ。杯でも差し申さう。
小三　お戴き申しませう。
　ト流行り唄になり、向うより秋月一角、着流し、大小。
關內、奴の形にて、附き添ひ出て、花道よき所に、一
角躓く。
關內　アヽ、申し、危なうござりまする。もそつと靜かに
歩かしやりませ。
一角　これは又、どうしたものぢや。おれがこの
　ト口を敎へ
小三へ知れては、いよ〲愛想盡きるであらうと、それ
ゆゑの心遣ひ。
關內　左樣なら明盲目といふ事を。
一角　まだ云ふか。アヽ、困つた奴。コリヤ、其方は川岸
方から、廻つて、供部屋に待つて居れ。
關內　ネイ〲。畏まつてござります。

一角　サヽ、行け〲。
關內　ネイ〲。
　ト行かうとする
必らず轉んで怪我など
一角　ハテ、うせいといふに。
　ト關內は向うへ引返し。一角、そろ〲と本舞臺へ來
て、門口へ聞き耳する。
いと　小三さん、おすみさまの「花の香」は、けうといも
のでござんすなア。
小三　感心なものぢやわいな。
一角　おいと、この間は久しいな。
いと　オヽ、角さん、なんと思うて、あなたはお目が惡い
ではございませんか。
一角　ナニ、當分の事、少し霞むやうにあつたが、この通
りさつぱり
　ト皆々顏見合せ、伴藏思ひ入れ。
幸ひ小三も來てゐやる。今日は中座敷へ通らうか。
いと　イエ、中の間は塞がつて居ります。
一角　然らば二階に致さうか。
いと　今日はどの間も明いては居りませぬ。どうぞ又、こ

の間に

ト一角思ひ入れあつて

一角　おいと、昨日は人をたもつた。その事なら承知ぢや。折角來て歸るも殘念。いつそ爰もよからう。

ト硯蓋の上へ坐らうとする。

喜助　アヽ、コレ〳〵。その上へ。硯蓋だ〳〵。

ト突き飛ばす。それなりに下にゐて

一角　どうする〳〵。……コレ、小三、なぜ物を云うてはくれぬ。そりや餘りつれないぞよ。

ト上の方へ向いて云ふ。

ひで　小三さまは、こちらぢやわいなア。

一角　ヤア、……ぢかに顏見ては、どうも面目ないゆゑに。

小三　それに又、なんでお出でた。

一角　其方を身請けの相談に。

小三　エヽ。

一角　皆、聞いてくれ。禍福はいつか知れぬもの。小三ゆゑに所持の路用も、殘り少なに遣ひ果して、爰の内へ拂ひなども不勝手になつたゆゑ、なんとせうと思ふ折から、菱川、萩原、兩家より、思ひ掛けない過分の貢ぎ。伴藏、銀平の兩人が、身共を神か佛のやうに、大切な取扱ひ。その上、歷々の町人どもが、主人中將家へ出入りの願ひ。そこからも五十兩、爰からも二十兩、一歩小判に飽き充ちて、金のおくびが出るやうな。ハヽヽヽ。それゆゑ早速、身請けの相談。萬事の取締りを致さうと、トッカワと出掛けて參つた。皆の者、なんとめでたいではないか。

ト小三こなしあつて

小三　角さん、そりやわたしに聞けがしでござんせう。不義の榮華は浮かべる雲。例へ萬々兩積み重ねても、それ羨ましと思ふやうな、わたしでもござんせぬ。ハテ、請け出されたら、生きてはゐぬ氣。それ合點なら、どうなりと、お前の勝手になさんせいなア。

ト伴藏向うへ出て

伴藏　秋月どの、打絶えて御意得ませぬ。

一角　ヤア、御自分は。

伴藏　コレ、貴殿は武士に似合ぬ、僞はりを云はつしやる。我れ〳〵が人どもより、貢いだ噂承らぬ。それはともあれ、只今のお話では、いから金銀が澤山さうな、先達てこ伴藏が御用立てた五十兩、御返濟に預りたい。

銀平　この銀平もお賴みゆゑ、お世話いたした右の金子。

先方より日々の催促、いから迷惑いたし居る。只今お返し下されい。
邊竹　愚老も請け合っておいた、衣類から道具の質も、疾に日限りは切れてあれど、手を下げての頼みゆゑ、富田邊竹が顔づくで、今まで延ばして置きました。次手にせいらくして下さりませ。
いと　わたしが方の滞りも
伴藏　速かに返濟なされい。只今これにて受取りませう。
大勢　ト一角默つて俯向く。
伴藏　有無の返答下されぬは、貯へた金はないのか。
邊竹　金のおくびが出るならば、俗にいふかく疾だの。
銀平　御仁體にも似合はぬ、馬鹿々々しいお人だわえ。
ト向うより奴一人出て
奴　お旦那、これにごわりまするか。只今火急に軍兵衛さまより。
伴藏　コリヤ、ツカ／＼と物を吐かすな。何事も承知して居る。ナニ、邊竹、身は直さま歸るから、最前の金毘羅めに、ナ、心得てあるか。
邊竹　畏まりました。

伴藏　皆々、さらば。
いと　よう入らつしやりました。
ト合ひ方になり、伴藏、奴を連れ、向うへ入る。
小三　おいとさま、サア、行かうかいなア。
ト行かうとするを、一角留めて
一角　小三、待て。
小三　まだ何ぞ用がござんすか。
一角　心にあらぬ僞はり、飾りも、其方に愛想を盡かされまいばつかり。コリヤ、情は人の爲ではないぞよ。
小三　角さま、お前も情といふ事を、見事知つてゐなさんすか。
一角　なんと。
小三　いつぞや根岸でお前の企み、おいとしさうに金五郎さんに、恥をかゝせて打ち打擲。わたしや今に思ひ出すと、口惜しうて／＼、熱い涙がこぼるゝわいな。その怨みのある角さん、例へどのやうになさんしても、なんのお前に隨はう。ニヽ、顔見るも無益しい。爰放して下さんせ。
女皆　サアござんせいなア。
トむごう振り切る。チヤンと唄になる。

ト一件皆々奥へ入る。一角残り、うろ／＼思ひ入れあつて

一角　エヽ、口惜しい。秋月ほどの侍ひが、僅か一人の女に迷ひ、心の鬼がこの身を責め、切るに切られぬ執着輪廻。戀は諸道の妨げとは、よく云つたものだなア。

ト矢張り唄になり、向うより千次郎、金五郎、着流し、大小にて出る。奥より龜吉出て

龜吉　オヽ、一角さま。いつの間に

一角　龜吉か。おてまへには段々折入つて

ト金五郎入らうとして、門口にヂツと扣へる。

龜吉　コレ／＼。その斷わりなら聞き飽きた。どこの國にか、お客が太鼓持ちの物を借りて、今日は返すの、明日は遣るのと、エヽ、こりやしゝやりにやつたのだな。こなたを

ト胸倉を取りにかゝる。その手をグツと捩ち上げる。

ヤイ／＼／＼。借りは物は返さず、こりやおらをどうするのだ。

一角　貸し借りは應對、慮外ひろぐと、まツこの通り。

ト見事に、ゐながら投げる。

龜吉　投げたな。拋つたな。もう料簡が

トかゝらうとする。金五郎分け入つて、龜吉を引き退ける。また來る所を小判の包みを横面へ打ちつける。

アイタヽヽヽ。投げた上、男の生き面へ

金五　秋月どの、借用の金子、改めて受取れ。

龜吉　ヤア、

ト包みを取上げ

すりや、小判五兩。

金五　まだそれで不足があるか。

龜吉　二分ばかり餘計なれど、こりや投げられたから藥代ぢや。

金五　云ひ分なくば、早く歸れ。

龜吉　まだ行かれぬ。爰の内にも用があるわい

一角　然らば、キリ／＼奥へうせう。

龜吉　うせるわい。何を猪口才な。

ト合ひ方になり、睨み廻し奥へ入る。金五郎こなしあつて。

金五　秋月どの、只今の惡口無禮、御殘念にもござらうが、物數ならぬ町人風情。お心にさへられぬがようござる。

一角　御深切忝ない。お禮は重ねて、ゆるりと申さう。

ト立つて行かうとする。

金五　イヤ、暫らく。貴殿へお引合せ申す人がござる。ちよつとお止まり下されい。
　ト下にゐる。
　暫時お待ち下されう。
　ト表へ向ひ
千次　苦しうないか。
若殿、先づこなたへ。
金五　サ、あれへ〳〵。
　ト千次郎、上へ通り、こなしあつて
千次　秋月一角どのとは御自分でござるよな。
一角　さいふ御邊は。
金五　即ち金五郎が主人の若殿。
千次　萩原千次郎でござる。
一角　これは〳〵、存じがけない所で、初めての御面會。
千次　この程家來金五郎を以て、お賴み申せし刀の一儀。
一角　紛失の貴汲刀、今にお手に入らぬよな。
金五　貴殿の病氣保養の願ひも、武將家より上意下りし、寶詮議の日限りも、今日につゞまる主人の大事。
一角　また改めて一角に、病氣願ひを致しくれよと、この程より每度の賴み。
千次　何卒貴殿の御賢慮を以て
一角　イヤ、そりやならぬ。叶はぬ事だ。
千次　そこを何卒。
一角　賴み手が氣に喰はぬ。
金五　なんと。
　ト一角、前幕の短册を出だし
一角　金五郎、これ覺えてゐるか。
金五　その短册は。
一角　サ、これゆゑに不承知だ。
金五　ムウ。
　トきつとこなし。
一角　釋迦、孔子が再來し、富婁那の辯を揮つても、いつかな〳〵承引せぬ。何を馬鹿な。
千次　すりや、如何やうにお賴み申しても
一角　くどい。
金五　ホイ。
　ト當惑のこなし
千次　コレ〳〵、金五郎。こりやマアなんとせう。とくと思案を致して見よ。
　ト金五郎、千次郎を引き退け、スラリと拔いて一角が

金五　目先へ突き附ける。一角ヂッとしてゐる。
金五　おてまへ、これが目に見えるか。
一角　ヤア。
ト白刃を掴まうとする。金五郎抜き身「ムウ」と合ひ方。
金五　承引なければ是非に及ばぬ。お身とこの場で刺し違へ、相果つるが主人へ云ひ譯。
ト一角、刀に手を掛け、キッと身構へ、思案の思ひ入れ。
思案の極め、返答ぶちやれ。一角、なんと。
ト一角ヂッと思ひ入れあつて
一角　流石の金江、丈夫の魂ひ。忠義に免じ、頼みの趣き聞いてくれまいものでもないが、改めて禮を云ふか。
金五　主家の存亡、若殿の大事。何事なりとも。
一角　身が望みに任すぢやまで。
金五　この刀に掛けて
トしやんと納めして、御懇望のその品は。
一角　至極密々の事なれば
金五　若殿には暫らく奥へ。

千次　でも、この體を
金五　ハテ、苦しうござらぬ、平に／＼。
ト額にて呑み込ます。
千次　然らば一角どの、後刻御意得ませう。
ト「五大力」の合ひ方になり、千次郎奥へ入る。金五郎、摺り寄つて
金五　この上は打明けて、其許の御心底
一角　申して見ようか。
金五　承りませう。
一角　額の小三が貰ひたい。
金五　エ、。
一角　ならぬか。なるまいが／＼。金五郎、この一角は忝なくも、中將どの諸太夫。今にも寶紛失の様子、身が主人へ言上せば、萩原の家は忽ち斷絶。それが大事にする千次郎は五器を下げ、門々へ立ち、袖乞ひせずばなるまいと、サ、斯う云へば云ふもの丶、お身が小三を思ひ切り、この一角におくりやれば、ハテ、魚心あれば水心、中將どのゝ御前は元より、武將へ病氣保養の願ひも早速に致しくれる。否か、應か、生死の二つ。金五郎、返答はドゞどうだぞいの。

ト金五郎思ひ入れあつて
金五　お望みの通り、聞えました。小三は御自分へ讓りませう。
一角　そりや眞實
金五　武士の言葉に、二言はござらぬ。
一角　エ、、忝ない、と云ひたいが、さうばかりでは呑み込めぬ。眞實、緣を切るといふ
金五　慥かな證據をお目に掛けなば
一角　その時こそは家の納まり。
金五　しかと詞を番ひましたぞ。
ト奧より關内出て
關内　旦那、最前から何かの樣子を
一角　コリヤ、必らず何も口走るな。
ト内にて
いと　小三さん、表の間が氣が晴れてよいではないかいなア。サア、ござんせいなア。
ト合ひ方になる、小三、千種、おいと三人、仲居皆々奧より出る。小三、金五郎を見て
小三　金五郎さま、いつの間にござんした。待ちかねてゐたわいな。
ト側へ坐る。金五郎フイと顏を背ける。
コレ、返事もせずに、そちや向いて、なんの事ぢやぞいなア。
トこちらへ來ると、金五郎背ける。
コレイナア、お前は何とぞさしやんしたかいなア。
ト云ひ〳〵又こちへ來る。
金五　小三、其方に物云ふもこれぎり、この後いづこで逢うても、詞も交さぬ。さう思へ。
ト素氣なう云ふ。
いと　そりやマア何を仰しやるぞえ。
女皆　どうしたのでござんすぞいなア。
金五　われ達が知つた事ではないわい。
ト小三こなしあつて
小三　こりや、よく〳〵お前の心に腹が立つ事があるのでござんせう。この譯を
ト一角を見
なんであらうと、奧へござんせ。
ト手を取る。顏をキッと見て、一角の方へむごう突き飛ばす。小三、一角にこけかゝる。
どうするのぢや。さうしてマア。

ト行かうとするを、一角キッと抱き留め
一角　待て。捨てる神あれば結ぶ神。後には身共が扣へて
ゐる。
小三　エヽ、邪魔な。
ト振り切らうとする。
一角　ハテ、ヂッとしてゐたがよいわい。おいとこなしあつて
ト無理に抱きすくめる。
いと　お前樣も、蟲腹の起つたやうに、なんぞ心に濟まぬ
事があるならば、斯う／＼した事ぢやといふ譯を、云う
て上げなされい。
金五　サヽその樣子は。
ト一角、閑內を見て
いと　どういふ譯で
皆々　ござりますぞいなア。
金五　否になつたわえ。
小三　エ。
金五　飽きたゆゑに切れるのサ。
ト合ひ方。
小三　エヽ／＼／＼。
金五　親の許した女房でも、退き去りは間々ある事。まし
てや遊里の慰み者。醫者といへば賣色、否になつたら切
れやうかい。
ト小三いろ／＼して
小三　エヽ、愛放して下さんせ。
一角　イヤ、滅多にや放さぬ。金五郎への面當に、氣を取
り直して身共が心に
小三　否ぢや／＼／＼。穢らはしい。
一角　エヽ、しぶとい女郎め。
トぐつと引きつける。小三それなりに
小三　コレ、今更そんな水臭い、情ない事を云うて、それ
で、濟まうかいな／＼。
いと　金五郎さま、あれほど貞女の小三さんを、どうして
お前は飽かしやんした。
金五　サ、それは。
いと　どうもこれはかりは、合點のゆかぬ事ぢやわいな
ア。
ト金五思ひ入れあつて
金五　外の色に見代へたゆゑ。
いと　そりや誰れでござんすぞ。
金五　外でもない、新造のこのお浪。

千種　マア。
金五　もそつと此方へ寄りやいなう。
　ト手を引き寄せる。
千種　ア、コレ、其方は氣でも違ひはせぬか。其方の爲
には現在のお主の、千次郎さまに云ひ號け。
金五　サ、それが諺に云ふ思案の外。
千種　それでも。
金五　金輪際惚れたゆゑ、牛を馬に乗り代へるのサ。
千種　滅相な。
金五　ハテ、外といふ字が迷ひの種。何にも云はずと、チ
ッとしてござりませ。
一角　アレ、あれを聞いたか。外の女に見代へた金五郎、
それでもわりや愛想が盡きぬか。
小三　エ、／＼。
　ト身を震はす。
一角　足元の明るいうち、キリ／＼と思ひ切れ。思ひ切ら
ぬか。茲な、どち女郎め。
　トむがう振り廻す。金五郎思ひ入れ。
小三　例へ捨てられても、飽かれても、命に掛けて書いた
起證。今となつて神佛に、嘘僞はりが云はれうかいなア。

　ト金五郎、前幕の服紗を出して、火鉢を引寄せ、打込
む。小三見て
小三　ヤア、起證までを。
　トいろ／＼思ひ入れあつて、ウムと氣を失ふ。皆々惘
り。
いと　小三さん、どうさしやんしたぞ。
　ト一角キッと抱き締め
一角　こりや、いつも持病の癪。何も騒ぐ事はない。
皆々　それでも。
一角　やかましいわい。
　トきつと云ふ。金五郎こなしあつて
金五　秋月どの、これで貴殿の疑ひも
一角　あらましは晴れ申した。
金五　必らず共に右の一儀を。
一角　この上は
　ト小三を顔にて教へ
返答一つ。
金五　とかう云ふうち、はや暮れ前。
一角　明朝寅の刻までに
金五　拙者がお頼み

一角　身が窄みも
金五　皆の者、マア奥へ。
皆々　でも、小三さんが
金五　ハテ、苦しうないわい。
一角　貴殿には
金五　吉左右を相待ち申す。
　ト唄になり、金五郎心殘して、皆々附添ひ、奥へ入る。
關内　お旦那、何にも云ふなと御意なさるゝゆゑ、押默つ
　て居りましたが、この體ならば小三どのが
一角　わりや、まだそれに居つたか。
關内　一部始終、殘らずこれにて。
一角　用はない。勝手へ立て。
關内　でも、此まゝでは
一角　ハテ、行けと云ふに。
　ト邪魔になるといふこなし。
關内　へイ。
　ト合ひ方になり、關内、奥へ入る。一角、あたりを探
　り、銚子の酒を含み、口から口へ飲ます、小三ウンと
　心附く。
一角　小三、どうだ。氣が附いたか。
小三　角さま。
　ト振り切らうとする。
一角　コリヤ、何も氣を揉む事はない。この上は、世間晴
　れて一角が宿の妻。例へ手鍋を下げるといふとも、其方
　に不自由はさゝぬ程に、落ちついてゐたがよいわい。
　ト小三こなしあつて
小三　思ふ殿御に捨てられたも、廻り〳〵て其方ゆゑ、怨
　み重なる一角どの。
一角　餘りといへば。
　ト寄る所へ、一角が横頬を平手にてピッシヤリ。チヤ
　ンと唄になり、ツイと奥へ入る。一角、無念のこなし
　にて、刃提げ、立ち上がり、スラリと拔いて、キッと
　見ても、見えぬ思ひ入れ。「エヽいま〳〵しい」といふ
　心意氣にて、拔き身を打ちつけ、撞と下にゐる。この
　見得、チョン〳〵にて道具廻る。踊り地返る。
　本舞臺、造り物、平舞臺、二間づゝの割り床。眞中、
　綟子張りの仕切りの襖。上手、筋かひに障子屋體。
　東の方は前側世話障子、西の方に彌惣兵衛、煙草盆
　扣へ、錢にて勘定してゐる。おもん、繪本を見てゐ

る。丸行燈に火をともしあり、暮れ六ツの時計。しんみりとした合ひ方。道具とまる。

ト彌惣兵衛、錢を並べ

彌惣　サテマア、小三の仕舞ひとやらが、あちらの客と二つ割りで、かうよ、酒債がこの位かゝる。鳴り物がこれこれに、臺の物、鉢肴、締め上げて見ると、一兩三分二朱四匁六分。こりや餘ッぽどやり過したわいやい。

トおもん、伸び足して

もん　べいよ、わしはもう眠たうなつたわいなう。

彌惣　お道理〳〵。併し、花車が貸してくれたもの、繪本御覽じて、もそつとお目を明けてござりませ。

ト本を取上げて

ハア、こりや芝居の繪本か。なんぢや、源五兵衞が小まんを殺す所。面白い繪でござります。

もん　其やうな怖い繪は否ぢや。早う寢さして欲しいわいなう。

彌惣　イカサマ、今日は餘ッぽどの道、お草臥れは御尤も。女中々々。

ト手を叩く。

ひで　アイ〳〵。

ト下手より出て

御用でござんすかえ。

彌惣　此お子を寢させたいが、蒲團と枕を取つて下されい。

ひで　幸ひ爰らにござります。

ト蒲團を敷き、枕を直し

これでようござりまするか。

彌惣　お世話〳〵。

ひで　ハイ、左やうなら。

ト行かうとして。

彌惣　コレ〳〵、大儀ながら、小三どのに、密かにお目にかゝりたいと申し、これへ呼んで下されい。

ひで　アイ〳〵、心得ました。

ト奥へ入る。

彌惣　ドレ、およらせて上げませう。

トおもんを寢させ、よろしくあつて

最前逢うた小三が面ざし、お果てなされた奥様に、どうかよく似たワ。十が九つ、お尋ね申すお道さま。いづれ素性を糺したいものぢや。

ト合ひ方になり、奥より小三出て

小三　お客樣、それにお出でかいなア。

彌惣　これは小三どの。サヽ、これへ〳〵。

ト小三、辛氣なこなしにて、ズッと下にゐる。彌惣兵衞摺り寄り

おてまへをこの所へ、わざ〳〵お招き申したは、別儀でもござらぬ。

ト小三、身を背け、癪を片手に押へてゐる。

小三どの、こなた、なんと召されたぞ。

小三　持病の積でござんす。

彌惣　それは難儀であらう。身共まむし指ぢや。ちと療治してやりませう。

ト懐へ手を入れようとするを、品よく退けて

小三　イエ、もうようござんすわいなう。

彌惣　ハテサテ、遠慮には及ばぬ事を。併し、療治が嫌ひならば、なんぞ藥を進せたいものぢやか。

ト小三、右の繪本をフッと見て

小三　モシ、この本は何でござんすえ。

彌惣　これは芝居の繪本さうな。すべて女は鬱症より、いろいろの病が出るものぢやが、此やうな繪でも見て、鬱した心を晴らすがよい。サア〳〵。

ト突きつける。小三ぢつと見てこなしあつて

小三　この繪草紙は小萬源五兵衞。

彌惣　「五大力」の狂言本。

ト小三見て

小三　ほんに、この繪草紙を見るにつけて、丁度わたしが身の上に

彌惣　ヤ。

小三　よう當つた狂言でござんす事いなア。

彌惣　イヤモ、芝居事とはいひながら、中には感心して見る事もあるでなア。

小三　思ひ廻せば、この源五兵衞の腹立ちも、始めは小萬の方から云ひ掛けて、互ひに深う馴れ馴染み、末の約束末までと、侍ひ氣質の一筋に、思ひ込んでゐるものを、思ひ掛けなう心が變つて、三五兵衞と見替へたら、腹が立たいでなんとせう。口惜しうならうてならうかいの。

ト小三、身を震はす。

彌惣　小三、其方、源五兵衞と一家か。よもやさうではあるまいに。かけも構はぬ芝居事を、ハテ、きつい腹の立ちやうぢやの。

小三　大勢の人中で、お侍ひの一分を捨てさせた愛想づかし、あの小萬の面の憎さわいなう。

ト覺えず煙管を突き折り、フッと心附く。

ナア、お客樣。

トこの時、上手の障子明ける。名月院、珠數を爪ぐりゐる。彌惣兵衞、思ひ入れあつて

彌惣　イヤ、そもじが皆無理ぢや。

小三　エ。

彌惣　ハテ、よう考へても見たがよい。互ひに魂ひを見屆けて、夫婦の約束する程ならば。例へ小萬が人中で、どのやうな事を云はうとも、これには深い樣子があらうと、とつくりと思案せにやならぬ。如何に身に火が附いたとて、譯も糺さず、殺すといふは、無分別とも、白痴とも、云ひやうのない、源五兵衞は大馬鹿者。なぜと云はつしやい。源五兵衞を便りに思うて、遙々と尋ねて來た姪御、家來もあらうもの。その當惑は如何ばかり。さぞ口惜しかろ、無理ではないが、戀の道理を汲み分けて、必らず短氣を……ム。これはしたり。餘り詰しに身が入つて、狂言やら、意見やら、源五兵衞といふ侍ひには、後に姪御があるやら、ないやら、並木五瓶に問はにや知れまい。ハヽヽヽヽ。

ト五ツの時計鳴る。

名月　そりや五ツぢや。御免なされい。

ト緞子張りを明け

お約束ぢや。小三どの、此方へお出でなされい。

彌惣　もう初夜か。ハテ、短かい夜ぢやなア。

小三　申し、わたしはあちらへ。

彌惣　是非ござるか。

小三　ゆるりとおよれえ。

ト小三、東の方へ入る。

彌惣　ア、コレ〳〵、一言申し殘した儀がある。失禮ながら

トこちらへ入らうとする。

名月　又の御拜は叶ひませぬ。

ト隔ての襖、しやんと締める。

彌惣　ハテ、殘念千萬。

ト下手の前側障子しやんと締める。これをキッカケに「花の香」の唄になる。

〽長かれと、なに思ひけん世の中の、憂きを見するは命なり。

ト此うち名月院、物云はうとしても、小三俯向いてゐるゆゑ、接穗のなきこなしにて、煙草盆を取つて

名月　サヽ、お煙草でも召上がられい。
　トこれにてやう〳〵顔を上げ
小三　モシ、お客樣、あの唄を聞かしやんしたか。「憂きを見するは命なり」とは、よう出來た唱歌ぢやなア。
名月　仰せの通り、人間の有爲無常を、よく綴つたものでござる。
小三　サヽ、その憂きを見する命も、刃物の錆となつて死ぬれば、佛になりかぬると云ひますが、ほんでござんすかえ。
名月　ヤア。
　ト少し氣味惡いこなし。
　そりやハヤ、信心の徳によつては、左やうでもござるが。ハテ、貴僧には、味な事を問はつしやるな。
小三　サレバイナ。人間は老少不定といふ。わたしが今宵の中に、ひよつと死ぬまいものでもない。もし死んだと聞かしやんしたら、よう回向して下さんせえ。
名月　此方の商賣ぢやから、志し次第で、今でも致すぢや。
小三　とはいふものゝ。いつそ名殘りが
　トつッと立つて、奥の方を見る。
〽名殘を雲に吹きとぢる。

　ト又チツと下にゐる。秋月一角、眞中の襖をガラリと開け
一角　小三、爰に居つたな。
　トずつと出て、どつさりゐる。
小三　ヤア、角さん。
　ト名月院恟り。
名月　どなたか、ようお入りなされました。
一角　金五郎、わりやよく身共を騙かつたな。
小三　コレ、そのお客は。
一角　默れ。此奴はな、一角を盲目だと思はうが、コリヤ、兩眼とも健かなるぞ。何もかも見拔いて置いた。例へ又、姿はどのやうにやつされうが、音聲ばかりはやつされまい。
小三　さう云ふが、矢ツ張りお前の
名月　イヤサ、コレ、金五郎、ナ、サ、身共は金江金五郎ぢやぞ。
　ト一角、名月院が首筋取つて引きつけ
一角　こな表裏侍ひめが。
　ト小三「コレ」と寄らうとする。名月院「大事ない」と仕草する。

小三を思ひ切りますと、潔白に請合ひながら、この小座敷へ引き込み、目を抜いて乳繰り合ひ、それでも武士だと思うてゐるか。もう料簡が

ト刀の柄に手を掛ける。小三取り附き

小三　コレ、一角面、隨はぬはわしが科。マア、この刀でわしから先へ。

一角　イヽヤ、どうあつてもわれは殺さぬ。身共を騙かつた返報は斯う。

ト鐵扇にて眉間を割らうとする、打ちはづれ、三味線箱を砕く。「これは」とうろたへる心にて、名月院に探り當り、額をクヮッと打つ。名月院パッとけし飛ぶ。小三、一角にキッと詰め寄り

小三　エヽ、如何に非道なればとて、こりや又あんまり。

一角　その非道の根を糺さば、小三、われが心一つ。まだ此やうな事ではない。憂き目を見せたその上で、金五郎をなぶり殺し。

ト名月院悔り震ふ。

是非金五郎が助けたくば、思ひ直して身共に靡くか。

小三　サア、それは。

一角　なぶり殺しの苦痛を見せうか。

小三　サア、それは。

一角　但しは靡くか。

小三　サア。

一角　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

ト小三を突き廻し

一角　返事せい。小三、どゞどうだ。

ト小三いろ〳〵あつて

小三　是非に及ばぬ。抱かれて寝よう。

一角　ヤア。

小三　たつてわたしが得心せねば、何にも知らぬこの

ト名月院「コリヤ」と押へる。

サア、知らぬ昔と諦らめて、金五郎さまの事は思ひ切り、お前に抱かれて寝るわいなア。

一角　その詞に違ひはないか。

小三　よう思ひ廻して見れば、お浪さまに見代へられ、心の變つたいたづら男。

一角　義理を立つるは馬鹿の上塗り。

小三　非道といへど、それ程までに

一角　惚れ拔いてゐるこの一角。

小三　お心にさへ隨へば
一角　金五郎への面當て。
小三　この世は愚か、未來までも
一角　エヽ、忝ないと云ひたいけれど、その手ちや行かぬ。今の今まで一角に、敵たうた其方が、早合點心得ぬ。眞實隨ふ所存ならば、これぞといふ證據が見たい。
小三　サア、その證據は。
一角　滅多には見せられまい。
　ト小三、一角を見て、思ひ入れあつて
小三　成る程、證據見せませう。
一角　ヤア。
　ト白紙を出し
小三　金五郎さんの方からも、書いてもらうたこの起證。お前の目の前で、カウ／＼。
　ト寸々に引き裂き
斯う引き裂いてしまふからは、微塵も心は殘りませぬ。
一角　出かした。それでちつと腹がいた。ヤイ、金五郎、小三が身共へ隨へば、さして外に遺恨は殘らぬ。武士の面に疵を附け、無念なるか。口惜しいか。なんぼう口惜しく思うても、この一角に刃向へば、萩原家は忽ち滅亡。それでも見事、相手になるか。何として及ぶまい。ハハヽヽ、サア、小三、行て寢ようか。
　ト探り、手を取る。
小三　マア、先へ行かしやんせ。
一角　然らば先へ。必らず待たせて置くまいぞ。
小三　今そこへ行くわいなア。
一角　ドリヤ、寢所をぬくめて置かうか。
　ト唄になり、一角、目病みを隱すこなし。上手の方へ行き、隔ての障子に行き當り、ギツクリ。唄になり、障子を開き、こなしあつて、上の屋體へ入る。此うち名月院、三味線箱より轉げ出たる笄を拾ひ、いろ／＼見る事あり。小三、一角の跡をとつくりと見送り
小三　お客樣、思ひ掛けないこの場の災難。お氣の毒やら、悲しいやら、疵は痛みしませぬかえ。
名月　なんの／＼、斯樣な事も前世の因縁。それはともあれ、小三どの、この一管はおほけなくも、天が下に隱れなき、春霞と名附けし名管。
小三　なんと云はしやんす。
　ト下手の障子を明け、彌惣兵衞、おもんを連れ、立ち聞く。

名月　その昔、聖德太子、夢殿に入つて、唐土より五臺山の竹を得て、手づから製して川勝に賜はりし春霞、遊里に交はるそもじなどが。所持すべき物ならぬに、斯樣な品を、何ゆゑそもじは。

　ト小三、思ひ入れあつて

小三　形見こそ、今は仇なれ、わたしが身の上。何を隱さう、誠の親は、津の國四天王寺の舞司、秦の兵部村勝といふ、樂人でござんすわいなア。

名月　ハテナア。

小三　鎌倉武將のお召しにより、父母もろともこの東路に御滯留、其うちに

彌惣　御出生なされたる旦那の御息女、稚な名はお道さま。

　ト云ひながら、おもんが手を引き、向うへ出る。

小三　さう云ふお前は。

彌惣　お聞き及びでござりませう。秦の家來、龜井彌惣兵衞と申す者。

小三　ヤ、、、。そんならお前が。

彌惣　いと樣、ソレ、ちやつとお側へ。

　トおもんを突きやる。

もん　お前が伯母樣でござるか。逢ひたうござつたわいなう。

　ト縋り附く。

小三　ムウ、わしを伯母さんと云やるからは

彌惣　姉御樣の產まつしやれた

小三　そんならこの子は

彌惣　あなたの姪御。

小三　すりや、其方がおもんかいなア。

もん　伯母樣でござんしたかいなア。

小三　よう尋ねておぢやつた。よう連れて來て下さんしたなア。

彌惣　ヤレ、嬉しや。これで御機嫌が直るさゝな。

小三　お客樣、暫しの間

名月　サ、御ゆるりとお話しなされい。

　ト煙草盆引寄せる。合ひ方になり、小三こなしあつて

小三　父樣には去年の秋、お果てなされたその樣子は、お文の知らせにわたしが愕り。さぞ母樣は賴りなう、お暮らしなされてござらうと、案じてばつかりゐたわいなア。定めて今度は、御一緒にお下りであらうなア。

彌惣　サ、その奧樣は。

小三　旅籠屋にてもござるのか。なぜ連れまして來ては下

さんせぬ。

彌惣　サ、その儀は。

小三　早うお目にかゝりたい。ちやつと逢はせて下さんせいなア。

ト彌惣兵衞思ひ入れあつて

彌惣　おもんさま、伯母様へ、祖母様をお引合はせなされませ。

トおもん、首に掛けたる守より位牌を出し

もん　これが祖母様でござります。

小三　ナニ、この位牌を母様とは。

ト取上げて見る

淨篤院信譽道阿慈生大姉。ヤ、、そんならアノ、母様も

彌惣　去年極月四日の夜、敢へなくお果て遊ばしてござりまする。

小三　エ、。……ハア、、、、。

名月　靈魂佛果頓生菩提、南無阿彌陀佛。

彌惣　おもんさま。祖母御様、各々様へ、御遺言のあらましを。

小三　サ、、ちやつと聞かしてたも。どうぞいなう。

ト誂らへの合ひ方。

もん　アイ。

ト木魚の入つた合ひ方になり、一角、上手の障子を明け、立ち聞く。おもん、両手をちやんと膝の上に置き

「いたつきの苦しさに、筆取る事も思ふに任せず、書き送るべき文の儘を、この子に教へ殘しまする。」

小三　アイ〳〵。

もん「私し事、浪花にて産れし身の、人となりし頃よりも、花のお江戸へ參りつゝ、永の月日の御贔屓の、海山高き、お惠み、いつの世にかは報ぜんと、身に餘る有り難さ、お推もじ下され候ふ。」

彌惣　さこそあらん。

もん「今年は冬の始めより、假初めならぬ病ひの床、何卒今一度本腹し、舞臺のお名殘、各々様へ、御禮も申し上げんと、思ひし事も仇し野の、霜と消え行く果敢なさは、遁がれぬ事と知りたがら、悲しさやる方これなく候ふ。」

名月　人間不定といひながら、惜しむべし〳〵。

もん「殊にそもじも年若にて、何かと足らはぬ身にしあれば、さぞ嘆かんと〳〵更に、心殘りのその上に、まだ幼なきおもんが事、行く末如何なるらんと、冥途の障りにたりまする。」

小三　オヽ、さうでござんせうぞいな。
もん「返す〴〵も各々樣へ、これまで深き御恩のお禮、世に頼りなき二人が子、いつ〳〵までもお見捨てなう、お情の程、妾に代り、くれ〴〵願ひ上げ奉り候ふ。」
小三　アイ〳〵。
もん「盡きぬ名殘りをかくばかり。……寒けれど梅もあり、雪を分けて行かねばならぬ。有り難き御國の春に逢はんとて。南無阿彌陀佛々々々々々。」……と斯うでござんすわいなア。
ト小三に取り附き泣く。小三こなしあつて
小三　ほんにマアわたし程、味氣ない身が世にあらうか。父樣や母樣には、一日半時添ひもせず、藁の上から人手に渡り、養ひ親の惡心にて、この瀨川へ賣り渡され。秋の始めに父樣の、死なしやんしたと聞いた時は、胸も張り裂く悲しさを、心でやう〳〵取り直し、昨日と暮れて今日の日に、命に代へて云ひ交した、殿御には見捨てられ、まだその上に母樣まで、夢見たやうな本意ないお別れ。こりや何とせう。どうせうぞいなう。
ト大泣きに泣き出す。
彌惣　御尤もぢや。お道理でござります。
ト脊を撫で、介抱しながら
アヽ、お痛はしや、奧樣、重き枕に拙者をお召し遊ばされ、不便な娘のお道、うぶ顏を見た儘に、別れし月日もはや廿歲。兩親の手にあらば、例へ土を食ふとても、憂き川竹の淺ましい。苦界の勤めはさすまいもの。藝者とやらいふもの〻、帶紐解かぬ遊女同然。多くの客の氣をかねて、憂き事の數々には、さぞこの母を怨むであらう。我が亡き跡の訪ひ弔ひ、千萬僧の供養より、娘お道が力となり、よい聟取つて秦の苗字を、再び起してくれるのを、草葉の蔭より待つてゐると、仰しやる聲も絕え絕えに、後は兩手を合掌し、眠るが如き御臨終。
小三　もう〳〵云うて下さんすな。聞けば聞くほどこの胸が、裂けるわいな〳〵。
ト身悶へして泣く。名月院、淚を拂ひ、こなしあつて
名月　ハテ、思ひ掛けなき哀別離苦、それについても小三どの、そもじが云ひ交した男といふは、萩原殿の家中、金江金五郎であらうがの。
小三　それと知つたお前は。
名月　金五郎が、肉身の兄でござるわいの。
小三　エヽ。……イ、エ、金五郎さまの兄御といふは、名

名月　月院といふ尊い御出家。
名月　サヽ、その明月院も暫しの間、雲隱れせし化けの皮顯はしてお目にかけう。
ト頭巾、羽織を取る。
小三　ほんに、あなたは。
名月　額の小三が色香にめで、寶の詮議も等閑と、世の人口も口惜しく、そもじに逢うて委細を話し、意見を加へてもらはうと、思ひ寄りしも弟に、武士道が立てさせたさ。こなたへは氣の毒ながら、今の噂を承り、弟が身は先づ安堵。さはいへ思はぬ嘆きを聞き、共に落涙いたしてござる。
トばた〳〵と一角障子を締める。奥よりおゆり出で來り
ゆり　小三さま、お前の身請けが急に出來て、親方さんが勝手まで、迎ひに來てゐてぢやぞえ。
小三　エヽ、搗てゝ加へて。そりやマア、なんの事ぢやぞいなア。
彌惣　秦の家を御相續させませねばならぬお道さまゝ品によつては。
名月　イヤ、氣遣ひあるな。身請けの客は卽ち愚僧。

小三　エヽ。
名月　西念、その箱を持つて來い。
西念　ホヽヽヽ。
ト小僧の形にて、經箱を持ち出る。名月院、内より年季證文を出し
名月　寺から里へ、小僧が布施物。
ト拋る。小三、取上げる。
こりや弟が不便さゆゑ。愚僧はもうお暇申す。
ト衣を引ッ掛け、手を結びながら、西念坊、提灯ともし、花道へかゝる。
小三　それ程までに。
名月　身の納まりは勝手に召され。
小三　御出家のお情。なんとお禮を。
名月　さらばでござる。
ト唄になり、名月院向うへ、彌惣兵衛、小三
兩人　エヽ、忝ない。
ト手を合す。障子シャンと締める。あと合ひ方にて、上手の屋體より一角、そろ〳〵出て
一角　すりやアノ、小三といふは、大恩ある兵部どのの息

女であつたか。エヽそれとも知らず、
　ト いろ〳〵あつて
ホヽホイ。
　ト どうとドにゐる。チヨン〳〵、道具廻る。
本舞臺、三間の間、見附け板塀、上手の切り戸出入り。眞中に一本柱の井戸たて、車卷き、釣瓶。東西のうてな、錦木、柴垣など、すべて中庭の體。中間關内、金毘羅參りの傳、萩原千次郎を取圍み、寶の箱を奪ひ合うてゐる。踊り三味線にて、道具とまる。
千次　この箱の書附けは、紛ふ方なき父の手蹟。日頃尋ぬる貫波刀。妨げせずと此方へ渡せ。
關内　褒美になるこの二品、うま〳〵うぬに渡さうか。
千次　なにを。
　ト 立廻る。向うバタ〳〵にて、軍兵衞走り出て
軍兵　皆の者、伴藏が知らせにより、取るものも取りあへず
關内　軍兵衞さま、たつた今、家の寶を。
傳　邪魔になるこの才六。手短かに疊んでしまへ。
關内　合點だ。
　ト 縫ひぐるみにて、打つてかゝる。千次郎危ふくなる。所へ一角探り出て、聲を知るべに箱引ツたくり、一々取つて投げる。
千次　ヤア、秋月どの。
一角　寶は身共が受取つた。この場にあつては危ふし〳〵。怪我せぬうちに立退きなされ。
關内　コレ、一角さま、軍兵衞どのに一味のこなた。
軍兵　邪魔になる千次郎、寶ぐるめにしてやるを、こなた、なんで妨げする。
關内　何がなしにこの二歳め。
　ト 千次郎へかゝらうとするを、一角グツと捩ち上げ
一角　人情反覆は呼吸の如し。一角が魂ひ、この如く蹂つたわえ。
　ト 見事に取つて投げる。
千次　ヤ、なんと。
一角　金五郎夫婦が力となり、千次郎どのを世に立てねば、一角の武道が立たぬ。若者に手向ひせば、うぬら一々討つて捨てるぞ。
千次　ヤア、御自分は本心に。

一角　仔細は追つて、この場を早く。
千次　さはいへ寶を。
關内　此方へ渡せ。
　ト　かゝるを立廻つて
一角　身が手に入れば腮の玉。
千次　頼みまするぢや。
一角　ござれ。
千次　さうぢや。
　ト　向うへ走り入る。
三人　それをやつては。
　ト　行かうとするを、引き戻し
一角　邪魔ひろぐと命がないぞ。
　ト　刀スラリと抜く。
傳　ソリヤ、抜き居つた。
　ト　摺り鉦入りの鳴り物になり、四人、寶の箱を段々に奪ひ合ひ、傳、持つて行かうとするを、引き戻され、釣瓶へ抛り込む。軍兵衛引き上げるなど、面白きタテ様々あつて、トゞ傳遁がれ、向うへ入る。一角、二人に手を負はせ、その身も深手を負ひ、刀を杖にホッと一息つく。切り戸より金五郎、小三出て

金五　ヤア、面倒な。放せ／＼。
小三　イエ／＼、お前ばかり切腹しては、なんとなるものでござんすいぞなア。わしから先へ。
　ト　金五郎が刀に手を掛けるを、一角探り寄つてよろめき留める。
一角　待つた。急くまい。早まるまい。
　ト　眞中へ分け入り、双方をキッと押へ
　必らずともに聊爾あるな。
金五　ヤア、秋月どの。この體は。
一角　お身達を夫婦となし、萩原の家を治め、秦の家名を起さん爲、斯くまで心を碎いたわい。
小三　ムウ。
金五　これまでの惡心には、打つて變へたる實義の一言。
一角　サ、性は善なる一角が身の懺悔、心を鎭めてお聞きなされい。
　ト　鼓の合ひ方になる。
　斯く申す一角が父は、結城の七郎友光の家臣。幼少にて父母に後れ、惡黨ゆゑに屋敷を追放。諸方に徘徊。住吉の町にて酒興の口論、刃傷に及び、公沙汰にかゝるべきを、秦の兵部村勝どのゝ情を以て屋敷へ引取り、少し

のよしみもなき身共を、御夫婦ともに厚き御慈愛。猶子と名附けて花園どのゝ、秋月家へ入家の奉公。いま中將家の諸太夫と、この身を全う保つたも、元は兵部の御厚恩。これなる小三を楢勝どのゝ、落胤とも露知らず、恩無體の戀慕に心氣を勞し、明盲目とまでなつたるは、恩を仇なる天の冥罰。最前、あれなる一間より、小三どのの身の素性、瀨川どの御最期の物語り、逐一聞いて驚ろくまいか。恩を見て仇に報うは、鬼畜に類するこの一角、我が身で我が身に愛想が盡き、見えぬ眼に熱湯の、熱い涙をこぼしましたわいなう。さるにてもこの上は、迷ひの夢を飜へし、紛失の寶を手に入れ、金江氏の武道を立て、小三の心を休めるが、兵部どのへ孝養と、思ふ矢先へ人の手蔓。天の與へと奪ひ合ふうち、兩眼叶はぬ口惜しさは、町人下郎と云ひながら、斯く深手負うたれども難なく取り得し貫汲刀、これを引出にお道どのと、末長く夫婦の語らひ、秦家の相續頼みます。

ト箱を金五郎の前へ直し

今宵は最早初更に近し。サヽ、ちつとも早く。

金五　ハヽア、實にや善惡は糾へる繩の如し。秋月どのゝ信義によつて、紛失の刀手に入れば、これぞ武運に盡きざるところ。エヽ、忝ない。

ト戴き

何にもせよ。

ト箱を開き、改め見て

ヤヽヽヽ。こりや尋ぬる貫汲刀はなくて、思ひ寄らぬこの一軸。

一角　ナヽなんと。

小三　エヽそんなら刀が間違うたか。

金五　ホイ。

ト一角、驚ろきながら探り見て

一角　ヤヽヽヽ。すりや、樣々に碎きし心も、無益となつたか。殘念。

金五　こりやどうあつても

ト腹切らにやならぬといふこなし。一角キツとなり

察するところ、この一軸は、菱川家にて尋ね求むる、衣通姫の眞像。

一角　さすれば兩家に取替ゆべき、婚姻の引出もの。箱を手蔓に詮議あらば

金五　知れまじきものにもあらねど、何をいふにも僅か今宵。

小三　つくまる所はかねての覺悟。
一角　せめて一時、半時なりとも
小三　生き延びるが
金五　貴殿へ寸志、
一角　何卒一旦
ト金五郎さうぢやといふこなしにて
金五　小三、おぢや。
ト手を引き、行かうとする。關内ムックリ起きて
關内　それを。
トかゝる。彌惣兵衛ツッと出て、突き廻し、グッと突っ込み、扶ける。
小三　其方は彌惣兵衛。
彌惣　猶にぞ。
ト一角よろぼひながら
一角　詮議の緒口。
ト箱を抛る。金五郎、受取る。
彌惣　忝ない。
一角　随分無事で。
ト刀を杖に段々弱る。
彌惣　實の吉左右。

ト關内を切り倒す。一角ガックリ。本釣り鐘ゴンと鳴る。木の頭入る、
小三 金五　南無阿彌陀佛。
ト一角は落入る。彌惣兵衛は血を拭ふ。この途端。
ひやうし　幕

大切

荻生館の場
隅田川の場

浄瑠璃　「拂曉鐘淺草」　富本連中

役名　荻生去來。荻原千次郎。愛川の息女、千種。金江金五郎。額の小三。和國橋の髪結ひ、才三。城木屋庄兵衛。城木屋お駒。高木伴蔵。神田の與吉。綾瀬村のおりく。木挽き、伊太郎。同、松五郎。亀井彌惣兵衛。小三姪、おせん。松田軍兵衛。佐藤銀平。

チョン〳〵と知らせの木を入れると、東の揚げ幕より若い衆大勢「城木屋」といふ弓張り提灯をともし、鉦太鼓にて

大勢　迷子の〳〵お駒さまイなう。

ト呼び〳〵、本舞臺の幕の外を廻り、花道へかゝり、向うへ入る。

本舞臺、三間の間、いつもの飾り附けより奥へ出して二重舞臺。見附け、鼠壁、書物簞笥、刀掛け並べあり。下座の方、藪疊、柳の深木。いつもの所、門口「荻生社中三月廿三日詩合」と書きたる塗り板掛けあり。幕の内より、右二重に荻生去來、着附け、袴にて、唐机に向ひ、朱硯にて詩の添削をしてゐる。書生三人、羽織、袴にて、草稿を前に置き、並みよく並ぶ、去來の兩方に門弟兩人、絹やつし、袴にて並びゐる、碪の音、合ひ方にて、幕明く。ト去來こなしあつて

去來　見治子、近う。

書一　ハツ。

ト少し向うへ出る

去來　斯うでござる。「楊柳雨に似たり、玉欄の邊り」といふこの轉句は、朗詠の句調に聞えまするぞ。矢張り「柳條雨に擬す」となさるゝがよくござる。

ト詠草を出す。見治、印を捺して渡す。

書一　有り難う存じまする。

ト戴いて、後へ寄る

去來　明朝の詩風は濶達なれども、實意が薄いから、詩は唐朝の風義に如くはござらぬ。

書二　御意の通りでござりまする。

書一　途中にて承れば、暮れ過ぎに源兵衛橋の近邊に、大勢人が殺してござつたと申す噂。

書三　先生にはお聞きなされましてござるか。

去來　詳しく承つた。暴虎馮河のあぶれ者でござらう。

書一　その殺し手と申すは、和國橋の髮結ひ才三とやら。

書二　相手は城木屋の番頭喜藏。その外は手代ども。

去來　すりや、才三とやらが……ハテナア。

書三　怪しからぬ儀ではござりませぬか。

去來　マ、それは格別。幸ひ今宵は閑暇にござれば、先づお話しなされい。其方達は、お茶菓子の用意を云ひ附けよ。

門弟　畏りました。

書一　イヤ〳〵、夜も更けましたれば、最早お暇申します。

去來　是非お歸りなされますか。

青三　お暇申します。
去來　隨分御出精なさるゝがよくござる。
ト三人向うへ入る。
いま、門人の話では、忠義を思ふ尾花才三、もしや噂の
ト向うを見て、思ひ入れあつて
ドリヤ、獨酌にて樂しまうか。
ト唄になり、去來、門弟を連れ、奥へ入る。ト時の鐘になり、向うより才三、手を組み、思案しい〳〵出る、後より捕り手附けて出る。花道にて才三キッと留まる。捕り手引ッ返し向うへ入る。
才三、本舞臺へ來て
才三　先生、お宿にござりますか。
トずつと入る。
お頼み申しませう〳〵。……こりやお留守さうな。
トあたり見廻しこなし、向うバタ〳〵にてお駒走り出て、胸撫でおろす。
ト揚げ幕にて微かに鉦、太鼓の音。
こま　ヤア、ありやわしを尋ぬる聲、見附けられては、才三さまに逢ふ事もならず。
ト本舞臺を見て

さうぢや。
ト門口より走り込む。此うち才三、腕組み、思案してゐる。思はず行き當つて
才三　誰れぢや。悔りするわい。
こま　わたしや追ッ手の懸かる者でござんす。ちつとの間蔭で
ト云ひながら才三を見て
ヤア、お前は才三さま。
才三　お駒さまか。
こま　逢ひたかつたわいなア。
トしがみ附く。合ひ方。
才三　ア、コレ、靜かに〳〵。思ひ掛けもない。今頃に供も連れず、どうして爰へは。
こま　どうしてとは、よう思うても見て下さんせ。手詰めになつた今日の離儀。お前に別れ、片時も、生き存らへる心はなけれど、せめて名殘に今一度、お顏が見たいばつかりに、内外の者まで目顏を忍び、お前の所へ行て見れば、向島へと太助が話し。知らぬ夜道も、なんのその、どうぞ逢ひたい逢ひたいに、怖い事も夢うつゝ、よう顏見せて下さんせいなア。

ト取り附き、泣く。

才三　ムウ、すりや、どうあつても才三と一緒に。

こま　サア、例へどういふ障りがあつて、最期の所は隔たるとも、申し

ト守を出して

この中には生れた時の臍の緒とやらが入れてあるげな。これをお前に渡して置くが、未來までの固めでござんす。

才三　すりや、この守を渡さう爲に

こま　跡を慕うて申たわいなア。

トこの時、内にて

去來　表に誰れか人聲がするやうな。

ト才三、悄り。

才三　ヤア、ありや先生の聲。この證を見せては、思し召しも如何。暫らくのうち。

ト囁く。

こま　そんなら早う來て下さんせえ。

去來　誰れぢや／＼。

ト大小のあしらひ。去來奥より出る。才三うろたへ、お駒を表へ突き出し。振り返つて去來と顏見合せ

才三　イヤ、私しでござりまする。

去來　オヽ、才三どのか、待つてゐた。よく來さつしやれたの。サヽ、爰へ／＼。

才三　ヘイ／＼。

ト表へ心遣ひのこなし。

去來　マヽ、爰へ上がらつしやれ。

才三　イヤ、これが勝手でござりまする。

ト腰掛ける。礒に合ふ合ひ方。

去來　サテハヤ、何からお話し申さうやら、この間云ふ通り、千種さまのお身の上は、一軸を詮議の爲、諸人の入り込む深川へ遣はし置いた。これとても、粂本の女房は身が爲には親身の姪、殊には又、お果て遊ばされた奥様のお側仕へ、女ながらも誠ある者。すりや、氣遣ひは少しもない。それについて、おてまへの方に、なんぞ慥かな手掛りでも。

才三　さらばでござりまする。先生、これ御覽じて下さりませ。

ト寶の箱を出す。

去來　ヤア、こりや紛失の一軸。エヽ、忝ない。オヽ、お手柄／＼。

オ三　イヤ／＼、先づ、とくとお改め下さりませ。
去來　ドレ／＼。
　ト此うちお駒、門口にウロ／＼してゐる。向うより男一人、提灯ともし出る。これにてお駒ちよつと、小隱れする。
　ヤア、こりや一軸はなくて
オ三　仔細あつて手に入れど、肝心の尋ぬる寶は
去來　こりや樣子の有りさうな事ぢやわい。
　ト此の時、男、內へ入り
男　先生樣、お宿でござりますか。
去來　貴丈、來氏の僕ではないか。
男　主人申しまする。いよ／＼明日、淺草にて會讀を始めまする。明け六ツ時より御出席下されませう。
去來　イカサマ、舊冬よりの約諾。承知いたした。
男　間違ひなうお願ひ申しまする。
去來　御大儀々々。
　ト引返し入る。
　はたと失念して居つた。
　ト頭巾を取り
　南無三。この亂髮では社中へ失禮。というて髮結ひも今頃には來をるまい。ハテ、困つた事ぢや。
オ三　苦しくなくば、私しが致して上げませう。
去來　イカサマ。足下當時の御稼業とはいへ、それは餘り失禮。
オ三　ハテ、御遠慮には及ばぬ事。
去來　然らば御苦勞にあづかりながら、緩々と御相談申さう。コリヤ、その櫛道具を持つて來いよ。
門弟　畏まりました。
　ト門弟一は手盥、二は櫛箱を直し、入る。謠の合ひ方。
〽この草庵を立ち出で／＼、行けば程なく三輪の里。近きあたりの山陰の、松はしるしもなかりける。杉村ばかり立つる神垣は、いづくなるらん／＼。
　ト此うち、オ三、剃刀を合はす。はずみに右の守り袋を落す。去來拾ひ見て「さては」といふこなしあつて、髭を洗ふ。オ三、剃りにかゝる。お駒、門口へ來て窺ふ。あと大小のあしらひ、始終砧打つてゐる。
去來　また輕いものぢや。けうとい／＼。
　ト髮を梳きにかゝる。
　時に、オ三どの、この箱の書附けと內の寶が相違するはこりや一軸を盜んだ奴が、入れ替へたもので、

ト此うちお駒、表より招く。才三「今そこへ行く」といふこなしにて、去來が髮を持つたなりに引ッ張るゆゑ、去來、段々に引き上げらるゝ。

コレサ／＼、どうさつしやる。

ト才三じれてキュッと引く。

アイタヽヽヽヽ。

才三　これは不調法、御免なされませ。

去來　大事ない／＼。コレ、才三、こなた何とぞ召されたか。

才三　エヽ。

去來　イヤサ、盥に映るその血色、眼中も血走つて、何かソワ／＼と

才三　どうでも、のぼせる加減でござりませう。

去來　ハテナウ。……それはさうと、おりや宵に怖い話を聞いたわい。

才三　ヘイ。

去來　所は樋か源兵衞橋の邊に、人を殺してあつたといふの。

才三　ヤア。

ト悄り。お駒、慄ふ。

去來　オッと、引ッ張るまい。サア、その人を殺した奴は

才三　何者でござりませうぞ。

去來　尾花才三、お身であらうぞ。

才三　なんと。

ト櫛の手を放す　お駒、うろたへ、外より門口ピッシヤリ。

去來　あれは

ト云ふを才三突き廻して

才三　先生樣。なゝ何と仰しやる。

去來　サ、それと知つたは腕のこの疵。

才三　それを知られたら、

ト有り合ふ去來が合口を取つて、逆手に持ち、突いて行く。

去來　待つた。聊爾せまい。

才三　なにを。

ト立廻る。お駒、駈け入つて

こま　ア、コレ、才三さま。

ト留めるを振り切つて、また突ッかゝる。去來、机を手早に取つて、差しつけ

去來　急くまい／＼。ソレ。

ト書いた物をお駒へ握る。お駒取上げ、才三へ見せる。

才三　ナニ／＼一歳木屋喜藏、並びに手代丈八に去り難き意恨御座候ふゆゑ、打ち果たし候ふ上は、御政法のお仕置願ひ上げ奉り候ふ。萩生去來」

去來　たつた一言申す事がある。先づ／＼。

才三　ムウ。

ト きつと思案のこなし。

尤も朋友のよしみはあれど、斯程までこの才三を、庇うて下さる御心底。

去來　庇はいで何とせう。不便と思ふ娘が縁組。

こま　エヽ。

去來　城木屋の息女、お駒とやら。

こま　よう知つてぢやなア。

ト去來、我が掛ける守を出し

去來　それを、とくと見さつしやれ。

ト合ひ方になる。お駒、取上げ見る。

こま　こりやコレわたしが守の裂れと

去來　一對のその嵯峨錦。

こま　そんならわたしが眞實の

去來　親といふはこゝ去來。

才三　以前は即ち同家中

去來　萩生惣右衞門が成れの果て。

こま　そんならわたしに、……そりやマア、誠の事でござんすかいなア。

去來　サヽ、斯うばかりでは合點がゆくまい。過ぎ去る方、日は十六年。フト手廻りの女に手をかけ、出生せしは即ち其方。折も折と御主人へ、讒言せしをお怒りあつて、知行改易、永のお暇。二君に仕ふる心なければ、世を見限つて、産れし水子に守を添へて捨てたるは、子孫を殘さぬ殿への潔白。元より音信はせざれども、それと知つたは親子の天然。育てがらとは云ひながら、よう成人してくれたなア。

こま　そんならお前は、ほん〴〵の

才三　肉親の親御であつたか。

こま　父さんでござんしたか。

去來　オヽ、父ぢやわいやい／＼。

〽逢ひたかつたと久松に、縋りつけば。

それは格別。エヽ、情ない才三郎、その身に大事を抱へながら、人を殺し……これとても悔んで詮なし。この上は身を全うし、一軸を詮議して、千種さまを御世に立て

お駒が行く末頼み存ずる。信州諏訪の一圓主は、お身が爲にも母方の伯父、身共とは竹馬の交はり。後の證據となるべきこの箱、所持なして詮議の手蔓。斯う云ふうちも氣遣ひな。この場を早く落ち延び召され。

ト箱を渡す。

ヘ問はれてやう〳〵顏を上げ。

才三　仔細を聞けば不思議な御縁。お志し祝着至極。御意に隨ひ、立退くでござりませう。

去來　先づは安堵。さりながら、お駒が派手なるその姿、同道しても行かれまい。一旦城木屋の内へ歸れ。

こま　エヽ。

去來　それ孝は百行の本。義理ある養父へ愁ひを見するは人倫の道にあらず。

こま　それでもわたしは

才三　ア、コレ〳〵、お駒どの。初めて逢うた父御の御意、こればかりは背かれますまい。

こま　イエ〳〵、とてもこの身は。

才三　ハテ、逢ふは別れの始め、また別るゝは逢ふの始めな。

トお駒を顏にて教へ呑み込ますこなしあつて

分け登る麓の道は變るとも

こま　ムウ、そんなら一先づ

才三　同じ高根の

トお駒こなしあつて

こま　月を見るかな。

去來　ヤア。

こま　サア、よう合點がゆきましてござんすわいなア。

去來　ホヽ、出かした。よく聞き分けてくれたなア。

才三　この上は、猶豫に及ばず、

こま　この場は此まゝ、

才三　お別れ申しまする。

ト行かうとする。

去來　兩人、待つた。

才三　御用がござるか。

去來　一生の別れとつくりと、なぜ、暇乞ひをしては行かぬ。

才三　サ、それは。

去來　骸になつては逢はれまいがや。

ト兩人ツカ〳〵と立戻り

才駒　なんと仰しやる。

去來　この場は得心の體を見せ、名乘つて出でる心であらうが。
才三　サ、それは。
去來　お駒も共に、捨身する所存であらうが。
こま　サ、それは。
去來　いよ〳〵相果てゝは養父たる、城木屋庄兵衞へ孝が立つか。
こま　サ、それは。
去來　仁義を守る身共にまで、天命を背けといふのか。
才三　サア、それは。
去來　われ達より身共が先へ。
ト刀に手を掛ける。
こま　待つて下さんせ。
才三　聊爾あるな。
去來　留めるは、いよ〳〵落ち延びるか。
才駒　サ、それは。
去來　得心して內へ歸るか。
こま　サア
去來　サア
三人　サア〳〵〳〵。

才三　マ、さほどにまで
こま　二人が事を。
去來　猿に斷腸の悲みあり、ましてや人間。
ト兩手に兩人が手を取り
現在の父ぢやわいやい。
才駒　エヽ、有り難うござりまする。
ト時の鐘鳴る。
去來　最早三更。
才三　この上は御意に隨ひ、立退くも一つの孝。千種どののお身の上。
去來　氣遣ひあるな。命に掛けて。さりながら、見苦しいその丸腰。この一刀。
才三　エヽ、忝ない。
ト渡さうとしてこなしあつて、手早に我が守で封印を附け
去來　この守を以て鯉口を封印にせし上は、我れも同道する同然。もし封印に凶事あらば、惣右衞門が身の大事。必らずともに……その身を守りの旅行の餞別。
ト取つて渡す。
こま　才三樣、道で必らず。イヤ、サア、必らず怪我して

下さんすなえ。

才三　其方も無事で

去來　片時も早う。

ト此うち捕り手、數疊より出て、後に窺ふ。

〽されども妄へ夜々は來れども、晝見えず、或る夜の睦言に、御身如何なる故により、斯く年月を送る身の。

ト此うちお駒、才三へこなしあるを、去來行きかけ、表へ出て、才三は東の假花道、お駒は本花道へかゝる

去來こなしあつて

去來　既に、死生命ありと聖賢の教へなれば

才三　もしも天運到らずば

こま　初めて逢うた父さんに

才三　これがこの世の

こま　お別れにならうやら。

駒才　思ひ廻せば

去來　未練の一言。

トきつと云ふ。これにて舞臺廻りかける。去來見送る

〽さすが別れの悲しさに、歸る所を知らんとて、小田卷に針を附け、裳裾にこれをとぢ附けて。

ト捕り手「捕つた」と出て

捕手　人殺しの才三、うぬ。

ト行かうとする。この時、兩人は花道中程へ行く。いつもの門口、眞中へ來る。去來、門口より捕り手を内へ抛り込む。兩人振り返り

才駒　これは。

ト去來、門口ピツシヤリ

去來　構はずと行け。

〽跡をひかへて慕ひ行く。

トそれなりに道具廻る。

本舞臺、高二重、蹴込み、春草の土手、向う、牛の御前、白鬚の神社、梅若塚などの模樣。吊り物一面に枝垂れ櫻、山櫻の吊り枝に松助、田之助の紋附きの紅摺りの提灯廿張ばかり、見事に火を入れ、右高舞臺に富本連中並よく並ぶ。前彈きにて道具納まる。

〽歸るさの、道に關屋の里もあれ、月も朧の隅田川、春宵價千金の、詠めに飽かぬ夜櫻を、雪と見まがふ城木屋の、娘盛りも戀ゆゑに、憂き名を流す花筏、ほんに涙が

淵も瀨と、變りゆく世ぞ便なけれ、根岸に芽ぐむ薄さへわれは秋かと心置く、昔にも尾花才三郎、千種の方の行く末を、いざ言問はん都鳥、有るかなき身は道芝の、露とこぼれて吹くからに、風新柳の梳り、氷消えては舊苔の、白鬚洗ふ川浪に、移れば變るお姿と、顏見合せて佇めり。

ト右淨瑠璃のうち、才三、東の通ひ道より土間の傳ひへかゝる。お駒と行き合ふ。お駒取り附き「よう戻つて下さんした」といふ心の振りにて、兩人本舞臺へかかる。土手、後より千鳥數多群立つを、お駒指さす模樣などあつて本舞臺へ來る。

〽折から向うへ賤の女が、紺の前垂れ、片襷、つむりに盥手に藥罐、提げていそ／＼歩み寄る。

ト向うより綾瀨村のおりく、賤の女の形にて出る。

〽向島のなく／＼、花散る／＼、ちんらちら／＼散りかゝる、嵐は花の科ならなくに、月を便りに只一人、行くも戻るも畔道傳ひ、がつくりそつくり、でつくりひよつくり、其まゝの、在所かた立ちとまり。

ト本舞臺へ來り、兩人を見て

りく　オヤ／＼、若い女と、若い男、色ゆゑの駈落ちか。こちらも覺えがある事ぞ。

〽晝間せなとの約束も、宵にや來もせで夜半も過ぎて、脊戶のくろゝをこツつり／＼、しやツくり／＼、廻すはあたひよんげな、どんくさい、人が見附けて咎めたならば、猫にやんとも云はれまい。これな、ごん／＼五郎兵衞どの、そりや又あんまり、馴染ざくらぢやないかいな。

オヽ、わしとし事が、口から出次第、ひよかすかと、イヤ、むすめんぢよさん、袖も留めずにゐなさんすは、まだ祝言もなさんすまい。わしが出會うたも何ぞの緣、幸ひの仲人役。

〽まア／＼これをと、前垂れを、假りの花莚、花席、二人も顏を見合せていづれ亡き身も末の緣、結ぶゑにしの露雫、缺けた茶碗を土器と、胸は淚に內ぐもり。

ト盥より茶碗を取り出し

婚禮の杯は、女方からさすが習はせ、藥罐の煮花は心の花香。酒ぞと思ふ心が酒。早う始めて下さまい。

〽構はぬ事を世話やき嬶。

トお駒、茶碗を取上げる。おりく注ぐ。

こゝらで謠のいる所なれど、何にも知らぬ在所者。オ

オ、それ〳〵。年々馬屋の祈禱にくる、猿廻しの顏を覺えてゐるから、めでたう一生添ひ遂げて、猿舞ひといふ緣起もよし、さらば一節。
〽やアめでたやな、お猿はナ、めでたやな、聟入り姿ものつしりと〳〵。
さてもお前は。
〽えゝ女房ぢやに〳〵、ノホンホホ、、、あろかいな、さんな、またあろかいなア。
ト茶碗を才三へ持ち行く。
そこで、聟さんが
〽戴いたものぢや、コレ、戴か、ノホンホヨホ、、あろかいな。さんな、またあろかいなア。
ト杯を納め
これでわしも氣が濟んだ。お前達も嬉しかろ。併し、こりや杯ぢやない、近附きぢや。ホ、、ホ、、。
〽笑ひを殘し、とつかはと、盥、藥罐を取り集め、元來し道へ立歸る。お駒は跡を打見やり。
こま　思ひがけない女中の取持ち。これといふも二世かけて、添はうと云ふ神のお告げ。わしや嬉しうござんすわいなア。

才三　それは格別、お駒どの、先生の詞を立て、一旦菴は立出でたれども、眞像の一軸手に入らねば、潔く腹切らんと、かねて期したるこの身の覺悟。
こま　わたしとても、お前に別れ、何樂しに存らへませうぞいなア。
才三　親々の嘆きといひ、今は斯く落ちぶれたれど、以前は武士の才三郎。最期の場所まで女を連れ、色に迷ひし未練者と、世の人口は死後の恥辱。
〽こゝの道理を聞き分けて、去んで袂に取り附くお駒。
こま　才三さま、そりやお心が違ひます。
〽わたしや何にも知らねども、唐の大將楚の項羽、最期の場まで虞氏といふ、お后さんを伴はれ、近い例しは日の本の、木曾義仲も粟津にて、巴とやらのお姿を、連れて討死なされたと、書いて殘した物語り、よも僞はりぢやあるまいし、思ひを神にかけまくも、末の千歳を萬代と、誓ひは鶴か龜井戸の、天神さんへ願こめて、梅を一生斷つたぞえ。それに今更むごらしい、わたしが事はどうなろと、まゝの紅葉の若楓、春雨にあふ風情にて、恨みかこつぞ可愛らし。
ト此うち木挽き、伊太郎、同松五郎、序幕の形にて窺

松伊　ひ寄つて
才三、われを。
〽云ふより早く無二無三、掴みかゝるを身をかはし、右と左へはねのけ、蹴のけ、お駒を圍うて突ッ立てば、隙を窺ひ、頭上を當て、あゝ危なやと娘氣の、あせれどなんと詮方も、打つてしめんと取りつくを、肩突き、腮突き、胸返し、腕車や、腰車、手練の手並に兩人は、叶はぬ佽せと逃げ行くを、跡を慕うて。
ト才三、お駒を連れ、跡を追うて入る。チヨン／＼にて舞臺廻る。
本舞臺、見附け、黑幕、眞中に石の地藏、松、柏の老深木、所々に石塔、稲村。すべて千住葬所の體。隨分に淒く、一つ鉦にて道具とまる。
ト金江金五郎、小三の手を引き出て、こなしあつて
金五　覺悟はよいか。
ト拔き身をさしつける。
小三　ちつとも早う。
ト覺悟の體。

金五　今が最期。
ト又さし附ける。
小三　南無阿彌陀佛。
ト金五郎、猶豫する。小三、目を開き
金五郎さん、今更お前、後れがついたか。早う殺して下さんせいなア。
金五　卑怯で猶豫するにはあらねど、科なき其方を手にかくるも、よく／＼武運に盡きたるこの身。
小三　それも悔んで返らぬ成行き。
金五　是非もなき世の
兩人　有様ぢやなア。
ト憂ひのこなし。此うち才三、お駒を連れ出て、本舞臺、下の方に床を占め
こま　申し、才三様。
ト此聲にて、金五郎、小三思ひ入れ。
この世の緣は薄くとも、未來は必らず
才三　云ふにや及ぶ、一つ蓮。
こま　エヽ、嬉しうござんす。
トぴつたり抱き附く。金五郎、小三、心得ぬといふ思ひ入れにて、聞き耳する。

オ三　覺悟はよいか。
こま　アイ。
　　ト才三、お駒を引寄せる。顏をヂッと見る。
オ三　もう一遍抱き附け。
こま　斯うかいなア。
　　ト又びつたり抱き附く。金五郎、小三も抱き附かうとする。小三こなしあつて抱き附く。才三また引寄せ
オ三　これがこの世の
こま　お顏の見納め。
　　ト心意氣あつて
オ三　もう一遍抱き附け。
　　ト又抱き附いてこなし。七ツの鐘鳴る。
こま　ありやもう七つ。
オ三　夜が明けては人目あり。さうぢや。
　　ト思ひ切つて突かうとする。此うち金五郎思ひ入れあり、向うへ出て、探り寄つてよろしく留め
金五　コレ、早まられな。
　　ト才三、悄り。
オ三　ヤア、人里放れしこの墓所。何者なれば今頃に。
こま　此方は仔細あつて、爰にて最期を遂ぐる者。
お駒　エヽ。
　　ト才三、金五郎を透かし見て
オ三　あなたはいつぞや、柳島の妙見宮の繪馬堂にて、
金五　お目にかゝつたお侍ひ。
オ三　思ひ掛けない。
金五　どうして爰には。
オ三　ト金五郎こなしあつて
金五　御覽の通り、二腰も帶すれど、主家の寶紛失ゆゑ、切腹と存するところ、語らひし女が、二世までもと慕ひ據ろなく、斯くの仕合せ。
オ三　世には似た事もござるもの。私しとても、古主の爲、寶の在所知れざるゆゑ、語らひし女もろとも、思ひ切つたる覺悟の一命。
金五　すりや御自分にも、
オ三　おてまへ樣も
こま　とても存らへ
小三　果てぬ身の上。
オ三　ぢやによつて。
　　トまた刀を取上げるを

金五　待たつしやれ。して、おてまへの尋ね召さるゝ、古主の家の寶と云ふは。
才三　申して詮なき事なれど、巨勢の金岡が描きたる、衣通姫の眞像の一軸。
金五　ムウ、すりや、其許は上總の大守、菱川家の御内よな。
才三　尾花才三郎と申す者。して又、こなた樣のお尋ねある、紛失の品と申すは。
金五　何を隱さう、小鍛冶宗近が鍛へたる、貫波刀の裏ざしを。
才三　すりや、御自分樣は、下總の城主、萩原どのの御家中な。
金五　金江金五郎と申す者。才三どの、安堵召され。こなたの尋ぬる寶は相知れてござる。
こま　エ、、なんと仰しやる。
才三　お喜びなされい。お尋ねなさるゝ紛失の寶はござりまするぞ。
小三　寶がどこにござんすかいなア。
金才　即ちこれに。
ト兩人、箱を出し、互ひに透かし見る。空へ月顯はれる。
金五　大殿の御直筆、貫波刀と記しあれども
小三　中の寶は衣通姫の姿繪。
才三　古筆良助が書附けにて、眞像と記しあれども
こま　中の寶は裏ざしとやら。
ト双方、蓋を開き、取り替へ
金五　紛ふ方なき貫波刀。
才三　疑ひもなきこの一軸。
金五　さては佞人原の仕業にて
才三　双方の寶を入れ替へ置き
金五　紛失せしをそれとも知らず
才三　奪ひ返さんその爲に
金五　心を盡せし甲斐あつて
才三　今月今宵、不思議にも
金五　計らず双方手に入りしは
才三　兩家の御運を守りの神。
金五　正八幡の加護なるか。
才三　金五郎どの
金五　才三郎どの
小三　お駒さんとやら。

こま　小三さん。
四人　エ、エ、忝ない。
金五　片時も早く若殿へ。
才三　此お寶を姫君へ。
小駒　夜の明けぬうち。
才金　ござれ。
ト四人喜び走り入る。チョン〳〵にて返し。黑幕切つて落す。

まく

向う、奥深に高舞臺。見附け、千住の茶屋、表側の體。掛け燈籠に殘らず火を入れ、大篝を焚く。與吉荒れの形にて、捕り手大勢に取卷かれゐる。この見得、早太鼓にて道具とまる。
ト與吉、樣々のタテあつて、皆々を追ひ込み
與吉　この上は、いつそ。
ト腹切らうとする。
彌惣　待つた〳〵。
ト向うバタ〳〵にて、龜井彌惣兵衞、凛々しい形、竹の先に赦し文を挾み、走り出る。上手より萩原千次郎

三方に寶の箱を載せ、金五郎、小三、おもん、附き添ひ、松田軍兵衞、高木作藏に繩を掛け、出る。下の方より千種姬、同じく箱を持ち、才三郎、お駒、城木屋庄兵衞附き添ひ、佐藤銀平に繩を掛け、引き立て、出て
金五　ヤレ、早まられな。生害には及ばぬ〳〵。
才三　双方とも、紛失の寶は手に入つたぞ。
與吉　ナニ、お寶が手に入りしとな。
龜井　神田の與吉の一命を、助けよとある殿樣のお赦し文。
與吉　すりや、御助命下されんとな。
駒庄　アヽ、有り難い。
龜井　この上はお道さま、金五郎さまを娶合せて、金江、秦の家へ相續。
小三　此おもんはわたしが娘。
庄兵　お駒、才三を夫婦にして、これよりお國へ歸參の晴れ。
金五　過まつて改むるは、斯う。
ト篝の燃え杭を取り、火にて與吉が腕の入れ墨を消す。

亀井　これといふも眞像の譽れ。末世に遺すには、當時の畫工豐國に、各々の姿を寫させ、普ねく廣むる錦繪の始まり。
金五　與吉といふ惡名を、消してしまへば城木屋庄松
千次　父が讓りの家名相續。
こま　エヽ、有り難い。
千次　惡人どもが成敗は、親人のお心任せ。
こま　直さま本國へお供して
金五　若殿の御祝言。
亀井　千秋萬歲。
與吉　めでたい〳〵。
皆々　先づ〳〵、この場は、お立ち〳〵。
ト　めでたく打出し
ひやうし幕

東都名物錦繪始（終り）

解　說

渥美清太郎

一日の狂言は只一本、といふのが昔の歌舞伎劇の原則であつた。今のやうに、一番目中幕二番目大切、なぞといふ風には決して分れてゐない。一日に只一つの狂言ぎりしか演じなかつたものだ。

併し、看客の心理は今も昔も同じ事である。陰鬱な狂言の後には華やかな場面を見たがる。重苦しい時代物の次には輕快な世話物を欲しる、泣いた後は笑ひたがる。この氣持ちは昔の劇場當事者もよく知つてゐた。隨つて、一日に只一つの狂言でも、その間には愁嘆場もあれば踊もあり、金襖の御殿の次に藝者屋の世話場が來たり、ウンと泣かせた跡でウンと笑はせる「チヤリ場」もあつたのである。只それが今日のやうに、數多く狂言を集めるのでなく、一つの狂言、一つの名題の下に統一されてゐたものである。自然、これが「喜劇」だといふ獨立した狂言は存在しなかつたが、一日のうちに「笑はせる場」は大抵一幕附いてゐたものである。京坂の二の替り狂言の小幕、江戸の顏見世狂言の二番目なぞは、その必要から存在してゐたのである。

滑稽狂言集、とは稱しても、右の次第であるから、これが滑稽狂言だときはめの附いた離れ狂言は非常に少ない。たゞ文化以後は以上の制度も亂れたので、稀には滑稽中心の短かい狂言もある。それらを集めた上に、長い狂言の一部であつて、しかも前後に關係が少ない、獨立した狂言といつても差支へない滑稽中心の幕だけの脚本を選んで加へたのであるが、それでも一册の量に不足するので、更に、例へ結末は悲劇で終つても、全體として感じの明るい、笑はせる場の多い、華やかな狂言を選んで收錄したのである。滑稽狂言集といつても、決して喜劇の脚本集ではない事を御了承ありたい。歌舞伎劇に、喜劇は無かつたのであるから。

花雪戀手鑑(はなふゞきこひのてかゞみ)——乳貰ひ

今でも延若が折々上演する「乳貰ひ」の上方狂言である。初演は天保四年正月、大坂角の芝居で、名題は「けいせい稚兒淵」といふ、即ち石川五右衞門の狂言であつた。稚兒姿の石川五右衞門を中心にした、舊作の中へ、この「乳貰ひ」の二幕を三つ目四つ目へ新狂言として加へたのであつた。種は作者の西澤一鳳が「佛法乘合噺」といふ八文字屋本に斯うした筋があつて、三代目中村歌右衞門に話したところが、それは面白いから早速入れようといふので、二人で筋を相談し、上の卷は歌右衞門自ら金澤龍玉といふ名で

脚本を書き、下の巻は一鳳が作つたのである。狩野四郎次郎といふ役名が石川五右衛門と混用されるのは、随分無茶な使ひ方なのであるが、その頃の看客には、もう狂言の世界について、むづかしく云ふほどの識者もなかつたので、結構この新作が歓迎されて、大當りを取つたのである。その三月、一座が京都の北側芝居へ移つた時、この二幕だけ獨立させて二番目に据ゑた。「花雪戀手鑑」といふ名題も、上のカタリも、この時の番附に現はれたものなのである。

初演の役割は左の通りであつた。

岩木屋藤三郎(坂東壽太郎)同女房おみつ(嵐璃光)髪結ひおくら(中村歌保世)志田權藏(中村鶴十郎)栗坂兵内(坂東七五郎)柳ヶ瀬騎藤次(山村友右衛門)佐屋重兵衛(中村津多右衛門)腰元おつゆ(中村梅花)母伏屋(嵐かのふ)夜番九郎助(淺尾爲十郎)花屋五助(中山文七)雪村娘小雪(中村富十郎)狩野四郎次郎(三世中村歌右衛門)

歌右衛門から實川延三郎へ傳はつて、今日でも京阪に殘つたのであるが、江戸では嘉永三年正月市村座で、三世櫻田治助が「青砥調」といふ大岡政談の中へこの狂言を書き込み、鍾馗中助(四郎次郎)が四世中村歌右衛門、おもと(小雪)が坂東しうか、富屋甚兵衛(藤三郎)が市村羽左衛門で好評を得た。本文中に挿入したのは、この時の錦繪である。

乳貰ひの場には「夜鶴恩雪解」といふ常磐津を使つたが、これは曲節が今でも殘つてゐる。その後八世片岡仁左衛門が「鞣脚浮世江戸棲」といふ名題で、お花半七に直して演じた事もあつた。

「けいせい稚兒淵」の中に書き加へられても、この「乳貰ひ」は前後と全く筋に連絡が薄い。三世歌右衛門は、斯うした滑稽中心の小幕を、自分の思ひつきで拵らへあげて、よく演じたものである。以下收錄の「とん〳〵の三番」「堤畑の十作」「かりのたより」等、いづれも同種の狂言である。

笑はせるのが眼目の幕だけに、一斑の看客には受けたのだが、當時の識者は、歌舞伎にとつては邪道の、下卑た狂言だと眉をひそめたものであるが、今日の眼から觀れば、頽廢期に産れた官能描寫の珍らしい世話物として、先年延若が上演した折、非常に好評を得たのも面白い。

新板色讀販——ちよいのせ善六

現今上演される、ちよいのせの善六は、文久二年五月、守田座に上演された、三世櫻田治助作の「三舛蒔繪巵」の脚本が標準になつてゐる。この時は一番目が「雪笠原」で宮本武藏、中幕が「月光秀」で太功記十段目、二番目が

「花妹脊」でお染久松といふ、三組みの狂言であつた。この二番目は三幕物で、序幕が隅田川でお染久松の道行から、船の中で後家のお峯と番頭善六が清元を使つて色模樣がある、これが湯島の松金屋で、善六の見た夢といふ趣向であつた。二幕目が義太夫の「新板歌祭文」の野崎村であるが全體が江戸の世界なので野崎村ともいへず、向島の庵崎村といふ趣向にしてあつた。大詰が油屋から奥藏で、即ちちよいのせの場なのである。序幕は慥かに治助の創作であるが、大詰のちよいのせは、大坂狂言の改作で、元は義太夫の「染模樣妹脊門松」油屋の善六と小助の滑稽場からヒントを得たに違ひないが、獨立した世話歌舞伎としてもやつてゐたらしい。文化の頃、大坂の濱芝居で、中村友三が善六を演じた形跡があるし、その以前にも初世淺尾爲十郎や淺尾奥山も、同じやうな仕草をやつてゐる。安政二年京都の北側芝居で、「染模樣妹脊門松」の名題で中村友三の演じた善六は慥かにちよいのせだらうと思ふ。江戸でちよいのせを初演した小團次は、大坂の濱芝居で修行した俳優であるから、恐らくこれらの芝居を觀てゐて、治助に話して改作させたものであらう。

文久二年の時の役割は左の通りであつた。

山家屋清兵衛(市川市藏)丁稚久松(中村福助)下女おとり(中村鴈八)道具屋利兵衛(尾上菊四郎)藝者おいと(坂東三津五郎)娘お染(市川福太郎)油屋多三郎(中村鶴助)松屋源右衛門・中村鶴藏)油屋後家おみね(尾上菊次郎)番頭善六(市川小團次)

この時お染を勤めた福太郎は、小團次の子で、即ち後の市川右團次である。大坂へ歸つてから、父讓りの狂言を盛んにやつた中に、この善六もあつて、以來治助の脚本が大坂式に又改作されて今も傳はつてゐる。東都では明治二年三月守田座で、同じく小團次の子の市川左團次が善六を勤めた。この時は、清兵衛とお染が澤村訥升、多三郎が中村福助、おみねが澤村其答、久松が尾上多賀之丞、源右衛門が中村仲藏、お糸が中村いてう等で、大した評判でもなかつたが、その後、明治七年五月の守田座で出した時は、五代目菊五郎がお染と善六、坂東彦三郎の清兵衛、中村芝翫の源右衛門、坂東秀調の久松、市川小團次の多三郎、中村いてうのおいと、尾上いろはのおみね、といふ堂々たる顔觸れで、非常な評判を取つてから、盛んに流行り出して來たのである。「新板色讀販」といふ名題も、所載のカタリも、共にこの時の番附に現はれたものである。

油商人廓話(あぶらあきうどくるわばなし)　―　油屋與兵衛

寛政十二年九月、大坂角の芝居に上演された狂言で、「俠顔廓日記(だてくらべくるわにつき)」といふのが本名題である。作者に近松德三で、

油屋與兵衛の筋の外に、幻竹右衛門と鐘の太兵衛の達引や、山崎屋淨閑恩愛の筋なぞ頗る複雜した通し狂言であつた。その中で、與兵衛の筋だけが頗る好評であつたので、再演の享和三年二月、京都北側芝居の折から、竹右衛門太兵衛の件を削つて、與兵衛の一本筋になり、名題も「油商人廓話」と改まつたのである。この狂言の材料は、芝屋芝叟が「長話」と名づけ、一席讀切りの人情噺のやうなものを數種作つて席に講じた、その中の「油」といふのは、支那小說の「賣油郎」を飜案したもので、評判であつたが、それを德三が借りて來て、「双蝶々」の書替へに持込んだものである。京坂では嵐吉三郎が當てた後を、實川延三郎、片岡我童等が得意にして度々演じ、今日まで傳はつてゐるのである。

寬政十二年初演の折、油屋與兵衛の件の役割は左の通りであつた。

傾城都(中山一德)山崎屋娘おてる(藤川友吉)傾城吾妻(芳澤いろは)林要次郎(中山卯藏)安達瀨左衛門、遣り手おたま(淺尾爲右衛門)葛原左仲太、お山の九助(柴崎台藏)長岡千太郎、里見丈助、嵐猪三郎)南方十次兵衛(關三十郎)葉屋彥助、辻道伯(中山文五郎)平岡丹平、駕籠屋甚兵衛(山村友右衛門)油屋與兵衛(嵐吉三郎)

本卷へ收錄した臺本は、天保七年八月、大坂中の芝居所演のもので、この時の役割は左の通りである。

與兵衛(嵐璃寬)道伯(大谷友右衛門)十次兵衛(市川助十郎)與五郎(中村歌十郎)都(實川勇次郎)彥助(中村翫十郎)丈助(中村亦十郎)おたま(市川新四郎)左忠太(中山文五郎)甚兵衛(三枡松五郎)九助(嵐璃珏)權九郎(中村友三)千太郎、竹六(嵐吉三郎)お梅、おちゑ(山下金作)丹平(市川鰕十郎)吾妻(中村富十郎)

江戶では嘉永六年正月の市村座、「里見八犬傳」の二番目に、三世櫻田治助が補訂して、別に名題も設けず加へたのが初めである。この時の役割は

油屋與五郎(與兵衛の役――助高屋高助)道伯(大谷友右衛門)吾妻(尾上菊次郎)いろは。おもと(都とおてるの役――岩井粂三郎)親助(與五郎の役――中村福助)九助(澤村源之助)彥助(中村翫太郎)千太郎(澤村銑次郎)お梅(嵐小六)

京坂では盛んに上演されたが、東都ではその後、大芝居では一度も上演されず、稀れに小芝居で、大坂役者が演じる位のものであつた。

講談の「紺屋高尾」や「名物幾代餅」は、この狂言からヒントを得て創作されたものらしい。

傘轆轤浮名濡衣（かさのろくろうきなのぬれぎぬ）――てれめん

天保八年二月、大坂中の芝居初演の「けいせい玉手綱（たまてづな）」は「染分手綱」の書替へで、在來の種々な同種狂言を綴り合せたものらしいが、その中の三幕目四幕目が、この「てれめん」の新作であつた。作者は二世金澤龍玉である。結婚を申し込んで刎ねつけられた男が、惡醫者を語らつて娘に難癖を附けるといふ趣向は、大岡政談の「小西屋騷動」にある。どちらが先か知らないが、多分は大岡政談の方が先で、それを芝居に仕組んだものであらう。

自然生のおさん(中村富十郎)眞垣半三(中村蘭十郎)肝煎り左介(中村駒助)蛇使ひお市(中村蘭九郎)稽古所お大(瀨川路之助)横田當庵(中村東藏)鷺坂左内(淺尾工左衞門)入間屋喜十郎(四世中村歌右衞門)入間屋番頭彥七(中村玉助)

これ等の役割であつたが、女五人斬の趣向が非常に好評だつたので、同年十一月、京都南側芝居でも、この件だけを切り離して上演した。この時は「大經師昔曆」と麗々しく大名題を附け、すべておさん茂兵衞の世界の役名に直したのであつた。即ち

番頭茂兵衞(市川助十郎)娘おさん(中村富十郎)横田渡庵(大谷友右衞門)永樂屋孫太郎(三桝源之助)赤松梅柳(淺尾工左衞門)

等であつた。その後京坂では、いろ〳〵な狂言に混じ合せて上演され、役名も折々違つてゐたが、江戸では嘉永六年五月市村座の「意東繪懸額（こころはかりえどのかけがく）」が最初である。燒直し屋の三世櫻田治助が、おさめ新七と混じ合せたもので、その役割は左の通りであつた。

檜垣三藏(中村福助)もゝんが娘おなり(中村成藏)按摩淸庵(中村翫右衞門)杵屋およし(嵐小六)檜垣の手代直七(中村芝雀)椎津左門(森田勘彌)左門娘お時(尾上菊次郎)

これを更に、天保八年十一月の時と同じく、大經師の世界に還元したのが、文久三年六月、市村座所演の「傘轆轤浮名濡衣」であつた。大體、櫻田治助の脚本に據つたらしく、默阿彌が所々へ手を入れた形跡もある。淸元の文句と名題のカタリとは、慥かに默阿彌と云つてよろしい。尤も本卷へ收錄した臺本は、その後京坂を通つて來たものらしく、文久三年の匂ひが少し薄らいでゐるが、これ以外ちよつと見當らなかつたので是非もない。

文久三年の折の役割は左の通りであつた。

赤松梅柳(六世市川團藏)永樂屋孫太郎(市川九藏)眞垣半十郎(市川雷藏)瀧川段助(市川米五郎)蛇使ひおとら(あらし吉六)質屋藤助(市川七藏)茶屋女おるい(市川

小牛次）永樂屋母お秋（中村武次郎）山形屋助四郎（坂東村右衞門）横田宗庵（片岡十藏）判人佐介（市川桃十郎）木戸番六藏（尾上鶴次）同三助（關松次郎）稽古所小梅（中村歌女之丞）丁稚平吉（坂東羽太作）梅柳娘おさん（尾上菊次郎）永樂屋番頭茂兵衞（市川小團次）

その後、この脚本に依つて東都でも折々上演されてゐるが、あまり大劇場では見掛けない狂言である。

櫻時廓美談 ―― 堤畑の十作

文政十一年正月、大坂角の芝居初演。「天滿宮花梅櫻松」の一節である。この狂言は五瓶の「天滿宮菜種御供」から時平の七笑ひと松月尼の鷄娘の件を借り、これへ孔雀三郎謀叛の件、千本櫻の鮨屋を一緒にしたやうな荒藤太の件、及びこの堤畑の十作の件を附加したもので、座頭の三代目歌右衞門が金澤龍玉といふ名で以て自ら案を構へたのだが、筋は隨分無理なもので、全體として一向取柄がないが、この十作の件だけは世話場でもあり、ちよつと面白い筋なので、明治までも殘つたのである。元來、天神記の世界の中へ、全然幕末の世界になつてゐる斯うした世話場を嵌込むといふのは、顔見世狂言以上に亂暴きはまる遣り方であるが、當時の看客は別に苦情も云はなかつたらしい。九條の里の傾城が菅家の息女といふ途方もない筋も、評判記さへ取立てゝ咎めはしてゐない。

幕中に雷金兵衞といふ男達が出て、頻りに暴れ廻つてゐるが、一向十作の方の筋に關係してゐない。これは、この次の幕に朱雀野だんまりの場といふ時代な場面があつて、そこへ本名件の義雄で摑む都合から出てゐるだけなのである。主人公の十作は、全くこの二幕以外出てゐない。即ち、筋は連絡してゐるが、作者の氣持ちでは、この二幕は勿論獨立させてゐる積りなのである。隨つて後には、二番目狂言としてこの二幕を出した事も度々ある。爰へ賦した名題は、先々代中村時藏が明治十年三月、喜昇座で演じた時のもので、甚だ拙い附け方だが、外に獨立した名題が見當らなかつたので、これを借りて來たのである。尤も大坂では、度々上演されたが、東都ではこの時一度ぎりらしい。

初演の役割は左の通りであつた。

雷の金兵衞（市川鰕十郎）幇間仁作實ハ佐竹舎人之助（小川吉太郎）倉橋丈右衞門（市川新四郎）澤瀉屋おかね（中村東藏）曳舟おかつ實ハ腰元勝野（瀬川路之助）花升屋おりつ（嵐璃光）傾城青柳實ハ紅梅姫。田舎娘おとき（ニヤク藤川友吉）唐土屋天平實ハ天蘭敬（中村元朝）妹おみち（中村梅助）坊主の岩松（淺尾内匠）奴宅内（中村歌七）澤瀉屋おきく（中村松江）堤畑の十作（三世中村歌右衞門）

三世相錦繡文章（さんぜさうにしきぶんしやう）――おその六三

安政四年七月、江戸中村座初演の二番目狂言で、三世櫻治助の作である。四幕全部を夢にした趣向と、地獄巡りの珍らしい幕と、全部を常磐津の出語りにしたのとが、際立つて變つてゐる狂言である。地獄巡りは南北の狂言からヒントを得たのであらうが、その外は如何にも治助の思ひつきらしく、改作ばかりやつてゐる治助物の作としては、傑作の部に入れるべきである。殊に、全部常磐津の出語りとした趣向が大當りで、夏芝居ながら大入を占め、常磐津淨瑠璃としても流行り物となつて、今に廢らず行はれてゐる。が最初が値安の夏芝居であつた所爲か、その後度々再演されても、いつも小芝居ばかりで、大芝居には興行されてゐないのである。

初演の役割を記して置く。

福島屋おその（片岡我當）三途の川の婆（大谷德次）請負ひ人七郎助（澤村い太郎）金貸し權兵衞（中村千代飛助）斬し家とんし（中村雁八）市子相模（中村相藏）三十番神使童（中村德次郎）娘おまつ（山崎權內）冥官王（尾上雷助）閻魔大王（片岡虎五郎）福島屋淸兵衞（市川猿三郎）梶野長庵（關歌助）福淸女房おかぢ（嵐小六）小柴六三郎（澤村訥升）

常磐津の役割は左の通りであつた。

福島屋の段　常磐津小文字太夫　岸澤三藏
洲崎堤の段　常磐津國太夫　岸澤仲助　同和歌吉
十萬億土の段　常磐津小文字太夫　岸澤文字八　同式松
墮地獄の段　常磐津小文字太夫　岸澤壽助
極樂淨土の段　常磐津豐後大掾　岸澤古式部
三社祭の段　常磐津小文字太夫　岸澤式佐　常磐津國太夫　同三登勢太夫　岸澤古式部

この淨瑠璃が大當りだつた結果、その功名爭ひが常磐津と岸澤との間に起り、紛擾の揚句が遂に兩派は分裂し、別に岸澤の一派が出來、明治の中年までこの二派が長く反目してゐたのである。

傾城三拍子（けいせいとんとん）――とん〳〵の三吉

文政五年正月、大坂中の芝居初演、奈河晴助、金澤龍玉八重牆欲國合作の「けいせい染分總（そめわけたづな）」の一部である。この狂言は「戀女房染分手綱」の書替へで、大坂の二の替り狂言の例として、無暗と派手な、複雜な、長い通し物である。「堤畑の十作」や「乳貰ひ」と同じく、その中へ滑稽中心にこの二幕を加へたので、前後と筋の連結は有つて無きが如く、主人公の煙草切り三吉は、この二幕以外、前の幕へ

ちよつと顔を出し、あとは大詰の謀叛人見出しへ並ぶぎりで、全く獨立してゐると云つてよいのだが、これは又通し狂言として賣れた脚本だけに、この二幕だけ別に出したのは、明治三十何年かに宮戸座で出した位のもの、大抵通しで上演されると極まつてゐたやうである。とん／＼の間違ひは、歌右衞門の弟子に事實あつた事なのを、歌右衞門が元にして案を立てたのだと云ふ。同じ趣向は「接木根岸襟」遠山左衞門尉の狂言にもソックリ應用されてゐる。「傾城三拍子」は、濱芝居で上演された時の名題ではあるが、この二幕を中心に賦してあるだけに面白いので、茲へ借りて來たのである。

初演の役割は左の通りであつた。

煙草切り三吉實ハ由留木左馬治郎（三世中村歌右衞門）千切屋娘お梅（嵐富三郎）山形屋義兵衞（市川鰕十郎）千糠のお初實ハ光姫（澤村國太郎）下女おしも（中村まもり）煙草切り八五郎（中村芝十郎）久三の大助（市川市鶴）上邊見脉（桐山紋治）鷲塚八平次（片岡小太郎）腰元おせつ（片岡愛之助）番頭傳兵衞（淺尾國五郎）伊達與三兵衞（淺尾工左衞門）

其往昔戀江戸染――八百屋お七

八百屋お七の狂言としては、今日殘つてゐるものでは一番由緒の深い脚本である。

お七を芝居にしたのは、寶永三年正月、大坂の嵐座で、嵐喜世三郎の演じた、吾妻三八作の「お七歌祭文」が初めらしい。喜世三郎のお七は大當りであつた爲、同人が寶永四年中村座の顏見世へ下ると、翌五年三月同座で、早速お七を上演した。それはお七の廿七回忌を當込んで中村淸五郎が增補し「中將姫京雛」として上演したのが江戸でのお七劇の最初であつた。喜世三郎のお七は江戸でも大當りで、彼れの紋の丸に封じ文が、お七の紋と誤まれてしまつた位であつた。

その後、江戸でもお七劇は無數に出來てゐるが、今日のそれ等に影響のあるのは、享保十七年三月市村座所演の「松竹梅根元曾我」で、それがいろ／＼に變化して、明和三年七月中村座所演の「八百屋お七戀江戸染」となつた。これは二世津打治兵衞作、寶暦十三年二月市村座所演の「封文榮曾我」が先づ土臺となつてゐる。その爲、以後のお七劇は、いつも故人津打治兵衞作と銘が打たれてある。

「其往昔戀江戸染」は文化六年三月森田座所演で、前記「八百屋お七戀江戸染」を更に福森久助が增補したもので、以後は必らずこの脚本に據る事に定まつた。常磐津の灘祭なぞではこの時初めて加へられたのであるから、この狂言が今殘つてゐるお七劇の初演と云つても差支へはあるまい。

茲に收錄したのは文化六年の時の脚本である。五世半四郎が大當りを得て以來、岩井家の藝と稱へられた。現今では櫓の場は後に增補された「松竹梅雪曙」に據つてゐるが、吉祥寺の場はこの脚本に據つてゐる。さうして、紅長の滑稽が、吉祥寺の場の中心になつてゐる。

三幕目、決斷所の場は、本筋に緊切な關係の無いため、後には略され、櫓の場で直ぐにお七の罪が定まるやうに改められた。

文化六年の折の役割は左の通りであつた。

仁田四郎忠常(荻野伊三郎)赤澤十作(尾上紋三郎)釜屋武兵衞(嵐新平)吉祥寺上人(小川吉太郎)紅屋長兵衞。荒井源藏(ニヤク澤村四郎五郎)海老名軍藏(嵐冠十郎)長沼六郎(坂東善次)母おたけ(市川門十郎)荒井藤太(花井才三郎)友達娘おしか(岩井龜松)下女お杉(市川團之助)小姓吉三郎。五尺染五郎(ニヤク尾上榮三郎)八百屋娘お七(五世岩井半四郎)赤澤十內。土左衞門傳吉白酒賣り喜之助(三ヤク三世坂東三津五郎)

鐘鳴今朝噂(かねがなるけさのうはさ)――いろは新助

この狂言はなか／＼古いもので、寶曆十年正月、大坂中の芝居で、何か際物當込みの一夜作りに、嵐雛助のいろは藤川八藏の新助で演じたのが初めらしい。名題は矢張り「鐘鳴今朝噂」とあるが、今とは筋も多少違つてゐた形跡がある。それを奈河七五三助が、寛政五年二月、大坂角の芝居で、「東西々々今朝噂」と改題補訂したのが、先づ今日のいろは新助の原本であらう。七五三助は後に江戸へ下つた時、享和元年正月の市村座「通花街馴初曾我」(かよひくるわなれそめそが)の二番目に「戀いろは菊書始」(てくだのかきぞめ)として、この狂言を江戸の世界に直して出した。その時の役割は

藝者いろは(四世瀨川菊之丞)高岡郡助(嵐冠十郎)橘屋新右衞門(山科四郎十郎)升屋武右衞門(藤川武左衞門)岩井屋おふじ(岩井喜代太郎)伊藤源十郎(荻野伊三郞)鮫鞘新助(市川八百藏)初花傳七(三世澤村宗十郎)

この系統は江戸に傳はつて、お花半七にも改作され、明治まで傳はつてゐたが、一方大坂では、文化二年三月、大坂北堀江市の側芝居で、又々手を入れ上演されたのが、今日に傳はる脚本なのである。この時の役割は左の通りであつた。

刀屋新助(中山他之助)高松半次郎(中山巳之吉)新助女房おりく(藤川勝次郎)百姓六兵衞(片岡仁三郎)婆おくま(坂田龜藏)初花傳七(中村市藏)松坂屋善七(片岡柳藏)仲居おとく(吾妻吉松)三上丈助(谷村楯九郎)桝屋武右衞門(大谷友治)刀屋喜右衞門(谷村文五郎)千力勝五郎(芳澤八藏)井筒屋おさと(松島喜代松)井筒屋

いろは（澤村田之助）

これは小芝居であるが、大芝居で立役者の演じたのは、文政二年七月、大坂角の芝居が中興といふべしである。この時の役割は

刀屋新助（市川團藏）娘おさき（市川門之助）傳七（市川鰕十郎）おくま（淺尾國五郎）おりく。おさと（荻野錦子）半次郎（大谷紫友）喜右衞門（富士松山十郎）武右衞門（市川市鶴）丈助（桐の谷權十郎）千力（中村歌七）いろは（嵐富三郎）六兵衞（嵐冠十郎）

この狂言の大詰には、いつもいろは新助の道行が附いてゐる。そして、その道行の名題が上演毎に變つてゐる。文政二年の折のが「糸に寄廓の戀柄」弘化三年九月中の芝居の折のが「道行浮名の春雨」嘉永六年九月大阪竹田芝居のが「浮名立野邊戀種」と云つた風にである。曲は大抵長唄だつたらしい。本卷には殘念ながらこれらの道行のある脚本を探し當てる事が出來ず、安政頃とも思はれる、現今も上演される臺本に近い物を得て收錄した。

渡雁戀玉章（わたるかりこひのたまづさ）――かりのたより

天保元年正月、大坂角の芝居で上演された「けいせい雪月花」といふ、石川五右衞門の狂言の一部で、金澤龍玉こと三世中村歌右衞門の作である。主題になつてゐる文の間違ひは、この狂言が最初ではなく、文化四年正月、大坂角の芝居で上演した「けいせい高砂松」の中に、若松宿直之助といふ侍ひが有馬の湯治場で、文の間違ひから打擲にあふ筋がある。この時、合作をしてゐた奈河篤助が江戸へ下つて來て、同じ筋を「東都名物錦繪始」へ作り込んだ　この脚本は本卷へ收めてあるから、お讀み合せになれば解るがつまり在來の筋を只、石川五右衞門の世界へ組み合せたものに過ぎぬ。併し、一幕物として離しても出せる爲か、原作よりも「雪月花」の方が歡迎されて、その後も盛んに上演され、今に延若の當り藝として折々は舞臺に現はれる。その初演の役割は左の通りであつた。

高木次郎太夫（嵐璃寛）前野左嶋（淺尾奧山）下女お玉（澤村長四郎）けいせい司（中村松江）三二五郎七（三世中村歌右衞門）

この時、七代目市川團十郎は、市川白猿の名を以て、松本幸四郎と共に同座してゐた。この三二五郎七のかりのたよりを見て興味を覺え、江戸へ歸ると直ぐに、同じ天保元年の八月、河原崎座で「市川哉眞砂御摂」と名けて、大體歌右衞門の演じた五右衞門の筋を其まゝ上演し、かりのたよりも三筋の綱五郎といふ役名で一緒に上演した。この時の役割は下の通りであつた。

高木次郎太夫（五世松本幸四郎）佐々木司馬左（市川壽

美藏）湯女およし（嵐龜之丞）けいせい花咲（岩井紫若）
三筋の綱五郎（七世市川團十郎）

その後、八世團十郎も、綱五郎實は佐藤與茂七として、義士傳へ組み入れて演じた事があつたが、安政四年正月、市村座で「鼠小紋東君新形」即ち默阿彌の鼠小僧が書き卸しの時、二番目に役名を浮世伊之助と改めて三度目に上演した。即ち司又は花咲を若草と改め、これを鼠小僧の情婦松山の妹とし、伊之助を實は松田主水といふ、鼠小僧が忍び入つた爲に浪人する侍ひの子として、無理に一番目へ連絡させたのである。割合に面白く江戸向きに直してあるので、本卷にはわざとこの時の脚本を收錄した。役割は左の通りであつた。

高木四郎太夫（坂東龜藏）三浦兵部之助（淺尾與六）腰元玉章（坂東鴻藏）村井傳八（尾上菊四郎）平岡權之丞（坂東村右衞門）駒田久馬（坂東薪三郎）愛妾若草（四世尾上菊五郎）浮世伊之助（坂東彦三郎）

「雁便戀玉章」といふのは、今の延若が初めて東京座で上演して時の名題で、又カタリは、初演の「けいせい雪月花」に附屬してゐたものを採つたものである。

邯鄲枕物語——艪淸の夢

慶應元年閏五月、中村座で「忠臣藏後日達前」の二番目に上演したもので、作者は三世櫻田治助、種は京傳の黄表紙だといふ。本卷へ收錄したのは、二度目に中村宗十郎の演じた「四季眺榮華手枕」の方の脚本である。

初演の役割を爰に記す。

吉田屋梅ヶ枝（河原崎權十郎）家主六右衞門、支配人作左衞門（二ヤク坂東龜藏）鶴池善右衞門（中村鴈八）安藝の內侍（河原崎國太郎）仕丁和惣次（市川左團次）槇島伴藏（市川米五郎）鳥追ひお七（尾上榮三郎）蕎麥屋いんとく與四郎（市川新之助）金拾番福六（市川米十郎）盜人唯九郎（中山現十郎）女房おてふ（岩井紫若）艪屋淸吉（市川小團次）

東都名物錦繪始——鳥目の一角

文化八年正月、中村座に上演されたもので、前記の通り奈河篤助が「けいせい高砂松」を改訂したのである。只原作では馬鹿侍ひであるべき役を、歌右衞門に當嵌めて主人公にしたところが變つてゐるが、この一角が非常な好評を博し、七世團十郎三世菊五郎ともに得意役として度々勤め現今まで舞臺に存してゐる。

荻生惣右衞門。龜井彌惣兵衞（二ヤク坂東彦三郎）菱川息女千種（瀨川龜三郎）富田邊竹（市川の助）城木屋庄兵衞（市川七藏）金毘羅參りの傳（澤村次之助）松田軍兵衞

（坂東鶴十郎）萩原千次郎。飯島城之助（ニャク尾上紋二郎）手代丈八（市川鶯藏）六浦良助（中村七三郎）高木伴藏（坂東大五郎）佐藤銀平（尾上斧藏）才三母おろく（尾上松緑）城木屋娘お駒（澤村田之助）娘おもん（瀬川多門）彈喜藏。中間關内（ニャク中村東藏）粂本女房おいと（市川おの江）髪結ひ才三郎（尾上松助）金江金五郎。西方寺の名月院（ニャク澤村源之助）仲町の藝者小さん。綾瀬村のおりく（ニャク瀬川路考）秋月一角。神田の與吉（ニャク三世中村歌右衛門）

京坂でも折々上演されたが、なんの都合か、いつでも小さん金五郎を、おふさ綱五郎に改められてゐる。これは、弘化二年三月、大坂中の芝居で初演された時の改作の例が其まゝ傳はつてゐるのであらう。

解說、カタリ、役割、年表等に對しては、例の如く山形の秋葉芳美氏から多大の援助を戴いた。記して謝意を表する。

編纂校訂責任
渥美清太郎
鈴木侃

日本戲曲全集・第廿一卷
滑稽狂言篇・第九回配本

編纂者檢印

昭和四年二月廿二日印刷
昭和四年二月廿五日發行
（非賣品）

編纂者　渥美清太郎
發行者　和田利彦
印刷者　高見靖雄
製本者　高崎鐵五郎

東京市日本橋區通三丁目八番地
發行所　春陽堂
電話日本橋　五一・六四一
　　　　　　三七・八一
振替東京　一六一七八

製版所　新倉東文堂

（神田區・松下町・七番地・明治印刷株式會社印刷）